福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集

入部（いるべ） Ⅵ

―東入部遺跡群第３次・第10次調査報告―

１９９６

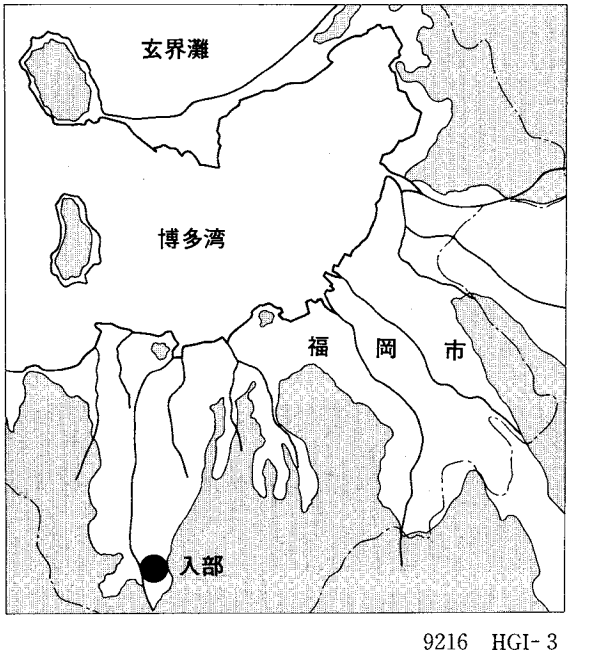
福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化調査報告書第 485 集

IRU BE

入　部　Ⅵ

―東入部遺跡群第 3 次・第10次調査報告―



9216　HGI- 3
9427　HGI-10

1 9 9 6

福岡市教育委員会

早良平野と東入部遺跡群全景(南から)

1　東入部遺跡群第10次調査出土の唐三彩(173)

2　東入部遺跡群第10次調査出土の施釉陶磁器

164	166	168	167	133	
076	074	028	165	171	172
047	116				
154	155	046	114	169	
		121		170	

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は昭和62年度から実施されてきた早良区入部地区の県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、平成４、６年度の東入部遺跡群第３、10次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成８年３月29日

福岡市教育委員会
教育長　尾　花　　剛

例　　言

1　本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、東入部遺跡群第３次調査（1992年度）、東入部遺跡群第10次調査（1994年度）の成果を報告するものである。

1　東入部での県営圃場整備に伴う発掘調査の報告としては以下の５冊が刊行されている。本書はこれを引き継ぎ、６冊目にあたることから書名を『入部Ⅵ』とした。この入部という地名は遺跡名を示すものではない。

『入部Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集　1990
『入部Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集　1991
『入部Ⅲ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集　1992
『入部Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集　1993
『入部Ⅴ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集　1995

1　東入部遺跡群第３次調査は現場実測は濱石哲也、長家伸、屋山洋、英豪之、黒田和生が行い、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石、長家、屋山が撮影した。第10次調査は現場実測、写真とも池崎譲二、屋山、英が行った。なお空中・航空写真は両次とも有限会社空中写真企画（檀睦夫）による。

1　第３次調査出土遺物の実測は林田憲三が主にあたり、他に濱石、菅波正人、野村智栄が行った。遺物写真は林田が撮影した。第10次調査は遺物の実測、写真撮影とも池崎が行った。

1　本書に関わる製図には濱石、池崎、小林義彦、林田、野村があたった。

1　本書の作成には他に緒方まきよ、亀井律子、樋口久子、谷吉美、堀タケ子、稲富良子が関わった。

1　本書に用いた方位は磁北である。

1　本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

1　本書の作成作業の一部は国庫補助を受けて行った。また作成事業は埋蔵文化財課（課長　荒巻輝勝、第１係長　横山邦継、第２係長　山口譲治、庶務担当　内野保基）が担当した。

1　執筆は、Ⅲ-３-１、20を長家、Ⅲ-３-11、12、13、18、21を屋山、Ⅳを池崎、その他を濱石が担当した。

1　本書の編集は濱石、池崎が行った。

本文目次

本文頁

Ⅰ　はじめに……11
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境……12
Ⅲ　東入部遺跡群第３次調査報告……15
1　調査組織……15
2　調査経過……15
3　調査の記録……17
3－1　16区の調査……17
3－2　17区の調査……19
3－3　18区の調査……26
3－4　19区の調査……42
3－5　21区の調査……46
3－6　22区の調査……46
3－7　23区の調査……50
3－8　24・25・26区の調査……51
3－9　27区の調査……55
3－10　28・29区の調査……62
3－11　30区の調査……64
3－12　31区の調査……64
3－13　32区の調査……68
3－14　33区の調査……68
3－15　34区の調査……71
3－16　35・36区の調査……72
3－17　38区の調査……92
3－18　39区の調査……97
3－19　40区の調査……101
3－20　41区の調査……101
3－21　42区の調査……115
4　東入部遺跡群第３次調査のまとめ……120
Ⅳ　東入部遺跡群第10次調査報告……121
1　調査組織……121
2　調査概要……121
3　縄文時代の遺物……123
3－1　縄文土器……123
3－2　石器……126
4　古代・中世の遺構と遺物……127
4－1　竪穴住居……127
4－2　掘立柱建物・柵……131
4－3　土坑・集石遺構・焼土坑……150
4－4　製鉄関連遺構（鍛冶炉・廃滓坑等）……157
4－5　昇降用道路遺構……169
4－6　旧河川・溝……173
4－7　ピット出土遺物……181
4－8　包含層等の出土遺物……183
5　近世遺構と遺物……186
6　東入部遺跡群第10次調査のまとめ……188

図版目次

巻頭図版１　早良平野と東入部遺跡群全景(南から)
巻頭図版２　１　東入部遺跡群第10次調査出土の唐三彩
　　２　東入部遺跡群第10次調査出土の施釉陶磁器
図版１　１　27区全景(上空から)　２　35･36区全景(南上空から)
図版２　１　38区全景(南上空から)　２　42区全景(北上空から)
図版３　１　41区全景(北から)　２　41区掘立柱建物･竪穴住居群(上空から)
図版４　１　16区全景(西から)　２　16区0001土壙墓　３　17区全景(東から)
　　４　17区0380掘立柱建物　５　18区Ⅰ区全景(西から)　６　18区Ⅱ区全景(南から)
図版５　１　18区0010･0011掘立柱建物　２　18区0028掘立柱建物　３　0155･0171竪穴住居
　　４　18区0191竪穴住居　５　18区0027土坑　６　18区0017木棺墓
図版６　１　19区全景(東から)　２　19区全景(西から)　３　19区0152甕棺墓
　　４　22区全景(南から)　５　23区全景(東から)　６　23区0450掘立柱建物
図版７　１　23区0449土壙墓　２　24区全景(北から)　３　24区全景(南から)
　　４　25区全景(西南から)　５　26区全景(南から)　６　24区0391竪穴住居
図版８　１　24区0405竪穴住居　２　26区0434･0435鍛冶炉周辺　３　27区0479掘立柱建物
　　４　27区0476･0477掘立柱建物　５　27区0839炉　６　28･29区全景(南から)
図版９　１　30区全景(東から)　２　31区全景(南から)　３　33区全景(南から)
　　４　31区0789掘立柱建物　５　33区0703竪穴住居　６　34区全景(北から)
図版10　１　35区0802･0810竪穴住居　２　35区0803竪穴住居　３　35区0804竪穴住居
　　４　35区0805竪穴住居　５　35区0806竪穴住居　６　35区0807竪穴住居
図版11　１　35区0808竪穴住居　２　35区0809竪穴住居　３　36区0811竪穴住居
　　４　36区0812竪穴住居　５　36区0813竪穴住居　６　35区0817竪穴住居
図版12　１　36区0818竪穴住居　２　38区0901･0905溝　３　39区全景(南から)
　　４　39区1015掘立柱建物　５　39区0902竪穴住居　６　40区全景(東から)
図版13　１　41区1033掘立柱建物　２　41区1034掘立柱建物　３　41区1035掘立柱建物
　　４　41区1037掘立柱建物　５　41区1038掘立柱建物　６　41区1040掘立柱建物
図版14　１　41区1022竪穴住居　２　41区1024･1041竪穴住居　３　41区1025竪穴住居
　　４　41区1027竪穴住居　５　41区1028竪穴住居　６　1030竪穴住居
図版15　１　41区1042竪穴住居　２　41区1043竪穴住居　３　41区1021土壙墓
　　４　41区縄文時代包含層　５　42区古河川　６　42区1510土坑
図版16　第３次調査出土遺物１
図版17　第３次調査出土遺物２
図版18　第３次調査出土遺物３
図版19　第３次調査出土遺物４
図版20　第３次調査出土遺物５
図版21　１　第10次調査区調査前風景全景(南東から)
　　２　第10次調査区調査前風景全景(北西から)
　　３　第10次調査区詳細分布調査風景　トレンチ１(西から)

4　第10次調査区詳細分布調査遺構検出状況　トレンチ4(南から)
5　縄文土器検出状況(東から)　6　縄文土器検出状況(東から)
図版22　1　Ⅰ区全景(上空から)　2　Ⅱ・Ⅲ全景(上空から)
図版23　1　Ⅰ区北東部(上空から)　2　Ⅰ区中央部(上空から)　3　Ⅰ区南部(上空から)
4　Ⅱ区北東部(上空から)　5　Ⅱ区中央部(上空から)　6　Ⅱ区南部(上空から)
図版24　1　Ⅲ区全景(北から)　2　Ⅲ区全景(南から)　3　掘立柱建物SB01、02(西から)
4　掘立柱建物SB14、29、SA33(上空から)
5　掘立柱建物SB09、31(南東から)　6　掘立柱建物SB04(西から)
図版25　1　Ⅱ区　西側掘立柱建物群(南東から)　2　Ⅱ区　北東側掘立柱建物群(南から)
3　Ⅱ区　東側掘立柱建物群(南西から)　4　掘立柱建物SB32(南から)
5　掘立柱建物SB06柱穴0032(南から)　6　掘立柱建物SB06柱穴0033(東から)
図版26　1　竪穴住居0015(北から)　2　竪穴住居0015完掘後(北から)
3　土坑0024(南から)　4　土坑0026(南から)　5　土器廃棄遺構0029(南から)
図版27　1　集石遺構0039(西から)　2　集石遺構0039完掘後(北から)
3　集石遺構0058(南から)　4　集石遺構0058礫出土状況(西から)
5　集石遺構0010(東から)　6　焼土坑0056(北から)
図版28　1　鍛冶炉0018(西から)　2　鍛冶炉0019(西から)　3　鍛冶炉群0034全景(北から)
4　鍛冶炉0034－3断面(南東から)　5　廃滓坑0034－4断面(南から)
6　鍛冶炉0034－5断面(南から)
図版29　1　鍛冶炉、廃滓坑0034－6断面(南東から)　2　鍛冶炉、廃滓坑0034－6下面掘方(東から)
3　鍛冶炉0034－7断面(南東から)　4　鍛冶炉、廃滓坑0034－8断面(東から)
5　廃滓坑0034－9断面(東から)　6　鍛冶炉0035(東から)
図版30　1　鍛冶炉0035断面(東から)　2　鍛冶炉0037(東から)　3　鍛冶炉0037断面(南から)
4　鍛冶炉群0038全景(北東から)　5　鍛冶炉、廃滓坑0038－1断面(南東から)
6　鍛冶炉0038－2断面(南東から)
図版31　1　鍛冶炉0038－2(東から)　2　鍛冶炉0050(東から)　3　廃滓坑0012(北から)
4　廃滓坑0014(東から)　5　廃滓坑0020(西から)　6　廃滓坑0022(西から)
図版32　1　廃滓坑0036(南から)　2　廃滓坑0041(東から)　3　廃滓坑0042(東から)
4　廃滓坑0042焼土塊出土状況(東から)　5　廃滓坑0046(西から)
6　廃滓坑0047(東から)
図版33　1　旧河川0051、0052　セクションベルト3(南から)
2　旧河川0051　セクションベルト2(南から)　3　旧河川0051　北端土断層面(南から)
4　旧河川0051　馬歯出土状況(東から)
5　旧河川0052　セクションベルト(南東から)　6　溝0053　遺物出土状況(西から)
図版34　1　昇降用道路0059(東から)　2　昇降用道路0060(北東から)
3　昇降用道路0040(西から)　4　旧河川0001(南から)
5　用水路0005、0006分岐点集石(南東から)　6　旧河川0049(南から)
図版35　第10次調査出土遺物1
図版36　第10次調査出土遺物2
図版37　第10次調査出土遺物3
図版38　第10次調査出土遺物4

挿図目次

本文頁

1図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1:50000）……13
2図　入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群（縮尺1:10000）……14
3図　東入部遺跡群および調査地点（縮尺1:3000）……（折込）
4図　16区南壁土層断面実測図（縮尺1:60）……17
5図　16区土壙墓実測図（縮尺1:40）……18
6図　16区出土遺物実測図（縮尺1:3、1:2）……18
7図　17区掘立柱建物・竪穴住居・土坑実測図（縮尺1:100、1:60、1:40）……20
8図　17区出土遺物実測図1（縮尺1:3、1:2）……22
9図　17区出土遺物実測図2（縮尺1:3）……23
10図　17区出土遺物実測図3（縮尺1:3、1:2）……24
11図　18区北壁土層断面実測図（縮尺1:60）……26
12図　18区掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……27
13図　18区竪穴住居跡実測図（縮尺1:60）……29
14図　18区掘立柱建物・竪穴住居出土遺物実測図（縮尺1:3、1:2）……30
15図　18区土抗実測図1（縮尺1:40）……31
16図　18区土坑実測図2（縮尺1:40）……32
17図　18区土坑実測図3（縮尺1:40）……33
18図　18区土坑出土遺物実測図1（縮尺1:3）……34
19図　18区土坑出土遺物実測図2（縮尺1:3）……35
20図　18区土坑出土遺物実測図3（縮尺1:3）……36
21図　18区土壙墓実測図（縮尺1:20）……37
22図　18区溝状遺構・土壙墓出土遺物実測図（縮尺1:4、1:3、1:2）……38
23図　18区縄文時代包含層出土遺物実測図（縮尺1:3）……40
24図　18区その他の出土遺物実測図（縮尺1:3、1:2）……41
25図　19区北壁・東壁土層断面実測図（縮尺1:60）……42
26図　19区土坑実測図（縮尺1:40）……43
27図　19区甕棺墓実測図（縮尺1:20）……44
28図　19区甕棺墓出土遺物（縮尺1:6、1:2）……44
29図　19区出土遺物実測図（縮尺1:3、1:2）……45
30図　22区西壁土層断面実測図（縮尺1:60）……47
31図　22区土坑実測図（縮尺1:40）……48
32図　22区出土遺物実測図（縮尺1:3）……48
33図　23区掘立柱建物・土坑・土壙墓実測図（縮尺1:100、1:40）……49
34図　23区出土遺物実測図（縮尺1:3、1:2）……50
35図　26区東壁土層断面実測図（縮尺1:60）……51
36図　24区竪穴住居実測図（縮尺1:60）……52
37図　24区ピット・製鉄遺構・集石土坑実測図（縮尺1:40、1:20）……53

38図　24区出土遺物実測図（縮尺1:3、1:2）……54
39図　27区掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……55
40図　27区土坑実測図１（縮尺1:40）……57
41図　27区土坑実測図２（縮尺1:40）……58
42図　27区土坑実測図３（縮尺1:40）……59
43図　27区土坑実測図４（縮尺1:40）……60
44図　27区掘立柱建物・土坑出土遺物実測図（縮尺1:3）……61
45図　27区ピット・炉状遺構実測図（縮尺1:20）……62
46図　27区溝・ピット・その他の出土遺物実測図（縮尺1:3）……63
47図　30区出土遺物実測図（縮尺1:3）……64
48図　31区掘立柱建物実測図（縮尺1:100）……65
49図　31区土坑・溝実測図（縮尺1:40）……66
50図　31区出土遺物実測図（縮尺1:3）……67
51図　33区竪穴住居・溝実測図（縮尺1:60、1:40）……69
52図　33区出土遺物実測図（縮尺1:3）……70
53図　35区西壁土層断面実測図（縮尺1:60）……73
54図　35・36区竪穴住居実測図１（縮尺1:60）……74
55図　35・36区竪穴住居実測図２（縮尺1:60）……75
56図　35・36区竪穴住居実測図３（縮尺1:60）……76
57図　35・36区竪穴住居実測図４（縮尺1:60）……77
58図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図１（縮尺1:3、1:2）……79
59図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図２（縮尺1:3）……80
60図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図３（縮尺1:3）……81
61図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図４（縮尺1:2）……82
62図　35・36区竪穴住居実測図５（縮尺1:60）……83
63図　35・36区竪穴住居実測図６（縮尺1:60）……85
64図　35・36区竪穴住居実測図７（縮尺1:60）……86
65図　35・36区竪穴住居実測図８（縮尺1:60）……87
66図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図５（縮尺1:3、1:2）……88
67図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図６（縮尺1:3、1:2）……89
68図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図７（縮尺1:3）……90
69図　38区土坑実測図１（縮尺1:40）……93
70図　38区土坑実測図２（縮尺1:40）……94
71図　38区溝土層断面実測図（縮尺1:40）……95
72図　38区出土遺物実測図１（縮尺1:3、1:2）……96
73図　38区出土遺物実測図２（縮尺1:3）……97
74図　39区掘立柱建物・竪穴住居実測図（縮尺1:100、1:60）……98
75図　39区出土遺物実測図（縮尺1:3）……99
76図　40区出土遺物実測図（縮尺1:3）……100
77図　40区北壁土層断面実測図（縮尺1:60）……（折込）
78図　41区西壁土層断面実測図（縮尺1:60）……102

79図　41区掘立柱建物実測図１（縮尺1:100）……103
80図　41区掘立柱建物実測図２（縮尺1:100）……104
81図　41区掘立柱建物出土遺物実測図（縮尺1:3）……105
82図　41区竪穴住居実測図１（縮尺1:60）……106
83図　41区竪穴住居実測図２（縮尺1:60）……107
84図　41区竪穴住居出土遺物実測図１（縮尺1:3）……109
85図　41区竪穴住居出土遺物実測図２（縮尺1:3、1:2）……110
86図　41区竪穴住居出土遺物実測図３（縮尺1:3、1:2）……111
87図　41区土坑・土壙墓実測図（縮尺1:40）……112
88図　41区土坑・土壙墓・その他の遺構出土遺物実測図（縮尺1:3）……113
89図　41区包含層出土縄文土器・石器実測図（縮尺1:3、1:2）……114
90図　42区製鉄炉・土坑・古河川実測図（縮尺1:60、1:20）……116
91図　42区出土遺物実測図１（縮尺1:3）……117
92図　42区出土遺物実測図２（縮尺1:3）……118
93図　42区出土遺物実測図３（縮尺1:3、1:2）……119
94図　縄文土器出土状況（縮尺1:40）……123
95図　縄文土器実測図（縮尺1:3）……123
96図　縄文時代の石器実測図１（縮尺2:3）……124
97図　縄文時代の石器実測図２（縮尺2:3）……125
98図　古代・中世主要遺構配置図（縮尺1:40）……128
99図　竪穴住居0015実測図（縮尺1:40）……129
100図　竪穴住居0015出土遺物実測図（縮尺1:3、1:2）……130
101図　掘立柱建物ＳＢ01、02、03実測図（縮尺1:80）……132
102図　掘立柱建物ＳＢ04、05、06、07実測図（縮尺1:80）……133
103図　掘立柱建物ＳＢ08、09実測図（縮尺1:80）……135
104図　掘立柱建物ＳＢ10、11実測図（縮尺1:80）……136
105図　掘立柱建物ＳＢ12、13、14、ＳＡ33実測図（縮尺1:80）……138
106図　掘立柱建物ＳＢ15、16実測図（縮尺1:80）……139
107図　掘立柱建物ＳＢ17、18実測図（縮尺1:80）……140
108図　掘立柱建物ＳＢ19、20、21実測図（縮尺1:80）……141
109図　掘立柱建物ＳＢ22、23、24、25実測図（縮尺1:80）……143
110図　掘立柱建物ＳＢ26、27、28実測図（縮尺1:80）……145
111図　掘立柱建物ＳＢ29、30、31、32実測図（縮尺1:80）……146
112図　掘立柱建物ＳＢ01、02、04、18、26、30出土遺物実測図（縮尺1:3）……147
113図　掘立柱建物ＳＢ06の柱穴0032、0033遺物出土状況実測図（縮尺1:20）……147
114図　掘立柱建物ＳＢ06の柱穴0032、0033、Pit113出土遺物実測図（縮尺1:3）……148
115図　土坑0011、0024、0026、0029実測図（縮尺1:20）……150
116図　土坑0011出土遺物実測図（縮尺1:4）……151
117図　土坑0011、0024、0026、0029出土遺物実測図（縮尺1:3）……152
118図　集石遺構0010、0039、0058実測図（縮尺1:40）……154
119図　集石遺構0010、0039、0058出土遺物実測図（縮尺1:3）……155

120図　焼土坑0056実測図（縮尺1:20）……156
121図　廃滓坑0008、0009、0012、0014、0020、0021、0022、0027実測図（縮尺1:20、1:40）……158
122図　廃滓坑0036、0041、0042、0043、0044、0045、0046、0047、0048実測図（縮尺1:20、1:40）159
123図　廃滓坑0012、0036、0041、0042出土遺物実測図（縮尺1:3）……161
124図　鍛冶炉0018、0035、0037、0050、0066実測図（縮尺1:20）……163
125図　鍛冶炉群0034遺構配置図（縮尺1:40）……163
126図　鍛冶炉0034－１、２、３、４、５、６、７、８、９実測図（縮尺1:20）……164
127図　鍛冶炉群0038遺構配置図（縮尺1:40）……166
128図　鍛冶炉0038－１、２実測図（縮尺1:20）……167
129図　鍛冶炉0034－６Ｂ、0035、0038－１Ｂ、0038－２Ｂ出土遺物実測図（縮尺1:3）……168
130図　昇降用道路遺構0003、0040、0059実測図（縮尺1:40）……170
131図　昇降用道路遺構0060、0065実測図（縮尺1:40）……171
132図　昇降用道路遺構0003、0059、0060出土遺物実測図（縮尺1:3）……172
133図　旧河川0001、用水路0005、0006分岐点出土遺物実測図（縮尺1:3）……173
134図　旧河川0001、0051、0052土層断面図（縮尺1:60）……175
135図　旧河川0051出土遺物実測図（１）（縮尺1:3）……176
136図　旧河川0051出土遺物実測図（２）（縮尺1:3）……177
137図　用水路0053、0053′、0055出土遺物実測図（縮尺1:3）……178
138図　ピット出土遺物実測図（縮尺1:3）……182
139図　包含層等出土遺物（１）（縮尺1:3）……184
140図　包含層等出土遺物（２）（縮尺1:3、1:2）……185
141図　旧河川0049土層断面図（縮尺1:60）……187
142図　旧河川0049出土遺物実測図（縮尺1:3）……187

表目次

１表　入部地区圃場整備事業地内発掘調査年度別一覧……11
２表　東入部遺跡群調査一覧……12
３表　第３次調査調査区一覧……16
４表　第10次調査遺構一覧……189
５表　第10次調査掘立柱建物、柵一覧……190

付　図

付図１　東入部遺跡群第３次調査 16～33区全体図（縮尺１：200）
付図２　東入部遺跡群第３次調査 34～42区全体図（縮尺１：200）
付図３　東入部遺跡群第10次調査全体図（縮尺１：200）

Ⅰ　はじめに

福岡市の西南部に広がる早良平野は、江戸時代、貝原益軒（1630～1714年）によって「北に海ありて、三方に高山あり。広平の地に、村里多く、水田多し。中に早良川（室見川）流るゝ故に、山林河海そなはりて、薪材ともしからず。魚、塩多し。河水多けれ共、滞なくして、水旱の患稀也」（『筑前国続風土記』1703年）と記された旧早良郡に属する。ただこの状況はここ20年間の都市化の波に押され、その姿を急激に変えつつある。さらに益軒の文は「されとも平田は肥饒ならすして、種植豊ならす」と続く。住み良い環境の割には、田畑の収穫は豊富でなかったことが知られる。

これが記されてから約300年後の1985年（昭和60年）、福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示された。それは約100ヘクタールの耕地を対象に、1987年度から８ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な事業計画であった。

埋蔵文化財課で事業計画地内を確認したところ、重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の８遺跡群と拝塚古墳があることが明らかになった。その時点で発掘調査を行っていたのは、四箇東、清末遺跡群のほんの一部にしかすぎなかったため、埋蔵文化財課は1986年３月に事業地内を試掘調査し、その性格・範囲などの把握を試みた。試掘調査の結果、弥生時代と中世を主体としたかなり密度の濃い遺跡群が、事業地のほぼ全域に広がっていることが改めて確認された。

課では埋蔵文化財の保存と事業の円滑化をめざして事業者と協議をもち、当該年度の対象地を詳細に試掘し、この結果に基き遺跡範囲内の新設の構造物（水路・道路）、削りが遺構面に達する田面と表土直下が即遺構面となる田面については基本的に本調査を行うこととした。ただし田面に関しては盛土などで設計変更をはかり、調査対象面積を最小にする方針をとった。細かい協議事項については『入部Ⅱ』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集、1991年）に記載されている。実際の発掘調査は1988年１月に開始し、以後今年度まで９ヶ年にわたって調査を継続してしてきた（１表）。

本書では、1992年度調査した東入部遺跡群第３次調査および1994年度に調査した東入部遺跡群第10次調査についての本報告を行う。残された調査についても、次年度以降順次報告に努めたい。

これまで圃場整備地内の発掘調査を無事継続できたのは、いつも調査に従事していただいている多くの作業員の方々のご協力と、県農林事務所、市農業土木課、鍋山弥三理事長をはじめとする改良区の方々のご指導のたまものである。心から感謝したい。

次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡群
1	1987（昭和62）	5.0ha	12,500㎡	1988. 1. 6～1988. 3.31	重留
2	1988（〃 63）	15.2ha	15.000㎡	1988. 6.21～1989. 4. 7	重留（2次）・拝塚古墳
3	1989（平成元）	15.9ha	16,200㎡	1989. 8. 1～1990. 3.26	重留（3次）・岩本・四箇船石
4	1990（〃 2）	15.2ha	22,294㎡	1990. 7.18～1991. 3. 8	清末（2次）・岩本（2次）・四箇船石（2次）・東入部・四箇古川
5	1991（〃 3）	21.7ha	34,381㎡	1991. 5.13～1992. 3. 5	清末（3次）・東入部（2次）・安通
6	1992（〃 4）	14.0ha	13,832㎡	1992. 5.20～1993. 1.31	東入部（3次）
7	1993（〃 5）	6.0ha	17.000㎡	1993. 5. 1～1994. 2.28	東入部（7次）
8	1994（〃 6）	1.3ha	5,000㎡	1994. 7. 7～1994.11.25	東入部（10次）
9	1995（〃 7）	（暗渠排水）	2,600㎡	1995.10. 4～1996. 2.12	東入部（11次）

1表　入部地区圃場整備事業地内発掘調査年度別一覧

Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の西南に広がる早良平野の南部、油山（標高592m）山麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で行われた（1・2図）。今回報告する東入部遺跡群は、事業地内の遺跡群のなかでは最も南の福岡市早良区大字東入部地内にあり、南北に延びる低位段丘とその周囲の沖積地を占地する。東西約700m、南北約1200mの広大な遺跡群で、西は室見川、東側は小河川を越え荒平山の麓に達する。北側には安通、清末、四箇大町、四箇古川、四箇船石、岩本の各遺跡群が、川や浅い谷を隔てて分布する。南は室見川が平野に流れ出る狭隘地となる。標高は遺跡群の北端で29m、3次調査地点で33～37m、南端にあたる10次調査地点で39mをはかる。遺跡名称は大字名から採られている。

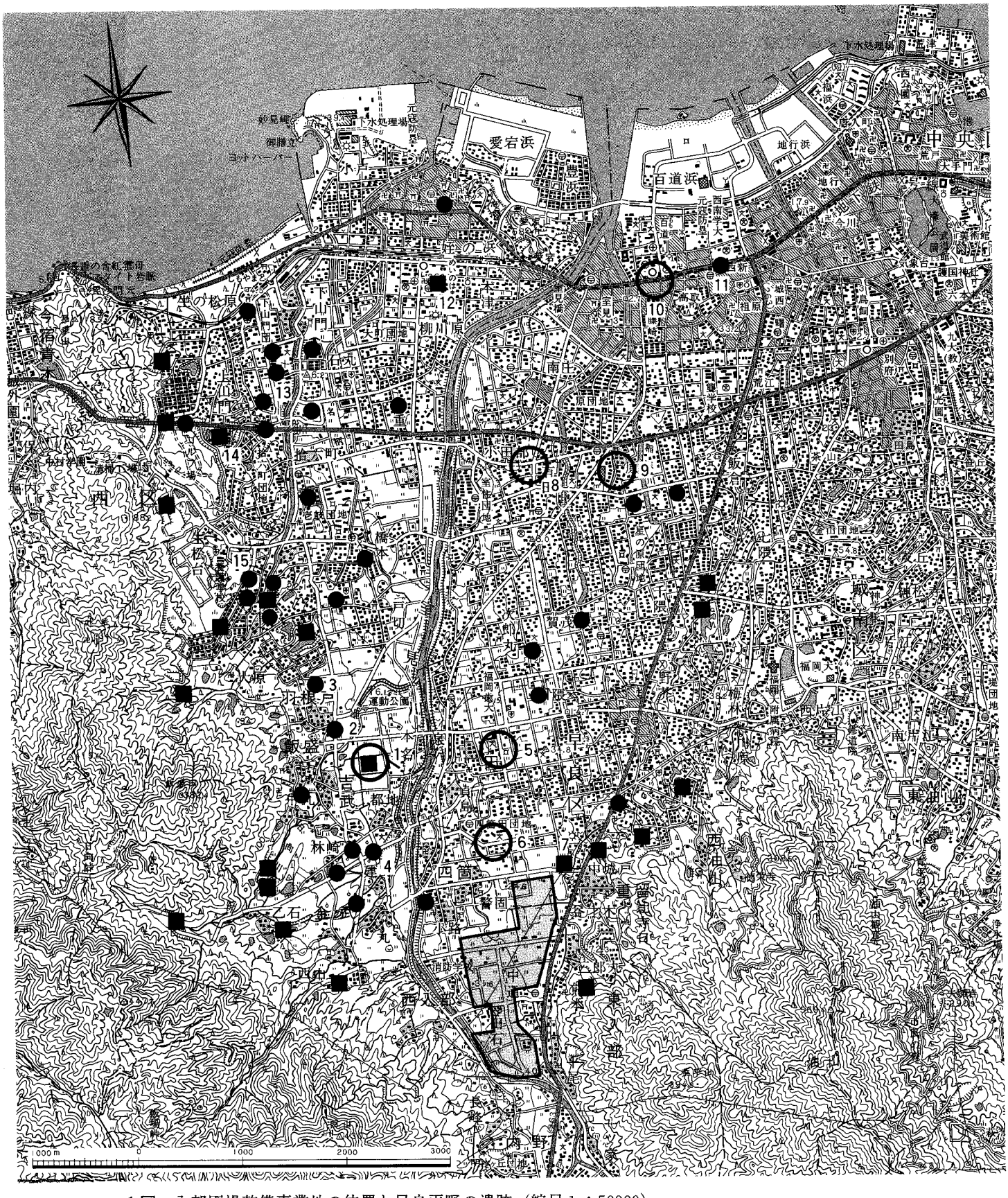
この東入部遺跡群では、今年度までに11次にわたる発掘調査が行われてきた（2表・3図）。その内容は縄文時代の包含層、弥生時代の集落と墳墓、古墳時代の集落と墳墓、奈良・平安時代の官衙的建物群、鎌倉・室町時代の集落と墳墓および生産跡などきわめて豊富なものであった。それはこの遺跡群が、弥生時代以降郡内での一大拠点であると同時に、出土遺物等から見て郡という地域を越えた重要な地位を占めていたことを知らしめた。

東入部遺跡群が所在する旧早良郡、すなわち早良平野およびそれを取り囲む山陵には、旧石器時代から近世にいたる様々な遺跡群が濃密に分布している（1図）。1970年代後半以降の福岡市の著しい都市化はこの一帯にも波及し、激しい土地開発に伴う遺跡の発掘調査も相当の件数に及んでいる。その結果、早良平野のみならず北部九州の歴史を新たに書き替える重要な考古資料が蓄積された。弥生時代では吉武遺跡群の大規模な発掘調査が行なわれ、2千基を越える甕棺墓とその豊富な副葬品から、その社会構成の復元に大きな手がかりを提示した。東入部遺跡群第2次調査の弥生時代墳墓も、この復元の一翼を担っている。同時に土器、青銅器、鉄器等をはじめとした弥生時代遺物の研究にも大きな寄与をなした。古墳時代では藤崎方形周溝墓群、樋渡古墳、拝塚古墳、梅林古墳、クエゾノ古墳などの調査が行われ、前方後円墳の存在も明らかとなった。また群集墳の調査もかなりの数に上がっている。古代では官衙的建物群が有田、石丸、吉武、東入部等の遺跡群で確認され、その具体的な比定が要請されている。中世では平野内での土地開発の様子が集落の立地と絡んで判明しつつある。

次数	調査番号	調査面積	期間	遺跡略号	調査地点	調査原因	報告
1次	9074	5,453㎡	(1990. 7.18～1991. 3. 8)	HGI-1	東入部1943他	圃場整備	
2次	9165	16,271㎡	(1991. 5.13～1992. 3. 5)	HGI-2	東入部1378他	〃	
3次	9216	13,832㎡	1992. 5.20～1993. 1.31	HGI-3	東入部1274他	〃	本報告
4次	9208	1,319㎡	1992. 5. 6～1992. 8.10	HGI-4	東入部329-18他	公民館建設等	381集1994[1]
5次	9226	351㎡	1992. 7.21～1992. 8.20	HGI-5	東入部329-1他	下水道工事等	382集1994[2]
6次	9227	380㎡	1992. 8. 9～1992. 9. 4	HGI-6	東入部390-7他	道路拡幅	338集1994[3]
7次	9312	17,000㎡	1993. 5. 1～1994. 2.28	HGI-7	東入部1172他	圃場整備	
8次	9348	175㎡	1993.11. 9～1993.11.26	HGI-8	東入部329-21他	道路拡幅	421集1995[4]
9次	9418	145㎡	1994. 5.25～1994. 6.28	HGI-9	東入部336-2他	〃	421集1995
10次	9427	5,003㎡	1994. 7. 7～1994.11.25	HGI-10	東入部1098-2他	圃場整備	本報告
11次	9529	2,600㎡	1995.10. 4～1996. 2.	HGI-11	東入部1366	〃	

2表　東入部遺跡群調査一覧

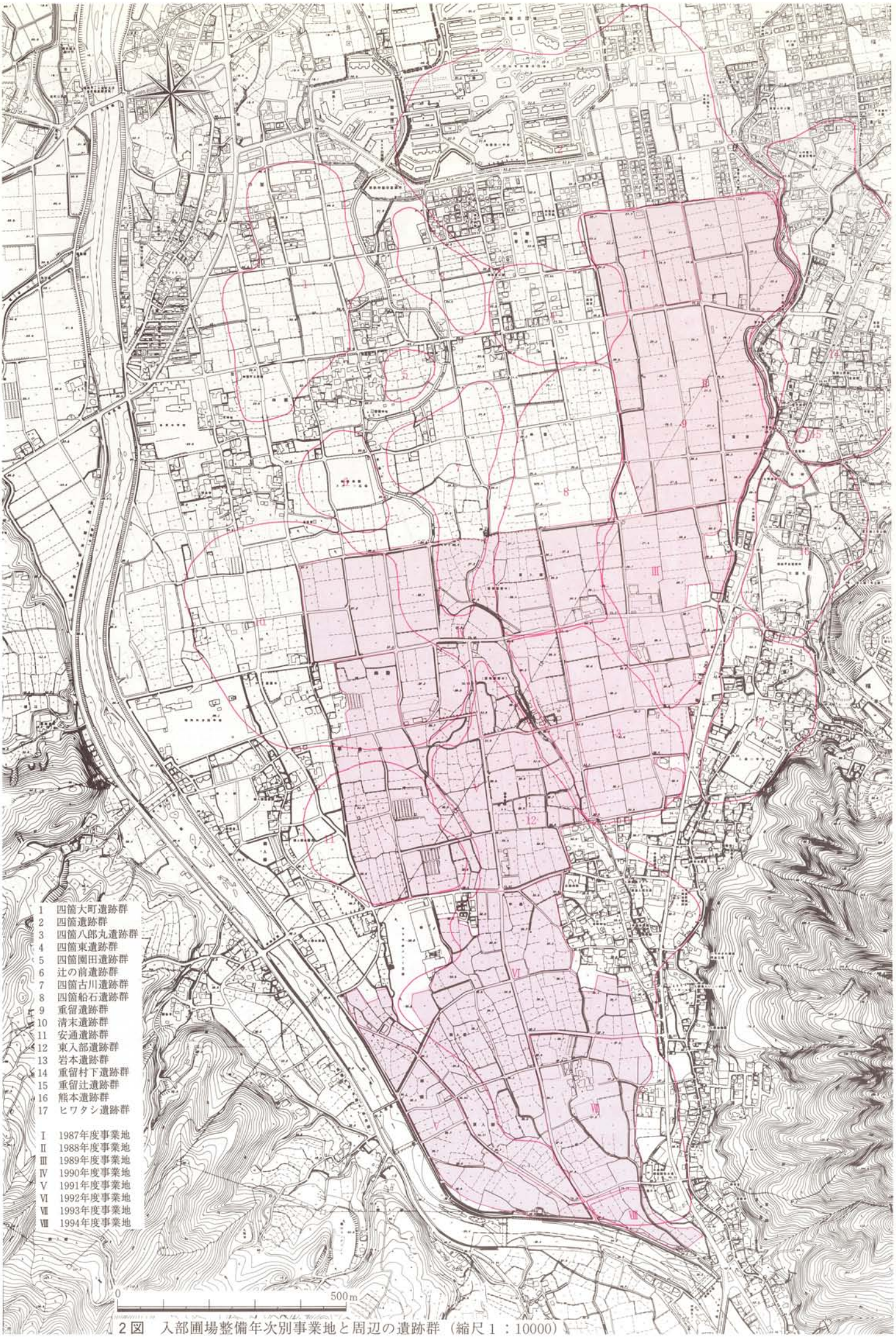
1）『東入部遺跡群1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集 1994
2）『東入部遺跡群2』福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集 1994
3）『東入部遺跡群3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集 1994
4）『東入部遺跡群4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集 1995



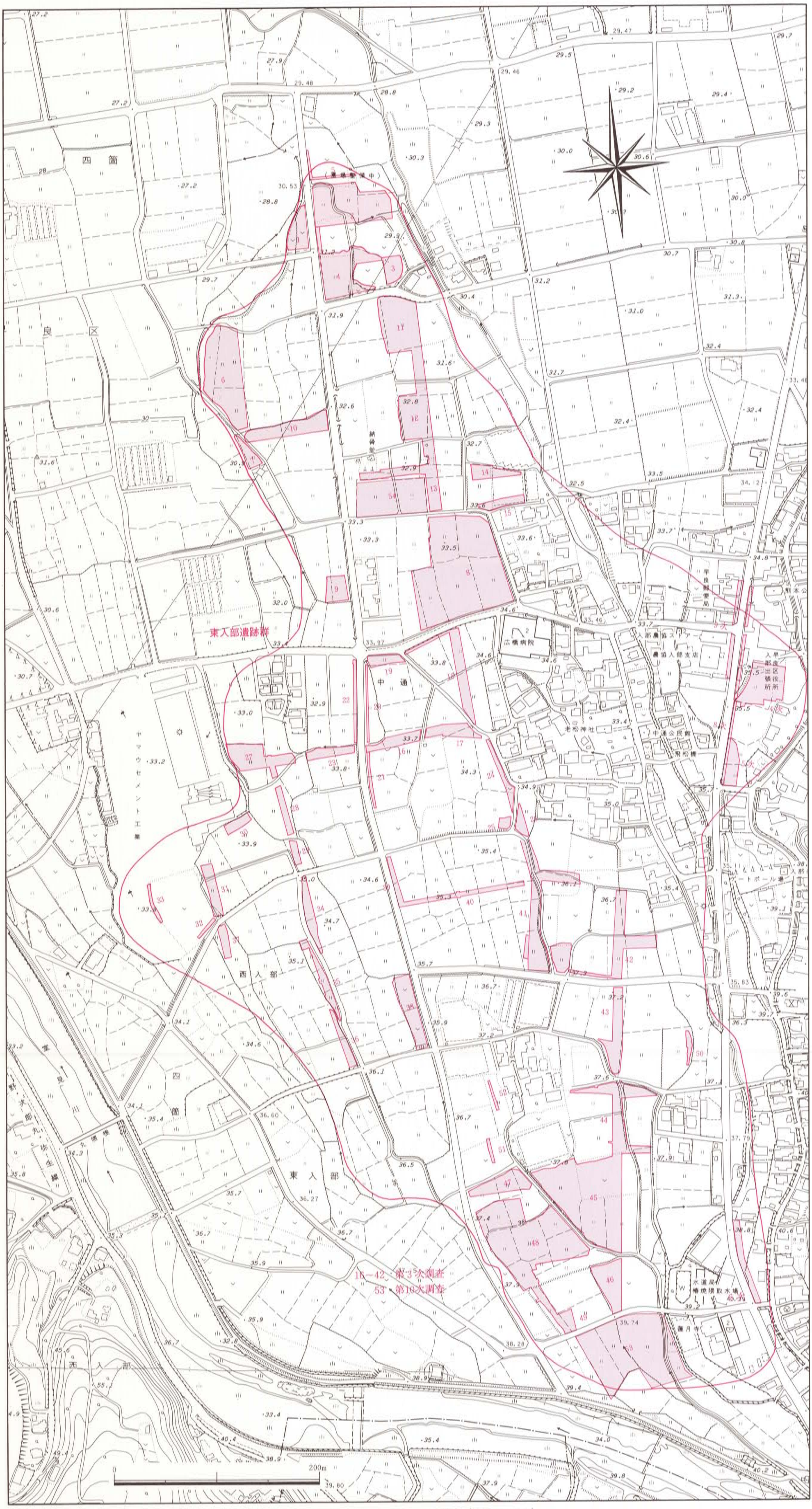
1図　入部圃場整備事業地の位置と早良平野の遺跡（縮尺1：50000）

1	吉武遺跡群	6	四箇遺跡群	11	西新町遺跡
2	大田遺跡	7	拝塚古墳	12	五島山古墳
3	羽根戸遺跡	8	有田遺跡群	13	拾六町ツイジ遺跡
4	都地遺跡	9	原遺跡群	14	宮ノ前遺跡
5	田村遺跡群	10	藤崎遺跡群	15	野方中原遺跡

（○遺跡群
●遺跡
■古墳
アミ部が圃場整備事業地）



2図　入部圃場整備年次別事業地と周辺の遺跡群（縮尺1：10000）



3図　東入部遺跡群および調査地点（縮尺1：3000）

Ⅲ　東入部遺跡群第３次調査報告

１　調査組織

事業主体（入部地区圃場整備）
　福岡県農林事務所農地整備鉱害課
　福岡市農林水産局農業振興部農業土木課
　福岡市入部土地改良区
調査主体
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
　　課長　　折尾学（前任）　荒巻輝勝
　　第１係長　飛高憲雄（前任）　横山邦継
　　第２係長　塩屋勝利（前任）　山口譲治
　　庶務　　中山昭則（前任）　内野保基
　　調査担当　主任文化財主事　濱石哲也
　　文化財主事　長家　伸　榎本義嗣　屋山　洋
　　調査補助　林田憲三　英　豪之　黒田和生
整理にあたっては、菅波正人（文化財主事）、野村智恵（西南大学学生）の協力をえた。

２　調査経過

1992年度の入部地区圃場整備は前年度の南側、大字東入部の140,000㎡を対象に事業が施工されることになっていた。事業地一帯のほとんどが東入部遺跡群に含まれ、とくに北側部分では前年の第３次調査で確認した弥生時代の墓地、集落の南への広がりが予想された。また遺跡群が室見川の流れる西側へどのくらい広がるのかも確認したいことの一つであった。

なお、1992年度は一つの遺跡群での調査であり、次に述べる試掘調査（詳細分布調査）から本調査まで一貫した調査とみなし、東入部遺跡群第３次調査（遺跡調査番号９２１６、遺跡略号ＨＧＩ－３）とした。県営入部地区圃場整備事業に伴う調査としては第６次となる（１表参照）。

試掘調査

対象地内の遺跡の分布範囲、遺構の時代と性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況などを把握し、事前に事業計画との調整を図るため、国庫補助を受けて４月13日から５月29日まで圃場整備地内遺跡詳細分布調査を行った。

調査には重機（バックホー）を用い、地形を考慮して東西方向（一部南北方向）の幅1.5mのトレンチを115本掘削した。総調査面積3,381㎡。各トレンチは作業員を使って清掃し、その後写真撮影、土層の略測を行い、また遺構の分布も記録した。

その結果、室見川に近い対象地南から西南部では遺構の検出はなく、出土遺物もほとんど見られなかった。それ以外の所では粗密の差はあるものの全体に遺構があり、遺物も出土した。とくに対象地北側では予想されたように遺構の密度が濃い状況があった。しかし前年度の弥生時代集落・墓地の南側への広がりはほとんど確認できなかった。また対象地内には北流する古河川、あるいは谷が数筋あり、それに挟まれた低丘陵に主に遺構が分布していた。遺構は縄文時代から江戸時代に及び、古墳時

代の集落、中世の集落・墓地が数地点にわたって広がることが判明した

詳細分布調査により発掘調査を必要とするのは、道路・用水路・排水路の構造物部分が約11,000㎡、田面が13,000㎡のあわせて24,000㎡に及んだ。これは調査体制、期間また工事の進行上からも問題が多かったため、事業者と協議を重ね、田面については設計を見直し、遺構に影響を及ぼさない措置を取り、調整がつかない部分についてのみ調査を行うこととした。最終的には調査面積は13,832㎡に縮小された。

本調査

先に述べたように1992年度の調査は東入部遺跡群の第3次調査である。圃場整備地内の調査では発掘地域が分散するため、同一遺跡群内で便宜的に区名を通して付けている。これまでの東入部遺跡群の場合、第1次調査が1～5区、第2次調査が6～15区としていた。今次の調査でもこれを踏襲し、16～42区の区名を用いた。1・2次調査に比べ区が多いのは、先にふれたように事業者との協議で、田面部分の調査がほとんどなくなり、構造物がその主体となったためである。さらに現在使用されている道路や水路については調査を避けたため、構造物そのものの調査も細切れとなったことによる。このことは発掘調査においても、やや幅広のトレンチ調査といった部分が多く、全体を把握しがたいうらみが残った。現状のまま残される部分が多いことを考えると、これもしかたのないことである。

事業者と田面部分の取扱いを協議する一方、本調査を16区の構造物部分の表土剝ぎから開始した。本調査は事業者と協議のもと、対象地北側部分から順次終了させていった。最後の42区を終了したのは1993年1月31日であった。調査面積は13,832㎡。出土した遺物は縄文時代から近世に及び、その量はコンテナ115箱であった。各区の調査の詳細は次節にゆずり、その調査期間や発掘面積を3表に示しておく。なお、20区は立会調査、37区は全く遺構がみられなかったため次節の報告から除外した。

なお今回の調査報告にあたって、以下のように統一を計った。遺構の番号は4桁の数字で表し、その後に竪穴住居、溝、掘立柱建物、ピットなどの遺構の種類の名称をいれた。この遺構番号は第3次調査で通して使ったもので、0001～1100までである。調査時期の関係で必ずしも区ごとにまとまっていない（一部欠番あり）。遺物は3桁の数字で表した。001～535は土器・土製品、701～717は石器・石製品、901～940は金属製品を示す。また各区の全体図は紙幅の関係から付図1・2にまとめた。

地区	調査部分	調査期間	発掘面積	備考	地区	調査部分	調査期間	発掘面積	備考
16区	道路、用・排水路	5月20日～6月16日	479㎡		30区	道路、用水路	9月16日～10月2日	268㎡	
17区	道路、用・排水路	6月1日～8月12日	531㎡		31区	道路、用水路	9月17日～10月28日	493㎡	
18区	道路、用水路	6月10日～7月30日	665㎡		32区	用水路	10月5日～10月28日	75㎡	
19区	排水路	6月18日～7月23日	288㎡		33区	排水路	10月6日～10月28日		
20区	排水路	—	—	立会	34区	排水路	10月3日～10月22日	561㎡	
21区	排水路	7月9日～	178㎡		35区	排水路	10月7日～11月13日	458㎡	
22区	用水路	7月9日～7月30日	158㎡		36区	排水路		323㎡	
23区	道路、用水路	7月14日～9月16日	360㎡		37区	道路、用水路	10月26日～10月28日	78㎡	遺構なし
24区	道路	7月20日～9月14日	416㎡		38区	田面	11月2日～12月17日	1,036㎡	
25区	道路		93㎡		39区	排水路	10月23日～11月30日	210㎡	
26区	道路		178㎡		40区	排水路	10月31日～11月27日	504㎡	
27区	道路、用・排水路	9月3日～10月14日	1,191㎡		41区	道路、用水路、田面	10月7日～12月24日	1,036㎡	
28区	排水路	9月14日～9月21日	272㎡		42区	道路、用水路、田面	12月1日～1月31日	921㎡	
29区	排水路	9月15日～9月21日	139㎡						

3表　第3次調査調査区一覧

3　調査の記録

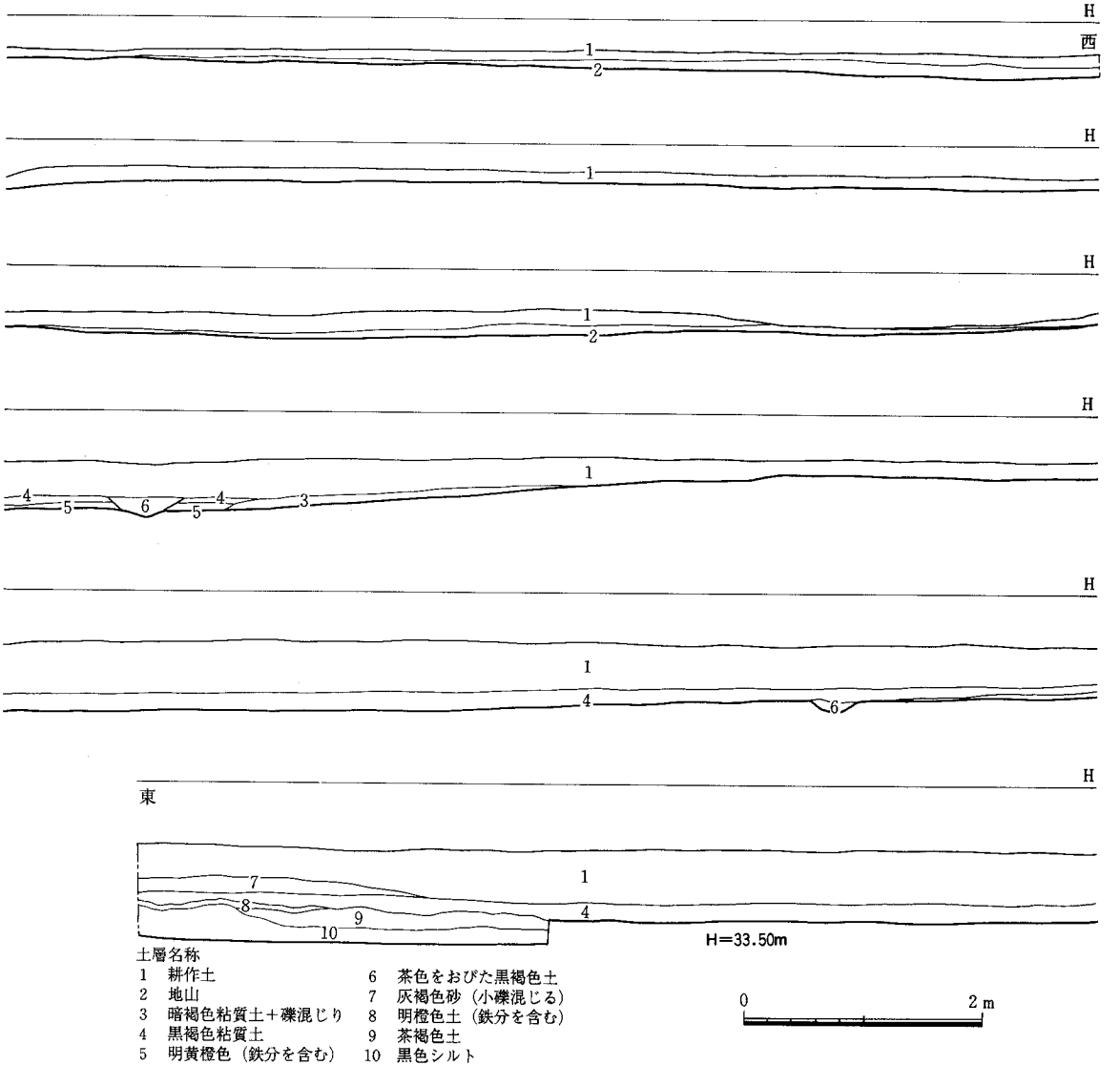
3－1　　16区の調査

3－1－1　概要

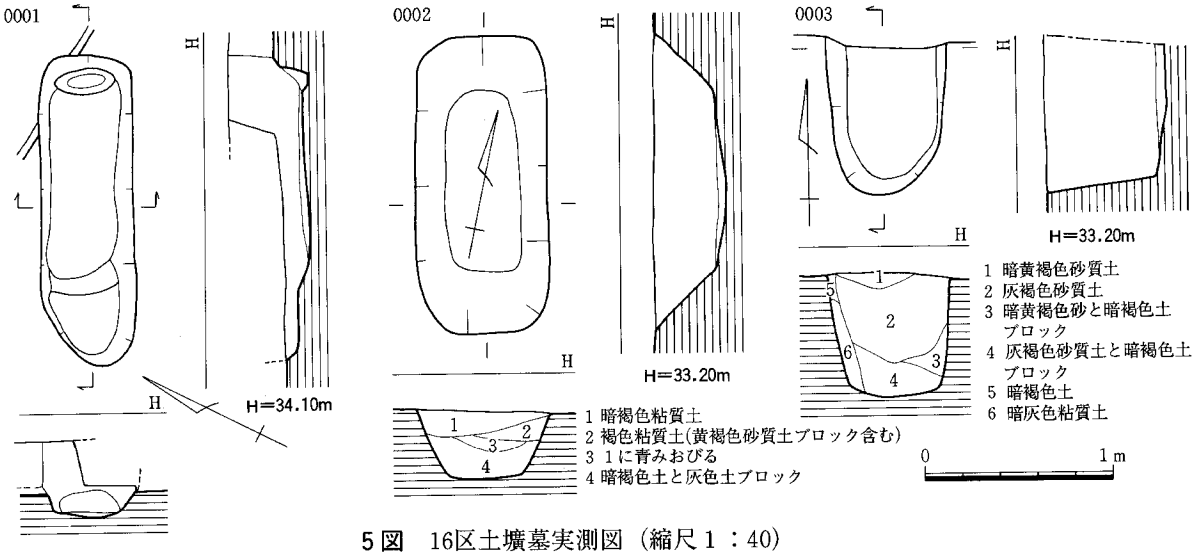
16区は事業地の北端にあたり、東西長56m、幅6～10mの狭長な調査区である。遺構面は耕作土除去直下で検出しているが、水成層で遺構面が非常に不安定となっている。遺構面は東半は灰白色シルト、西側は拳大礫混じりの黄褐色粘質土もしくは緩傾斜上に堆積した黒色土である。遺構面標高は西側33.1m、東側32.5mとなり、調査区中央付近から東側に向かって緩く傾斜する（4図）。

遺構は散漫で特に相対的に低くなっている東側では明確に人為的な掘り込みと考えられるものは少ない。検出遺構は時期不明の溝数条、土坑3基、その他ピットである。土坑はいずれも隅丸長方形をなし、出土遺物等から中世墓の可能性が考えられる。

3－1－2　遺構と遺物



4図　16区南壁土層断面実測図（縮尺1：60）

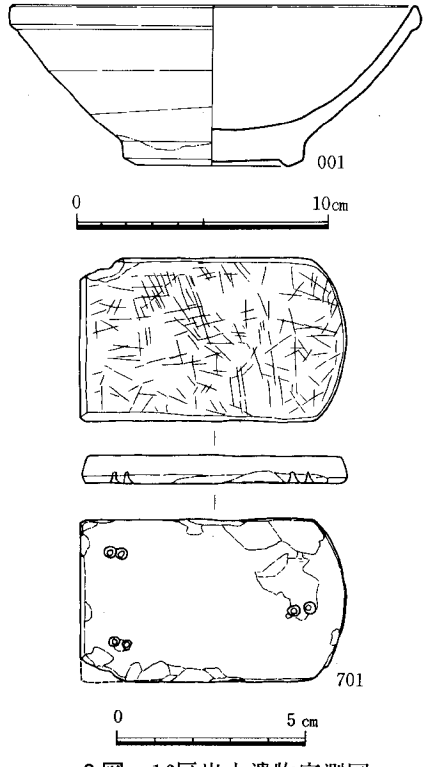


5図　16区土壙墓実測図（縮尺１：40）

土壙墓

0001土壙墓（５図・図版４）　調査区中央付近で検出する。長さ1.7m、幅0.5m、深さ40cmを測る。平面隅丸長方形を呈し、西側小口部分はコーナーが潰れやや歪になる。埋土は暗褐色土ブロックを含む灰褐色砂質土である。底面は西側に１段高まりを有し、東側に長さ１mの平坦面を作る。東側小口部分に25cm×15cmの長円形のゆるやかな窪みを検出し小口板の挿入痕跡と考えられる。出土遺物には土師器甕・坏細片、白磁碗がある。

出土遺物（６図001）　口縁部の1/2を欠く白磁碗Ⅳ類である。口径15.9cm、器高6.4cmを測る。口縁部は玉縁状と内面に僅かに釉が溜まる。内面～外面上半4/5程度まで施釉され、以下外底面までが露胎となる。胎土は黒色粒が僅かに混ざる淡灰白色で、釉は淡灰色で全面に氷裂が見られる。



6図　16区出土遺物実測図
（縮尺１：３、１：２）

0002土壙墓（５図）　調査区中央西寄りで検出する。長さ1.6m、幅0.7m、深さ30cmを測り、平面隅丸長方形を呈する。埋土は灰色まじりを基調とし、レンズ状に堆積する。壁は側壁は明瞭に立ち上がるが、両小口壁は傾斜がつき、比較的緩く立ち上がっている。底面は中央が僅かに窪むが凹凸は見られない。出土遺物に土師器甕・皿・坏、須恵器坏、近世すり鉢、李朝(?) 陶器碗等の破片がある。

0003土壙墓（５図）　調査区西北部で検出する。南側半分を検出するのみで、北側は調査区外に伸びる。幅0.6m、深さ60cmを測り、小口部分は丸みを持つ。埋土は灰褐色砂質土を基調とし、0001土壙墓に類似している。埋土はレンズ状の堆積を見せるが、西側壁に沿い幅10cm弱の立ち上がりが認められ、側板の痕跡の可能性が考えられる。出土遺物は土師器坏の細片のみである。この細片中にはヘラ切りの痕跡を残すものが数点含まれている。

その他の遺物（６図701）

表土から出土した石帯の蛇尾である。長さ7.0cm、幅4.3cm、厚さ0.75cm。裏には２つ一組の小孔を３ヶ所に穿つ。表面は擦痕が著しい。

３－１－３　小結

16区では遺構・遺物の検出量は非常に少なかったものの、中世埋葬遺構の広がりが確認でき、該期生活遺構との関連を考える良好な材料を提供している。

３－２　17区の調査

３－２－１　概要

17区は16区と農道を挟んだ東側にあたり、その東端から18区が北に、また24区が南に農道を挟んで接続する。東西に走る新設道路の建設に伴う調査で、東南にあったビニールハウスを避けたため、西側が幅９ｍ、東側が幅14ｍ、南側で長さ55ｍの調査区の設定となった。発掘調査面積531㎡。遺構検出面は東側がほとんど表土直下の礫混じりの黄褐色土、西側に向かって下がり、西端では表土から約１ｍの深さの黒褐色土となる。標高は東側で33.7ｍ、西側で32.9ｍをはかる。

遺構は調査区の東側に集中し、西側はかなりの数のピットを検出したものの、建物などとしてまとまるものはなかった。主な遺構としては掘立柱建物１棟、竪穴住居２基、土坑５基、溝状遺構８条、集石遺構１基と多数のピットである。掘立柱建物の可能性としては、全体図（付図）に示したように、中央南側に北を細い溝で限られた２間×４間ほどの東西棟になるピット列がある。

３－２－２　遺構と遺物

掘立柱建物

0380掘立柱建物（７図・図版４）　２間×２間の総柱建物である。建物方位はＮ－３°－Ｅ。一辺300cmの規模で、柱間は150cmの等間である。柱穴は径60～100cmの円もしくは楕円形で、深さは30～50cmの二段掘りになるものが多い。この建物の東西には0231、0372の２条の南北溝があり、0372は建物の北約４ｍの所で東におれる。南側は調査区外で全体の規模は確認できないが、この両溝に囲まれた幅約７ｍの長方形区画の中に0380建物が建築された可能性がある。

出土遺物（８図002）　口径18.6cm、高さ3.0cmの土師器皿。底部は回転ヘラ削りで、ヘラ記号がある。0387柱穴から出土。他は0381柱穴から土師器甕細片が出土したにとどまる。

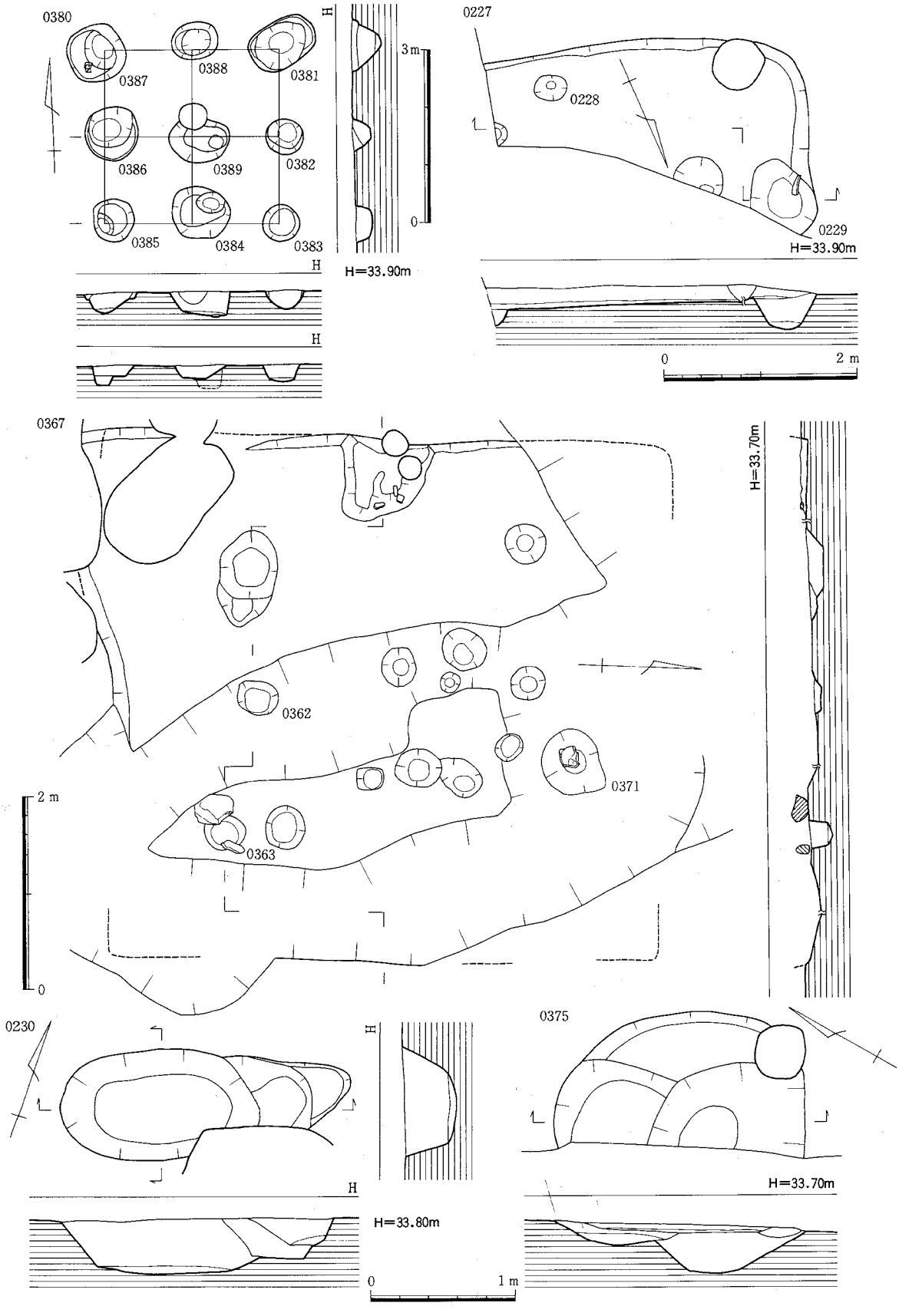
竪穴住居

0227竪穴住居（７図）　調査区東南隅で検出。調査区内では東と南側壁の一部が確認できただけである。壁高は20cm。東側壁に付く径70cm、深さ40cmの0229は竈の可能性もある。床面のピットが柱穴であるかは不明。

出土遺物（８図003～005）　003は縄文土器精製深鉢片。覆土から出土。004・005は0229ピットから出土した土師器甕口縁片。外面から口縁部内面までは刷毛目調整、胴内面は上位を横方向、下部を縦方向のヘラ削りを行う。0228ピットからも同様の甕片が出土している。

0367竪穴住居（７図）　中央やや西寄りに位置するが、0368・0369溝、0370集石土坑等に大きく破壊され、西・南・東側壁のほんの一部と柱穴をとどめるにすぎない。東西5.4ｍ前後、南北6.0ｍ前後の南北に長い平面をもつ。壁高は残りの良いところでも10cmに満たない。西側壁中央に竈の基底部の焼土が残る。４主柱の構造で、柱穴の規模は径40～70cm、深さ30cm前後。柱間は0363－0371間が3.7ｍ、他は2.8～2.9ｍをはかる。

出土遺物（８図006～011・702）　006は土師器杯片。竈からの出土で、全体に火熱を受け表面が剝



第７図　17区掘立柱建物・竪穴住居・土坑実測図（縮尺１：100、１：60、１：40）

離する。007は須恵器杯身。立上がり部は短く内傾し、底部は平坦である。体部の削りは弱い。009・010は器形、調整とも須恵器風であるが、赤く土師器風に焼き上がっている。008は甕。口縁外端部に面をつくり、沈線をめぐらす。体部は腰高の球形となる。体部外面にはカキ目、他は横ナデとナデで仕上げる。体部下半は二次焼成を受け煤が付着するとともに、器表の剝離が見られる。009は甕の体部下半である。体部中位に2本の沈線をめぐらせ、その間に櫛状工具を用いた上下2段の刻目文を施す。外面は横ナデ、内面上位は横ナデ、下位は指押さえの痕が著しい。二次焼成を受けている。ともに胎土に砂粒をまじえ、淡赤褐色を主に呈する。厚手の作りで、重量感がある。残りの3点は後世の混入品である。010は糸切り底の土師器皿、011は白磁碗Ⅳ類の口縁片で、灰褐色の釉がかかる。702は滑石製品片。径約7cmの楕円形状の体部とその上に一辺1.5cmの方柱状の摘みを削りだし、摘みには紐穴を設ける。蓋の類であろうか。

土坑

0230土坑（7図）　0380掘立柱建物の南側に位置し、ほぼ東西に長軸をとる楕円形状の土坑である。長さ2.0m、幅0.76m。東側に段をつくり、一段目が深さ19cm、二段目が25cm、38cmで底面となる。東南側は現代攪乱で破壊されている。

出土遺物（8図012）　黒色土器B類椀片。全体に磨滅している。他に土師器甕、皿などが出土。

0370土坑　中央北側に位置する集石土坑である。径約6m、深さ20～40cm。中には拳大の礫が充満していた。開田の際、耕作土に入った礫をこの土坑に集めたものか。

出土遺物（8図013～019）　図示した遺物はいずれも遺構上面から出土した土師器である。013～017は皿。法量的には013が口径7.9cm、高さ1.1cm、014・015が口径9.0～9.3cm、高さ1.2cm、016・017が口径9.6cm、高さ1.8～2.0cmと三種類に分かれる。いずれも糸切り底で、014には板状圧痕が残る。018・019は口径12.6～12.8cm、高さ3.2～3.5cmの杯片。底部は糸切りである。

0374土坑　南側やや西寄りに位置する楕円形状の土坑だが、大半が調査区外にかかる。東西幅1.35m、深さ16cm。0372溝を切る。

出土遺物（8図020～024）　いずれも土師器皿である。口径8.4～11.0cm、高さ1.1～1.4cm。底部は糸切りで、022には板状圧痕が残る。他に瓦器、黒色土器、青磁などの細片がある。

0375土坑（7図）　調査区東側に位置する円形状の土坑だが、大半が調査区外にかかる。南北幅1.7mで、西側部分は段がつく。最深部まで35cm。

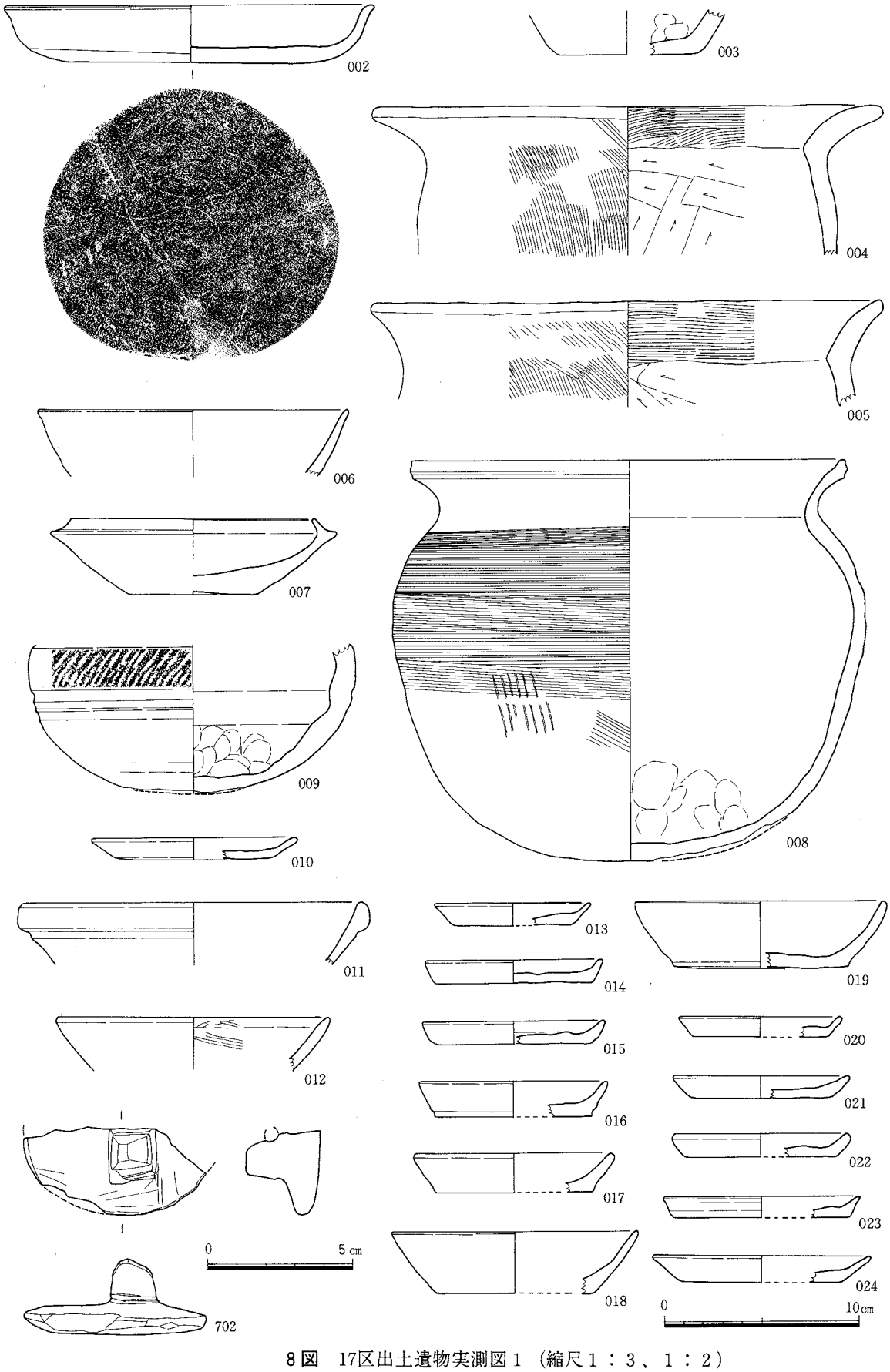
出土遺物（9図025・026）　025は白磁碗Ⅱ類。小さな玉縁で、淡い黄白色の釉がかかる。026は青磁水注の底部片。外面には乳白色の釉をかけ、畳付だけを掻き取る。内面は露胎。他に糸切り底の土師器皿や瓦器等がある。

0379土坑　0375土坑の西側に位置し、L字状の平面を呈する土坑である。幅は1.0～1.5m、深さは10cm程度である。土師器甕・杯・皿、青磁皿などの細片が出土した。

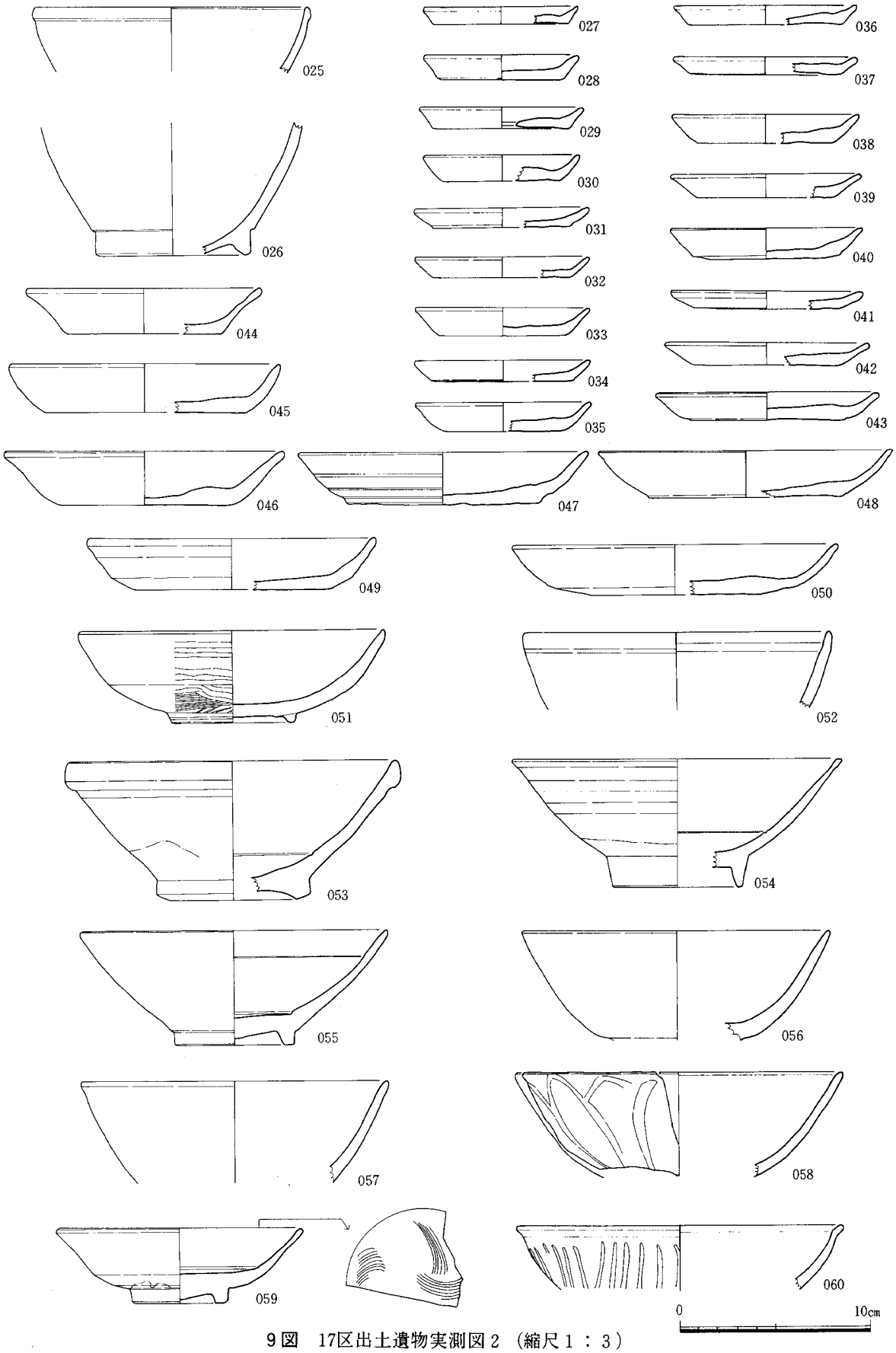
溝状遺構

南北溝5条、東西溝4条を検出した。このうち南北溝の0231と0372が、0380掘立柱建物を区画する溝である可能性は先にふれた。また0368と0369の2条の溝は南側で重複しており、検出時切り合いが分からないまま0200の番号をふり遺物を取り上げた。この遺物は各々の溝の遺物として峻別できないため、0200出土遺物としたまま報告する。

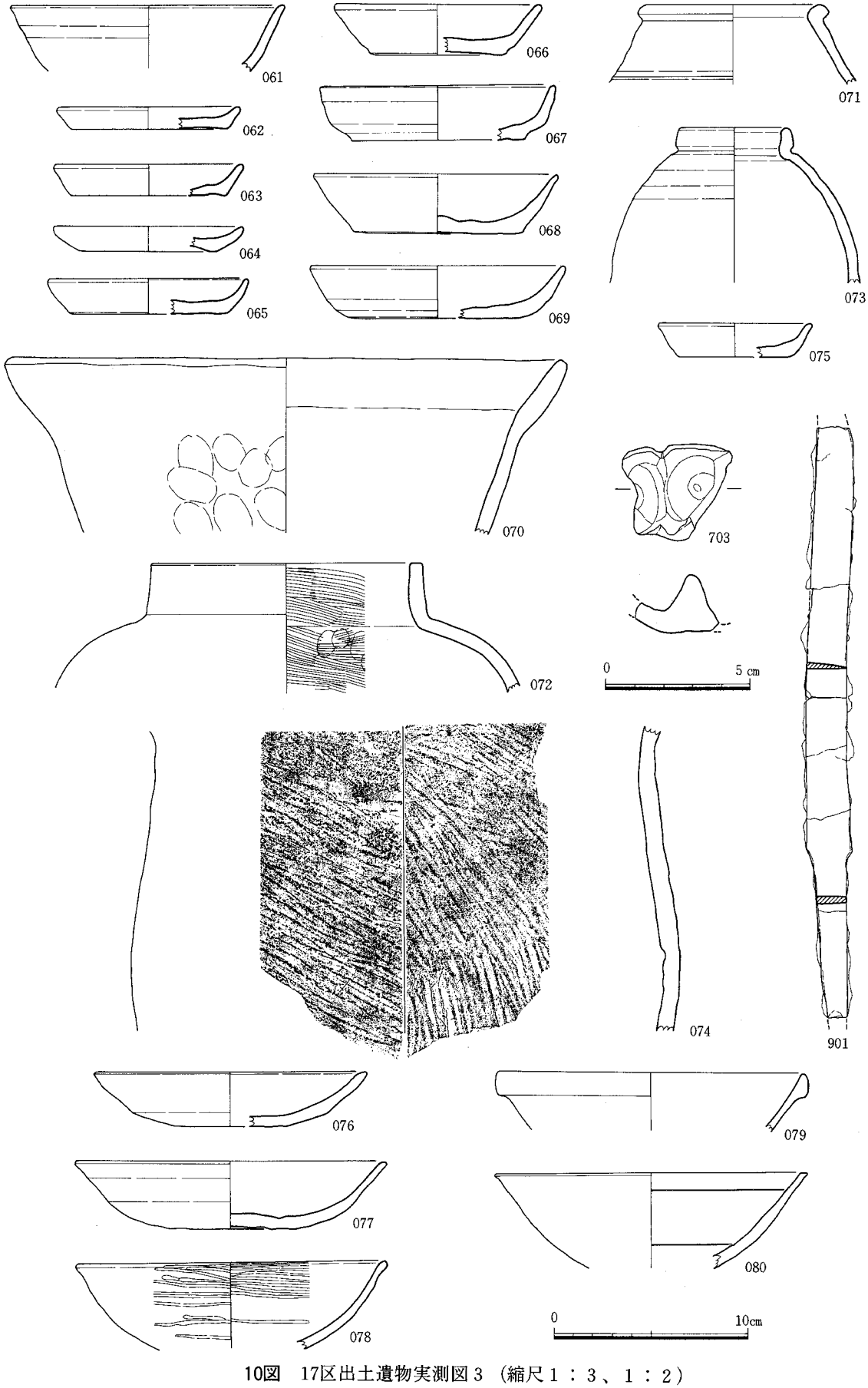
0200出土遺物（9図027～060）　027～050は土師器。027～043は口径0.9～11.6cm、高さ0.9～106cmをはかる皿。底部は糸切りで、031・033・035・038・043には板状圧痕が残る。044～050は杯。044は口径12.2cm、高さ2.4cmで、口縁が大きく開く。045～050は口径14.0～15.3cm、高さ2.4～2.8cm。



8図　17区出土遺物実測図１（縮尺１：３、１：２）



9図　17区出土遺物実測図２（縮尺１：３）



10図　17区出土遺物実測図３（縮尺１：３、１：２）

杯底部はすべて糸切りで、044を除き板状圧痕がある。051・052は瓦器椀。051は低い高台をもち、底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。黄褐色を呈する。052は内外面とも口縁下に浅い段がつく。灰黒色。053～060は中国産磁器。053～055は白磁碗で、053がⅣ類、054がⅤ類、055が見込みの釉を輪状に掻き取るⅥ類。釉は順に淡灰緑色、灰色、灰緑色を発する。056～059は龍泉窯系青磁。056・057は碗Ⅰ類で、056は青みがかった澄んだ緑色、057は灰緑色の釉をかける。058は外面に蓮弁を陰刻する碗Ⅱ類。釉は暗灰緑色。059は高台のついた皿Ⅲ類。釉は灰緑色で、表面には細かいひびが入る。060は同安窯系青磁碗。外面には粗い櫛描きを施す。釉は灰味をおびた緑色。

0231溝　調査区東側南端から北に走る幅0.55m、深さ25cm、断面U字形の溝である。

出土遺物（10図061）　須恵器杯の口縁片である。他には土師器甕、杯などの細片がある。

0334溝　中央部で0336溝と平行に走る東西溝。長さ約４m、幅0.6m、深さは５cm程度と浅い。糸切り底の土師器などが出土。

0336溝　長さ3.7m、幅0.75m前後、深さ10cm前後の浅い東西溝。糸切り底の土師器杯・皿、瓦器、白磁、青磁などの細片が出土した。

0348溝　0370土坑の下から西南方向に走る溝状遺構で、東側で幅2.0m、深さ10cm前後、西南に向かい幅が広がり、西端での深さは30cmとなる。覆土はほとんどが礫からなり、下部に黒色土が薄く堆積する。

出土遺物（10図062～072・901）　062～069は土師器。062～065は皿で、口径9.4～10.3cm、高さ1.1～1.8cmをはかる。066～069は杯。066が口径10.6cm、高さ1.6cm。他はひとまわり大きく、口径12.1～13.2cm、高さ2.8～3.1cmをはかる。皿、杯とも底部は糸切り。070は土師質土鍋。胎土には砂粒が多く、また外面は煤で覆われる。071は中国産陶器の壺片。黄褐色の釉が内外面ともにかかる。口唇部には胎土目跡がある。072は古墳時代の土師器甕で、混入したものである。901は残長20.4cmの鉄刀子である。刃幅は1.3cmをはかる。

0368溝　南壁断面で、幅2.0m、深さ30cmをはかる。下部には砂質土、上部には黒褐色土が堆積する。0369溝を切る。

出土遺物（10図073）　中国産褐釉陶器壺片。釉は黒みをおびた褐色で、内外面にかかる。他には土師器甕・杯の細片がある。

0369溝　0367竪穴住居を切る部分で、幅1.2m前後、深さ15～20cmをはかる。下部は砂質土、上部は黒褐色土が堆積する。土師器杯・皿、白磁碗Ⅴ類などの細片が出土したにとどまる。

0372溝　0370掘立柱建物の西側を南北に走る幅0.55m、深さ10cm未満の溝である。

出土遺物（10図074）　縄文土器粗製深鉢。出土したのは混入したこの土器１点だけである。

0373溝　0372溝の南端南側にある長さ1.2m、幅0.35m、深さ約10cmの小溝。0374土坑を切る。

出土遺物（10図075）　口径7.9cm、高さ1.8cmの土師器皿。底部は糸切り。

その他の出土遺物（10図076～080・703）

076・077は土師器杯。ともに底部はヘラ切り。078は土師器椀。内外面ともヘラ磨きを行う。079・080は白磁碗。079はⅣ類で、釉は淡い灰緑色、080はⅤ類で、釉は灰白色。703は質の悪い高さ４cmの滑石製品片で、径４cm前後の穴が残存部に２つ穿たれる。

３－２－３　小結

16区は東側が平坦地となり遺構が集中し、西側は16区に向う谷状の落ち込みとなっていた。縄文土器も出土しているが、遺構では竪穴住居が最も古く、古墳時代後期の６世紀後半にあたる。24区北端の0391竪穴住居と群をなし、さらに東側に広がると考えられる。0380掘立柱建物とそれを囲む溝は８

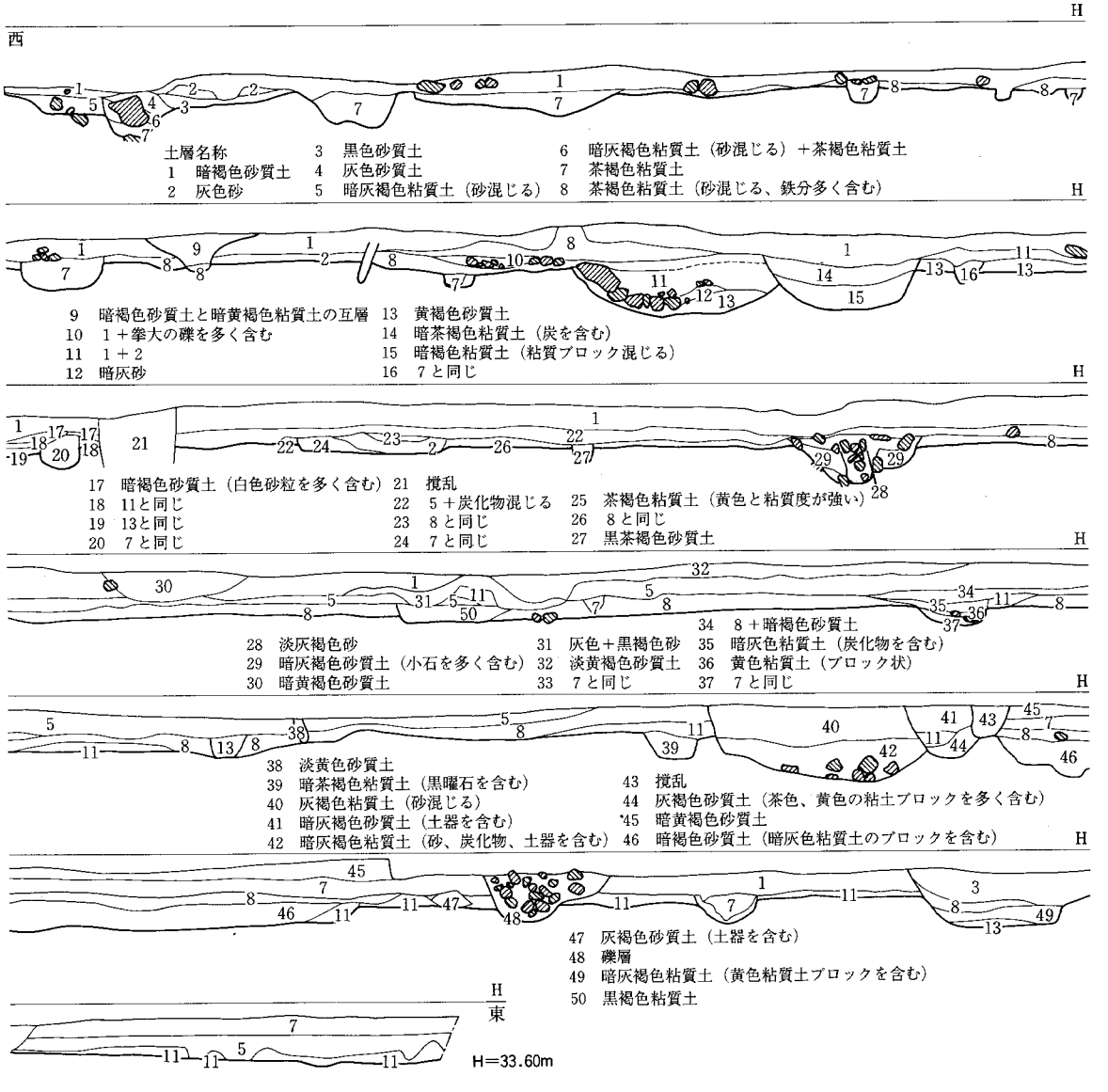
世紀代に属し、溝で区画し管理された倉庫の存在がうかがわれる。18区にもこの時期の竪穴住居や土坑が確認され、また24区南側でも竪穴住居を検出している。中世の遺構は明確な形で把握できなかった。生活面は確実にあるが、地形的に見てその辺縁部であったと考えられる。

3－3　18区の調査

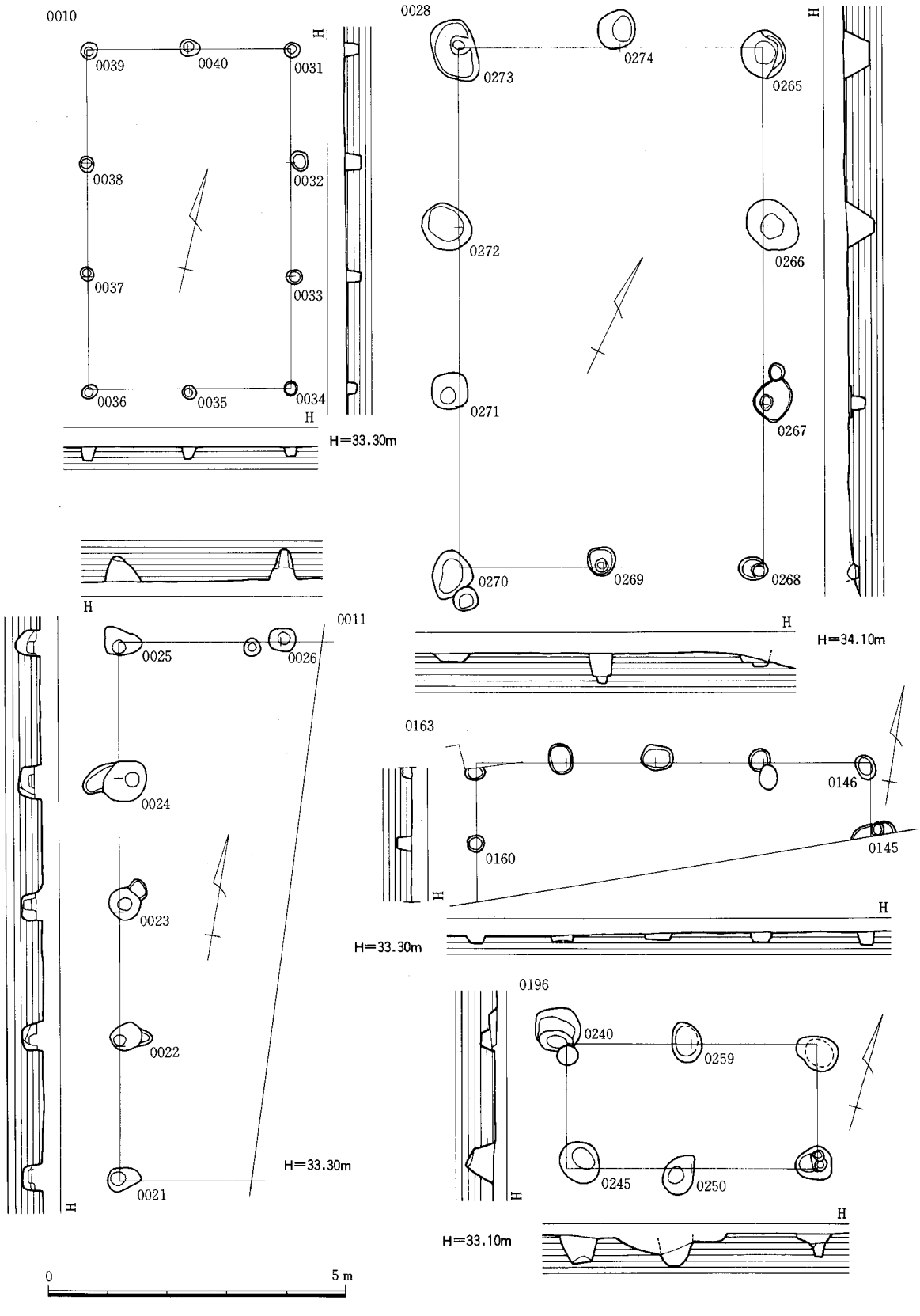
3－3－1　概要

本区は今次の調査で最も北に位置し、道路を隔てて第２次調査８区と接する。用水路・道路新設に伴うもので、北に向かって逆Ｌ字状の調査区設定となった。調査面積は665㎡。北側の東西に細長く延びる部分を１区、南北に延びる部分を２区とし、さらに２区を中央の遺構のない部分を境に北側を２ａ区、南側を２ｂ区とした。

11図には１区北壁土層断面を示した。耕作土を除去した後の図だが、その床土である褐色の砂質土の下がほとんど黄褐色砂質土の遺構検出面となる。まれに間層が入っても最大20cm程の厚さで、とくに遺物を含むということもない。２ａ区も状況は同じだが、黄褐色砂質土を追って南に掘削したと



11図　18区北壁土層断面実測図（縮尺１：60）　0　2m



12図　18区掘立柱建物実測図（縮尺１：100）

ころ、中央部が表土下約１ｍと深くなった。そこから南に向かって上がり、２ｂ区では表土下で礫混じりの砂質土の遺構検出面となった。この東西方向の幅約25ｍの谷部は古墳時代には埋没しているが、以後の生活の場としての利用はない。また２ｂ区の南側も谷が入り、遺構が希薄になる。検出面の標高は１区で33ｍ前後、２ａ区北端で33.2ｍ、谷の最深部で32.6ｍ、２ｂ区で33.7ｍ。

確認した遺構は掘立柱建物４棟、竪穴住居３基、土坑37基以上、溝３条、木棺墓１基、縄文時代包含層などで、土坑は１区に、竪穴住居は１区と２ａ区に集中する。溝はいずれも南北方向に走る。以下、図示したものを中心に説明を加える。

３－３－２　遺構と遺物

掘立柱建物

0010掘立柱建物（12図・図版５）　２ａ区の南側に位置する２間×３間の南北棟である。建物方位はＮ－13°－Ｗ。梁行340cm、柱間は170cmの等間。桁行は570cm、柱間は190cmの等間。柱穴は径22～35cmの円形状、深さは18～41cm。

出土遺物（14図081）　口径15.6cm、高さ2.6cmの土師器杯。底部は糸切りで、板状圧痕がある。0039柱穴と0040柱穴から出土した破片が接合した。他には0031から土師器甕細片が出土しただけである。

0011掘立柱建物（12図・図版５）　２ａ区0010掘立柱建物の北東に位置する。調査区外にかかり、梁柱１間と西側桁柱を確認したにとどまる。２間×４間の南北棟であろう。梁間は270cm。桁行は900cmで、柱間が225cmの等間となる。建物方位はＮ－10°－Ｗ。柱穴は径40～70cm、深さ35～50cmの円形だが、二段掘りか一方が広がっている。土層断面からみれば径20cm前後の柱を用いたと推定される。

出土遺物（14図082・083）　082は0026柱穴から出土した口径7.0cm、高さ1.2cmの土師器皿。底部は糸切り。083は0025柱穴から出土した瓦器椀片。断面三角形の小さな高台がつく。

0028掘立柱建物（12図・図版５）　２ｂ区で検出した２間×３間の南北棟である。梁行は570cm、柱間は北側の東１間が240cm、西１間が240cm、南側では東西の柱間が北側と逆になる。桁行は870cm、柱間は北から300cm・300cm・270cmとなる。建物方位Ｎ－26°－Ｗ。柱穴は円、楕円、方形と多様で、大きさも40～100cm、深さも14～55cmとばらつく。柱痕跡は径20cm程度である。

出土遺物（14図902）　0273柱穴から出土した明の「永楽通寶」（初鋳1408年）である。他に糸切り底の土師器皿、青磁、白磁などの細片がある。

0163掘立柱建物（12図）　１区中央に位置する。南が調査区外にかかるが、２間×４間の東西棟と推定される。梁は北側１間が150cm、桁行は660cmで、柱間は東から180cm・180cm・150cm・150cmとなる。建物方位はＮ－10°－Ｗ。土師器、瓦器などの細片とともに唐津擂鉢片も出土した。

0196掘立柱建物（12図）　２ａ区に位置する１間×２間の東西棟である。梁行210cm、桁行は420cmで、柱間は210cmの等間。建物方位はＮ－17°－Ｗ。柱穴は径60～75cm、深さ25～45cmの不整円形。0191竪穴住居を切る。柱穴からは混入の弥生土器だけが出土した。

竪穴住居

0155竪穴住居（13図・図版５）　竪穴住居３基は１区東側から２ａ区北側部分にかけて、東西方向に列んでいる。この住居は西側に位置する。東西幅2.7ｍ。南側は調査区外となるが、竈を中心にして折り返せば南北長は3.4ｍとなり、長方形の平面となる。壁高は残りの良い部分で20cm程度。側壁下には幅10～20cm、床面から深さ５cmの周壁溝をまわす。西側壁下の溝は二段になる。竈は西側壁中央部に基底部が残る。平面Ｕ字形を呈し、その中央奥に幅10×15cm、高さ26cmの石を据えつける。竈は黄白色土を用いて作られ、内面は焼け、また内部には焼土や炭化物が充満する。床面には竈の一直線上に0234・0235の２つのピットしかないが、竈との位置関係を考えると主柱穴とは断定しがたい。

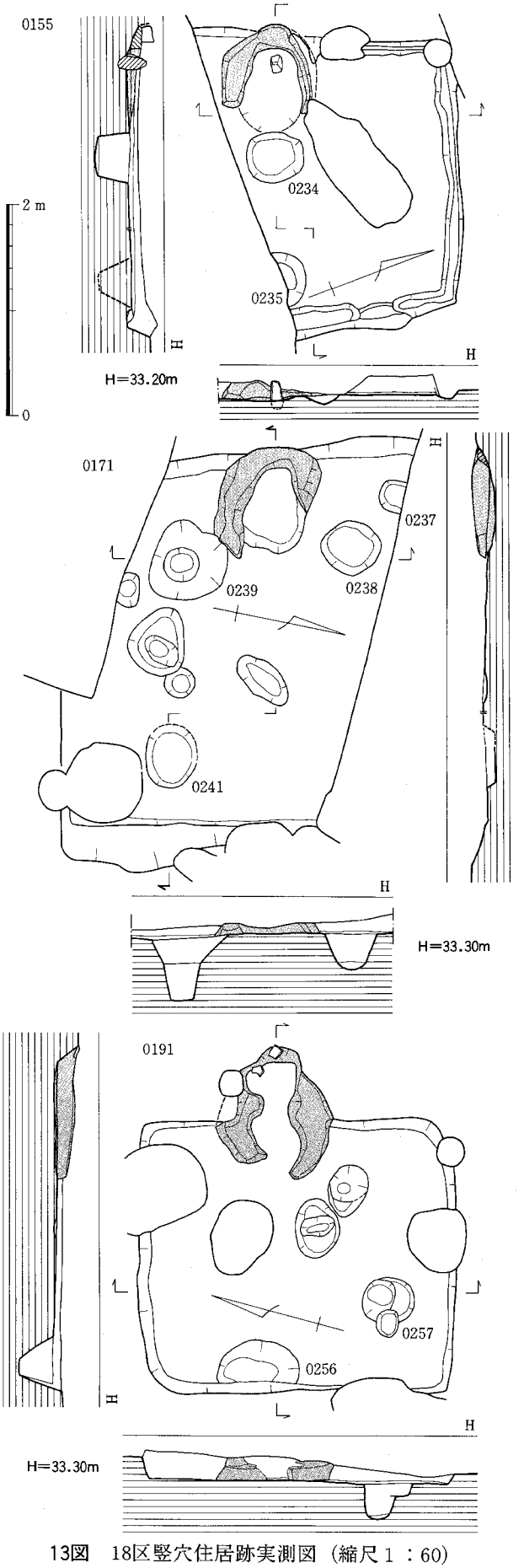
出土遺物（14図084～087）　0084は土師器杯。外面は丹塗りの後細かいヘラ磨きを施す。内面は横ナデ。口縁下に黒斑がある。085～087は須恵器。085は杯蓋で扁平な宝珠状の摘みがつく。返りは小さく直立する。残りの２個体は杯。086は小型で、焼きがあまい。087は断面方形の高台がつく小片。体部下半には接合の段がつく。

0171竪穴住居（13図・図版５）　0155の東に位置する。東側壁は後世の切り込みにより明確さを欠くが、手前の浅い段とすれば東西幅3.6m前後、外側の線とすれば４m前後となる。

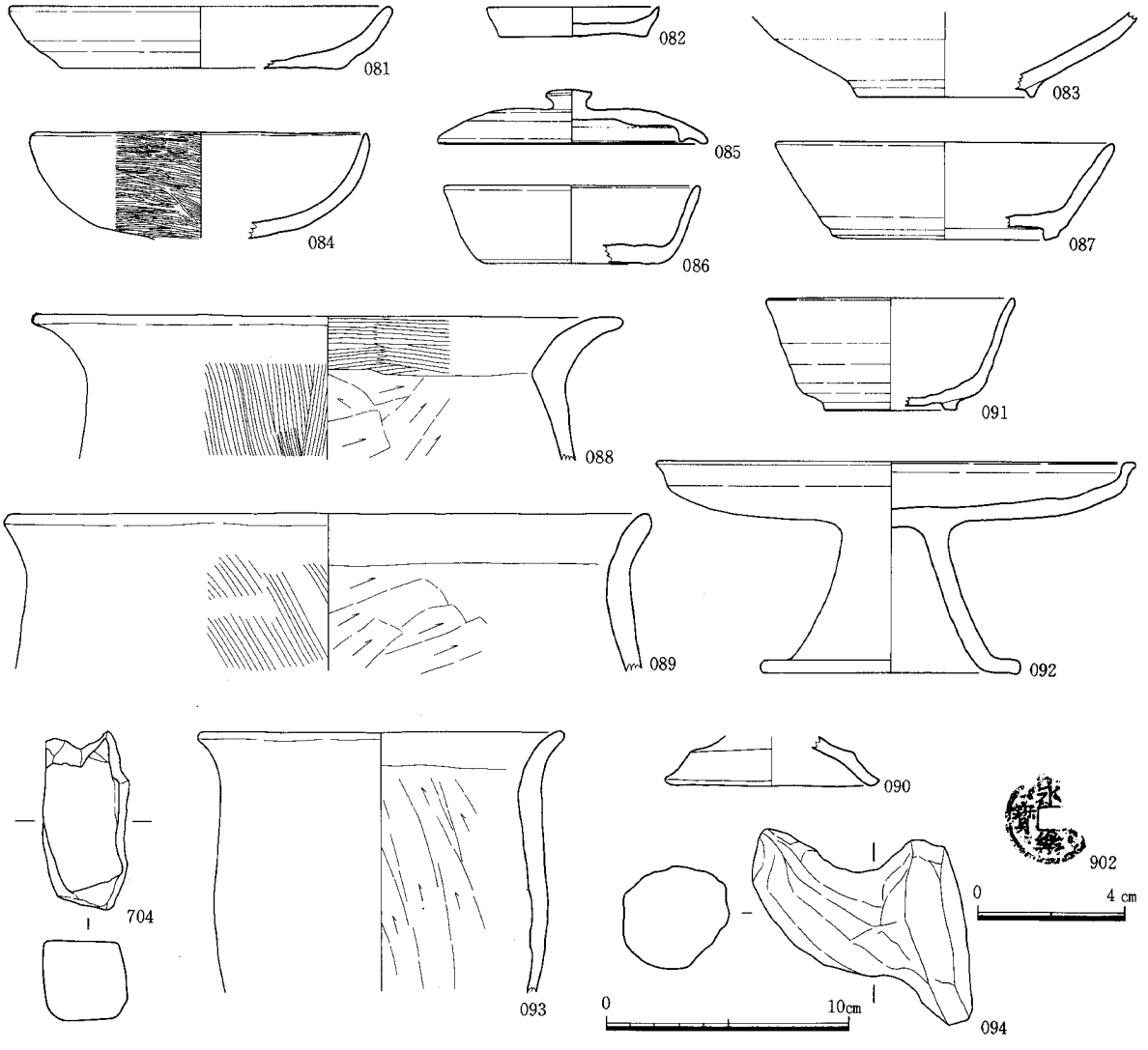
南北幅は竈を中心に折り返せば約４mとなり、方形に近い平面となる。壁高は残りの良い部分で30cm。竈は東側壁中央に黄色土を用いて作られる。平面U字形の基底部が残るだけである。竈の焚き口は窪み、焼土・炭化物・礫が奥に傾斜して堆積する。内部壁面は焼けている。床面のピットのうち、竈を挟んだ0238と0239および0241が主柱穴で、４本柱の構造となる。柱間は1.6m前後である。11図に土層断面が表れている。

出土遺物（14図088～092・704）　遺物の多くが竈の周辺から出土した。088～090は土師器。088は内面のヘラ削りが強く、口縁との境に稜を作る甕。089は0238柱穴から出土した。口縁が短く、外反も小さいことから甑であろう。090は高杯脚部であろうか。筒部端で平坦面を作り、そこから裾が短く開く。竈内から出土。091・092は須恵器。091は低い高台のつく小椀。焼きがあまい。092は扁平な杯部と裾が開く脚部をもつ高杯。杯口縁は短く外反する。704は黄白色の砂岩を用いた砥石。長辺３面に加え、割れた小口面にも砥面が見られる。他に須恵器皿などがある。

0191竪穴住居（13図・図版５）　２ａ区の北端、0171竪穴住居から東約２mに位置する。東西2.95m、南北2.55mのわずかに



13図　18区竪穴住居跡実測図（縮尺１：60）



14図　18区掘立柱建物・竪穴住居出土遺物実測図（縮尺１：３、１：２）

東西に広い長方形平面を呈する。壁高は残りの良い部分で25cm。竈は西側壁中央やや北寄りに設ける。基底部が残るだけだが、外回りはU字形状、内部は瓢形をなし、全体の半分が側壁の外に出る。側壁内側が焚口で、外は煙道部分であろう。内面は焼け、焼土・炭化物が充満していた。床面にはピットが見られるが、主柱穴かの判断はできない。

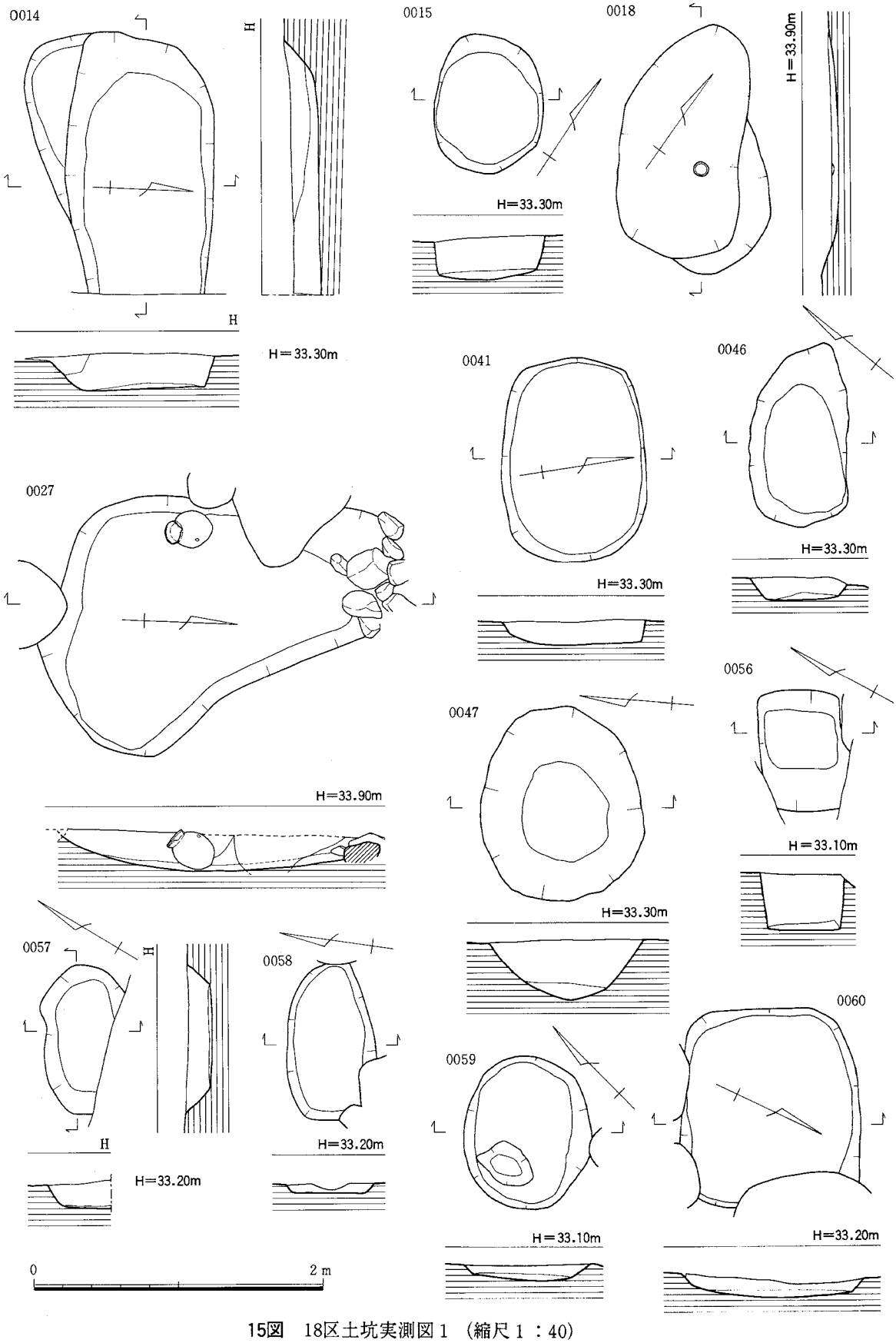
出土遺物（14図093・094）　ともに土師器で、竈から出土した。093は甕。口縁は緩く外反し、内面は口縁下まで縦に近いヘラ削りを行う。094は甕の把手。胴部の器壁が厚い。

土坑

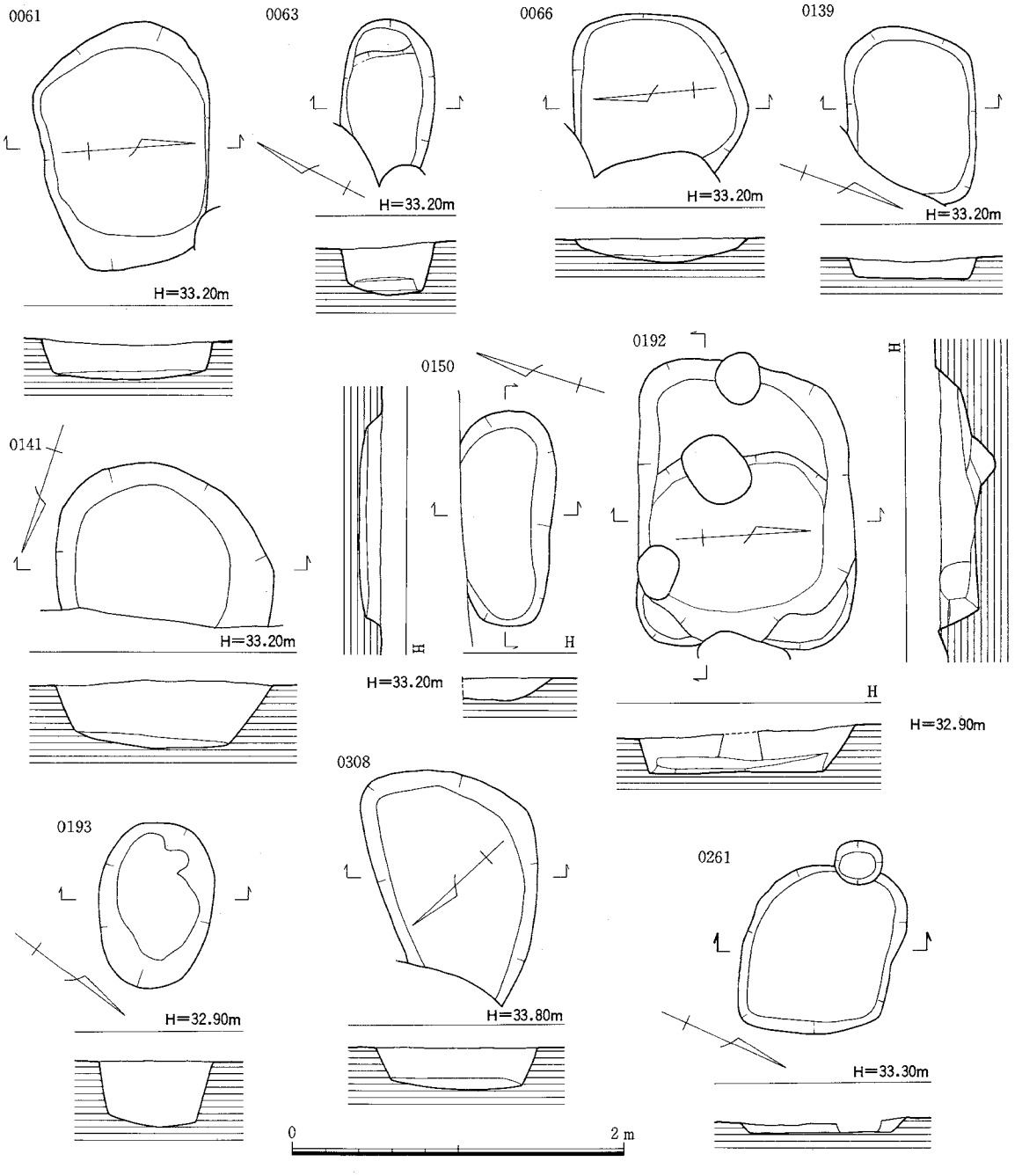
0014土坑（15図）　２ａ区東北隅に位置する。東西に長軸を取る楕円形状の土坑で、幅１ｍ前後、深さ24cm。西南隅は広がり段がつく。覆土は黄灰色土。土師器皿（ヘラ・糸切り底混合）などが出土。

0015土坑（15図）　0014の西２ｍに位置する。長さ0.95m、幅0.74m、深さ30cmの楕円形土坑。覆土は黄灰色土。0191竪穴住居を切る。

出土遺物（18図095・096）　ともに土師器杯である。096が通有の器形であるのに対し、095は口縁部をつまみ上げ、内面に段を作る。また内面には暗文を施し、外面上位は横のヘラ研磨、底部は手持ちヘラ削りを行う。糸切り底の土師器皿、青磁片などが他にあり、図示した２点は0191竪穴住居に伴うものであろう。



15図　18区土坑実測図１（縮尺１：40）



16図　18区土坑実測図２（縮尺１：40）

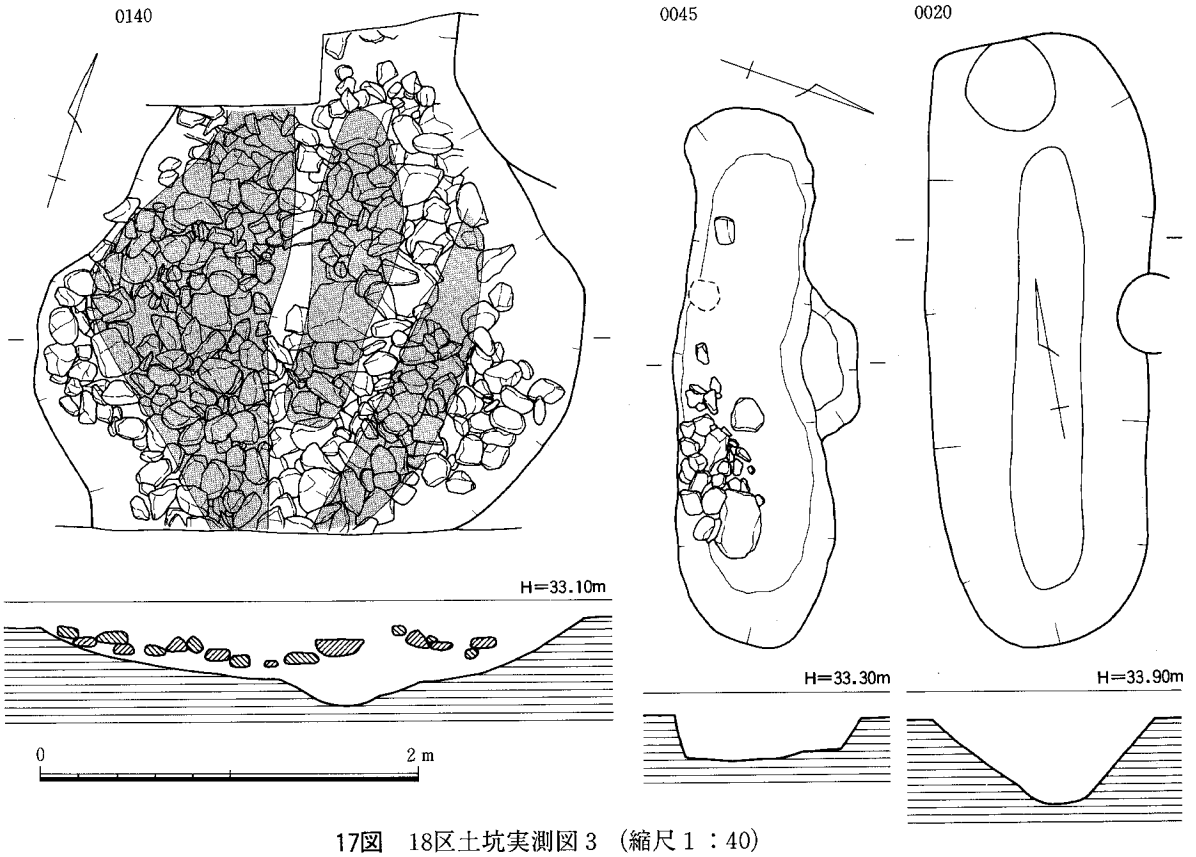
0016土坑　２ａ区北端に一部がかかる土坑。東西幅は1.25m、深さ29cm。覆土は黄灰色土である。

出土遺物（18図097・098）　097は土師器甕把手、098は縄文土器粗製深鉢底部。ともに混入品で、他に出土した糸切り底の土師器皿が遺構に伴う。

0018土坑（15図）　２ｂ区。南北方向に長軸を取る長さ1.64m、幅0.85m、深さ５cm前後の浅い楕円形土坑。覆土は黒褐色礫混じり土。

出土遺物（18図099）　遺構の中央やや南寄りで裏返しで出土した須恵器杯蓋である。丸みのある天井部をもち、返りは短く内傾する。ヘラ記号を天井部に記す。他の遺物はない。

0020土坑（17図）　２ｂ区。南北に長軸を取る長楕円形の土坑。長さ3.25m、幅1.15m、深さ45cm前後の規模をもつ。0028掘立柱建物に切られる。出土遺物はない。



17図　18区土坑実測図３（縮尺１：40）

0027土坑（15図・図版５）　２ｂ区、0018土坑の北東約1.5mに位置する不整形土坑。長さ2.30m、幅は南側が広く1.78m、北側が0.93m。深さは25cmで、覆土は黒褐色砂。東側側壁下に中に赤色顔料混じり土の入った土師器甕が、口を南に向けて横転していた。

出土遺物（18図100）　土師器布留系甕である。口縁は内湾ぎみに立ち、肩が張る部分もあるが、胴部最大径はほぼ中位にとる。その部位に焼成後穿孔を施す。外面下半には煤の付着が著しい。口径14.9cm、高さ27.8cm。

0041土坑（15図）　１区東端に位置し、長軸を東西にとる楕円形の土坑である。長さ1.4m、幅1.0m、深さ21cm。覆土は暗青灰色土。0042土坑を切る。糸切り底の土師器杯・皿などが出土。

0045土坑（17図）　１区西側。長さ3.4m、幅0.8m前後、深さ25cmの東西に長い溝状の土坑。北端には段がつく。覆土は暗灰色土に褐色土ブロックが混じる。南側壁下東寄りには礫が集中する。土師器杯・皿、青磁などの細片が出土。

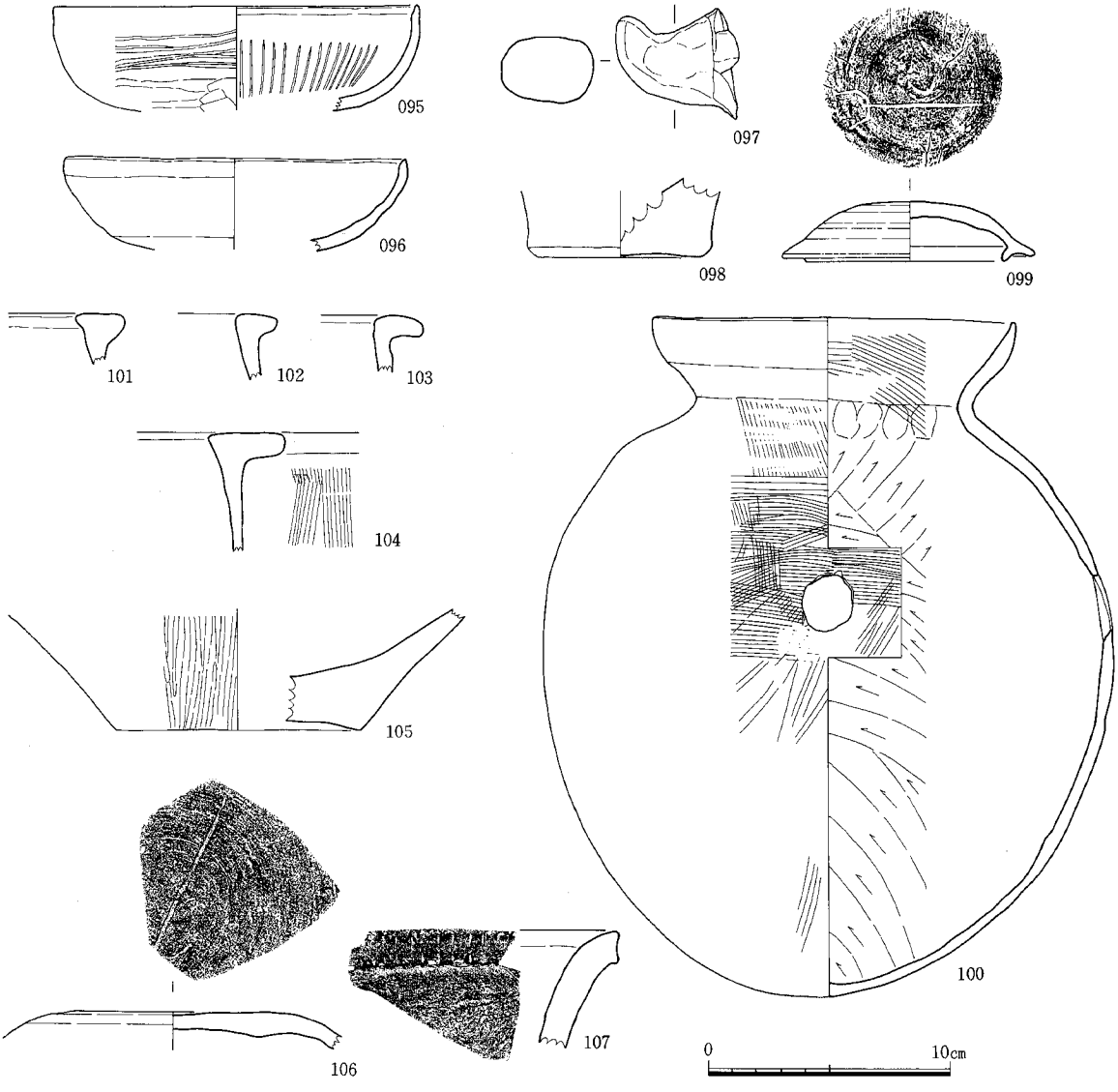
0046土坑（15図）　0047土坑の西北に位置する南北に長軸をとる不整楕円形土坑。長さ1.27m、幅0.66m、深さ16cm。覆土は暗青灰色土に黄色土ブロックが混じる。糸切り底の土師器皿などが出土。

0047土坑（15図）　0046土坑の西南に位置する。長軸を東西にとる不整楕円形土坑で、長さ1.35m、幅1.13m、底は鍋底状で深さ41cmをはかる。覆土は暗青灰色土。土師器甕片などが出土。

0056土坑（15図）　１区東端。長軸を東西にとる長さ0.85m、幅0.60m、深さ40cmの長方形土坑である。底面は40×50cmの長方形となる。糸切り底の土師器杯・皿、瓦器、白磁などの細片が出土。

0058土坑（15図）　0057土坑の北側に位置する。長軸を東西にとる長さ1.10m、幅0.55m、深さ７cmの楕円形土坑。覆土は茶褐色土。出土遺物はない。

0059土坑（15図）　0058土坑を東側で切る楕円形土坑。長軸は北東－西南で、長さ1.05m、幅0.86m、



18図　18区土坑出土遺物実測図１（縮尺１：３）

深さ10cmをはかる。覆土は灰褐色土。出土遺物はない。

0061土坑（16図）　0060土坑の東側を切る。長軸を東西にとる長さ1.50m、幅1.05m、深さ23cmのの不整楕円形土坑。覆土は灰褐色土。出土遺物はない。

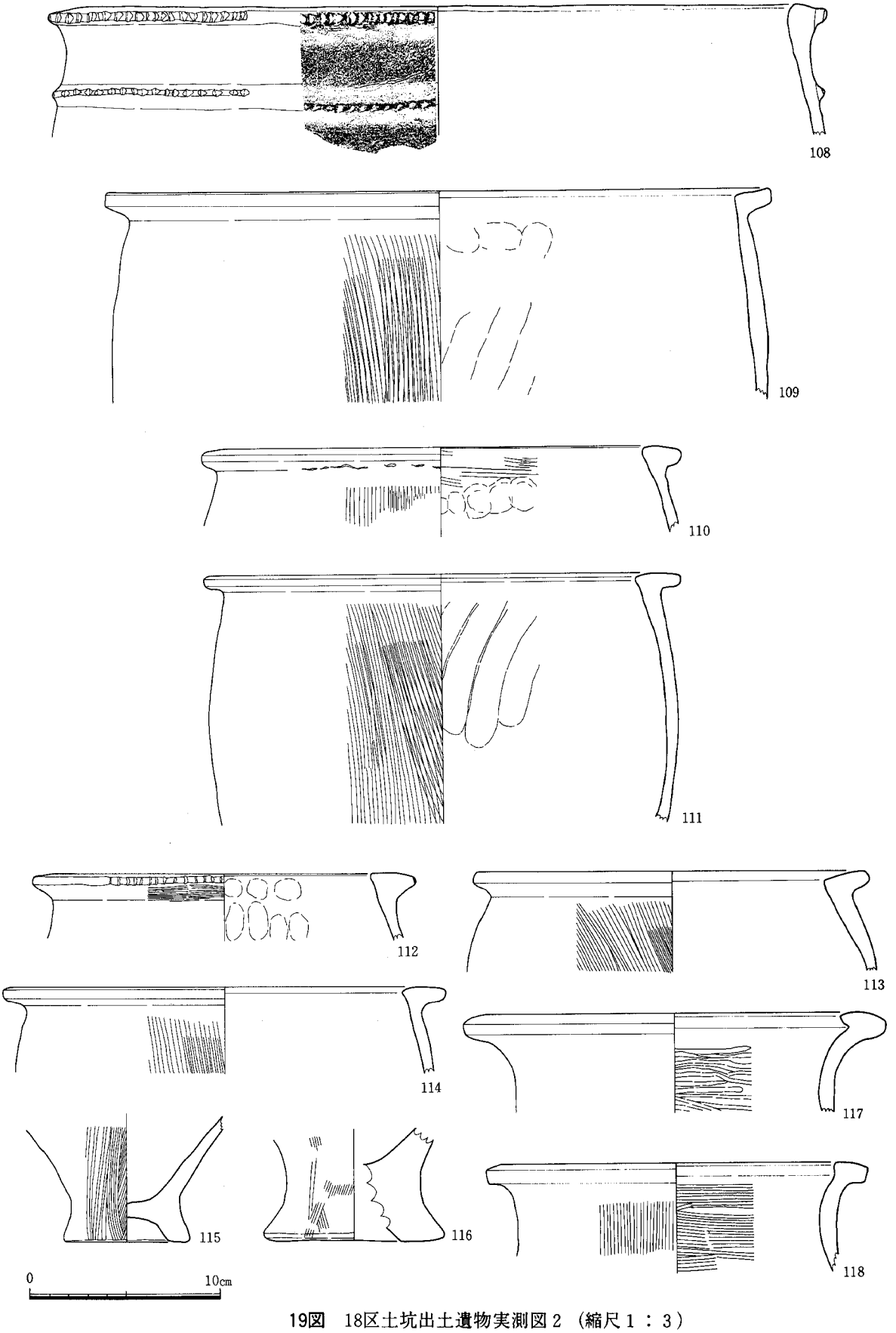
0063土坑（16図）　0061土坑に西側を切られる楕円形土坑。南北幅1.10m、深さは14cm。西側が膨らむ。覆土は灰褐色で、土師器杯・皿、白磁、鞴羽口などが出土した。

0139土坑（16図）　0066土坑の東2.5mに位置する。長軸を東西にとる長さ1.08m前後、幅0.77m、深さ14cmの楕円形土坑である。東南側は0140土坑に切られる。土師器杯・皿などの細片が出土。

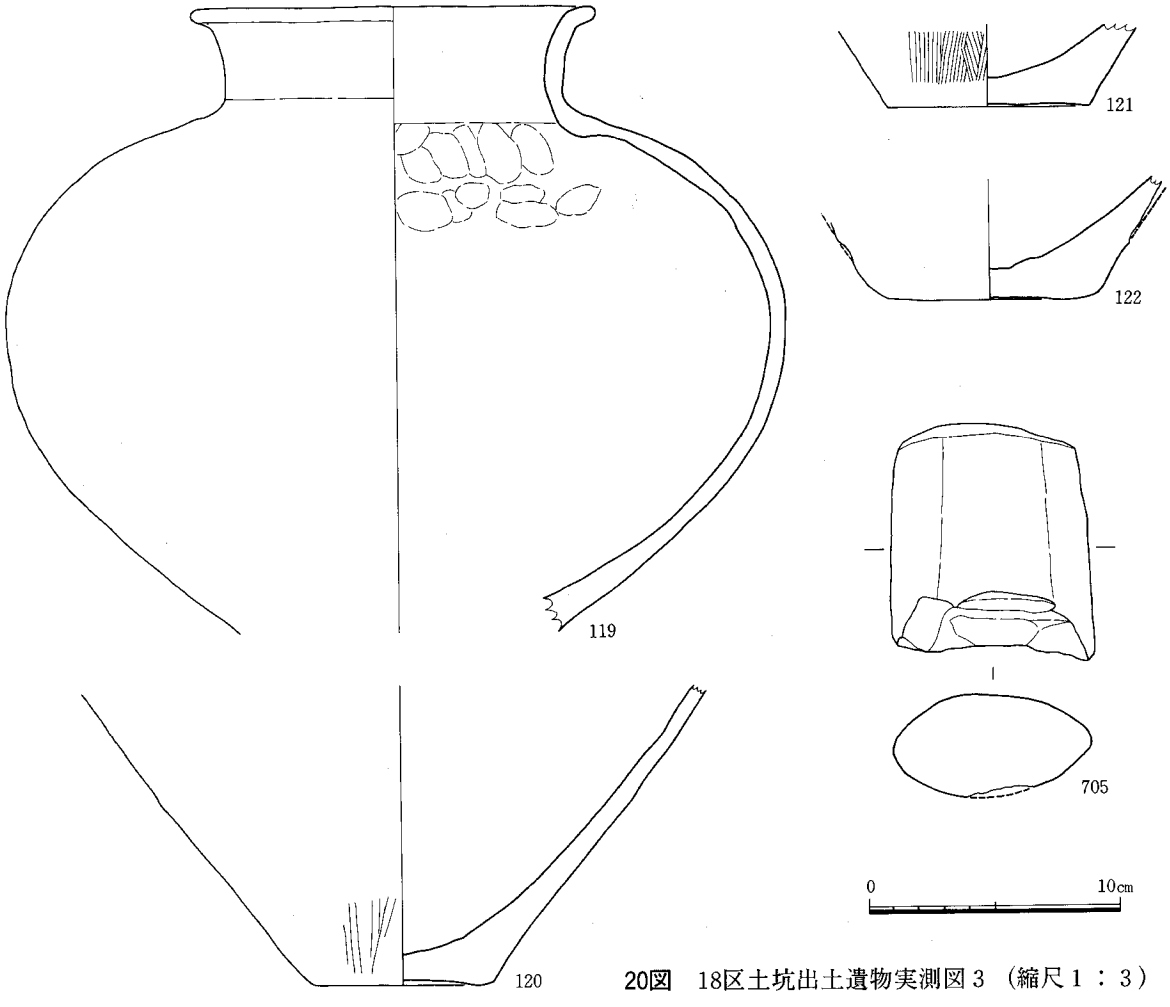
0140土坑（17図）　0139土坑を東側で切る。東西幅2.90mの円形状土坑で、坑内には主に径30cm以下の礫を多量に放り込む。底の東西両側にはテラスを作り、その中央を溝状に掘り込む。最も深い部分で検出面から45cm。土層断面は11図にある。糸切り底の土師器杯・皿、白磁、青磁などの細片が出土。

0141土坑（16図）　0140土坑の北東に位置する円形状土坑。東西幅1.30m、深さ40cm。土層断面は11図にある。糸切り底の土師器皿、白磁などの細片が出土。

0150土坑（16図）　１区中央やや西寄りに位置する。東西に長軸をとる楕円形土坑だが、北側壁は



19図　18区土坑出土遺物実測図２（縮尺１：３）



20図　18区土坑出土遺物実測図３（縮尺１：３）

調査区外にかかる。長さ1.39m、深さ14cm。覆土は灰褐色砂質土。土師器甕細片などが出土した。

0192土坑（16図）　２ａ区。東西に長軸をとる長さ1.75m、幅1.30m、深さ30cmの長方形土坑。底面北側には段がつく。覆土は黒褐色土。

出土遺物（18図101～106）　101～105は混入した弥生土器。105が壺の底部片、他はいずれも甕の口縁片で、中期初頭から前半の時期にあたる。106は須恵器杯蓋で、天井部にはヘラ記号を刻む。

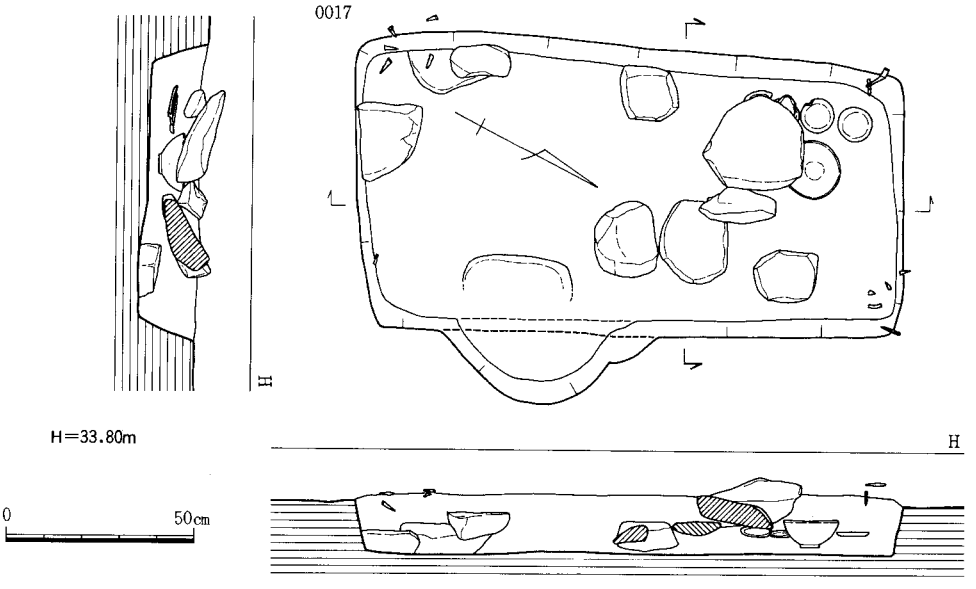
0193土坑（16図）　0192土坑の西に位置する長さ1.00m、幅0.79m、深さ40cmの土坑である。覆土は黒褐色土。弥生土器片が出土している。

0194土坑　２ａ区、0191竪穴住居の西側に位置する。南北に長軸をとる長さ2.35m、幅1.50m、深さ15cmの長方形土坑。覆土は黒褐色土。底面には多数のピットが切り込み、旧状をとどめない。

出土遺物（18図107）　弥生土器壺で、口唇の上下端にヘラで浅い刻み目を入れる。

0236土坑　１区東端。0155と0171の竪穴住居に挟まれ、また南側は調査区外にかかるため平面形態は不明。竪穴住居間に直線的に延びる北側壁の一部を確認したにとどまる。深さは10cm前後。覆土はしまった黒褐色土で、弥生土器がまとまって出土した。

出土遺物（19・20図108～122・705）　土器はいずれも弥生土器である。108～116・121は甕。108は口縁と口縁下の三角凸帯上にヘラで刻目を施す亀ノ甲タイプの甕。110・112は口縁断面が三角形を呈する。109・111・113・114の口縁は逆Ｌ字状に近いが、外への張り出しはそれほどではなく、また胴部の張りも小さい。これらの甕は、ほとんど外面縦刷毛目、内面指ナデで仕上げる。115・116・121



21図　18区土壙墓実測図（縮尺１：20）

は甕底部。115・116は上げ底で、端部は外に強く張る。121は平底である。117～120・122は壺である。117・118の頸部はは直立気味で、口縁部は折り返して上面を平坦とする。内外面ともヘラ磨きだが、118の外面には刷毛目が残る。119は腰高の張りの大きい胴部から頸部が直立し、口縁部が緩やかに外反する壺で、外面ははヘラ磨きを行う。ただ磨滅が著しく、胎土に入れた大量の砂粒が表面に浮き出る。赤褐色を呈し、胴部下半には黒斑がある。120・122は壺底部。120は上げ底で、器壁も薄い。705は玄武岩製太形蛤刃石斧。刃部は折損する。

0261土坑（16図）　２ａ区北端、0191竪穴住居の西北に位置する。東西幅1.05m、深さ５cmの西側が丸みをおびた方形土坑で、覆土は黒褐色土。弥生土器片だけが出土した。

0308土坑（16図）　２ｂ区南側。幅0.95m、深さ25cmの不整楕円形土坑である。糸切り底の土師器杯・皿などの細片が出土。

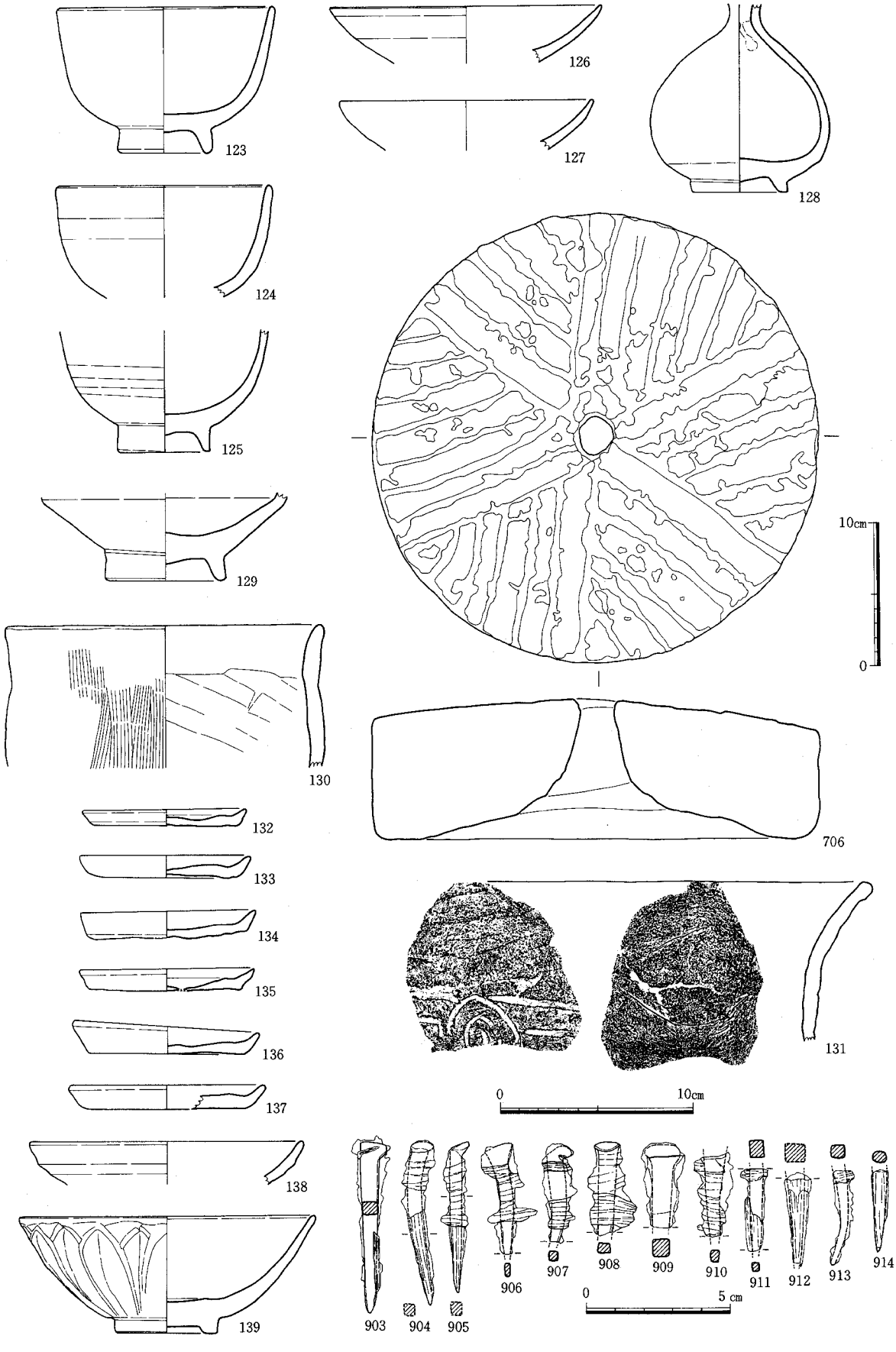
溝状遺構

012・013溝　２ａ区中央を北北西に走る長さ約14m、幅0.4mの小溝である。深さは15cmだが、北側は溝のそものが痕跡的となる。途中２ヶ所に長楕円形の溜まりがあり、北側の溜まりは長さ2.0m、幅0.7m、深さ20cm、南側は長さ1.7m、幅0.7m、深さ20cmをはかる。この溜まりからは礫に混じり陶磁器、石臼などが出土した。

出土遺物（22図123～129・706）　123～128は肥前系の陶磁器。123～125は陶器椀で、123は灰緑色、残りの２点は黄白色の釉を全面にかけ、畳付のみを掻き取る。126・127は青磁椀片。釉はともに青みがかった緑色、胎は126が淡赤褐色、127が灰白色。128は陶器鉄釉瓶。胎は灰色で粗い。129は焼きのあまい陶器壺。高台の一部を半月状に削り取る。釉は茶褐色。706は磨臼の下臼である。径31.0cm、厚さ9.7cm。上面は６区画に分け、複線鋸歯文風の溝を彫り込む。

0147溝　１区中央。北北西方向に走る幅1.1m前後の溝。深さ10cm程度、溝肩は安定しない。

出土遺物（22図130・131）　130は土師器甕。口縁部が直立し、内外面とも煤が付着する。131は縄文土器深鉢。外反する口縁下に２条の沈線をめぐらせ、その上に重弧文を施す。後の項の0154段落ち遺構出土土器と同類である。



22図　18区溝状遺構・土壙墓出土遺物実測図（縮尺１：４、１：３、１：２）

木棺墓

0017木棺墓（21図・図版５）　２ｂ区。主軸方位Ｎ－28°－Ｗにとる。墓壙は長さ1.45ｍ、幅0.80ｍの長方形で、残存する深さは15cm。墓壙の四隅上面から鉄釘が出土し、その位置から墓壙西寄りに木棺が埋置されていたと考えられる。また木棺は組合せ式で、蓋だけを鉄釘で留めた可能性が高い。壙内西北隅では土師器皿４枚と青磁碗が正置状態で出土した。棺内の副葬品である。人骨は残存しなかったが、副葬品の位置関係から見て、頭位は北である。

出土遺物（22図132～139・903～914）　132～138は土師器。132～137は皿で、うち132～135が副葬されていた。４枚の口径は8.5～9.0cm、高さ0.9～1.5cm。底部はすべて糸切りで板状圧痕がある。残りの２枚は覆土から出た破片。底部切り離しは先の皿と同じ。138は覆土から出土した杯小片。139は外面に鎬蓮弁を陽刻する龍泉窯系青磁碗。緑の強い褐色釉を畳付と外底以外にかける。口径15.1cm、高さ6.1cm。903～914は鉄釘。頭部をつぶした丁字形だが、形態、長さはまちまちである。903の長さ5.9cm。ほとんどの釘に棺材が錆化付着する。

縄文時代包含層

0154段落ち遺構　１区の中央から西側の約11ｍにわたり、緩い南側への段落ちがあり、その褐色土の覆土から縄文土器などが出土した。遺物は段落ちの東西２ヶ所に集中する。調査区内での段落ちの深さは５cm前後にとどまる。段落ちの性格が不明なため、0154包含層として遺物を取り上げた。

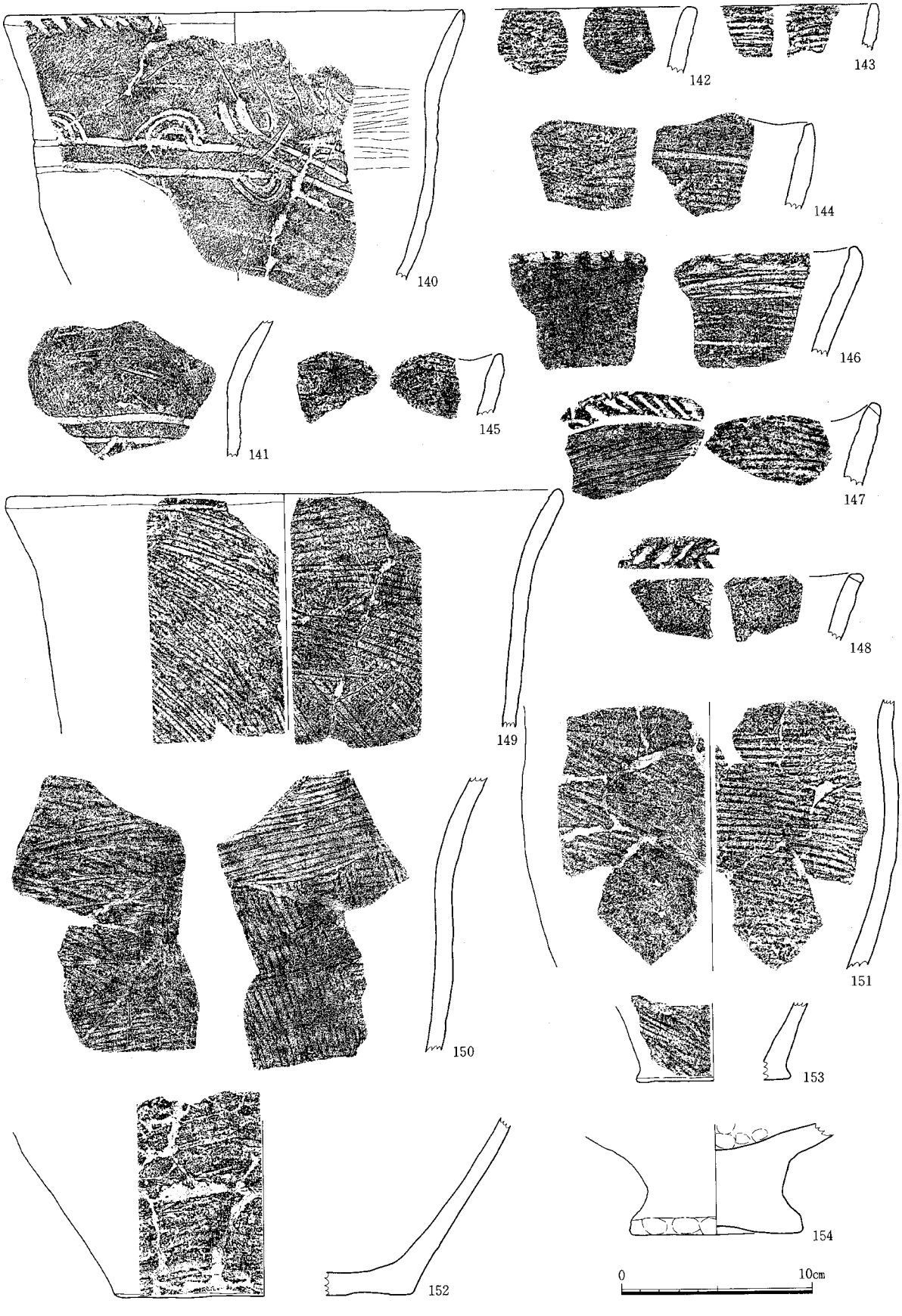
出土遺物（23・24図）　140～154は縄文土器で、154以外は深鉢である。140は口縁端部にヘラ状工具刻み、肩部に棒状工具による２本の沈線とその上下に重弧文を施し飾る。沈線は２本同時に入れ、その終点は始点と交わり、上に引き上げて止めている。全体の調整は板ナデ風である。141は140と同一個体であろう。142～153は粗製で、内外面とも条痕を施す。142・143・149以外は波状口縁をなし、うち146～148にはヘラあるいは棒状工具で口縁上端部に刻み目を入れる。149は口縁部が緩やかに開く。150・151は粗製深鉢の胴部。150の条痕は上位が横、下位が縦に一部横を交差させる。152～154は底部。先の２点は粗製深鉢のもの、154は横ナデで仕上げる精製土器で、底部が高く大きく外に張る。155～158は上面などから出土した弥生土器甕。いずれも中期初頭前後の時期である。

その他の出土遺物（24図159～177・915・916）

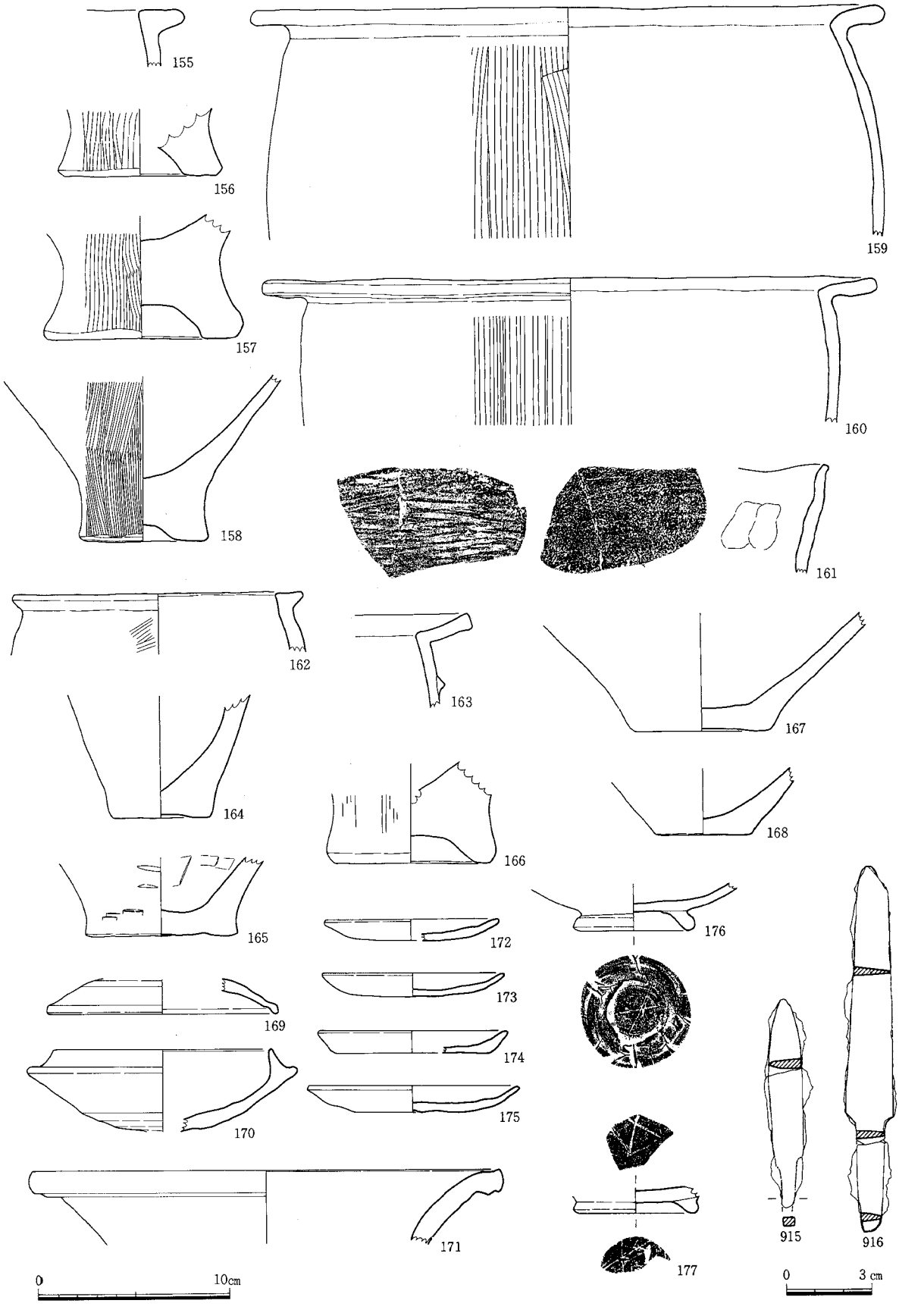
159・160は２ａ区でまとまって出土した弥生土器中型甕である。逆Ｌ字状口縁で、上面は内傾する。胴部外面は刷毛目、他は横ナデで仕上げる。この２点以外はピットや検出面からの出土である。161は波状口縁をもつ縄文土器粗製深鉢。162～168は弥生土器の甕（162～166）と壺（167・168）で、前期から中期の時期にあたる。167の壺外面は丹塗り。169～171は須恵器。169は奈良時代の杯蓋、170・171は古墳時代後期の杯身と甕である。172～175は土師器皿。174が糸切り、他はヘラ切り底で、175には板状圧痕が残る。176は黒色土器Ａ類椀。高台は張りがあり、内底にはヘラ記号を刻む。177は丁寧な作りの土師器椀。見込みと外底に焼成後ヘラ記号を刻む。915・916は鉄刀子。915は茎部端が欠損し、残長7.3cm。916は全長12.7cm、関部分は錆に被われ明確でない。

３－３－３　小結

18区は地形的に見ると、第２次調査８区の南縁にあたる１・２ａ区と、その南浅い谷を挟んだ２ｂ区に分けられる。２ｂ区南にはさらに浅い谷が入り、17･24区の遺構との直接的なつながりはない。１・２ａ区では縄文時代から近世までの遺構を検出した。縄文時代包含層（0154）は若干の混じりがあるものの、およそ後期の西平式に遅れる時期に比定できよう。弥生時代の0236土坑の性格は明確でないが、出土遺物は中期初頭を前後する時期で、８区の集落や墓地と一連の遺構と考えられる。３基の小型の竪穴住居は、８世紀後半、奈良時代の所産である。17区の倉庫（0380）と時期的に近いが、８区



23図　18区縄文時代包含層出土遺物実測図（縮尺１：３）



24図　18区その他の出土遺物実測図（縮尺１：３、１：２）

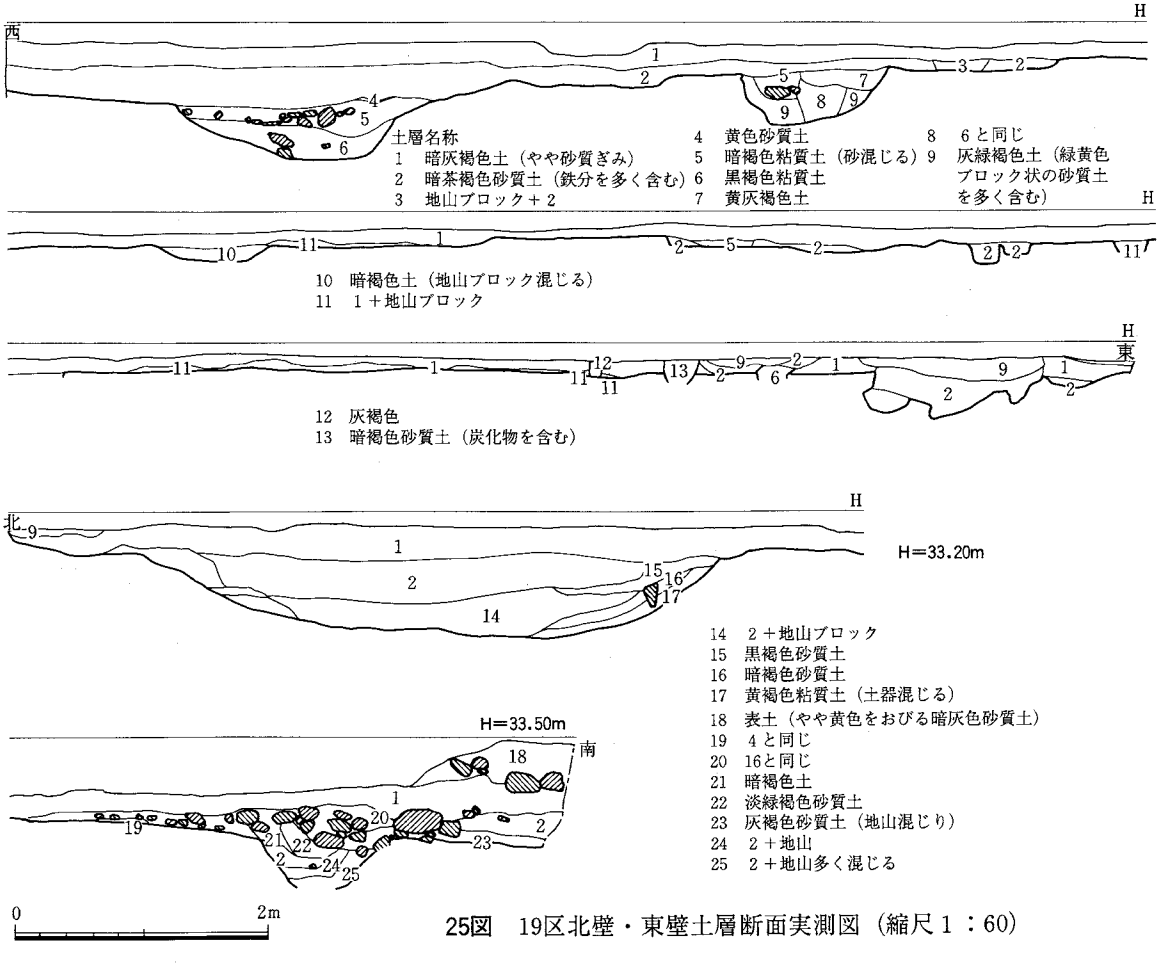
南側でもこの時期の掘立柱建物を確認しており、まとまりとしては８区と繋がるものであろう。これらに比べ検出した掘立柱建物は、遺物が少なく時期の比定が困難である。0011掘立柱建物の西側には建物に沿うように南北に走る近世溝（0012・0013）があるところから、その南で建物方位を同じとする0010掘立柱建物とともに近世時期の建物の可能性もある。１区で検出した土坑は、12世紀以降近世にいたる遺構である。その性格は不明。一方２ｂ区では、古墳時代前期の土坑（0027）、奈良時代の土坑（0018）、13世紀の木棺墓（0017）、15世紀以降の掘立柱建物（0028）と各時代、各種の遺構を検出した。ピットなどを考えあわせると、13世紀以降の生活面として利用された密度が高い。

３－４　19区の調査

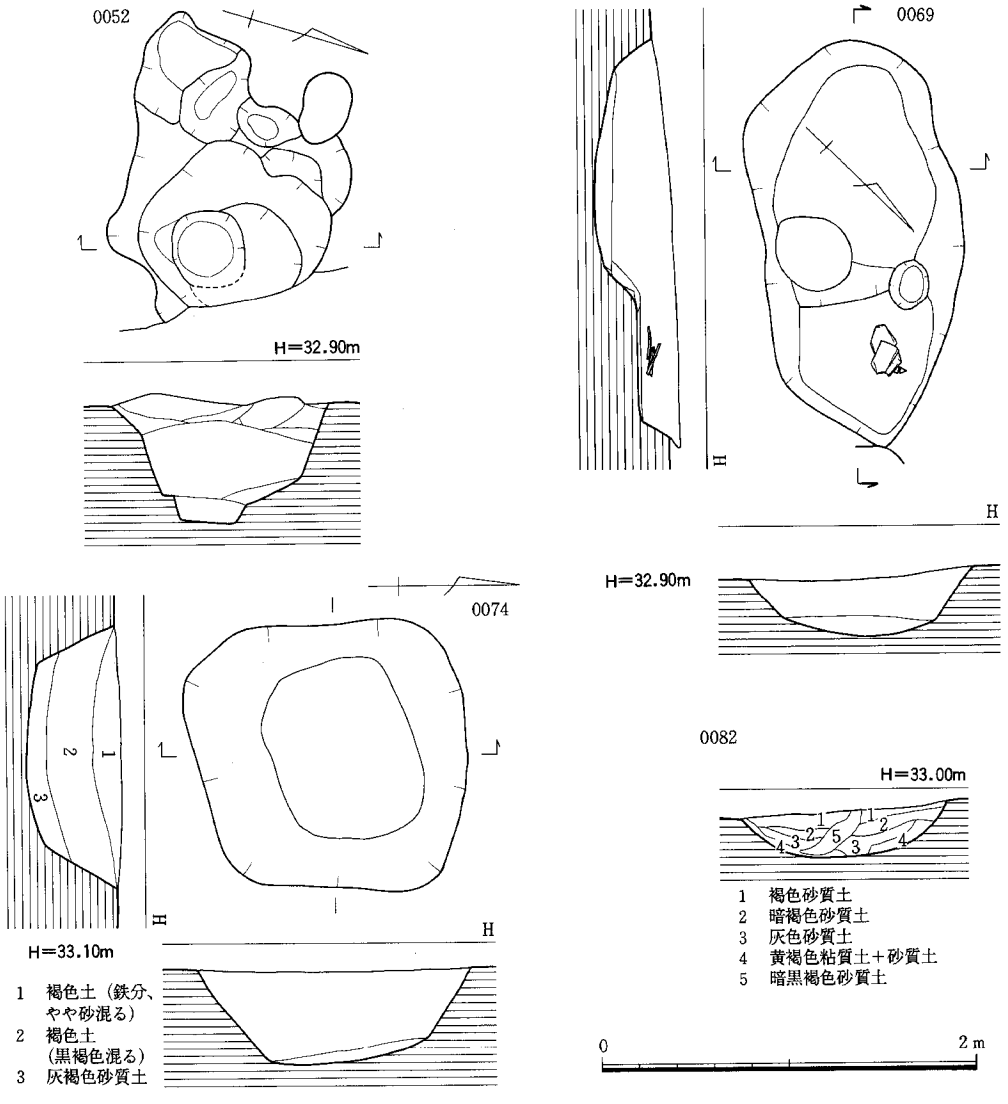
３－４－１　概要

18区西側に延びる南北幅約8.5m、東西長約37mの調査区である。排水路新設に伴い288㎡を発掘した。25図に調査区北壁から東壁の土層断面を示した。東側では床土直下が黄褐色土の遺構面となるのに対し、西側に向かい暗褐色土を挟み、それも厚くなる傾向にある。東側検出面での標高は32.90m前後、西側では32.70m前後と西に向い緩く傾斜する。また東南部分には開田の際の削平が見られる。

付図１の全体図でも分かるとおり、この区では浅い溝状の遺構や、最大1.8×1.2mの支石墓の蓋かと思わせる巨石から拳大の礫までを投げ入れた不定形の土坑が錯綜して掘り込まれている。これらの



25図　19区北壁・東壁土層断面実測図（縮尺１：60）



26図　19区土坑実測図（縮尺１：40）

土坑は、中近世の開墾の際出土した石の処理穴と考えられる。明らかな遺構としては東側の土坑、ピット、甕棺墓、西側の２条の南北溝などであり、これらの遺構を中心に以下説明を加える。

３－４－２　遺構と遺物

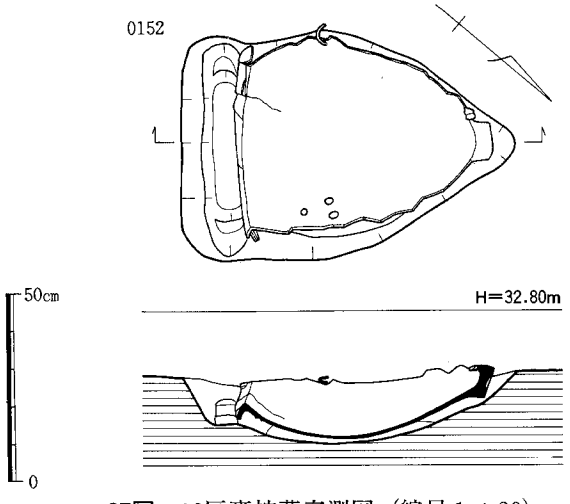
土坑

0050土坑　東北隅に位置する南北幅4.2m、深さ64cmの不整円形土坑である。北側壁には場所を変えて段がつく。24図に土層断面がある。糸切り底の土師器杯・皿、白磁、青磁、青白磁などが出土。

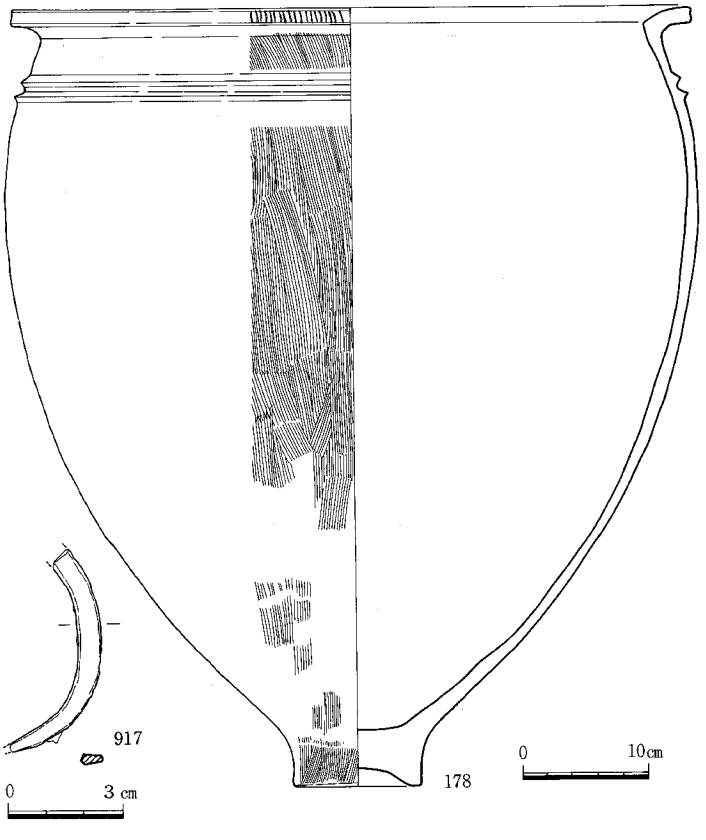
0052土坑（26図）　東南隅に位置する径１m前後の円形土坑である。深さ50cmでいったん平坦面を作り、その中央南寄りに径0.4m、深さ12cmのピットを設ける。土層断面は24図にある。土師器皿、白磁、青磁片などが出土した。

0069土坑（26図）　0052土坑の西側に位置する。長さ2.15m、幅1.05mの不整楕円形土坑である。底面は南北二段になり、北側は深さ22cm、南側は深さ45cmとなる。

出土遺物（29図183）　北側底面から出土した逆Ｌ字状口縁の弥生土器甕。外面は細かい縦刷毛目、内面はナデで仕上げる。胎土には微砂粒が多い。



27図　19区甕棺墓実測図（縮尺１：20）



28図　19区甕棺墓出土遺物（縮尺１：６、１：２）

0074土坑（26図）　中央やや東寄りに位置する。一辺1.40～1.45m、深さ50cmの方形土坑である。

出土遺物(29図179・184・707)　179は縄文土器粗製深鉢。内湾ぎみに開く波状口縁の外面には条痕風の斜め刻目の文様帯を作る。内面は横の条痕。184は弥生土器甕。逆Ｌ字状口縁に近いが、外への張り出しは弱い。707は頁岩製の片刃石斧。身は湾曲する。頭部と側縁の一部を欠損する。残長7.3cm、刃幅1.2cm。若干の混入が認められるが、弥生時代中期前半の土坑である。

溝状遺構

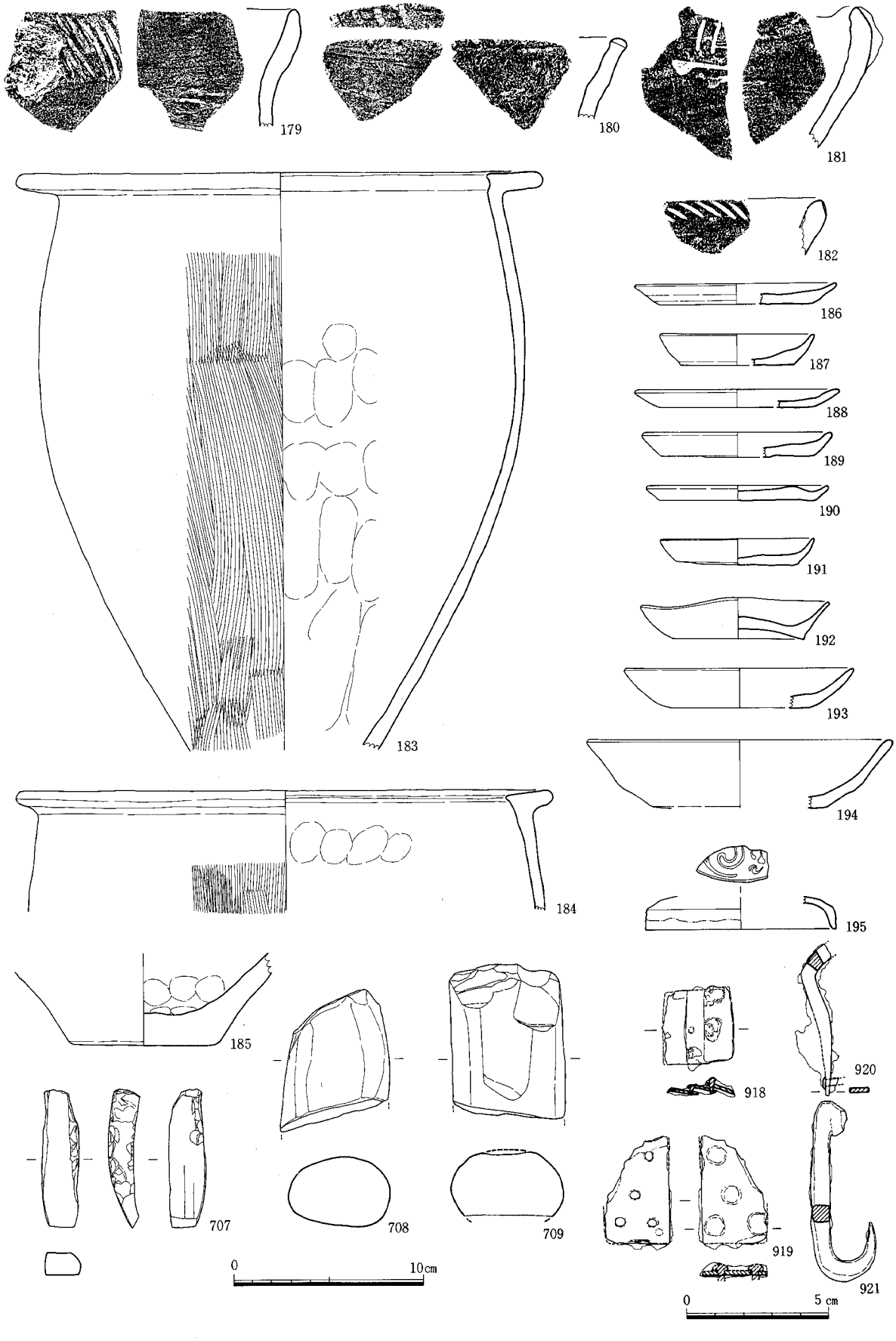
0082溝（26図）　調査区中央に数多く走る南北溝は近世以降のものである。明らかに古く、形を保っているのは西側に位置するこの溝と、これに切られる0093溝だけである。溝幅1.1m、深さ30cm前後で、北側にやや湾曲して走る。26図は土層断面。糸切り底の土師器杯・皿、天目碗などが出土。

0093溝　調査区西側を北西に走る溝。調査区内では東側肩部だけを検出した。確認できた深さは10cm程度。南側溝内には拳大の礫が堆積する。道路を隔てた22区ではこの溝は認められない。浅い自然河川か。縄文時代から中世までの遺物が出土した。溝の埋没時期は中世である。

甕棺墓

0152甕棺墓(27図・図版６)　調査区東南に位置する。周囲は開田で削平され、床土直下で半裁された甕棺を検出した。主軸をＮ－40°－Ｗとる単棺で、口を東南に向けて15度の傾斜で埋置される。口縁前面に長さ56cm、幅10cmの掘り込みがあり、木蓋の痕跡と考えられる。墓壙はほとんど棺ぎりぎりに掘られている。棺内北側３ヶ所で赤色顔料の小さなまとまりがみられた。また棺南側上面では青銅製品が出土した。

棺および出土遺物（28図178・917）　178は棺に用いた口径55.4cm、高さ60.9cmの弥生土器中型甕である。口縁は内傾するものの逆Ｌ字状に近く、中くぼみの端部にはヘラ状工具で刻目を入れる。口縁下には三角凸帯を２条めぐらす。底部は厚く、上げ底となる。外面は刷毛目、内面はナデで仕上げる。外面色調は赤褐色を主とし、内面は黒褐色となる。外面には煤が付着する。917は最大幅0.6cm、厚



29図　19区出土遺物実測図（縮尺１：３、１：２）

さ0.2cmの鉤状の青銅製品片である。端部は尖り気味となり、内側側面には稜を作る。棺上面の縁にかかって出土したもので、甕棺墓にともなうかは不明。残存状態からは新しい感じを受ける。

その他の出土遺物（29図180～182・185～195・708・709・918～921）

不整形土坑などから出土した遺物で、多くが混入品である。180～182は縄文土器深鉢。181は波状口縁の外面に刻目と突起による文様帯を作る。180は口縁端にヘラ状工具による刻目を施す。182は内外面を条痕で調整し、口唇にヘラ状工具で刻目を入れる。いずれも後期。185は弥生土器壺。胎土には砂粒が多く、また磨滅が著しい。中期。186～193は土師器皿。底部はすべて糸切りで、186～188には板状圧痕が残る。194は糸切り底の土師器杯。195は浮彫り花文を施す青白磁合子蓋。釉は青白色で、外面の天井から口縁半ばまでかける。708・709は玄武岩製太形蛤刃石斧片。ともに頭部側が残った折損品である。918～921は鉄製品。918は長さ4.0cm、幅2.2cm、厚さ0.1cmの鉄板を3枚重ね、鋲で連結したもの。小札であろうか。919は幅2.5cm、長さ4cm前後、厚さ0.15cmの長方形鉄板に5ヶ所（現状で確認できるのは4ヶ所）鋲を打つ。皮留金具か。920は鉸具。基部が扁平になり、横軸を通す。頭部は楕円形状に復元でき、断面は方形となる。921は長さ6.3cmの釣針。頭部は折り返す。軸の断面は方形である。

3－4－3　小結

本調査区では縄文時代後期、弥生時代中期、古墳時代および中世の遺物の出土を見たが、中世以降の開墾による撹乱で、それ以前の遺構はほとんど残っていなかった。0152甕棺墓は、8区の甕棺墓地から約100m南西に離れ、単独墓の可能性が高い。この甕棺の周囲には0069・0074土坑など同時期の遺構や、また弥生土器・石器なども出土しており、8区とは別の弥生時代中期初頭前後の遺構のまとまりを考えてよいのかもしれない。鉸具など鉄製品の出土は付近で古墳が壊され，その副葬品の一部が散乱した可能性もある。遺物は中世のものが最も多い。

3－5　21区の調査

16区西端から南に延びる幅2.5m、長さ60.5mの調査区で、水路新設に伴い調査を行った。発掘面積178m²。水田床土直下が礫もしくは黄白色土の遺構検出面となる。検出面標高は北側が33m前後、南側が32.8m前後と地勢とは逆に南側が低くなる。検出したのは若干のピットだけであり、遺構の広がりは希薄であった。遺物は縄文土器、中世土師器、白磁、青磁など合わせて小袋ひとつほどである。

3－6　22区の調査

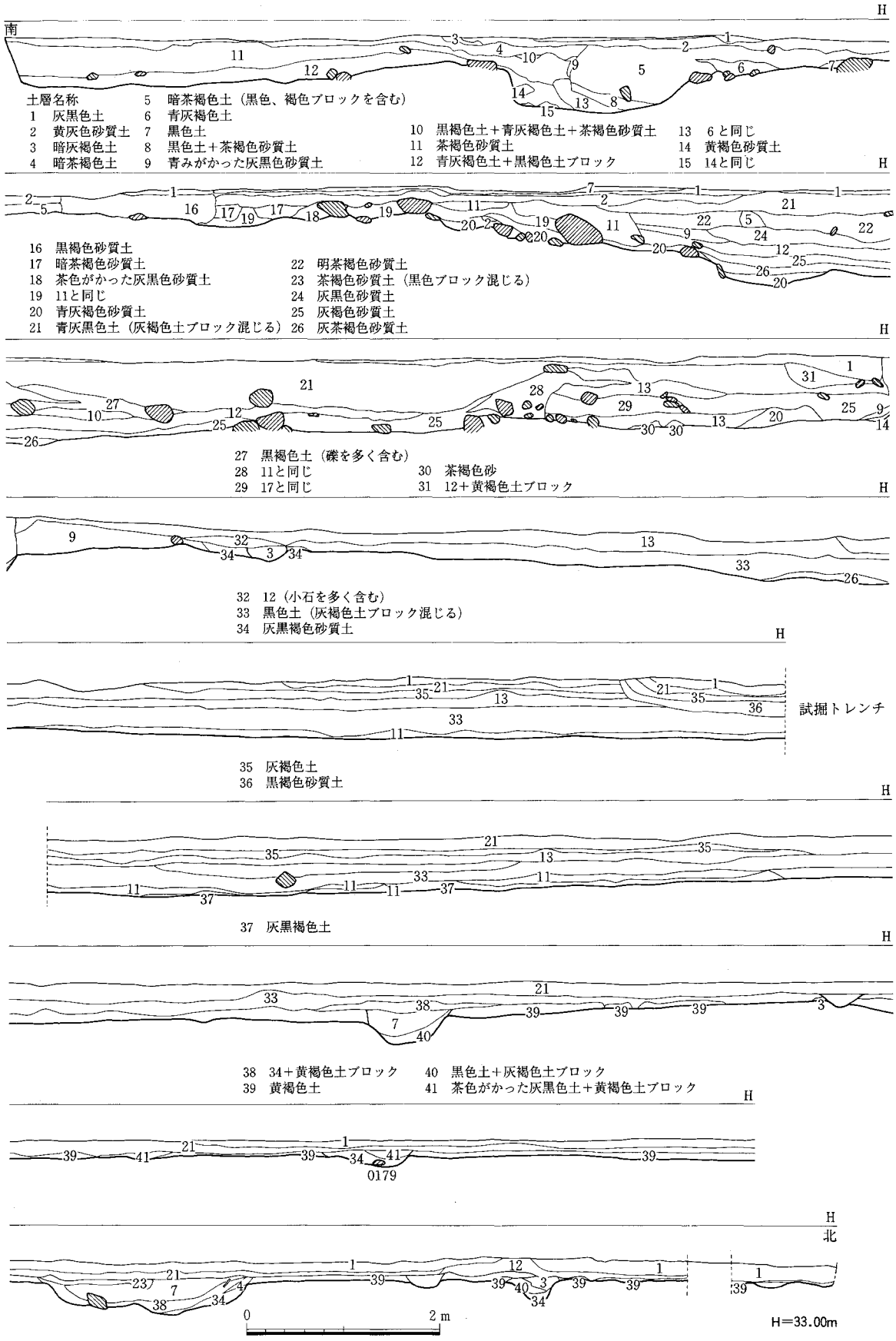
3－6－1　概要

23区東端から北に延びる幅2m、長さ80mの細長い調査区である。北端部は道路を挟み東側の19区と向かい合う。用水路新設に伴う調査で、発掘面積158m²。30図に西壁の土層断面を示した。水田床土の下に灰黒色土があり、その下が0186溝を境に北が黄褐色土、南が礫の遺構検出面となる。検出面の標高は北側が32.4m前後、南側が32.7m前後となる。調査区南側は近世以降の無秩序な掘り込みが西側に向かい広がる。検出した遺構は2基の土坑、9条の溝で、ほとんど調査区の北側に位置する。

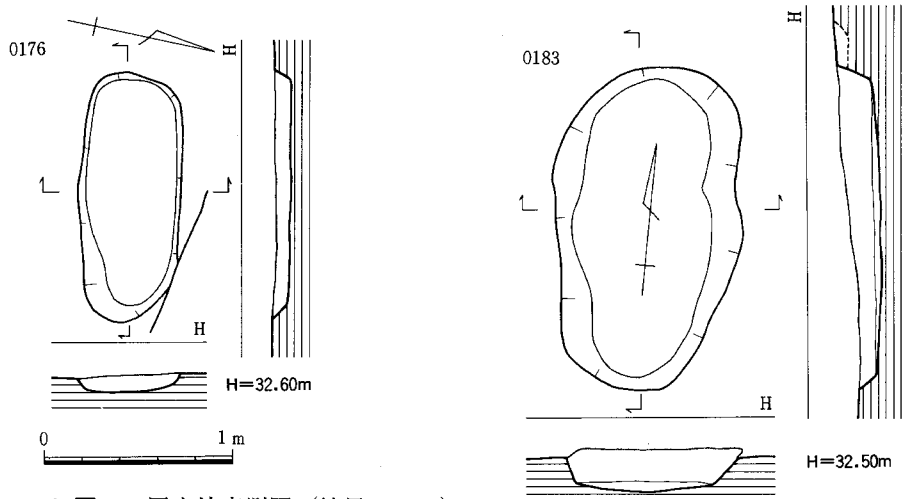
3－6－2　遺構と遺物

土坑

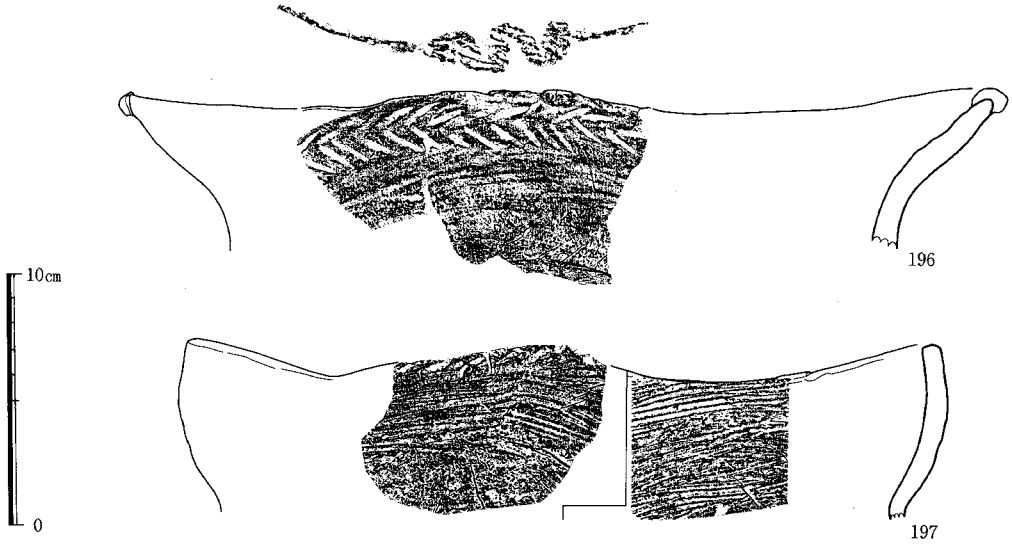
0176土坑（31図）　東西に長軸をとる長さ1.30m、幅0.55m、深さ10cmの楕円形土坑である。0175



30図　22区西壁土層断面実測図（縮尺１：60）



31図　22区土坑実測図（縮尺１：40）



32図　22区出土遺物実測図（縮尺１：３）

溝に切られる。出土遺物はない。

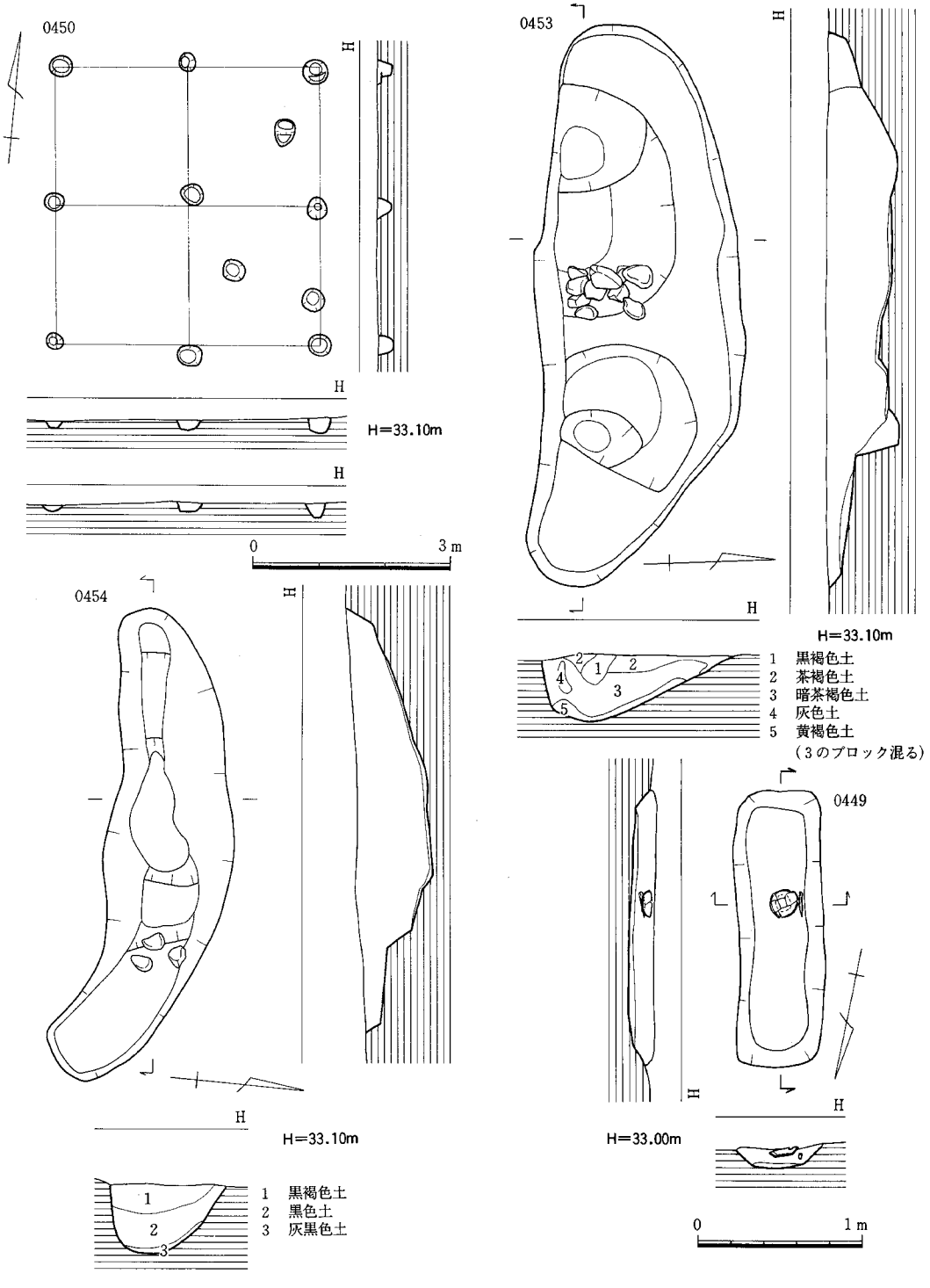
0183土坑（31図）　長軸を南北にとる長さ1.70m、幅0.95m、深さ23cmの楕円形土坑である。糸切り底の土師器細片などが出土。

溝状遺構

調査区中央から北側にかけて８条検出した。うち0198溝は近世以降の新しいものである。他は中世の溝で、0178溝（幅0.4m、深さ５cm）が長さ約4.6mの南北溝、また0197溝（幅0.65m、深さ５cm）が北西－南東溝で、それ以外の0175溝（幅0.4m、深さ５cm）、0176溝（幅0.5m、深さ25cm）、0179溝（幅0.9m、深さ15cm）、0185溝（幅0.8m、深さ30cm）、0186溝（幅1.0m、深さ20cm）はいずれも東西溝である。各溝の土層断面は30図にある。

その他の出土遺物（32図）

ともに南側撹乱部から出土した縄文土器である。196は口縁下にヘラ状工具による刻目の文様帯を作り、また口唇上にはW字状の粘土紐を貼付け、その上に疑似縄文を施す。北久根山式の系統であろう。197はキャリパー状形態で、口縁端部には刻目を入れ、また波状の頂点口唇部には小穴をあける。内

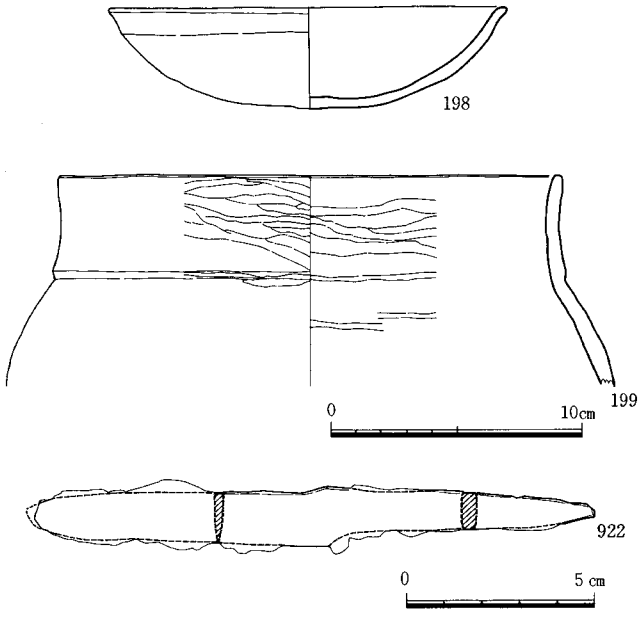


33図　23区掘立柱建物・土坑・土壙墓実測図（縮尺1：100、1：40）

外面とも調整は条痕。前期か。

3－6－3　小結

19区で検出した0093溝はこの区まで延びず、北側を中心に安定した遺構検出面をみた。しかし遺構は希薄で、東西方向を主体とした溝と2基の土坑の確認にとどまった。少ない出土遺物からみると遺構の時期は12～13世紀代と考えられる。また撹乱からの出土ではあるが、図示した2点の縄文土器はこの遺跡群ではまれな遺物である。



34図　23区出土遺物実測図（縮尺１：３、１：２）

３－７　23区の調査

３－７－１　概要

22区南端から西に延びる調査区で、その東は16区、西は27区となる。道路新設・用水路に伴う調査で、発掘面積は360㎡。耕作土と薄い床土直下が遺構検出面となる。検出面は中央から西側にかけての幅約11ｍに礫が露出し、その両側が黄褐色土となる。調査区東側は緩い段落ち、また西側は古河川となり、その間の幅約40ｍがほぼ平坦面となる。中央部分での標高は32.80ｍ前後。検出した遺構は掘立柱建物１棟、土坑２基、土壙墓１基とそれにピットである。ピットは東側に集中するが、0450掘立柱建物以外にまとまるものはなかった。

３－７－２　遺構と遺物

掘立柱建物

0450掘立柱建物（33図・図版６）　中央やや西寄りに位置する２間×２間の総柱建物である。東西幅200㎝、柱間は100㎝の等間。南北幅は210㎝、柱間は105㎝の等間。建物方位はＮ－６°－Ｗ。柱穴は径28～40㎝の円形で、深さは20㎝前後をはかる。柱穴からの出土遺物はない。

土坑

0453土坑（33図）　0454土坑とともに調査区東側北寄りに位置する。長軸を東西にとる長さ3.40ｍ、幅1.25ｍのやや北側がふくらむ楕円形土坑。深さ10㎝前後で平坦面を作り、その北側と南側にピットを掘り込む。北側のピットは二段になる。検出面からの深さは45㎝。縄文土器の細片が出土。

0454土坑（33図）　長さ2.85ｍ、幅0.78ｍの三日月状の平面を呈する。底面は溝状になり、その中央に段がつき深くなる。検出面からその部分までの深さ45㎝。出土遺物はない。

土壙墓

0449土壙墓（33図・図版７）　0450掘立柱建物の北に位置する。主軸をＮ－12°－Ｗにとる長さ1.66ｍ、幅0.53ｍの長方形土壙墓である。深さは16㎝、埋土は灰褐色砂質土。壙内中央西寄りに土師器と鉄刀子が副葬されていた。

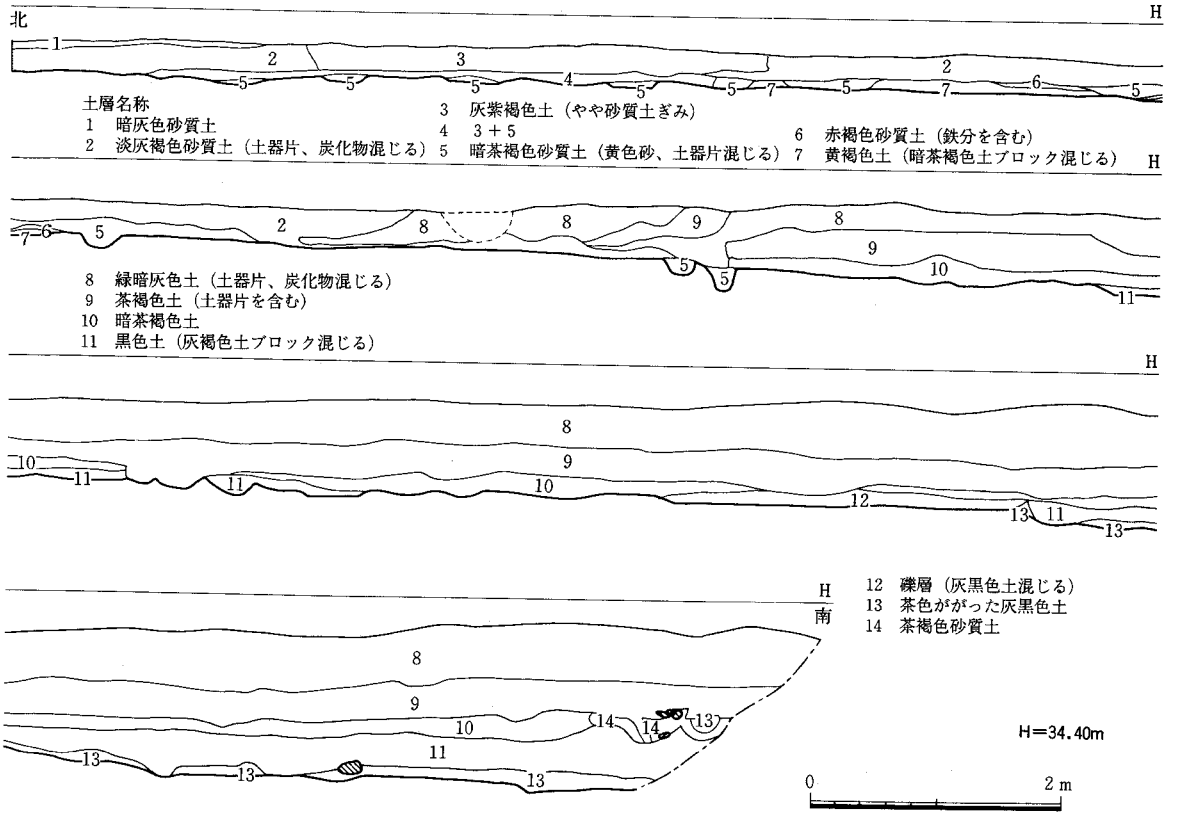
副葬遺物（34図198・922）　198は土師器杯。口径15.8㎝、高さ4.0㎝。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。922は切先を少し欠く鉄刀子。全長は15㎝前後であろうか。刃幅は1.3㎝。錆で関の辺りは不明瞭。他に埋土から糸切り底の土師器皿、龍泉窯系青磁碗片が出土した。

その他の遺物（34図）

199は土師器か。口縁は直立気味で、段がついて胴部が膨らむ。口縁部は内外面とも横のヘラ磨き、胴外面は横の板ナデである。口縁から内面は黒色、胴外面は褐色を呈する。0452ピットから出土。

３－７－３　小結

本調査区では遺構の密度は低く、掘立柱建物と土壙墓が主な遺構であった。土壙墓は12世紀後半代



35図　26区東壁土層断面実測図（縮尺１：60）

と考えられる。建物は出土遺物がなかったが、柱穴の覆土や規模から中世のものであろう。

３－８　24・25・26区の調査

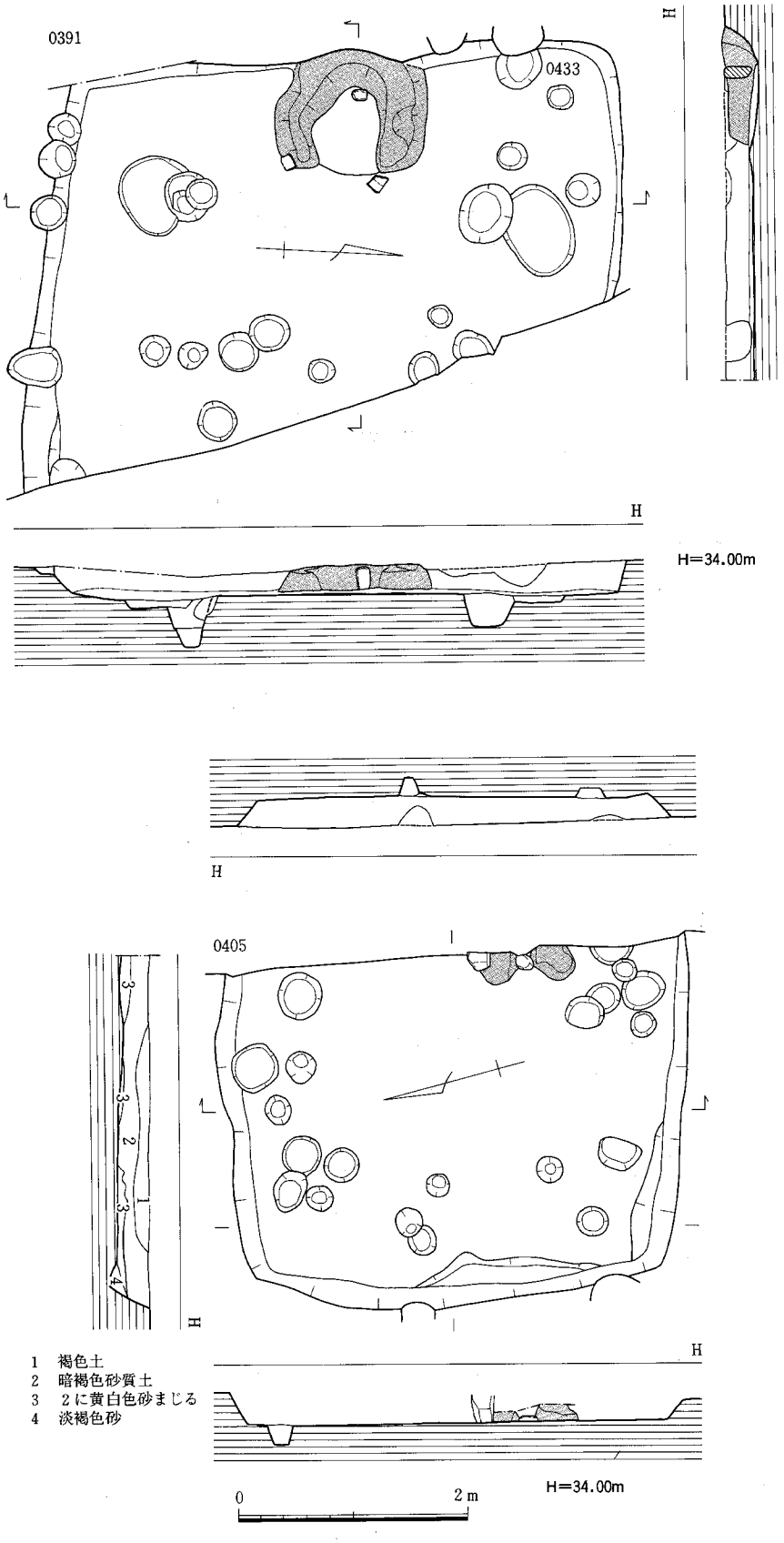
３－８－１　概要

17区の南側に延びる調査区である。道路新設などに伴う調査であったが、農道を避けたため、北から24区、その南が25区、25区と農道を挟んだ西側が26区とこまぎれの調査区となった。ここでは３区をまとめて報告する。発掘調査面積はあわせて687㎡。

24区は耕作土・床土直下が黄白色砂の遺構検出面となる。25区は検出面が西に、また26区では南側に傾斜する。35図に26区の調査区東壁の土層断面を示した。北側では床土の下が黄白色土の検出面、それが南に行くにしたがい間層を挟み、南端では地表からの深さが1.3m前後にもなる。検出面の標高は24区北端が33.70m前後、南端が33.75mとほぼ平坦であるのに対し、25区西端は32.65m、26区南端は32.80m前後と低くなる。

検出した遺構は竪穴住居２基、溝４条、鍛冶炉２基、それに多数のピットと方・楕円・長方形の礫が坑内に充満した多数の近世以降の土坑がある。溝にも礫が堆積するものが多く、４条とも土坑の時期と同じである。この土坑、溝は24区中央の大部分を占拠しており、これによって失われたそれ以前の遺構も数多いと考えられる。ピットは24区北側とその南側から25・26区で確認したが、建物としてまとめることはできなかった。集石土坑、溝については37図にその一部の断面を示すにとどめ、ここではそれ以外の遺構についてみていく。

３－８－２　遺構と遺物



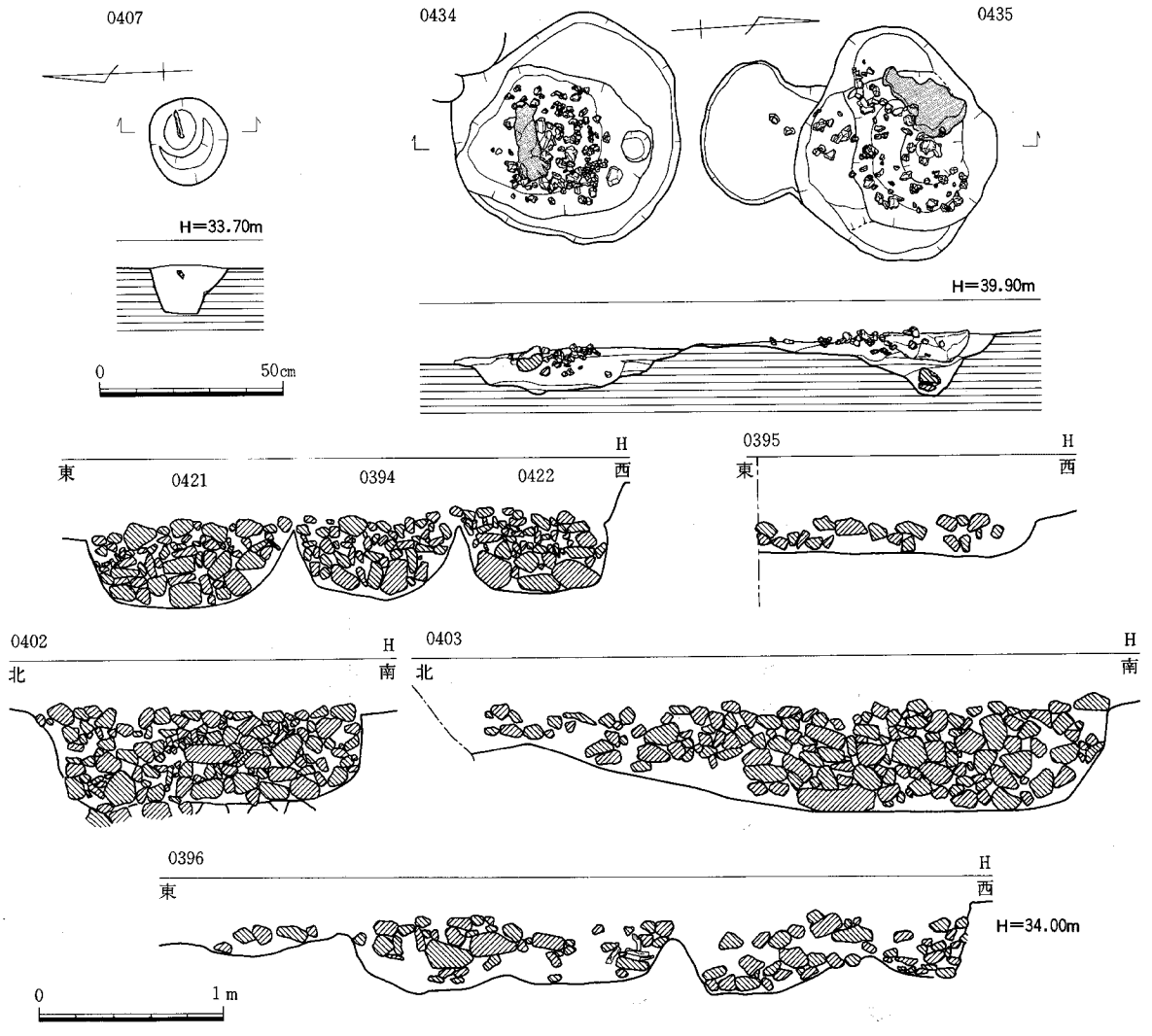
36図　24区竪穴住居実測図（縮尺１：60）

竪穴住居

0391竪穴住居（36図・図版７）　24区北端に位置する。南北幅4.95m、東西幅は不明だが、方形もしくは長方形の平面形に作る。壁高は残りの良いところで30cm。覆土は暗褐色から褐色の砂質土。平面U字形、焚口がくぼむ竈基底部が、西側壁中央に残る。竈本体は黄褐色砂質土で作られ、内面は焼け、内部には焼土と炭化物が充満する。また土器片、礫も混じる。主柱穴は竈を挟んだ２つのピットで、調査区外にあるだろう柱穴とあわせ、４本柱の建物構造となると推定される。検出した２つの柱穴の柱間は290cm。竈本体の中から鉄鎌が出土した。

出土遺物（38図200・923）　200は竈の中から出土した土師器甕底部。平底に近く、上部が内傾するところからみると、幅の割には高さはない。外面はナデ、内面はヘラ削り。923は鉄鎌。一部紛失してうまく接合しない。全長17.5cm、最大刃幅2.5cm、刃弦長14.5cmの曲刃鎌である。折り返しは錆により不明瞭。他に須恵器甕・高杯などが出土した。

0405竪穴住居（36図・



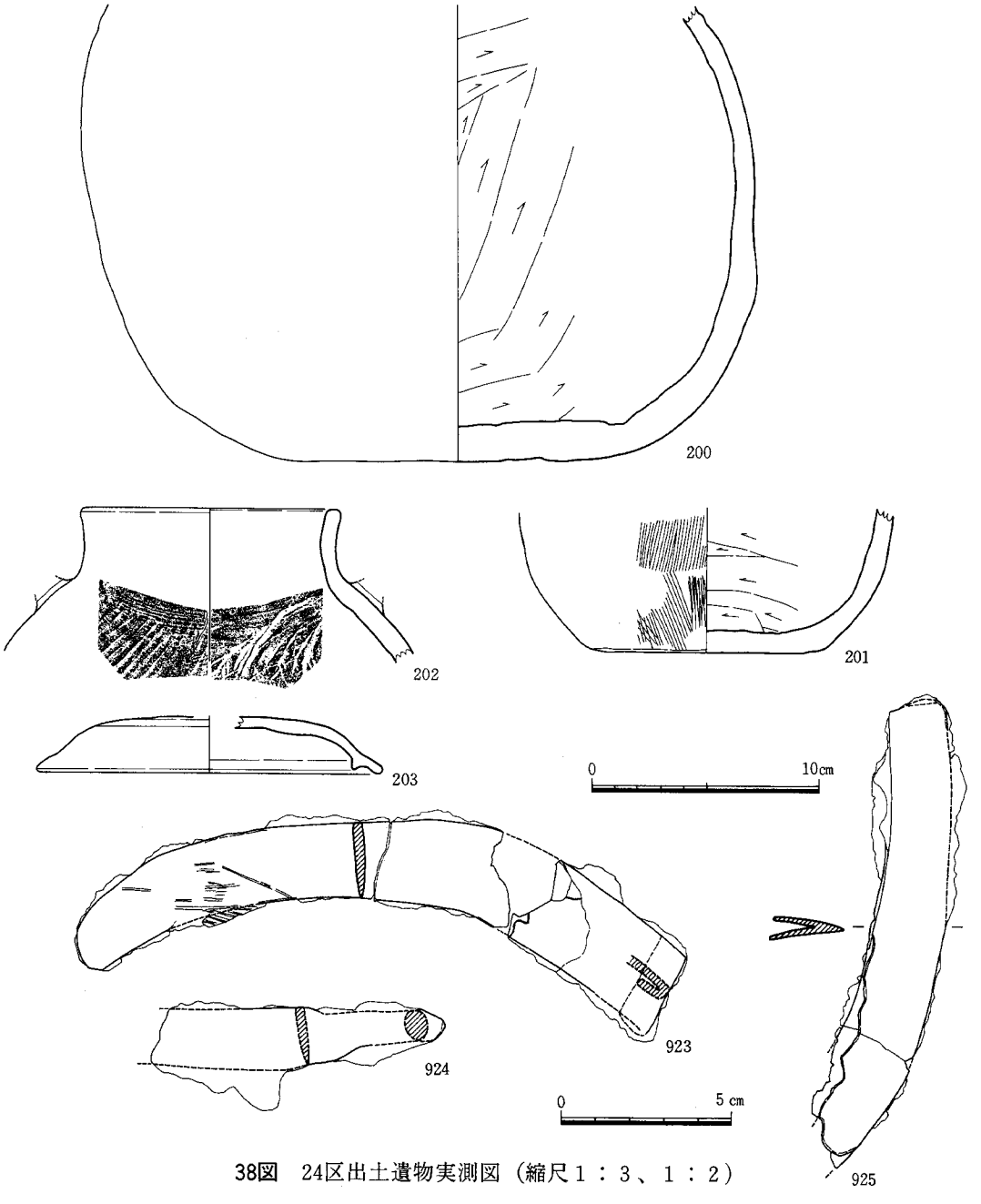
37図　24区ピット・製鉄遺構・集石土坑実測図（縮尺１：40、１：20）

図版８）　24区南側に位置する。南北幅4.08m、残存壁高27cm。方形の平面を呈するものであろうか。竈は東側壁に設けられたと考えられ、調査区境の床面南寄りの焼土塊がその位置を示すものかもしれない。床面には多くのピットが残るが、主柱穴は確定しがたい。

出土遺物（38図201～203・924）　201は土師器甕。平底で、外面は胴部から底面まで刷毛目調整を行う。二次焼成を受け、器表の一部が剝落する。202・203は須恵器。203は杯蓋。天井は扁平で、返りも小さい。202は直口壺。肩部には断面円形の耳が２ヶ所付く。胴外面は平行タタキ、内面には青海波の当て具痕が残る。924は錆が著しいが、鉄刀子であろう。刃幅は2.2cm前後。他に把手の付く土師器甕片、鉄釘などがある。

その他の遺構

0434・0435鍛冶炉(37図・図版８）　26区中央で南北に列んだ２基の鍛冶炉を検出した。２基は約0.6m離れ、北側の0435炉の南側には東西幅0.75m、深さ25cmの浅い0436土坑が続き、２基の間をうめる。南側の0434炉は南北幅1.24m、東西幅1.28mの不整円形をなし、深さ５cmで南側を除き最大幅30cmのテラスがめぐる。そこからさらに一段下がり、南北幅0.7m、検出面からの深さ23cmの底面となる。炉内中央南側のほぼテラスの深さに炉底が残り、その北側には小鉄滓が炭と共に広がる。炉内覆土は焼土、炭化物混じりの黒褐色土。北側の0345炉は南北幅1.10m、東西長1.28mの不整楕円形で、深さ10cm



38図　24区出土遺物実測図（縮尺１：３、１：２）

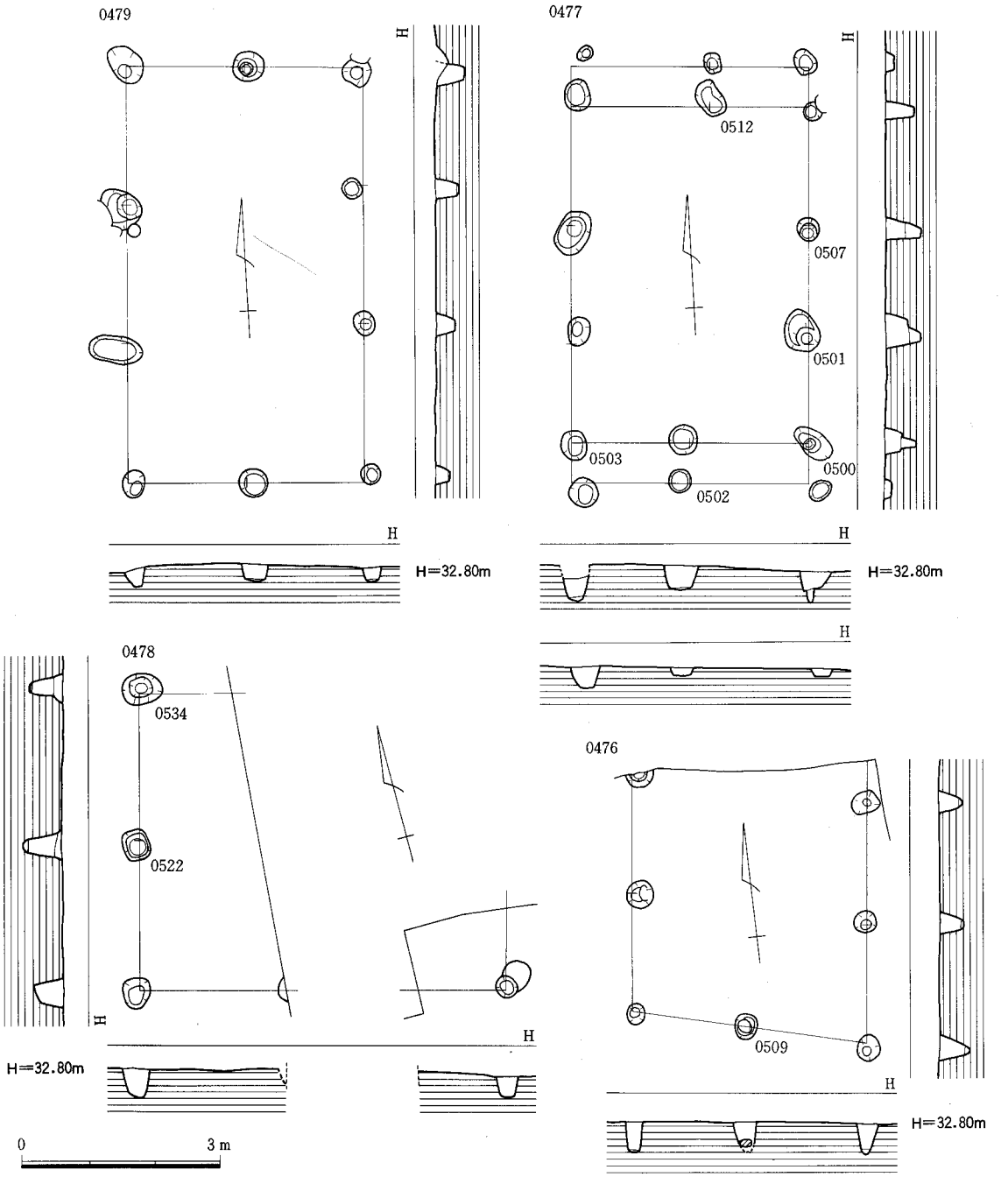
前後で、北側以外にテラスを作る。その中央はピット状となり、検出面から深さ35cmで底になる。西北側テラスのレベルに炉底が大きく残り、その東側には小鉄滓、炭が広がる。覆土は0434炉と同じ。ともに廃棄された鍛冶炉の基底部だけが残ったものであろう。0435から土師器甕細片が出土しただけで、中世以前であるのは確実だが、詳細は不明。

0407ピット（37図）　24区南側で検出した径0.48m、深さ27cmの２段掘りのピットである。覆土上部から鉄製鋤先が出土した。

出土遺物（38図925）　鉄製U字状鋤先の耳部片である。基部で幅1.7cm、刃部近くでの幅2.4cm。

３－８－３　小結

24区の大半が近世以降の集石土坑や溝に占められ、それ以前の主な遺構は南北両端の竪穴住居にとどまった。この住居も北端の0391が古墳時代後期で、17区の住居と一群をなすのに対し、南端の0403



39図　27区掘立柱建物実測図（縮尺１：100）

は奈良時代で、現状では単独である。はっきりとした中世の遺構はなかったが、集石土坑などに中世の遺物が混じっており、破壊された遺構が少なからずあったものと考えられる。26区では２基の鍛冶炉を確認した。この鍛冶炉の南側には0484溝が掘られており、鍛冶炉との関連が求められる。0403竪穴住居もあわせ考えれば、この一帯が奈良時代の鍛冶工房と考えることもできる。しかし、いずれの地区もここに中心があったとするよりも、外縁部といった感じが強い。中心は東側の現在の集落にあると考えられる。

３－９　27区の調査

3－9－1　概要

27区は23区と古河川を挟んだ西側にあたる。今次の調査区としては西北端に位置し、北側は安通遺跡群に接する。道路・水路新設ならびに田面の削平に伴う調査で、発掘面積は1191㎡。耕作土、床土の直下が遺構検出面となる。検出面はほぼ東半分が黄褐色土、西半分が礫混じりの砂となる。検出面の標高は東端で32.30m、西北端で32.50m、南端で32.45mと東側に向かいわずかに傾斜する。

検出した遺構は掘立柱建物4棟、土坑40基、溝状遺構12条などである。この他、ピットの中には柱痕跡をもつものや、列をなすものがみられ、まとめきれなかった建物が複数棟あるのは間違いない。これらの遺構は調査区中央に集中する。

3－9－2　遺構と遺物

掘立柱建物

0476掘立柱建物（39図・図版8）　北側が調査区外にかかり、南梁柱と桁の南2間分を確認したにとどまる。おそらくは2間×3間の南北棟であろう。建物方位はN－6°－E。梁行は360cm、柱間は180cmの等間。桁行の柱間は180cmの等間。現状では平行四辺形状の平面形態となる。柱穴は径32～40cm、深さ36～46cmの円形。0509柱穴から土師器片が出土した。

0477掘立柱建物（39図・図版8）　南北に庇をもつ2間×3間の南北棟である。建物方位はN－3°－E。梁行360cm、柱間は北梁の東1間が210cm、西1間が150cm、南梁では東西の柱間が北梁と逆になる。桁行は510cm、柱間は北から180cm・180cm・150cmとなる。南北の庇柱は身舎から60cm離れ、柱間は南北梁と同じになる。柱穴は径23～75cmの円・楕円形で、深さは身舎が23～59cm、庇が9～27cm。2段掘りになるものもみられる。

出土遺物（44図204）　土師器皿である。口径9.4cm、高さ1.8cm。底部は糸切り。0501柱穴から出土。他に龍泉窯系青磁碗片などが出土。

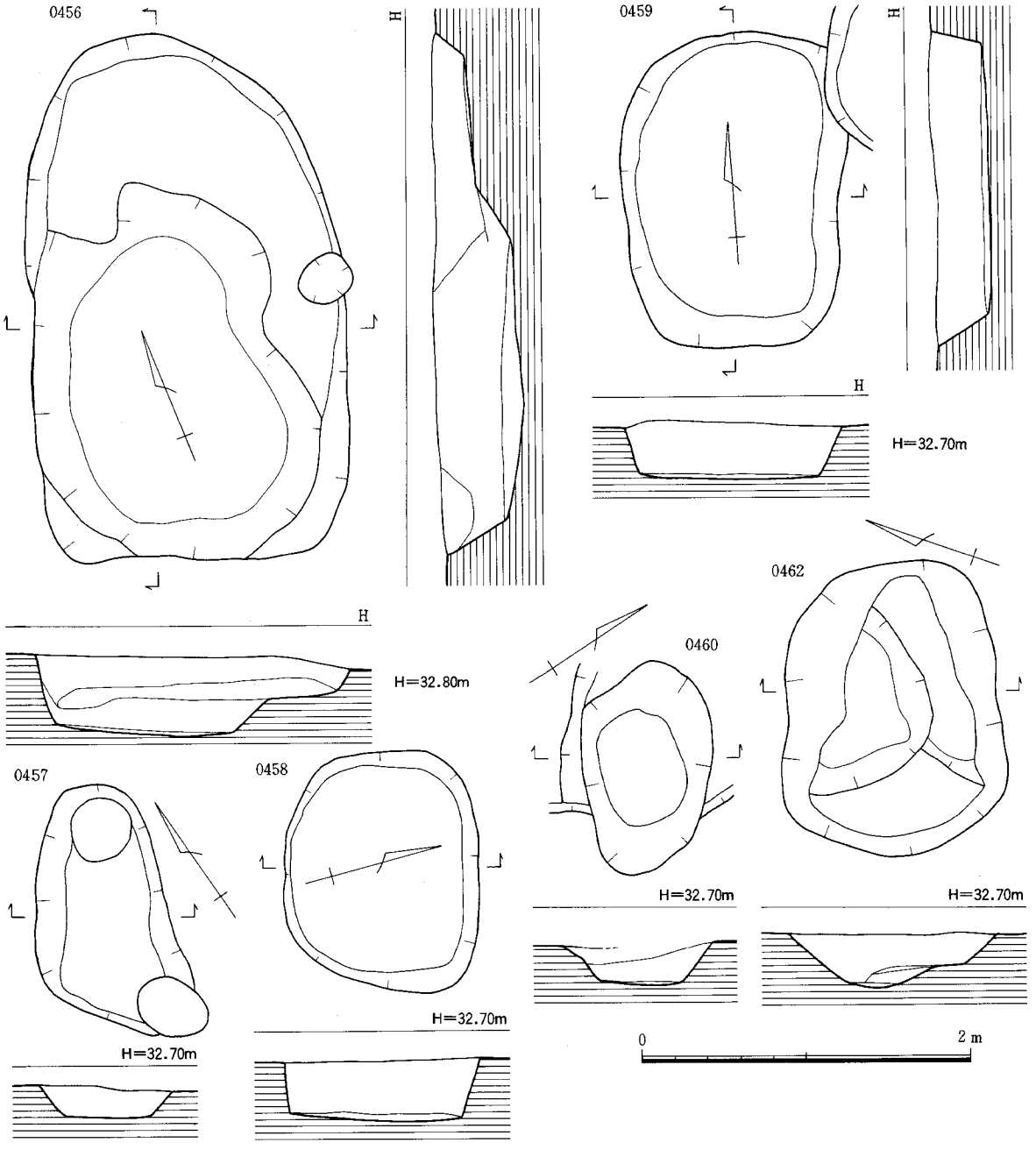
0478掘立柱建物（39図）　西側柱と南側柱の一部を検出し、2間×2間の東西に幅をもつ建物として復元した。建物方位はN－15°－E。西側柱全長は450cm、柱間は225cmの等間。南側柱は全長555cm、柱間は西から225cm・330cmとなる。東1間の幅が大きいことから、西側部分だけで1間×2間の南北棟としての復元も可能であろう。0522・0534柱穴から土師器椀などの細片が出土した。

0479掘立柱建物（39図・図版8）　建物方位をN－3°－Eにとる2間×3間の南北棟である。梁行360cm、柱間は180cmの等間。桁行は630cm、柱間は東桁が北から180cm・210cm・240cm、西桁が210cmの等間となる。柱穴は径30～60cmの円形で、深さは21～50cm。柱穴からは糸切り底の土師器皿片などが出土。この建物の西側に重複して1棟の掘立柱建物が立つ可能性がある。

土坑

40基近く確認し、そのうち27基を40～42図に示した。その多くが0461溝と0495溝に挟まれた調査区中央に位置し、掘立柱建物と重複したり（切られるものが多い）、近接する。0461溝の西側には0675・0679・0680・0683・0691の土坑が、0495溝の東側には0486・0488・0489・0491～0494の土坑が分布するが、中央部に比べその密度は低い。検出した土坑の平面は楕円形や長方形のものが多い。長さは0456・0679などのように3mに近いものもあるが、ふつう2mを越えず、また幅も1m前後のものが大半を占める。深さは0679が1mを越す他は、50cmに満たないものが大半で、10cm前後の浅いものもある。覆土は灰褐色土を主とし、一部の土坑には炭化物が混じる。出土遺物には縄文土器も見られるが、多くの土坑は糸切り底の土師器杯・皿、中国産陶磁器などをもっており、12世紀後半から13世紀の時期の所産と考えられる。紙幅の関係からここでは出土遺物についてのみ触れる。

0456土坑出土遺物（44図205～209）　205～207は土師器。205・206は口径8.4cm、高さ1.6cmの皿。207



40図　27区土坑実測図１（縮尺１：40）

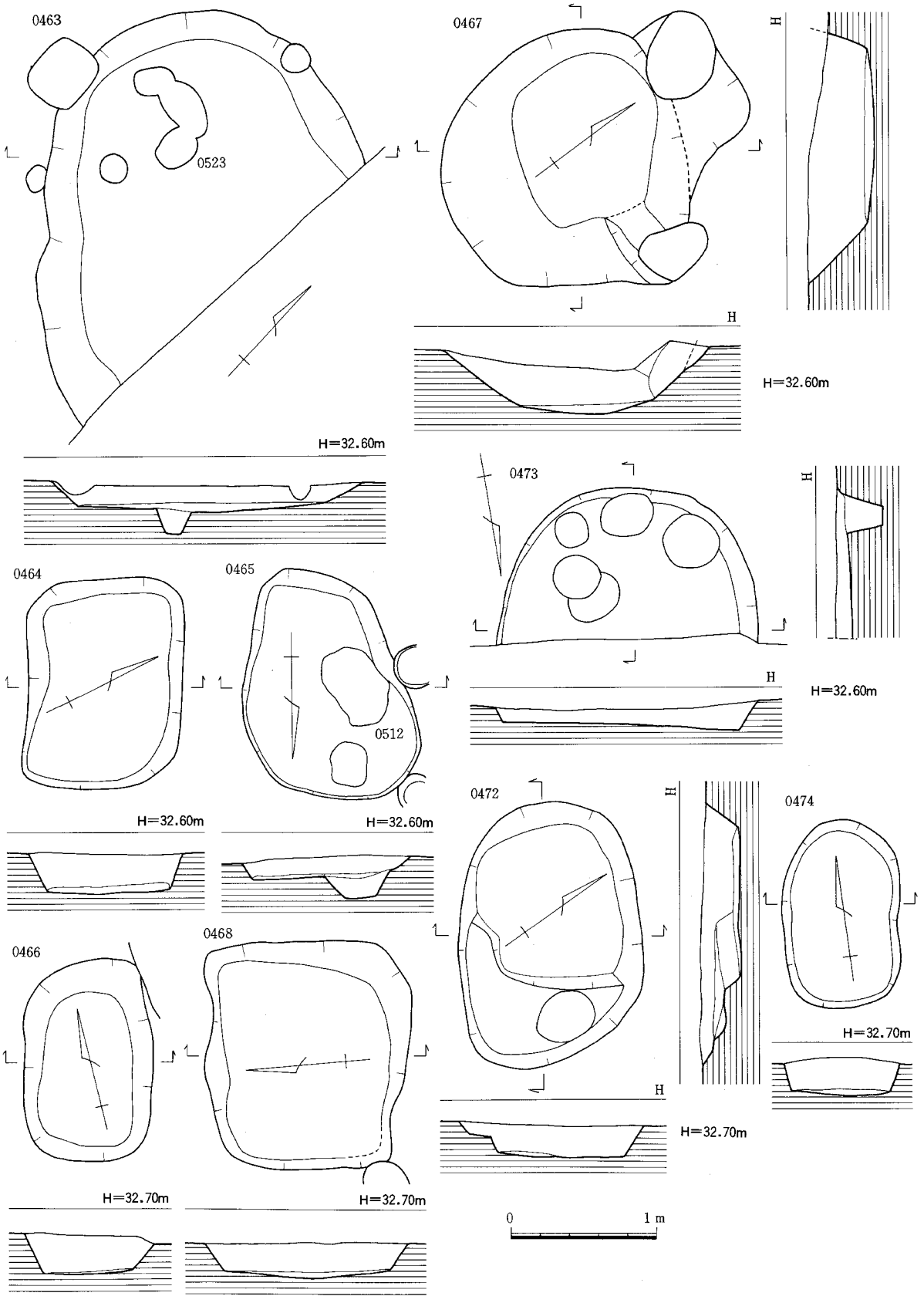
は口径11.4cm、高さ2.7cmの杯。３点とも底部は糸切り。208は龍泉窯系青磁碗。外面には鎬蓮弁を陽刻する。釉は緑褐色。209は土師質の摺鉢。５本一組の筋目が見られる。

0457土坑出土遺物（44図210・211）　210は土師器皿。口径8.5cm、高さ1.5cm。底部は糸切り。211は龍泉窯系青磁皿。見込みには櫛描の花文を施す。釉は灰緑色。

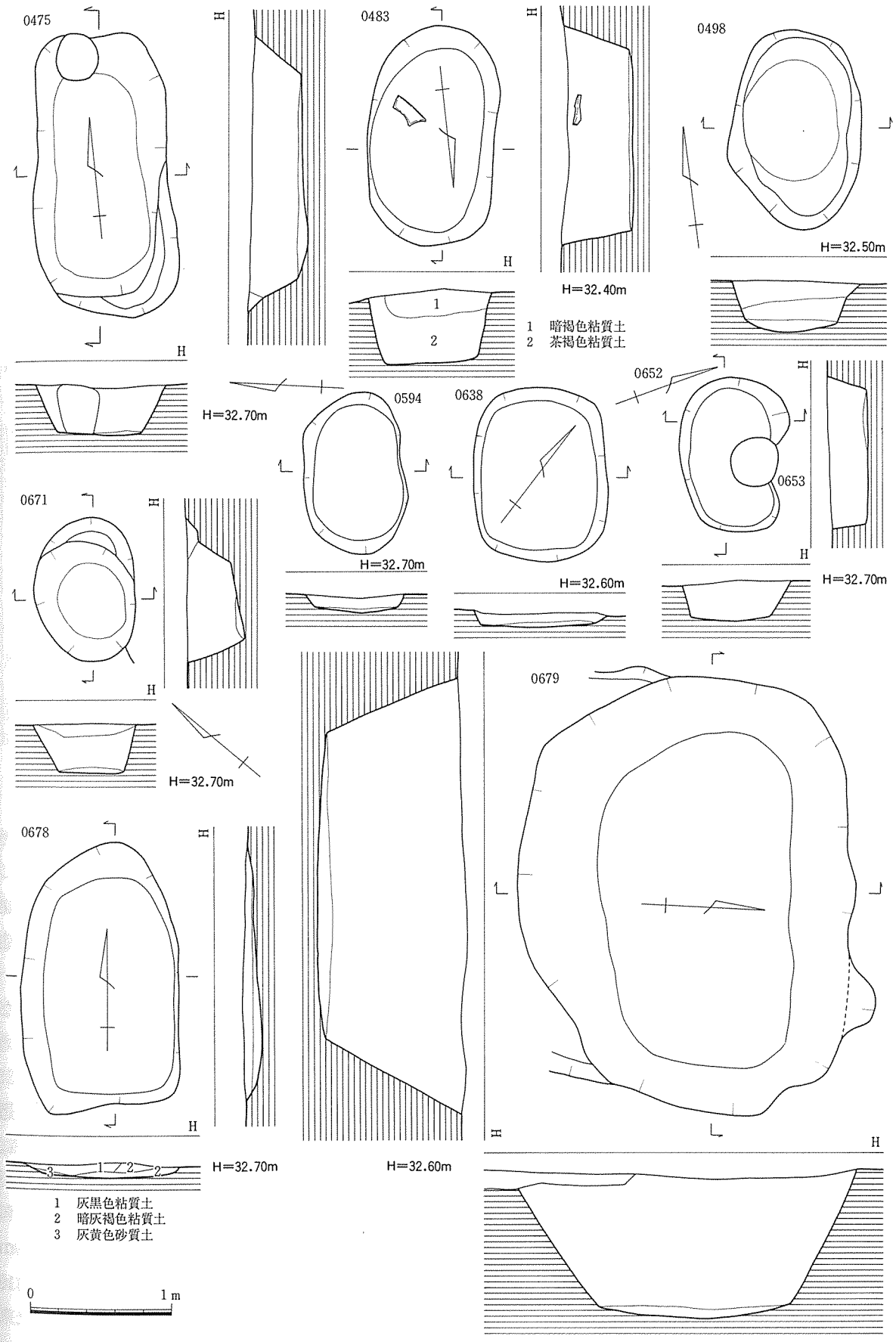
0458土坑出土遺物（44図212）　口径12.6cm、高さ2.6cmの土師器杯。底部は糸切り。

0460土坑出土遺物（44図213・710）　213は口径9.5cm、高さ1.1cmの土師器皿。底部は糸切りで、板状圧痕が残る。710は幅5.4cm、厚さ1.4cmの粘板岩製の砥石。一端部は折損する。三面を砥面として利用している。他に青磁片などがある。

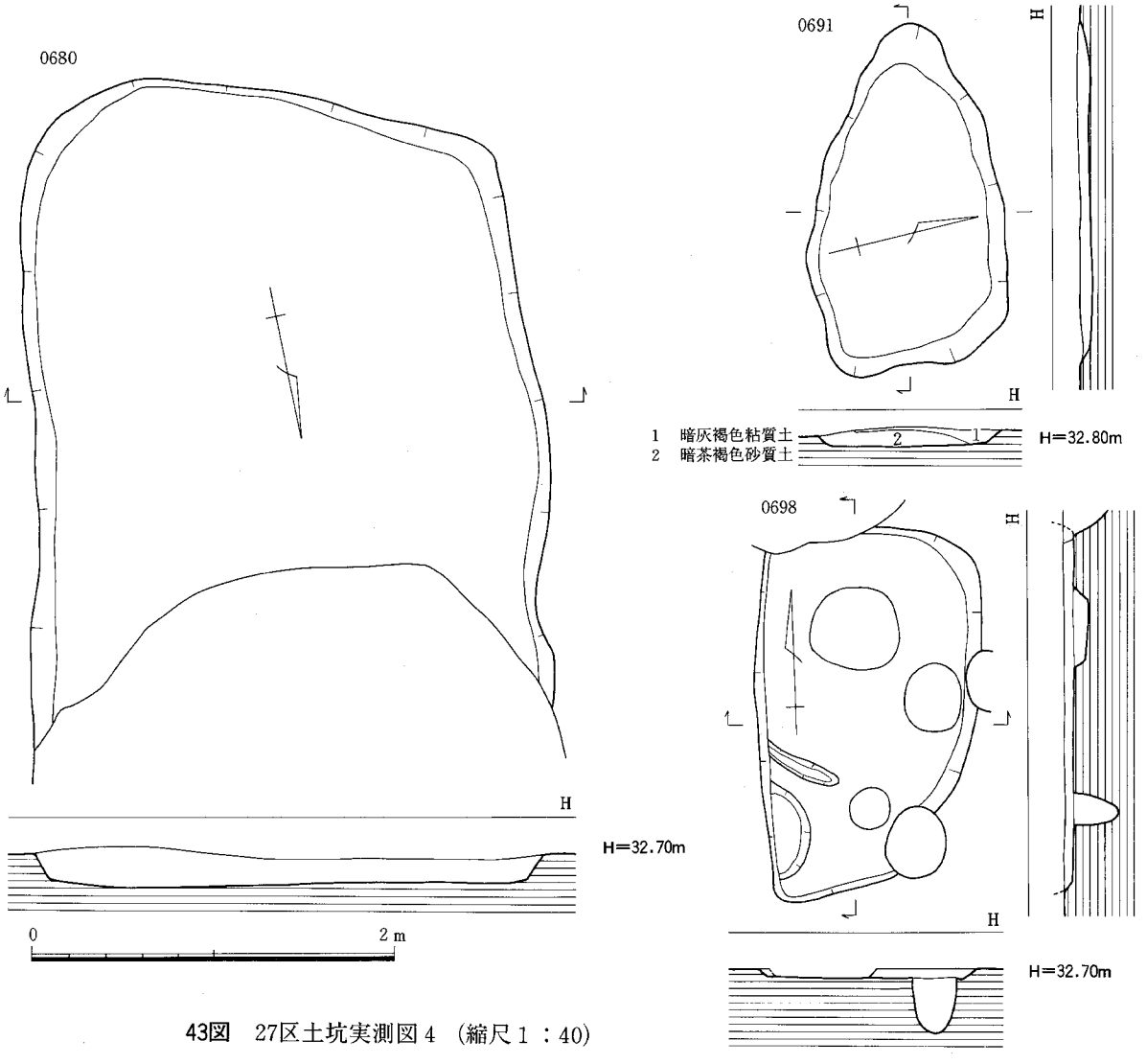
0462土坑出土遺物（44図214）　中国産青磁小碗片。玉縁で、釉は淡緑色。他に糸切り底の土師器皿、白磁などが出土。



41図　27区土坑実測図２（縮尺１：40）



42図　27区土坑実測図３（縮尺１：40）



43図　27区土坑実測図４（縮尺１：40）

0467土坑出土遺物（44図215・216）　215は龍泉窯系青磁碗か。釉は濃い緑色で、厚く施される。216は土師質の土鍋。内面口縁下には沈線を入れる。外面は板状工具によるナデ。その上を煤が覆う。他に糸切り底の土師器皿、白磁、緑釉陶器などが出土。

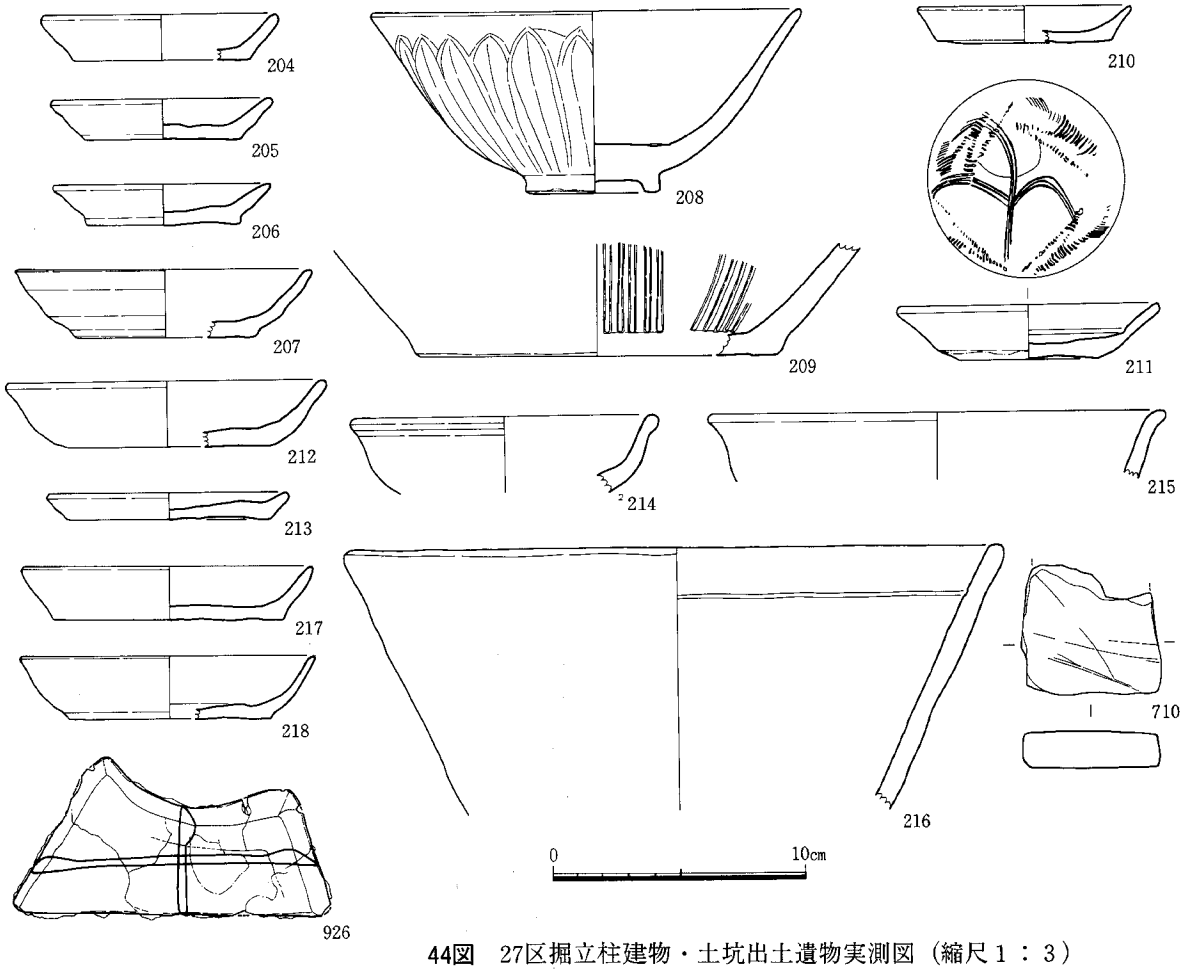
0468土坑出土遺物（44図217）　口径11.4cm、高さ2.1cmの土師器皿。底部は糸切り。他に青磁片などがある。

0470土坑出土遺物（44図218）　口径11.6cm、高さ1.5cmの土師器皿である。底部は糸切り。

0483土坑出土遺物（44図926）　土坑上部から出土した鉄製品である。長さ12.5cm、幅6.2cmの上辺が内湾する台形を呈する。下辺を除き縁が隆起する。隆起部の厚さ0.5cm前後、他は0.3cmの厚さとなる。本体は長辺に対し内反りとなる。下辺に刃は付いていない。

溝状遺構・古河川

主な溝としては西から0681（幅1.3m、深さ11cm）・0461（幅1.4m、深さ30cm）・0798（幅1.05m、深さ６cm）・0499（幅0.5m、深さ12cm）・0495（幅1.0m、深さ８cm）があり、東端から南端には幅10m、深さ45cm以上の0484古河川が続く。また調査区中央には掘立柱建物や土坑などと錯綜して北北東に走る0621（幅0.45m、深さ９cm）・0626（幅0.30m、深さ16cm）・0651（幅0.4m、深さ４cm）・0799（幅0.2m、深さ７cm）などの小溝が見られる。これらの溝の覆土は0461が灰黒色粘質土、他は灰褐



44図　27区掘立柱建物・土坑出土遺物実測図（縮尺１：３）

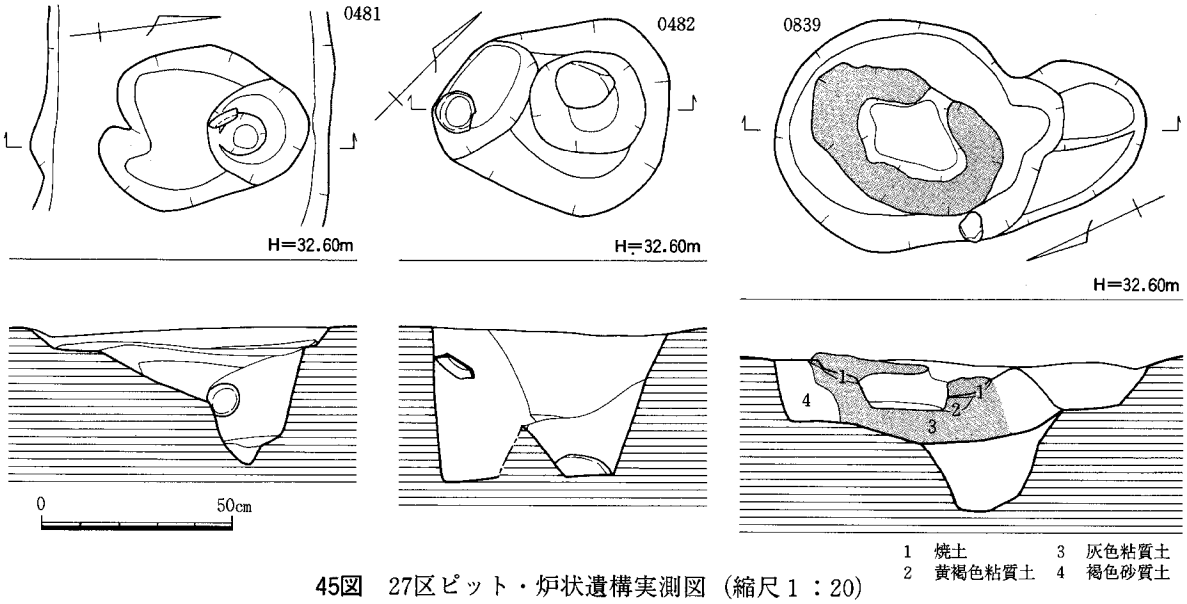
色の砂質土か粘質土となる。この0461だけが唯一調査区を南北に抜ける溝で、南端部分は東に曲がる。この溝と0495溝との間に建物や土坑が集中することから、この２条の溝は集落を区画する溝であった可能性が高い。

0461溝出土遺物（46図219～230）　219～225は土師器。219～223は皿で、口径8.8～9.1㎝、高さ0.9～1.0㎝の小皿と口径11.7～12.6㎝、高さ1.6～2.6㎝の大皿（221～223）に分かれる。底部は糸切りで、223には板状圧痕が残る。224・225は口径16.2～16.5㎝、高さ2.7～3.1㎝の杯。底部はヘラ切りで、板状圧痕が残る。226・227は白磁。226は碗で、内面口縁下と見込みに沈線を入れる。釉は淡い灰緑色。227は平底の皿。釉は緑をおびた淡灰色。228・229は龍泉窯系青磁碗。228は外面に蓮弁を陽刻し、内面見込みには複数の渦文を施す。青みを帯びた釉を畳付と外底以外に厚く施す。表面は氷裂が著しい。229も外面に蓮弁を陽刻し、見込みには「福」の字を陰刻する。青みを帯びた緑色釉。230は天井に菊花文を施す青白磁の蓋。外面は青白色の釉で、表面には気泡が多い。内面の返り部分は露胎、その内側は灰白色の釉がかかる。

0499溝出土遺物（46図232）　青磁碗である。青緑色の釉をかけ、内底と外底を掻きとる。掻き取られた部分は黒褐色となる。灰白色の粗い胎で、底部は焼きがあまく淡赤褐色となる。ベトナム産か。

その他の遺構

0481ピット（45図）　0478掘立柱建物西北側に位置する。径23㎝、深さ30㎝の二段掘りの円形ピットで、南側から祭祀に用いられたと考えられる土師器皿が出土した。



45図 27区ピット・炉状遺構実測図（縮尺１：20）

出土遺物（46図233）　口径8.7㎝、高さ1.7㎝の土師器皿。底部は糸切り。

0482ピット（45図）　0478掘立柱建物の西側に位置する。31×25㎝の楕円形状のピットで、深さ42㎝。北東側を別ピットに切られる。南側から祭祀に用いられたと考えられる土師器皿が出土した。

出土遺物（46図234・図版８）　口径8.7㎝、高さ1.7㎝の土師器皿。底部は糸切り。調整が粗い。

0839炉（45図）　0477掘立柱建物の中に位置する。長さ0.7m、幅0.6m、深さ15㎝の南北に長軸をとる楕円形の掘り方をもつ。南側はピットに切られる。その中央西寄りの55×35㎝の範囲に灰褐色粘質土を詰め、上面をくぼませ炉とする。炉上面部分は赤く焼け締まる。糸切り底の土師器皿、青磁などが出土した。

その他の出土遺物（46図235～249・711）

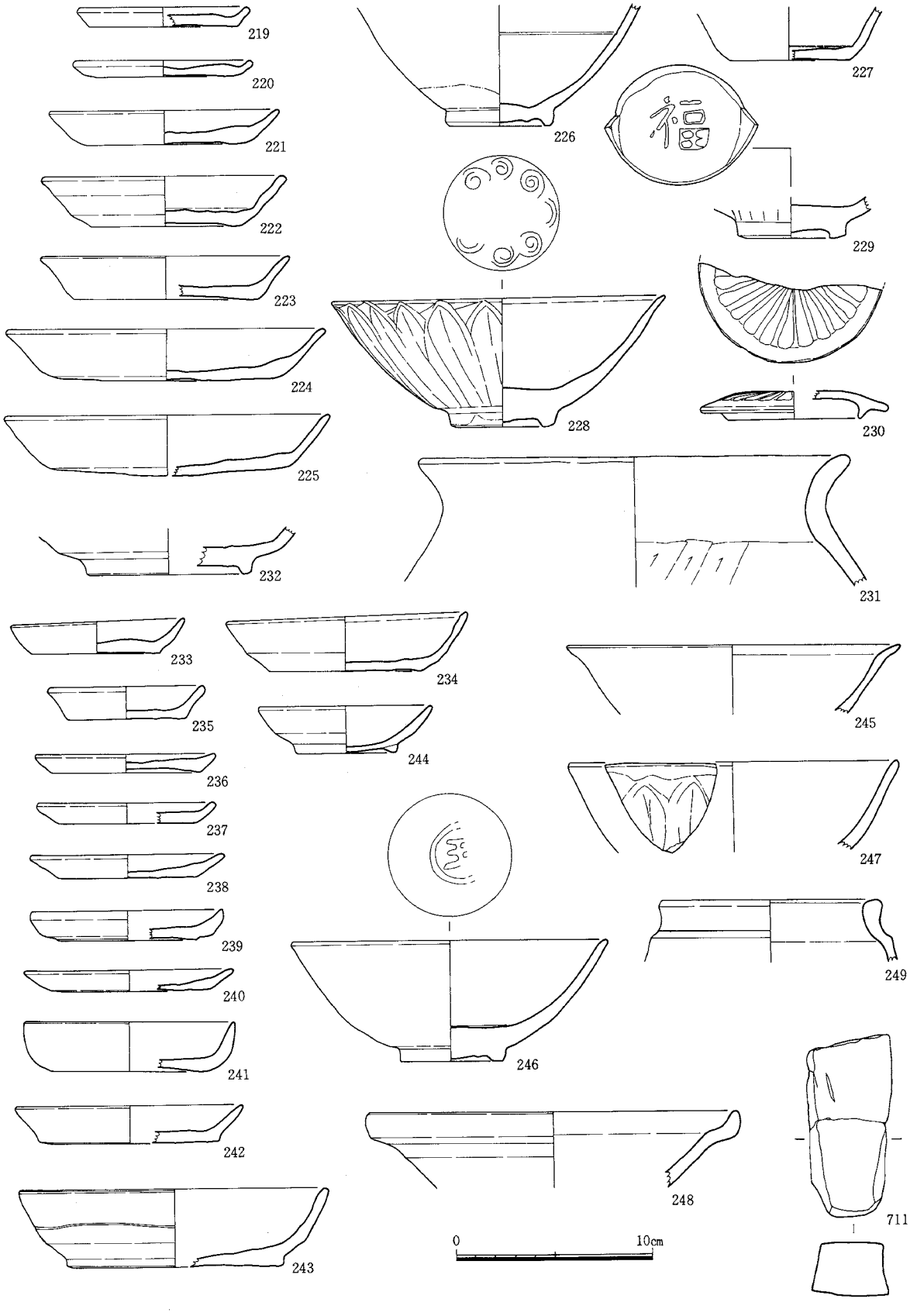
235～244は土師器。242までは皿。238・240はヘラ切りで、238には板状圧痕が残る。他は糸切り。243は口径14.6㎝、高さ4.0㎝の杯。底部は糸切り。244は高台が付く皿。底部はヘラ切り。245は白磁碗。灰褐色の釉がかかる。246～248は龍泉窯系青磁。246は碗で、見込みに「王」のスタンプがある。釉は褐色。247は外面に蓮弁を陽刻する碗。釉は緑褐色。248は盤の口縁片。釉は暗緑色。249は褐釉陶器の壺。口縁には砂目跡がある。淡褐色の釉が薄くかかる。711は一端が折損する砥石。広い上下二面を砥面として利用する。いずれもピットからの出土である。

３－９－３　小結

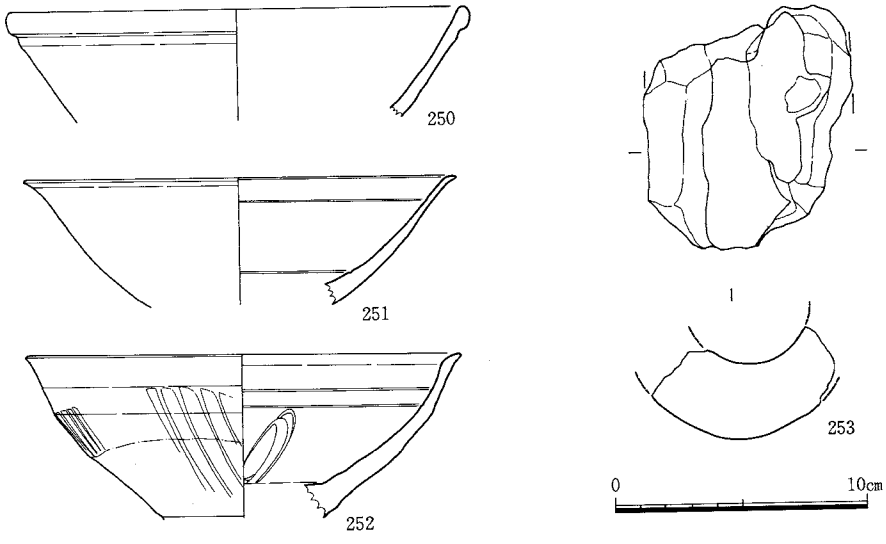
本区の調査では12世紀代の集落を検出した。この集落は溝で区画された中に営まれている。確認できたのは４棟の掘立柱建物と性格が不明な土坑などにすぎなかったが、まだまとまる建物が相当数あるのはまちがいない。現状では建物の配置から２時期以上の建て替えが想定される。本区はこの集落の南側部分を検出しただけで、さらに北へ延びるものと考えられる。

３－10　28・29区の調査

27区南端から水路新設のため幅5.5～6.0mの調査を行った。途中の水路を避けたため２ヶ所に分かれ、北側を28区、南側を29区とした。発掘面積は28区が273㎡、29区が139㎡。耕作土・床土直下が礫あるいは黄褐色土の遺構検出面となったが、28区北端で27区から続く古河川の南肩を検出した以外、



46図　27区溝・ピット・その他の出土遺物実測図（縮尺１：３）



47図　30区出土遺物実測図（縮尺１：３）

主だった遺構はなかった。28区北側の標高32.50m前後、29区南側で32.90m前後となる。

３－11　30区の調査

28区西側に位置する。道路新設のため調査を行った。発掘面積268㎡。耕作土・床土直下の標高32.80m前後が黄白色シルトの遺構検出面となる。調査区東端で古河川（0700）の西肩を検出した。この河肩の南側には小さな溝が３条とりつき、また肩から中に向い径70cmから拳大までの礫が投げ込まれている。河底もほぼ現れており、肩からの深さは40cm程度である。27区の古河川につながるものか。この河川以外の遺構はなかった。

0700出土遺物（47図250～253）　250･251は白磁碗。250はⅣ類、251はⅤ類で、共に明るい灰色の釉を施す。252は同安窯系青磁碗Ⅲ類。茶味をおびた緑色の釉で、胎は粗い。253は鞴の羽口片。内外面ともに焼ける。

３－12　31区の調査

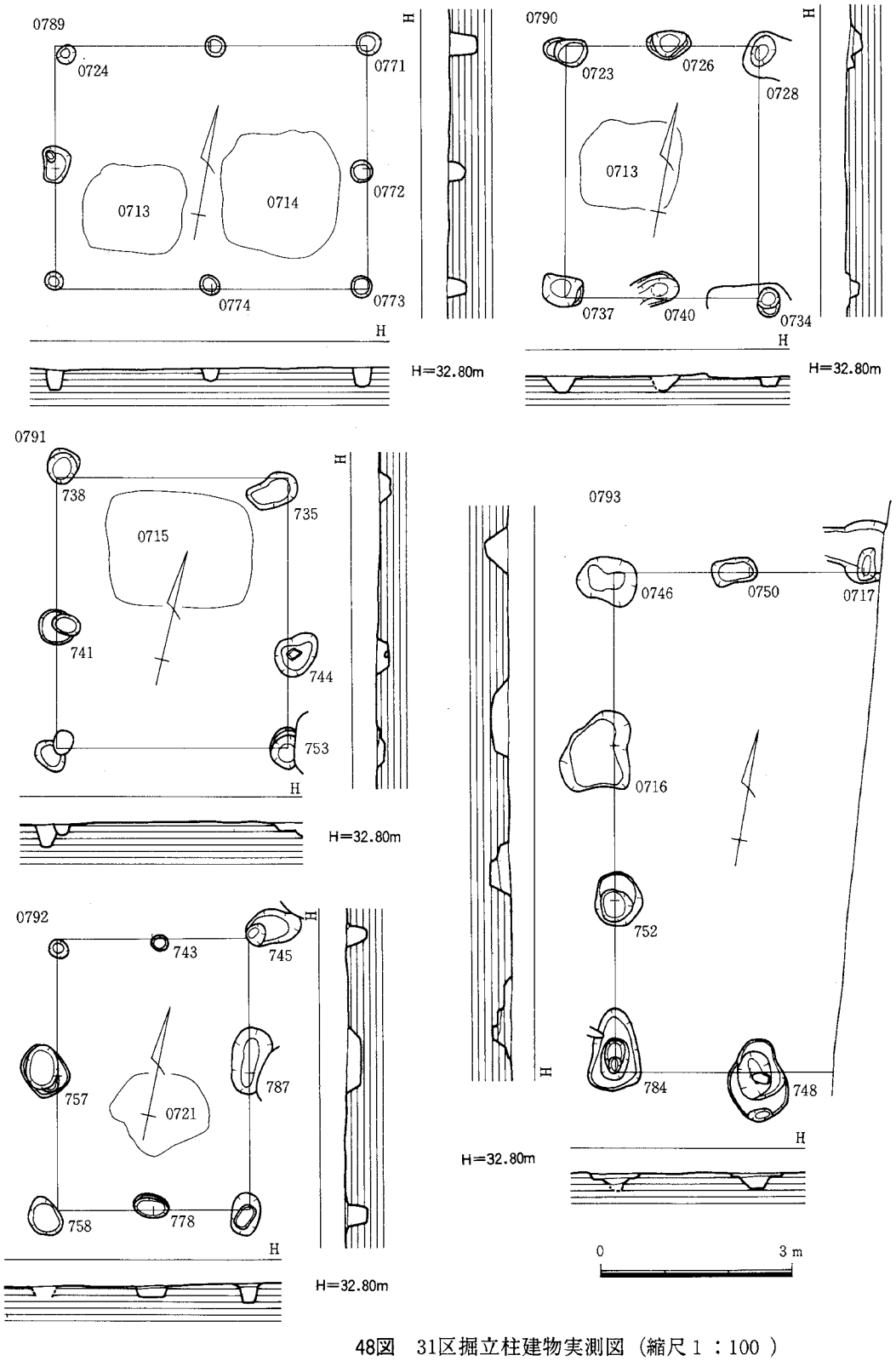
３－12－１　概要

31区は３次調査の中では西寄りに位置しており、30区の南西側にあたる。室見川から170mほど離れている。当区は道路及び水路の構造物について調査を行った。遺構面は耕作土直下の粗砂まじりの黄褐色土である。標高は北側で32.96m、南側で33.21mを測る。本調査により掘立柱建物・土坑・溝・ピットを検出した。遺構は調査区の中央部に集中している。北端には東西に延びる礫層が地表面に現れており、遺構が薄くなっている。南側は中世の河川を1 条検出したが、こちらも礫群があり、明確な遺構は検出できなかった。

３－12－２　遺構と遺物

掘立柱建物

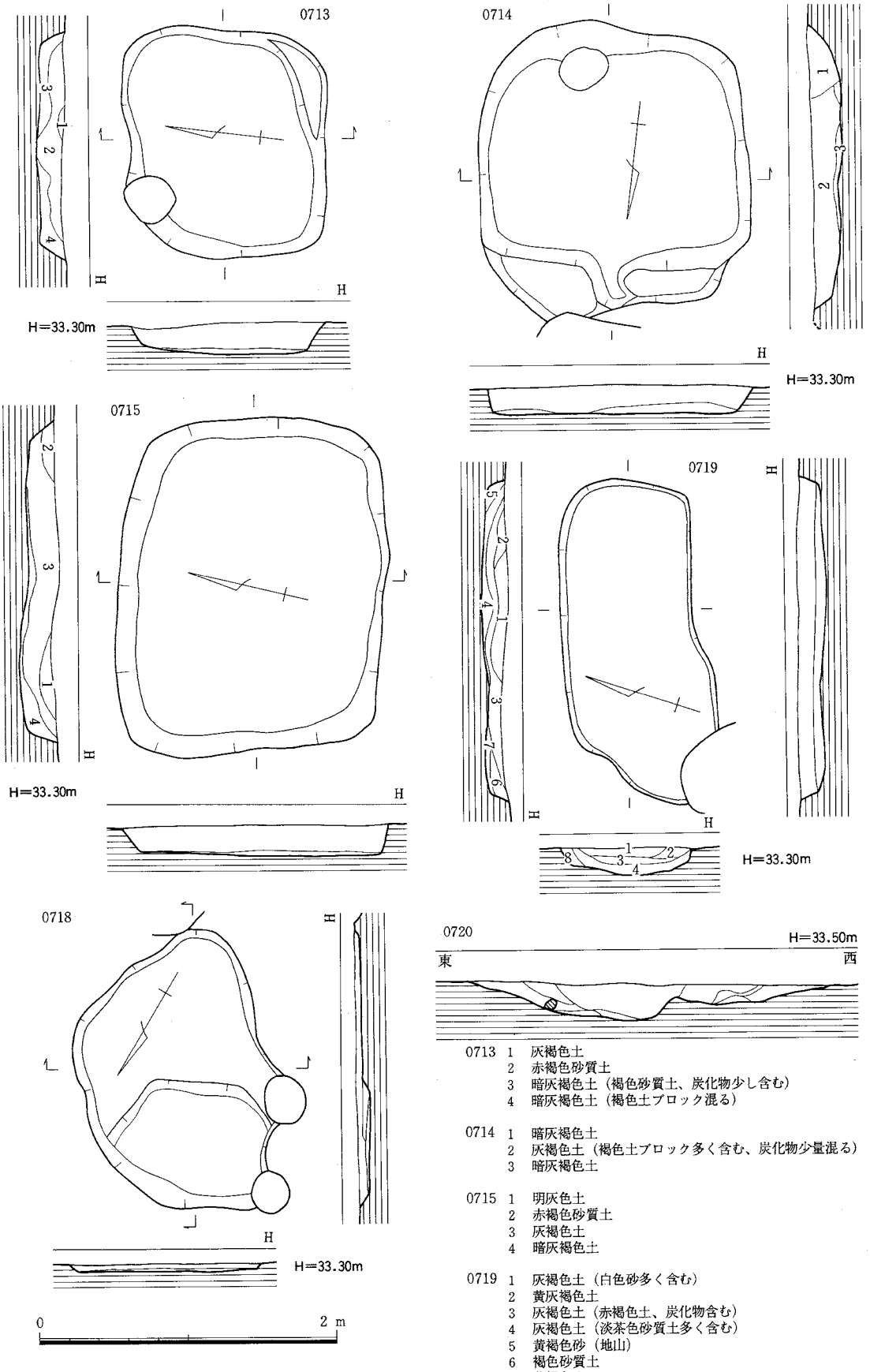
0789掘立柱建物（48図・図版９）　調査区の北西寄りに位置する。２間×２間の東西棟の側柱建物で主軸をＮ－78°－Ｅにとる。梁間は全長390cm、桁行は全長300cm、柱間は150～195cmである。柱穴はほ



48図　31区掘立柱建物実測図（縮尺１：100 ）

ぼ円形を呈し、径28～53cm、深さ47cmを測る。0713と0714の土坑が建物内に含まれる。出土遺物なし。

0790掘立柱建物（48図）　0789掘立柱建物と重なっている。切り合いからは前後関係は不明である。現状では１間×２間であるが、調査区の西側に延びる可能性もある。主軸は0789とほぼ同じでN－10°



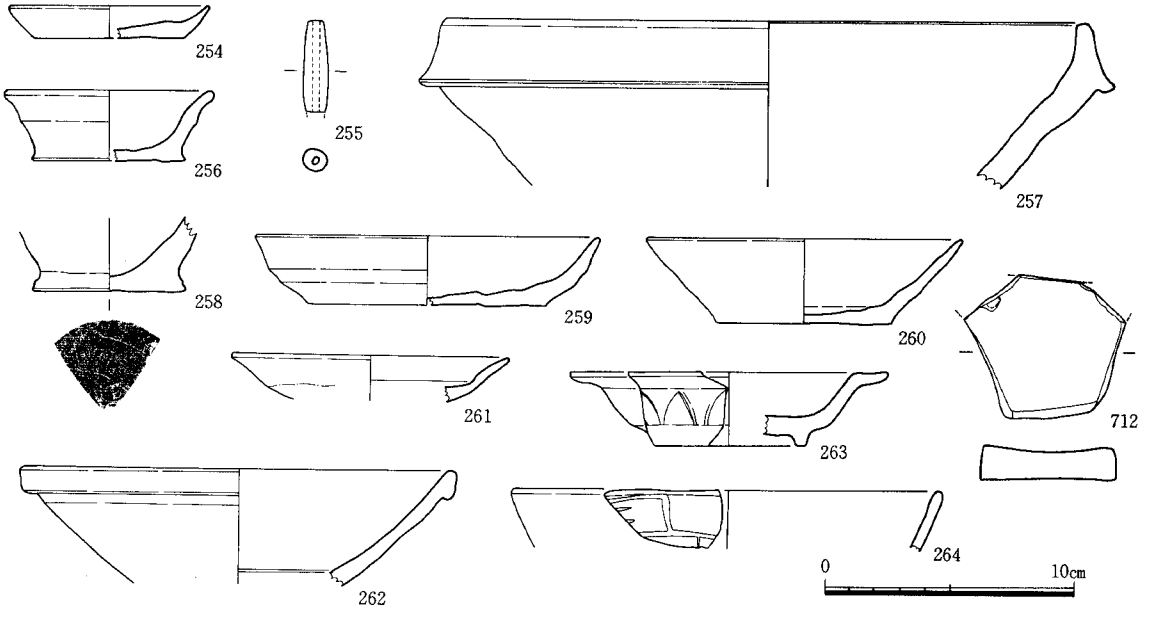
0713 1 灰褐色土
2 赤褐色砂質土
3 暗灰褐色土（褐色砂質土、炭化物少し含む）
4 暗灰褐色土（褐色土ブロック混る）

0714 1 暗灰褐色土
2 灰褐色土（褐色土ブロック多く含む、炭化物少量混る）
3 暗灰褐色土

0715 1 明灰色土
2 赤褐色砂質土
3 灰褐色土
4 暗灰褐色土

0719 1 灰褐色土（白色砂多く含む）
2 黄灰褐色土
3 灰褐色土（赤褐色土、炭化物含む）
4 灰褐色土（淡茶色砂質土多く含む）
5 黄褐色砂（地山）
6 褐色砂質土
7 茶褐色土
8 茶褐色土（黄褐色砂を多く含む）

49図　31区土坑・溝実測図（縮尺１：40）



50図　31区出土遺物実測図（縮尺１：３）

－Wにとる。梁間は全長390cm、桁行は全長360cmを測り、柱間は150～390cmである。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し34cm～63cm、深さ21cmを測る。

出土遺物（50図254・255）　0746柱穴から糸切りの土師器小皿と、0728柱穴から土錘が出土した。土師器小皿は口径7.8cm、底径5.9cm、器高1.3cmを測る。褐色を呈し焼成は良好である。土錘は褐色を呈し、長さ3.6cm、幅１cm、重さ３ｇを測る。

0791掘立柱建物（48図）　調査区北西寄り0789・0790掘立柱建物の南側に位置する。１間×２間の側柱建物で主軸をＮ－13.5°－Eにとる。梁行は全長419cm、桁行は全長360cmを測る。柱穴は円形・楕円形を呈し、径41～63cm、深さ31cmを測る。0715土坑を伴う可能性がある。

出土遺物（50図256）　0735柱穴から土師器の皿が出土した。口径7.9cm、底径5.9cm、器高2.8cmを測る。暗褐色を呈し、焼成は良好である。

0792掘立柱建物（48図）　調査区北西寄り、0791掘立柱建物に北側半分が重なっている。ピットの切合いから0791より新しいと思われる。建物は２間×２間の側柱建物で主軸をＮ－11°－Eにとる。梁行は全長420cm、桁行は全長300cmを測る。柱穴は円形もしくは楕円形を呈し、径25～89cm、深さ33cmを測る。0721土坑を伴う可能性がある。出土遺物なし。

0793掘立柱建物（48図）　調査区東側に位置する。建物が調査区外に延びているため全容は明らかではないが現状では２間×３間の側柱建物で、主軸方向をＮ－10°－Eにとる。梁行は全長740cm、桁行330cmを測る。柱間は180 ～270cmである。柱穴は楕円形を呈し、径62～124cm、深さ32cmを測る。

出土遺物（50図257）　北東端の0717柱穴から備前の摺鉢が出土した。口径25.3cmを測る。

土坑

0713土坑（49図）　調査区の北西寄りに位置する。長径152cm、短径131cmの隅丸方形を呈し、深さ22cmを測る。断面は逆台形を呈す。主軸はＮ－83°－Eをとる。0789・0790掘立柱建物と軸方向を同じくしており、どちらかに伴うと思われる。出土遺物なし。

0714土坑（49図）　調査区の北寄り、0713土坑の東側に位置する。長径198cm、短径181cmの隅丸方形を呈し、深さ21cmを測る。主軸をＮ－７°－Eにとる。断面逆台形を呈し、北側に幅33cm、底面からの高さ８cmほどのテラスをもつ。0789掘立柱建物に伴う可能性がある。出土遺物なし。

0715土坑（49図）　調査区の北西寄りに位置する。長径224cm、短径179cmの長方形を呈する。断面は逆台形を呈し、深さ21cmを測る。主軸をN－77°－Eにとる。覆土は灰褐色を呈す。0791掘立柱建物に伴う可能性がある。土器片が出土したが、形にならなかった。

0718土坑（49図）　調査区の東寄りに位置する。不整楕円形を呈し、長径189cm、短径139cm、深さ８cmを測る。主軸をN－30°－Wにとる。断面浅い皿状を呈し、北側に段落ちをもつ。出土遺物なし。

0719土坑（49図）　調査区の東寄り、0718土坑の北側に位置し、0794掘立柱建物の柱穴に切られている。長径219cm、短径99cmの長方形を呈し、深さ17cmを測る。主軸をN－72°－Eにとる。断面逆台形を呈す。覆土は灰褐色を呈す。出土遺物なし。

溝状遺構

0720溝　調査区の南寄りに位置する。やや蛇行しながら東西に流れている。覆土は褐色土で最下層に粗砂を含む。

出土遺物（50図258）　縄文土器深鉢が出土した。底径5.9cm。外面底部に木葉痕がみられる。小片であるが糸切り底の土師器杯・皿、白磁、青磁なども出土している。

その他の出土遺物（50図259～264・712）

259は土師器坏である。口径13.8cmを測る。褐色を呈す。260は土師器坏である。褐色を呈し、口径12.5cmを測る。糸切り。262は白磁碗Ⅳ類である。口径16.7cm。灰色を呈す。261は青磁の皿である。釉は灰緑色で透明感を持つ。胎土は灰色。263は青磁小鉢である。灰緑色を呈し、外面には蓮弁を施す。264は青磁碗である。口径約16.7cm。オリーブ色を呈し外面口縁下に雷文を施す。712は砥石である。割れ口以外は使用痕が観られる。重さ71ｇ。261・264が表採、他はピットより出土。

３－12－３　小結

古代から中世の集落の一部である。土坑を伴うと思われる掘立柱建物が５棟を検出した。重複・切り合いがあるので同時期には存在できないが、方位・規模共によく似ているので短期間のあいだに建てられたと思われる。

３－13　32区の調査

32区は31区の西側に位置する。当区は水路の構造物について調査を行い、調査区は東西に細長い。遺構面は耕作土直下の31区から続く礫群である。調査の結果、調査区の南西端で近世のものと思われる旧河川を1条とその周辺でピット状遺構を5つ検出した。遺物の出土はほとんどなかった。

３－14　33区の調査

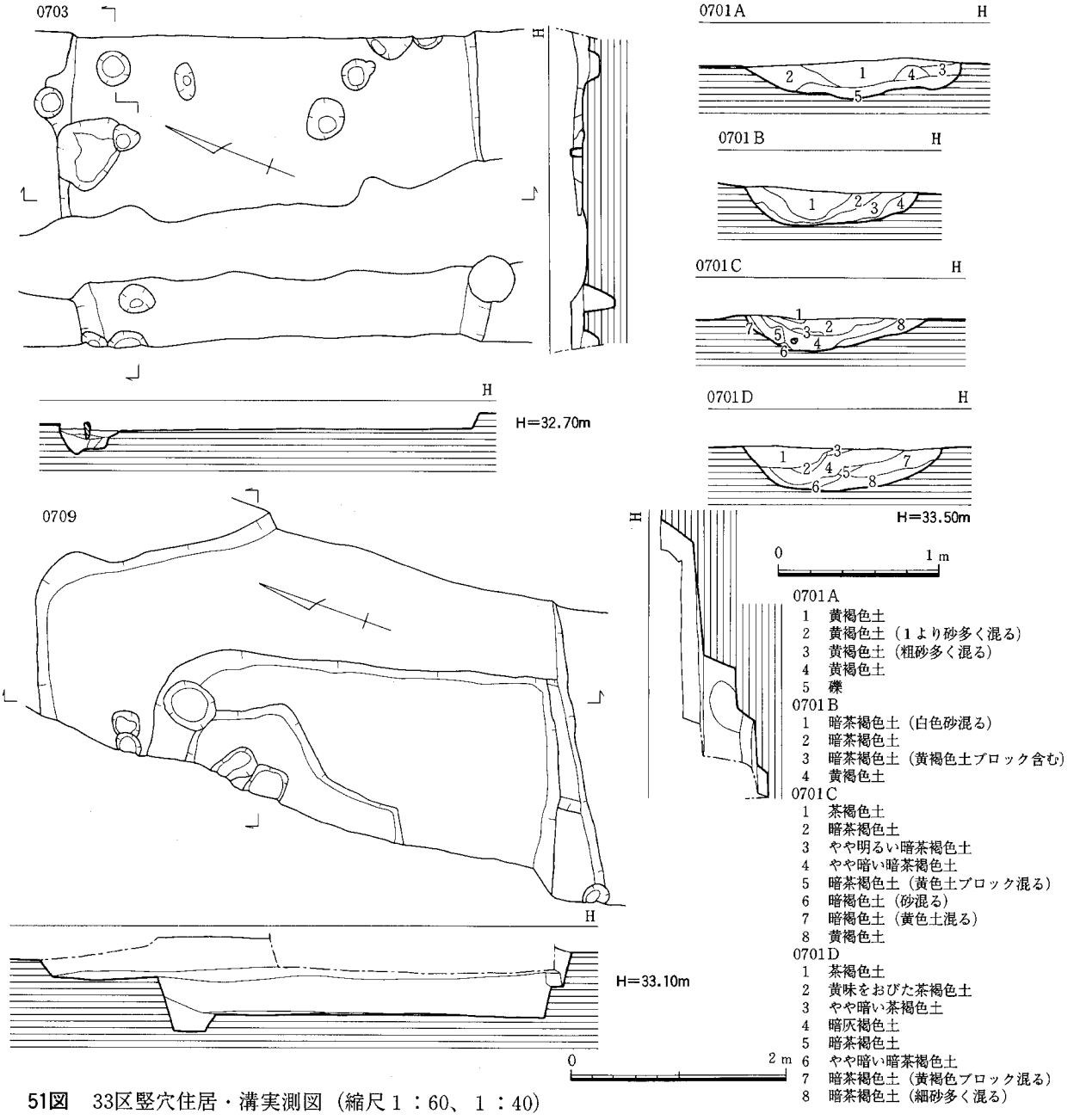
３－14－１　概要

33区は31区の西側に位置し、３次調査の西端にあたる。当区は排水路の構造物部分について調査を行い南北に長い。遺構面は耕作土直下の黄褐色土である。標高は北側で33.05m、南側で33.20mを測る。本調査により、住居跡・溝・ピットを検出した。

３－14－２　遺構と遺物

竪穴住居

0703竪穴住居（51図・図版９）　調査区の南寄りに位置し、東西両側は調査区外に延びる。中央部を0701溝に切られている。南北長328cm、東西残長283cmの平面方形を呈しており、主軸はN－22°

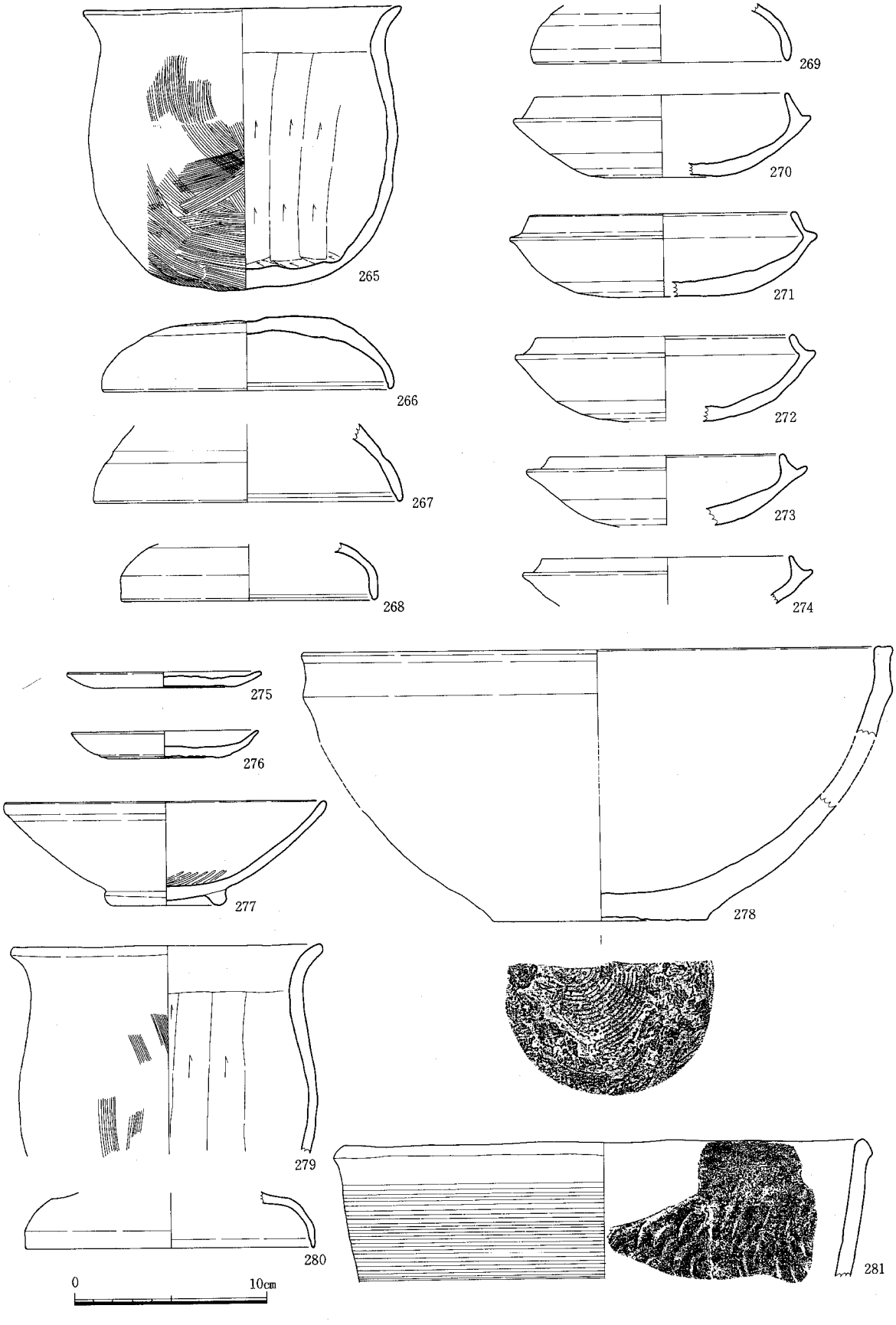


51図　33区竪穴住居・溝実測図（縮尺１：60、１：40）

－Wにとる。床面までの高さは15cmを測る。北壁に接して竈を検出した。袖部は検出できなかったが、壁に接して東西65cm、南北45.3cmの不整形の土坑を堀り、そこに深さ2/3まで締まった黄褐色の粘質土を詰め、そこに石を立てて黒褐色土と焼土ブロックで固めている。南側の床面には炭化物が薄く堆積していた。

出土遺物（52図265・266）　265は土師器甕である。口径16.3cm、器高14.6cmを測る。淡褐色を呈する。砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面胴部と内面胴部下半は二次焼成が激しいためもろくなっており、煤の付着がみられる。266は須恵器坏蓋である。口径14.7cm、器高3.6cmを測る。灰黒色を呈する。砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面天井部はヘラ削りを施す。

0709竪穴住居（51図）　調査区の中央に位置する。建物の東西とも調査区外に延びる。南北長483cm、東西残長263cmの方形プランを持つ。主軸はN－22°－Wをとる。検出面から床面までの深さは約70cmを測る。北側と東側の周壁下は幅約90cmで一段高くなっており、ベッド状遺構を設けている。床面は北側が10cmほど低くなり、その中でピットを２つ検出した。覆土はベッド状遺構から上は締



52図　33区出土遺物実測図（縮尺１：３）

まった茶褐色土で砂を多く含む。床面は一段低い部分で焼土ブロックを多く含み、周囲は炭化物を含み黒褐色を呈する。0704土坑に切られているが、覆土の判別がつきにくく若干遺物が混じってしまった。

出土遺物（52図267～278）　267～269は須恵器坏蓋である。267は口径15.7cmを測る。暗褐色を呈する。内面口縁に沈線をほどこす。268は口径12.9cmを測る。淡青灰色を呈す。焼成良好。270～274は須恵器坏である。270は口径11.1cm、器高4.3cmを測り、灰色を呈す。外面底部はヘラ削りを施す。焼成は良好。271は口径13.3cm、器高4.4cmを測る。外面灰褐色、内面茶褐色を呈する。砂を多く含み焼成良好。272は口径13.3cm、器高4.4cmを測る。淡褐色を呈す。外面底部はヘラ削りで焼成はやや甘い。273は口径12.0cmを測り、褐色を呈す。焼成は良好。274は口径12.9cmを測る。暗灰色を呈する。砂粒を多く含む。焼成良好。275・276の土師皿は0704土坑の遺物か。275は口径9.8cm、器高0.8cmを測る。淡褐色を呈し、焼成は良好である。底部は回転ヘラ切りである。276は口径9.5cm、器高1.35cmを測る。淡褐色を呈す。回転ヘラ切りである。278は須恵質の鉢である。口径30.4cm、推定器高14.0cm、底径10.9cmを測る。色調は灰色を呈し、焼成はやや良好である。内底部には炭化物が付着している。

土坑

0704土坑　0709竪穴住居を切る。長径123 cm、短径42cmで不整形を呈する。床面まで15cmを測り、断面皿状を呈す。覆土は茶褐色である。

出土遺物（52図279～281）　279は土師器甕である。口径15.4cm、残存高10.8cmを測る。暗褐色を呈し、焼成は良好である。胴部から軽く内傾したあと口縁は緩く開く。280は須恵器坏である。口径14.8cmを測る。灰色を呈し、焼成は良好である。281は土師器の甑である。口径26.5cmを測る。褐色を呈する。砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面全体と内面口縁部に煤が付着している。

溝状遺構

0701溝（51図）　調査区を南北に縦断する。幅30cm～150cm、深さ10～16cmを測る。覆土は締まった黄褐色または茶褐色で細砂を含む。出土遺物なし。

0702溝　調査区の北寄りで0701溝の西側に沿って位置する。西側は調査区外にかかっており、溝の幅は不明である。深さ23～39cmを測る。覆土は良く締まった灰褐色または茶褐色で上層に白色砂を多く含む。土器片が出土したが、破片が小さく図化しえなかった。

0708溝　0701溝と直交する溝である。幅25～38cm、深さ20cmを測る。覆土は0701溝と同じで切り合い等は不明である。出土遺物なし。

3－14－3　小結

水路新設に伴う調査のため調査区が細長くなり、全掘できる遺構が少なかった。2棟の住居跡は主軸を同方向にとっており、遺物からも同時期であると思われる。溝の年代は明確ではないものの近世の掘削であると考えられる。この調査区は北側にある工場との境界に設けたが、この区画がその時期以前のものであることが判明した。

3－15　34区の調査

本調査区は29区の南側に位置し、南端は35区と道路を隔て接続する。道路新設のため調査を行った。発掘面積は561㎡。耕作土・床土直下が黄褐色土あるいは砂質土の遺構検出面となる。標高は北側で33.05m、南側で33.55m。調査区南側から北北西に走る幅6m前後の浅い溝があり、西側の肩は不明瞭である。方向からすれば、30区の古河川に接続する可能性もある。北側には不整形の土坑や溝状遺構があるが自然的なものであろう。遺物の出土もほとんどない。

3－16　35・36区の調査

3－16－1　概要

35・36区は34区の南側に位置する最大幅約9m、総延長135mの道路新設に伴う調査区である。現状の道路を避けたため幅には出入りがあり、また中央部分に水路が通っていたためそれを境に北側を35区、南側を36区とした。しかし検出した遺構の性格は同じであり、また調査も平行し遺構番号も両区入り乱れたので、ここでは合わせて報告する。発掘調査面積は35区が458㎡、36区が323㎡である。

53図に35区西壁の土層断面を示した。床土の上の厚さ20～30㎝の耕作土はすでに除去してある。床土の下には厚さ10㎝程度の赤褐色砂質土層があり、その下には褐色砂質土層が続き、黄白色砂になる。遺構の多くが褐色砂質土上面から、また一部の遺構は黄白色砂上面から切り込んでいる。しかし、褐色砂質土上面での遺構検出は困難を極めたため、結局は黄白色砂まで下げたところでの調査となった。この面の標高は35区北側で34.1m前後、南側で34.5m、36区南側で35m前後となる。35区南側と36区南側の検出面は、砂に礫が混じる。

この細長い調査区のほぼ北から南端まで古墳時代の竪穴住居で埋め尽くされていた。全体を確認したものは調査区の制約もあり1基しかなかったが、同一場所での建て替えも含めると検出した竪穴住居の数は23基に及んだ。平面形態は方形もしくは長方形と考えられる。他の遺構は土坑、溝、それに竪穴住居を切るのが多いピット群である。ピットには柱痕跡をもつものや列をなすものもあったが、はっきりした建物などとしてまとめることはできなかった。ただ、その出土遺物はほとんど古墳時代に限られている。また表土などからも古墳時代以外の遺物の出土は少かった。

3－16－2　遺構と遺物

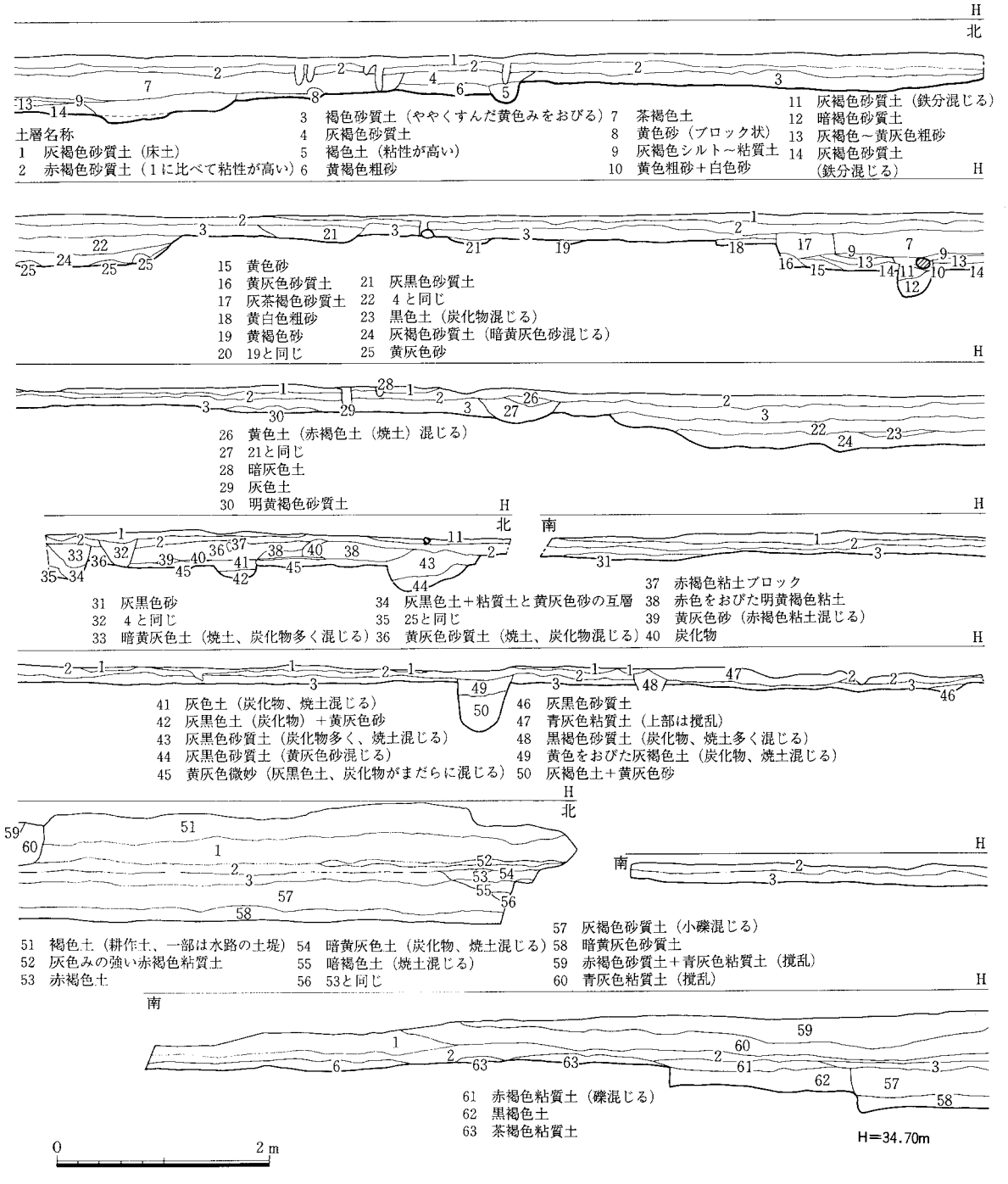
竪穴住居

0802竪穴住居（54図・図版10）　35区北側、本調査区では最も北に位置する南北幅4.55mの竪穴住居である。床面は掘り過ぎており、竈の面からすると壁高は15㎝前後となる。その竈は東側壁中央に設けられ、残存する基底部は平面U字形を呈し、その東半分が煙道として側壁の外に出る。焚口は掘りくぼめる。竈本体は黄色粘土で作られ、内面は焼ける。またその内部は焼土、炭が充満し、土器片も混じっていた。竈を挟んだふたつのピットが主柱穴で径33～45㎝、深さ33～37㎝。柱間は3mをはかる。4本柱の構造であろう。南西で0810竪穴住居を切る。53図の土層断面ではその切り合い関係が明瞭であるとともに、この住居の床面も固く締まっていることがわかる。

出土遺物（58図282・283、61図927・928）　282は土師器甕片。外面は刷毛目調整で、赤褐色。内面はヘラ削りで、黒褐色と呈する。283は土師質のミニチュア杯。ともに竈から出土。927は長さ6.6cm、幅0.7cmの鉄製品。断面は長方形をなす。928は鉄鏃。先端は折れ曲がる。

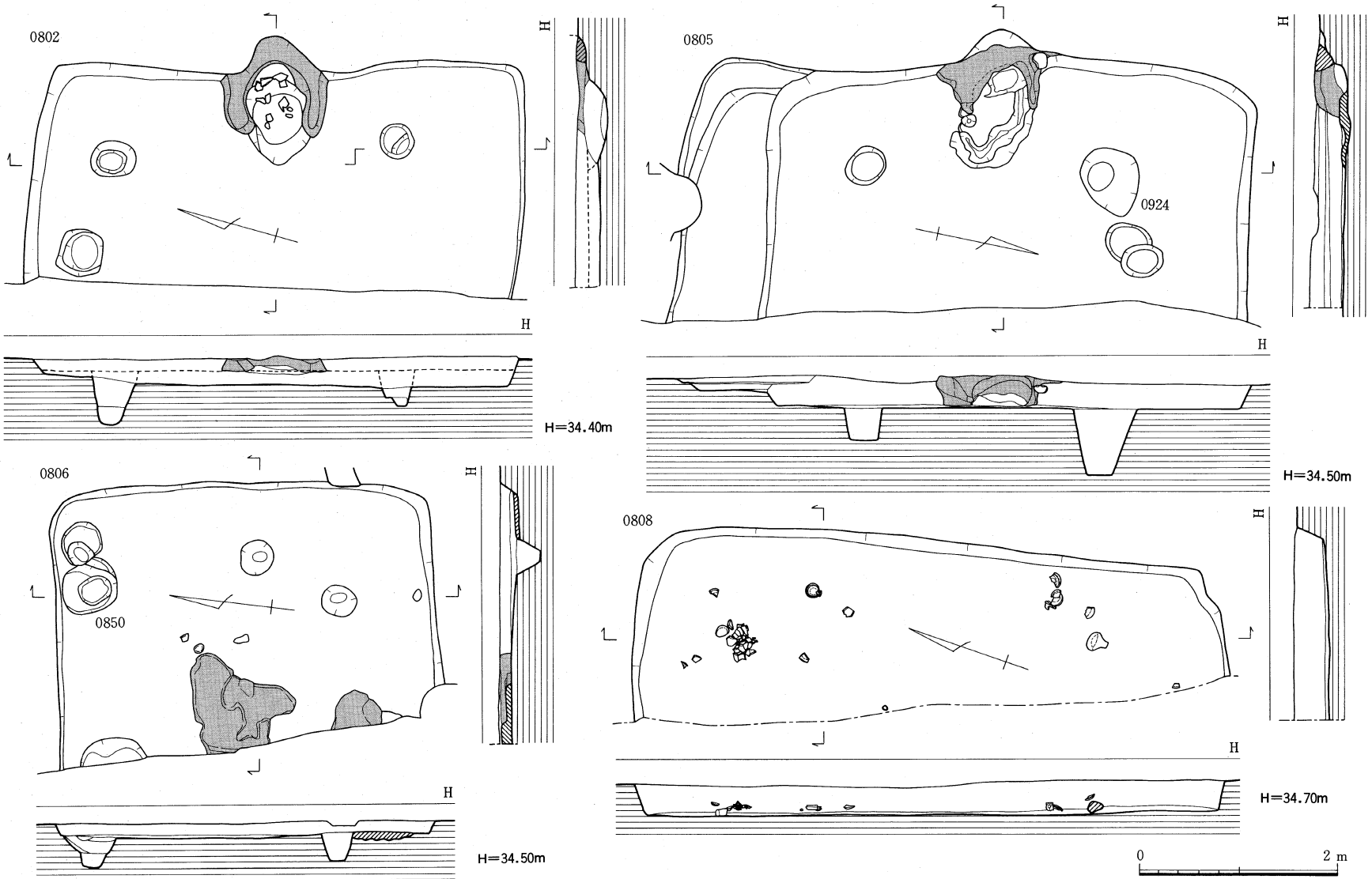
0803竪穴住居（55図・図版10）　35区北側、0802竪穴住居の南に位置する南北幅5.45mの竪穴住居である。西側壁が一部崩れている。壁高は残りの良いところで20㎝。竈は西側壁南寄りに設けられるが、本体は廃棄時に破壊され残存しない。東西1.30m、南北1.4m、深さ10㎝の掘り方とその中央部に幅15㎝、高さ15㎝の支石が残るだけである。この支石周辺幅0.5m部分にだけ焼土、炭、土器が残存し、炊口であろう。竈を前面のふたつのピットが主柱穴でともに径45㎝、深さ50㎝。柱間は3mをはかる。4本柱の構造であろう。床面は鉄分が沈着し硬い。竈両脇の床面で土師器甕・椀などの出土遺物が多かった。覆土は上層が暗黄灰色砂質土、下層が黄灰色砂質土。東南を0823竪穴住居に切られる。

出土遺物（58・59図284～304、61図933）　284～298は土師器。284は壺（坩）。胴部は球形で、口縁が短く立つ。外面はナデ調整、内面はヘラ削りで仕上げる。口径12.3cm、高さ14.0cm。285～291

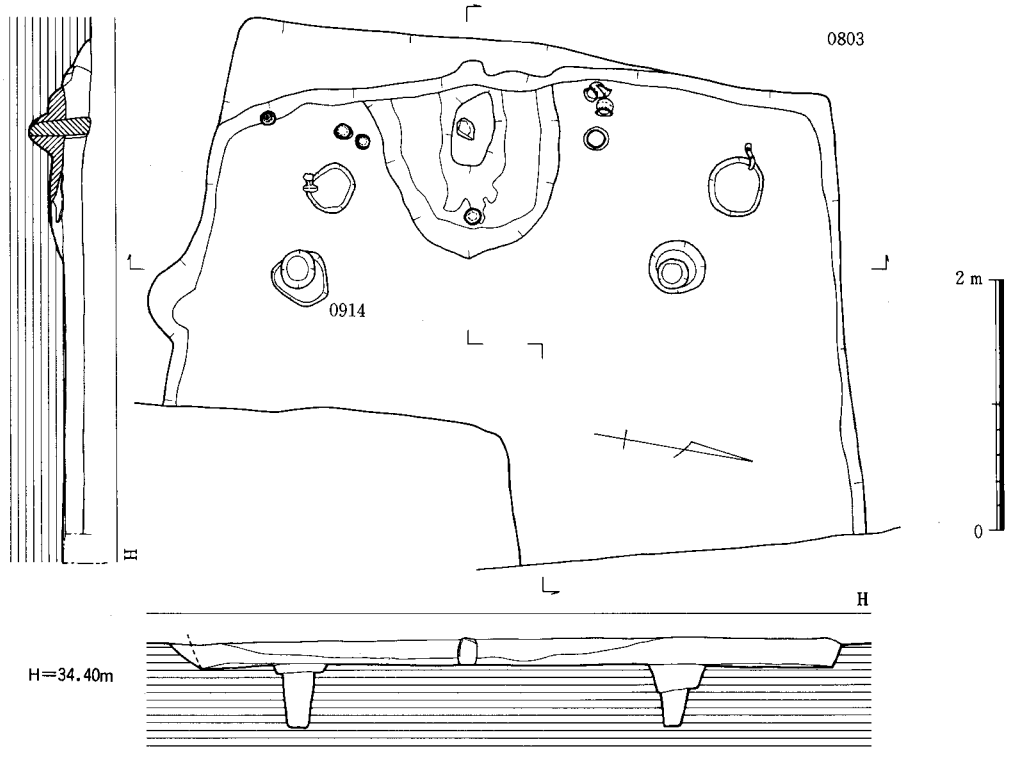


53図　35区西壁土層断面実測図（縮尺1：60）

は甕の類で、大小ある。285は口径17.9cm、高さ25.1cm。口縁は大きく外反し、底部は平底に近い。外面は刷毛目、内面はヘラ削り。286～291は口径13.0～14.7cmの甕で、口縁は直立あるいは小さく外反する。胴部は下膨れとなる。外面調整には板ナデと刷毛目がみられる。外面は二次焼成で煤が付着したり、器表が剝落するものが多い。292は口縁端に面を作り、肩が張る甕。底部は平底に近い。外面上位はカキ目を行い、内面はナデで仕上げる。外面は二次焼成を受け煤の付着、表面剝落があり、また内面上位にも煤が及ぶ。異質な甕である。293・294は口縁形態は異なるものの鉢。二次焼成の影



54図　35・36区竪穴住居実測図１（縮尺１：60）



55図　35・36区竪穴住居実測図２（縮尺１：60）

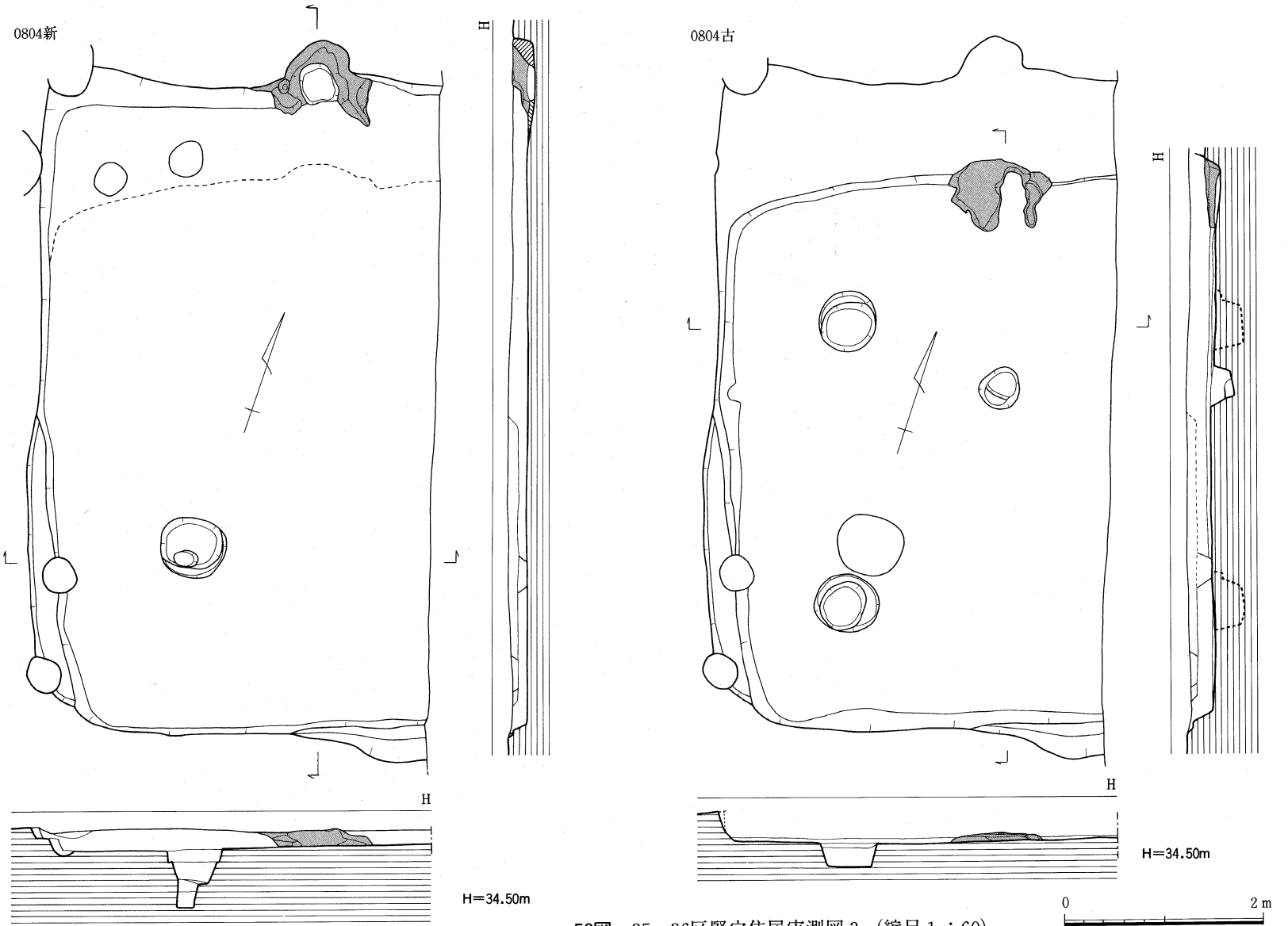
響が著しい。295～298は椀。295は丸みを帯びた底部から口縁が稜を作って内傾する。内面は燻され黒色となる。外面も黒褐色部分が多く、他は赤褐色。内外面ともヘラ磨きで仕上げ、内面にはこてあて痕が残る。口径11.4cm、高さ4.3cm。296・297は口径11.4～13.0cm、高さ4.0～4.3cmの半球に近い形の椀。ともに内面にはこてあて痕が残る。外面調整は296がヘラ削り、297はナデである。296の底部は厚い。298は高さ5.3cmと先の２個体に比べ身が深いもの。内外面ともナデで仕上げ、内面にはこてあて痕が残る。器形がいびつである。

299～304は須恵器。299は口径14.2cm、高さ3.5cmの杯蓋。ヘラ削りで、天井は平坦となる。口縁端部は直立気味である。焼きがあまい。300・301は杯身。立ち上がりは300が大きく、301は小さい。301の焼きはあまい。302～304は甕。302は口縁片。303・304は口縁を欠くもので、扁球形の胴部から頸が長く開く。303の頸部上位は沈線と櫛描波状文で飾り、また胴中位にはカキ目の上に２条の沈線をめぐらし、その間に櫛描の列点文を入れる。304は胴部最大径部分に２条の沈線を入れ、その上頸部との間にヘラの列点文を入れる。沈線の下位には弱いタッチのカキ目を不連続に施す。

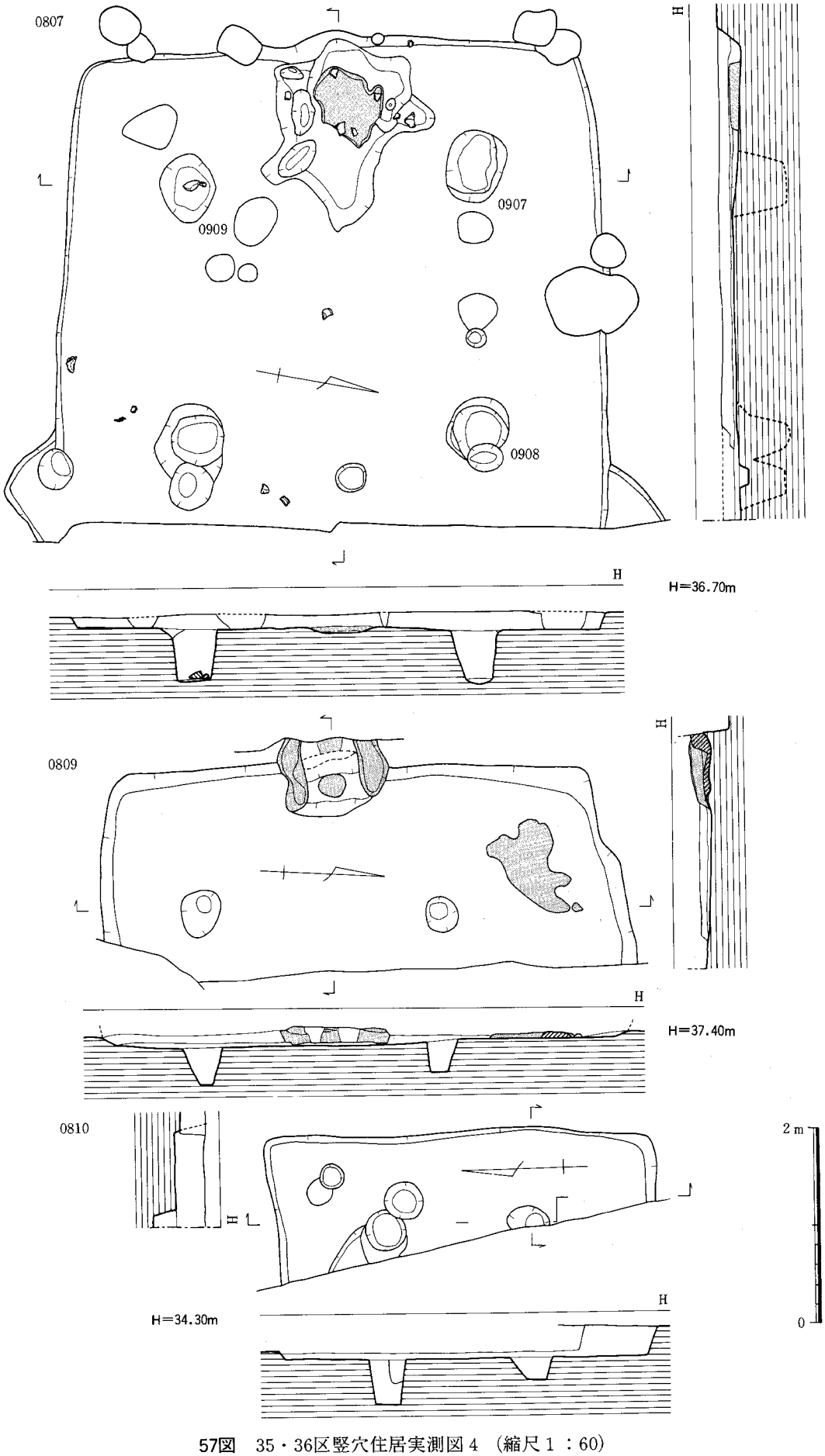
933は鉄鎌である。全長18.9cm、刃幅2.8cm、基部幅3.3cm。刃部は直線的だが、先端部分が内湾する。折り返しは刃とほぼ直角に短く付く。基部付近には木痕が残る。

0804竪穴住居（56図・図版10）　35区中央に位置する建て替えのあった竪穴住居である。古い住居（56図上）は南北幅5.5m、竈を中心に折り返せば東西幅が5.8m前後となり、ほぼ正方形の平面となる。壁高は新住居と共有する南側壁で23cm、そこから新住居の床面までは５cm。竈は北側壁に基底部だけが残る。平面U字形で、西袖が厚いが、これが本来の形であるかは不明。この周囲には焼土、炭などが広がる。床面西側で南北に列ぶ径60～65cm、深さ30cmの２ピットが主柱穴で、４本柱の構造となるものであろう。２柱穴の柱間は2.8m。床面中央は硬く締まる。覆土は暗黄褐色砂質土で、焼土、炭化物などが混じる。

新しい住居の西・南側壁は古い住居のものをほぼそのまま使い、北側壁を約１m北側に拡張する。



56図　35・36区竪穴住居実測図３（縮尺１：60）



57図　35・36区竪穴住居実測図４（縮尺１：60）

南北幅6.65m、竈の位置からみて東西幅が古い住居と変わらないとすれば、南北に長い長方形の平面となる。古い住居の床面から5㎝程度高くして新しい住居の床面とする。床面は鉄分が沈着して硬く締まる。壁高は残りの良いところで22㎝。竈は北側壁に基底部だけが残る。平面U字形で、全体の半分近くが側壁の外に出る。袖は破損が大きい。焚口は掘りくぼめ、その手前の床面は赤く焼ける。また竈内面は焼け、内部および周囲には焼土、炭などが広がる。床面西南に径66㎝、深さ57㎝のピットを確認したが、他に明確なピットがなく主柱穴かの判断はできない。覆土は暗黄褐色砂質土。0805竪穴住居を切る。

出土遺物（59図305～307、61図929）　305・306は土師器甕。305は直立気味の口縁をもつ。306は305に比べ小型で口縁は外反する。二次焼成を受け外面器壁が剝落し、また内面までも煤ける。307は須恵器杯身。立ち上がりは低く内傾する。受け部は引き出しが弱い。929は鉄鏃。先端が折れ曲がる。

0805竪穴住居（54図・図版10）　0804竪穴住居の北側に位置する。南北幅5.7mをはかり、南北に長い長方形の平面と考えられる。南側壁下には幅0.9m、床面からの高さ15㎝前後のベット状の高まり部分がある。床面は南北幅4.6mとなる。壁高は床面から30㎝前後。竈は西側壁やや北寄り、床面だけからすれば側壁中央に設けられる。平面はU字形に近いが、袖はかなり破壊されている。焚き口は掘りくぼめ、その北側から東側にかけては浅い溝がある。竈の内面は焼け、また内部やこの周囲には焼土、炭など堆積する。竈体は粘土を用い作る。竈を挟んだ径2ピットが主柱穴で、4本柱の構造となるものであろう。2柱穴の柱間は2.4m。覆土は黄褐色砂質土を主とするが、竈を壊した際出た焼土や粘土が広く含まれる。0823竪穴住居を切る。

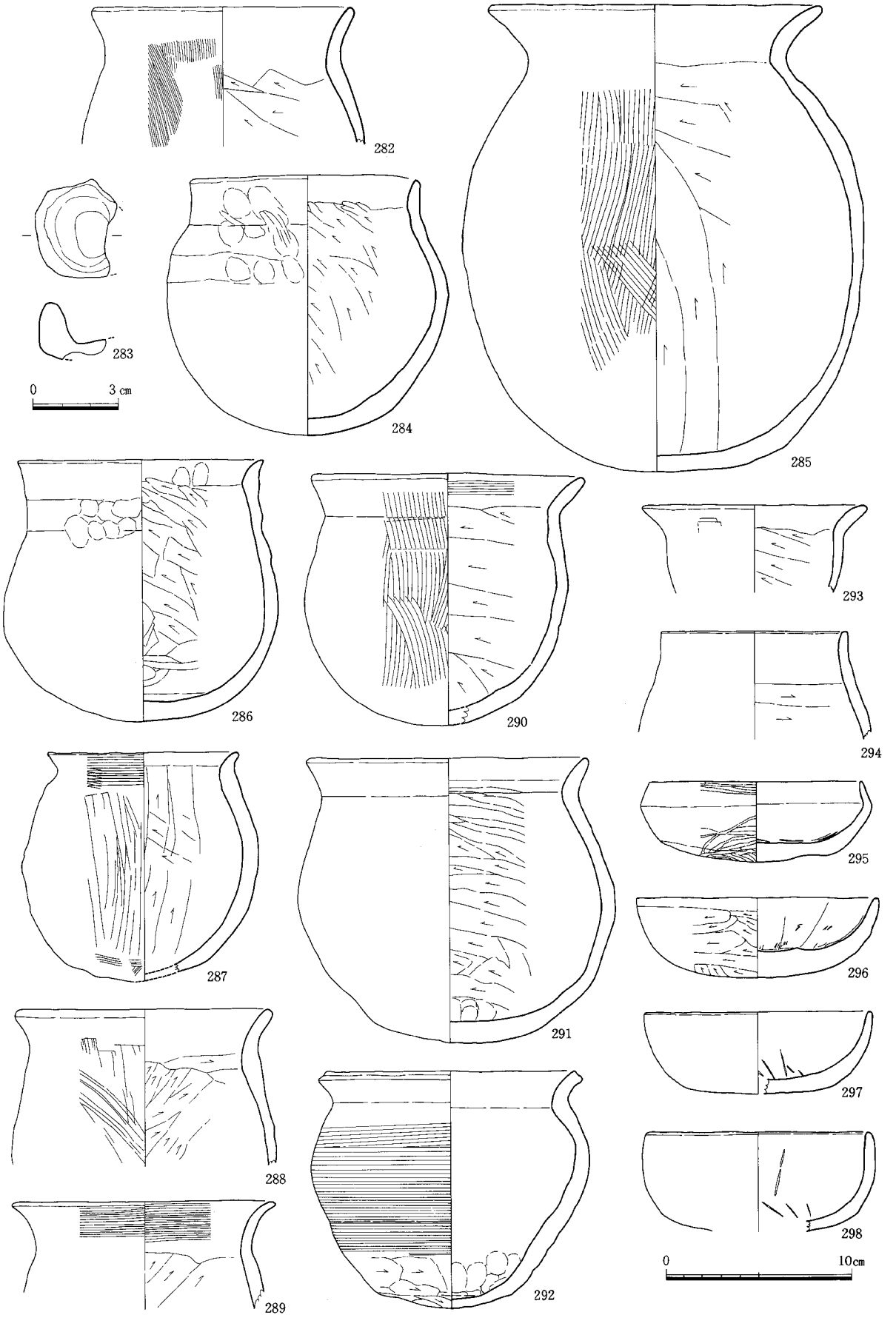
出土遺物（59図308～311・61図930・931・934）　308は土師器鉢。口縁は内湾する。外底がヘラ削り、外は横ナデで仕上げる。赤褐色。309～311は須恵器杯。309は蓋で、ヘラ削りは天井部のわずかな部分に行い、その上にヘラ記号を刻む。310・311は身で、立ち上り、受部とも大きい。311は底部にヘラ記号がある。また焼成があまい。930は全長6.4㎝、931は全長7.3㎝の鉄鏃。930は錆に被われ形態が不明瞭。934は刃幅1㎝前後の鉄刀子である。

0806竪穴住居（54図・図版10）　35区中央、0804竪穴住居の西に位置する。南北幅4.9mの方形状の平面をもつ。壁高は残りの良いところで15㎝。調査区内では竈はないが、床面西側に焼土が厚く堆積し、西側壁に設けている可能性が高い。床面には複数のピットがみられるが、主柱穴の判断はできない。東側壁から南側壁下の床面下には底面の凹凸が著しい幅50～60㎝、深さ5～7㎝の溝を掘り、暗黄褐色土で埋め戻している。土層断面は53図にある。

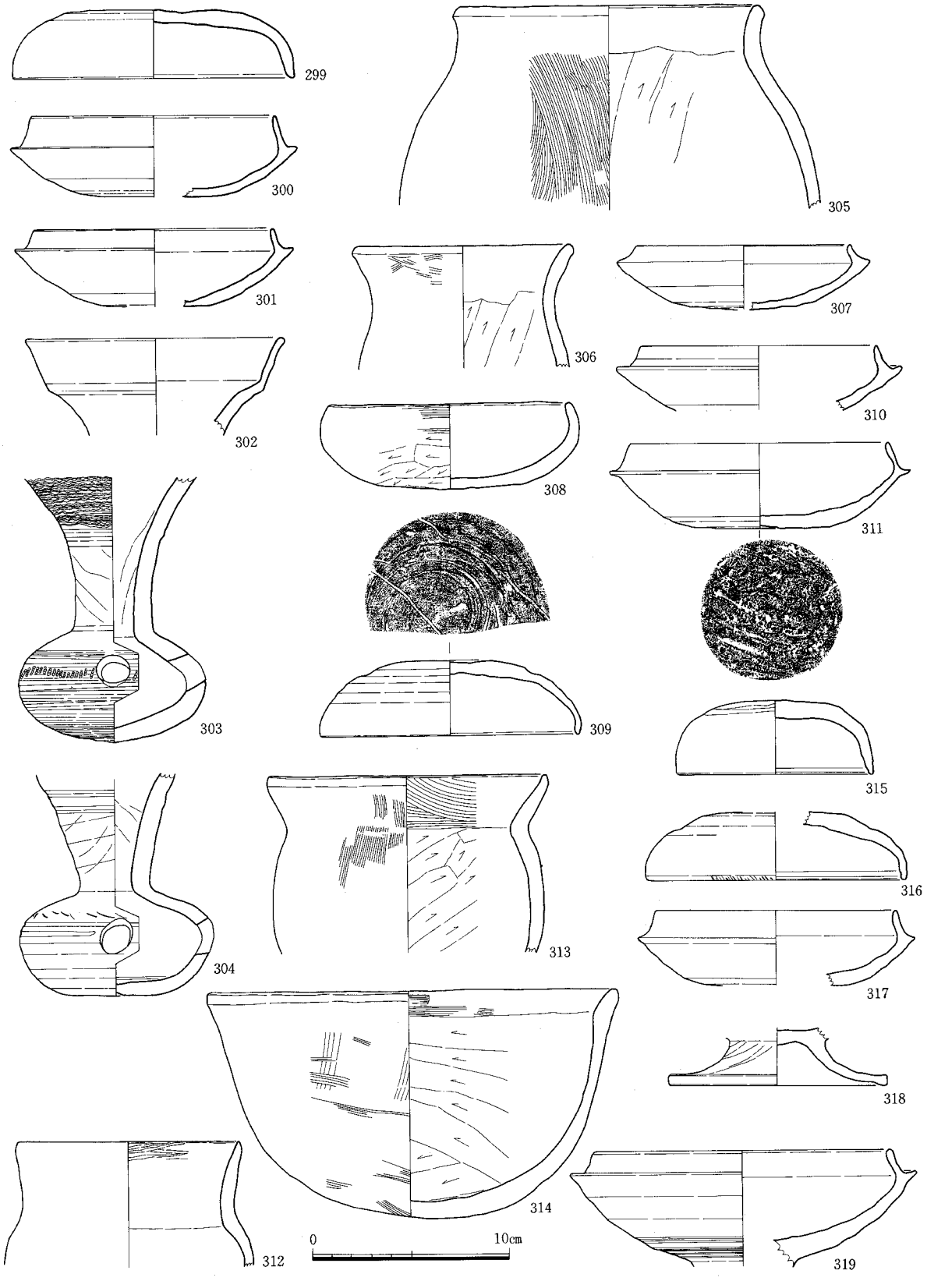
出土遺物（61図936）　厚さ0.4㎝の鉄片。わずかに内反りとなる。

0807竪穴住居（57図・図版10）　35区南側に位置する。南北幅5.6m、主柱穴の位置をもとにすれば東西は5.2m前後となり、南北に長い長方形の平面となる。壁高は残りの良いところで20㎝。竈は西側壁中央に設けられるが、本体は廃棄時に破壊され残存しない。東西1.9m、南北1.4m、深さ10㎝の掘り方とその西側中央に焚口底とみられる焼けた面が残るだけである。この周辺には焼土、炭、土器が多い。4主柱の構造で、柱穴は径70㎝前後、深さ55㎝の二段掘りである。柱間は南北が3m、東西が2.5mである。覆土はおおまかに上層の暗褐色砂質土と下層の黄灰色砂質土にわかれ、ともに焼土が混じる。

出土遺物（59図312～319、61図935）　312～314は土師器。312は口縁端が尖り気味になる壺。ヘラ磨きを行うが、摩滅が著しい。313は甕。二次焼成で外面は剝離し、内面は煤ける。314は大型の鉢。口縁はわずかに外反する。外面はヘラナデ、内面はヘラ削り。外面は焼けて煤け、また内面には炭化物が付着する。鍋のような用途か。315～319は須恵器。315は口径10.0㎝、高さ3.8㎝。天井部にだけ

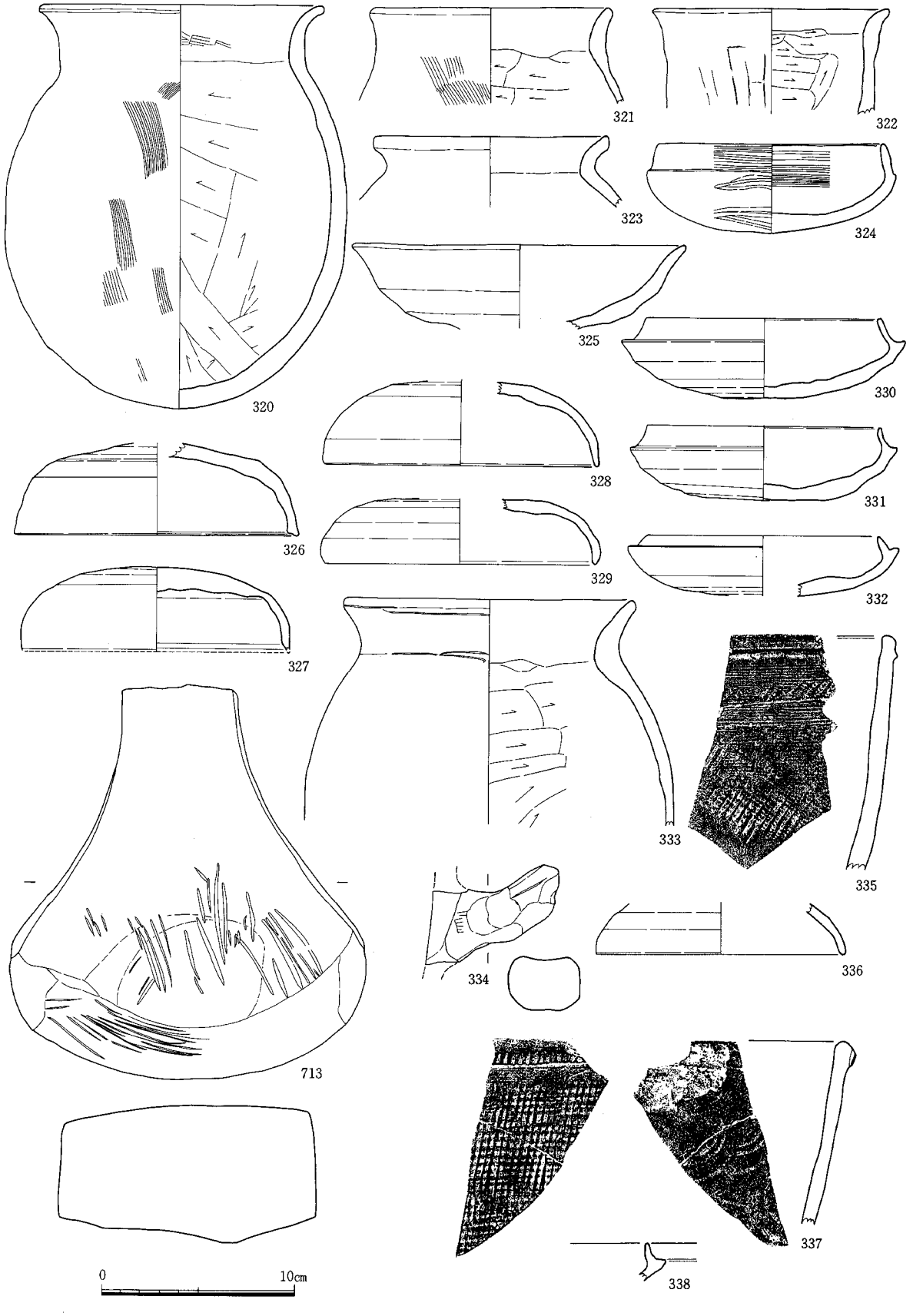


58図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図１（縮尺１：３、１：２）

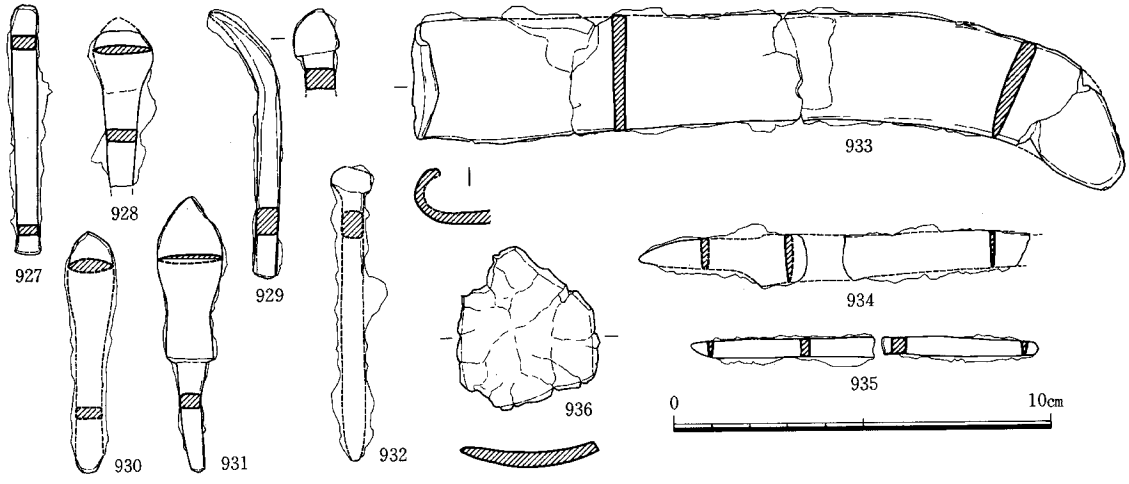


59図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図２（縮尺１：３）

手持ちのヘラ削りを行う。壺類の蓋であろう。316は杯蓋。口縁内面には段がつき、その外面には細かい刻目を入れる。317は杯身。受部の張りが小さい割には立ち上がりが高い。318は低い脚部片。脚端部の作りは端正である。319は高杯杯部。立ち上がりは高く、身も深い。杯底にはカキ目を施す。



60図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図３（縮尺１：３）



61図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図４（縮尺１：２）

焼きがあまく、赤褐色を呈する。935は棒状の鉄製品。一端が尖り気味になる。幅は0.5㎝。

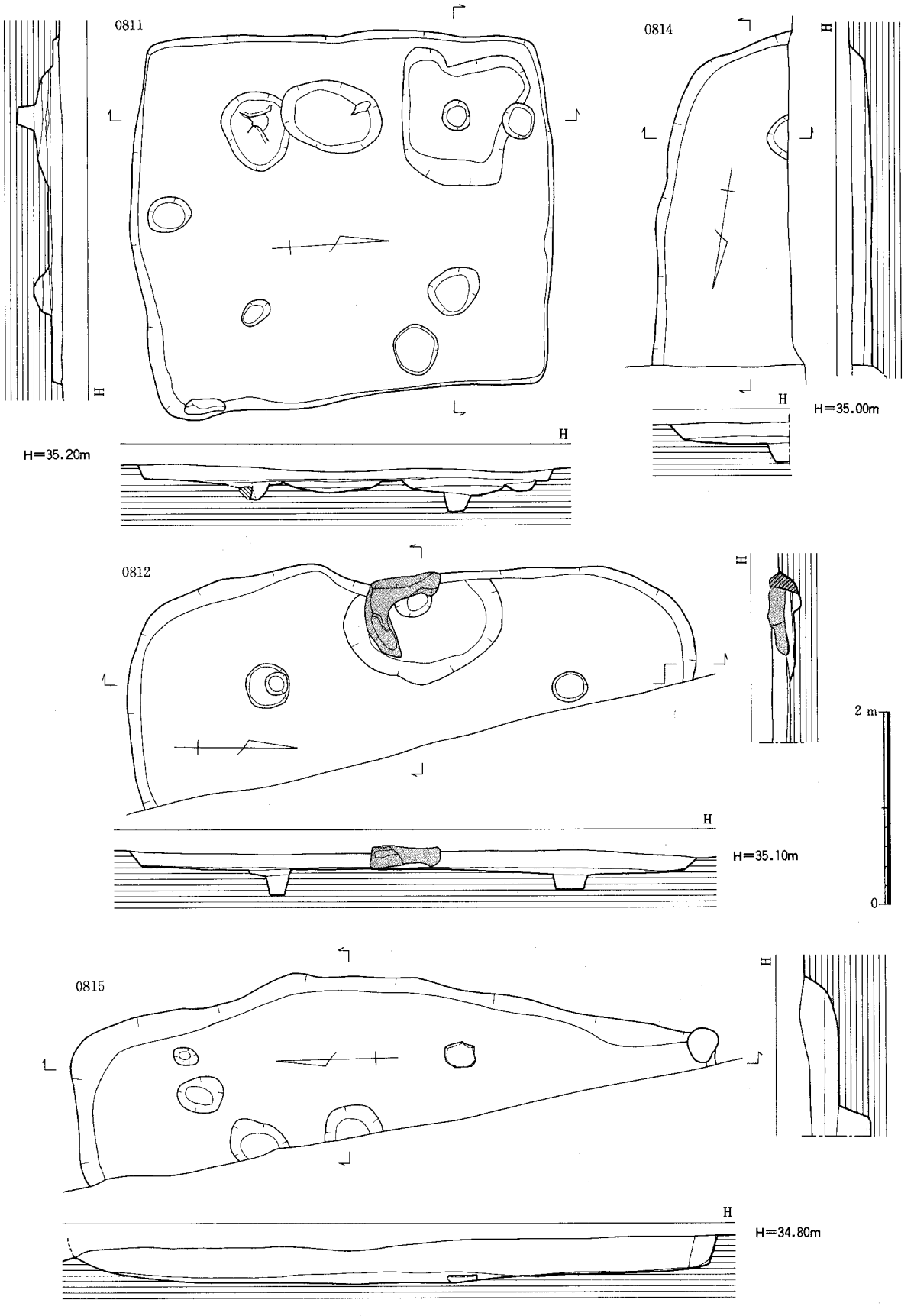
0808竪穴住居（54図・図版11）　35区南側、0807竪穴住居の西南に位置する。南北幅6.0mの方形状の平面をもつ。壁高は残りの良いところで35㎝。調査区内では竈はない。また床面にはピットは認められない。床面北側と南側で土師器などがまとまって出土した。土層断面は54図にある。

出土遺物（60図320～332、713）　320～325は土師器。うち320～323は甕。320は口径14.4㎝、高さ20.8㎝。口縁は外反し、胴部は下膨れとなる。321・322は320に比べ小型で、322は胴部の張りがほとんどみられない。323は張りのある胴部から口縁が反転し、端部がしっかりとした面を作る甕で、先の３点とは形態が異なる。324は鉢。丸みのある底部から段をつけて口縁が内傾する。外面は黒塗りの上にヘラ磨きを行う。内面は横ナデ。325は高杯。底部はヘラ削りで、体部には煤が付着する。326～332は須恵器杯。326～329は蓋で、口径14㎝前後、口縁端部は326がくぼみ、327は尖り気味、他の２点は丸くおさめる。327の胎土には砂粒が多い。330～332は身。口径は12㎝前後、受部径は13.8～14.6㎝。330が受部径、立ち上がり高とも大きい。713は平面バチ形の砂岩製砥石。上端は折損する。下部は厚さ11㎝前後で丸みを帯び、上端部は厚さ1.5㎝と薄くなる。折損面以外のすべての面を砥面として利用する。かなり使い込まれた砥石である。

0809竪穴住居（57図・図版11）　35区南端に位置する。南北幅5.85m、方形状の平面をもつ。北側壁は崩れる。壁高は残りの良いところで20㎝。竈は西側壁中央に設けられ、残存する基底部は西側壁の外に出た部分を0818竪穴住居に切られる。残る袖からみると平面U字形。焚口は掘りくぼめる。竈本体は黄白色砂混じり粘土で作られ、内面は焼ける。またその内部には焼土、炭が充満し、土器片も混じる。床面東寄りの径35～47㎝、深さ31～36㎝、柱間2.4mの２ピットが主柱穴で、４本柱の構造と考えられる。床面北側にも焼土の広がりがある。覆土は黄灰色粗砂。

出土遺物（60図333～336、61図932）　333～335は土師器。333は口縁が外反する甕。外面はナデ調整、内面はヘラ削り。二次焼成を受け、外器表は剝落する部分が多い。334は舌状の取手。335は甑か。ほぼ直立する口縁で、上端は外に折り返す。外面は平行タタキの後横刷毛目、内面はナデ。淡赤褐色を呈する。336は須恵器杯蓋の小片。932は長さ7.8㎝の鉄釘。錆が著しく形態は詳でない。

0810竪穴住居（57図・図版10）　35区北側、0802竪穴住居に切られる。南北幅3.95mの方形状の平面をもつ。壁高は残りの良いところで32㎝。調査区内では竈はない。床面の調査区境に近い径40㎝前後、深さ23～45㎝、柱間1.5mの２ピットが主柱穴の一部で、おそらく４本柱の構造となるものであろう。土層断面は54図にある。



62図　35・36区竪穴住居実測図５（縮尺１：60）

出土遺物（60図337・338）　337は土師器の甑か。直立する口縁の端部を外に折り返し、その下部に刻目を入れる。外面は平行タタキがクロスし格子状となる。内面はナデ。淡赤褐色を呈する。338は須恵器杯身の細片。

0811竪穴住居(62図)　36区南側に位置する。この集落で唯一平面全形が確認できる竪穴住居である。平面は南北長4.4m、東西幅3.75mの南北に長い長方形である。壁高は残りの良いところで18㎝。竈はないが、床面西側壁寄りに南北に長軸をとる長さ1.0m、幅0.73m、深さ12㎝の炭化物の堆積した土坑があり、炉と考えられる。4本柱の構造で、柱穴は径28～82㎝、深さ15～22㎝、柱間は南北が2.05m、東西が1.95mとなる。厚さ5㎝の貼床がある。覆土は褐色砂質土。

出土遺物（66図339・340）　ともに須恵器杯身小片である。340は口径15.6㎝、立ち上がりも高い。339は口径10.0㎝、立ち上がりは低く内傾する。

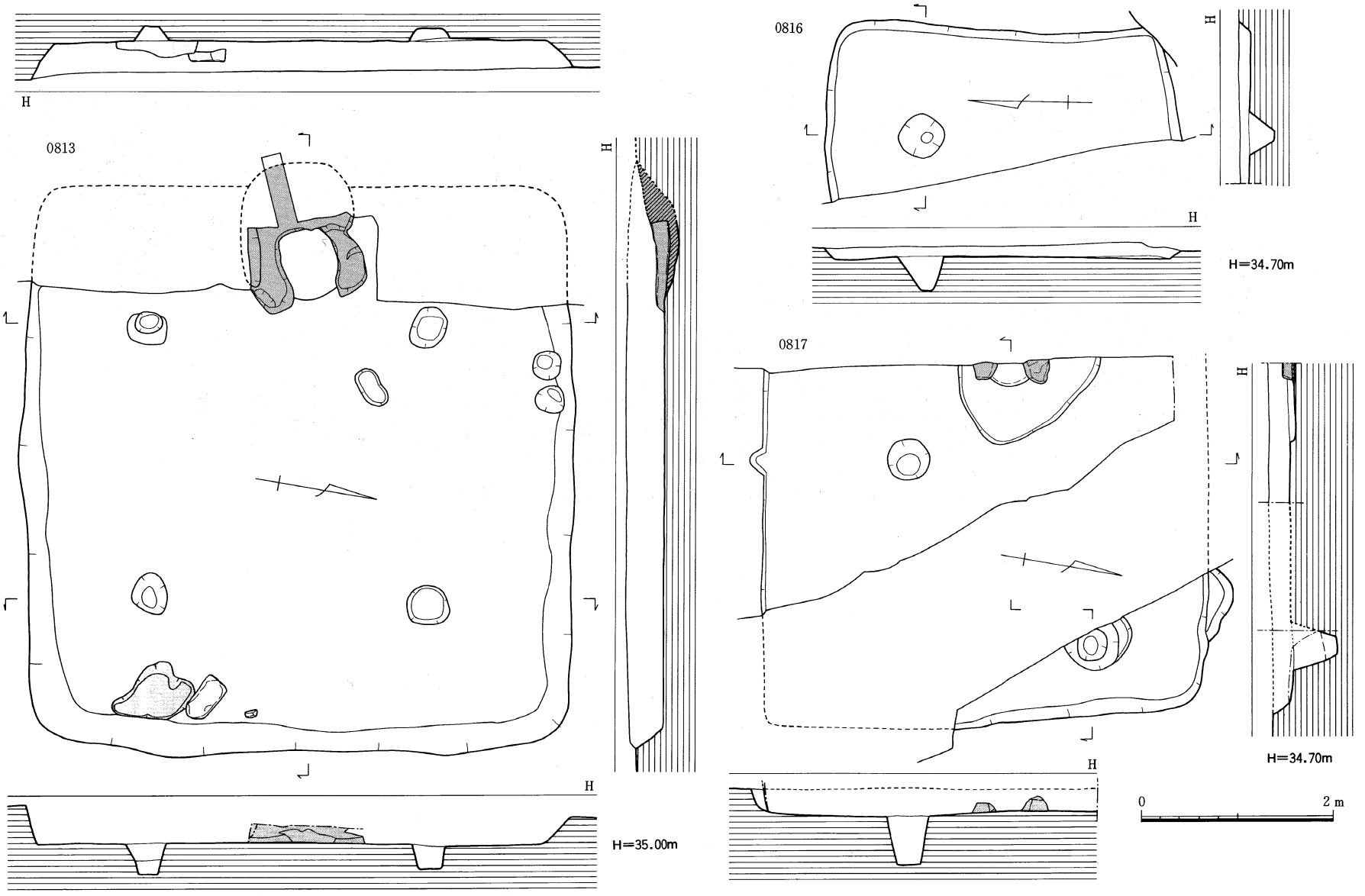
0812竪穴住居（62図・図版11）　36区南側、0811竪穴住居の東北に位置する。平面は南北幅5.85mの隅丸方形状である。壁高は残りの良いところで25㎝。竈は西側壁中央に設けられ、西袖部分の基底部がわずかに残る。西側壁下に長さ1.65m、幅1.1m、深さ10㎝の焚口部分を掘りくぼめ、その上部に主に黄褐色粘質土を用い竈本体を作ったものである。焚口奥のピットは支石の抜き痕の可能性もある。竈内面は焼け、その内部には焼土、炭が充満し、また土器片も混じる。竈を挟んだ径36～45㎝、深さ15～27㎝、柱間3mの2ピットが主柱穴で、4本柱の構造と考えられる。

出土遺物（66図341～347）　すべて土師器である。341・342は甕。ともに口縁が短く外反し、胴部は張る。外面はナデ、内面は荒い削りとなる。343～346は甑で、343と344、345と346は同一個体の可能性が高い。343は口縁が内湾気味に立つ器形でおそらく肩に把手が付くタイプであろう。外面口縁下には刷毛目、344の外面には粗い刷毛目がある。内面は軽いヘラ削り。345は口縁が直立し、端部がわずかに開く。外面は346ともども粗い刷毛目、内面は軽いヘラ削り。これらの甑のいずれにも粘土の接合痕が段として残る。347は鉢。半球形の胴部から口縁が短く外反する。外面はヘラ削りの後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きを行う。

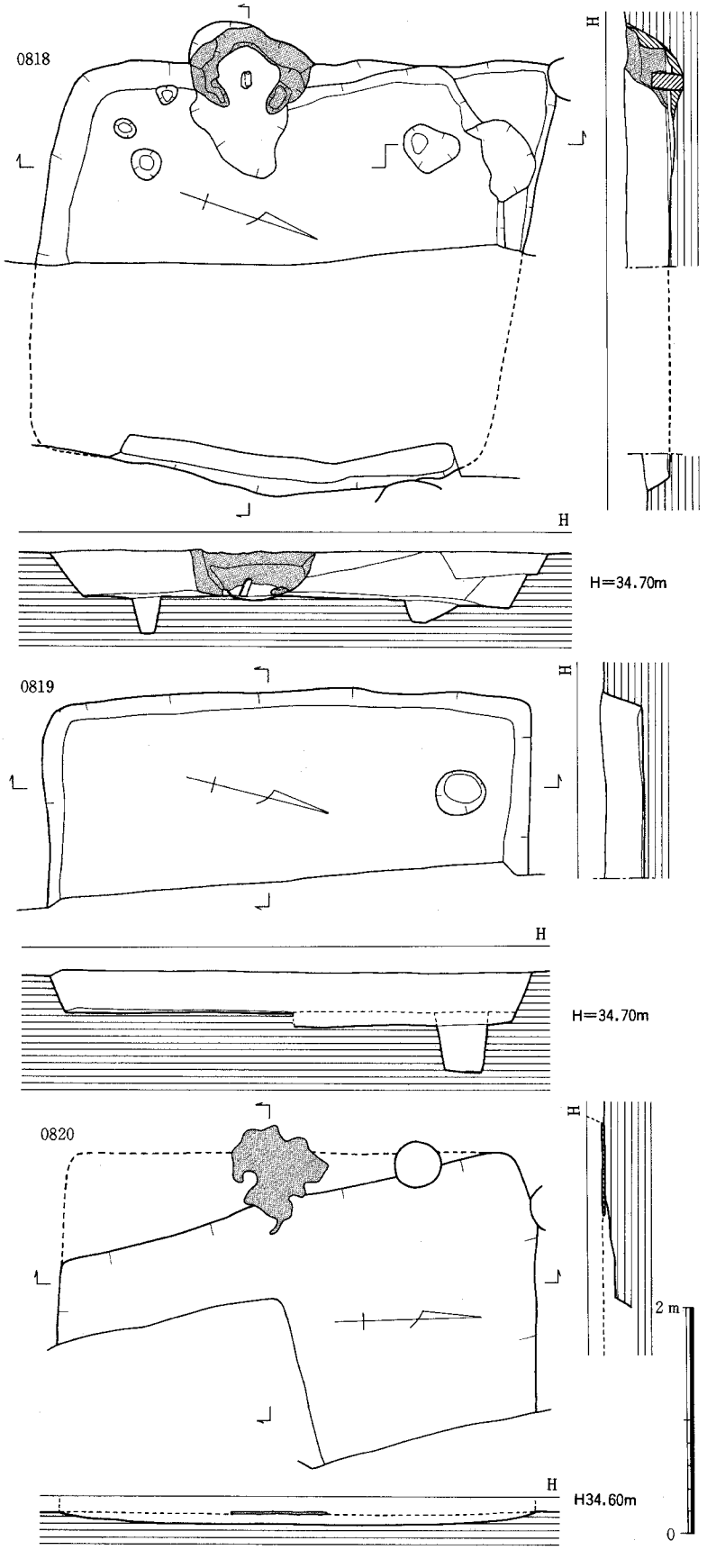
0813竪穴住居（63図・図版11）　36区中央、0812竪穴住居の西北に位置する。南北幅5.75m、主柱穴の位置をもとに推定すれば東西は5.8m前後となり、ほぼ正方形の平面となる。壁高は残りの良いところで40㎝。竈は西側壁中央に設ける。調査区外にかかったため拡張したが、全形の確認には至らなかった。基底部平面はU字形で、竈本体は黄褐色粘土で作り、内面は焼ける。焚口は平坦である。内部には焼土、炭、土器が堆積する。4主柱の構造で、柱穴は径45～58㎝、深さ11～32㎝、柱間は2.9mである。床面東南隅部分には粘土の塊と、上面が平坦な石や砥石、また土器がみられる。覆土は主に灰褐色粘質土で、西南隅の上面には拳大の礫が集積していた。0814竪穴住居、0827土坑を切る。

出土遺物（67・68図353～362・715）　353～357は土師器甕の類である。353は口径21.4㎝、球形の胴部から口縁がいったん直立し、端部が外反する。外面は平行タタキの後粗い刷毛目、内面は荒い縦のヘラ削りの後部分的に横刷毛目を行う。胴内面上位には粘土接合痕が明瞭である。外面には煤が付着する。354は口径15.8㎝。外面は刷毛目調整を行うが、胴最大径部分以下は二次焼成のため器表が剝落する。355・356はおそらく同一個体で、平底直口の甕。口縁はいびつになる。外面は刷毛目、内面は削り風の強いナデ。底部には布痕や蓆痕が認められる。外面には煤が付着する。357は張りのない胴部と直立気味の口縁をもつ。外面は縦方向の板ナデ、内面はヘラ削り。外面は焼け、煤が付着する。358は壺。外面と内面口縁上位はヘラ磨き、口縁下位はヘラ削り、胴内面はナデで仕上げる。口径10.4㎝。二次焼成を受け器表が剝落するとともに、口縁内側まで煤が付着する。

359～361は須恵器。359は杯身片で、立ち上がりは高い。360は甕の口縁であろう。口縁外面と頸部



63図　35・36区竪穴住居実測図６（縮尺１：60）



64図　35・36区竪穴住居実測図７（縮尺１：60）

に櫛描の波状文を施す。361は口径8.2㎝、高さ18.7㎝の提瓶である。肩には鈎状の把手をつける。体部全面は沈線で同心円状に区切り、その間をカキ目、櫛描の列点文で飾る。また中央にはヘラ記号を入れる。裏面はカキ目。362は径2.1～2.3㎝、厚さ1.9㎝の有孔土玉である。孔径は0.2㎝。715は残存長11㎝、幅10㎝、厚さ7.5㎝前後の砥石。３面を砥面として利用する。

0814竪穴住居（62図）　0813竪穴住居南側壁に切られる。南北3.4m、東西1.4m部分しか調査できず詳細は不明。東南側壁隅は丸みをおびる。壁高は20㎝前後。

出土遺物（66図348）　須恵器杯蓋である。削りは天井頂部付近だけに行い、表面は凹凸が著しい。

0815竪穴住居（62図）　0813竪穴住居の北側に位置する。平面は南北幅6.65mの方形状。東側壁は崩れる。壁高は35㎝前後。床面のピットが主柱穴かは判断できない。厚さ８㎝程度の貼床がある。覆土は鉄分の多い暗褐色土。

出土遺物（66図349）　須恵器杯身片。立ち上がりは受け部との境が明瞭で、途中で段を作り、内傾する。

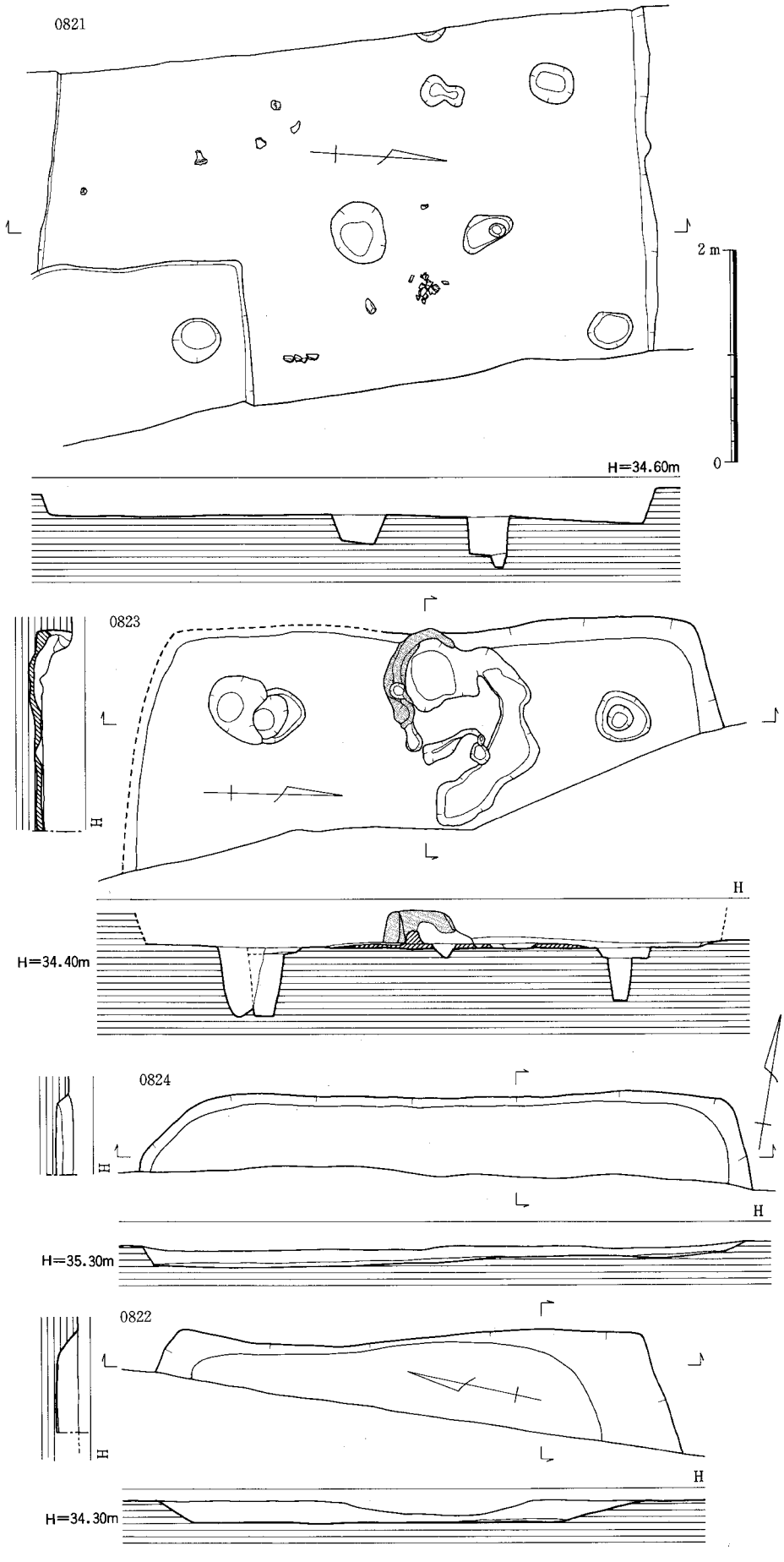
0816竪穴住居（63図）　0815竪穴住居の北側に位置する。平面は南北幅3.6mの方形状。壁高は15㎝前後。床面北側には径50㎝、深さ35㎝のピットがあり、その周囲から南側にかけての床

面が硬く締まる。覆土は褐色砂質土。

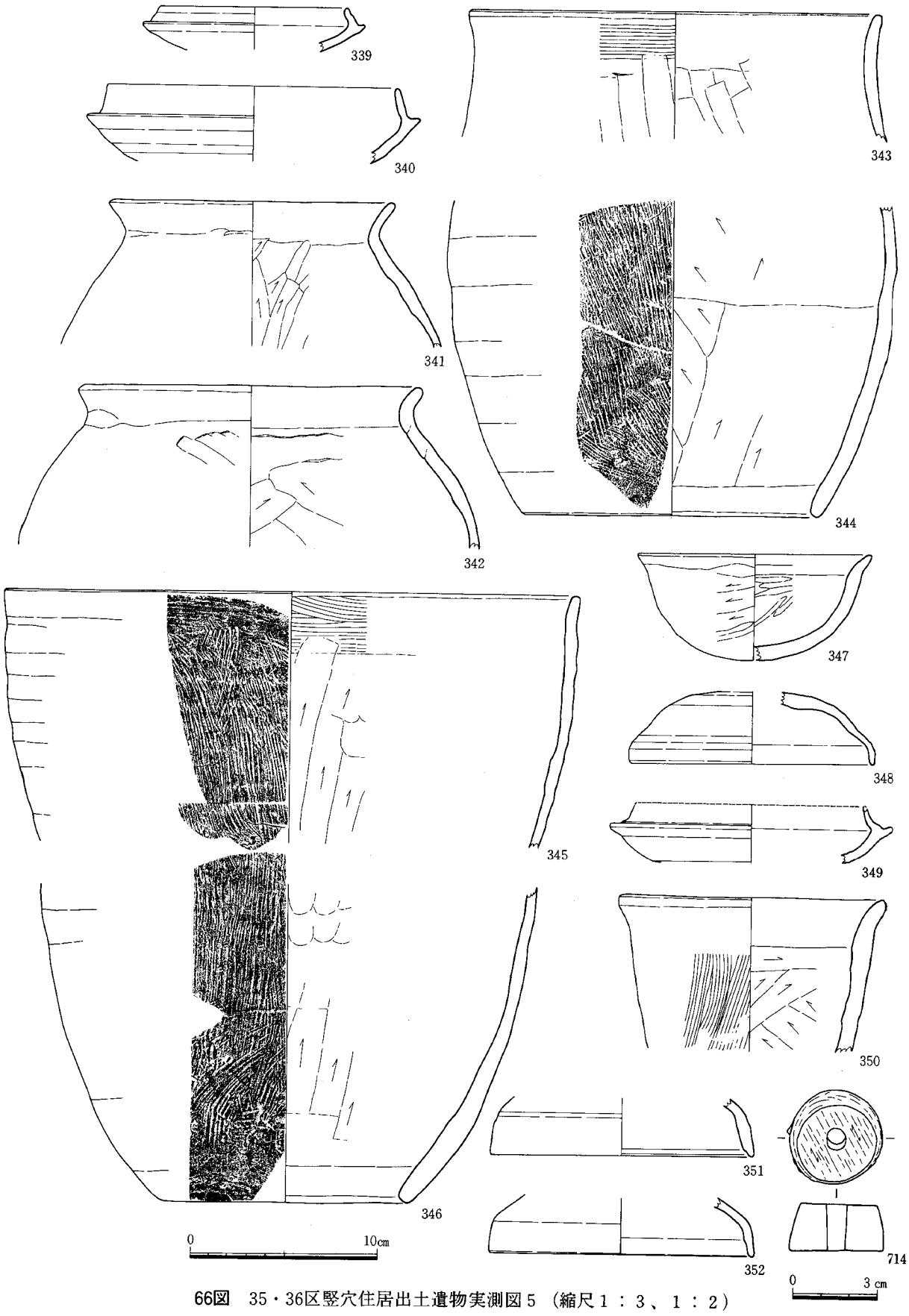
0817竪穴住居(63図・図版11)

35区南側と36区北端にかかる。平面は南北4.63m、東西4m強の長方形と推定できる。壁高は残りの良いところで23cm。竈は西側壁の中央やや北寄りに設けるが、調査区内では0812竪穴住居同様の焚口掘り込みと、両袖の一部を確認したにとどまる。その周囲には焼土、炭化物が多い。床面では対角線上に径43～67cm、深さ45～51cmの2ピットがある。中央の未調査部分を推定すると4本柱の構造となるものであろう。覆土は主に炭化物の混じった暗灰褐色土。

出土遺物(66図350～352・714)　350は土師器小型甕。胴部は張りがなく、口縁の開きも小さい。外面は刷毛目調整。351・352は須恵器杯蓋。351は天井と口縁の間に沈線を入れ、また口縁端内側にも段を設ける。352は口縁内面のやや上位に軽い段がつく。714は上径2.8cm、下径3.3cm、厚さ1.7cmの滑石製紡錘車である。中



65図　35・36区竪穴住居実測図8（縮尺1：60）

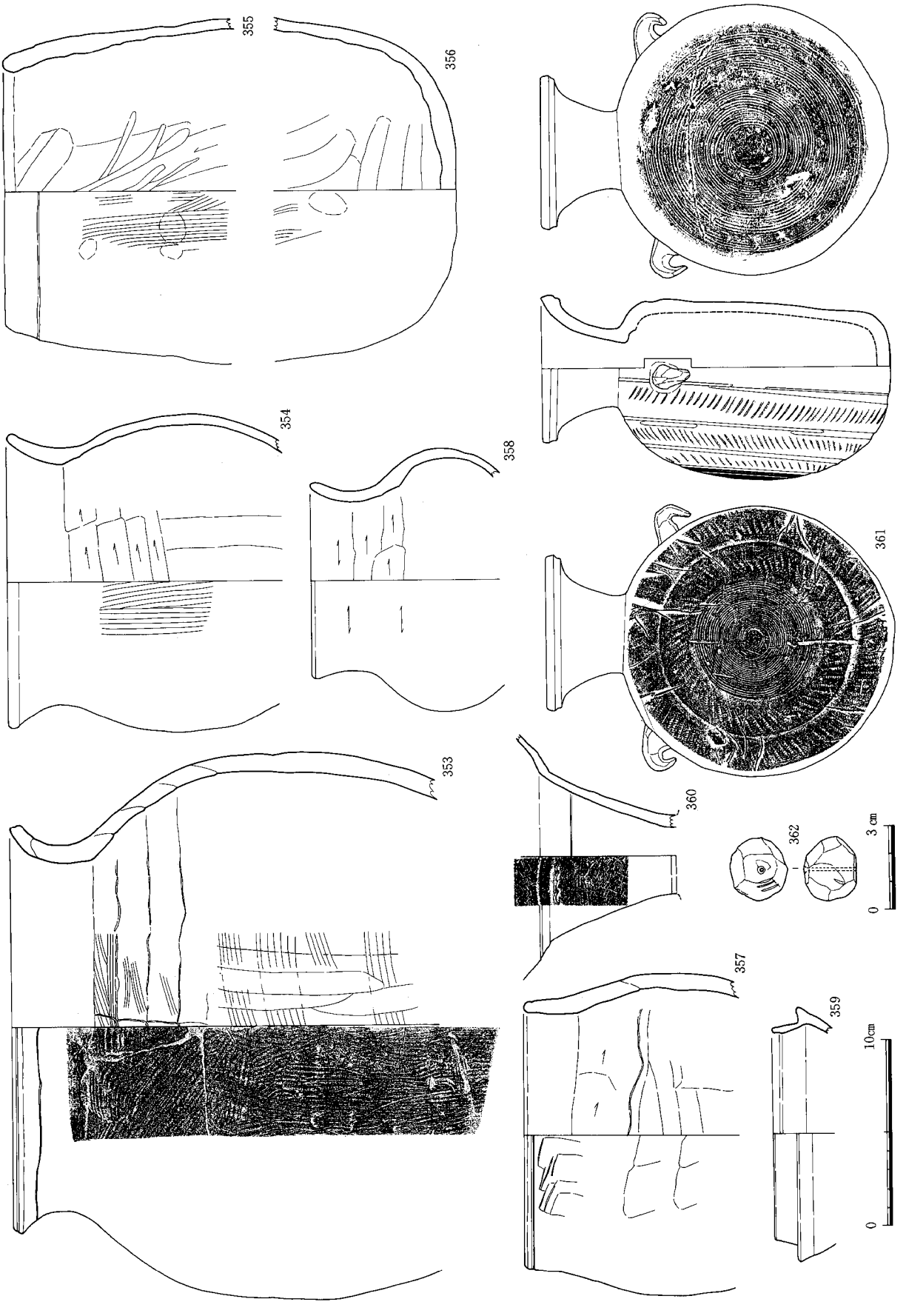


66図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図５（縮尺１：３、１：２）

央に径0.7cmの内孔を貫通させる。全面とも磨いて仕上げる。

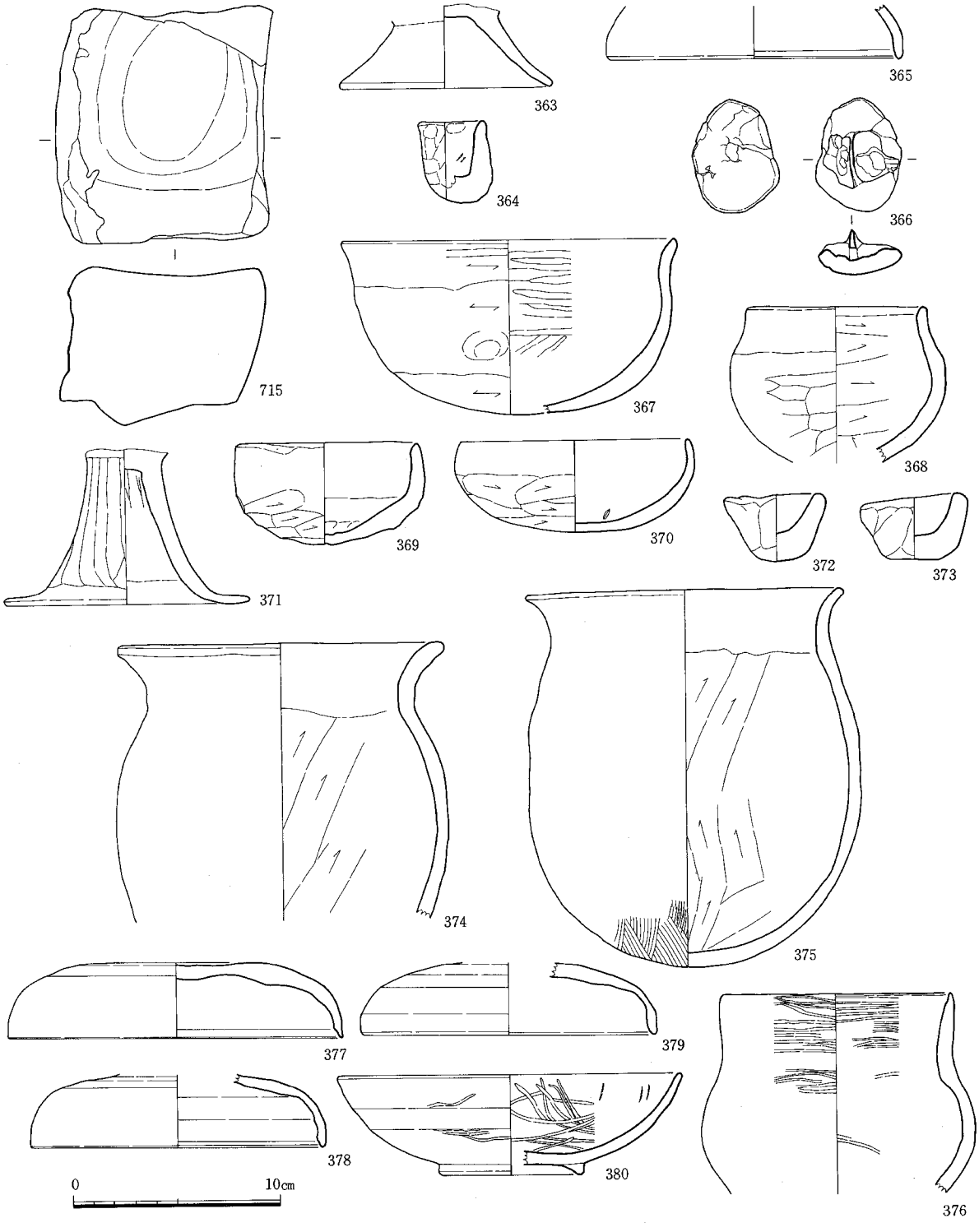
0818竪穴住居(64図・図版12)

0817竪穴住居の南に位置する。平面は南北4.2m、東西3.8mの長方形。ただ35区と36区境の水路が



67図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図６（縮尺１：３、１：２）

住居東半分にかかり、未調査のままとなった。西北隅には床からの高さ20cmのテラスを作る。床面からの壁高は残りの良いところで40cm。竈は西側壁の中央南寄りに設ける。側壁の外に出た部分が平面



68図　35・36区竪穴住居出土遺物実測図７（縮尺１：３）

半円に残るだけで、袖は破壊されている。残る竈本体は黄褐色粘土で作られ、内面は焼ける。焚口は掘りくぼめ、その中央に幅15㎝、高さ30㎝の支石を立てる。その周囲には焼土、炭が多い。床面の竈を挟んだ２ピットが主柱穴で、４本柱の構造になるものと考えられる。柱穴は径26～50㎝、深さ19～32㎝、柱間は2.4mをはかる。0809竪穴住居を切る。

出土遺物（68図363）　須恵器のラッパ状に開く脚。鉢の台部であろう。焼きがあまい。

0819竪穴住居（64図）　36区の中央北寄り、0816竪穴住居の東に位置する。南北幅4.25mの方形状の平面で、壁高は35cm。床面北側は0820・0821竪穴住居との切り合いははっきりせず、掘りすぎている。床面北側にピットがある。

出土遺物（68図364）　土師器。手捏ねのミニチュア鉢片。

0820竪穴住居（64図）　0819竪穴住居に南側を切られる。また0821竪穴住居と重複したため側壁の検出が困難で、床面に至って住居である事を確認した。南北幅4.15cm前後の方形状の平面をもつ。西側壁に竈の焚口底面と考えられる焼土面がかろうじて残る。床面にピットはみられない。

出土遺物（68図365・366）　365は須恵器杯蓋。口縁端内面には段がつく。焼きがあまい。366は土製品。5.5×4.5cmの楕円形。表は凸面とし、裏は中央を両側からくぼめてその間に偏平なつまみを作りだし、孔をあける。精良な胎土を用いるが、作りが雑で、焼成前のひび割れがみられる。

0821竪穴住居（65図）　東南部分を0819・0820に切られる。南北幅5.5m前後の方形状の平面をとる。壁高は35cm。床面に複数のピットがあるが、主柱穴の判断はできない。覆土は暗褐色土。

出土遺物（68図367～373）　いずれも土師器である。367・368は鉢。367が半球形の胴部から口縁が緩く外反するのに対し、368の胴部は球形に近く、口縁は内傾して端部が立つ。367はヘラ磨きで仕上げ、368は内面ヘラ削り、外面ヘラナデとなる。369・370は椀。369が口径の割に身が深い。ともに外底がヘラ削り、他は横ナデ。371は高杯脚部。筒部は縦の削り状のナデで面取りする。372・373は口径4.9～5.1cm、高さ3.1～3.2cmの手捏ねのミニチュア椀である。

0822竪穴住居（65図）　35区北側に位置し、東側壁を0803竪穴住居に切られる。南北幅4.9mの方形状の平面をもつ。壁高は22cm。南側壁は立ち上がりが緩い。調査区内の床面にピットなどはない。53図に土層断面がある。明らかに黄色砂面から切り込んだものであるが、出土遺物は土師器、須恵器片で、他の住居と時期的に大きな隔たりはない。

0823竪穴住居（65図）　0822竪穴住居の東側に位置する。南北幅5.5mの方形状の平面をもつ。壁高は残りの良いところで25cm。竈は西側壁の中央に設ける。黄褐色粘土で作られた竈本体は、南側袖部分を中心に残り、その内面は焼ける。焚口は掘りくぼめ、その全面には浅い溝を切る。また竈の北から東床面には幅45cm前後、深さ5cmの溝状くぼみがめぐる。竈周囲には焼土、炭が多い。床面の竈を挟んだ2ピットが主柱穴で、4本柱の構造になるものと考えられる。柱穴は二段掘りで径55～63cm、深さ50～63cm、柱間は3.35mをはかる。床面中央には厚さ5cmの貼床がある。0803竪穴住居を切り、0805竪穴住居に切られる。

出土遺物（68図374・375）　ともに土師器甕である。口縁は外反し、胴は下膨らみとなる。375の底部に刷毛目がみられるが、ともに外面は二次焼成を受け、器表の剝落が著しい。内面はヘラ削り。

0824竪穴住居（65図）　36区南端に位置する。東西幅5.6mの方形状の平面をもつ。側壁西北隅は丸みをおびる。壁高は10cm前後。床面にピットなどはない。

その他の遺構

0827土坑　36区中央に位置する北東方向に長軸をとる長方形土坑である。南側が0813竪穴住居に切られる。幅2.7m前後、残存長5.5m、深さ20cm。出土遺物はない。

0827溝　35区南側から北北西に1.6m前後の間隔をもって走る2条の溝である。幅30～45cm、深さ10cm前後。竪穴住居を切る。道路の側溝であろうか。出土遺物はない。

その他の遺物（68図376～380）

ピット、検出面から出土したものとして古墳時代土師器壺（376）、須恵器杯蓋（377～379）、中世瓦器椀（380）がある。

3－16－3　小結

本調査区の主体は古墳時代後期の集落である。検出した竪穴住居は23基。平面が方形あるいは長方形、主柱穴は4本、側壁に竈をもつものが多い。これらの住居は調査区のほぼ北端から南端にまでの100mに及んだ。試掘調査などを考え合わせるとこの集落は西側に広がり、その範囲は南北130m前後、東西80m前後になろう。本調査区内でも竪穴住居の切り合いがあり、3回程度の建て替えが確認される。出土した遺物は須恵器Ⅲb期にほとんどおさまるものである。先行するとしてもⅢa期で、およそ6世紀中葉から後半にかけて営まれた集落といえよう。

3－17　38区の調査

3－17－1　概要

38区は36区の西側にあたる。田面の削りが遺構面まで及ぶため調査を行った。発掘面積は1036㎡。耕作土、床土直下が北側では礫混じりの褐色土、南側が黄褐色の砂質土の遺構検出面となる。検出面の標高は北側で34.55m、南側で35.00m。

調査区は東南から北西に走る0901・0951溝状遺構で南北に分断され、その北側では性格が不明な土坑群を、また南側では溝状遺構と柱穴ではないピット群を確認した。調査区西端には南北に一部石を組んだ近世の溝（0981）が抜ける。出土した遺物のほとんどは溝状遺構からのものである。73図419のヘラ切り、板状圧痕底の土師器皿はピット出土のもので、再述しない。

3－17－2　遺構と遺物

土坑（69・70図）

比較的はっきりとした土坑は図示した15基で、形態・規模ともまちまちである。このうち0982、0983、0985、0986土坑が0901溝の南側に位置する。0985と0986には出土遺物がないが、他は古代末から中世の遺物が出土している。紙幅の関係から個々の土坑については実測図にあたってもらうこととし、ここでは図示した出土遺物のみについてふれる。

0955土坑出土遺物（72図381）　土師器椀である。器表の摩滅著しく、調整不明。

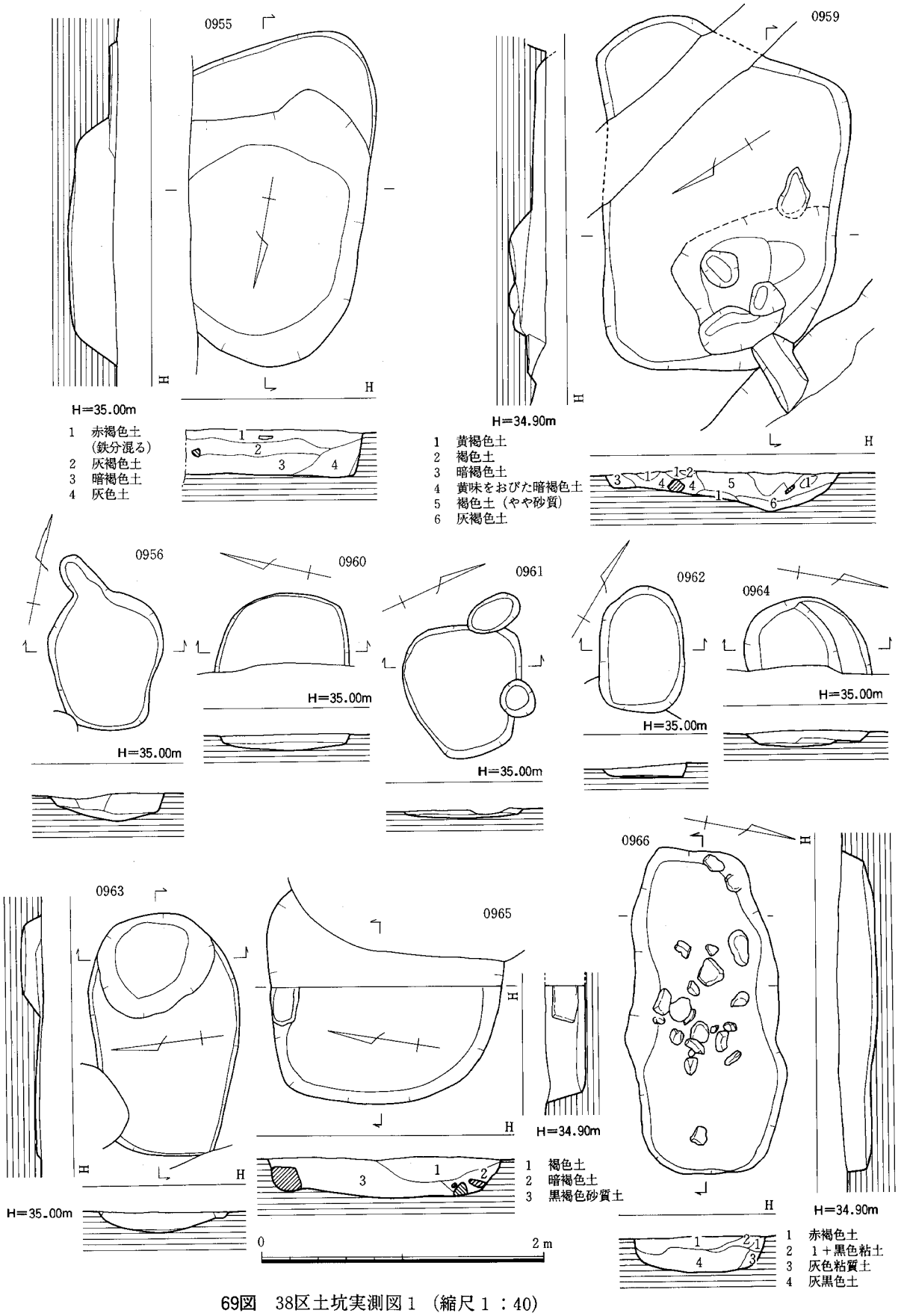
0959土坑出土遺物（72図382・383）　382は土師器椀で、低い高台が付く。残存部は横ナデ。383は須恵器杯で、低い断面台形の高台が付く。

0966土坑出土遺物（72図384）　土師器椀である。内外面ともヘラ状工具によるナデで仕上げる。

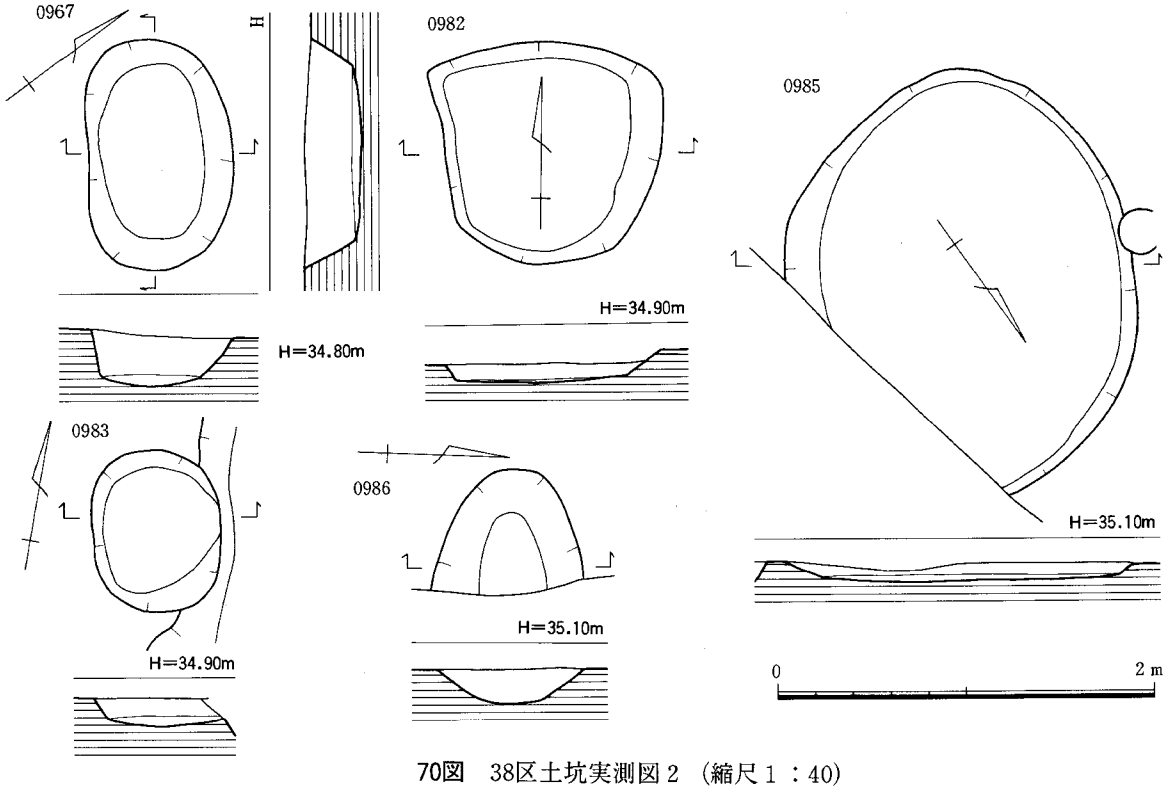
溝状遺構

0901溝（71図・図版12）　調査区東端南寄りから西北に流れる溝である。調査区中央で淀みをつくり北北西に流れる本流と、その西側を平行するように走る0950溝とに分かれる土層断面E－Eの部分で幅2.9m、深さ65㎝、北端近くのA－Aで幅1.6m、深さ58㎝。中央の淀み付近は深さ55㎝前後をはかる。覆土は各土層図に示したが、何度も流れが変わって、検出時の規模をもったことがわかる。0951溝に切られる。

出土遺物（72図385～398）　385・386は土師器。385は甕で、口縁はほとんど直立する。386は甑。把手は円形で、上面に切り込みを入れる。外面は平行タタキの後、下位にカキ目を施す。内面上位は当て具痕が残り、下位は横ナデで仕上げる。387～394は須恵器。387～389は杯蓋。387が口径14.0㎝、高さ4.1㎝、388・389は口径12㎝前後、高さ4.0～4.5㎝。口縁端部はいずれも丸くおさめる。390～393は杯身。口径12.0～13.0㎝、受部径13.7～15.4㎝。立ち上がりは低く内傾する。394は高杯。杯部の法量は杯身と変わるところがない。395・396は糸切り底の土師器皿、397は白磁碗Ⅴ類で混入品である。



69図　38区土坑実測図１（縮尺１：40）



70図　38区土坑実測図２（縮尺１：40）

398は径3.4cmの土製品。表は凸面にし、その上に筋を入れる。裏は中央を両側からくぼめつまみを作り出す。当て具の類であろうか。

0950溝（71図）　調査区中央で0950溝から分岐する。B－B′で幅0.7m、深さ50cm、A－A′で幅1.5m、深さ50cm前後。断面は逆台形に近い。

出土遺物（72図399）　須恵器杯身である。口径13.1cm、受部径15.7cm、高さ4.3cm。

0951溝（71図）　調査区東端、0901溝に重なって現れ、蛇行して西北に走る。E－E′で幅2.8m、深さ45cm、C－C′で幅1.75m、深さ35cm、北端のA－A′で幅1.1m、深さ30cmをはかる。覆土中には大小礫が多い。

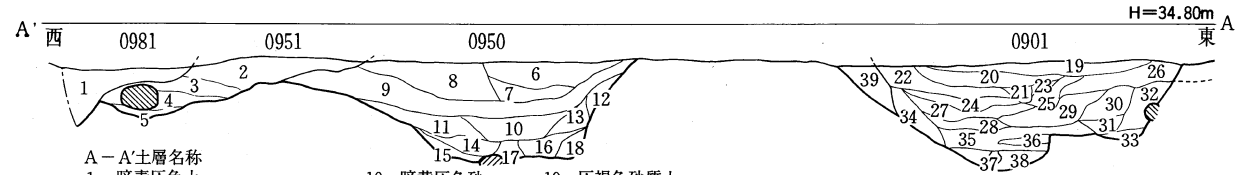
出土遺物（73図400～404）　400は土師器杯。底部はヘラ切りで、口縁内面にはこてあて痕が残る。401は須恵器杯。底部にはヘラ記号を刻む。焼きがあまい。402・403は須恵器甕。ともに内面には当て具痕がみられ、また403外面肩には平行タタキとカキ目が認められる。404は越州窯系青磁碗。オリーブ色の釉をかける。見込みと畳付に目痕が残る。

0952溝（71図）　調査区東南隅を南西－北東に走る。F－F′で幅2.6m、深さ30cm。溝底は北側に向かい深くなる。

出土遺物（73図405～409）　いずれも須恵器である。405は口径12.6cm、高さ4.4cmの杯蓋。天井は丸い。406・407は杯身。口径、高さとも406が大きく、また立ち上がりも高い。407の底部にはヘラ記号がある。408は高杯脚部片。裾は短く立つ。調整は横ナデ。409は椀。底部はヘラ削り、外面はカキ目、内面は横ナデで仕上げる。

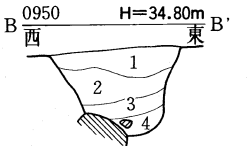
0953溝（71図）　0952溝から分岐して西に走る。G－G′で幅0.6m、深さ30cm。出土遺物はない。

0954溝　調査区東端南側、0901溝と0952溝に挟まれるようにして西肩だけを検出した溝。調査区内での深さは20cm。南北溝か。0901を切る。



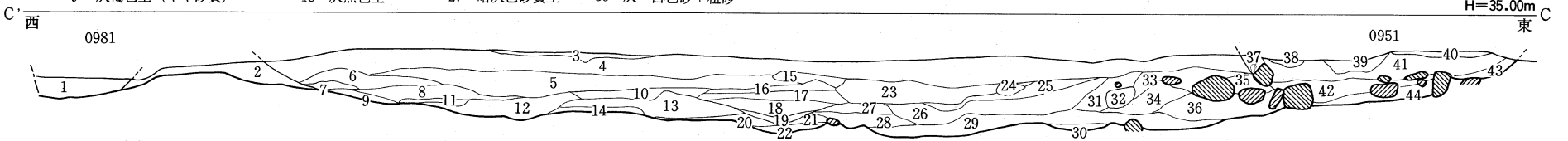
A－A'土層名称

1 暗青灰色土
2 灰褐色土（下部はやや砂質）
3 灰褐色土＋粗砂
4 灰白色粗砂
5 灰褐色砂
6 灰褐色砂質土
7 暗灰褐色砂質土
8 灰白色砂～粗砂＋暗灰色粘質土
9 灰褐色土（やや砂質）
10 暗黄灰色砂
11 暗黄灰色砂質土
12 灰黒色土
13 灰褐色砂質土
14 灰白色粗砂
15 暗灰色粗砂
16 14と同じ
17 灰色砂質土
18 灰黒色土
19 灰褐色砂質土
20 白～灰白色砂
21 暗灰褐色砂質土
22 灰色砂質土
23 22と同じ
24 白色砂～粗砂
25 24と同じ
26 黄灰色砂質土
27 暗灰色砂質土
28 黄灰色砂質土（上部に鉄分含む）
29 黄灰色砂
30 暗黄灰色砂質土
31 暗黄灰色砂
32 暗灰褐色土
33 灰褐色砂
34 褐色土
35 灰～白色砂＋粗砂
36 灰黒色砂質土
37 黒色粘質土ブロック
38 灰色砂
39 黒色粘質土（地山）



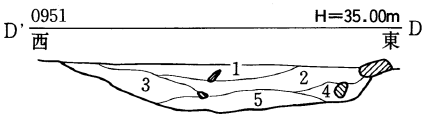
B－B'土層名称

1 暗褐色土
2 暗褐色砂混じり土
3 暗褐色土＋黄白色砂
4 黒褐色土



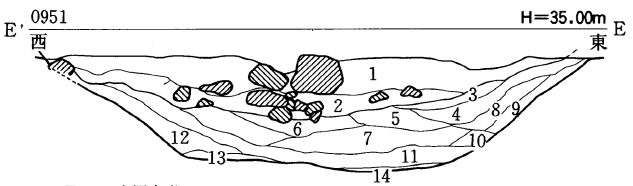
C－C'土層名称

1 暗青灰色土
2 黒褐色粘質土（地山）
3 褐色土＋黄褐色土
4 灰褐色土
5 暗灰褐色粘質土
6 暗灰褐色土＋灰色砂
7 白色粗砂
8 暗黄灰色砂質土
9 黒色粘質土
10 灰色砂質土
11 7と同じ
12 青灰色微砂質土（白色砂混じる）
13 青灰色砂質土＋黒褐色粘質土＋黄褐色土
14 青灰色砂質土＋黄褐色土
15 暗黄灰～白色粗砂
16 暗灰色砂質土
17 暗黄灰色微～細砂
18 暗黄灰～白色粗砂
19 褐色粗砂（鉄分含む）
20 白～黄白色粗砂
21 20と同じ
22 青灰色土（微砂）
23 暗灰褐色砂質土
24 暗黄灰色砂
25 暗青灰色砂質土
26 灰褐色砂質土（砂ブロック混じる）
27 暗青灰色砂質土＋黄灰色砂
28 黄白色砂
29 白～黄灰色粗砂
30 黄灰色細砂
31 暗黄褐色砂質土
32 黄褐色砂質土
33 灰褐色砂質土（微砂）
34 灰褐色砂混じり土
35 白色粗砂
36 暗灰褐色砂質土
37 褐色土
38 37と同じ
39 37と同じ
40 褐色砂混じり土
41 黒褐色土
42 礫、鉄滓、土器層
43 暗褐色土
44 灰褐色砂混じり土



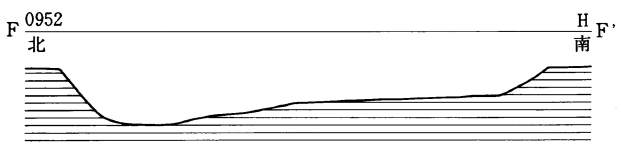
D－D'土層名称

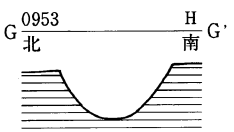
1 黄褐色土
2 黒褐色土
3 灰褐色土
4 3と同じ
5 粗砂・礫

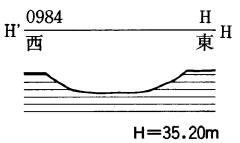


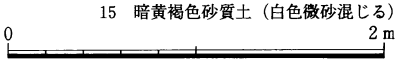
E－E'土層名称

1 黒褐～暗褐色土
2 灰褐色土（礫、粗砂多く混じる）
3 黄褐色土
4 褐色土
5 白色砂～粗砂
6 灰褐色砂質土
7 白色粗砂
8 暗褐色土
9 黒褐色土（白色微砂若干混じる）
10 黒褐色土（粗砂混じる）
11 黒褐色土
12 暗褐色砂質土
13 灰褐色粗砂
14 13と同じ
15 暗黄褐色砂質土（白色微砂混じる）

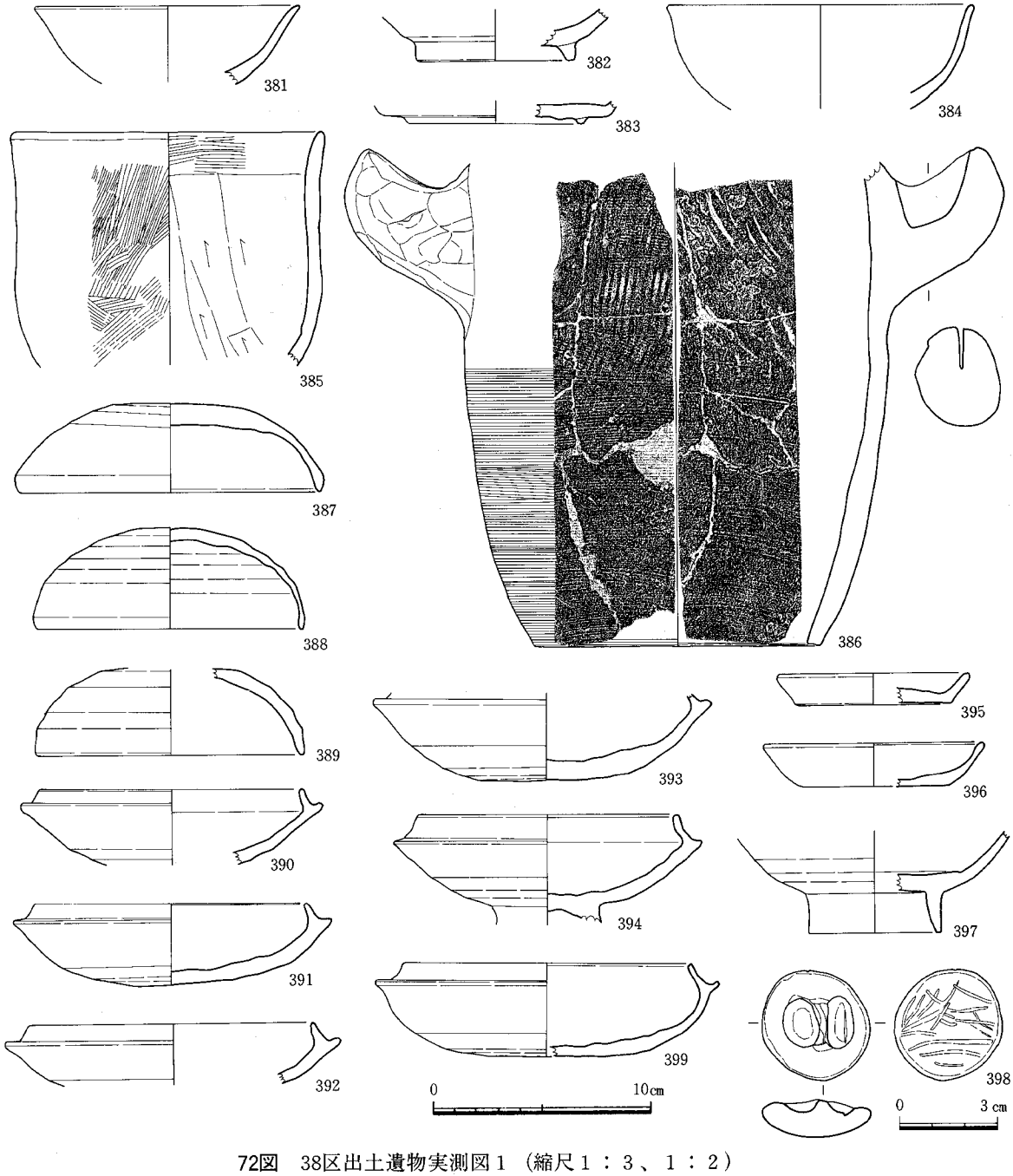








71図　38区溝土層断面実測図（縮尺１：40）



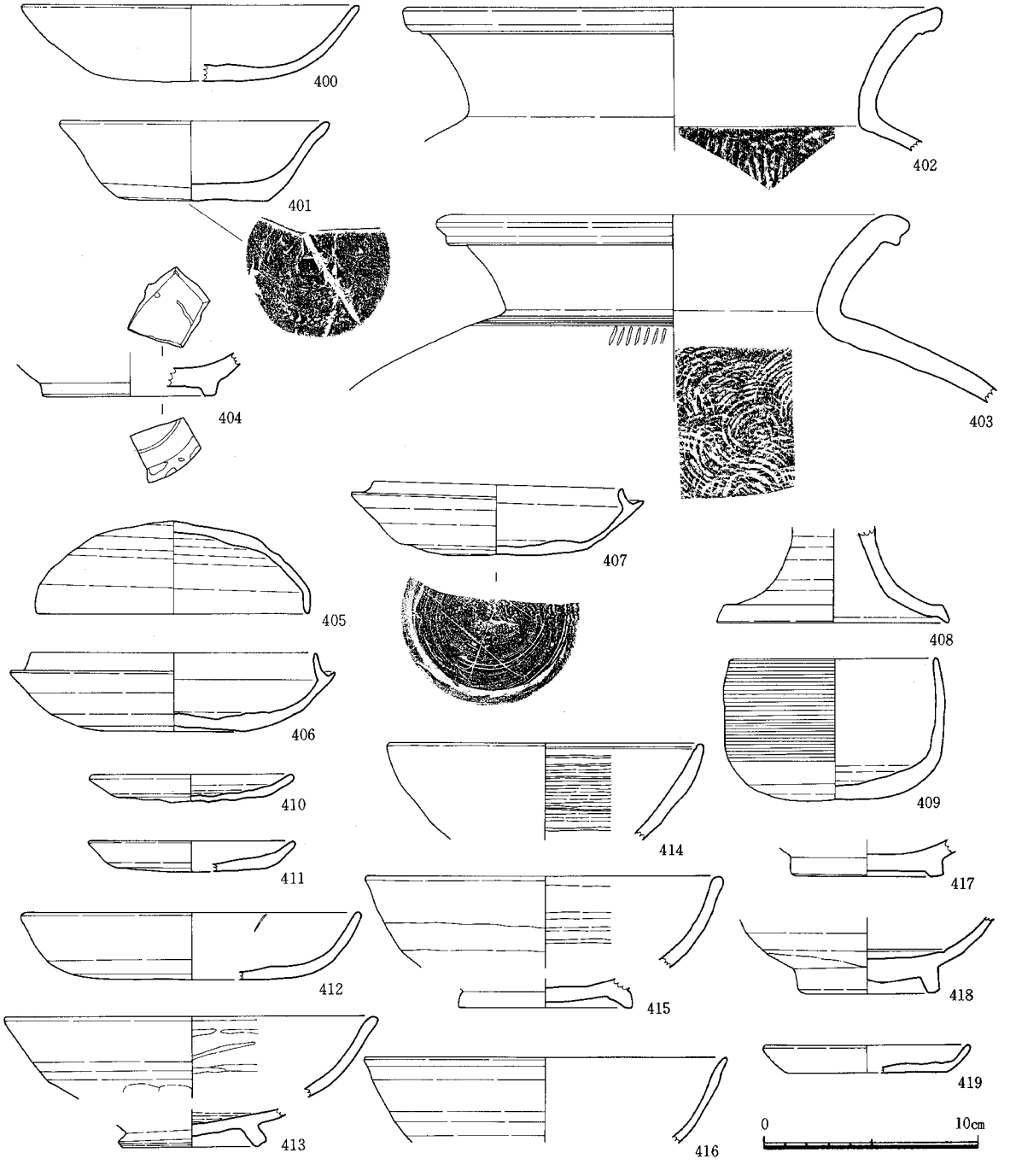
72図　38区出土遺物実測図１（縮尺１：３、１：２）

出土遺物（73図410～418）　410～413は土師器。410・411は底部糸切りの皿で、口径9.5～9.6㎝、高さ1.2～1.5㎝。ともに板状圧痕がある。412は杯。底部はヘラ切りで板目が残る。413は高台付椀。内面はヘラ磨き、外面は横ナデ調整。414は楠葉型の瓦器。内面は口縁下に沈線をめぐらせ、ヘラ磨きで仕上げる。外面は上位は横ナデ、下位はナデ。415は黒色土器Ａ類椀。高台は低く張る。内面はヘラ磨き。416～418は白磁碗。灰白色の釉をかける。418は見込みに沈線をめぐらす。

0980溝　調査区東北隅を北に走る幅1.1m、深さ５㎝の浅い溝である。

0984溝（71図）　調査区南側、0953溝の北から始まり、北北西に走る溝。Ｈ－Ｈ′で幅0.7m、深さ14㎝。出土遺物はない。

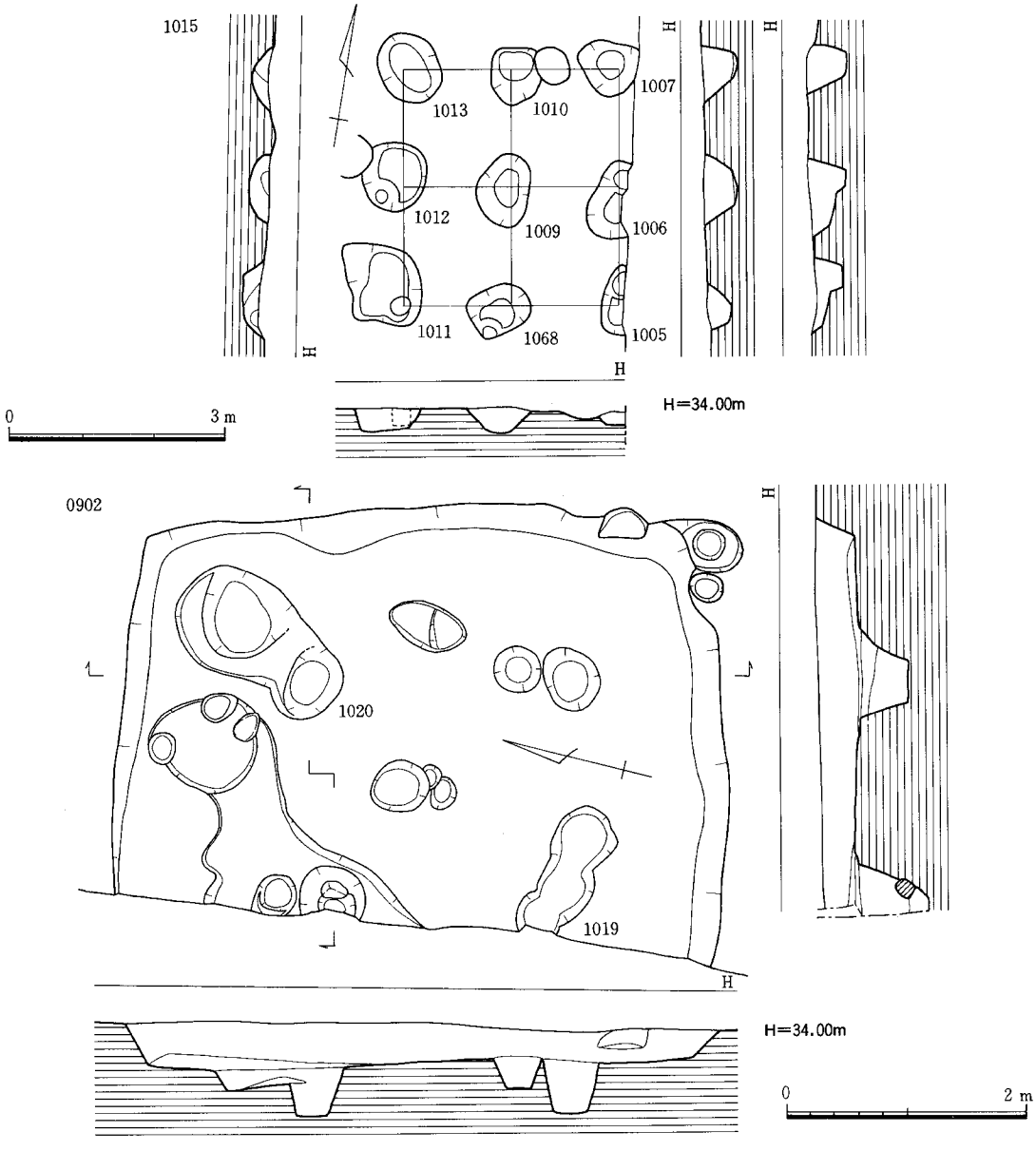
３－17－３　小結



73図　38区出土遺物実測図２（縮尺１：３）

本調査区では明確な生活の跡を見いだすことができなかった。溝は0901、0950、0952が古墳時代後期、0901を切る0951が古代末、0954が中世初期の時期に相当しよう。いずれも自然流路と考えられる。0901は第10次調査で検出した西北に走る直線の溝の延長上にあり、接続する可能性がある。

３－18　39区の調査



74図　39区堀立柱建物・竪穴住居実測図（縮尺１：100、１：60）

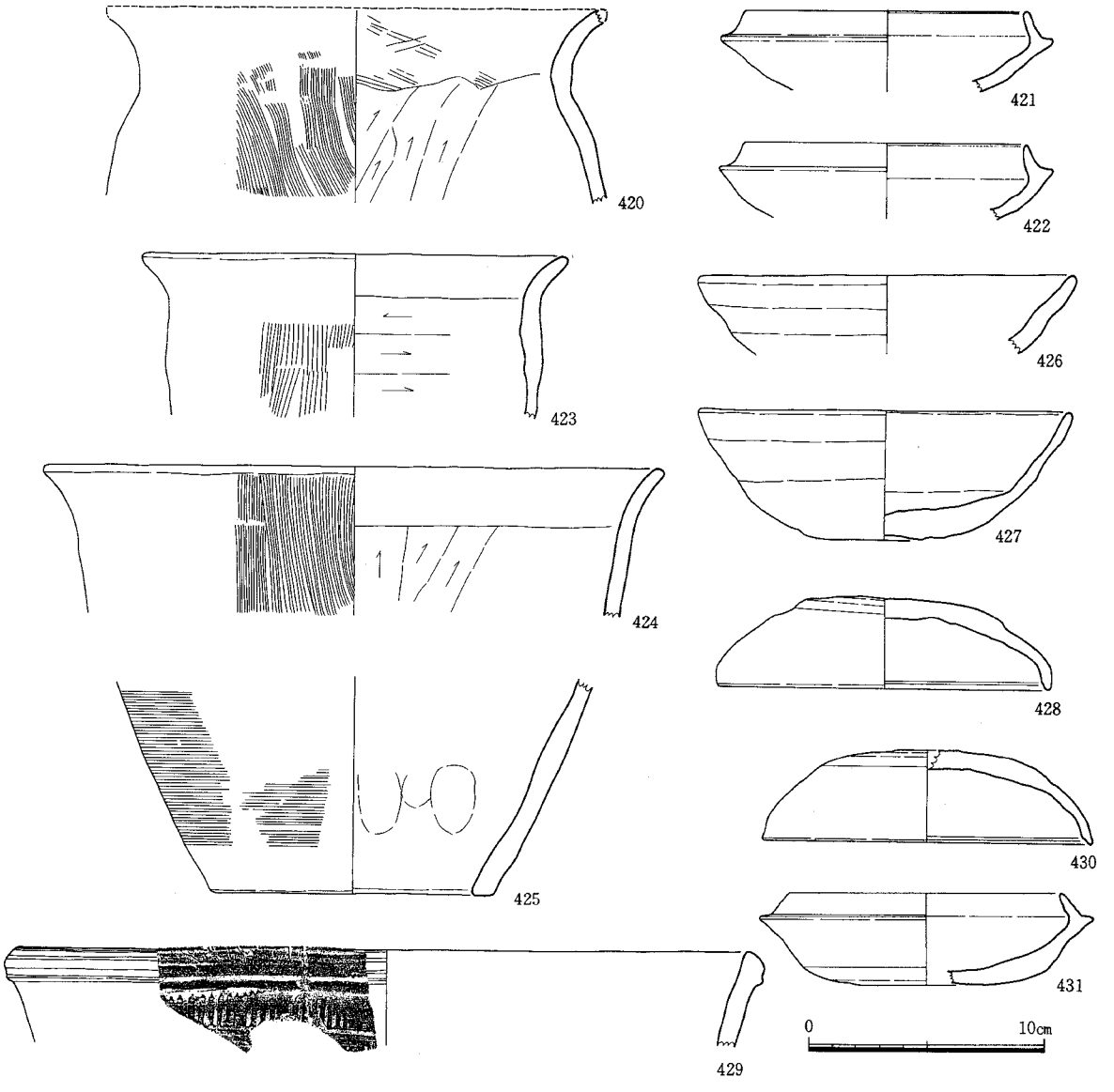
３－18－１　概要

39区は３次調査の中では南寄りに位置し、40区の西側に位置する。当区は排水路新設に伴い調査を行ったため、南北に細長い調査区となった。遺構面は粗砂まじりの黄茶褐色である。標高は北側で33.5m、南側で33.7mを測る。本調査により掘立柱建物・竪穴式住居・溝・ピットを検出した。

３－18－２　遺構と遺物

掘立柱建物

1015掘立柱建物(74図・図版12)　調査区の北寄りに位置する。東西両側とも遺構が延びる可能性があるが現状では２間×２間の総柱建物である。主軸をN－10.5°－Wにとる。梁間は全長330cm、桁行きは全長300cmを測り、柱間は150～165cmである。柱穴は不整円形を呈し、径80～112cm、深さ37cmを測る。この南側で６間の柱穴の並びを確認した。間隔がやや不規則であるが、7つのピットが並びそのうち３個で柱痕跡を検出した。西側に遺構が延びるものと思われる。



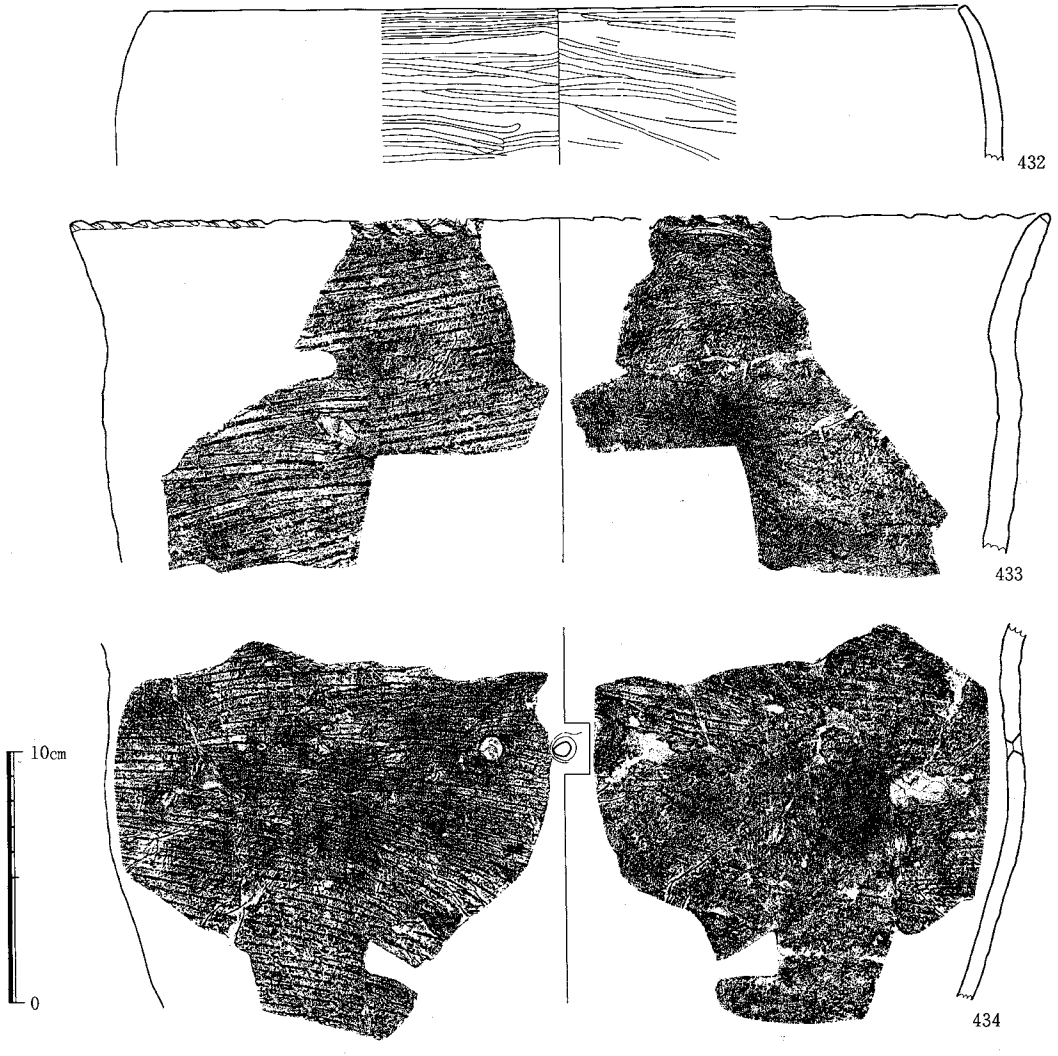
75図　39区出土遺物実測図（縮尺１：３）

出土遺物(75図420～422)　420は土師器甕である。褐色を呈し、焼成は良好である。外面頸部から胴部にかけて刷毛目を施す。421・422は須恵器坏である。421は口径11.8cmを測り灰色を呈す。焼成は良好である。422は口径12.0cmを測る。茶褐色色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂を多く含む。

竪穴住居

0902竪穴住居（74図・図版12）　調査区の中央に位置する。西側が調査区外にかかる。南北全長255cmの方形プランをもち主軸をN－15°－Wにとる。検出面から床面まで19.5cmを測る。主柱穴は４本で柱間は心々で南北219cm、東西198cmを測る。いずれも不整円形を呈し、径23～33cm、深さ19.5～31.5cmを測る。床面中央にピットを検出した。この住居の南2.5mでも竪穴式住居の痕跡らしきものを検出した。西側が調査区外にかかる。南北長220cmの方形プランと思われる。東壁に接して焼土があり、竈の痕跡と思われる主柱穴は４本で柱間は心々で150cmを測る。柱穴はほぼ円形を呈する。南側を溝に切られる。

出土遺物(75図423～429)　423は土師器甕である。口径17.5cmをはかる。暗褐色を呈し、焼成は良好である。424は土師器甕である。口径25.4cmを測る。茶褐色を呈す。外面は縦方向の刷毛目、内



76図　40区出土遺物実測図（縮尺１：３）

面は縦方向の削りを施す。焼成は良好。425は土師器甑である。底径14.4cmを測る。外面はカキ目、内面は横方向にナデを施している。焼成は良好。426・427は土師器坏である。426は口径15.7cmを測る。褐色を呈し、焼成は良好である。427は口径15.6cm、器高5.4cmを測る。淡褐色を呈し焼成は良好である。428は須恵器坏蓋である。口縁径14cmを測る。429は須恵器大甕口縁である。口径30.5cmを測る。頸部外面に平行タタキを施す。褐色を呈し、焼成は良好である。

溝状遺構

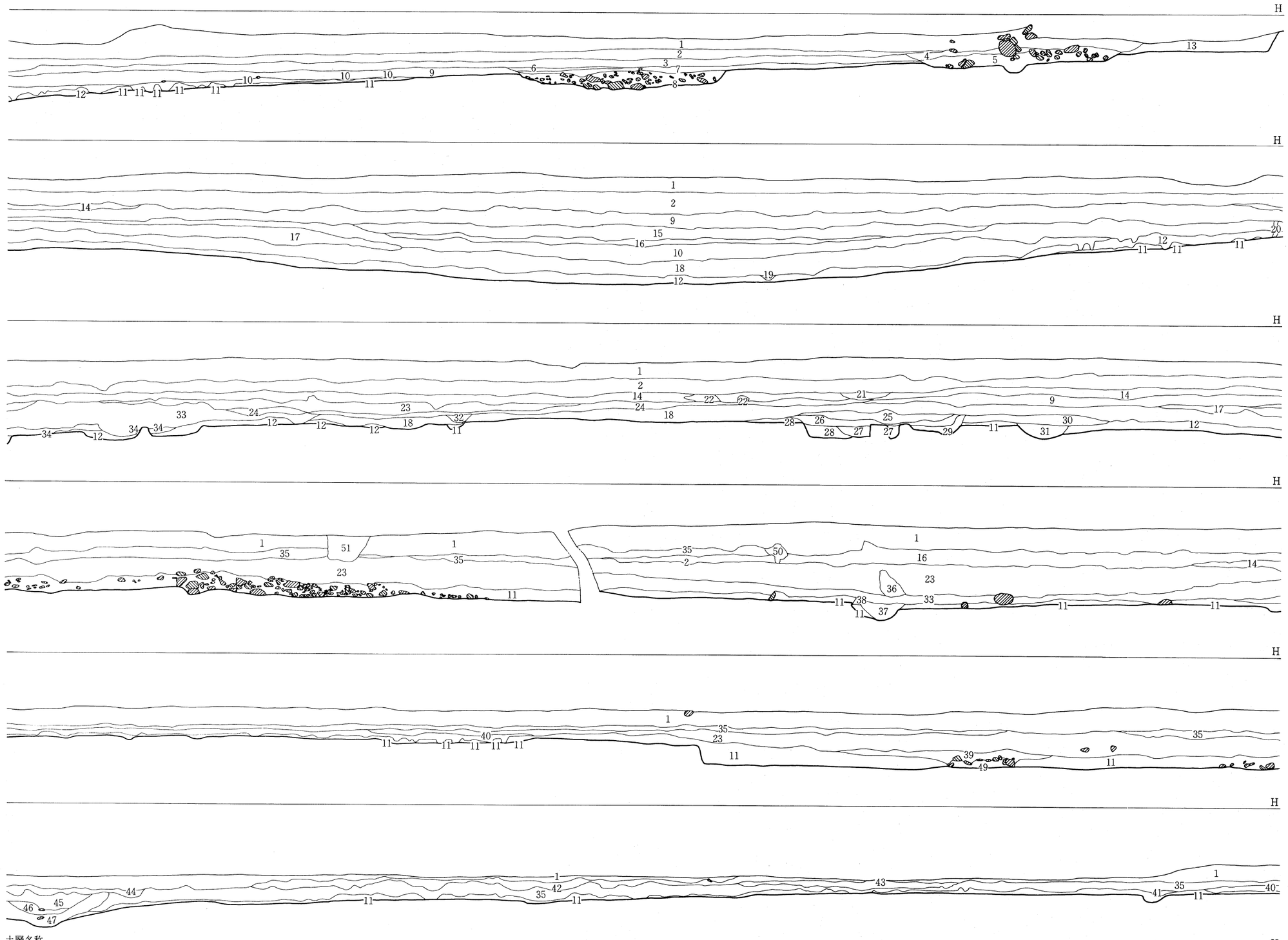
1016溝　調査区の南寄りで１条検出した。幅86～114cmで東西方向に流れる。深さ33cmを測る。

その他の出土遺物（75図 430・431）

430は須恵器坏蓋である。口径13.8cm、器高3.9cmを測る。灰色を呈す。431は須恵器坏である。口径11.5cm、器高3.9cmを測る。暗灰色を呈す。焼成は良好。

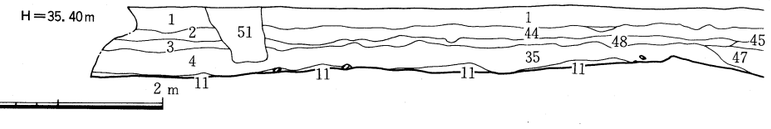
３－18－３　小結

調査区が４ｍ×25.5ｍと狭く長くて、完全に掘りきった遺構が少ない。古墳時代～中世の集落と思われる。35区の南側と36区で同じぐらいの住居跡が出土しているので同じ集落の東端にあたるのではないだろうか。



土層名称

1　灰褐色土
2　暗茶褐色土
3　黄褐色土（白色砂多く混じる）
4　灰褐色土（鉄分含む）
5　茶褐色土（礫多く混じる）
6　黄茶褐色土（白色砂多く混じる）
7　黄色土
8　茶褐色土（礫多く混じる）
9　褐色土（白色砂多く混じる）
10　暗茶褐色土（17より少し明るい）
11　黄褐色砂質土（地山）
12　暗黄褐色土（褐色土ブロック混じる）
13　灰褐色土＋黄褐色土
14　褐色土（白色砂多く混じる）
15　暗茶褐色土
16　暗茶褐色土（白色砂、赤褐色土混じる）
17　暗茶褐色土（褐色土、白色砂多く混じる）
18　暗茶褐色土（白色砂多く混じる）
19　茶褐色土（黒色土、黄褐色土混じる）
20　褐色土
21　茶褐色土（暗茶褐色土ブロック混じる）
22　黄茶褐色土（白色砂多く混じる）
23　暗褐色土（白色砂少し混じる）
24　暗茶褐色土（鉄分含む）
25　暗茶褐色土
26　暗茶褐色土（粗砂混じる）
27　暗茶褐色土（黄色砂少し混じる）
28　明茶褐色土（黄色砂ブロック多く混じる）
29　暗茶褐色土（黄色砂ブロック、白色砂多く混じる）
30　暗茶褐色土（若干の黄色砂粒子、白色砂多く混じる）
31　茶褐色土（黄褐色砂多く混じる）
32　暗茶褐色土（白色砂、黒色土、褐色土混じる）
33　黒褐色土（土器少し混じる）
34　暗茶褐色土（褐色土ブロック混じる）
35　暗茶褐色土
36　灰褐色土
37　暗茶褐色土（褐色土混じる）
38　暗茶褐色土
39　黄褐色土（黒褐色土少し混じる）
40　暗茶褐色土（黄褐色砂ブロック混じる）
41　褐色土（黄褐色砂ブロック多く混じる）
42　黄褐色土
43　茶褐色土（白色砂多く混じる）
44　暗茶褐色土
45　暗褐色土（白色砂多く混じる）
46　45＋（礫多く混じる）
47　暗茶褐色土
48　褐色砂質土
49　黄褐色土（礫多く混じる）
50　暗茶褐色土（白色砂多く混じる）
51　攪乱



77図　40区北壁土層断面実測図（縮尺1：60）

3 －19　40区の調査

39区南端から41区に向かい東西に延びる幅４ｍ、長さ112ｍの細長い調査区である。排水路の新設に伴い調査を行った。発掘調査面積504㎡。南壁の土層断面を77図に示したが、他地区と異なり、遺構面までの覆土が厚く、東側部分では１ｍ以上に及んだ。検出面には北、西北、東北に走る溝状遺構を多数確認したが、いずれも自然流路である。もともと南北谷を形成していたものと考えられる。ここでは全体図（付図）と土層図を示すにとどめ、個々の遺構に付いては説明を加えない。

出土遺物（76図432～434）　いずれも縄文土器である。432は鉢で、内外面ともヘラ磨きを加える。晩期か。表土出土。433・434は粗製深鉢。433は口縁を外反させ、口縁端には刻目を入れる。外面は条痕、内面は幅の広い板ナデ風となる。434は胴部に焼成後の穿孔をもつ。内外面とも条痕。433は1018、434は1017から出土した。

3 －20　41区の調査

3 －20－１　概要

41区は事業地の南東部に当たり、南北に長く伸びる調査区となっている。調査面積は1036.29㎡である。遺構面は黄褐色砂質土を基調とする。遺構は古墳時代に属するものを主体とし、掘立柱建物10棟、竪穴住居跡10基（内竈を残すもの５基）、ピット多数を検出している。この他中世に属する生活遺構・埋葬遺構も存在する。また遺構面とした黄褐色砂質土には縄文土器が包含されており、トレンチを設定し遺構・遺物の検出に努めたが、遺物の出土のみで明確な遺構は存在しない。

調査区西壁の中央部以南の土層断面を78図に示した。遺構面は北側端では標高34.2ｍを測り、耕作土・床土下層の黒色土除去下の黄褐色砂～砂質土で一部に拳大礫が多く混じる箇所がありやや不安定な状況である。また調査区中央付近に幅16ｍ、深さ60cm程度の溝状の落ち込みが調査区を横断している。この落ち込みは上層が混入のない黒色粘質土を基調とし、下層は灰褐色砂質土が堆積している。土層は水平堆積を基本とし人為的な掘削・埋め戻しの痕跡は認められない。自然に開析された丘陵が腐蝕土等により自然に埋没していったのものであろう。埋土にも遺物は殆ど含まれておらず、埋没時期は不明であるが、古墳時代以前の古い時期の埋没であろう。またこの落ち込み以南からは遺構面は安定した黄褐色粘質土となり検出遺構の数も増加する。標高は中央部で約35ｍ、南端で35.2ｍである。

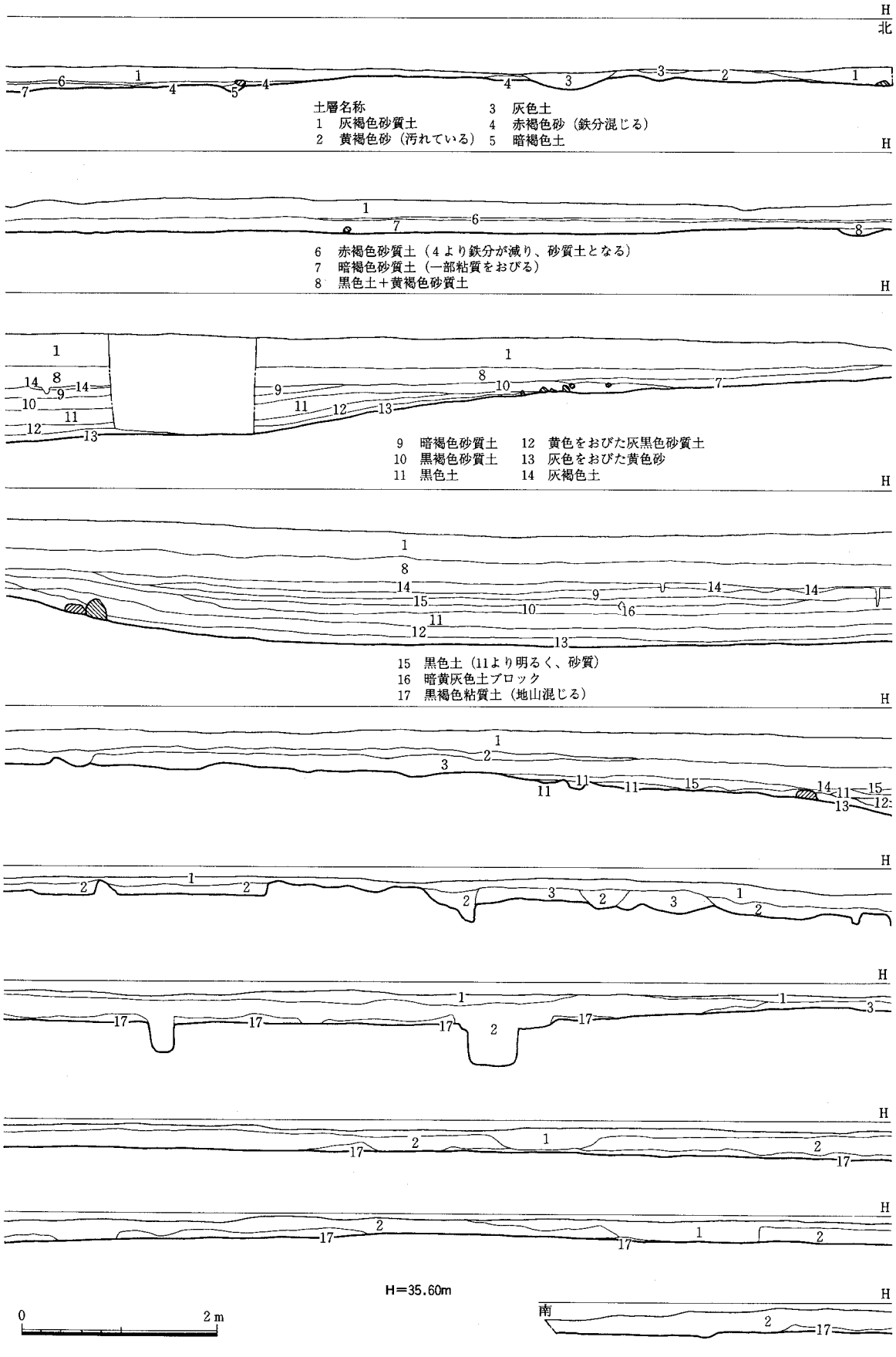
3 －20－２　遺構と遺物

掘立柱建物

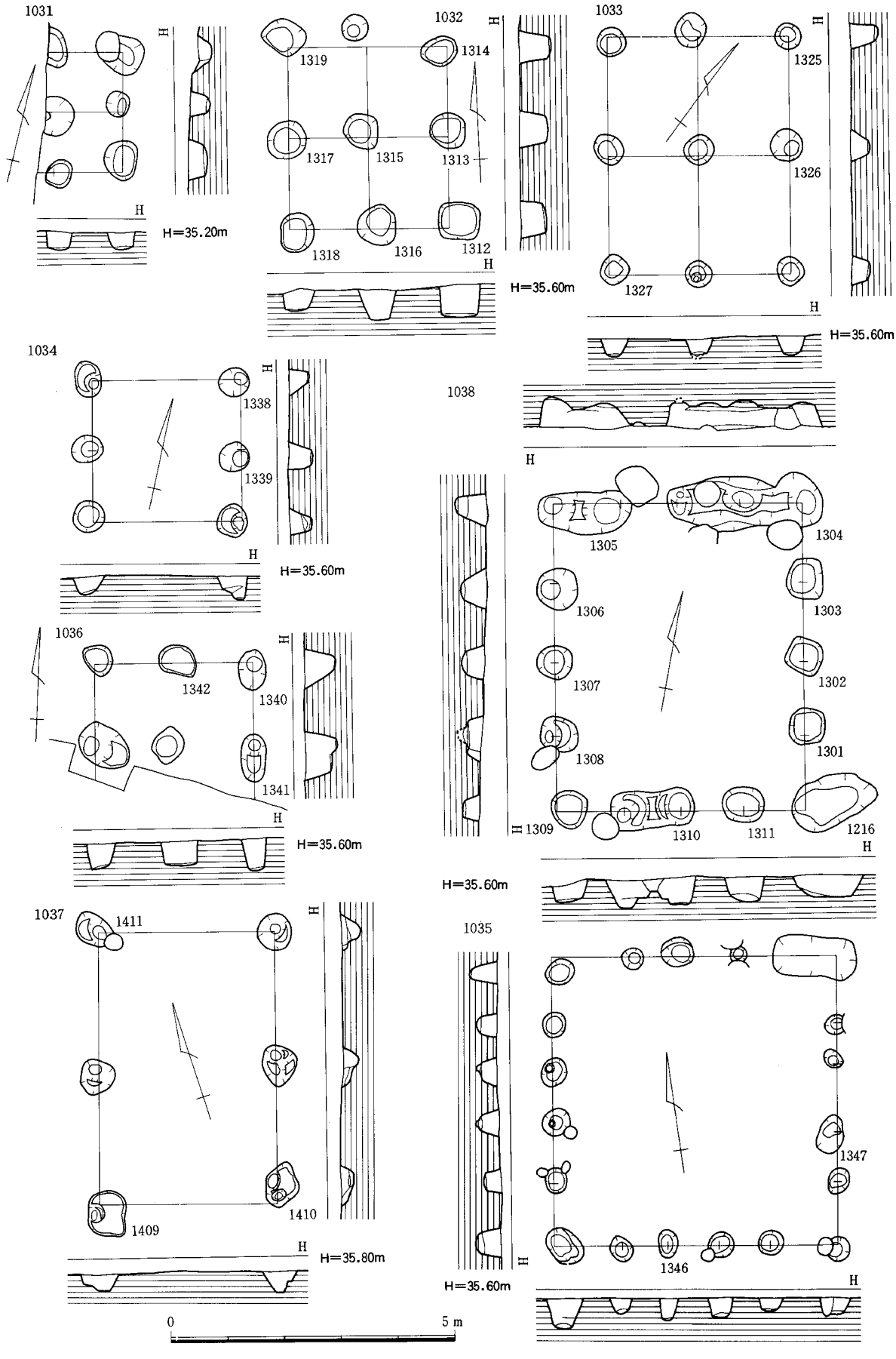
1031掘立柱建物（79図）　調査区中央で検出した建物で西側を調査区外に伸ばす。調査区内で２間×１間を検出しており、建物規模としては２間×２間の総柱建物と考えられる。建物主軸をＮ－14°－Ｗにとり、柱間は1.2ｍ を測る。埋土は黒褐色粘質土～砂質土である。出土遺物は無く時期的には不明瞭である。

1032掘立柱建物（79図）　調査区南側で検出した2 間×2 間の総柱建物である。1038掘立柱建物を切り、建物主軸をＮ－2° 50′ －Ｅにとる。建物規模は南北長 3.2ｍ、東西長2.8ｍを測る。掘り方は径70cm程の略円形で、ピットの深さは50cm程度を測る。埋土は暗褐色～黒褐色土である。出土遺物は土師器甕、須恵器甕・蓋坏がある。６世紀後半に属するものか。

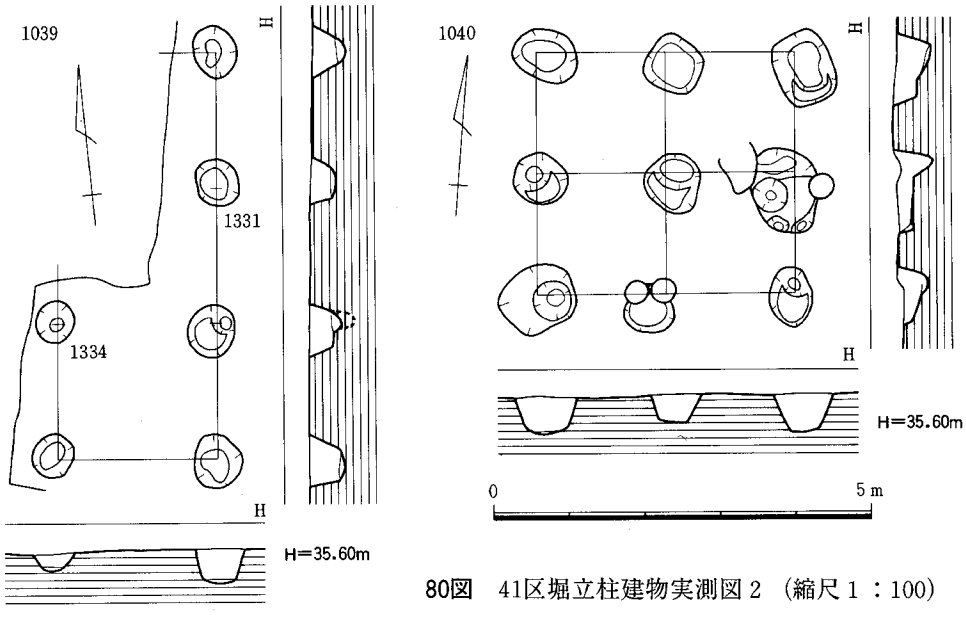
出土遺物（81図435）　435は須恵器坏身である。1/6程の破片で、復元口径12.2cm、器高2.2cmを測る。受け部は立ち上りが小さく、内傾している。外底面は1/2迄回転ヘラ削りを行い、一部カキ目



78図　41区西壁土層断面実測図（縮尺1：60）



79図　41区堀立柱建物実測図１（縮尺１：100）



80図　41区堀立柱建物実測図２（縮尺１：100）

状となる。

1033掘立柱建物（79図・図版13）　調査区南側で検出した２間×２間の総柱建物である。1038掘立柱建物を切り、建物主軸をN－37°－Wにとる。建物規模は南北長4.2m、東西長3.2mを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物は土師器甕破片がある。

1034掘立柱建物（79図・図版13）　調査区南端部で検出した１間×２間の掘立柱建物である。建物主軸をN－13°－Wにとる。建物規模は南北長2.5m、東西長2.6mを測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物は土師器甕・椀、須恵器甕破片がある。

出土遺物（81図436）　土師器椀である。器壁は磨滅がすすむが内面には痕跡的に横方向のヘラ磨きが残る。色調赤褐色を呈し、胎土には石英微砂粒を含む。

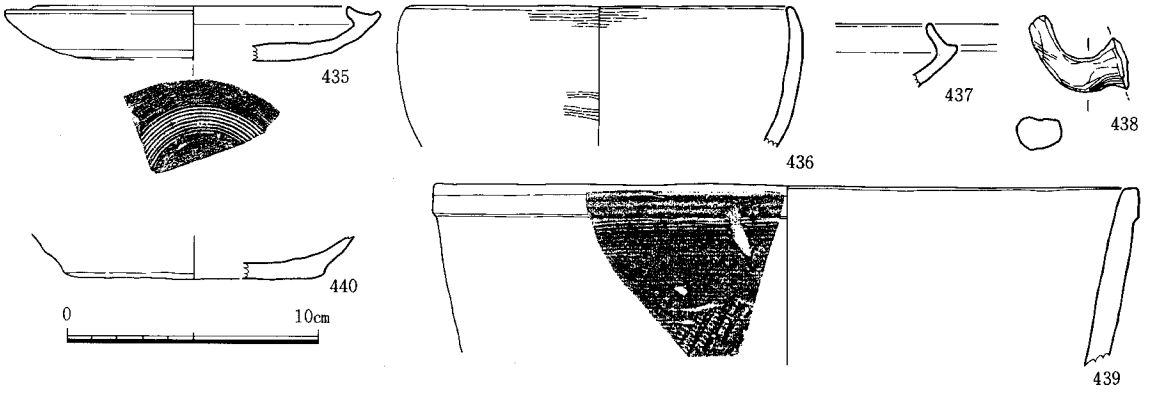
1035掘立柱建物（79図）　調査区南端部で検出した５間×５間の掘立柱建物である。埋土は暗褐色土で検出時から周辺との埋土の違いも有り明瞭に認識できた建物である。建物主軸をN－13°－Eにとり、東西長・南北長いずれも5mを測る。南柱列の柱間は西から120cm、80cm、90cm、90cm、120cm を測る。また東列は北から110cm、70cm、120cm、90cm、110cmを測る。北及び東列は中央４本の柱が２本一組で機能しているとも考えられるような配置である。出土遺物には土師器及び須恵器細片が数点有るのみである。

1036掘立柱建物（79図）　調査区南端部で検出した建物で南側を調査区外に伸ばす。調査区内で２間×１間を検出しており、建物規模としては２間×２間＋αの総柱建物と考えられる。建物主軸をN－4°－Wにとり、柱間1.5mを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。出土遺物は土師器甕・椀、須恵器坏身小破片があり、須恵器から７世紀初頭に位置づけられる。

出土遺物（81図437・図版13）　437は須恵器坏身である。小破片のため細部は明らかではないが、受け部立ち上がりは内傾し、低くなる。

1037掘立柱建物（79図）　調査区南東部で検出した１間×２間の掘立柱建物である。建物主軸をN－17°－Eにとる。梁行3.1m、桁行4.8mを測る。埋土は暗褐色土～褐色土で、径20cm程度の柱痕跡を残すピットが半数ある。出土遺物は土師器及び須恵器甕小破片があるのみである。

1038掘立柱建物（79図・図版13）　調査区南側で検出した４間×４間の掘立柱建物である。1032・1033掘立柱建物に切られている。建物主軸をN－11°－Wにとり、梁行・桁行共に４間を測る。北側



81図　41区堀立柱建物出土遺物実測図（縮尺１：３）

梁行は布掘り状となる。柱間は北側梁行はいずれも110cm、東側桁行は北から140cm、140cm、130cm、130cmを測る。出土遺物には土師器甕及び須恵器甕・蓋坏小破片がある。６世紀後半に属するものか。

出土遺物（81図438・439）　438は小型の把手である。焼成は堅緻で、暗赤褐色を呈す。外面には刷毛目が残っている。439は土師器甑である。口縁端部は折り曲げにより、玉縁を意識しているようである。胴部には横ナデを行い一部にタタキの痕跡が残る。須恵器の製作技法を意識した製品である。

1039掘立柱建物（80図）　調査区南側で検出した西側を調査区外に伸ばす建物である。建物は主軸をＮ－６°－Ｅにとり、南北長３間で5.4mを測り、柱間は1.8mである。西側の多くは調査区外にあり、梁行１間若しくは総柱建物の可能性がある。出土遺物には土師器坏、須恵器甕破片がある。

出土遺物（81図440）　土師器坏片である。底面はヘラ切りによる。焼成は堅緻で、淡桃色を呈す。

1040掘立柱建物（80図・図版13）　調査区南側で検出する。建物は主軸をＮ－４°－Ｗにとる２間×２間の総柱建物である。1041竪穴住居の竈下で柱穴を検出しており、この住居跡より先行することは明らかである。柱間は南北方向が170cm、東西方向が160cmである。埋土は暗褐色土で遺物は出土していない。

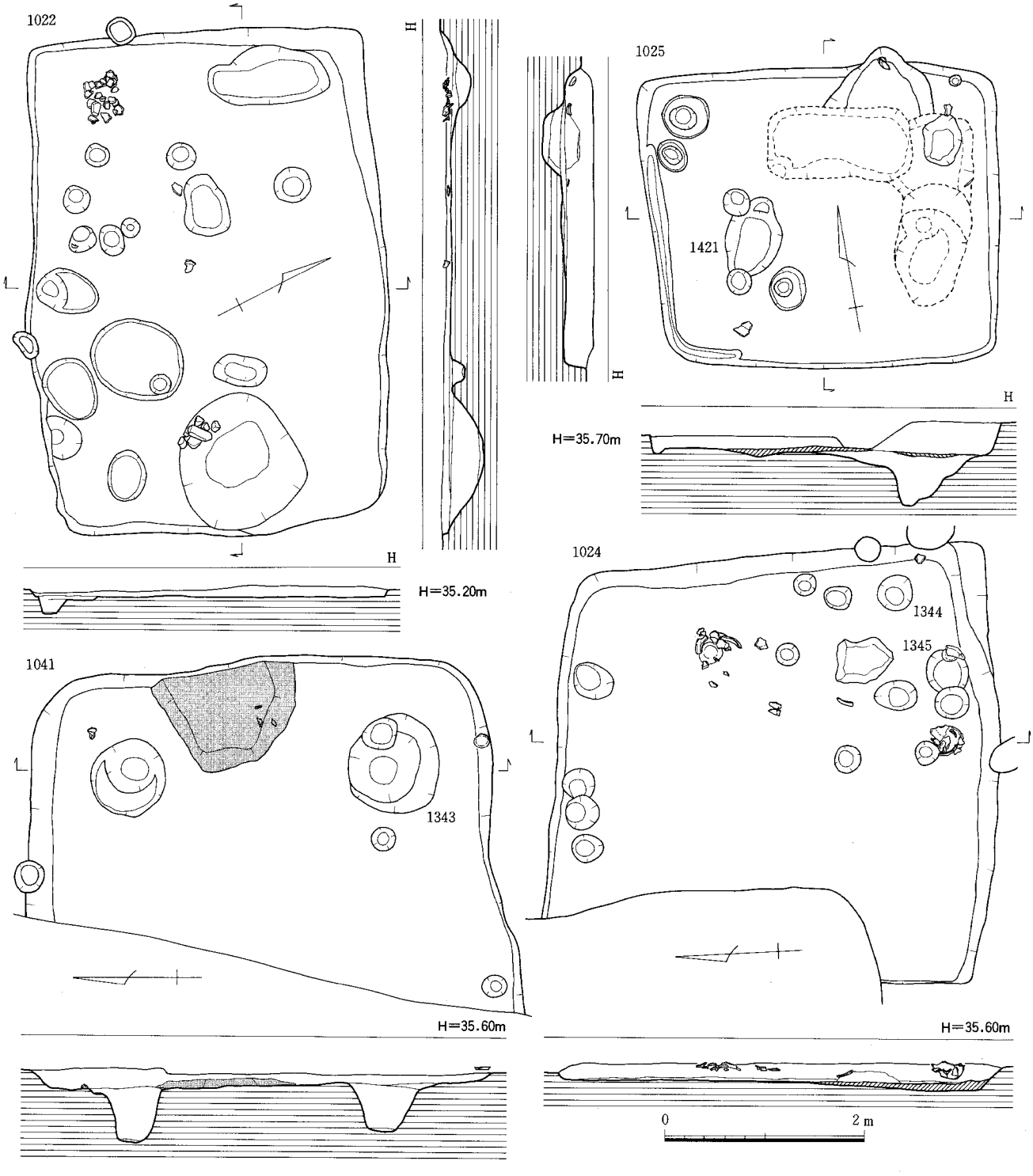
竪穴住居

1022竪穴住居（82図・図版14）　調査区中央で検出する。東西長5.1m、南北長3.5m、壁高5 cm程度を測る略長方形プランの竪穴住居跡である。埋土は暗茶褐色土で、床面は礫混じりの砂質土である。住居床面から土坑・ピットを検出したが住居との関係は不明瞭である。床面南東部で甑が小破片となって出土している。また炉跡等の屋内施設は検出していない。土師器甕、須恵器甕・蓋坏・高坏等が出土している。

出土遺物（84図441）　土師器甑である。床面上からまとまって出土したもので、復元口径27.5cmを測る。外面には縦刷毛を行い、内面は口縁部及び胴部最下位には横刷毛を行う。また内面はヘラ削りにより成形している。

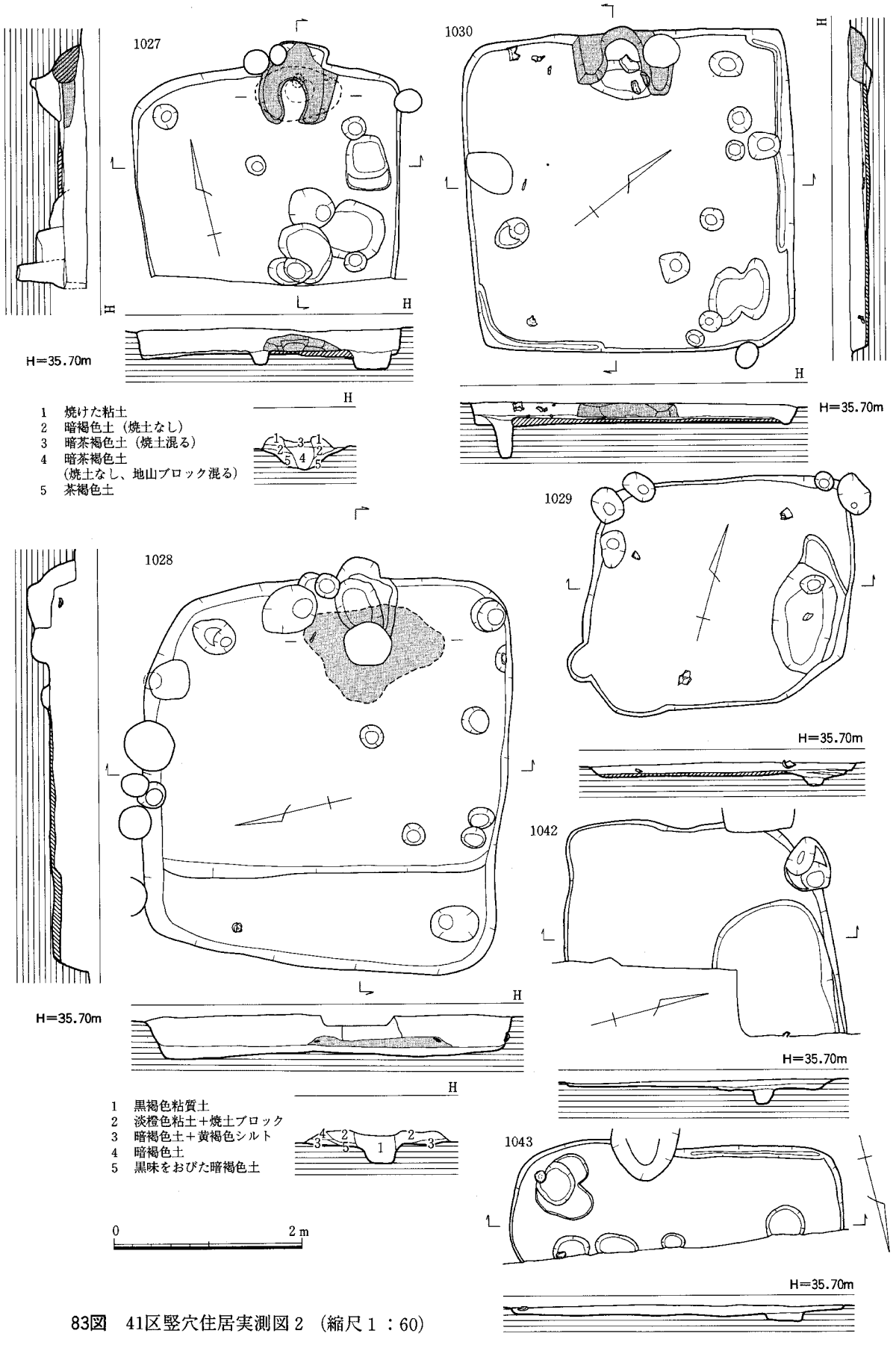
1024竪穴住居（82図・図版14）　調査区南側で検出する。西壁を1041竪穴住居に切られている。東西長・南北長共に4.4mを測り平面略正方形を呈し、壁高は15cmを測る。床面南東部に焼土と粘土がブロック状の高まりとして検出された。また遺物は床面からやや浮いた状態で土師器甕、鉄鎌等が出土している。主柱穴・壁溝等の施設は検出していない。その他出土遺物に土師器高坏、須恵器高坏・蓋坏・高台付き椀がある。

出土遺物（84・85図442～449）　442～448は土師器甕である。442は住居中央南側床面から出土している。口縁部は厚手で広く外方に開いている。胴部は中央に最大径を有しそのまま下膨れ気味に底部に至る。底部は緩く膨らみ面積の広い底部となる。調整は外面縦刷毛、底部は不整方向の刷毛目を有する。また内面は口縁部に横刷毛、胴部は縦方向に削り上げている。443・444は口縁部が緩く屈曲



82図　41区竪穴住居実測図１（縮尺１：60）

外反している。いずれも外面刷毛目、内面ヘラ状工具による削りあげによる調整を行う。またいずれも外面の口縁部～胴部にかけて煤が付着している。445・446は把手付き甕である。445の口縁部は緩く屈曲し、端部は折り曲げて丸く納めている。外面は胴部～底部にかけて煤が付着している。調整は口縁部横ナデ、胴部外面ナデ、内面ヘラ削りを行う。器壁は厚く粗雑な作りである。447・448は底部破片である。底部は粗雑な平底で、外底面はヘラ削りを行う。底部と胴部の境から上半は二次焼成により、器壁がはじけ、ピンクに発色している。449は須恵器高坏である。脚は低平で裾広がりである。



83図　41区竪穴住居実測図２（縮尺１：60）

脚端部は上半をつまみ出している。坏部外面は接合部分まで回転ヘラ削りを施している。

1025竪穴住居（82図・図版14）　調査区南端部で検出し、1035掘立柱建物を切っている。東西長3.6m、南北長3.0m 、壁高35cmを測る。住居掘り方は中央部分が僅かに窪み、この部分には厚さ5cm程の貼床を行っている。貼床除去後に逆L字形になる土坑群を検出している。住居掘り方に平行しており、住居に伴うものと考えられる。また北壁東寄りに竈が付設されているが、完全に破壊されており、掘り方のみの検出であった。竈は煙道を屋外に伸ばすタイプで、焼土が上面に堆積していた。煙道部には壁に立てかけるように須恵器皿1/2個体が半裁され、重ね合わされた状態で出土した。また竈前面右側には粘土塊が検出されており、竈補修用と考えられる。出土遺物には土師器甕・皿、須恵器甕・蓋坏・皿などがある。

出土遺物（85図450～457・937）　450・451は土師器甕である。450は口縁部は緩く屈曲し、端部を先細りで納めている。451は口縁部は横ナデ、胴部は外面は板ナデ・内面はナデによる。452～457は須恵器である。452は竈内から出土した皿である。２破片接合し、1/2程度の残存品となる。外底面はヘラ切りの後屈曲部に手持ちのヘラ削りを行っている。453～455は口径の小さな坏蓋である。天井部外面は453・455は回転ヘラ削りを行い、454はヘラ切り後未調整である。456・457は平底の坏である。外底面には回転ヘラ削りを行う。937は鉄鏃であろうか。全長12.5cmをはかる。

1027竪穴住居（83図・図版14）　調査区南端部で検出する。南側を調査区外に伸ばし、東西長2.8m を測る。床面には５cm弱の貼床が行われている。北壁中央東寄りに竈が付設されている。竈は構築箇所を20cm程掘り込み、埋め戻した上に袖部を積み上げている。また燃焼部分は袖部構築後に埋め戻して整形している。また煙道は屋外に抜けている。主柱等は確認していない。遺物は土師器甕、須恵器甕・坏蓋が出土している。遺物から7 世紀初頭に位置づけられる。

出土遺物（85図458・459）　ともに須恵器である。458は坏蓋である。天井部外面はヘラ削りで、ヘラ記号を有する。459は坏身で外底面には回転ヘラ削りを行う。

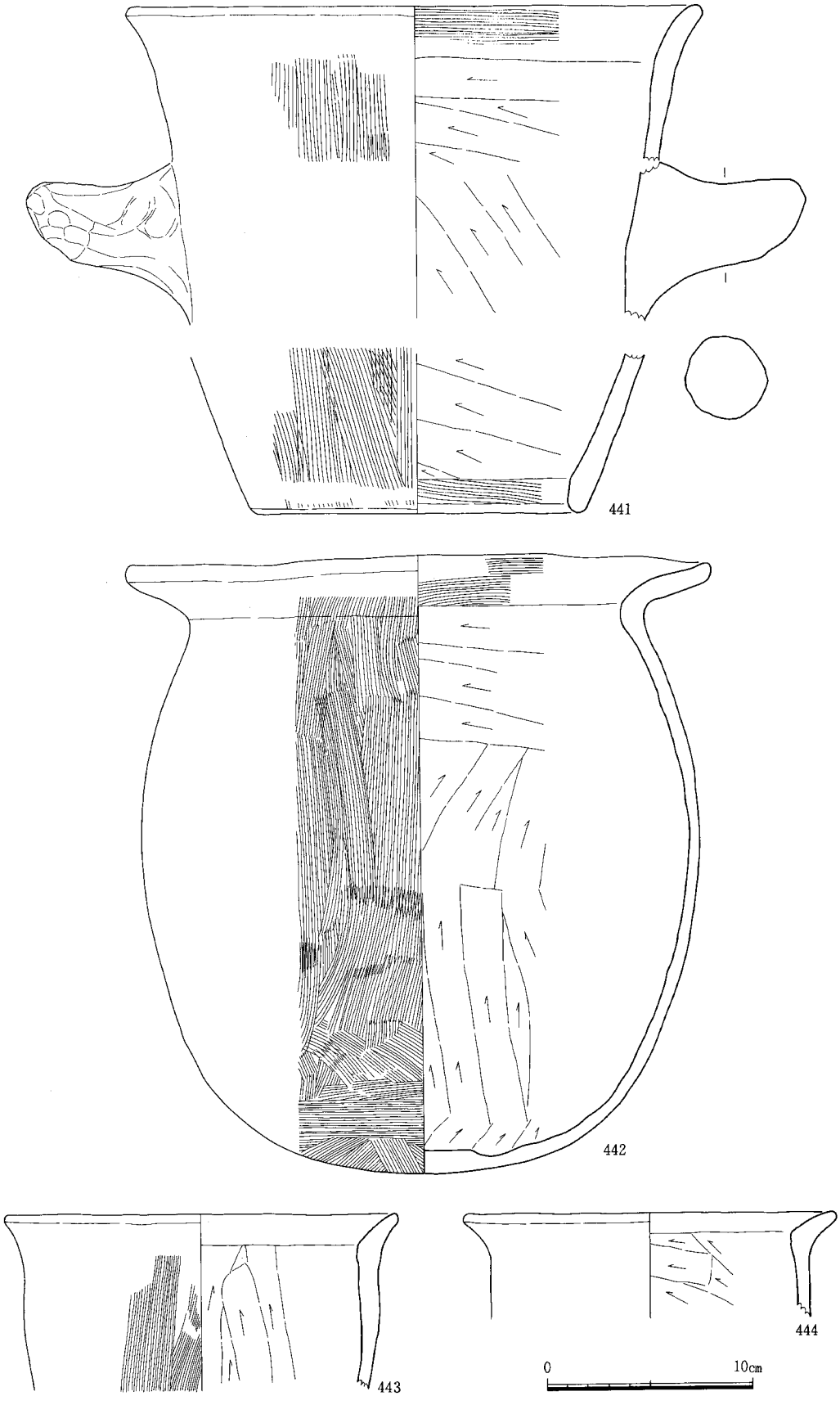
1028竪穴住居（83図・図版14）　調査区南端部で検出する。南側を調査区外に伸ばし、東西長4.1m 、南北長3.7mを測る。西壁沿いには幅90cmの貼り土によるベッド状遺構が存在する。貼床は西側2/3に行われ、厚さ５cm程度を測る。また東壁中央部分には竈が存在しているが、廃棄時の破壊行為により焼土の広がりと、地下の掘り込みのみの確認である。出土遺物には土師器甕・把手、須恵器甕・蓋坏、鉄製刀子等である。1027住居同様７世紀初頭の遺構である。

出土遺物（86図460～464・938）　460・461は土師器である。460は把手で上面に刻みが入る。461は甕底部破片である。462～464は須恵器である。462は坏蓋で天井部外面は1/2程度回転ヘラ削りを行う。463は歪みの大きな坏である。外底面はヘラ切り未調整である。464は坏身である。受け部立ち上がりは小さく、外底面は回転ヘラ削り。938は鉄刀子である。茎部のみで刃は欠損する。

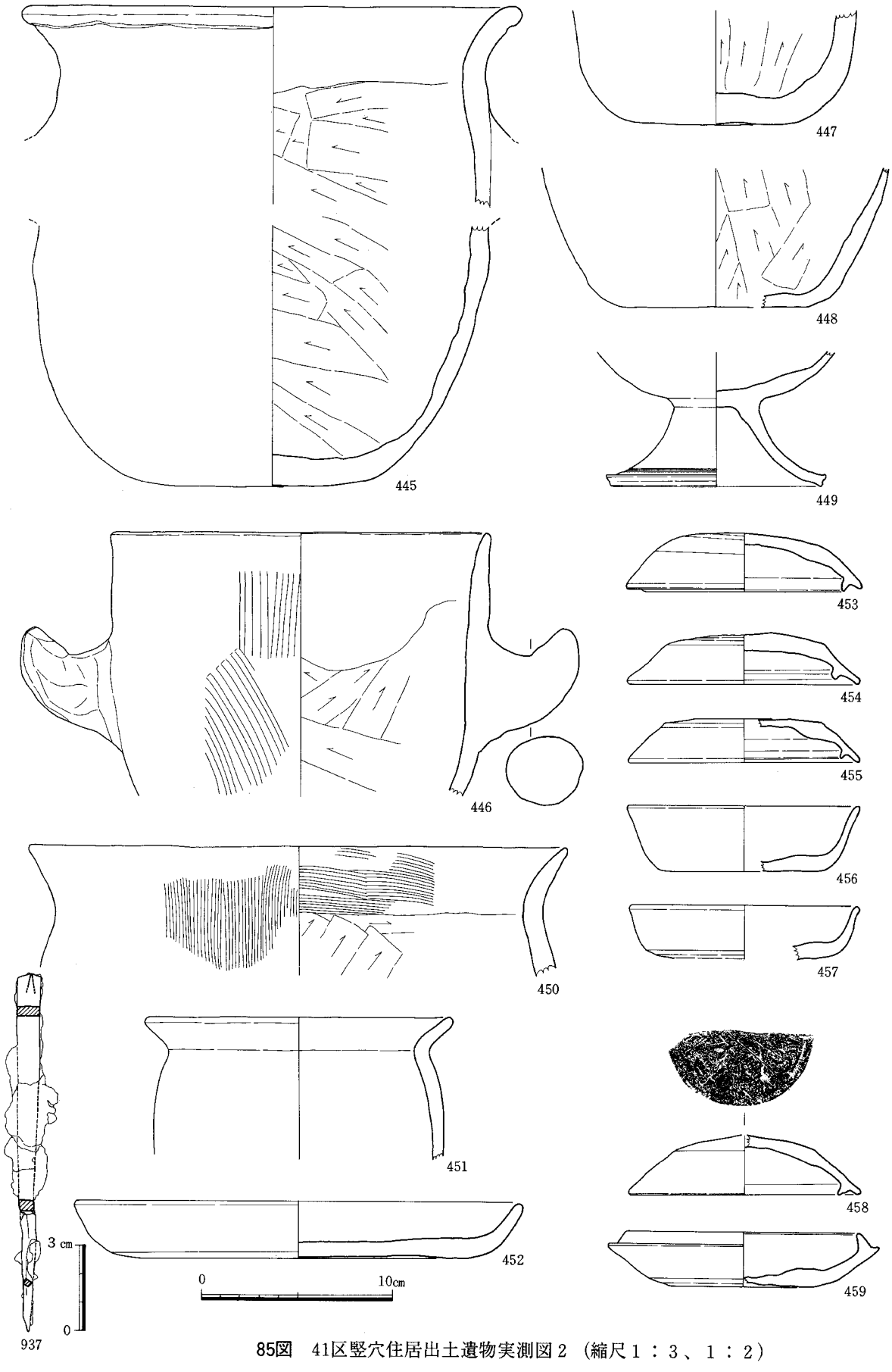
1029竪穴住居（83図）　調査区南東端隅部で検出する。東西長2.8m、南北長2.4m、壁高10cmを測る。床面全体に厚さ５cm程度の混合土が広がり、貼床と考えられる。主柱穴・焼土等は検出していない。出土遺物には土師器甕・鉢・皿、須恵器甕破片がある。

出土遺物（86図465～468）　いずれも土師器である。465は甕である。外面にタタキ痕が残り、その後粗く板ナデを行う。外面及び内面上半部に煤が付着する。466は鉢である。内面は横方向のヘラ削り、外面は指押さえの後粗くナデる。467は混入の土師器高坏である。468は土師器皿である。外底面は回転ヘラ削りを行う。

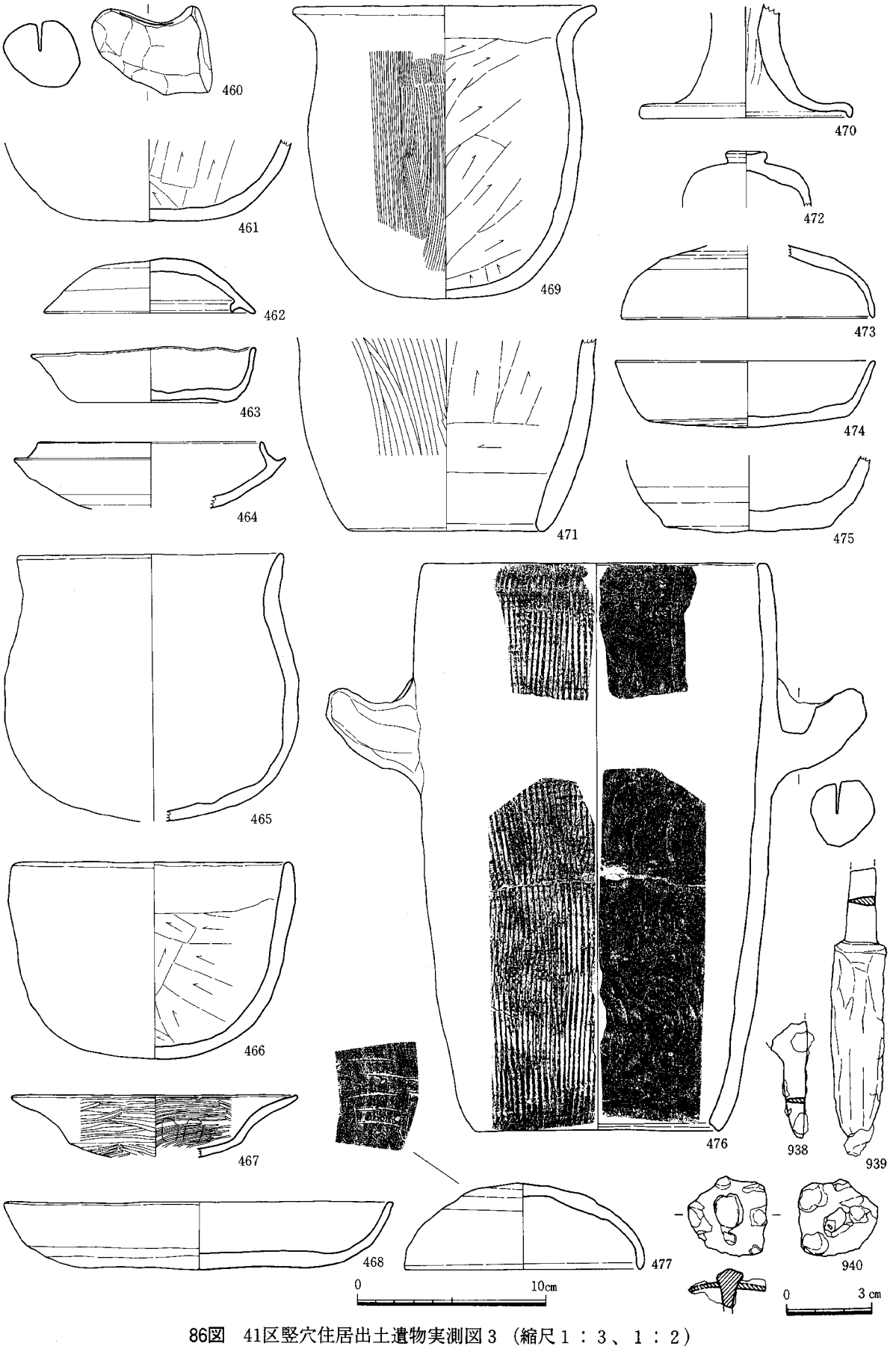
1030竪穴住居（83図・図版14）　調査区南東部で検出する。一辺3.4mの正方形プランを呈する。床面には厚さ5 cm程度の貼床を施す。北壁及び南コーナーの一部には壁溝が残っている。また西壁



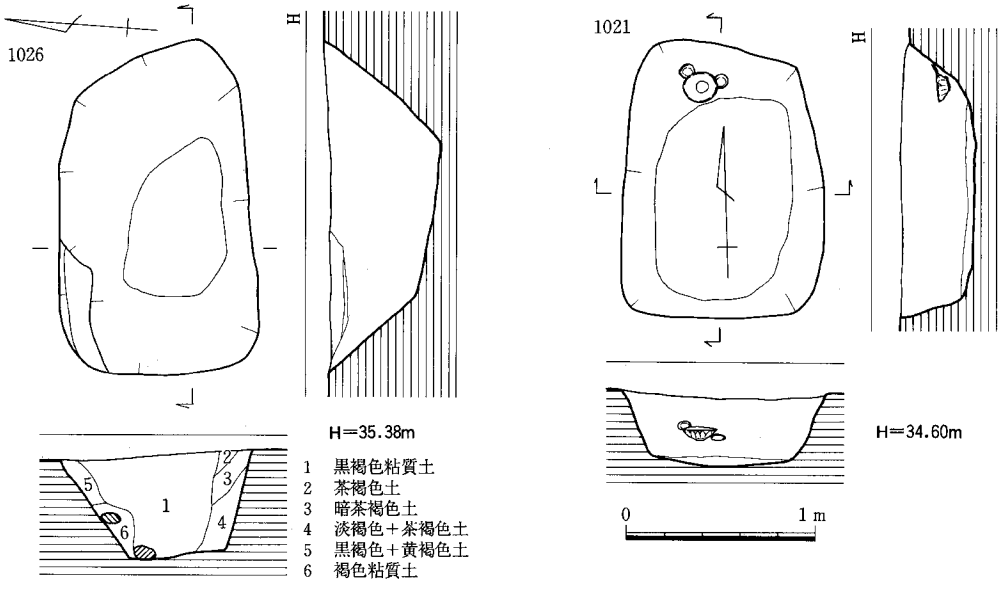
84図　41区竪穴住居出土遺物実測図１（縮尺１：３）



85図　41区竪穴住居出土遺物実測図２（縮尺１：３、１：２）



86図　41区竪穴住居出土遺物実測図３（縮尺１：３、１：２）



87図　41区土坑・土壙墓実測図（縮尺１：40）

中央部には竈が付設されている。袖は淡褐色砂質土を基礎として、その上部に粘土を積み上げて構築している。竈燃焼部は床面より浅く窪んでいる。

出土遺物（86図469・470・939・940）　469は土師器甕である。下膨れの胴部は縦刷毛により成形されている。470は須恵器高坏である。脚裾は低く広がり、端部は嘴状に立ち上がる。筒部内面には絞り痕が残る。939は鹿角装鉄刀子、940は鋲留金具である。

1041竪穴住居（82図・図版14）　調査区南側で検出する。1024竪穴住居及び1040掘立柱建物を切る。西側を調査区外に伸ばし、南北長4.6m、壁高20cmを測る。東壁中央に竈が残存している。竈は完全に破壊されており、焼土のみの検出である。また竈脇で径0.8～１mのピットを検出しており、４本柱の主柱穴と考えられる。出土遺物には土師器甕・壺・甑、須恵器蓋坏・高坏等がある。

出土遺物（86図471～474）　471は竈内出土の土師器甑である。底部は窄まり、端部を丸く納める。472～474は須恵器である。472は偏平なつまみのついた小口径の蓋である。473は坏蓋である。天井部外面は1/2まで回転ヘラ削りを行う。474は坏である。外底面全体に回転ヘラ削りを行っている。

1042竪穴住居（83図・図版15）　調査区南東部で検出する。東側を調査区外に伸ばし、南北西長2.8m、壁高５cmを測る。主柱穴等の屋内施設は不明瞭である。

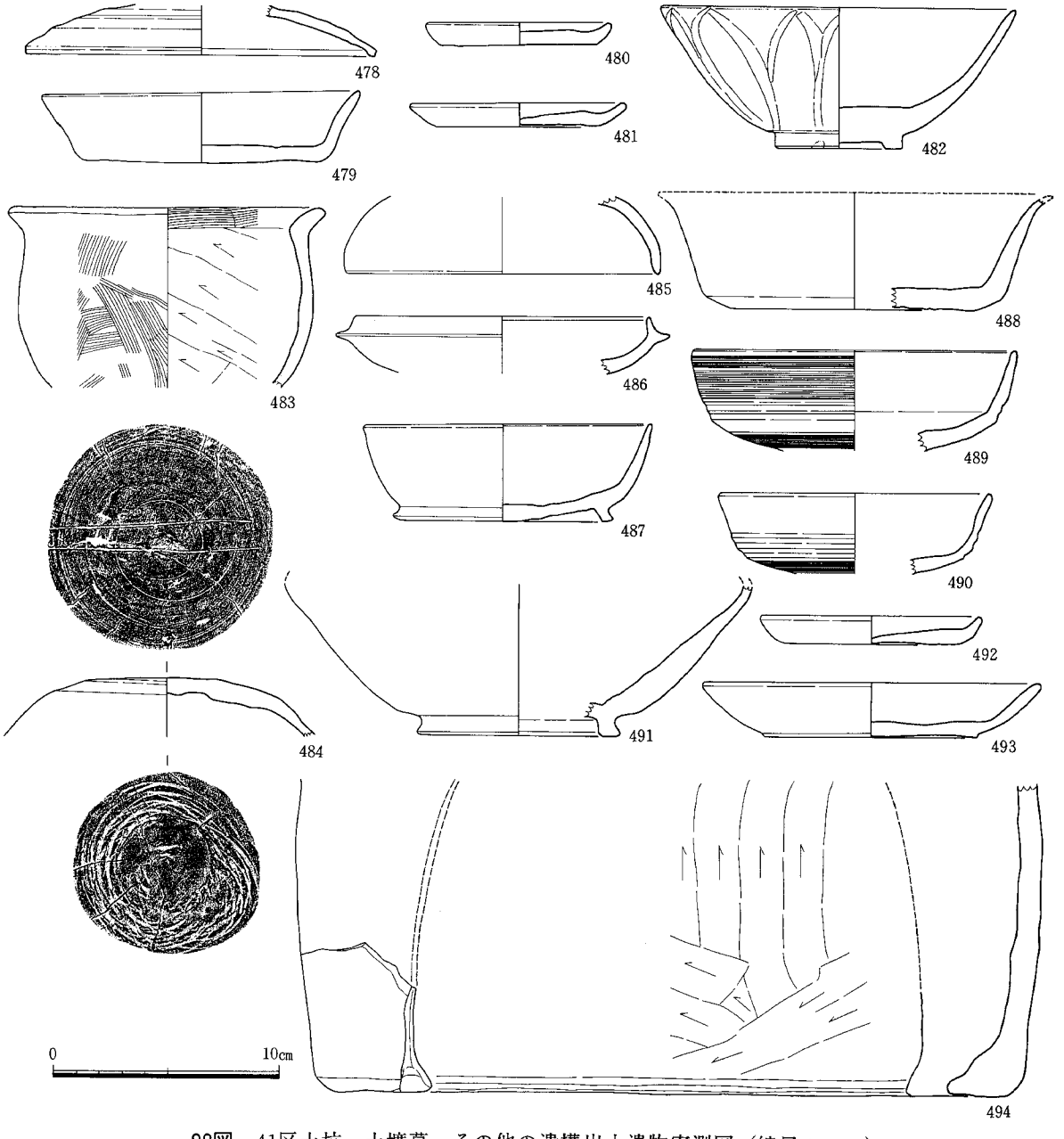
出土遺物（86図475・476）　475は鉢の底部である。底面には粗いヘラ削り、胴部外面は回転ヘラ削りを行う。476は甑である。外面には擬格子の叩き、内面には青海波の当て具痕が残る。外面には一部に煤が付着する。把手には筋状切り込みを入れる。

1043竪穴住居（83図）　調査区南東部で検出する。北側を調査区外に伸ばし、東西長3.5m、壁高10cmを測る。南壁には壁溝が残存する。主柱穴等は不明瞭である。

出土遺物（86図477）　須恵器坏蓋である。口径12.4cm、器高4.5cmを測る。天井部外面1/2程まで回転ヘラ削りを行う。また側面にヘラ記号を有する。

土坑

1026土坑（87図）　調査区中央部で検出する。長軸1.8m、短軸1mを測るやや歪な隅丸長方形を呈し、主軸をほぼ東西北方向にとる。土層より側板状の痕跡が観察でき、埋葬遺構の可能性が高いが、小口部壁は立ち上がりの傾斜が緩く、底部平坦面が狭くなっており、遺構の性格について不明確な点が残る。遺物はほとんど無く、土師器細片が出土しているのみで時期不詳である。



88図　41区土坑・土壙墓・その他の遺構出土遺物実測図（縮尺１：３）

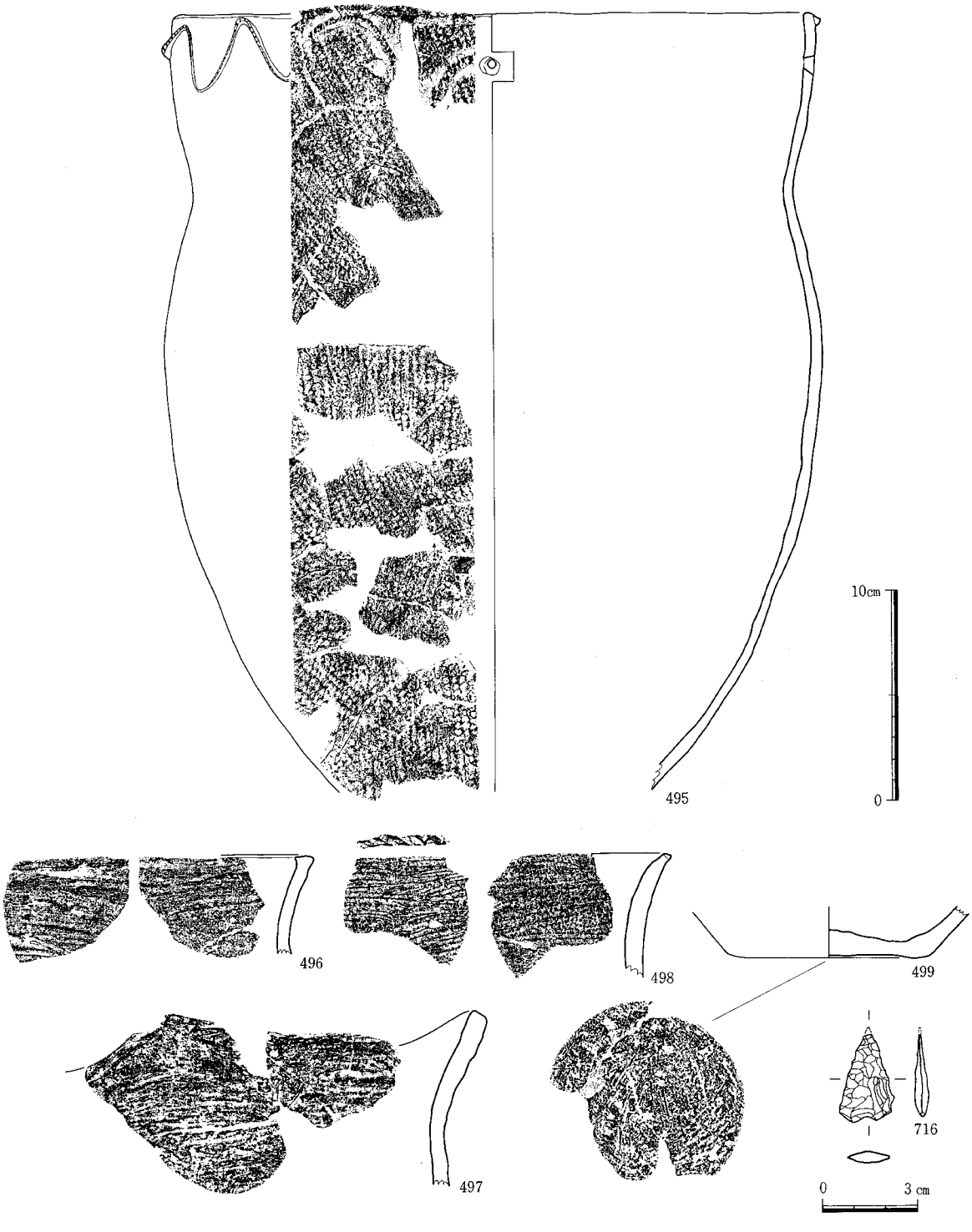
溝

1023溝　調査区東側をほぼ南北に伸びる溝である。溝は幅1.4m、深さ90cmを測る。埋土は黒褐色土で、砂層等は堆積していない。土師器甕、須恵器蓋坏等が出土している。

出土遺物（88図478・479）　いずれも須恵器である。478は蓋で端部は下方に肥厚させる。天井部外面は1/3程に回転ヘラ削りを行う。479は坏である。外底面はヘラ切り未調整である。

土墓壙

1021土壙墓（87図・図版15）　調査区北端部で検出する。長軸1.45m、短軸1.05mを測る隅丸長方形を呈し、主軸をほぼ南北方向にとる。掘り方床面には地山の礫が浮き上がっており、床面直上厚さ５cm程度の褐色砂が広がっており、この上面が使用時の床面であると考えられる。北壁小口部分壁添いに陶磁器碗、土師器皿が完形で据えられていた。



89図　41区包含層出土縄文土器・石器実測図（縮尺１：３、１：２）

出土遺物（88図480～482）　480・481は土師器皿である。いずれも外底面は回転糸切りを行い板状圧痕がのこり、内底面には回転ナデののち指ナデを行う。480は口径８cm、481は口径9.5 cmである。482は龍泉窯系青磁碗である。外面には蓮弁を刻んでいる。底部畳付き以下は露胎となる。胎土は薄桃色、釉はオリーブ色を呈している。

縄文時代包含層（図版15）

調査区南側においてピット（1285）掘削中に壁面から縄文土器の出土を確認したため、周辺を拡張

する形でトレンチを設定し、遺物の分布範囲を確認した。遺物は遺構面である黄褐色粘質土（厚さ20cm）、その下位の淡褐色砂質土（厚さ10cm）に包含されており、以下の白色粗砂層からは遺物は出土していない。平面的には径２m程度の範囲のなかでまとまり、面的な広がりはなかった。

出土遺物（89図495）　トレンチ内で出土した深鉢である。全体の１/２程度の復元資料である。口縁部は緩く内湾気味に直立し、外面には波状に粘土紐を貼り付けている。粘土紐には粗い刻みを有する。また口縁部にシャープな焼成後の穿孔が行われている。胴部は中位が緩く膨らむ長胴を呈し、外面には全面に縄文が施される。また胴部上半に煤の付着が見られる。

その他の遺物（88図483～494、89図496～499、716）

この他ピット等から遺物が出土し、86図には須恵器壺・蓋坏・高台付き椀・高坏、土師器皿・坏・移動式竈等を示した。89図は縄文土器と石鏃で、土器はいずれも条痕調整による。496は口縁端部上面がつぶれ、内外両面に肥厚する。498は端部が外反し、上面に刻みを施す。497は波状口縁を呈する。716はサヌカイト製石鏃である。

３－20－３　小結

41区においては古墳時代後期の生活遺構を主体とする遺構群を検出した。時期的には６世紀後半～７世紀初頭の短い時期幅の中でまとまっており、出土遺物もこの時期に属するものが大半である。この中で、竪穴住居跡と掘立柱建物の切り合い関係では、いずれも竪穴住居が後出している。また掘立柱建物は主軸方位よりほぼ南北をとるもの（Ａ群：1031・1034・1035・1037・1038）と、主軸方位が10°～20°西に振れるもの（Ｂ群：1032・1036・1039・1040）と、主軸を30°以上西に振るもの（Ｃ群：1033）の３群に分けることができる。このうちＡ群のものは竪穴住居及びＢ・Ｃ群の建物に切られており、最も先行する可能性が高い。またＢ群は1040掘立柱建物と1041竪穴住居との関係から、竪穴住居群に先行するものであろう。しかし出土遺物からはほとんど差異は認められず、近接した時期内の切り合いと考えられる。大雑把であるが、現状ではＡ群→Ｂ群→Ｃ群・竪穴住居群との変遷を考えている。しかし細かな１棟ごとの時期比定も困難であり、遺構の分布は周辺の調査区を考慮しながら慎重に進めていく必要がある。また本調査区検出の掘立柱建物は1038・1039の様な大型のものもみられ、建物自体の性格付けも今後の検討課題である。

３－21　42区の調査

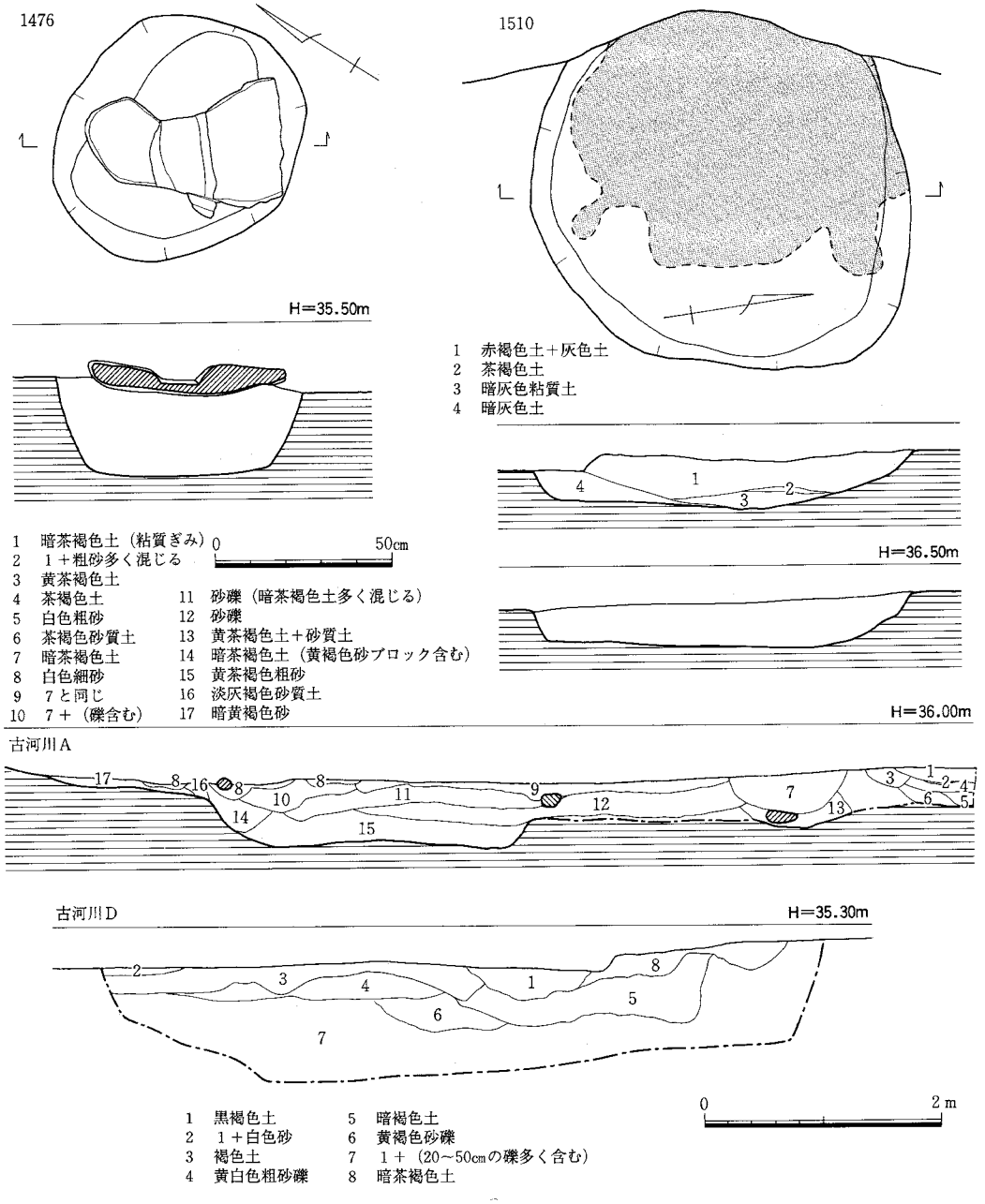
３－21－１　概要

42区は３次調査の中では南東端に位置しており、41区の東側にあたる。当調査区は東側に緩く傾斜している。調査区の東端からは60m程離れた金屑川の左岸で150cm程低くなっている。当区は道路及び用水路の構造物について調査を行った。遺構面は耕作土直下の粗砂まじりの黄褐色土である。標高は北側で35.9m、南側で35.56 m、西側で35.9m、東側で35.68 mを測る。本調査により土坑・溝・精鉄炉・ピット・旧河川を検出した。遺構は調査区中央を南北に旧河川が走り、東西両側の微高地上に古墳～中世の集落が存在する。

３－21－２　遺構と遺物

土坑

1454土坑　調査区の西端で検出した以降の西側をピット等に切られている。土坑は長径172cm、短径93cmの隅丸方形を呈す。深さ10cmを測る。東西両壁際に段落ちがあり、床面からの高さは東側で23cm、西側で34cmを測る。



90図　42区製鉄炉・土坑・古河川実測図（縮尺１：60、１：20）

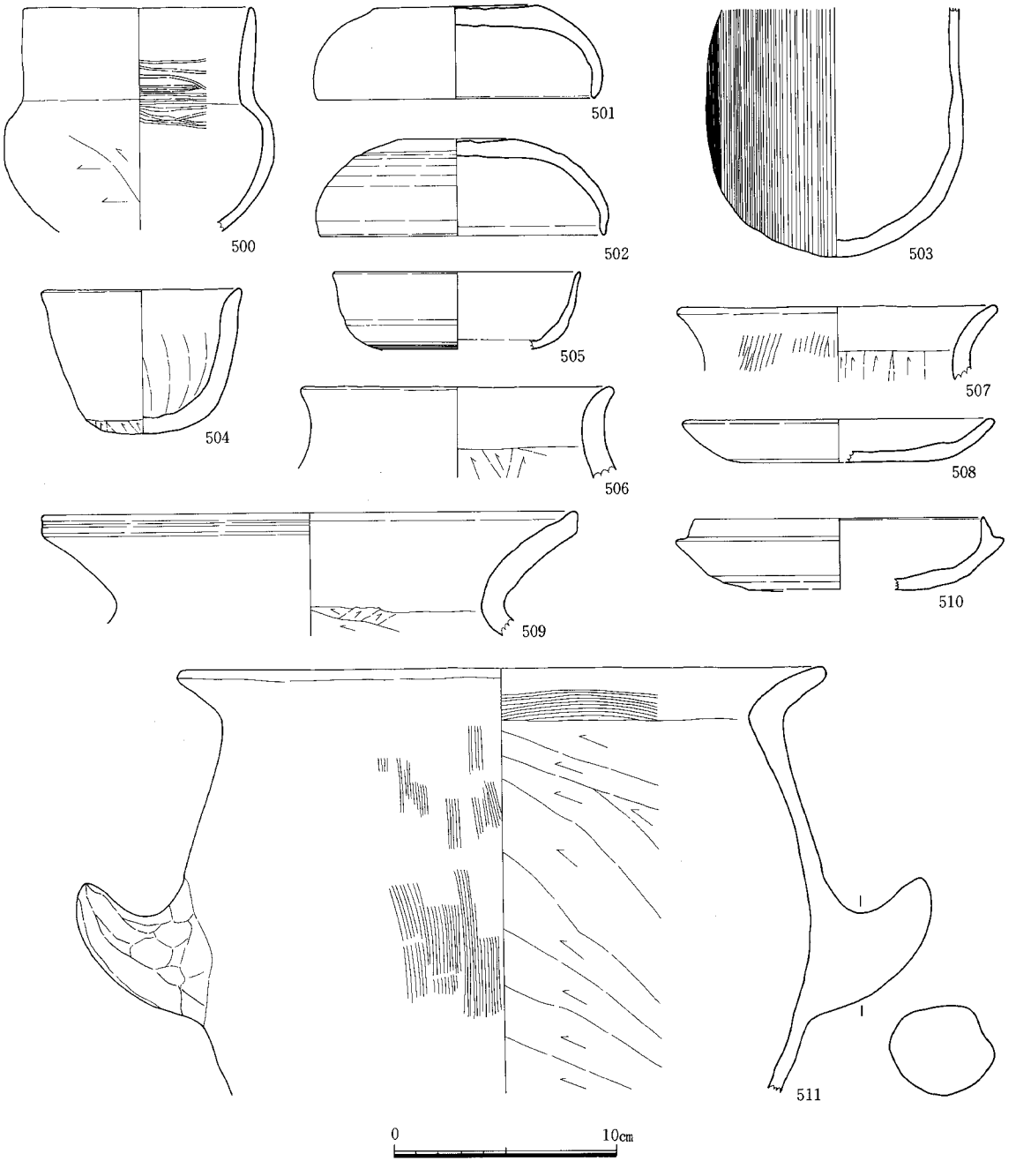
出土遺物（91図504）　土師器小鉢である。口径8.7cm、器高6.5cmを測る。淡褐色を呈し、焼成は良好である。胎土中に砂粒を多く含む。外面底部はヘラ削りを施す。その他は全面ナデ。外面に黒班がみられる。

1462土坑　遺構の南側が調査区外にかかる。不整形を呈す。東西長87cm、深さ27cmを測る。

出土遺物（91図505）　須恵器坏である。口径10.9cmを測る。灰黒色を呈し、焼成は良好である。坏部下半にカキ目を施す。

1464土坑　1462土坑の北側に位置する。北側が調査区外にかかる。長方形を呈する。東西長36cm、深さ13cmを測る。

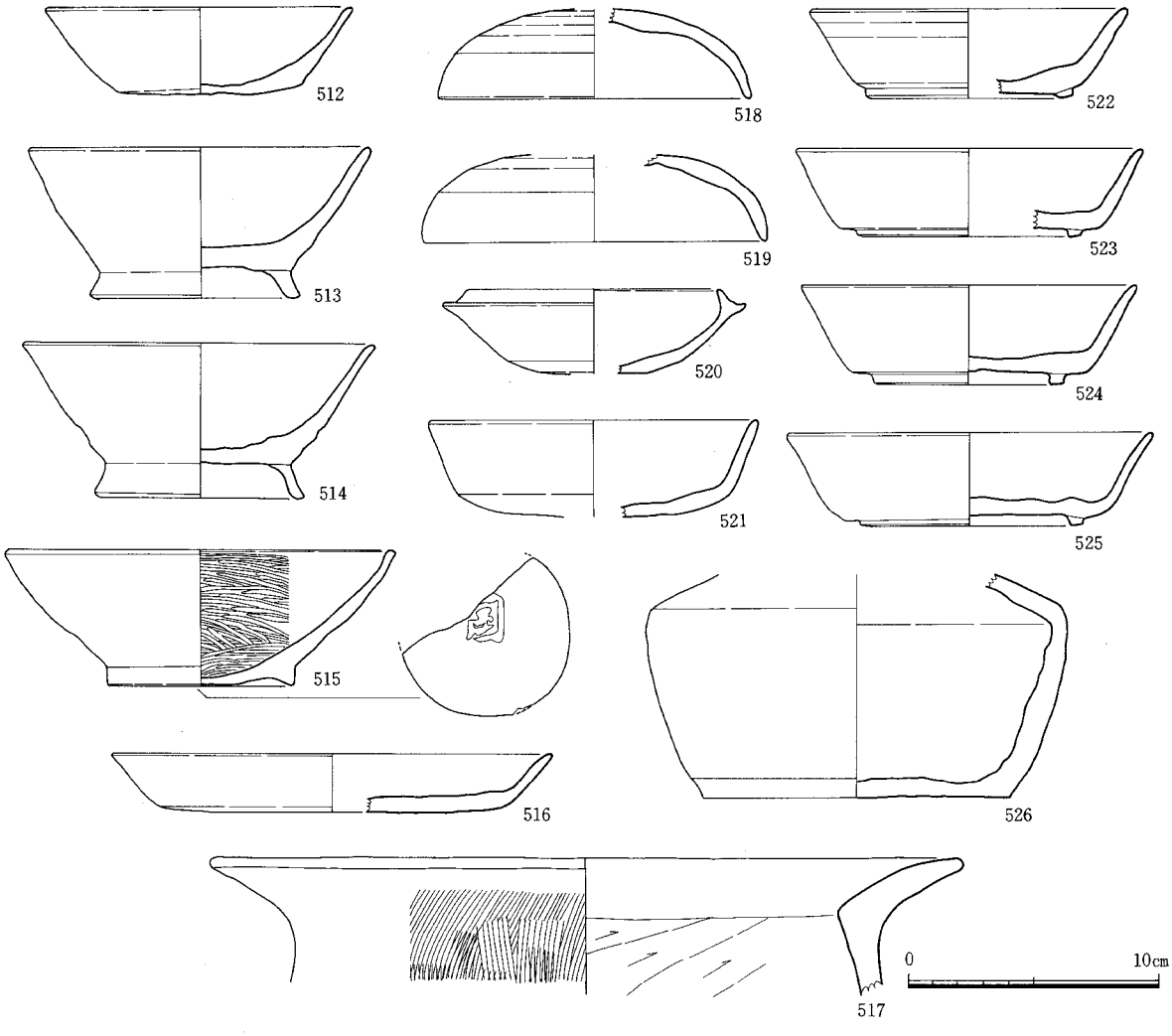
出土遺物（91図506）　土師器甕口縁である。口径13.6cmを測る。褐色を呈し、焼成は良好である。



91図　42区出土遺物実測図１（縮尺１：３）

1476土坑（90図）　調査区の南寄りで検出した。東の台地上から続く溝を切っている。土坑は長方形を呈し、長径74.5cm、短径65.6cm、深さ28cmを測る。断面は逆台形である。主軸はN－62.5°－Wにとる。穴の最上部から滓が出土した。土坑の覆土中には炭化物や焼土ブロックは含まれないので、この土坑が炉なのではなく、東側の台地上に精鉄炉があり、そこから投げ込まれたものと思われる。滓は長径55cm、短径35.5cmを測る。東側中央部が狭くなっており、厚さもかなり薄くなっている。

1510土坑（90図・図版15）　旧河川上面で検出した。西側は段落ちに切られている。南北108 cm、東西残長99cmの隅丸方形を呈し、深さ14cmを測る。覆土は上下２層に分かれており、下層に暗褐色粘質土を敷いて上層に黄褐色の粘土を詰めている。周辺の土坑・ピットから出土している炉壁の胎土とよく似ているため、炉壁構築用の粘土貯蔵用の土坑であると思われる。旧河川が完全に埋没してか



92図　42区出土遺物実測図２（縮尺１：３）

ら土坑を掘っているので製鉄炉の時期は９世紀以降であることがわかる。出土遺物なし。

溝状遺構

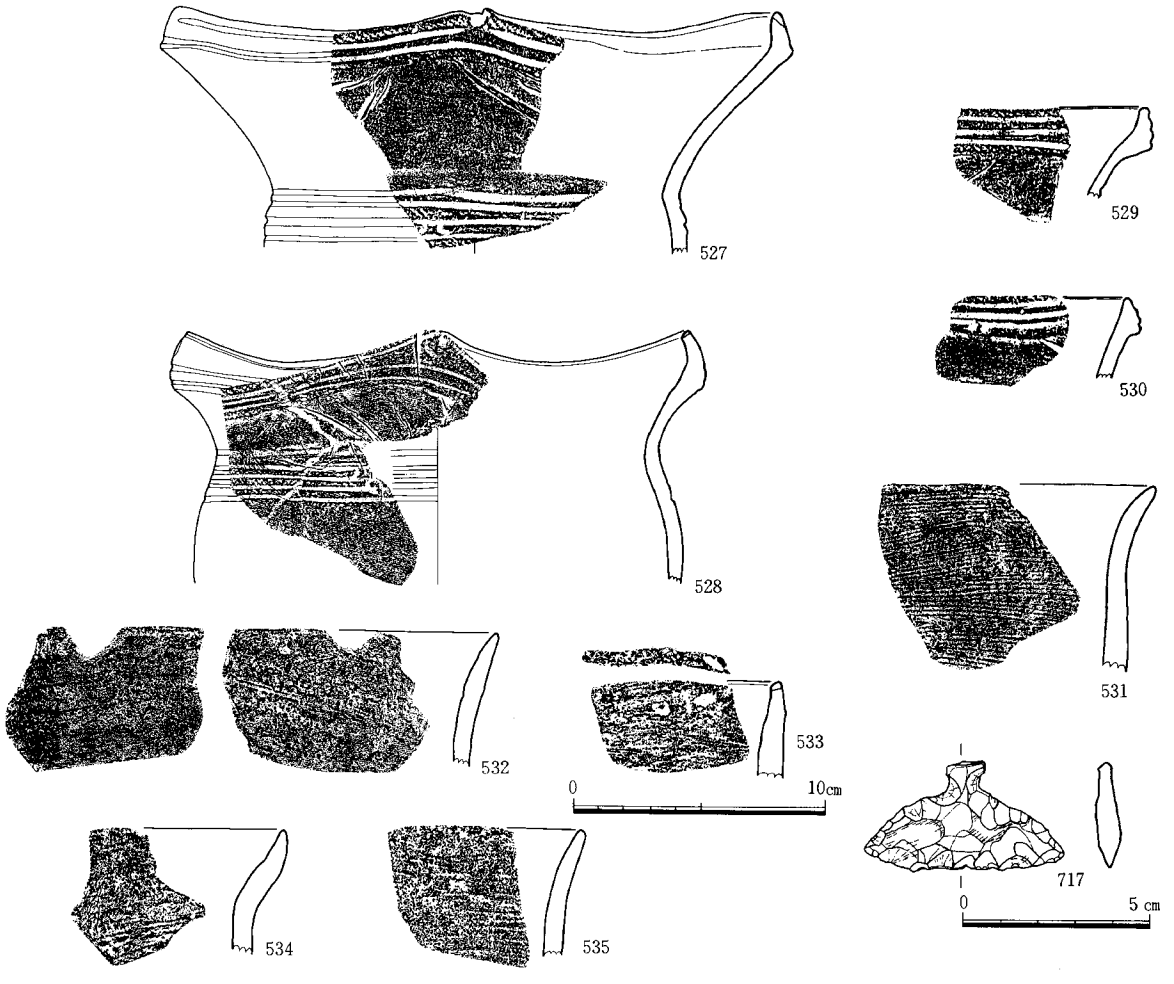
1471溝　調査区の南端で検出した。南北方向に流れる。上幅76cm、底幅28cmを測る。調査部分の真ん中で南側に段落ちしている。底までの深さは北側で9.5cm、南側で48.5cmを測り、断面は逆台形である。

出土遺物（9図500～503）　500は土師器丸底壺である。口径10.1cmを測り、褐色を呈す。外面頸部には煤が付着している。501・502は須恵器坏蓋である。501は口径12.5cm、器高4.15cmを測る。ヘラ切りしたあとヘラでなでつけている。灰色を呈す。502は口径12.3cm、器高4.3cmを測る。ヘラ切りである。淡緑灰色を呈す。503は提瓶であろうか。全面にカキ目を施す。

古河川（90図・図版15）

調査区の中央を南北に流れる。幅は340～400cmを測る。調査区の南寄りで西に分かれており、41区中央部分の谷へ繋がるものと思われる。当河川は埋没しながらも細くなりながら流れつづけ、覆土の上層に３～４本の細い流路がみられる。

出土遺物（92図512～526）　512は土師器坏である。口径12.0cm、底径7.3cm、器高3.5cmを測る。褐色を呈す。513・514は土師器椀である。513は口径13.4cm。器高6.2cmを測る。褐色を呈す。514は口径13.65cm、器高6.2cmを測る。淡褐色を呈す。515は黒色土器Ａ類である。口径15.0cm、器高



93図　42区出土遺物実測図３（縮尺１：３、１：２）

5.45cmを測る。内面は丁寧なヘラミガキを施す。外面は回転ナデである。外底に墨書で「国」という字を書いている。外面淡褐色。焼成は良好。516は土師器皿である。口径17.4cm、器高2.35cmを測る。淡褐色を呈す。焼成はやや軟質である。517は土師甕もしくは甑である。口径29.5cmを測る。淡褐色を呈す。焼成は良好。外面は刷毛目を施す。518・519は須恵器坏蓋である。518は口径12.2cmを測る。灰色を呈す。外面上部にヘラ記号がある。519は口径13.5cmを測り、褐色を呈す。内面上部にヘラ記号らしきものがある。520～525は須恵器坏である。520は口径9.8 cmを測る。暗灰色を呈す。焼成不良。521は口径12.9cmを測る。灰色を呈す。522は口径12.4cm、器高3.55cmを測る。全体にナデを施す。523は口径13.7cm、器高3.5 cmを測る。淡灰黒色を呈し、焼成は良好である。524は口径13.2cm、器高3.95cmを測る。灰色を呈す。525は口径14.3cm、器高3.7cmを測る。褐色を呈し、焼成は良好である。526は須恵器長頸壺である。底径12.2cmを測る。灰黒色を呈し、焼成は良好である。

その他の出土遺物（91図507～511、93図527～535・717）

507は土師甕である。口径14.0cmを測る。淡褐色を呈す。外面は縦方向の刷毛目を施す。1475ピット から出土した。508は土師器坏である。口径13.7cm、器高1.9 cmを測る。褐色を呈し、焼成は良好である。底面はヘラ切りである。1480ピットから出土した。509は須恵器大甕口縁である。口径23.7cmを測る。口縁は横ナデ、内面頸部はヘラ削りを施す。灰黒色を呈し、焼成は良好である。1509ピットから出土した。510は須恵器坏である。口径12.6cmを測る。灰色を呈す。1526ピットから出土した。511は土師器甕もしくは甑である。口径28.6cmを測る。淡褐色を呈す。外面は縦刷毛、内面胴

部は斜め方向のヘラ削りを施している。1509ピットから出土した。

527～535は縄文土器である。527～530は口縁が頸部から立ち上がり、いわゆる口縁帯を作る深鉢である。527・528は波状口縁で、口縁帯には沈線を2条めぐらせ、その上に擬縄文を施す。口縁頂部には凹点をいれる。また胴部にも4～5条の沈線を入れ、間に擬縄文と凹点を施す。529の口縁部片も同様である。530は口縁帯に沈線をめぐらせ、凹点を入れる。531～535は粗製の深鉢で外面は条痕を施す。533の口縁端には刻目がある。いずれも後期であろう。717はサヌカイト製の石匙。

3－20－3　小結

周辺には古墳時代の遺構が多く当区も古墳時代の集落が分布していたと思われる。その後古代に南北方向に河川が流れている。旧河川の埋土からも多量の鉄滓が出土しているので、遅くとも9世紀から周辺に製鉄関連の施設が存在している。周辺にその時期の集落が分布しているものと思われる。

4　東入部遺跡群第3次調査のまとめ

前節までに報告したように、今次の調査では縄文時代から江戸時代の遺構・遺物を検出した。調査対象地内には古河川や古い谷が幾筋も入り、それを避けるように各時代の遺構が分布していた。その多くは掘立柱建物、竪穴住居、土坑など集落関係の遺構で、外に墓地、鍛冶等の遺構もみられた。17・18区では縄文～江戸時代の遺構が重複するのに対し、27・35・36・41区ではほぼ一時代の遺構で占められていた。他の調査区の遺構は2～3時代にわたるが、その分布密度は低かった。各調査区のまとめは各々記したので、ここでは今次の調査区全体を時代ごとに追うことで簡単な結びとした。

縄文時代では18・41区で包含層を確認し、またほとんどの調査区で縄文土器・石器の出土をみたが、その量は少ない。後期の遺物が多いが、他に前期から中期の土器も若干みられた。晩期の遺物がほとんどなかったことも特記すべきことであろう。

弥生時代は北端の18区Ⅰ区および19区で中期初頭前後の遺構を検出したにとどまった。19区では甕棺墓も単独で出土したが、この2地区ともに第2次調査8区の南縁部としてとらえるべきである。これ以南には遺構がなかったため、圃場事業地内での弥生時代遺構の南限を示すものと調査時には考えていたが、その後さらに南の第7次調査地点で前期末から中期の集落を検出することになった。

古墳時代の遺構は17・18・33・35・36・39・41区で確認した。ほとんどが集落関係の遺構で、35・36区と41区ではそのまとまりがみられた。35・36区では南北120mにわたり32基の竪穴住居が切り合い関係をもって分布していた。住居は4本柱、竈付のものが大半で、6世紀後半の時期と考えられる。41区は掘立柱建物と竪穴住居から構成される集落で、掘立柱建物が先行する例が多い。掘立柱建物は倉庫的な小規模のものが大半である。その時期は竪穴住居もあわせ7世紀代と考えられる。掘立柱建物と竪穴住居からなる同時期の集落は第7次調査でも確認されている。同一地区で集落が継続しないのは特徴的である。なお前期の遺構は18区Ⅱ区で1基の土坑を検出したにとどまった。

古代の遺構は17・18・24区で竪穴住居や掘立柱建物を検出したが、遺構のまとまりとしては外縁部にあたる。このなかで注意を引くのは17区の溝で区画されたなかに立てられた掘立柱建物である。また遺物としては16区の石帯蛇尾、42区の「国」を墨書した土師器がある。第6次調査では官衙的な建物が確認されており、今次の遺構・遺物もその周辺の一端を担うものとしてとらえられよう。

中世の遺構は各地区で確認した。27区では溝で区画された集落を検出した。掘立柱建物は十数棟に及ぶと考えられる。12世紀代の集落である。墓地も18・22・41区で検出した。単独的な木棺墓、土壙墓で、群集して墓地を形成することはない。18・41区では中国製青磁等を副葬していた。

Ⅳ　東入部遺跡群第１０次調査報告

1　調査組織

事業主体（入部地区圃場整備）
　福岡県農林事務所農地整備鉱害課
　福岡市農林水産局農業振興部農業土木課
　福岡市入部土地改良区
調査主体
　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
　　課長　　折尾　学
　　第一係長　横山邦継
　　第二係長　山崎純男
　　庶務　　内野保基
　　調査担当　池崎譲二　屋山　洋
　　調査補助　英　豪之

2　調査概要

1994年度は入部地区圃場整備事業の最終年度にあたり、事業対象地1.3haの一部は福岡市教育委員会の分布地図における東入部遺跡群の南端部に含まれている。前年度までの調査結果等から事業地内でも遺跡の広がりが十分予想された。遺跡範囲を把握するために、詳細分布調査（試掘調査）を行い、その結果に基き、事前に事業計画との調整を図った。以下、試掘調査、本調査概要について述べる。

試掘調査

国庫補助を受けて６月27日から29日まで圃場整備地内詳細分布調査を行なった。調査は重機（バックホー）を使用し、宅地予定で整備対象外の一筆と面積の狭小な畑地を除いて、ほぼ全田面に13本のトレンチを設定し遺構の有無、遺構の時代、性格、遺構面までの深さ、埋蔵状況の把握に努めた。その結果、対象地の西端部は室見川の旧流路による侵食を受けており、また、南端部は氾濫原の礫層が露出し遺構はみられなかった。東端部も室見川支流の旧河川流路にあたり、遺跡はこの二本の旧河川に挟まれた範囲の北半部、すなわち田面70－１、71－１のほぼ全面および支線９号道路、支線29号用水路、取付4-6用水路の一部、約5000㎡にみられた。検出された遺構は柱穴、土坑、住居址、溝を中心であるが、出土遺物は縄文時代中～後期から奈良～平安時代まで見られ、時代的に複合した遺跡であると考えられた。また、鉄滓の集中する部分もあり、製鉄関連遺構の存在も予想された。これらの遺構は水田床土直下の浅いレベルで検出されており、現状保存等事業計画との調整は困難で、この遺跡範囲については全面調査を行なうこととした。

本調査

試掘調査の結果を受けて、事業主体との協議を行い、1994年度圃場整備地内の遺跡範囲については全面発掘調査を行い、記録保存の措置を取ることとした。

調査データは以下のとおりである。

調査番号　9427

遺跡名称　東入部遺跡群第10次調査（遺跡略号　ＨＧＩ－10）

所在地　福岡市早良区東入部1098-2ほか

調査期間　1994年７月７日～11月25日

調査面積　5.003㎡

７月７日より発掘調査器材の点検、調査地点周辺の草刈り等整備を行い、７月12日より重機（バックホー、ブルドーザー）を用いて表土剝ぎを開始し、20日に終了した。この間調査区のグリッド設定を行った。調査区全体を10×10ｍの区画に区分し、東から西に向かってＡ～Ｊ、北から南に向かってＩ～Ⅷとそれぞれの区画を呼んだ。また、廃土処理の関係上、調査区の中央部を南北に流れる農業用水路を境に、東側をＩ区、西側をⅡ区、さらに西側の室見川旧河川に近い部分をⅢ区として調査区を大きく３区分した。調査は水田造成時の削平が大きく、遺構の希薄なⅢ区を先行して行い、終了後そこを廃土置場としてⅡ区の調査をすすめ、順次Ⅰ区へと移動していった。最終的に調査は11月25日に終了した。この間、７月末、11月の２回程台風の影響をこうむったが、以外はほとんど雨もなく、比較的順調に作業は進んだ。しかしながら、夏場の二ケ月間は異常な旱魃の乾燥の中、連日30度後半台の猛暑を記録した。日射しをさえぎる日陰もない現場で汗水流し、黙々と作業に従事された方々に、感謝の意を表したい。

以下、各区の概要を述べる。

Ⅰ区　Ⅱ区に較べピット等の密度は濃くなく、掘建柱建物は１棟確認できたのみである。この区の北東側には室見川支流の奈良・平安期の流路があり、東南側には江戸期の流路が見られた。奈良・平安期の流路には河床への昇降用の道路状遺構３条もみられた。この流路の埋没したあと、その上面に平安時代後期の鍛冶炉が集中して営まれていた。このほか、８条ほどの溝、廃滓土坑、焼土坑などが確認できた。また、Ｃ，Ｄ－２区では遺構はともなわないが、縄文土器が集中して出土している。

Ⅱ区　水田造成時の削平をそれほど強く受けておらず、遺構の遺存状態は比較的良好である。相当数の遺構が検出された。確認できた遺構は、奈良時代から平安時代前半にかけてのものがほとんどである。主な検出遺構は、掘建柱建物が32棟で、うち戦国時代の建物も１棟みられた。この他、竪穴住居１軒、溝３条、小規模な鍛冶炉などである。また、この区の北側では掘建柱建物群に前後して整地がされており、この整地層から唐三彩が出土している。

Ⅲ区　先に述べたように室見川の奈良・平安期流路に接し、また水田面の造成で削平を受け遺構は希薄である。浅いピットがわずかに見られるが組織的に把握できない。

遺構番号は、一部欠番があるものの基本的に検出順の通し番号であるが、掘建柱建物についてのみＳＢの記号を付し、掘建柱建物だけの通し番号としている。

なお、今回の調査では数多くの製鉄関連遺構が検出され、多量の鉄滓が出土しているが、その分析結果については時間的制約から今回の報告には掲載しえず、次年度刊行予定の入部地区圃場整備関係調査報告に譲ることにしたい。

以下、検出遺構、遺物について概略を述べる。

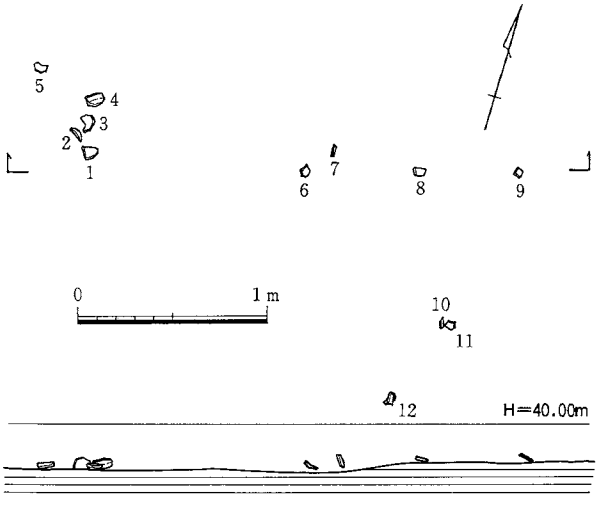
3　縄文時代の遺物

今回の調査地点では、試掘調査の段階で縄文土器、黒曜石剝片が小量ではあるが検出されており、当該期の遺構も予想された。しかしながら、本調査の結果明確な遺構は検出できず、包含層、縄文時代以降の遺構から出土したものであった。よって遺構出土の縄文時代遺物も、直接出土遺構と関係のないものであり本項で扱う。

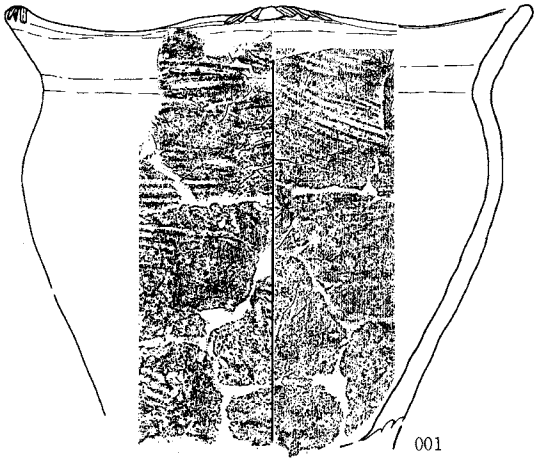
3－1　縄文土器（94・95図・図版35）

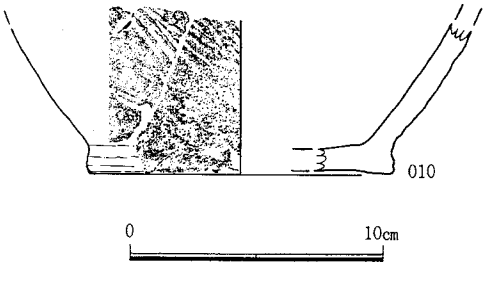
94図のように、C.D-2区で唯一まとまって出土している。基盤礫層の上面に細かな砂質の縄文時代包含層があり、きわめてプライマルな状態であり、相互に接合でき、表面も磨耗していない。

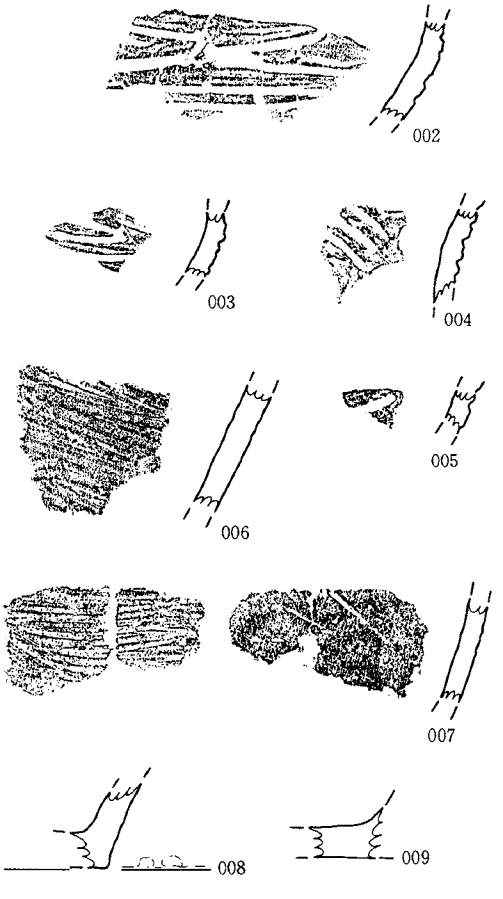
001は94図1～4と周辺包含層出土土器片を接合した深鉢である。底部を欠くがほぼ半分が残る。頚部がくびれ、斜め上方に伸びる口縁を4ケ所の頂部をもつ波状にする。頂部口唇には外方に広がる6条の刻みを施す。体部外面と内面上半には条痕文が



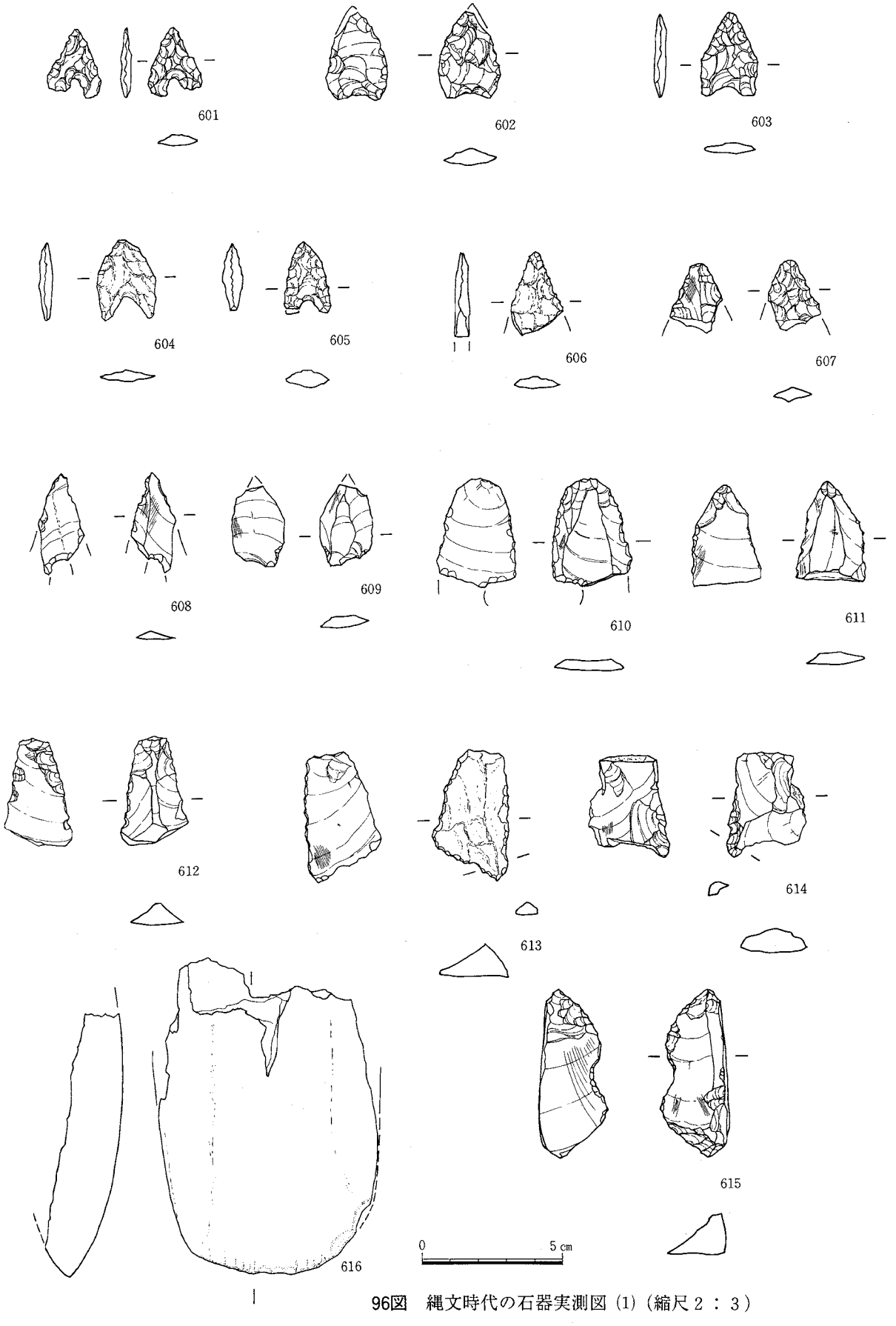
94図　縄文土器出土状況（縮尺1：40）



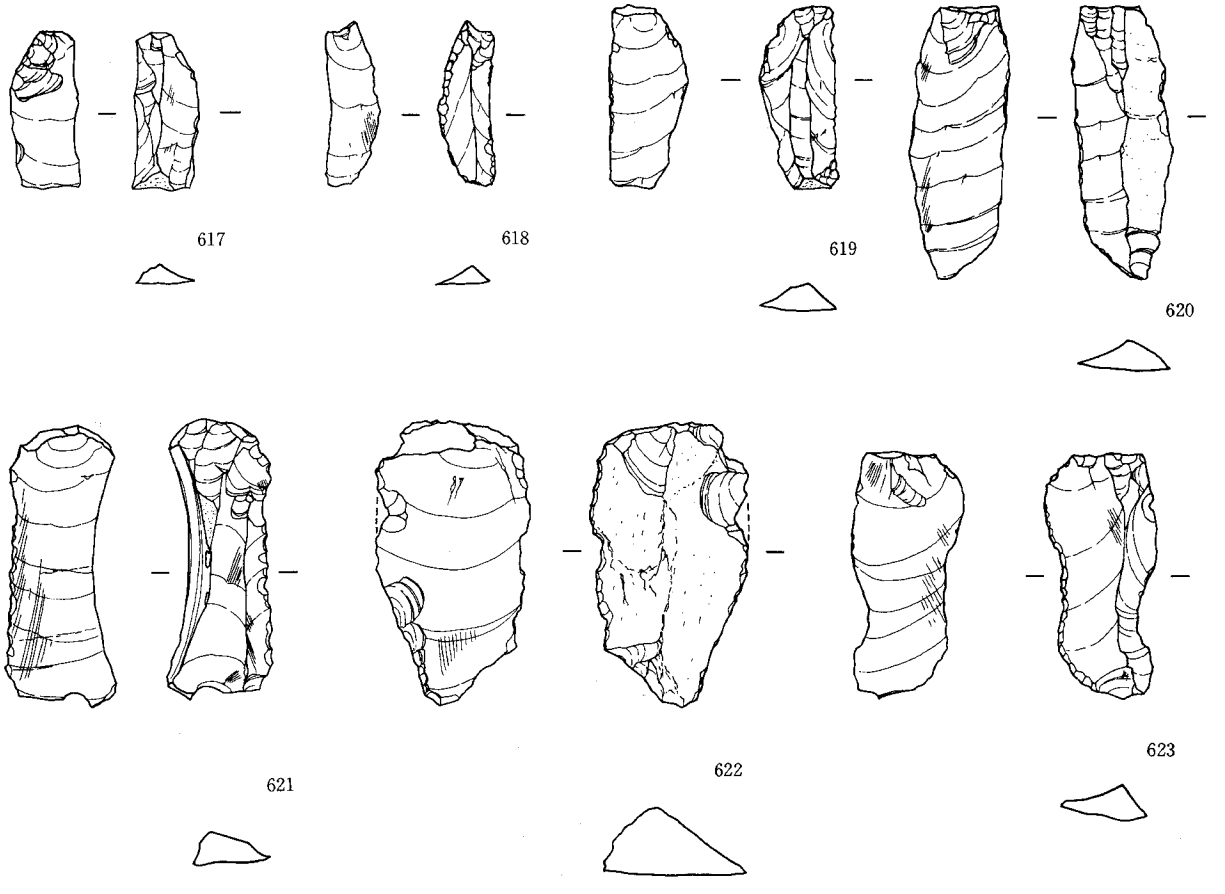




95図　縄文土器実測図（縮尺1：3）



96図　縄文時代の石器実測図 (1)（縮尺２：３）



97図　縄文時代の石器実測図 (2)（縮尺２：３）

残っている。胎土は砂粒を多く含み粗いが、焼成は良好で、器壁は滑らかである。後期中葉、鐘ケ崎式～北久根山式の時期に比定される。

002～005もC.D-２区で出土したものである。002が94図の10、他は周辺で出土したもので同一個体と考えられる。やや肩の張った浅鉢で、肩の部分に箆状施文具で鋭い沈線文を施しているが、文様構成は明確でない。胎土は001同様砂粒を多く含み粗い。時期も001と同様である。

007は94図７，９が接合したもので、001同様の深鉢胴部の下部破片である。外面に横位の条痕文が残っている。胎土は001同様砂粒を多く含み粗いが、体部径は001より大きく別の個体である。

008～009はいずれも深鉢の底部破片で、それぞれ94図の６，12にあたる。分厚く、胎土には砂粒を多く含み粗い。001，007の個体の底部であろう。

006はB-Ⅲ区包含層から出土したもので、深鉢の体部下半の破片である。外面は器壁が荒れて調整は不明であるが、内面には横方向の貝殻によると思われる条痕文がみられる。胎土は砂粒を含むが001より少ない。ほぼ同期であろう。

010は奈良時代の溝、0053遺構から出土した深鉢体部下半から底部にかけての破片である。内面はナデ、外面に貝殻条痕文が残る。底部は貼り付けで接合面に指頭圧痕がみえる。後期中葉の時期に比定される。

3－2　石器（96・97図・図版35）

先述した縄文時代後期中葉、鐘ケ崎式～北久根山式の時期に比定できる土器とともに、ほぼ時期的に同じ頃の石器が調査区全域から多く検出されている。プライマルな状態で出土したものではないがほぼ同時期の一括資料とみなしてもさしつかえないものと思われる。石鏃、石斧等定型的な石器のほか、加工痕や使用痕のある定型的でない剥片石器、剥片鏃の多いのも特徴的である。

601～607は両面を丁寧に押圧剥離した打製石鏃である。601は挟雑物を含むが良質の黒曜石で、片面に主要剥離面が一部残り、深い凹部を作り出す。602は大きな剥離で両面を整形するが、片面に主要剥離面が残り、浅い凹部を作り出す。尖端部を欠損する。黒曜石製。603は五角形を呈し、尖端部を丁寧に作り出す。良質の黒曜石を使用。604はサヌカイト製で、大きな剥離で両面を整形し、細長い脚を作り出す。605は灰色不透明の姫島産黒曜石製で、表裏を丁寧な剥離で整形するが、断面は分厚い。脚の一端を欠く。奈良期河川の0051遺構から出土。606はサヌカイト製で尖端部を丁寧に作り出す。脚部は欠損していると思われるが、基部は分厚く、あるいは未製品かもしれない。奈良期溝の0053から出土。607は良質の黒曜石を使用したもので、基部を欠損する。表裏を大きな剥離で整形するが、片面に主要剥離面が残されている。

608～612は、剥片に最小限の加工で整形した、いわゆる剥片鏃とその未製品である。608は、薄い縦長剥片の先端部にわずかな加工を加え、鋭い尖端を作ったもので、基部に抉りを入れ脚を作り出しているが、両脚ともに折損している。脈はあるが良質の黒曜石を使用している。奈良時代溝0005から出土している。609は良質の黒曜石の薄い剥片を使用し、基部、および先端部にわずかに加工を加え石鏃としたものである。尖端部を欠く。610は、良質黒曜石の縦長剥片の側縁に大きな抉りを入れ、折断したもので、剥片鏃の一般的な素材である。側縁を丁寧に加工し整形しているが、打瘤の厚みがそのまま残る未製品である。611は良質黒曜石の縦長剥片を素材にしているが、610のような抉りを入れず折断したものである。背面から主要剥離面側に加工を加え、打瘤を除去するとともに尖端部を作り出している。基部に二次加工はみられないが完成品と思われる。612も脈のある良質黒曜石の縦長剥片を素材にした石鏃未製品であるが、表裏両面から尖端部を作り出そうとする加工があり、また打瘤を除去し薄くしようという意図が見える。しかし、剥片自体の厚みがあり、製品化しなかったのであろう。

613～614は石錐である。613は背面が風化した分厚い黒曜石の剥片を使用したもので側縁全体に細かな加工を加え整形し、尖端部を尖らせ断面D字形の刃部を作り出している。614は挟雑物を含むやや粗質の黒曜石を使用したもので、側辺の一端を両面から加工し、尖端部を作り出している。奈良時代の溝0007遺構から出土している。このような形態の石錐は、周辺の清末遺跡群などでも縄文時代後晩期にみられこの時期に通有の形であろうか。

615は、脈のある黒曜石の甲高の剥片を使用したスクレイパーで、薄い側縁に抉りを入れ、上端は表裏両面から剥離を加え、厚い刃部を作り出し、下端は片刃の分厚い刃部を作り出している。

616は、流紋岩を素材にした石斧で全面磨製である。基部を欠損している。全体風化がみられるが、刃部には使用による細かな剥離や縦方向の線条痕が観察できる。

617～623は、剥片に細かな加工または使用痕を残す剥片石器である。いずれも黒曜石を素材にする。617は打瘤を除去しようとする加工がある。618は縦長剥片の両側に、また619～621には片側に微細な刃こぼれがみられる。622は分厚い剥片を素材にしたもので、片側に刃部を作り出す。旧河川0051からの出土で、ローリングにより表面は磨耗している。623は両側縁にノッチ状の刃こぼれがある。いずれも、スクレイパー、ナイフ的機能を持つものであろう。

4　古代・中世の遺構と遺物

東入部第10次調査地点で検出された遺構は、若干の近・現代攪乱、近世河川を除き、すべて奈良時代から中世にかけ営まれたものである。一部室町～戦国時代の掘立柱建物遺構もみられるが、大半は奈良時代後半から平安時代までの律令期の遺構である。遺構は概ね竪穴住居、掘立柱建物、柵、土坑、焼土坑、集石遺構、鍛冶炉・廃滓坑等の製鉄関連遺構、河川への昇降用道路遺構、旧河川や溝などの流路、ピット群などである。調査区の東西両側を室見川とその支流に区切られ、遺構はこの２本の川に挟まれた礫層、砂層の堆積からなる沖積段丘上にみられる。調査区内には本来自然地形による微妙な高低があったものと思われるが、古代の段階での整地、水田造成時の削平を受けており、調査区によって遺構の依存状態に違いがみられる。以下、各遺構についてその性格ごとに区分し、遺構の概要と出土遺物について述べる。

４－１　竪穴住居

今回の調査地点では確実な竪穴住居は１基だけ検出されている。掘立柱建物群の集中するⅡ区の中央部で、それらの建物の建て替え時期の合間を縫うように作られており、遺跡のなかにおけるこの竪穴住居の性格的位置付けは興味深い。

００１５竪穴住居（99・100図・図版26－１・２）

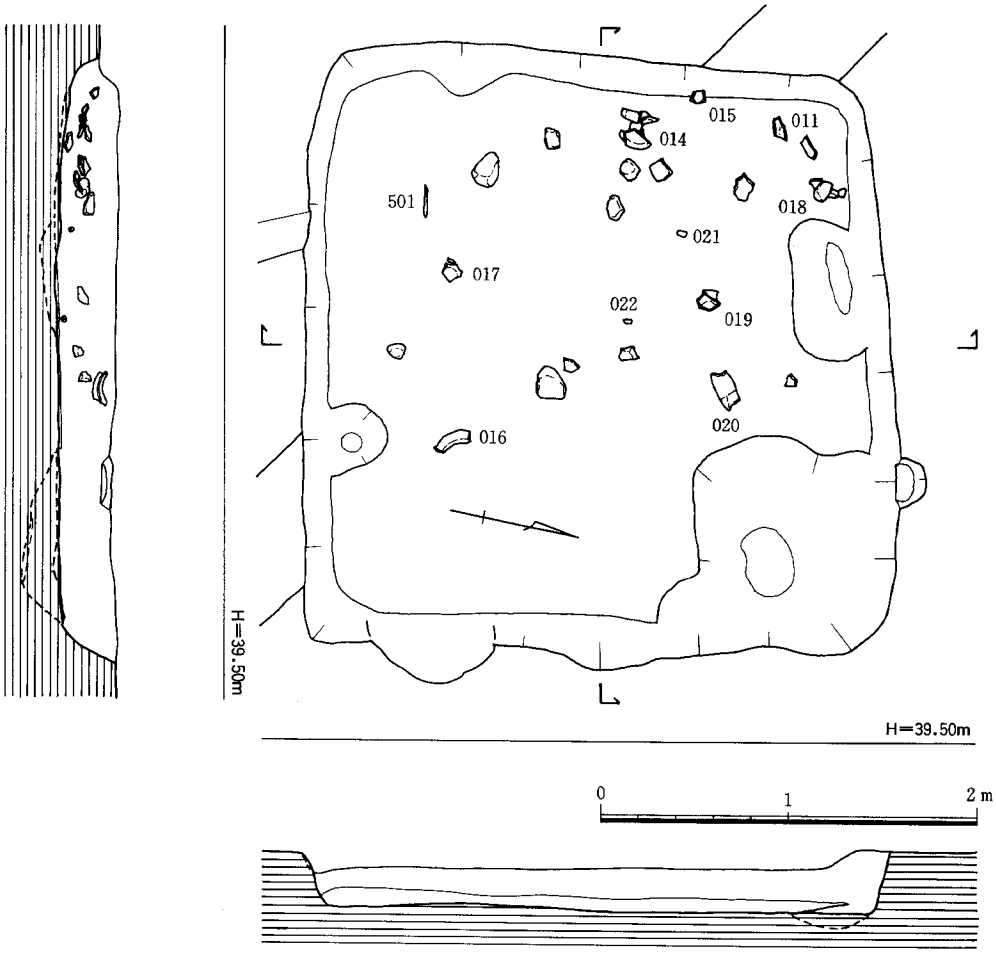
Ｆ．Ｇ－３区で検出されている。平面形は、一辺3.2mの隅丸のほぼ正方形を呈す。南北方向の軸線は磁北より12°ほど西に傾く。地山黄褐色細砂の砂地に作られたものであり、崩落によって壁はなだらかに立ち上がっているが、検出面から床面までの比高は35cmと比較的遺存状態は良好である。西側壁は水田面の変換線にあたり、より深く削平され15cm程の遺存状況である。覆土は、床面直上に地山黄褐色細砂のわずかに黒色に汚れた層があり、その上に炭化物、焼土を含む暗黒褐色砂質土が皿状に堆積している。上半部が黒みが強い。遺物はこの層から出土しており、建物が廃棄された段階の一括遺物と考えられる。この堆積のくぼみの上面には大粒の石英砂粒を多く含む黄茶褐色の砂質土がのっているが、遺物はほとんど含まれない。床面の東北隅に径約95cmで深さ20cmのなだらかな深皿状の土坑が、また北側壁、南側壁にそってそれぞれ深さ７cm、５cmの浅いピットがみられる。これらはこの住居にともなう遺構であるが炉、あるいは主柱穴とは考えられられない。用水路遺構0005と掘立柱建物ＳＢ23の柱穴の一部を切り、また、住居埋没後掘立柱建物ＳＢ30の柱穴が掘り込まれている。切り合い関係はないが、掘立柱建物ＳＢ24の床面北半に収まる位置にある。

出土遺物（100図）

011、012、014は土師器の皿である。いずれも外底は回転ヘラ削り調整をおこない、体部は回転ナデである。内面底は、014がナデの後、中心から外に向かって左巻き螺旋状のヘラ磨きがかかっているが、011は二次的な被熱によるあばた状の剝離で調整は不明。012は内底まで回転ナデ調整である。014の外底には墨書文字が残されているが、判読できない。

013は須恵器で、上記土師皿とほぼ同形同大の皿であるが、器壁がやや厚い。外底は回転ヘラ切り離し後ナデ、以外は回転ナデ調整。胎は明るい灰色で軟質の焼成である。

98図　古代中世主要遺構配置図（縮尺１：400）



99図　竪穴住居0015実測図（縮尺１：40）

015～017は土師器の坏である。いずれも外底はヘラ切り離しの後ナデ調整をし、さらに板状圧痕が観察できる。体部および内底は回転ナデ調整で、底部外側が膨らむのが特徴的である。015の口縁部内外面の一部に炭化物が付着しており、灯明として使用されたものであろう。016，017は二次的に過度の熱を受け表面は乳白色がかった赤褐色を呈す。

018は土師器の坏である。内面は体部、底部ともに暗文風の回転ヘラ磨きがされており外底はヘラ切り離し、体部外面の下半はヘラ削りによって整形されている。焼成は良好で、赤褐色を呈す。

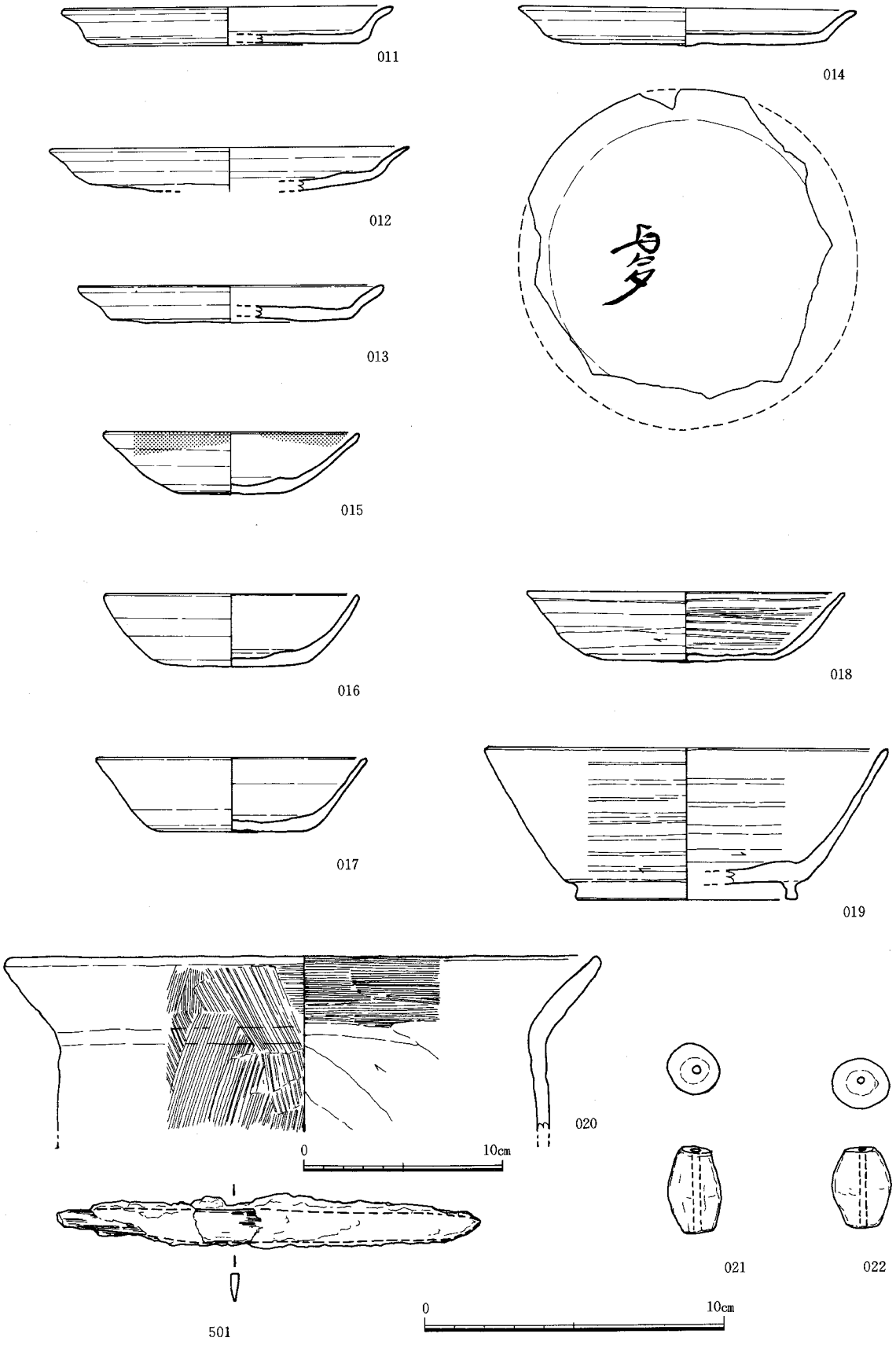
019は土師器の高台付きの椀で、復元口径20.6cm、器高7.5cmを計り、大振りである。体部内外面および内底部は、回転ナデ調整の後、ヘラ磨きが行なわれている。内底外側が盛り上がるのは先述した坏と同様である。高台は貼りつけである。焼成は良好で、赤褐色を呈す。

020は土師器の甕である。胎土は砂粒を多く含み粗い。内面はヘラ削りで整形し、内面口縁部は横方向のハケ目、外面には縦、斜め方向のハケ目が施される。外面には煤が付着している。

021～022は土師質の土錘である。両端を平坦にしている。室見川旧流路0001、支流の旧流路0051などからも出土しており、これらの河川での漁に使用されたものであろう。

501は鉄製刀子で、錆がひどいが、刀身、茎に木質が付着しており、鞘に収められた状態にあったものである。

出土遺物は８世紀後半～９世紀初頭に比定され、この遺構の時期もここに求められる。



100図　竪穴住居0015　出土遺物実測図（縮尺１：３、１：２）

４－２　掘立柱建物・柵

今回の調査地点ではⅡ区、Ⅲ区を中心に相当数のピットが検出されている。これらの大半は掘立柱建物の柱穴であると思われるが、密集する部分でのピット相互の関連を求めるのはきわめて困難なことであった。現地での調査と並行して検出できた建物もあったが、平面図作成後の図上の操作で検出できる建物の数も多くなると思われたので、遺構番号については他の遺構との混乱を避けるため、掘立柱建物、柵についてはそれぞれＳＢ．ＳＡの略号を付し、単独の遺構番号とした。この結果、Ⅱ区で30棟の掘立柱建物と１列の柵が、Ⅰ区で１棟の掘立柱建物が検出しえた。しかしながら、相互の関連性を把握しえないピットが多数残っており、さらに多くの掘立柱建物の存在したことが推察できる。よって検出しえた掘立柱建物については、遺漏のあることを断っておく。以下、検出しえた遺構について概要を述べる。

ＳＢ01（101図・図版24－３）

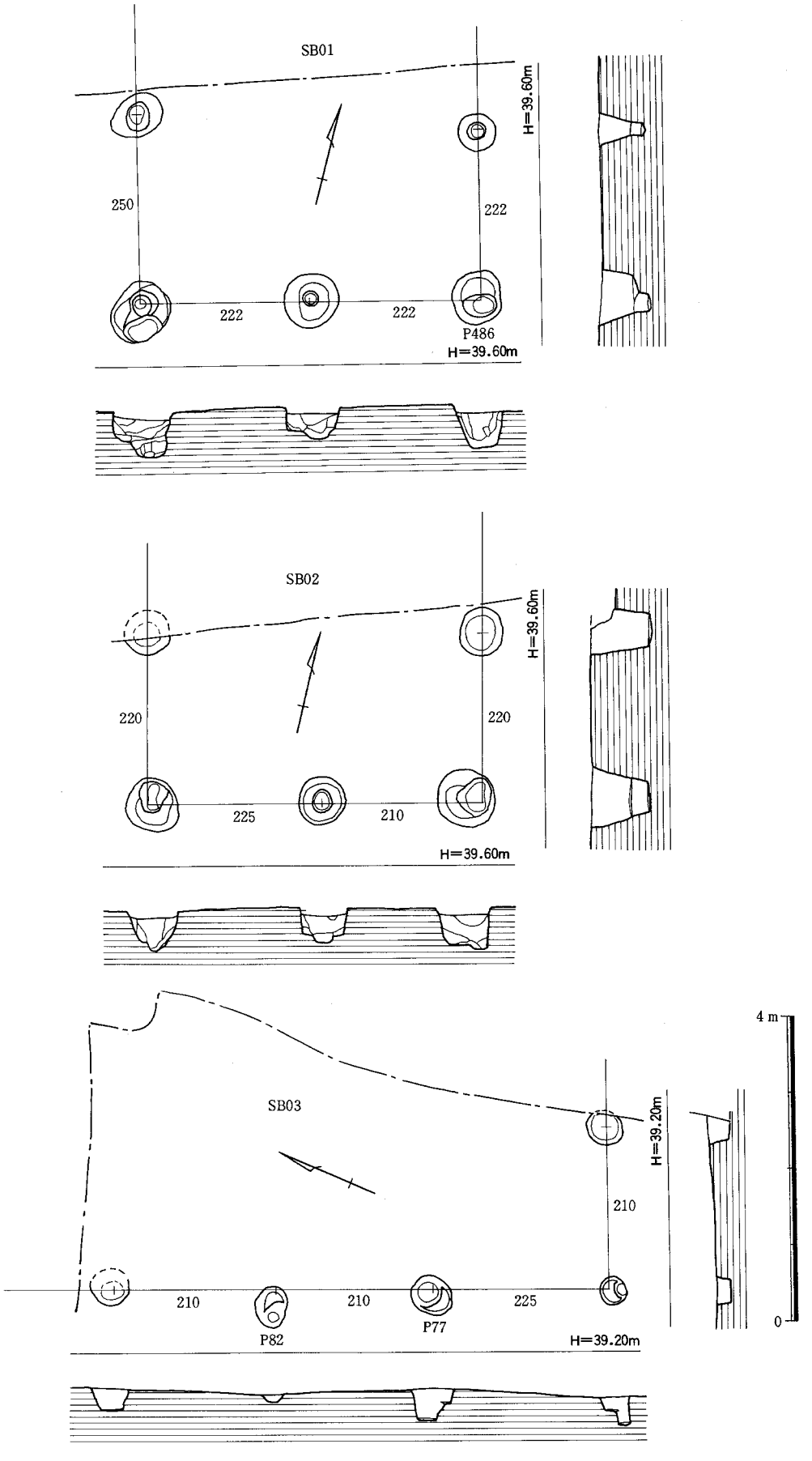
Ｅ．Ｆ－１区で検出した。この辺りは奈良時代遺物を包含し、焼土、木炭片を多く含む整地層があり柱穴はこの整地層に掘り込まれたものである。北側境界地に位置するために全体プランは不明であるが、東西の柱筋を梁方向とすると、主軸方位はＮ１５°Ｗをとる梁行２間、桁行２間以上の規模を持つ掘立柱建物であろう。梁行は4.44m、柱間はいずれも2.22mで等しい。桁行は全長は不明であるが東側柱筋の柱間は2.22m、西側は2.50mを計る。柱穴の深さは40～60cm、径は48～78cm、いずれの柱穴にも径20～25cm程度の柱痕が観察された。出土遺物は少ないが、Pit486からは土師器甕の比較的大振りの破片が出土している（112図・図版36）。胎が厚く、外面に平行叩き目、内面に当て具痕が観察され、ヘラ削りはなされていない。１０世紀半ばに位置付けられるもので、この遺構の時期もこの頃にれる。

ＳＢ02（101図・図版24－３）

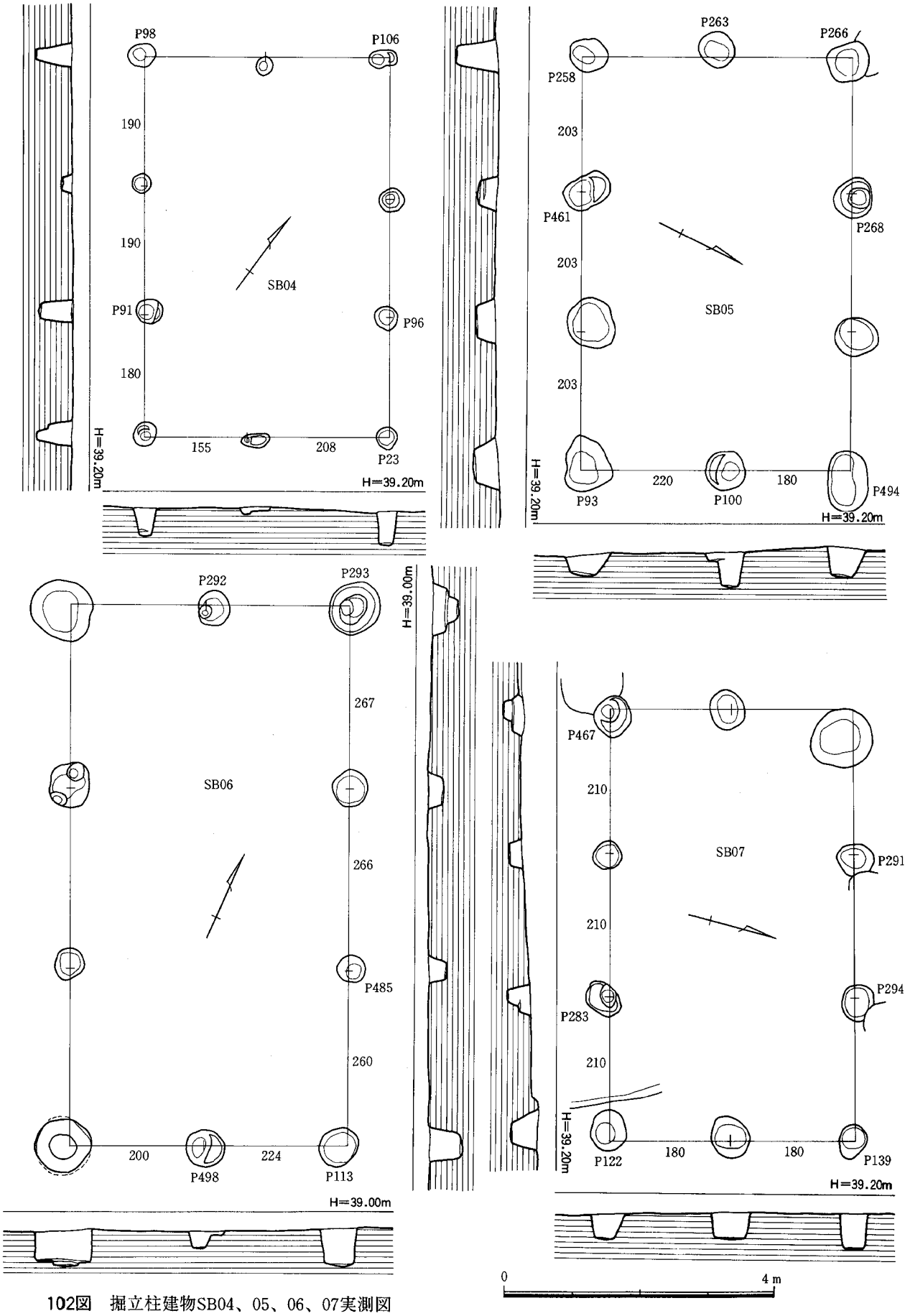
Ｅ．Ｆ－１区で検出した。ＳＢ01とほぼ重なり合う位置にあり、柱穴はＳＢ01同様に整地層に掘り込まれたものである。北側境界地に位置するために全体プランは不明であるが、東西の柱筋を梁方向とすると、主軸方位はＮ１４°Ｗをとる梁行２間、桁行２間以上の規模を持つ掘立柱建物であろう。梁行は4.35m、柱間は東側2.10m、西側2.25mを計る。桁行は全長は不明であるが東側柱筋の柱間2.20m、西側2.20mを計り等しい。柱穴の深さは56～80cm、径は60～75cm、いずれの柱穴にも径20～25cm程度の柱痕が観察された。遺物は少ないが、東南隅の柱穴から軟質の須恵器坏（112図・図版36）が出土している。直接遺構とは結びつかない。ＳＢ０１と切り合いはなく、前後関係は不明であるが、主軸方向がほぼ一致し、柱穴の規模、間隔も同様で、いずれかが建て替えられたものであろう。よってＳＢ01と前後するものの、時間的な開きはさほどないものと思われる。

ＳＢ03（101図）

Ｅ－１，２区で検出した。Ⅱ区の北東側境界地に位置するために全体プランは不明である。南北方向に３間、東西方向に１間の柱筋が検出できた。今回の調査区では梁行２間の建物がほとんどであるから、南北の柱筋が桁行と考えられ、方位はＮ23°Ｗをとる。規模は梁行２間、桁行３間以上であろう。



101図　堀立柱建物　SB01、02、03、実測図（縮尺１：80）



102図　掘立柱建物SB04、05、06、07実測図

梁行、桁行の全長は不明であるが、梁行柱間は2.10m、桁行柱間は南から2.25m、2.10m、2.10mを計る。柱穴の深さは25～45cm、径は38～55cm、径15～25cm程度の柱痕が観察された。Pit82、77から土師器甕破片が微量出土しているが、時期は明確でない。

ＳＢ04（102図）

Ｆ－５，６区で検出した。Ⅱ区の南側境界地付近に位置する。梁行２間、桁行３間の規模を持つ掘立柱建物である。主軸方位はN37°Ｗをとり、今回検出した掘立柱建物中突出して最も西偏している。梁行実長は3.36m、梁行柱間は東から2.08m、1.55m、桁行実長は5.60m、桁行柱間は北から1.90m、1.90m、1.80mを計る。柱穴の深さは12～50cm、径は28～40cmと比較的小振りで、柱痕は観察されない。各ピットから土師器、須恵器破片が微量出土しているが、これらの遺物は直接遺構とは関係が無い。Pit98からは15世紀代の龍泉窯青磁椀（112図025）が出土しており、遺構年代も15.6世紀、あるいは江戸時代まで下がる可能性もある。

ＳＢ05（102図）

Ｆ，Ｇ－５，６区で検出した。ＳＢ04の西に近接する。梁行２間、桁行３間の規模を持つ掘立柱建物である。主軸方位はN66°Ｅをとり、今回検出した主軸を東西方向にとる掘立柱建物中最も北に偏している。梁行実長は4.00m、梁行柱間は北から1.80m、2.20m、桁行実長は6.09m、桁行柱間はいずれも2.03mを計る。柱穴の深さは25～62cm、径は55～90cmと比較的大振りで、柱痕は観察されない。各ピットから土師器、須恵器破片が微量出土しているが、これらの遺物は直接遺構とは関係が無い。Pit258からは、混入の可能性もあるが近世磁器が出土しており、あるいは江戸時代まで下がる可能性もある。

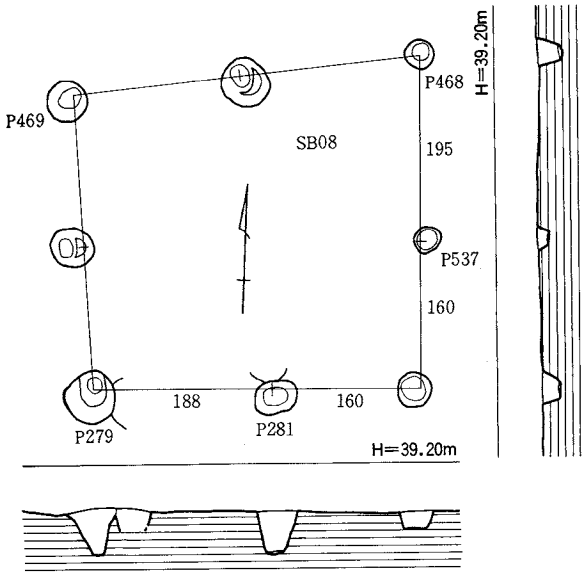
ＳＢ06（102・114図）

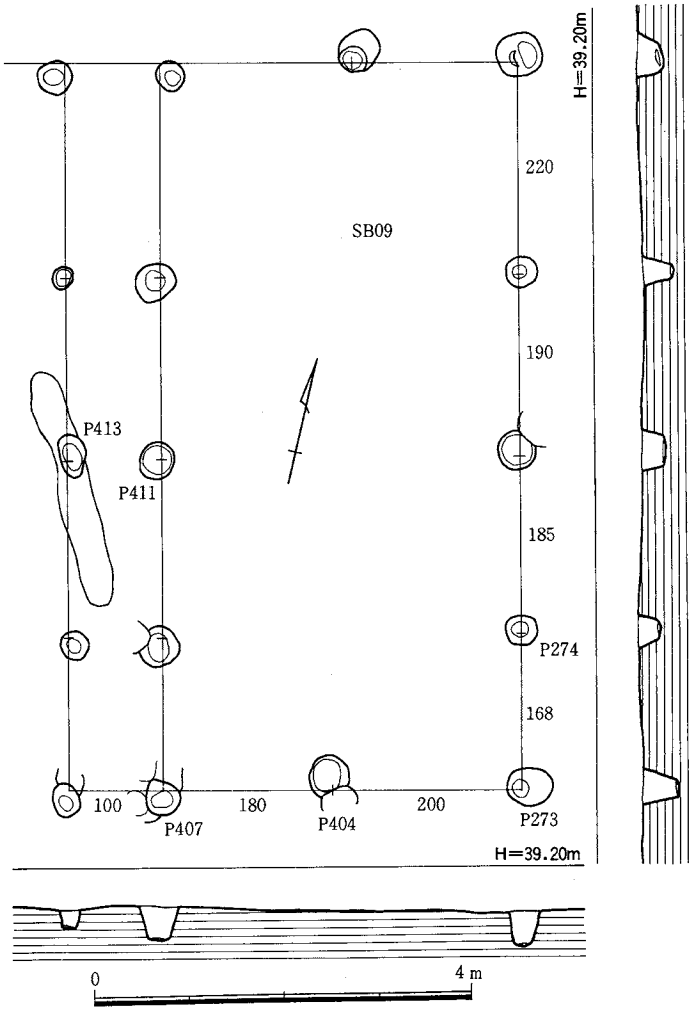
Ｆ，Ｇ－４，５区で検出した。梁行２間、桁行３間の規模を持つ掘立柱建物である。主軸方位はN23°Ｗをとる。梁行実長は4.24m、梁行柱間は東から2.24m、2.00m、桁行実長は7.93m、桁行柱間は北から2.67m、2.66m、2.60mと長い。柱穴の深さは24～60cm、径は40～94cmを計る。一部20～30cm程の柱痕も観察できた。北側柱列がＳＢ07を切っており、ＳＢ07より新しい。また、これらの柱穴のうち南西隅と北西隅、南東隅の柱穴は、築造時に祭祀が行なわれており、きわめて特徴的な土師器坏、内黒土器などの遺物がまとまって出土している。発掘時柱穴相互の関連が把握できなかったため、それぞれ単独の遺構番号0032，0033、Pit113を付し、実測、取り上げをおこなっている。

0032（113図・図版25－５）は径80cm、深さ55cmで、底面に径40cm程の掘り込みがある。掘方覆土中に４点の土師器坏が出土している（114図029～032）。いずれも口径12.5cm前後、体高3.5cm強のもので、同形同大であるが、032には貼り付けの高台がある。これらの内面見込みには、１辺1.3cmの正方形のなかに４個の半球状の浮文をもつ印文が施されている。外底には回転ヘラ切り離しによる渦巻き状の痕跡と板状圧痕が観察できる。

0033（113図・図版25－６）は径82～92cm、深さ57cmのほぼ円形の掘方である。ここでは内黒土器１点が出土している。内面はヘラ磨きされているが器壁は荒れている。見込みに「＊」の細かい線描きがある。焼成後に描かれたものである。

Pit113は径60cm、深さ58cmの円形掘方で、００３２と同形同大の土師器２点が出土している。１点





103図　掘立柱建物SB08、09実測図（縮尺１：80）

には見込みに同様の印文がみられるが、もう１点にはない。

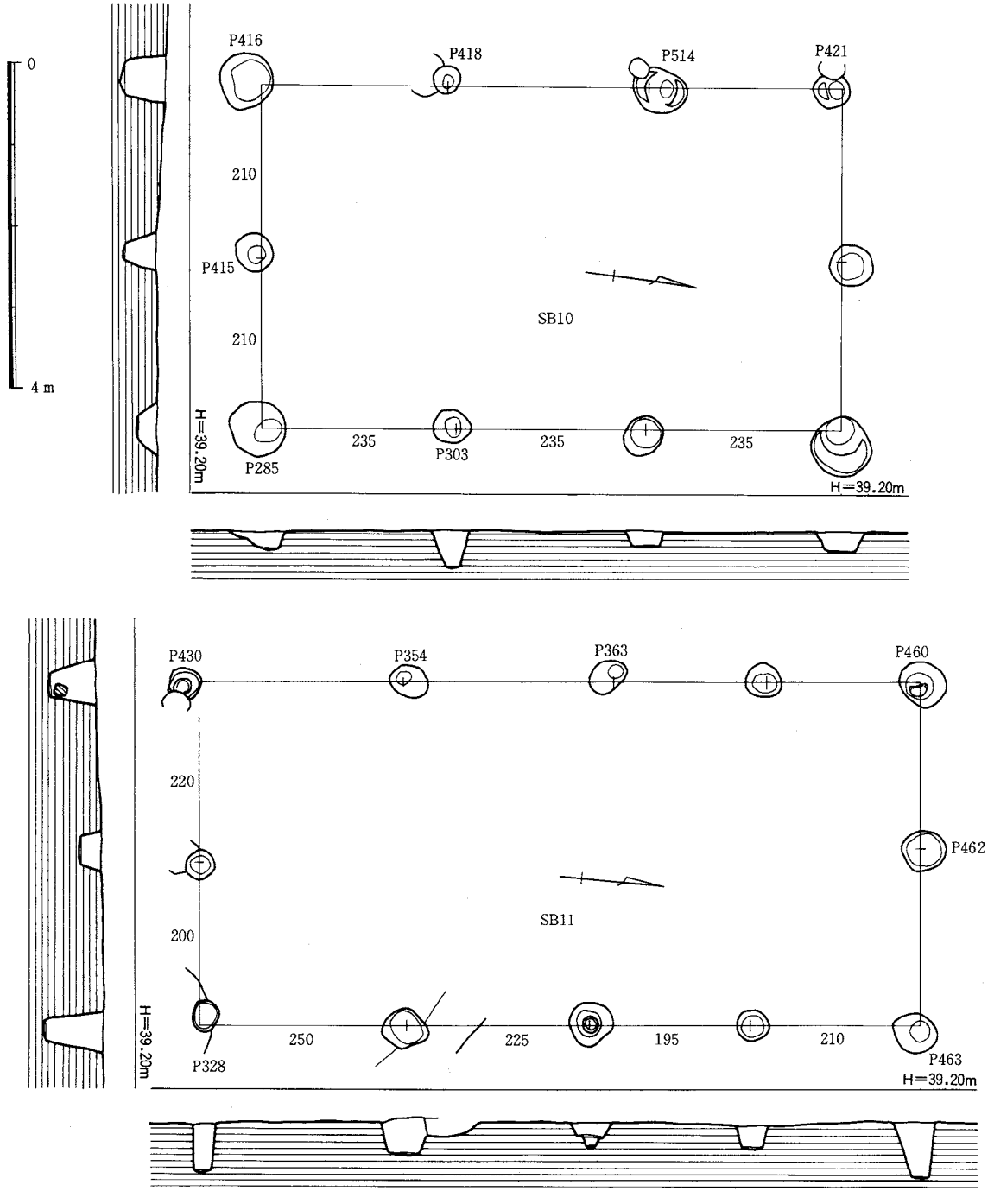
これらの遺物は９世紀半ばから後半にかけてのもので、この建物もこの時期に比定できる。

ＳＢ07（102図）

Ｆ，Ｇ－４．９区で検出しており、ＳＢ06の北半部に重なる。前述のとおりＳＢ06より旧い。梁行２間、桁行３間の規模を持つ掘立柱建物である。主軸方位はN75°Ｅをとる。梁行実長は3.60m、梁行柱間は1.80mで等しく、桁行実長は6.30m、桁行柱間もそれぞれ2.10mで等しい。柱穴の深さは22～50cm、径は40～94cmを計る。一部18～32cm程の柱痕も観察できた。北西隅の柱穴はＳＢ０６の柱穴0033によって欠失している。それぞれの柱穴から土師器、須恵器片が出土しているがいずれも小破片で量的にも少ない。

ＳＢ08（103図）

Ｇ－４，５区で検出している。ＳＢ07，19と重なりあうが切り合いはない。梁行、桁行ともに２間の掘立柱建物で、平面形はいびつである。東側柱列を桁行とすると主軸はＮ４°Ｗとなる。梁行実長は南側柱列で3.48ｍ、柱間は東から1.60ｍ、1.88m、桁行実長 は東側柱列で3.55ｍ、柱間は北から1.95m、1.60mとなる。柱穴の深さは12～48cm、径は30～56cmを計る。３つの柱穴で12～16cmの柱痕 が観察できた。土師器小片が出土しているが微量である。



104図　掘立柱建物SB10、11実測図（縮尺１：80）

ＳＢ09（103図・図版24－５）

Ｇ．Ｈ－５区で検出している。梁行２間、桁行４間の掘立柱建物で西側にのみ廂がつく。主軸はＮ13.5°Ｗをとる。梁行実長は3.80m、柱間は東から2.00m、1.80m、桁行実長は5.73m、柱間は北から2.20m、1.90m、1.85m、1.68mを計る。廂と身舎との柱間はほぼ1.00mである。身舎の柱穴は深さ20～38㎝、径は30～50㎝を計り、Pit404では径15㎝の柱痕が観察できた。廂の柱穴は身舎に比べると幾分小振りになつている。出土遺物は量的に少なく、また小破片であるが、Pit273からはＳＢ０１と同様の、器壁を叩き締め、外面に平行叩き目の残る土師器甕破片が検出されている。主軸方位もＳＢ０1.02とほぼ近く、この遺構の時期も10世紀半ば前後に求められよう。

ＳＢ10（104図）

Ｇ－４区で検出されている。梁行２間、桁行３間の掘立柱建物である。主軸方位はN8.5°Wをとる。梁行実長は4.20m、柱間はいずれも2.10m、桁行実長は7.05mで柱間はいずれも2.35mで、柱列は整然と並ぶ。他の建物との切り合いはない。柱穴の深さは20～58cm、径は33～73cmである。出土遺物は土師器の小破片ですくなく、Pit418からは鉄滓、Pit303からは土師器竈破片が出土している。遺構年代は遺物からは明らかにしがたい。

ＳＢ11（104図）

Ｇ－２、Ｈ－３区で検出されている。梁行２間、桁行４間の掘立柱建物である。主軸方位はＮ６°Wをとる。梁行実長は4.20m、柱間は東から2.00m、2.20m、桁行実長は8.80mで柱間は北から2.10m、1.95m、2.25m、2.50mを計る。いくつかの他の建物と接しているが、柱穴の切り合いは明確でない。わずかにＳＢ22の柱穴に切られており、少なくともそれより旧い。また、用水路遺構0005埋没後に柱穴が掘り込まれておりそれより新しい。柱穴の深さは26～70cm、径は35～58cmである。Pit462では径18cm程の柱痕が観察され、またPit460では床に平石がおかれていた。出土遺物は土師器、須恵器の小破片が小量で、遺構年代は遺物からは明らかにしがたい。

ＳＢ12（105図）

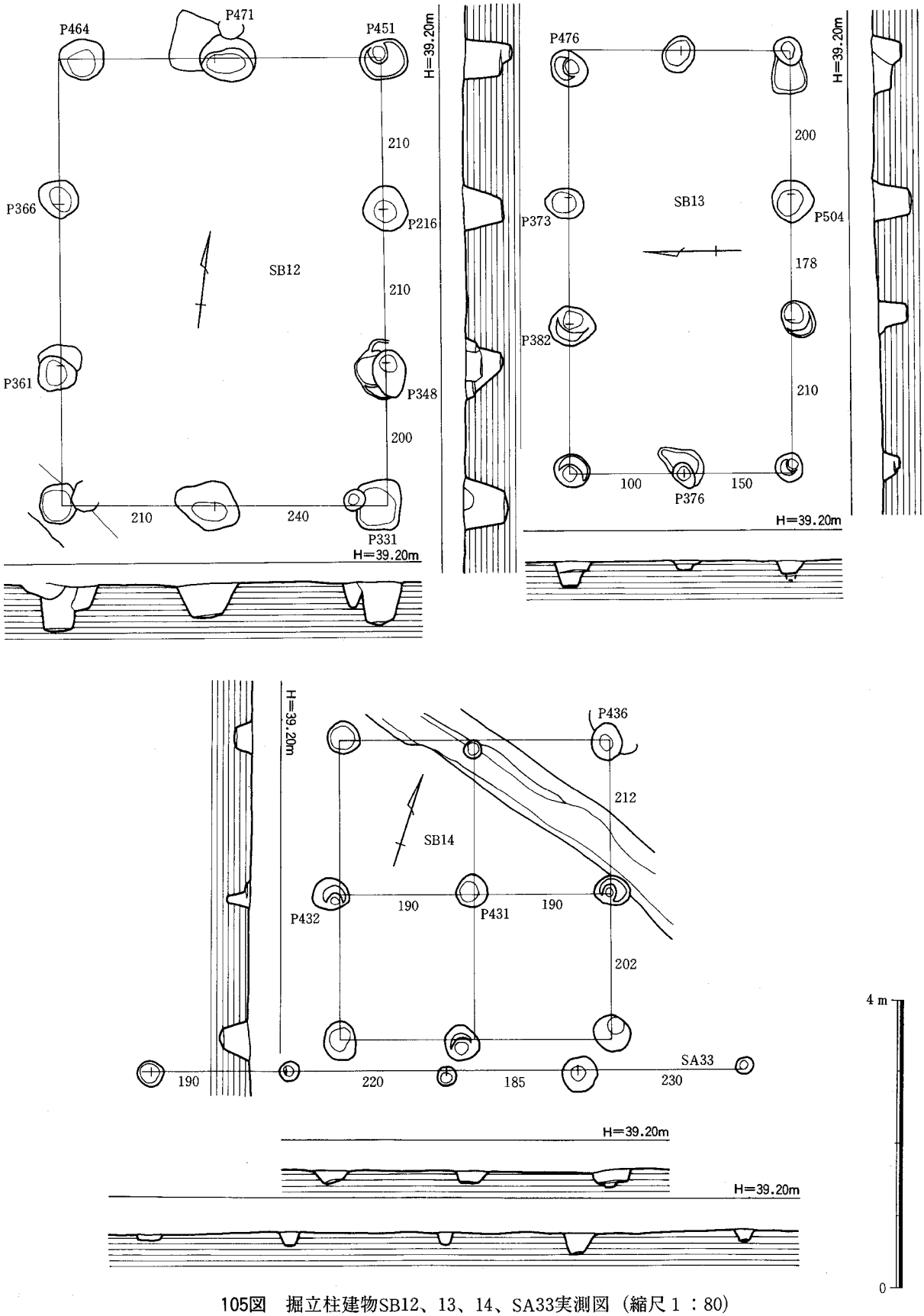
Ｆ，Ｇ－２．３区で検出されている。梁行２間、桁行３間の掘立柱建物である。主軸方位はＮ８°Wをとり、ＳＢ10，ＳＢ22とほぼ等しい。梁行実長は4.50m、柱間は東から2.40m、2.10m、桁行実長は6.20mで柱間は北から2.10m、2.10m、2.00mを計る。他の建物と重なりあっているが、柱穴の切り合いはなく、前後関係は不明である。また、用水路遺構0005完掘後に柱穴が検出されておりそれより旧い。柱穴の深さは46～64cm、径は52～94cmである。Pit451では径25cm程の柱痕が観察された。出土遺物は８世紀後半代の土師器甕、須恵器坏、蓋の破片がみられる。確実な遺構年代は遺物からは明らかにしがたいが、0005との切り合い関係から、おおまかに８世紀後半から９世紀初め頃と推定できる。

ＳＢ13（105図）

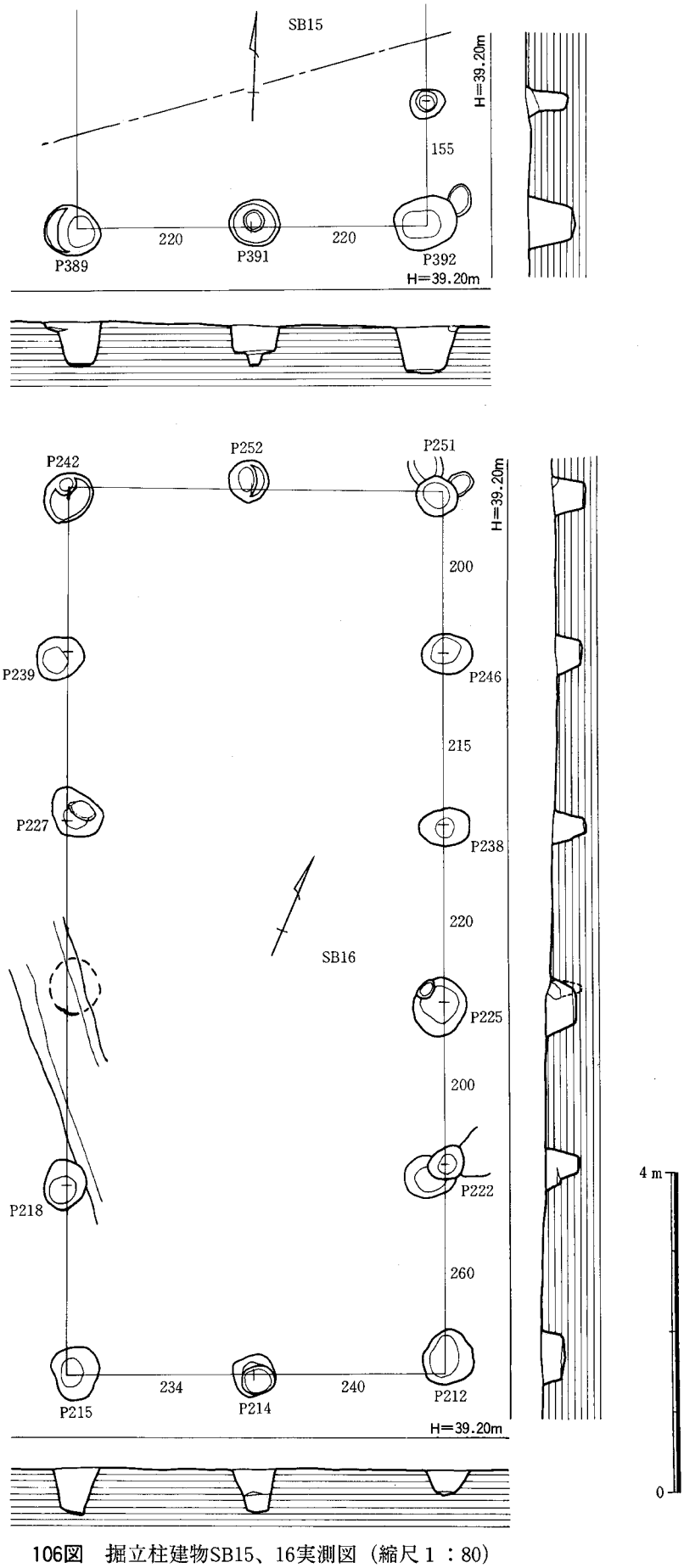
Ｇ－２区で検出されている。東西に長い梁行２間、桁行３間の掘立柱建物である。主軸方位はＮ90°Ｅをとり、他の東西に中軸を向ける建物より20°前後東偏している。この軸線はＳＢ08、15、32に近い。梁行実長は3.10m、柱間は北から1.60m、1.50m、桁行実長は5.88mで柱間は東から2.00m、1.78m、2.10mを計る。他の建物と面的に重複しているが、明確な柱穴の切り合いはなく、前後関係は不明である。柱穴の深さは16～50cm、径は38～60cmである。一部の柱穴ではでは径15cm程の柱痕が観察された。出土遺物はごく小量の土師器甕の破片がみられる。確実な遺構年代は遺物からは明らかにしがたい

ＳＢ14（105図・図版24－４）

Ｈ－２区で検出された。梁行２間、桁行２間の総柱の掘立柱建物である。主軸方位はＮ17°Wをとる。東西の柱列を梁行とすると実長は3.80m、柱間は中央柱間で1.90m、桁行実長は4.14mで柱間は北か



105図　掘立柱建物SB12、13、14、SA33実測図（縮尺１：80）



106図　掘立柱建物SB15、16実測図（縮尺１：80）

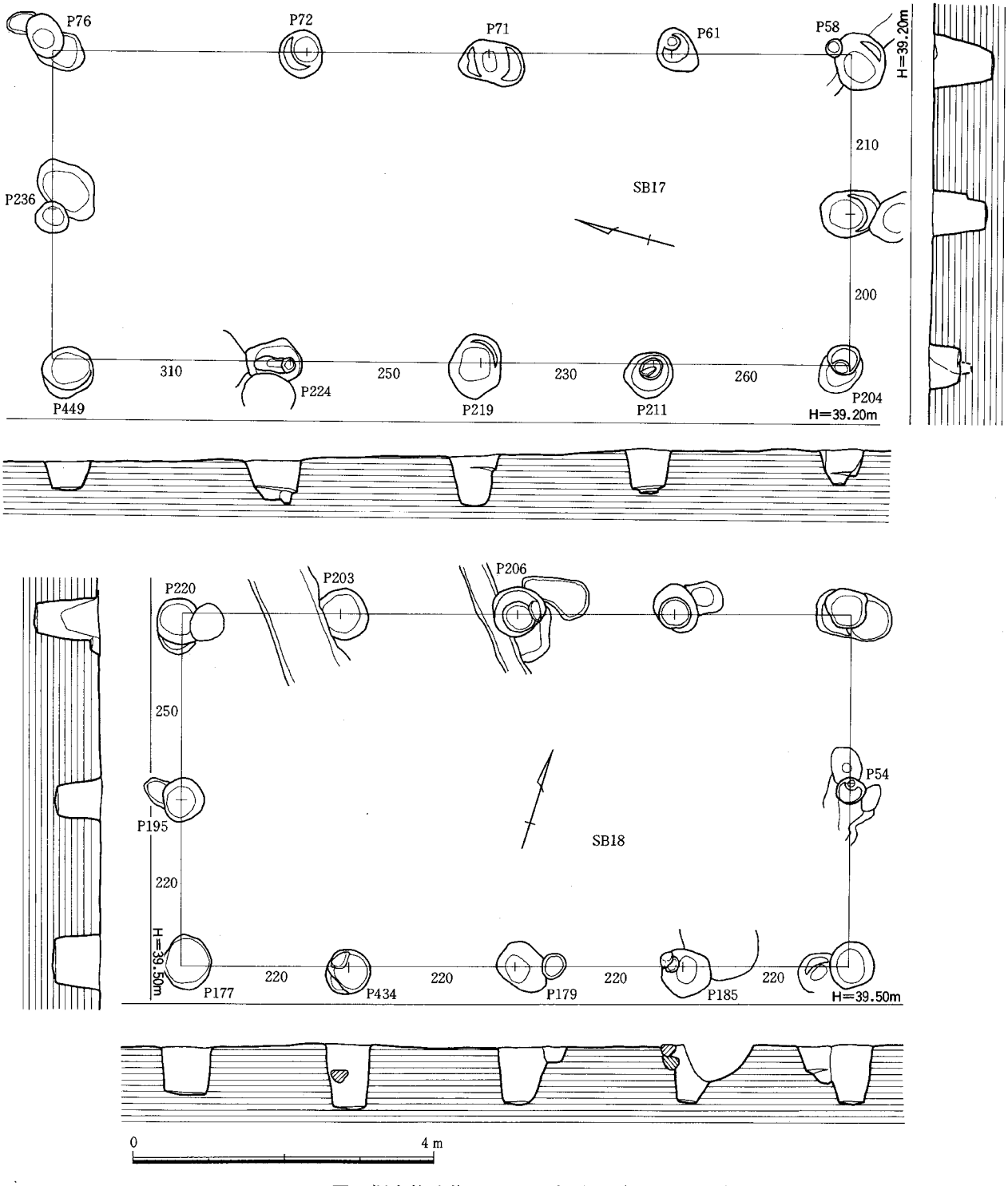
ら2.12m、2.02mを計る。柱穴の一つは用水路遺構0005完掘後、底部で検出されており、それより旧い。柱穴の深さは15～45cm、径は26～54cmである。出土遺物はごく微量で遺構年代は遺物からは明らかにしがたいが、北側の掘立柱建物ＳＢ29、南側柵列ＳＡ33と軸線は一致し、同時期の遺構であろう。

ＳＢ15（106図）

Ｇ－１区の調査区北側境界で検出されたもので、全体プランは不明であるが、東西方向の柱列を梁筋とすると、梁行２間、桁行２間以上の規模が考えられる。梁行実長4.40m、柱間いずれも2.20m、桁行実長は不明であるが、柱間1.55mを計る。南北方向を主軸とするとＮ２°Ｗをとり、ＳＢ13に近い。柱穴は深さ49～58cm、径40～78cmで、18～20cmの柱痕が観察できる。遺物は微量で、時期は明確にしがたい。

ＳＢ16（106図）

Ｆ－１．２区検出である。梁行２間、桁行５間の細長い掘立柱建物である。主軸はN23°Ｗをとる。検出された中、近世を除く掘立柱建物中最も西偏する。梁行実長4.74cm、柱間は東から2.40m、2.34m、桁行実長10.95mを計る。柱穴の深さは30～55cm、径は45～68cmで、Pit238で径12cmの柱痕が観察できた。東南隅の柱穴がＳＢ20の柱穴を切っており、また、桁行柱列の柱穴の一部が0005、0007の用水路遺構に切られている。出土遺物は須恵器、土師器の破片がの各柱穴からみられたが、いずれも小破片である。おおむね８世紀後半

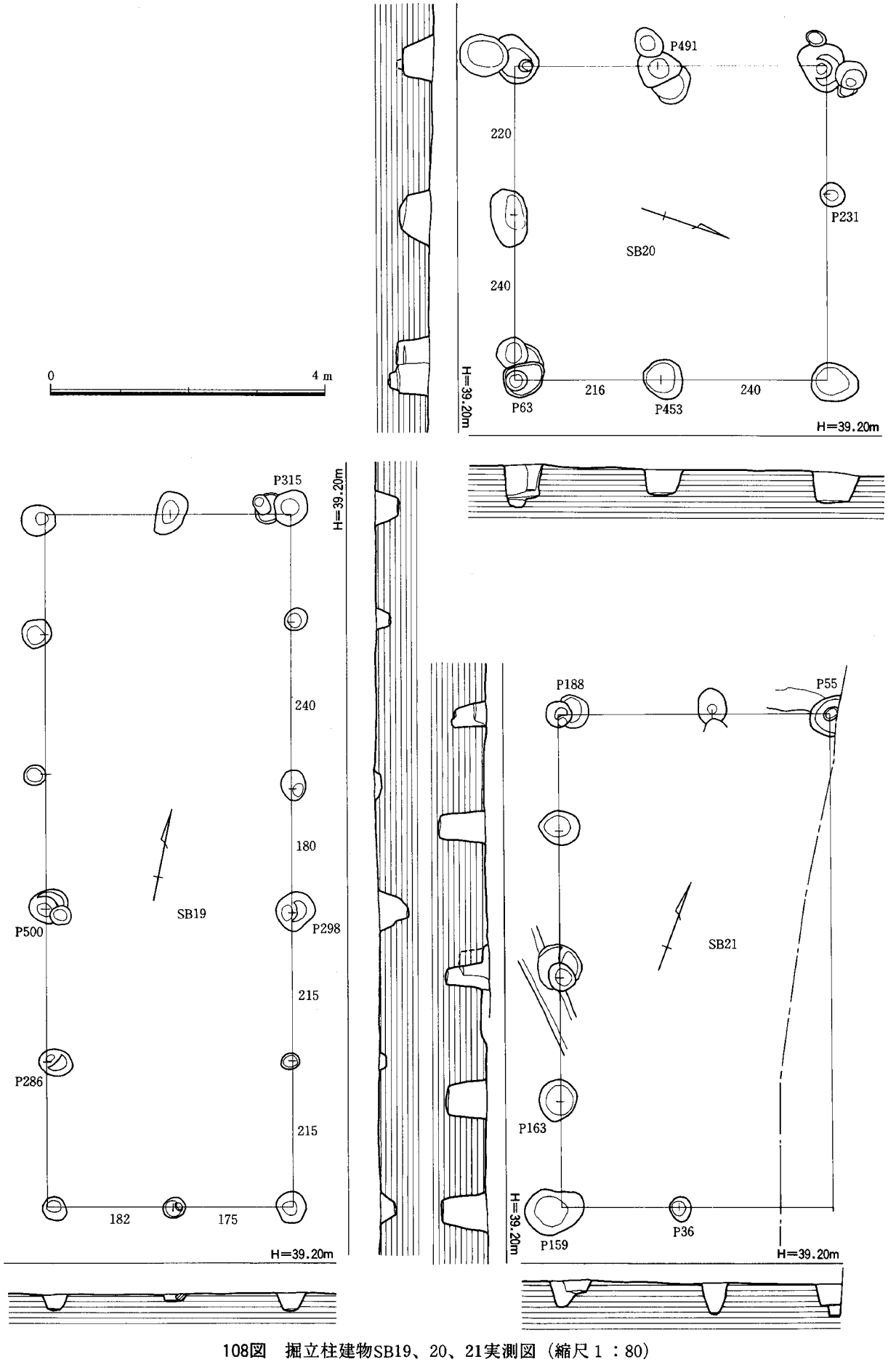


107図　掘立柱建物SB17、18実測図（縮尺１：80）

から９世紀初頭に位置付けられるものである。

ＳＢ17（107図）

Ｅ．Ｆ－２．３区で検出された。梁行２間、桁行４間の南北に長い建物である。主軸方位はＮ１５．５°Ｗをとる。梁行実長4.10m、柱間は東から2.10m、2.00m、桁行実長は10.50m、柱間は北から3.10m、2.50m、2.30m、2.60mを計る。他の建物との明確な切り合い関係はない。柱穴の深さは38～78㎝、径は45～68㎝、一部径18～24㎝の柱痕が観察された。出土遺物はやや多く、８世紀後半から９世紀前



108図　掘立柱建物SB19、20、21実測図（縮尺１：80）

半に位置付けられる土師器、須恵器がみられるがいずれも小破片である。しかしかならずしも、遺構年代とは結びつかない。方位はＳＢ01、28とほぼ等しく、桁行柱筋が一直線に並ぶことから、これらと同時期と考えられる。

ＳＢ18（107図）

Ｅ．Ｆ－３区で検出された。梁行２間、桁行４間の東西に長い建物で、主軸方向はN72°Ｅをとる。梁行実長4.70m、柱間は南から2.20m、2.50m、桁行実長8.80m、柱間は南側柱筋でいずれも2.20mと等しく、整然とした柱列である。他の建物との明確な切り合いはみられないが、廃滓土坑0014に柱穴の一つが切られている。柱穴の深さは64～84cmと深く、径38～72cm、一部径25cmほどの柱痕が観察された。出土遺物はやや多く、８世紀後半から９世紀前半に位置付けられる土師器、須恵器がみられるがいずれも小破片である。図示した０２６は軟質の須恵器坏蓋である。しかしかならずしも、遺構年代とは結びつかない。

ＳＢ19（108図）

Ｇ－４．５区で検出された。梁行２間、桁行５間の南北に細長い建物で、主軸方向はＮ１２°Ｗをとる。梁行実長3.57m、柱間は東から1.75m、1.82m、桁行実長10.10m、柱間は東側柱筋で北から1.60m、2.40m、1.80m、2.15m、2.15mを計る。他の建物との切り合いはみられない。柱穴の深さは12～42cm、径22～55cmで残りの状態はよくない。出土遺物は微量である。

ＳＢ20（108図）

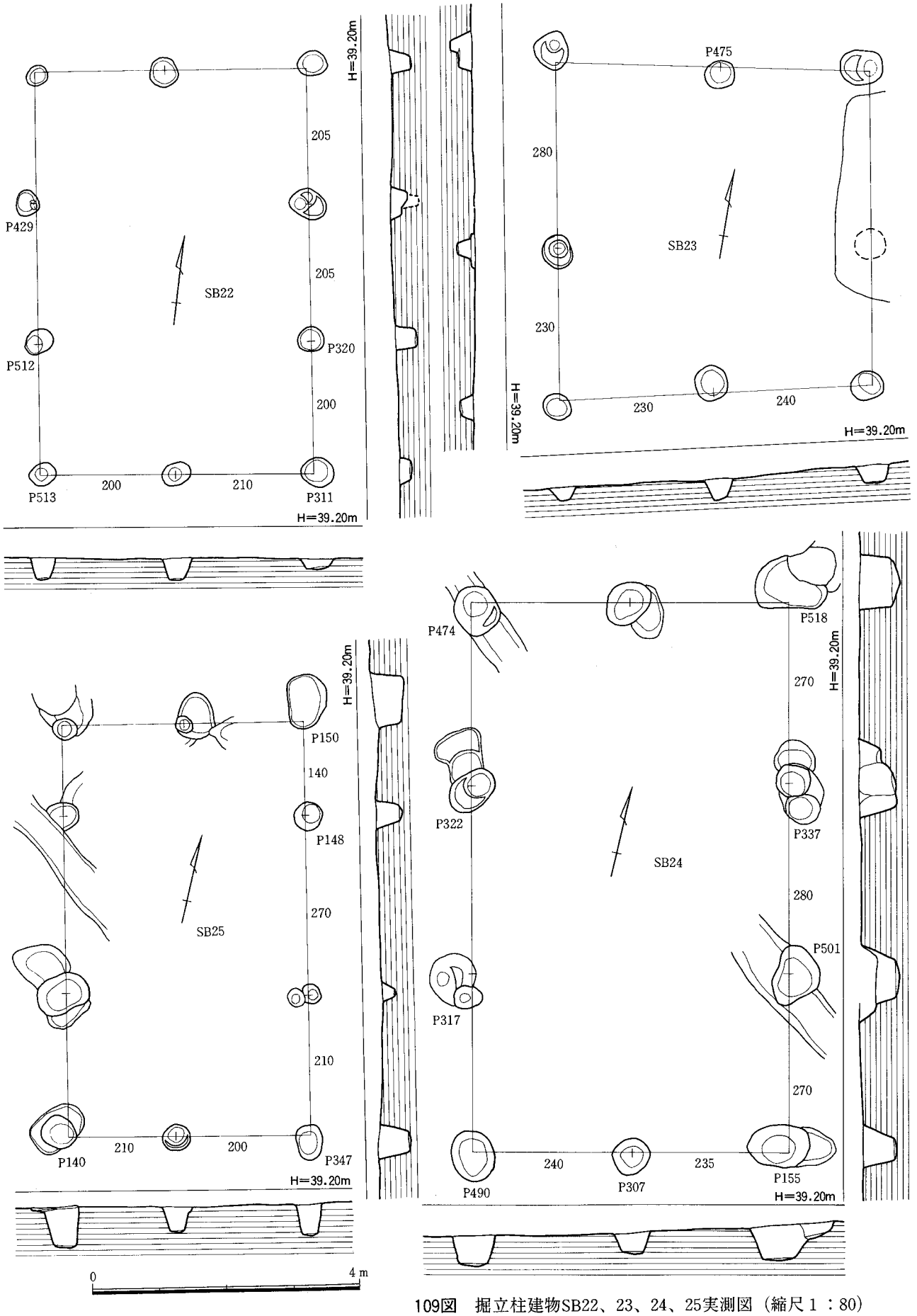
Ｅ．Ｆ－２．３区で検出された。梁行２間、桁行２間の建物で、東西柱列を梁行とすれば主軸方向はＮ２０°Ｗとなる。梁行実長4.60m、柱間は東から2.40m、2.20m、桁行実長4.56m、柱間は北から2.40m、2.16mを計る。柱穴の一つがＳＢ１６に切られている。柱穴の深さ38～60cm、径36～82cmで、12～18cmの柱痕が観察された。８世紀後半代の土師器甕、須恵器坏蓋などが小量出土している。

ＳＢ21（108図）

Ｅ．Ｆ－３．４区で検出された。Ⅱ区の東側境界にあり、全体プランは明らかでない。この地区では梁行２間が一般的であり東側桁行柱列のみが調査区外にあるものと思われ、南北に長い梁行２間、桁行４間の建物が推定される。主軸方向はN21°Ｗとなる。北側柱列で梁行実長4.00m、柱間は東から1.75m、2.25m、桁行実長7.20m、柱間は北から1.70m、2.10m、1.80m、1.60mを計る。他の建物との直接の切り合いはないが、廃滓土坑００１４を柱穴の一つが切っており、これに切られたＳＢ１８より新しい。柱穴の深さ36～68cm、径30～86cmで、20～22cmの柱痕が観察された。８世紀後半頃の土師器、須恵器などが小量出土している。この建物床面には鍛冶炉、廃滓土坑がみられ、付属施設である可能性もある。

ＳＢ22（109図）

Ｇ．Ｈ－３．４区で検出された。梁行２間、桁行３間の建物で、主軸はＮ８°Ｗをとる。北西隅の柱穴がＳＢ１１の柱穴を切っている。梁行実長は4.10m、柱間は東から2.10m、2.00m、桁行実長は6.10m、柱間は北から2.05m、2.05m、2.00mを計りほぼ等しい。柱穴は深さ15～41cm、径は28～48cmを計る。出土遺物は微量である。主軸方向と柱筋は南に隣接するＳＢ10と一致しており同一時期の建



109図　掘立柱建物SB22、23、24、25実測図（縮尺１：80）

物であろう。

ＳＢ23（109図）

Ｇ－３区で検出された。梁行２間、桁行２間の建物で、平面プランはややいびつである。南北柱列を桁筋とすると主軸はＮ11°Ｗをとる。東側柱列の中央柱穴は竪穴住居0015の掘込みによって欠失している。梁行実長は南側柱列で4.70m、柱間は東から2.40m、2.30m、桁行実長は西側柱列で6.10m、柱間は北から2.80m、2.30mを計る。柱穴は深さ19～33cm、径は43～66cmを計る。Pit475で径15cmの柱痕が観察された。出土遺物はほとんどみられない。

ＳＢ24（109図）

Ｆ．Ｇ－３．４区で検出された。梁行２間、桁行３間の建物で、主軸はＮ14°Ｗをとる。Pit474、501は溝0005の完掘後底面で検出されており、これより旧い建物である。梁行実長は南側柱列で4.75m、柱間は東から2.35m、2.40m、桁行実長は東側柱列で8.20m、柱間は北から2.70m、2.80m、2.70mを計り、柱列は整然と並ぶ。柱穴は深さ30～62cm、径は58～95cmを計る。Pit474、490で径18～20cmの柱痕が観察された。出土遺物は土師器破片が小量みられるのみである。

ＳＢ25（109図）

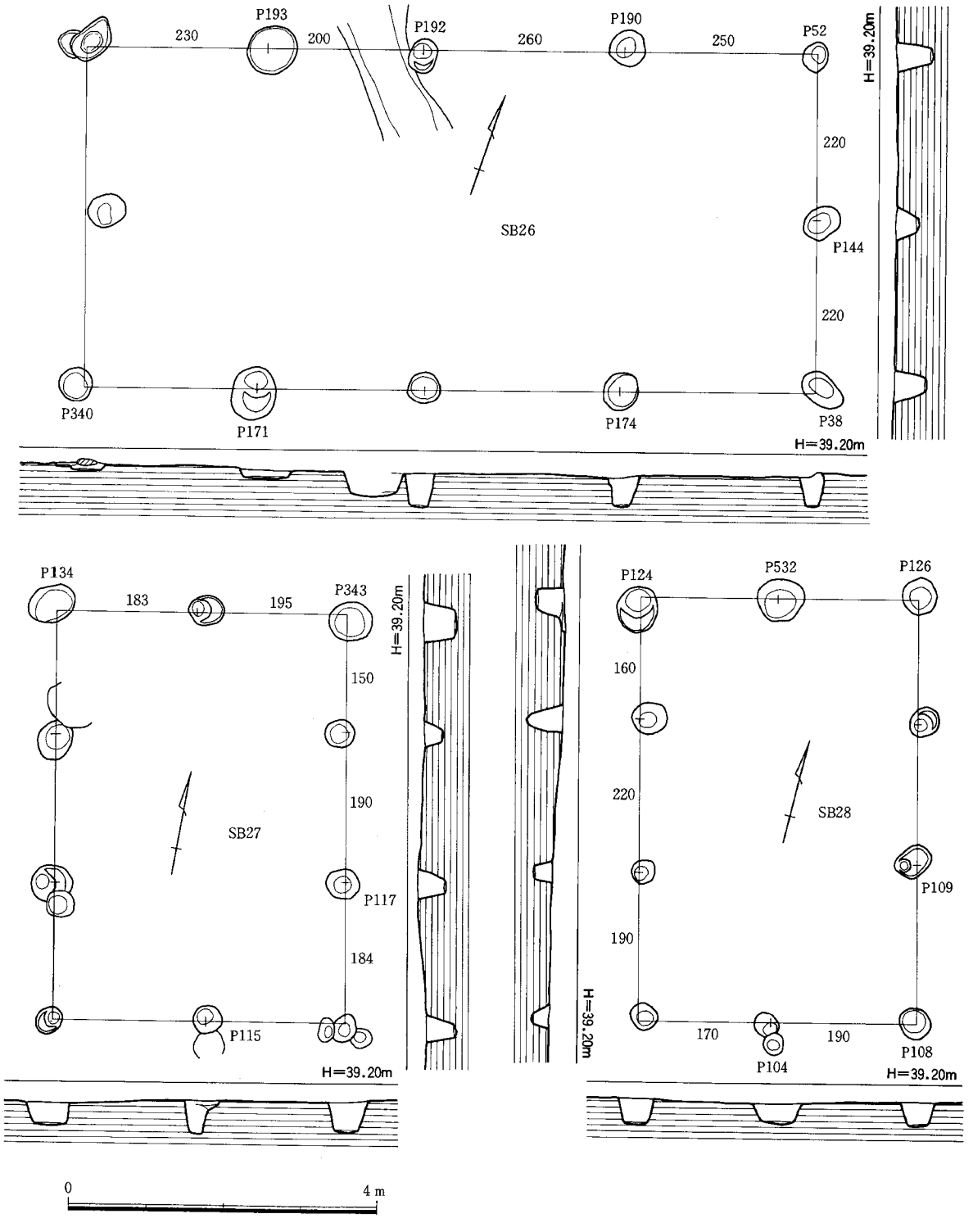
Ｆ－４区で検出された。梁行２間、桁行３間の建物で、主軸はＮ14.5°Ｗをとる。他の建物との切り合いはない。梁行実長は南側柱列で4.10m、柱間は東から2.00m、2.10m、桁行実長は東側柱列で6.20m、柱間は北から1.40m、2.70m、2.10mを計る。柱穴は深さ18～62cm、径は28～78cmを計る。Pit141で径14cmの柱痕が観察された。出土遺物は土師器、須恵器片が小量みられるのみである。建物床面中央部に鍛冶炉かと思われる遺構0023があり、この建物の付属施設かもしれない。

ＳＢ26（110図）

Ｅ．Ｆ－３区で検出された。梁行２間、桁行４間の東西に長い建物で、主軸はＮ71°Ｅをとる。他の建物と重なりあうが切り合いはない。梁行実長は東側柱列で4.40m、柱間は2.20mで等しく、桁行実長は北側柱列で9.40m、柱間は東から2.50m、2.60m、2.00m、2.30mを計る。柱穴は深さ10～48cm、径は34～68cmを計る。出土遺物は土師器が小量みられる。Pit38からは製塩土器かと思われる土師器小破片が、Pit171からは土錘（112図027）が出土している。ＳＢ18と規模、主軸方位ともに等しく、またわずかに平行移動しただけで大半は重なっており、この２棟の建物は前後関係は不明であるが、いずれかの建て替えであろう。

ＳＢ27（110図）

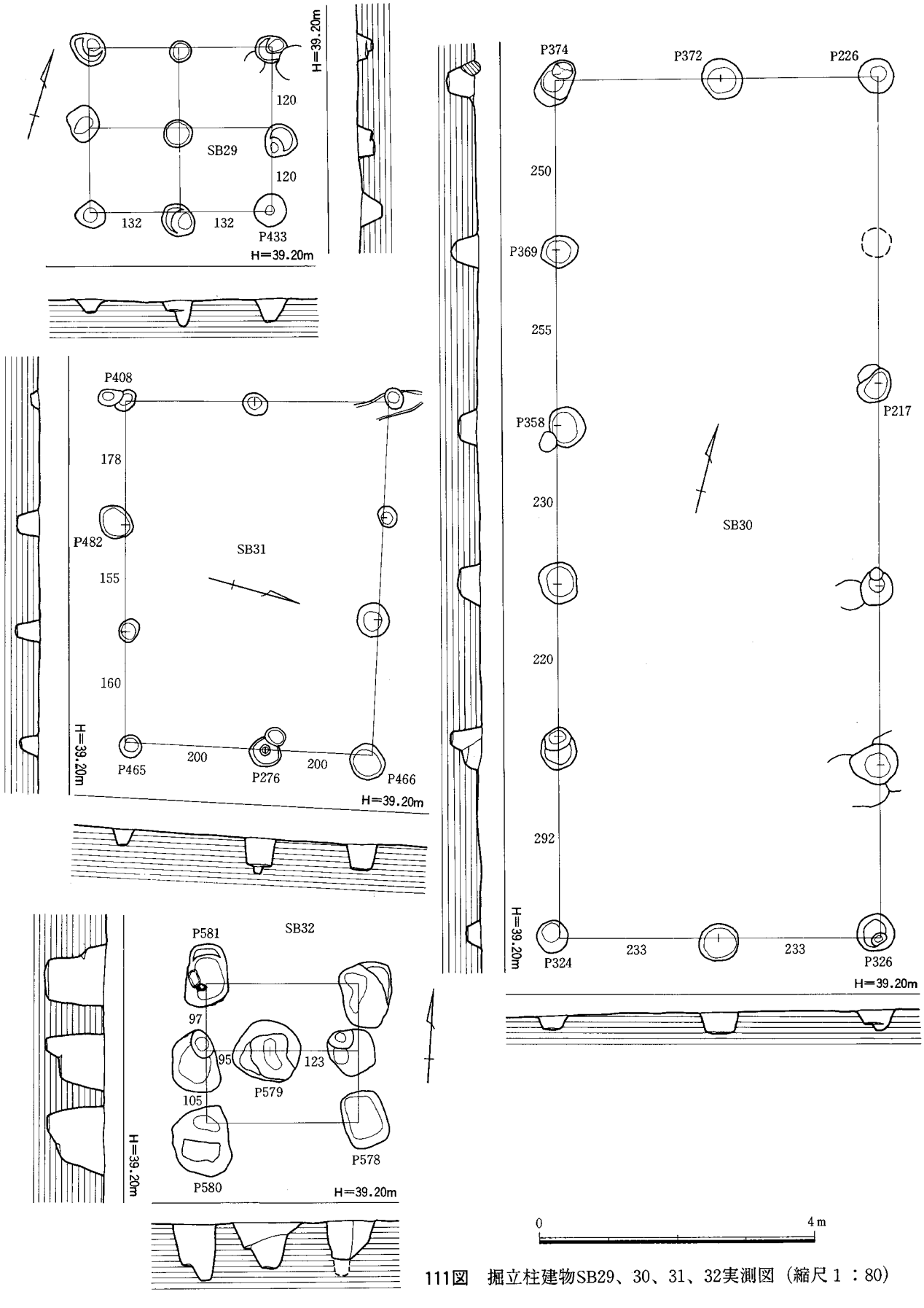
Ｆ－５区で検出された。梁行２間、桁行３間の建物で、主軸はＮ11°Ｗをとる。ＳＢ28と面的にかさなるが切り合いはない。梁行実長は北側柱列で3.78m、柱間は東から1.95m、1.83m、桁行実長は東側柱列で5.24m、柱間は北から1.50m、1.90m、1.84mを計る。柱穴は深さ22～44cm、径は38～58cmを計る。出土遺物は土師器、須恵器片が微量みられるのみである。Pit348からは鞴羽口の破片が出土している。



110図　掘立柱建物SB26、27、28実測図（縮尺１：80）

ＳＢ28（110図）

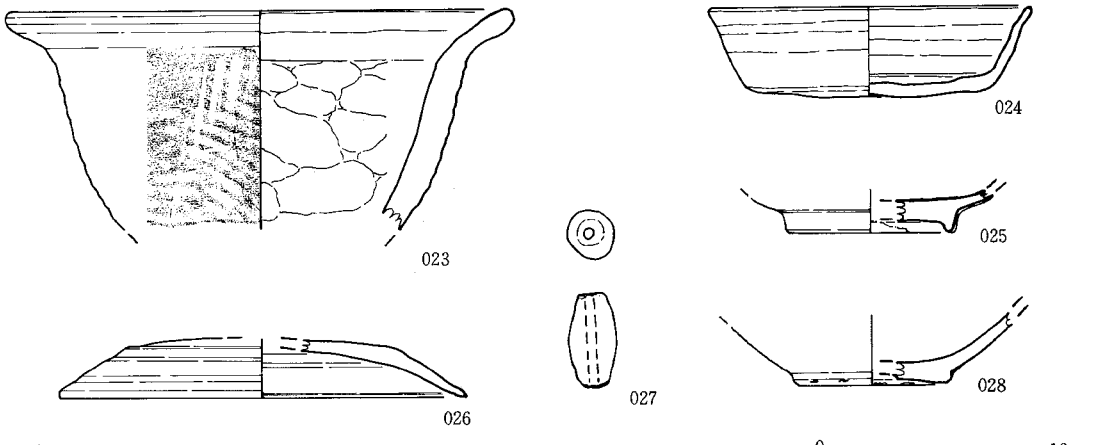
Ｆ－５区で検出された。梁行２間、桁行３間の建物で、主軸はＮ14°Ｗをとる。ＳＢ27と面的にかさなるが切り合いはない。梁行実長は南側柱列で3.60m、柱間は東から1.90m、1.70m、桁行実長は西側柱列で5.50m、柱間は北から1.60m、2.00m、1.90mを計る。柱穴は深さ22～45cm、径は28～62cmを計る。出土遺物は土師器片が微量みられるのみである。Pit104、109からは鉄滓が検出されている。



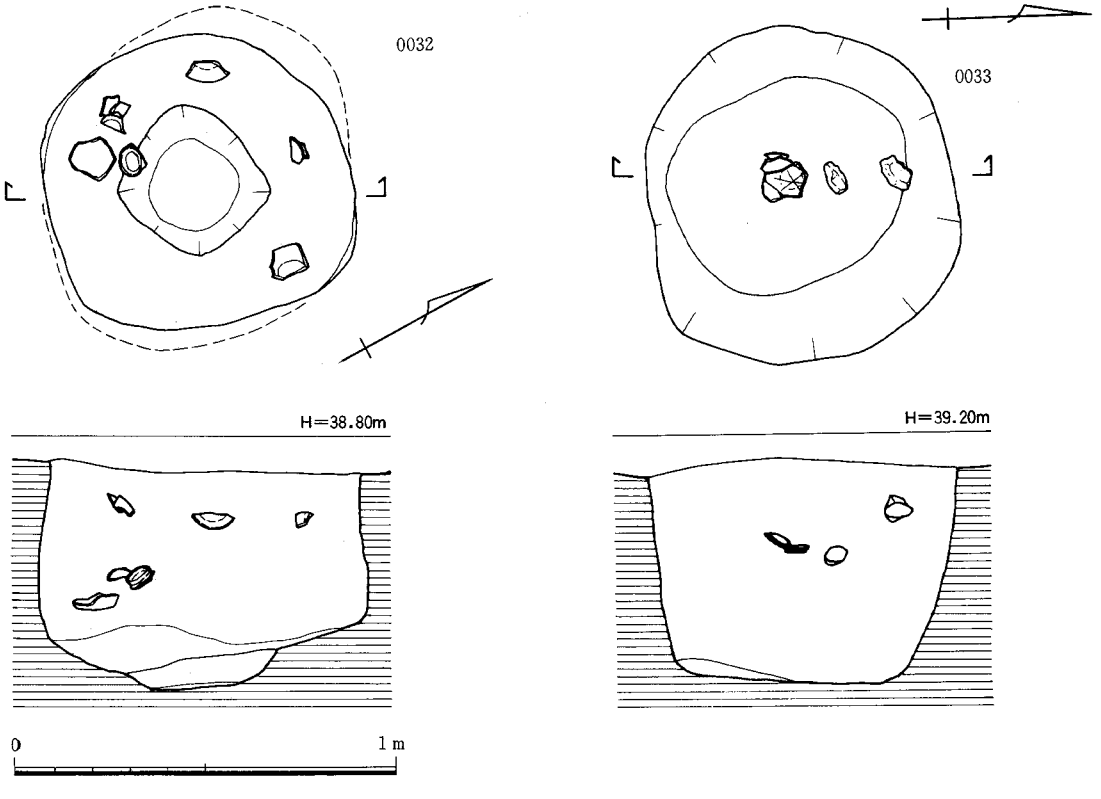
111図　掘立柱建物SB29、30、31、32実測図（縮尺１：80）

ＳＢ29（111図・図版24－４）

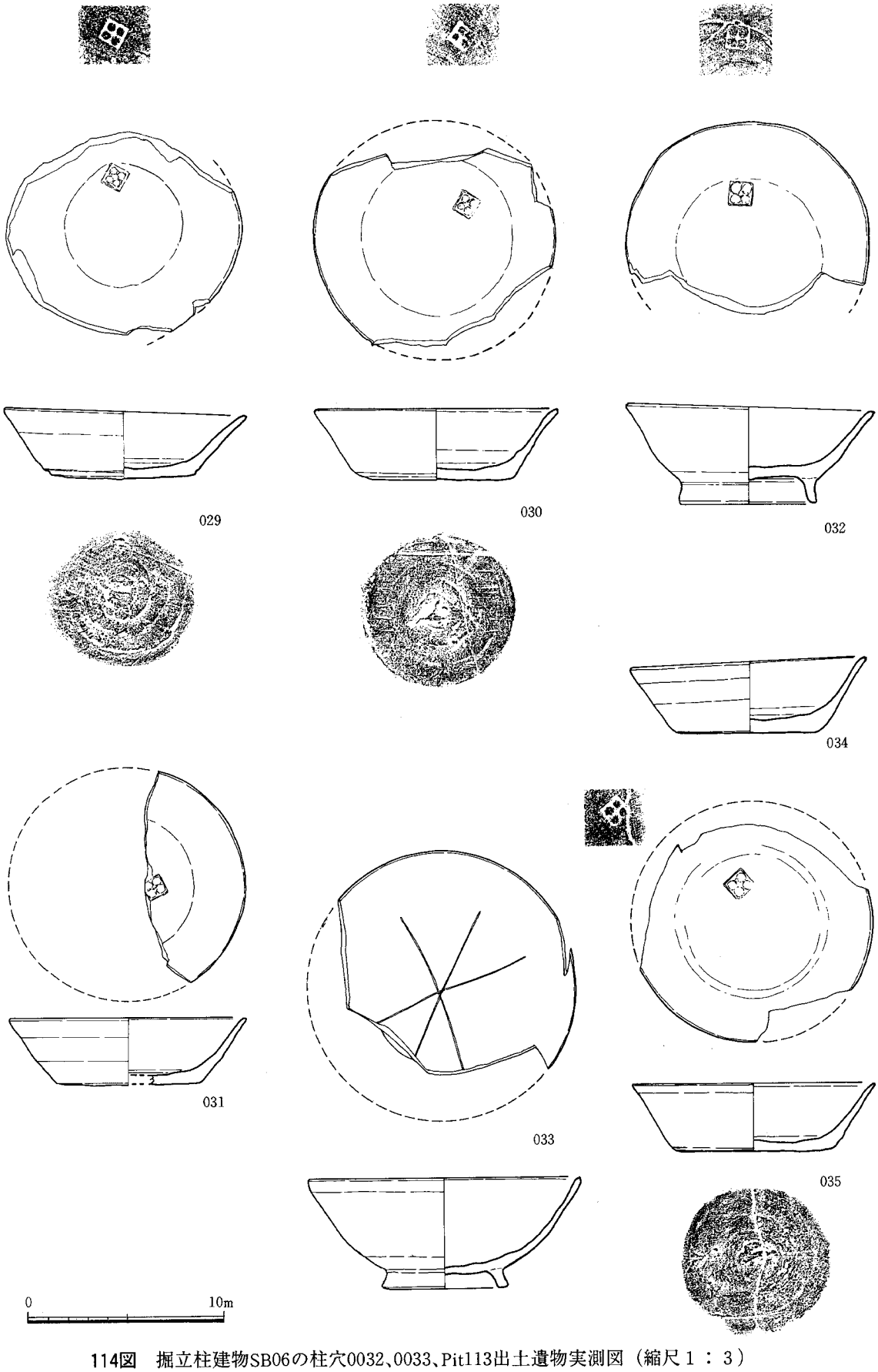
Ｈ－１．２区で検出された。梁行２間、桁行２間の総柱の規模の小さい建物で、南北柱列を桁行とすれば主軸はＮ１７°Ｗをとる。梁行実長は南側柱列で2.64m、柱間は1.32mで等しく、桁行実長は西側柱列で2.40m、柱間は1.20mで等しい。柱穴は深さ18～36cm、径は32～53cmを計る。出土遺物は土師器片が微量みられるのみである。同じ２間×２間で総柱の建物ＳＢ１４の北側に接し、軸線も一致することからほぼ同時期の建物であろうと思われる。また南にこれらの建物に関係すると思われる柵ＳＡ33がある。掘立柱建物群のなかで最も西にあり、他の建物群と区別されている。倉庫であろうか。



112図　掘立柱建物SB01、02、04、18、26、30出土遺物実測図（縮尺１：３）



113図　掘立柱建物SB06の柱穴0032、0033遺物出土状況実測図（縮尺１：20）



114図　掘立柱建物SB06の柱穴0032、0033、Pit113出土遺物実測図（縮尺１：３）

ＳＢ30（111図）

Ｈ．Ｇ－２．３区で検出された。梁行２間、桁行５間の南北に細長い建物で、主軸はＮ１５°Ｗをとる。いくつかの遺構と面的にかさなり、ＳＢ24の柱穴を切り、南側梁行の中間の柱穴は竪穴住居0015埋没後に掘込まれている。梁行実長は南側柱列で4.66m、柱間は東から2.33mで等しい。桁行実長は西側柱列で12.47m、柱間は北から2.50m、2.55m、2.30m、2.20m、2.92mを計る今回検出した掘立柱建物中最も大きなものである。柱穴は深さ20～44cm、径は46～68cmを計る。東側柱列は柱数が一つ少ないが、他の遺構との切り合いから、溝に切られたものとは考えにくく、北側柱間は当初から広かったものであろう。出土遺物はほとんどの柱穴から土師器破片が小量検出されているが、Pit217では縄文土器小片が、Pit374では越州窯青磁椀の底部破片（112図、028）がみられた。越州窯青磁椀は蛇の目高台の精品で、オリーブ色の透明釉が高台内面まで全面にかけられている。高台には重ね焼きの痕跡がある。胎土は緻密精良で明灰色を呈す。

ＳＢ31（111図・図版24－５）

Ｇ．Ｈ－５区で検出された。梁行２間、桁行３間の東西に長い建物で、主軸はＮ74°Ｅをとる。片面廂を持つ建物ＳＢ09のほぼ南半に重なるが、切り合い関係は明確でなく前後関係は不明。梁行実長は東側柱列で3.58m、柱間は北から1.58m、2.00m、桁行実長は南側柱列で4.93m、柱間は東から1.60m、1.55m、1.78mを計る。柱穴は深さ12～52cm、径は28～54cmを計る。Pit465、482では径12～14cmの柱痕が観察できた。出土遺物は土師器片が微量みられるのみである。Pit408からは鉄滓が検出されている。

ＳＢ32（111図・図版25－４）

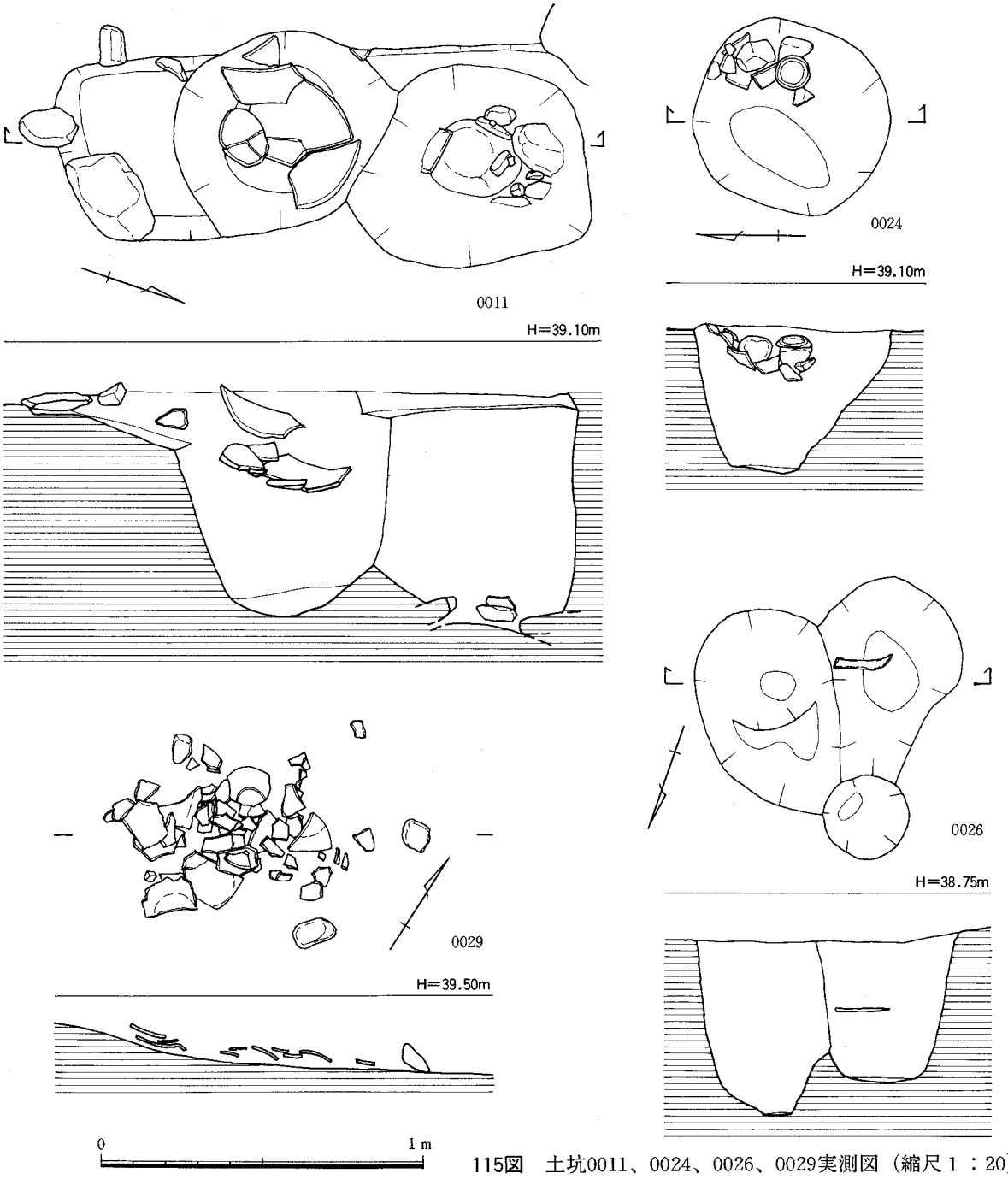
Ｂ．Ｃ－３区で検出された。Ⅲ区で検出できた唯一の掘立柱建物である。梁行１間、桁行２間の建物で、主軸はＮ４°Ｗをとる。中央部に棟持柱と思われる柱穴を持つ。梁行実長は2.20m、桁行実長は西側柱列で2.97m、柱間は北から0.97m、1.05mとせまい。しかしながら柱穴掘り方の規模は大きく、深さ65～83cm、径は70～102cmを計り、残り具合はいい。平面形は長円または隅丸長方形である。径20cmほどの柱痕が観察できた。出土遺物は土師器、縄文土器小破片が微量みられるのみである。時期は明確にしがたい。

ＳＡ33（105図・図版24－４）

Ｈ－２区、倉庫かと思われる総柱の掘立柱建物ＳＢ14、29の南に接して４間分検出したものである。主軸線はそれらと直交し、Ｎ73.5°Ｅをとる。柱間は東から2.30m、1.85m、2.20m、1.90mを計る。柱穴は深さ10～30cmと浅く、径は25～50cmを計る。出土遺物はみられない。この柵は倉庫群の南を画するものであろう。

4－3　土坑、集石遺構、焼土坑

今回の調査地点では建物以外に、さまざまな性格の、あるいは性格の不明確な遺構が検出されている。これらの遺構の中では廃棄物を処理するための土坑も多い。廃棄物のうち鉄滓、炉壁、焼土を主としている土坑については、製鉄関連遺構の項でまとめて述べることにし、ここではそれ以外の土坑と、まとまった礫を出土する集積遺構、焼土坑について述べる。なおある程度の規模と出土遺物を持つものに個別の遺構番号を付しているが、これらの中には拾い上げきれなかった掘立柱建物の柱穴の可能性があるものも含んでいる。



115図　土坑0011、0024、0026、0029実測図（縮尺１：20）

土坑

0011（115・116・117図）

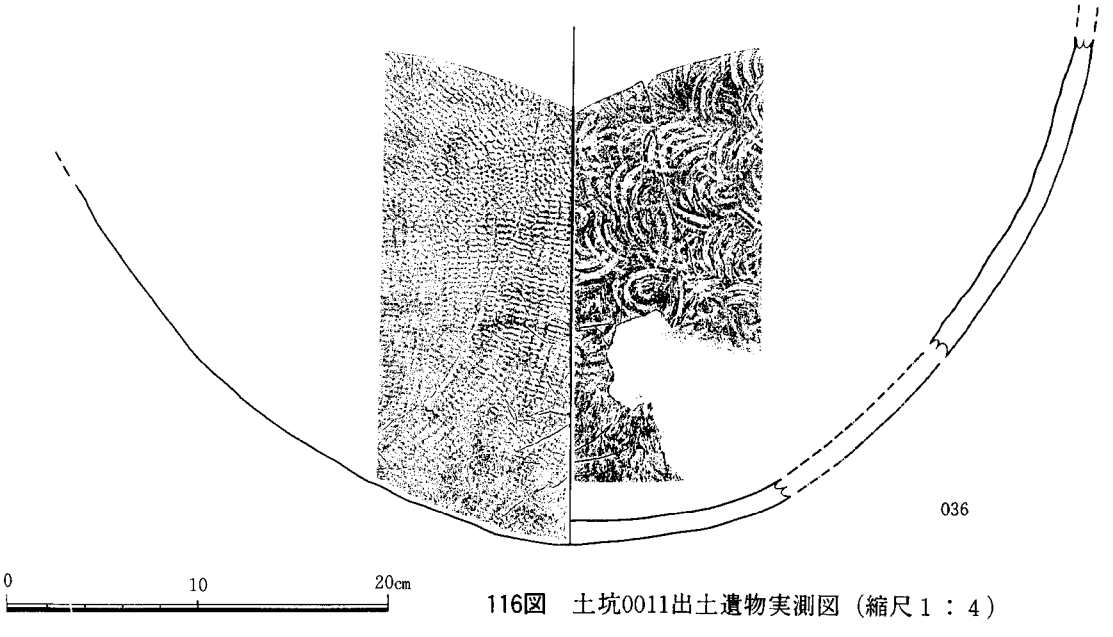
Ｆ－３区で検出したものである。検出時焼土の広がり具合から単独の遺構と判断したが、完掘後２つの遺構の切り合いであることがわかった。北側掘方は掘立柱建物ＳＢ17の南梁中間柱にあたる。径63～75cmの不整円形で、深さ68cmで底部は礫層に達する。南側掘方もほぼ同規模で、覆土の上部に須恵器大甕（116図、036）の底部がまとまって出土している。外面に目の細かい格子目の叩き、内面には同心円の当て具痕が残る。底部を据えたように置かれ、原位置を留めているものと思われる。割れ方から、打撃によるものでなく急激な加熱による破砕であることが観察できる。建物にともなう水甕等の設備で、火災にあったものであろうか。

0024（115・117図・図版26－３）

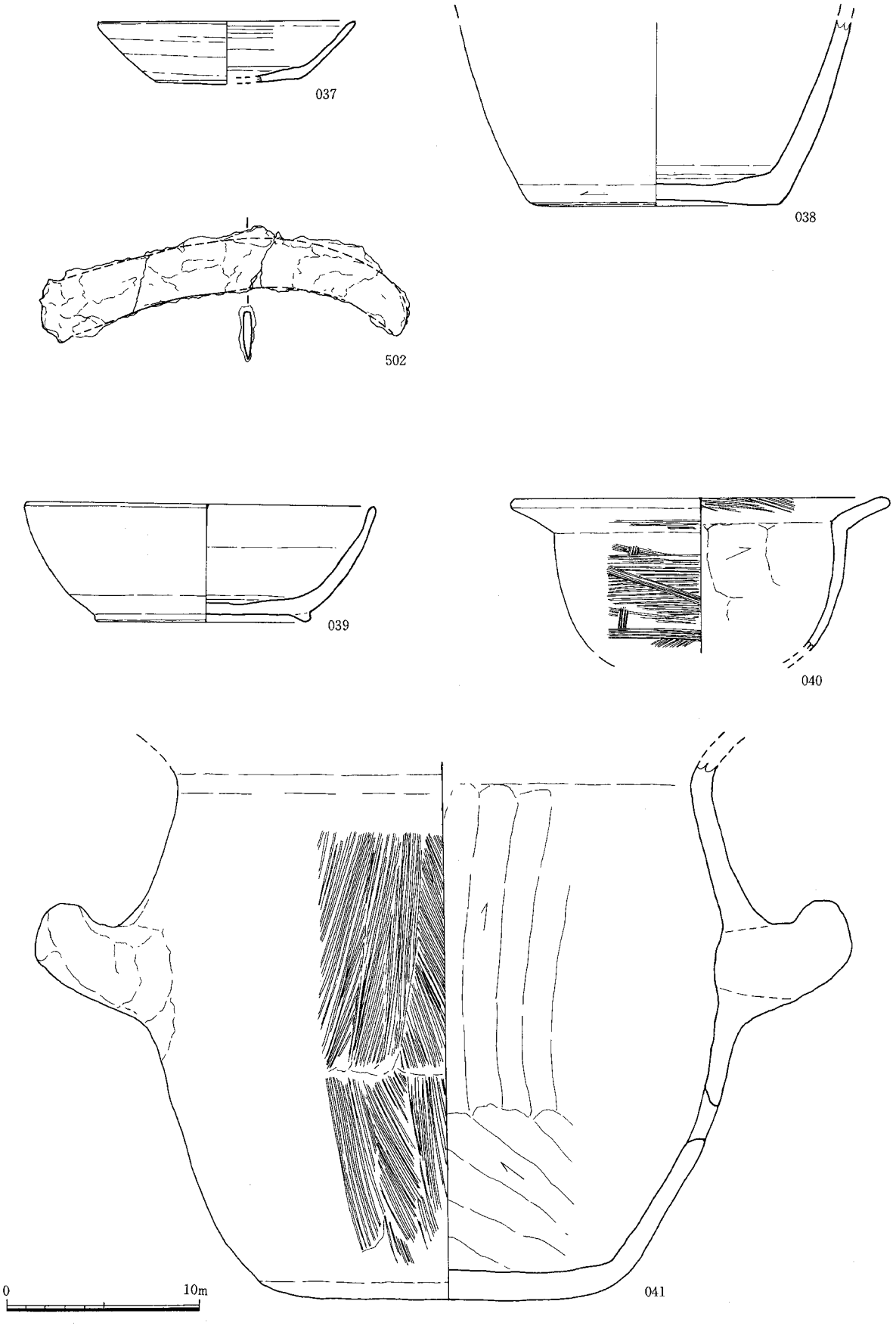
Ｆ－４．５区検出で、ＳＢ25、27の間に位置する。径60cm程のほぼ円形で、深さ45cmを計る。底面は35,17cmの長円形で西に偏す。覆土上部で礫とともに遺物が検出された。037は土師器坏で 外底は回転ヘラ削りで、外面体部下半も回転ヘラ削りを行なっている。体部内外面に暗文風のヘラ磨きがある。口径13.8cmである。038は土師質あるいは赤焼きの須恵器の甕と思われるものである。外面は回転ヘラ削りが行なわれ、とくに下端は手持ちのヘラ削りが行なわれている。内面は回転ナデ調整でなめらかである。この他図示していないが須恵器の壷と思われる底部破片がみられる。何れも８世紀代のものである。

0026（115・117図・図版26－４）

Ｅ－２区検出で、切りあった２つの掘方からなる。うち東側掘方はＳＢ20の南東隅柱穴である。径45cm、66cmの長円形を呈し、深さ54cm、２段掘りである。西側掘方の規模もほぼ同じである。深さ



116図　土坑0011出土遺物実測図（縮尺１：４）



117図　土坑0011、0024、0026、0029出土遺物実測図（縮尺１：３）

44cmで少し浅い。ここでは覆土中位から鉄製鎌（502）が水平の状態で出土している。全面錆がひどいが、折損面から断面が観察できる。全長19.5cm、身幅2.7cmを計る。刃部は内湾している。他に土師器甕等小破片が小量出土している。

0029（115・117図・図版26－５）

Ｂ－３区で検出した土器一括廃棄遺構である。旧河川0052、0053がある程度埋没し、川への昇降用通路であった0060が使用されなくなり、その段階で通路降り口の斜面の浅い凹に廃棄されたものである。出土した土器の大半は117図041の土師器把手付き甕の破片で、これに039土師器高台付き坏、040土師器小甕がみられるのみである。039は口径18.8cmの大型で、低い貼りつけ高台を持つ。器壁は荒れており、外面の調整は明確でないが、内面は全体にヘラ磨きされている。赤褐色を呈す。040は復元口径20cmの小型品で、体部が丸みを持ち、底の浅い器形である。体部外面と口縁部上面には細かなハケ目がみられ、内面はヘラ削りがなされ器壁を薄くする。外面には煤が付着している。041は口縁を欠くがほぼ完形に復元できた。胴が張り底部平底の樽形をする。体部中位やや上に、外から体に差し込むように把手が付けられている。把手の直下には焼成後外からの加撃によって穿孔がされている。外面は縦方向のハケ目調整、内面は上半が縦方向、下半が斜め方向の２段のヘラ削りが行なわれている。これらは８世紀代に位置付けられるものである。

集石遺構

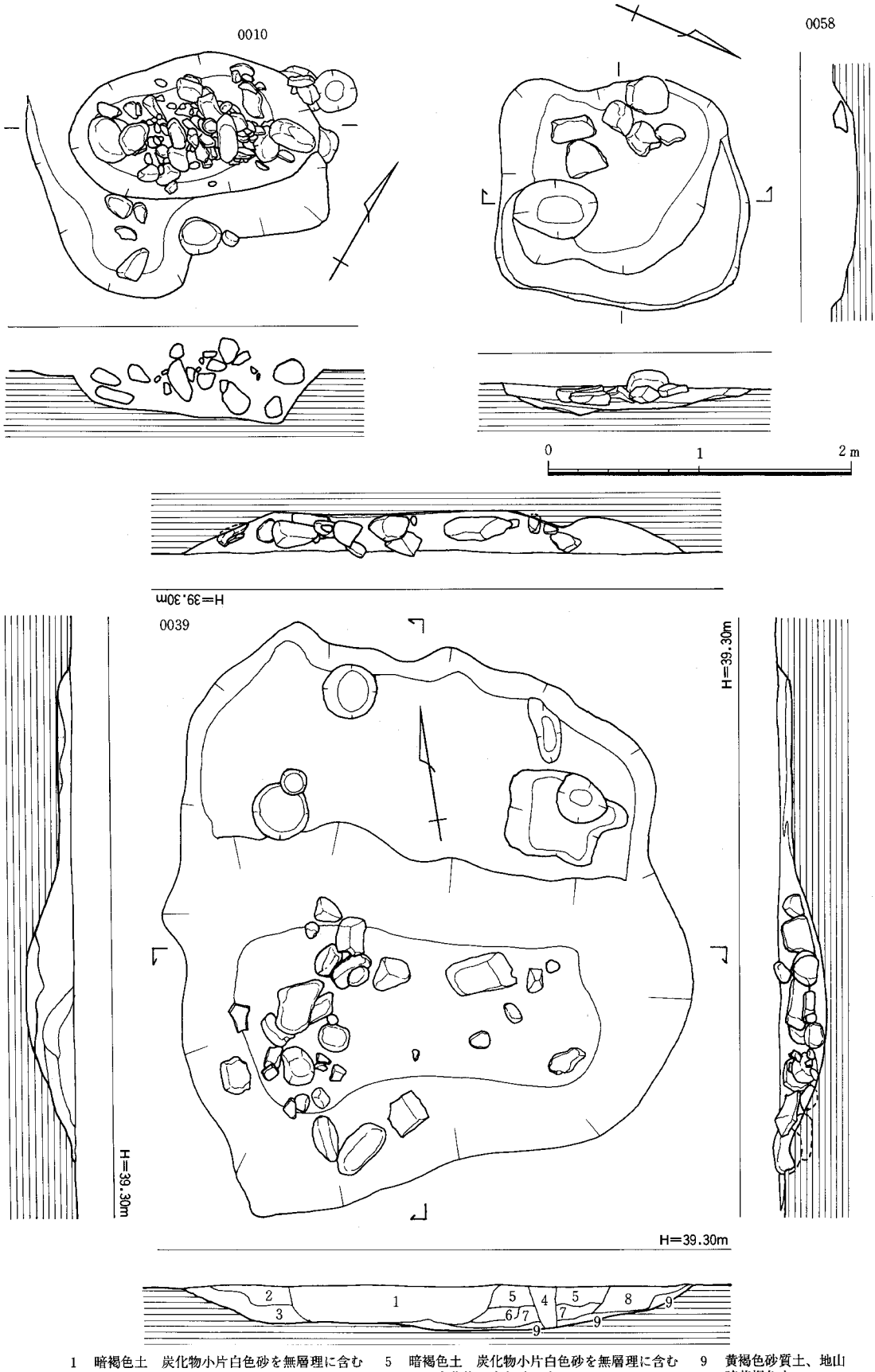
本調査区の基盤は、室見川の沖積作用による礫層であり、各遺構からは大なり小なりこれに由来する礫が出土している。ここでは礫が意図的に集められたと思われる遺構について述べる。

0010（118・119図・図版27－５）

Ｆ－２区検出である。ＳＢ17、20と面的に重なるが、それらとの関係は明確でない。長軸1.65m、短軸0.93m、深さ0.40mの長円形の掘方で、最大30cmほどの人頭大から拳大の礫が集中し、礫の間には暗黄灰色砂質土と小礫が詰まっていた。被熱の痕跡は観察できない。掘方の下端では一部基盤礫層を掘りぬいており、礫はこれに由来するものかもしれない。出土遺物は小量で土師器坏（119図042）、須恵器破片、鉄滓がみられる。042はほぼ完形に復元できた土師器坏で器壁が荒れ調整は明確でない。９世紀代のものであろう。遺構の性格は明確にしえない。

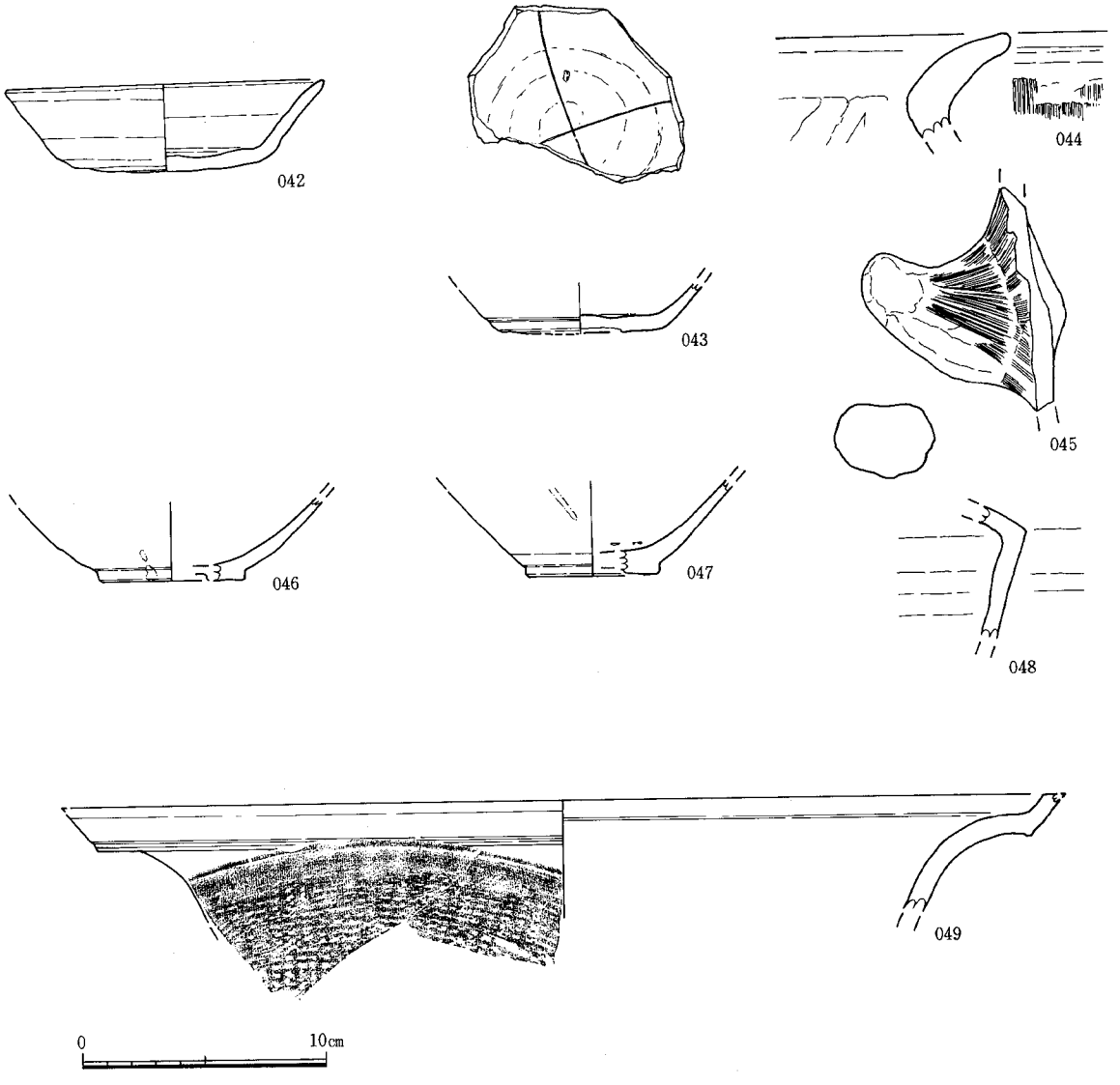
0039（118・119図・図版27－１・２）

Ｃ－６．７区検出で、遺跡範囲のほぼ南端にあたる。長辺4.0m、短辺3.4mの台形に近い不整方形の平面形をなす。黄褐色砂質土の地山に２段に掘り込まれた浅い掘方で、南が一段深く、30cmほどの深さを持つ。礫、遺物はこの深い部分から出土している。礫は最大40cmほどの大きさでいずれも被熱の痕跡がある。北側テラスには浅い柱穴かと思われるピットがみられる。本来壁は高かったものと思われ、0015のような竪穴住居の壁が崩れ、なだらかな凹状を呈しているのかもしれない。出土遺物は043～048が図示できたが、他に須恵器大甕破片、土師器小破片、鉄滓が小量みられる。043は土師器坏で口縁を欠く。内底は回転ユビ押さえで渦巻き状の盛り上がりがあり、焼成後に「＋」の細い線描きがされている。044は土師器甕の口縁部破片で内面ヘラ削り、外面縦ハケ目調整をする。045は土師器甕の把手で手捏ねであるが、本体着装後ハケ目調整を行なっている。046は邢窯系の白磁椀で蛇の目高台をもつ。畳付きは研磨されており無釉、高台脇も研磨され斜めに面取りされている。以外は透明釉



1　暗褐色土　炭化物小片白色砂を無層理に含む
2　暗褐色土
3　暗黄褐色土　地山の黄褐色砂質土に黒褐色土が無層理に含まれる
4　黒褐色土
5　暗褐色土　炭化物小片白色砂を無層理に含む
6　〃　炭化物や白色砂は含まない
7　〃　5層より明るい　土器はこの層の真上にのる
8　黒褐色土
9　黄褐色砂質土、地山
10　暗茶褐色土
11　〃 10 層より暗い
12　〃　黄褐色砂土を含む

118図　集石遺構0010、0039、0058実測図（縮尺1：40）

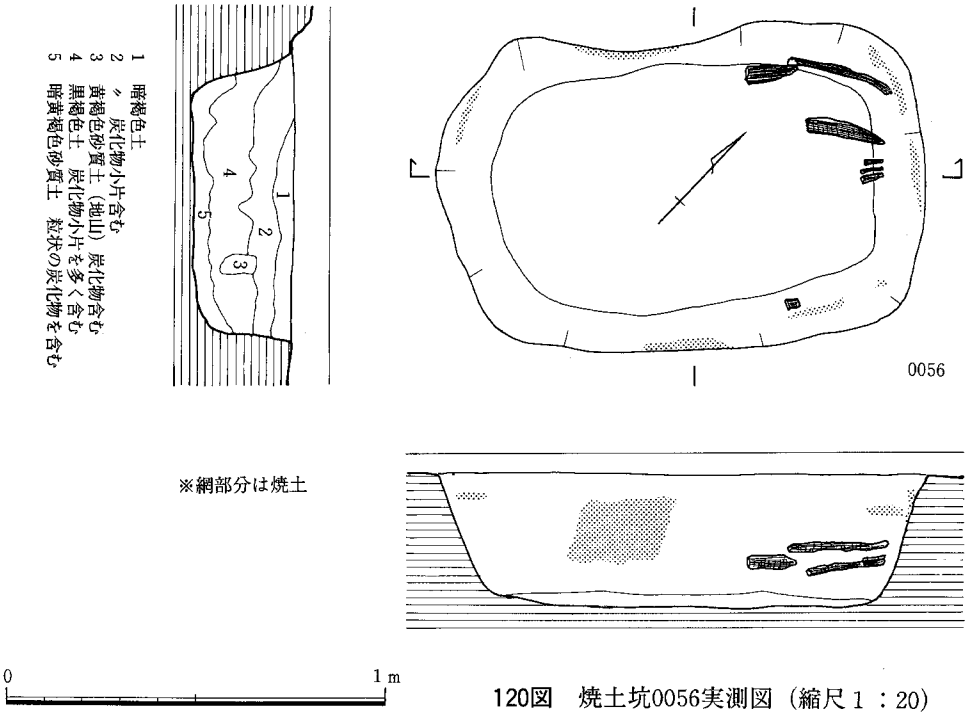


119図　集石遺構0010、0039、0058出土遺物実測図（縮尺１：３）

がかけられている。釉下に薄い白層があり、白化粧土がかけられているものと思われる。やわらかい白色を呈した精品である。047は越州窯青磁椀で蛇の目高台を持つ。全面にオリーブ色の釉がかけられているが二次的な被熱によりカセている。とくに内面は釉が沸騰しピンホールが多い。内面底、高台に目跡が残る。048は肩の張った須恵器長頸瓶の破片である。内外面回転ナデ調整である。９世紀代の遺構であろう。

0058（118・119図・図版27－３・４）

Ｄ－３区で検出されている。平面形は1.50m×1.64mの隅丸方形である。東側がわずかにテラス状になるが、全体としては深さ20cmほどの浅い皿状の凹をなす。南側壁近くに55cm×40cmの浅いピットもある。ここでは20～30cmの人頭大の礫が西半分から６個出土している。いずれも煤が付着するなど被熱の痕跡がみられる。出土遺物は土師器小破片、鉄滓など微量であるが、須恵器大甕口縁部破片０４９が図示できた。口径41.6cmを計る。頚部外面は格子目叩きののちナデ調整をしている。



120図　焼土坑0056実測図（縮尺１：20）

焼土坑

0056（120図・図版27－６）

Ｂ－３区で検出された。通常焼土坑は集中して存在することが多いが、今回の調査では唯一の焼土坑である。平面形は長軸1.3m、短軸0.86mの隅丸長方形で、深さは35cm程である。主軸方向はＮ４６°Ｅをとる。覆土の下半部には多量の木炭小片小片が交じり、特に北側隅では長さ30cm程度の木炭が残っていた。また壁には焼けた痕跡が残っている。出土遺物は覆土下半にはなく、上半に土師器小片が微量みられるのみであった。時期は明確にはしえないが、いずれにせよ集落の継続する８～10世紀の中に収まるものである。小規模な炭焼き窯的なもので、集落内の日常の生活、または鍛冶炉の燃料として供されたものであろう。

4－4　製鉄関連遺構

今回の調査地点では奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物群が検出されているが、それらの性格を示す遺構のひとつが製鉄関連遺構であろう。主に鍛錬鍛冶段階の炉がまとまって検出されているが、一部精錬鍛冶も行なわれた可能性もある。廃滓坑も多く検出できている。これらの遺構にともない大量の鉄滓が出土しており、詳細な分析を予定しているが、時間的制約から、次回の東入部遺跡群の報告に掲載したい。本項では炉および廃滓坑の遺構についてのみ概要を述べる。

廃滓坑

本来一連の製鉄作業工程遺構の構成要素のひとつであるが、他の遺構との関連が明確でなく単独で検出される場合もあり、ここではそれらについて述べる。

0008（121図）

Ｅ－２区で検出された。明確な掘り方はもたないが、長軸1.05m、短軸0.85mの範囲に鉄滓が集中して廃棄されていたものである。この中には、炉壁屑、焼土塊、礫も含まれ、礫はいずれも焼けている。ＳＢ20の柱穴が埋没した後のものである。整地の段階の埋め土に含まれていたものかもしれない。土師器破片も小量混じる。

0009（121図）

Ｅ－２区で検出した。明確な掘り方はなく、浅い凹に鉄滓、炉壁屑が廃棄されていた。長軸1.8m、幅約0.8mの範囲に浅く広がっていた。ＳＢ17の柱穴の上で検出されており、0008同様に整地の際の埋め土ブロックの中に含まれていたものかもしれない。遺物は土師器と微量の須恵器破片が出土しているが８世紀後半から９世紀代のものである。

0012（121図・図版31－３）

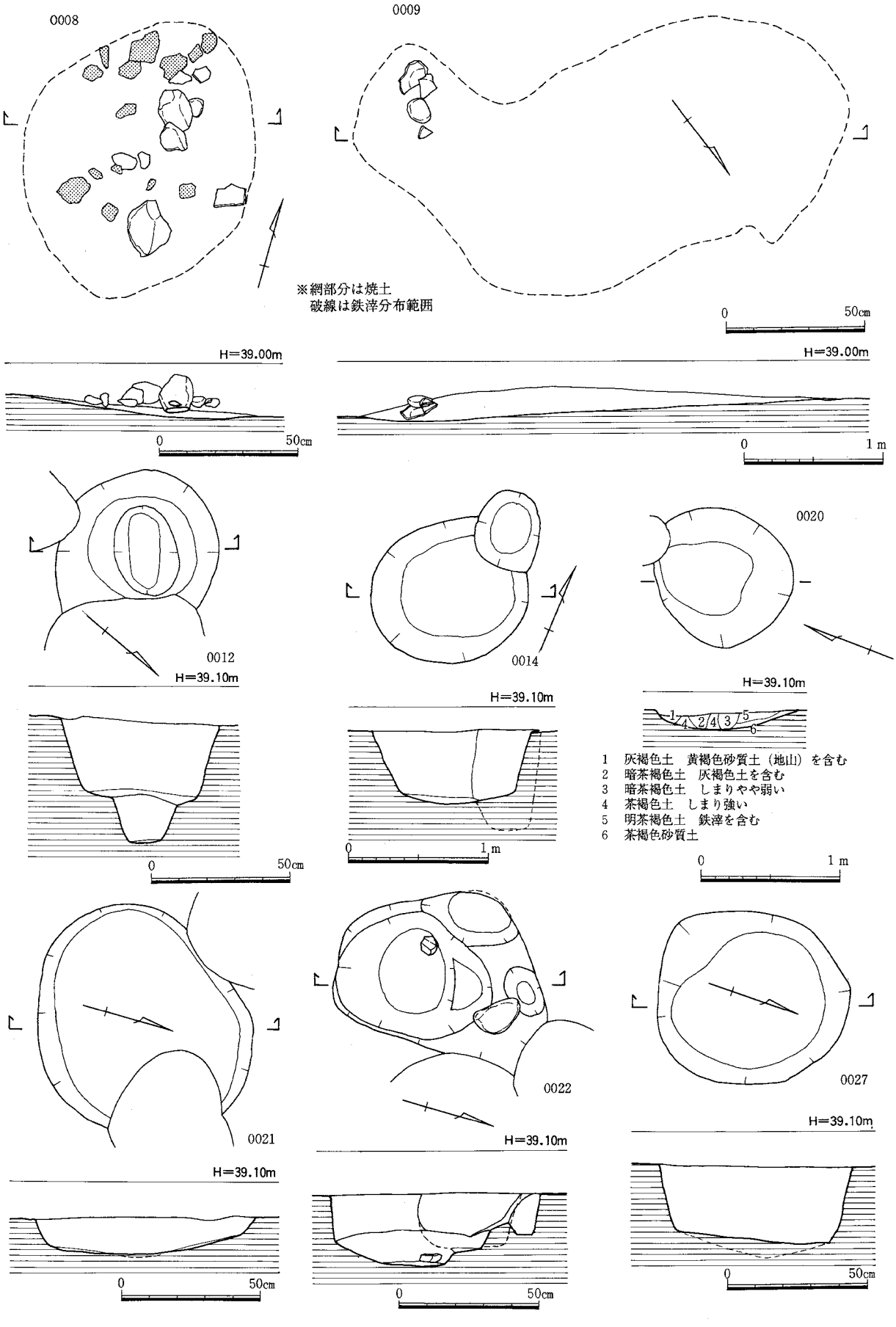
Ｅ－３区検出遺構である。径60cm、深さ45cmの二段の掘方を持ち、何れかの建物の柱穴と思われるが、他の柱穴との関連はつかめない。覆土から鉄滓とともに遺物が出土しているが、図示できたものは050だけである。完形の土師器坏で口径15cmを計る。外底には回転ヘラ切離しの渦巻き状の痕跡があり、そのうえに板状圧痕が残る。体部内外と内底の調整は回転ナデである。この他外面格子目叩き、内面ヘラ削りの土師器甕、外面格子目叩きの須恵器大甕片などがある。９世紀後半～10世紀前半のものであろう。

0014（121図・図版31－４）

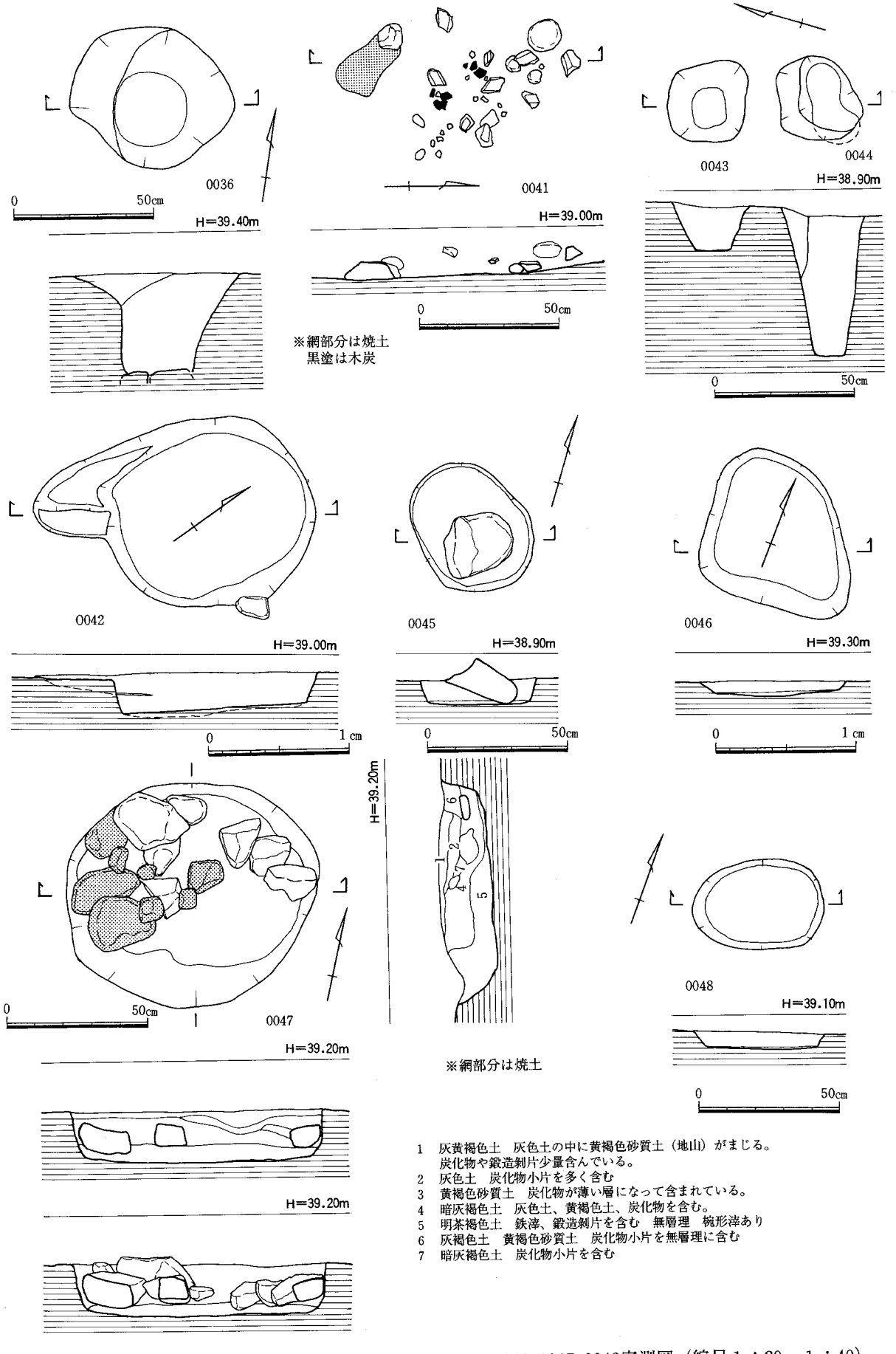
Ｆ－３区で検出した。径1.02～1.13mのほぼ円形の掘方で、深さ54cmを計る。掘立柱建物ＳＢ18の側柱の一つを切っている。鉄滓の量は多くないが、他の遺物が少ないため一応廃滓坑とした。必ずしも製鉄関連とは言えないかもしれない。

0020（121図・図版31－５）

Ｅ－３区で検出した。径1.0m程の不整円形で、深さ13cmの浅い皿状の掘方である。掘立柱建物Ｓ



121図　廃滓坑0008、0009、0012、0014、0020、0021、0022、0027実測図（縮尺１：20、１：40）



122図　廃滓坑0036、0041、0042、0043、0044、0045、0046、0047、0048実測図（縮尺１：20、１：40）

B21の範囲に重なるが関係は不明である。あるいは上屋、付属施設の関係にあるかもしれない。鍛造剝片と砂粒を咬んだ鉄滓がまとまって出土しており、底部は鉄分により硬くしまっている。鍛錬鍛冶に係る遺構である。他の出土遺物は土師器小破片が微量である。

0021（121図）

E－3区で検出した。径80cm程の不整円形で、深さ15cmの浅い皿状の掘方である。掘立柱建物SB21の範囲に重なるが関係は不明である。あるいは0020同様に上屋、付属施設の関係にあるかもしれない。量的に少ないが鍛造剝片と砂粒を咬んだ鉄滓が出土している。鍛錬鍛冶に係る遺構である。他に出土遺物はない。

0022（121図・図版31－6）

E－3区で検出した。径55cm、45cmの不整長円形で、深さ25cmの掘方である。SB21の範囲に重なり、あるいは0020同様に上屋、付属施設の関係にあるかもしれない。量的に多くないが鍛造剝片と砂粒、木質を咬んだ鉄滓、鞴羽口が出土している。鍛錬鍛冶に係る遺構である。他の出土遺物には8世紀後半から9世紀前半代の須恵器坏、皿破片、土師器甕が小量みられる。

0027（121図）

E－3区で検出した。0020の東に接し、径70cm、65cmのほぼ円形で、深さ33cmの掘方をもつ。0020同様にSB21と上屋、付属施設の関係にあるかもしれない。鍛造剝片と砂粒、木質を咬んだ鉄滓、鞴羽口、溶解したスサ入り粘土の炉壁が出土している。鍛錬鍛冶に係る遺構である。他の出土遺物は微量で、格子目叩き須恵器甕破片、土師器小片がみられるのみである。

0036（122図・図版32－1）

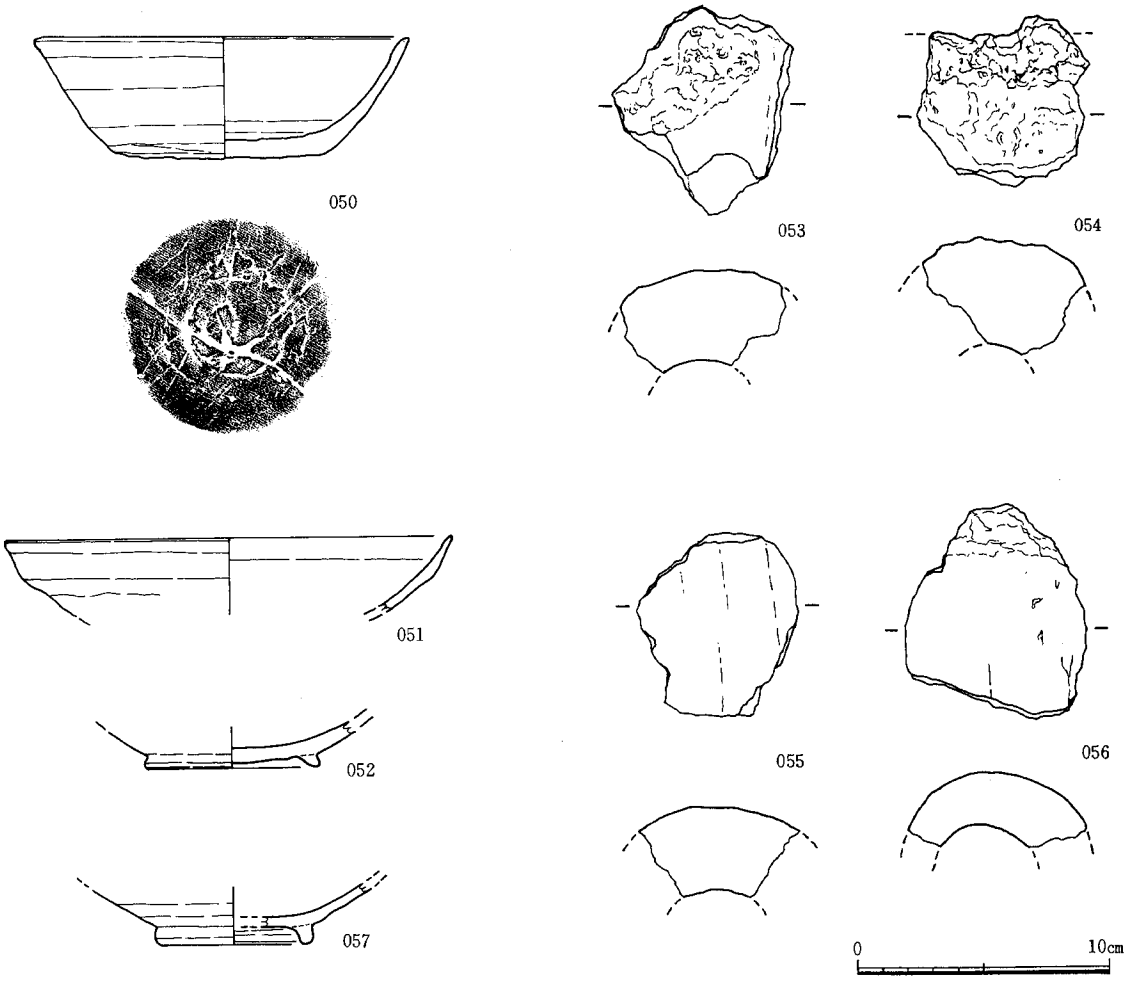
B－3区で検出した。径58cm、50cmの不整円形で、深さ34cmの掘方をもち、底は基盤礫層に達する。旧河川0051、0052の分岐点に位置するが、これらが埋没したのちに掘り込まれたものである。鉄滓は微量であるが、焼土塊、炭化物を覆土中に多く含んでいる。かならずしも製鉄遺構と密接な関係はないかもしれない。出土遺物は小量であるが、051、052を図示しえた。いずれも瓦器で、接合点はないが同一個体と思われる。器壁が荒れているがヘラ磨きの痕跡がわずかに残る。11世紀後半から12世紀前半のものであろう。

0041（122図・図版32－2）

B－3区で検出した。掘方はなく、90cm×60cmの範囲に鞴羽口、焼土塊、炭、微量であるが鉄滓がまとまって廃棄されていたものである。旧河川0051、0052の分岐点に位置するが、これらが埋没していく段階で捨てられたものである。053～056の4点の羽口が図示できた。復元内径は4.5～5.0cmでほぼ中程度の大きさといえる。053には溶解した鉄が付着し、先端部である0054は端部が飴状に溶解している。他に遺物はみられない。

0042（122図・図版32－3・4）

B－2区検出で、鍛冶炉遺構0038の南に近接する。旧河川0051の埋没後に掘り込まれた遺構である。長軸1.5m、短軸1.35mの長円形で、深さ35cmの掘方の一端にテラス状の張り出し部が付く。この遺



123図　廃滓坑0012、0036、0041、0042出土遺物実測図（縮尺１：３）

構からはコンテナケース２箱分の焼けた粘土塊、２箱分の鉄滓が出土している。この鉄滓を水洗し、磁石で選別した結果ほぼ１箱分の鍛造剝片、粒状滓が得られた。出土遺物は小量で小破片であるが、057の瓦器椀底部が図示しえた。器面が荒れているが内外面にヘラ磨きが観察できる。11世紀後半から12世紀前半に位置付けられよう。また、この遺構は0038に由来するものと思われる。

0043（122図）

Ｂ－２区検出で、0042の南に近接する。径28cm、深さ17cmの浅い柱穴状の掘方である。量的に多くないが、鉄滓がまとまって検出されており、水洗、選別の結果、鍛造剝片、粒状滓が得られた。出土遺物は土師器、須恵器の微細な破片が２点みられたのみである。

0044（122図）

Ｂ－２区検出で、径30cm、深さ54cmの深い柱穴状の掘方である。0043と接し、状況もほぼ同様であって、0042と同じく鉄滓等は鍛冶炉0038に由来するものであろう。出土遺物も土師器、瓦器の微細な破片が微量含まれるのみである。

0045（122図）

Ｂ－２区検出である。径48㎝、40㎝の楕円形で、深さ10㎝の浅い掘方である。焼け割れた人頭大の石が置かれ、覆土から小量であるが鉄滓が検出されている。出土遺物は土師器の微細な破片が１点みられるのみである。必ずしも製鉄関連遺構とは言えないかもしれない。

0046（122図・図版32－５）

Ｂ．Ｃ－５区検出である。廃滓坑としては最も南に位置する。長軸1.35ｍ 短軸1.05ｍの不整形で、深さ10㎝の浅い掘方である。砂を咬んだ鉄滓がまとまって出土しているが、水洗、選別の結果かなり粒の大きな鍛造剝片と粒状滓が検出できた。鍛錬鍛冶前半段階の廃滓坑であろう。出土遺物は量的に少ないが、瓦器椀破片数点がみられ、11世紀後半～12世紀前半の年代が考えられる。

0047（122図・図版32－６）

Ｂ－５区検出である。長径0.9ｍ、短径0.8ｍの長円形で、深さ20㎝の掘方である。ここでは人頭大の被熱した礫とコンテナ２箱分の焼けた粘土塊とともに、多量の鉄滓が出土した。水洗、選別の結果0046と同様にかなり粒の大きな鍛造剝片と粒状滓が検出できた。鍛錬鍛冶前半段階の廃滓坑であろう。遺物は瓦器椀口縁小破片が１点みられるのみである。0046とほぼ同じ時期であろう。

0048（122図）

Ｂ－５区検出で、0047の東に近接する。長径0.95ｍ、短径0.65ｍの長円形で、深さ13㎝の浅い掘方である。0047より量的には少ないが、鍛造剝片を咬んだ鉄滓がまとまって出土している。土師器皿１個体分が出土しているが、遺存状態が悪く図示しえない。この遺構も0046、0047と位置的にまとまり、また同様の状況を示しており、ほぼ同時期のものといえよう。

鍛冶炉

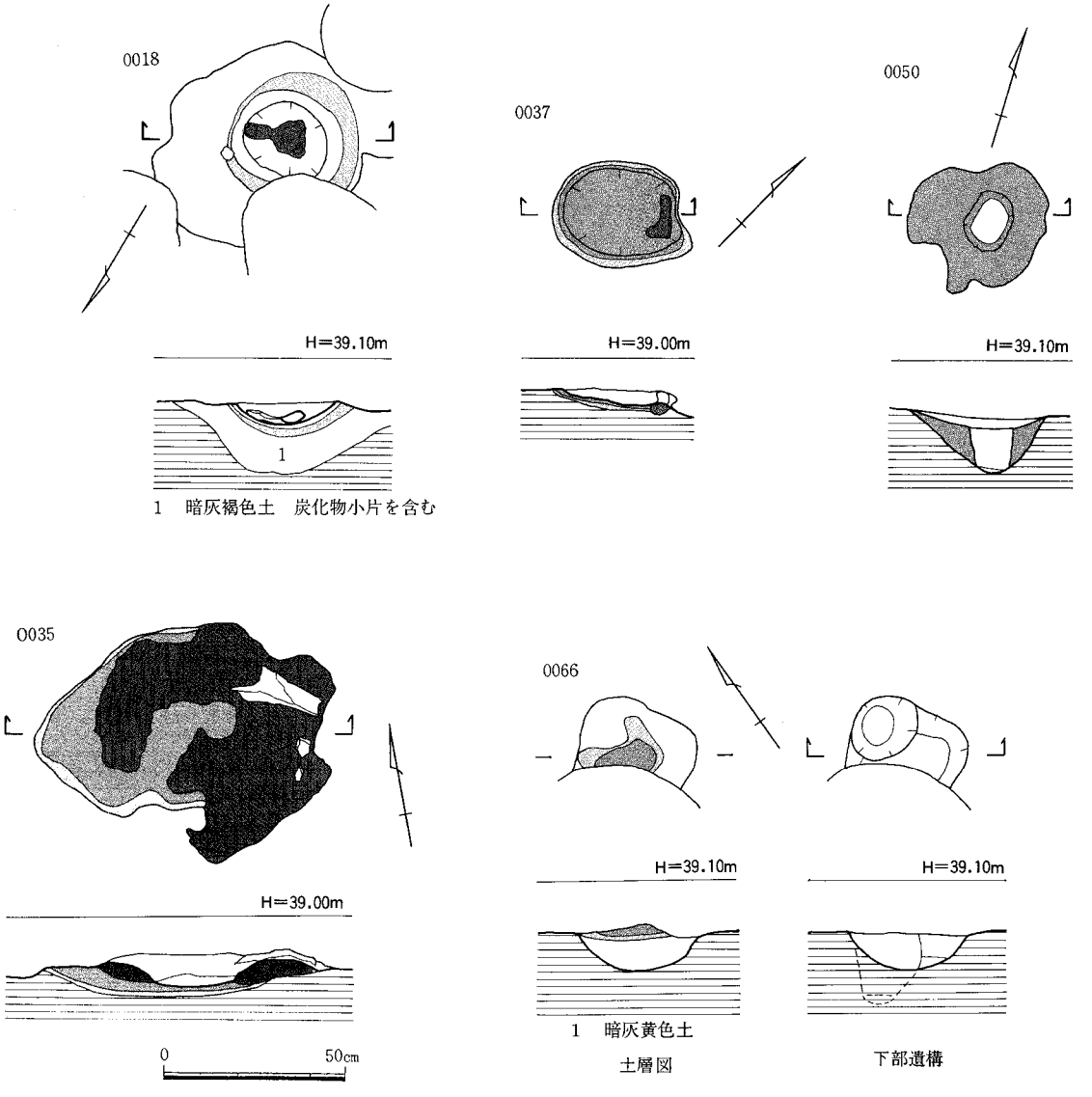
前項では炉との関係を明確にしがたい廃滓坑について述べたが、本項では炉とそれに付設する廃滓坑等の施設について述べる。炉の分布は廃滓坑と同様に、Ⅰ区北東隅、Ⅱ区の北東部にまとまっている。おおむねⅠ区は11～12世紀初頭、Ⅱ区は９～10世紀代に営まれたものである。また、Ⅱ区では廃滓坑に比較し明確な炉が少ないが、水田造成等で削平されているものと思われる。

0018（124図・図版28－１）

Ｅ－３区検出の炉である。内径40㎝、深さ5㎝ほどで、炉底部のみが皿状に残っており、ここから鉄滓がまとまって出土している。炉壁に粘土はみられないが暗青灰色に焼けており、さらに外側は赤褐色に固く焼けている。土師器など遺物は検出されていない。

0019（図版28－２）

Ｅ－３区検出の炉である。遺存状態が悪く図示していないが、炉底の一部のみが残っているものである。炉壁が暗青灰色に固く焼け、その下が赤褐色を呈している。遺物は検出されていない。

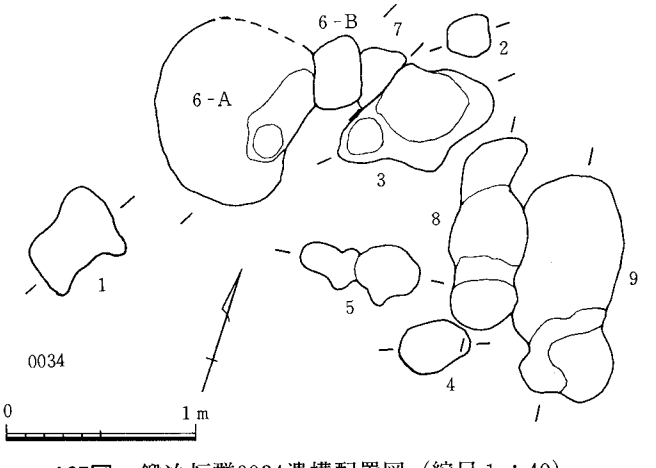


124図　鍛冶炉0018、0035、0037、0050、0066実測図（縮尺１：20）

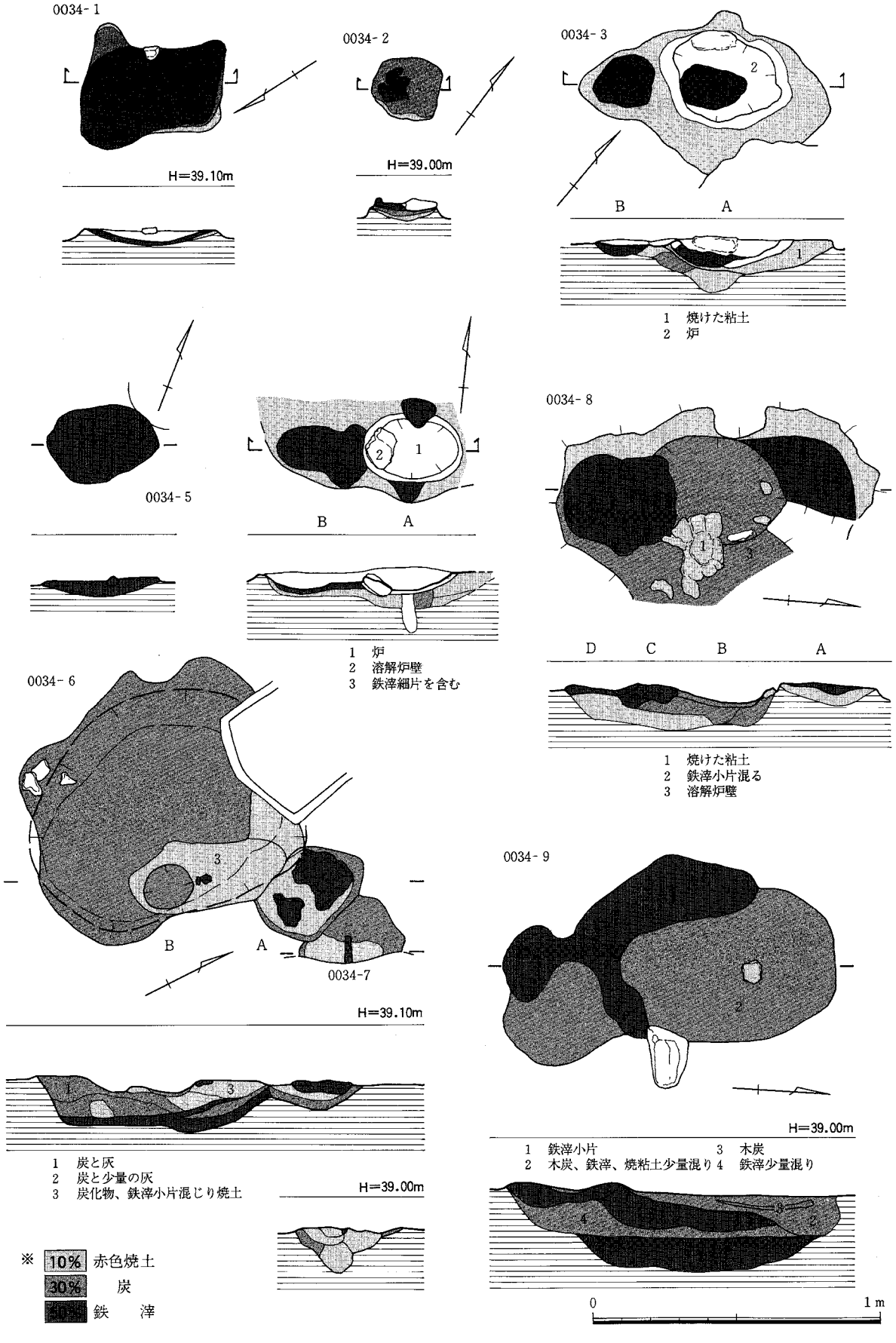
※ 10% 赤色焼土
30% 炭
50% 鉄　滓

0034（125・126図・図版28－３～６・29－１～５）

A．B－３区で検出されたものである。複数の炉、廃滓坑が、約３×２ｍの狭い範囲に集中していた。これらの遺構は旧河川0051埋没後に営まれたものである。同時存在とは思えないが、11世紀後半から12世紀初頭におさまるもので、順次作り替えられていったものであろう。当初遊離した鉄滓が全体を覆い、それぞれの遺構を明確に区分できなかったが、調査の進行にしたがって、炉、廃滓坑単独、あるいは一連の、およそ９基の遺構群に区分でき



125図　鍛冶炉群0034遺構配置図（縮尺１：40）



126図　鍛冶炉0034-1、2、3、4、5、6、7、8、9実測図（縮尺1：20）

た。順次それらには枝番号を付し、また複数の遺構からなる場合には、さらにアルファベットを付し細分している。

0034－1（126図）

長軸50cm、短軸30cmの範囲の浅い皿状に、大粒の鍛造剝片、粒状滓を含む鉄滓がまとまって出土している。この中には鞴羽口も含まれる。直下に木炭、焼土もみられるが被熱の度合いは浅く、炉とは考えられない。単独の廃滓坑であろう。土師器小破片が小量みられるが遺構年代とはつながらない。

0034－2（126図）

径20～24cmのほぼ円形に木炭を多量に含む黒色焼土が浅い皿状に検出できた。内底に鉄滓塊がみられた。炉壁は検出できていないが、黒色焼土の下に赤褐色に強く被熱した層がみられ、炉の最下部にあたるものであろう。土器片等はみられない。

0034－3（126図・図版28－4）

径40～30cmの楕円形の炉(A)である。粘土の炉壁が良好に残り、一部溶解している。底部に炉床滓が残っている。炉の周辺は0.9m×0.6mの広い範囲が被熱し、赤褐色に焼けている。炉の南西脇には鉄滓のまとまり(B)があり、炉内の鉄滓を掻きだしたものと思われる。土器片等の遺物はみられない。

0034－4（126図・図版28－5）

39cm×27cmの狭い楕円形の範囲に、大粒の鍛造剝片、粒状滓を含む鉄滓が皿状に堆積しているものである。下部の土に被熱の痕跡はみられない。0034－5または8に由来する廃滓坑であろう。土器片等の遺物はみられない。

0034－5（126図・図版28－6）

35cm×25cmの浅い楕円形の炉（A）と西側の鉄滓集積（B）からなる。炉壁は明瞭に残り、一部溶解した炉壁もみられる。下部は広い範囲で被熱し、赤褐色に焼けているが、ここでも鉄滓の細片が多くみられる。土器片等の遺物はみられない。

0034－6（126図・図版29－1・2）

径40cm程の炉（A）と廃滓坑（B）からなる。炉壁は残っていないが、炉床滓と思われる鉄滓塊が検出されている。Bは長径1.0m、短径0.8m、深さ18cmの掘方で、大粒の鍛造剝片、粒状滓を含むコンテナ2箱分の鉄滓、木炭、灰、焼土がみられた。ここでは土師器片、白磁、鞴羽口が検出されうち5点を図示した。058は小さな玉縁口縁の白磁椀、059、060は同一個体と思われる高台の高い白磁椀である。11世紀後半～12世紀初頭に位置付けられよう。061、062は羽口先端部の破片で先端は溶解し、鉄が付着している。内径3.5cmを計る。

0034－7（126図・図版29－3）

0034－6－A、0034－3に切られており全体は明瞭でない。炉壁等はみられないが、下土が強く焼け、炉の下部にあたるものと思われる。鍛造剝片を含む鉄滓が小量検出された。

0034－8（126図・図版29－4）

大きく4つの部分に区別できる。Aは鉄滓集積である。Bは遺存状態はよくないが、焼けた粘土塊と溶解炉壁が出土し、また下半部が強く焼けており炉であろう。Cは鍛造剝片を含む鉄滓集積であるが鉄滓の粒が小さい。Dも鉄滓集積であるがCよりぎっしり詰まっている。これらの下および周辺は黒色あるいは赤褐色に焼けている。

0034－9（126図・図版29－5）

長軸1.15m、短軸0.55m、深さ30cm程の掘方を持つ廃滓坑である。上下に2枚の鉄滓層があり、間に鉄滓、焼土を含む木炭の層が堆積している。0034－8に由来するものであろうか。

0035（124・129図・図版29－６・30－１）

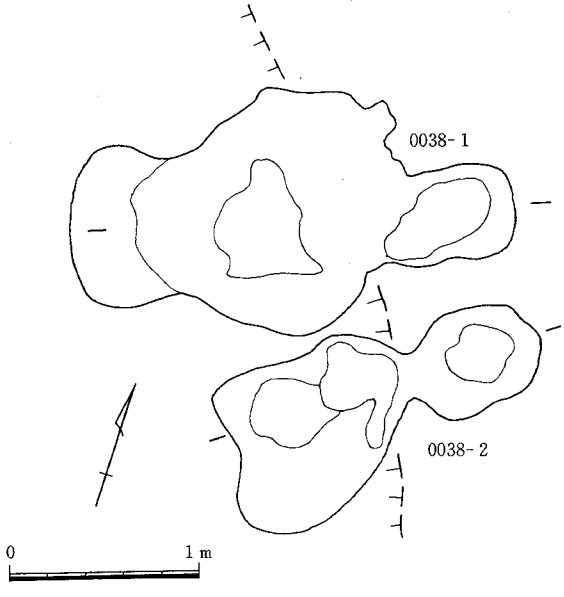
Ａ－３区検出である。径0.6m程の環状に鉄滓が厚くみられた。この中には小量の小さな鍛造剥片、焼けた礫も含まれている。確実な炉壁はみられないが、下部は黒色、赤褐色に固く焼けており、炉であろう。ここでは内外面にヘラ磨きをした瓦器椀破片063が出土している。

0037（124図・図版30－２・３）

Ａ．Ｂ－２区検出である。旧河川００５１埋没後に営まれている。径30～24cmの楕円形をした浅い凹みで、明確な炉壁はみられないが内面は黒色に焼け、その下部は赤褐色に焼けており炉であろう。内面から鍛造剥片を小量含む鉄滓が出土している。他に焼け割れた砂岩製砥石破片がみられた。

0038（127～129図・図版30－４～６・31－１）

Ａ－２区検出である。旧河川0051の東岸にあたり、河川埋没後もしくは埋没途中で作られたものである。調査当初鉄滓が広く分布し、個別遺構の区分ができなかったが、最終的に２基の一連の遺構に区分でき、１．２の枝番号を付した。またそれぞれを構成する個別遺構にアルファベットを付した。



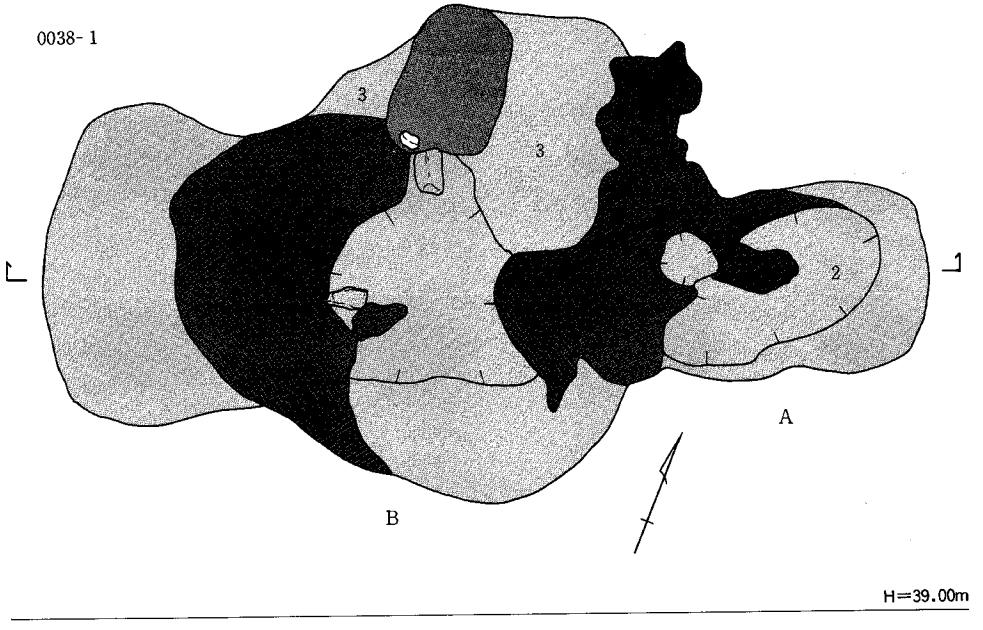
127図　鍛冶炉0038遺構配置図（縮尺１：40）

0038－１（128図・図版30－５）

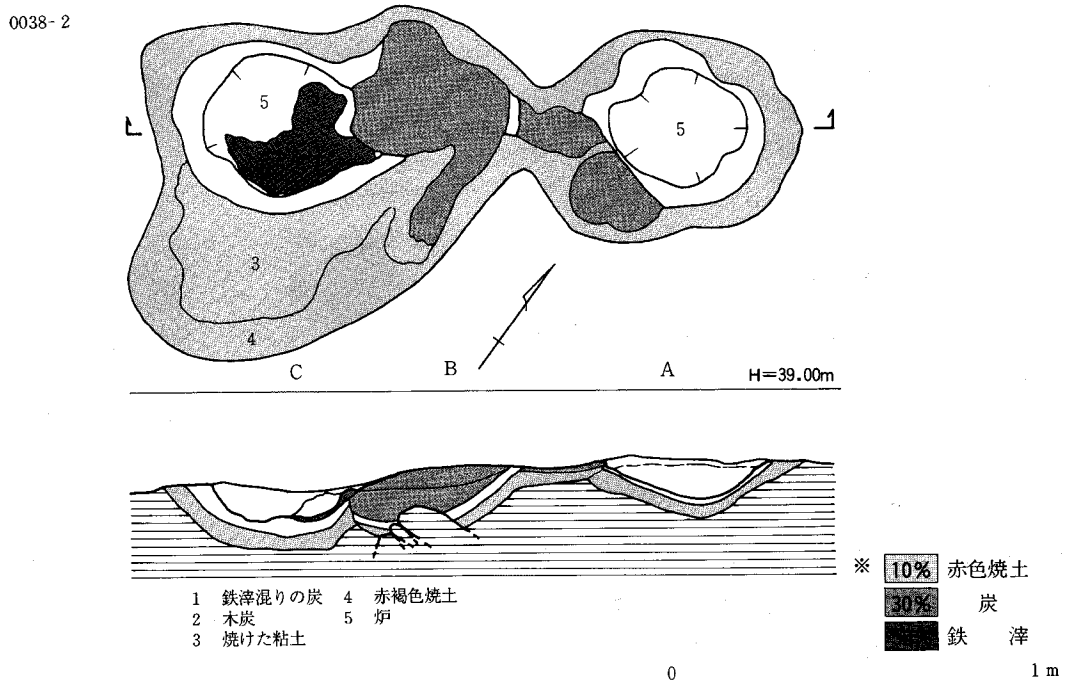
炉（Ａ）と廃滓坑（Ｂ）からなる。炉は炉壁が明確には残ってはいないが、部分的に溶解のみられる炉壁状の焼土がコンテナ１箱分みられ、また底部が赤褐色に焼けていることから、炉壁を壊して廃棄したものと思われる。焼土中からも鍛造剥片、粒状滓を含む鉄滓が出土している。廃滓坑は一部基盤の礫層まで掘りぬいた土坑で、長径1.6m、短径1.2m、深さ40cmを計る。ここではコンテナ７箱分の多量の鍛造剥片、粒状滓を含む鉄滓、木炭、焼土ブロック等が混じる焼土が互層に堆積している。ここからは量的には少なくまた小破片であるが、土師器、内黒土器、鞴羽口が出土している。図示できたものは064～069の６点である。064は土師器丸底坏で底部はヘラ切離し、板状圧痕が残る。065は土師器小皿で底はヘラ切離し後ナデ調整をし厚く、また胎土に雲母を含み新しい様相を持つ。066は土師器小皿で底部ヘラ切離し後板状圧痕が残り薄い。067は内黒土器椀で内外面ヘラ磨きされる。068、069はいずれも内黒土器椀の底部破片で、内面ヘラ磨きを行なっているものである。これらの遺物は１１世紀後半から１２世紀初頭に位置付けられるものである。

0038－２（128図・図版30－６・31－１）

0038－１の南に接する。長軸1.55mの中に３基の炉が接しており、北東から順にそれぞれＡ．Ｂ．Ｃとする。Ａは径40cm、深さ10cmほどの遺構で、黄褐色に焼けた炉壁状の焼土が皿状に残り、その下部も被熱し赤褐色に焼けており、炉と判断される。Ｂもほぼ同規模の炉で、黄褐色に焼けた炉壁状の焼土が皿状に残る。上面には鉄滓混じりの炭が堆積していた。下面には基盤由来の礫がみえるがこの

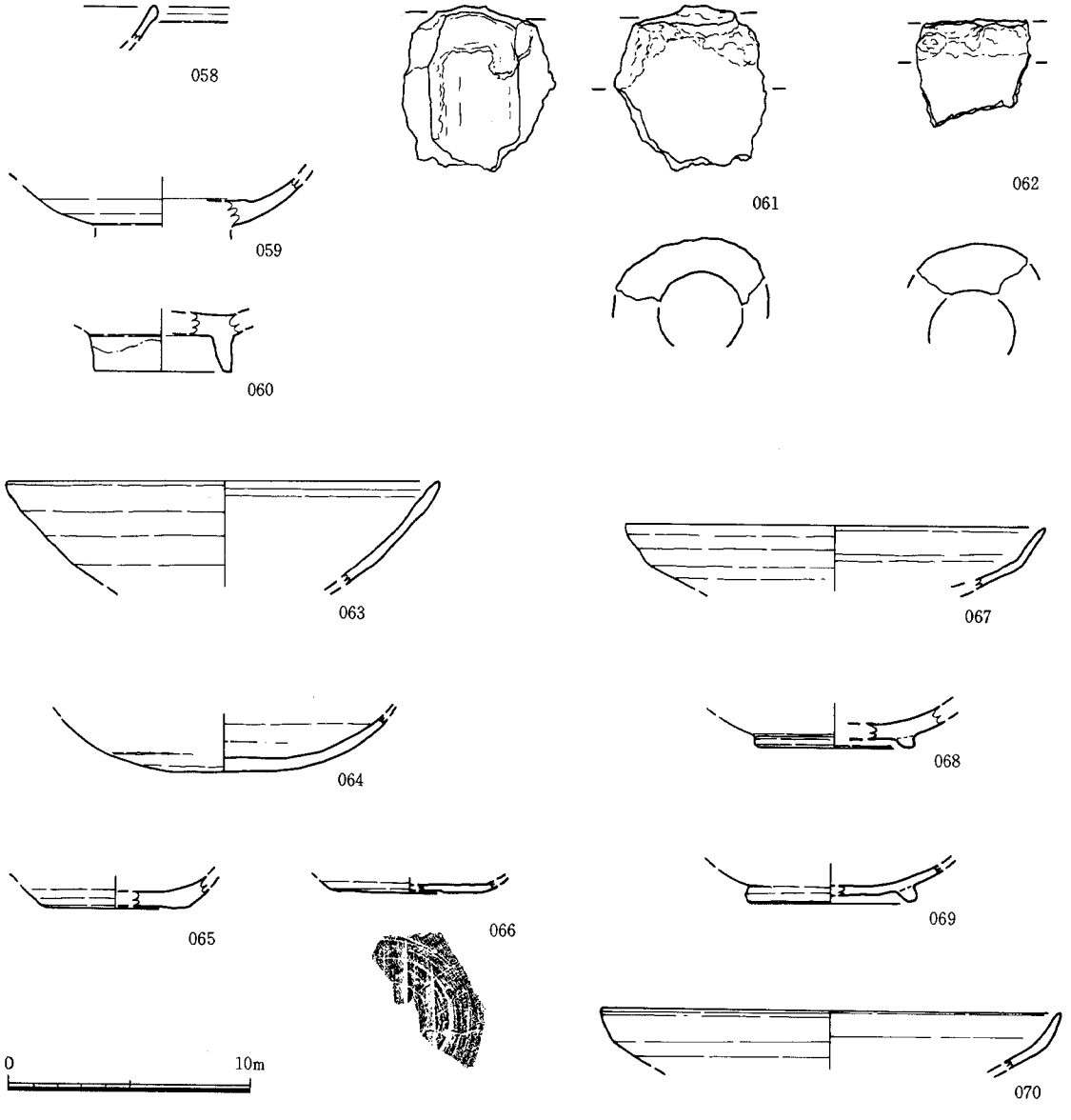


1　鍛造剝片を多量に含む鉄滓
2　炭、鉄滓、鍛造剝片、炉壁状焼土を含む
3　鉄滓少量と炭、焼土ブロックを含む
4　暗灰色焼土ブロックを少量含む黄色砂



1　鉄滓混りの炭　4　赤褐色焼土
2　木炭　5　炉
3　焼けた粘土

128図　鍛冶炉0038-1、2実測図（縮尺1：20）



129図　鍛冶炉0038-6B、0035、0038-1B、0038-2B出土遺物実測図（縮尺1：3）

礫も被熱している。Cもほぼ同規模の炉である。黄褐色の固く焼けた焼土が皿状に残り、底面には鉄滓がまとまっている。この炉の南側には焼けた粘土がまとまって堆積している。ここでは黒色土器椀破片070が出土しており、この遺構も11世紀後半から12世紀初頭の年代が考えられ、いずれの炉も時期差は大きくないものと思われる。また、いずれの炉からも鍛造剝片、粒状滓がみられる。これらの炉に関する廃滓坑は、南に近接する0042がそれにあたるものと思われる。

4－5　昇降用道路遺構

今回の調査地点は西を室見川旧河川に、東をその支流貞島川の旧河川に囲まれ、ここでの生活にはこれらの川との密接な関係は不可欠であったと推察される。本遺跡ではそれらの関係を彷彿させる遺構が検出されている。掘込み等の積極的な人為性はみられないが、人々の行為の積み重ねによって生じた道路状の遺構である。５本の道路状遺構が検出されているが、いずれも硬化した床面を持ち、微高地から旧河川河床にむけて傾斜しているのが特徴で、旧河川への昇降用の道路であったといえる。

0003（130・132図）

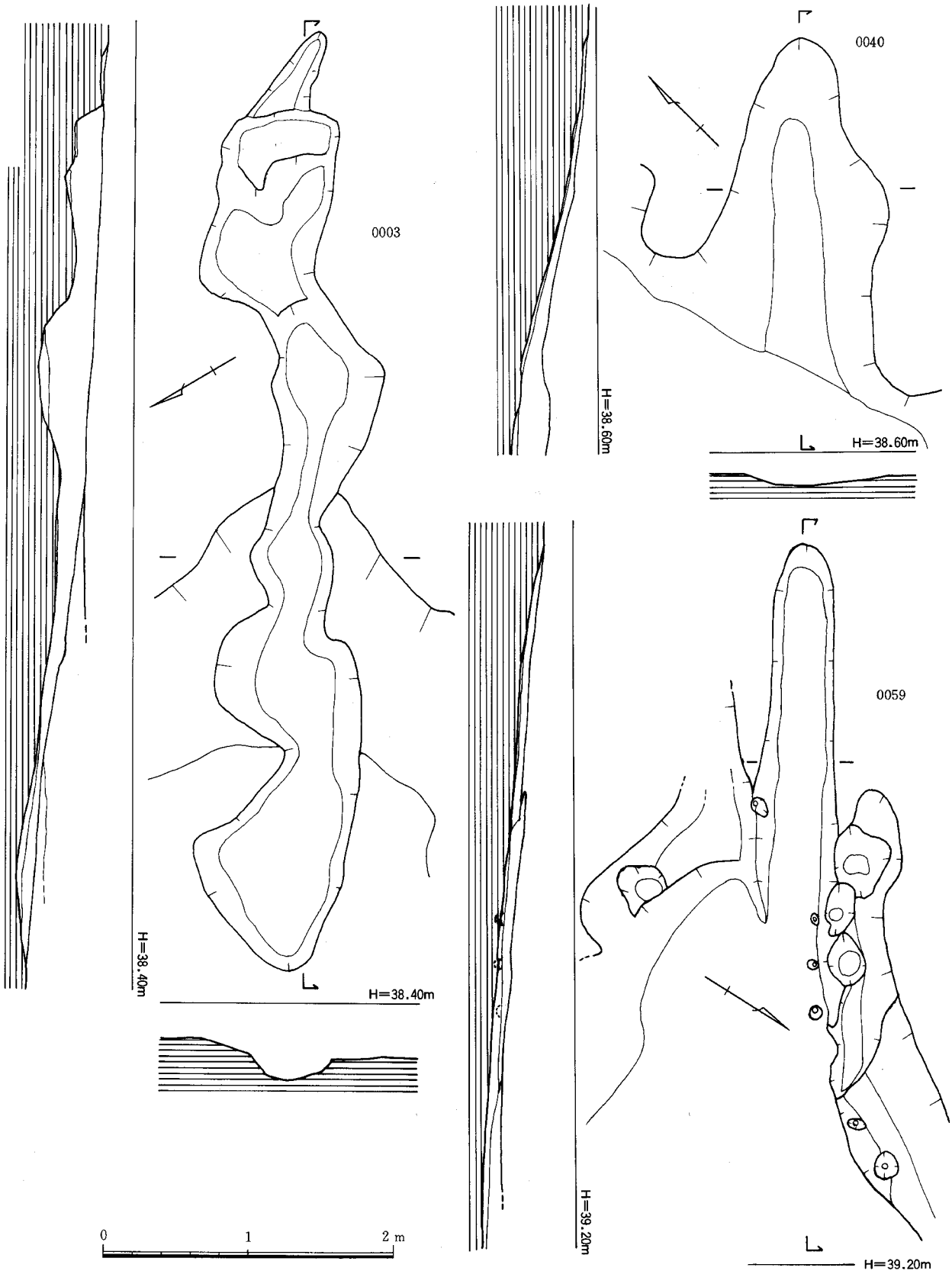
Ｉ－３区で検出された。室見川旧河川0001の東側へ湾入した部分へ下る道路である。現存長約6.5m、現比高差は0.6mを計りなだらかに傾斜するが、上面は水田造成によって削平されており、本来はさらに長く、また高低差もあったものと思われる。幅は40～80cmの溝状で、断面形は深皿形に凹んでいる。床面はいくぶん凹凸がみられるが、鉄分が沈着しており、雨落ち溝的な役割もあって浸食の結果によるものであろう。ここの覆土からは土師器、須恵器の小破片が出土しているが、５点を図示しえた。０７１は高台付きの坏で、外底は回転ヘラ切離し、以外は回転ナデ調整である。０７２は土師器の分厚い口縁部破片で鉢形をなすものと思われる。０７３は土師器甕で、外面を縦ハケ目、口唇部をナデ、体部内面をユビ押さえするものである。０７４は越州窯青磁椀の口縁部破片で、内外をカンナ削りし淡オリーブ色の釉が薄くかけられている。胎土の精緻な精品である。０７５は土師器甕の把手である。手づくねであるが貼りつけ後一部ハケ目を施し、内面ヘラ削りを行なう。９世紀代には使用されなくなったものと思われる。

0040（130図・図版34－３）

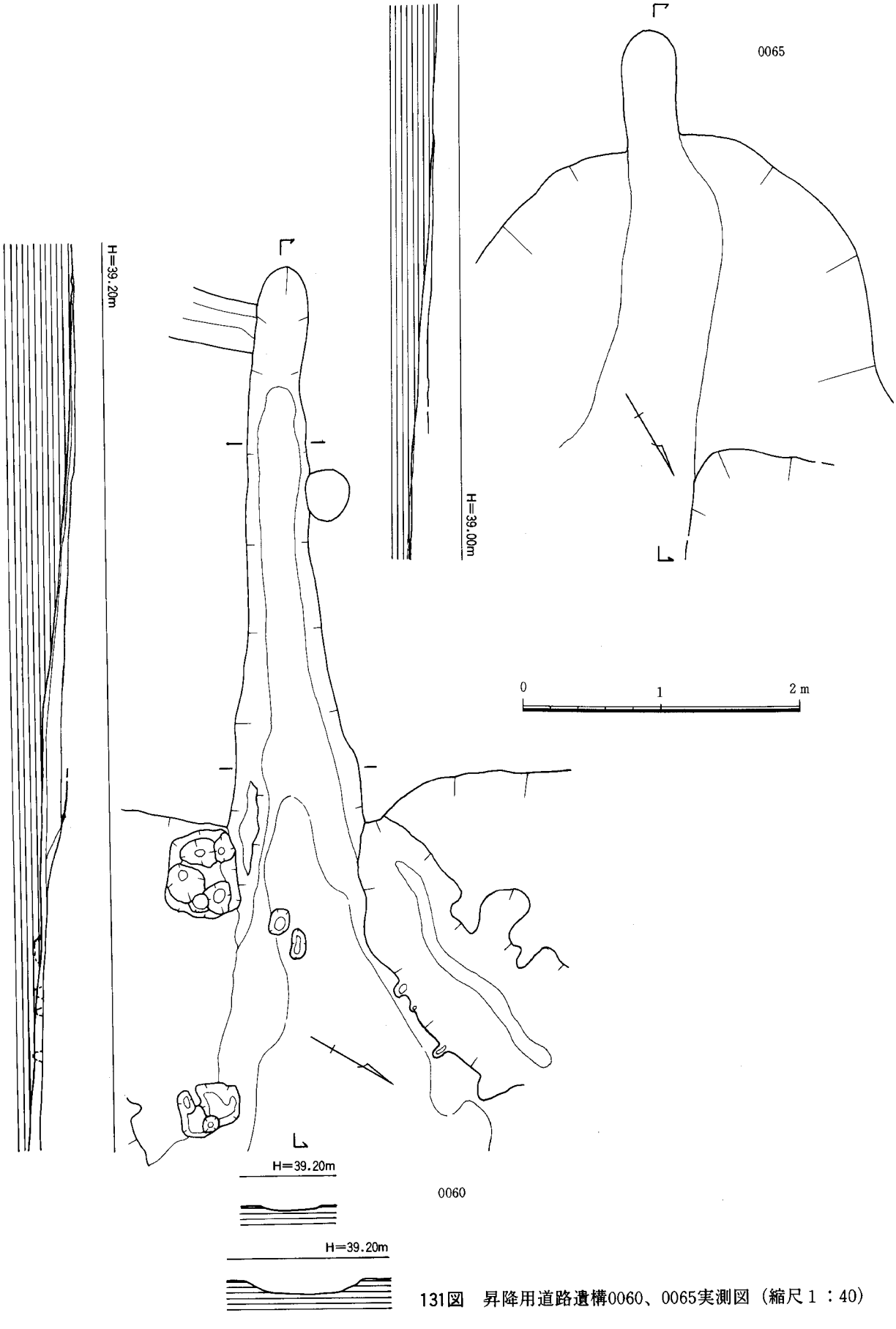
Ｈ－７区で検出された。室見川旧河川0001へ下る。現存長約2.5mほどで、現比高差は0.55m、傾斜はやや強い。基盤の粗砂層上にできたもので断面は凹がわずかに感じられるほど浅い。また重なる歩行と酸化鉄の沈着により床面は硬化している。遺物はみられないが、0001が埋没していく段階で使用されなくなっており、0003と近い年代が考えられる。

0059（130・132図・図版34－１）

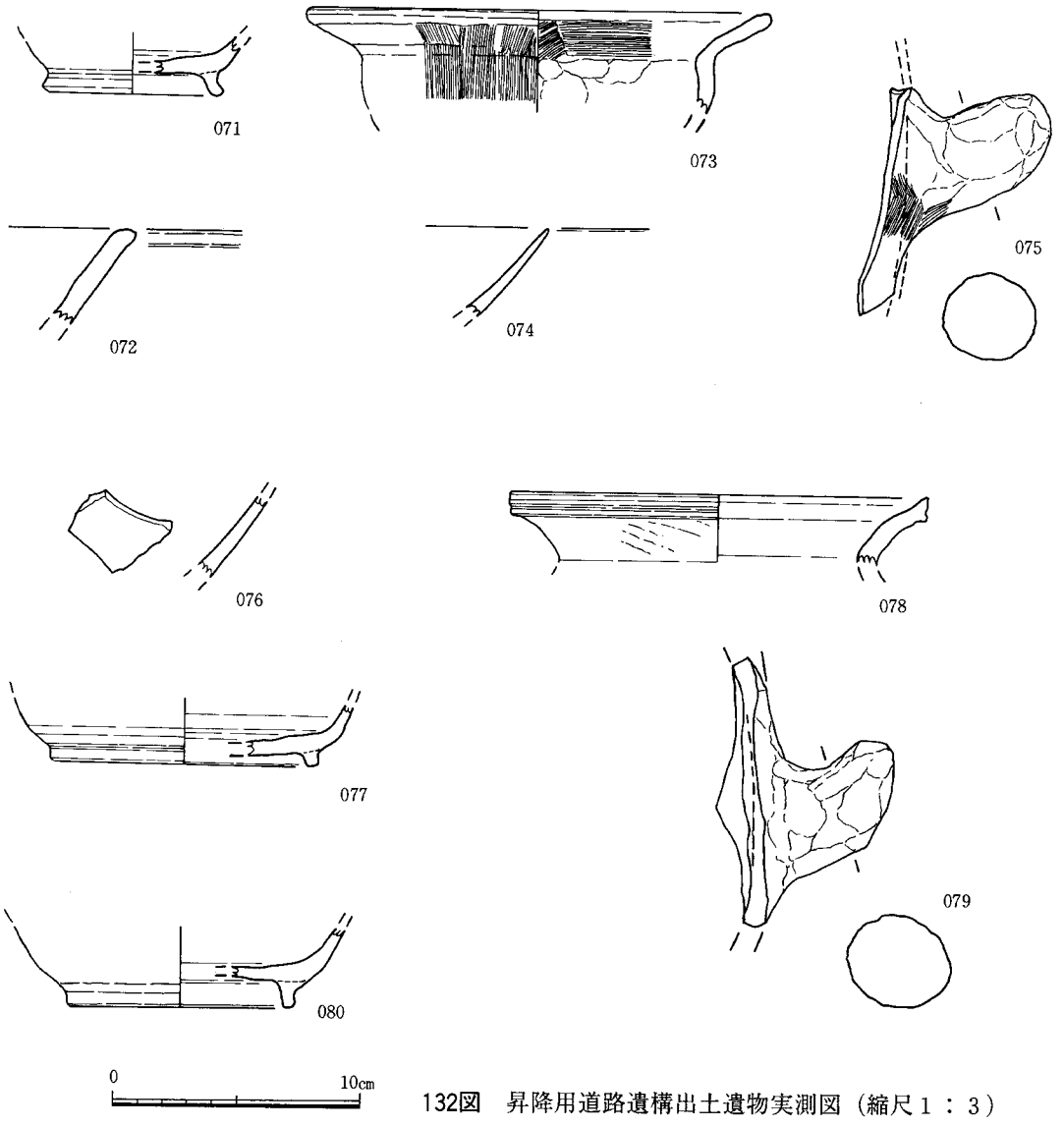
Ｂ－４区で検出された。室見川支流貞島川の旧河川0051の河床にむかってなだらかに下りている。現存長約4.5m、現比高差45cmを計り、傾斜はきわめて緩やかである。上部はごく浅い皿状の断面を持つ溝状を呈し、河床にむかって扇形に開く。床面は上半で細砂が硬化し、鉄分が沈着しているが、下半では小礫が舗装されたように硬化している。下半の北側、すなわち0051の下流側には大小のピットが並んで検出されており、護岸杭が打たれていた可能性が強い。覆土から土師器、須恵器等の小破片が出土しているが、図示したのは４点である。076は越州窯青磁椀の体部破片である。内外面に淡オリーブ色の釉を施す精品である。077は土師器高台付きの坏で内外面回転ナデ調整をする。078は須恵器甕の口縁部破片である。079は土師器把手付き甕の把手部分で、内面ヘラ削りをする。0051が埋没する段階には使用されなくなっており、その時期は９世紀代と思われ、他の昇降道路と同様である。



130図　昇降用道路遺構0003、0040、0059実測図（縮尺１：40）



131図　昇降用道路遺構0060、0065実測図（縮尺１：40）



132図　昇降用道路遺構出土遺物実測図（縮尺１：３）

0060（131・132図・図版34－２）

Ｂ－３区検出である。貞島川旧河川0051、0052の分岐点の河床に向かって緩やかに傾斜する。現存長約6.5m、現比高40cmを計る。上半はごく浅い皿状の断面を持つ溝状を呈し、下半は川に向かって末広がりとなる。上半の床面は細砂が硬化し、酸化鉄が沈着しているが、下半は酸化鉄とともに硬化している。下半北側、すなわち流路下側に浸食されたような落ち込み、ちいさなピットがみられ護岸されていたものと思われる。この遺構廃棄後上半の浅い凹みに土師器が一括廃棄されており、これは0029として土坑の項で述べている。覆土から須恵器高台付き坏080が出土してる。

0065（131図）

Ｂ－５区検出である。0051にむかってごく緩やかに傾斜する。現存長3.5m、現比高20cmを計る。ほとんど凹みはみられないが、床面がわずかに硬化している。遺物は検出できていない。

4－6　旧河川・溝

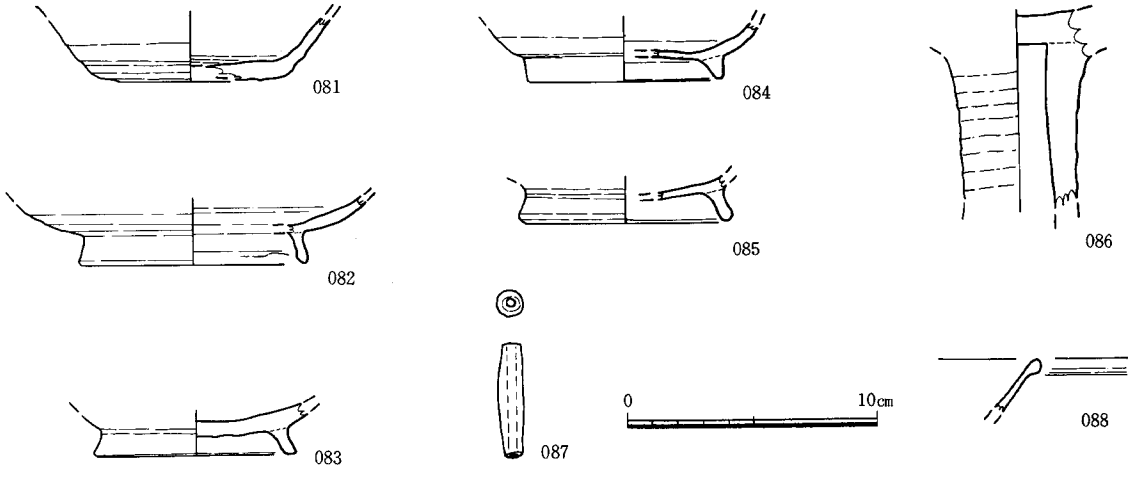
本遺跡はこれまで述べてきたように、西を室見川旧河川に区切られ、東をその支流である貞島川の旧河川に画された微高地上に立地している。調査ではこれら旧河川流路と、それらから取水されたと思われる用水路、また水の流れた痕跡のない性格不明の溝遺構が検出されている。旧河川をのぞいて、後の水田造成で削平され遺存状況はさほどよくない。

0001（133・134図・図版34－4）

調査区の西端、Ⅲ区をかすめるように検出されている。室見川旧河川の流路である。調査前の水田面の標高は約37.5mで、Ⅰ、Ⅱ区の水田面より2m程低く、遺跡の地形はこの川に向かって徐々に傾斜している。河床の標高は36.1mである。河岸の基盤礫層を洗うように流れ、河床にも露出している。河床直上には白色細砂が被り、その上に茶褐色細砂が厚くのり、流路であったことがわかる。この川には0003、0040の昇降用道路が取り付けられていた。覆土からは土師器、須恵器などの遺物が出土しているがいずれも破片で接合もなく、流れ込みの状況である。図示した遺物は081が土師器坏で、外底回転ヘラ切離しする。082は土師器坏で細い高台を持つ。083は内黒土器椀で内面をヘラ磨きしている。084は三角の高台を貼りつける土師器坏である。085は内黒土器の高台付き椀で、内面をヘラ磨きしている。086は土師器高坏の脚部上半で、ロクロでの引き上げの痕跡が螺旋状に残る。赤褐色で軟質であるが、あるいは須恵器を酸化炎焼成したものかもしれない。087は細身の土錘である。これらのうち081、082、085は土層図10層出土で、以外は12層出土である。遺物の状況、昇降用道路の廃棄年代から10世紀の初めには埋没していたものと思われる。

0002（付図3）

Ⅰ－2区検出である。長さ2.65m、幅1.35m、深さ20cm浅い溝状である。床面は小さな凹凸が目立ち、また覆土は粗砂であることから、微高地から0001へ流れこむ雨水の浸食した溝の最下部分にあたるものであろう。土師器細片が微量みられるのみである。



133図　旧河川0001、用水路0006分岐点出土遺物実測図（縮尺1：3）

0004（付図３）

Ｈ．Ｉ－６区検出である。0001の流れに平行し、北西から南東に不定形に伸びている。長さ約10m程で深さは10㎝前後で浅い。基盤の礫層に酸化鉄の沈着した層が溝状になっているものである。土師器細片が微量出土している。

0005（133図・図版34－５）

Ｅ－５区からＩ－１区にかけて、Ⅱ区の北半を約48mにわたって南東から西北に斜断している。0006とＥ－５区で分岐している。断面は逆台形で明確な掘方を持ち、幅50㎝強、深さ10～20㎝を保っているが、Ｇ～Ｉ区では水田造成の削平により溝のほぼ床面のみが残り、Ｉ－１区では消滅している。基底面では白色の粗砂が堆積し、その上に暗褐色の砂質土が被っている。また、0006との分岐点では人頭大の礫が集中してみられ（図版34－5）、水量調整用の堰の役割があったものと思われる。これらよりこの溝は用水路としての機能があったといえる。竪穴住居0015に切られている。出土遺物は土師器破片等小量であるが、分岐点付近では088の邢窯系の小さな玉縁をもつ白磁椀破片が出土しているが、0015との年代関係に矛盾があり、混入したものであろう。

0006（133図・図版34－５）

Ｅ－５区からＧ－１区にかけて約42mが検出されている。0005と分岐する用水路で、状況は同様である。土師器、須恵器破片が出土しているが、いずれも図示しえないが、８世紀代に収まるものである。0015より旧いが時期差はさほど大きくないものと思われる。

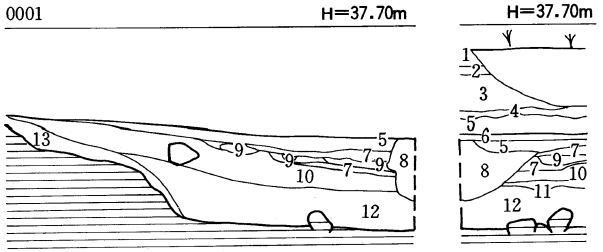
0007（付図３）

Ｅ－３区からＦ－１区にかけて約26mが検出されている。0006と平行して北東に延び、途中で北に向きをかえる。水田造成の削平をうけ、溝の基底面上に浅く白色粗砂が残されているのみで、遺存状態はわるいが、日常的に水流があった用水路であろう。８世紀代の土師器、須恵器破片が小量みられるが、遺構は新しく、掘立柱建物の新しい時期に近く、ほぼ10世紀代である。

0051（134～136図・図版33－１～４）

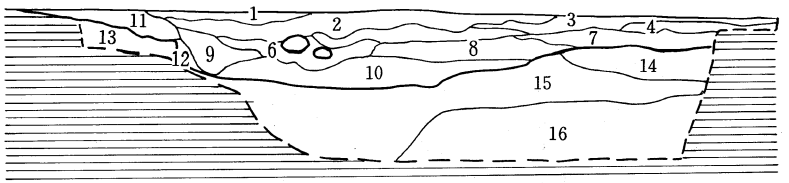
Ａ．Ｂ－２区から５区にかけて、約35mにわたって検出された。Ｂ－２．３区付近で0052と分岐する。現在も遺跡の東脇を流れる室見川の支流貞島川の旧流路で、川幅は北側端で約５mあるが、３．４区付近では東側立ち上がりが明確でなく、５m以上あるものと思われる。この川には３本の昇降用道路が付けられており、集落の生活と密着していたことが推察できる。また、川の北端左岸では馬の歯が３点まとまって出土しており（図版33－４）、祭祀が行なわれていた可能性もある。出土遺物は土師器、須恵器、施釉陶磁器等がコンテナ２箱分、鉄滓２箱である。この内21点を図示している。089は土師器坏で外底回転ヘラ切離し、以外は回転ナデ調整である。090は土師器蓋で、天井部を回転ヘラ削りし、高台状の撮みを貼りつける。内面下半にはヘラ磨きが行なわれる。091は外底回転ヘラ削りで、体部および内面は回転ヘラ磨きが行なわれる。092は内黒土器椀で高台を付けるが、底部が押さえられ高台以上に張り出す。内面ヘラ磨きで、外底および畳付きには板状圧痕が残っている。093は瓦器椀で外面体部上半は黒色を呈す。下半はユビ押さえ後ヘラ磨き、内面はヘラ磨きをする。094、095は土師器甕の把手でいずれも手捏ねである。096は土師器の支脚で手捏ねである。097は土師器甕で外面体部は縦ハケ目、内面ヘラ削りをする。098は須恵器坏蓋で撮みを欠失する。天井部は回転ヘラ切離し後

0001　H=37.70m



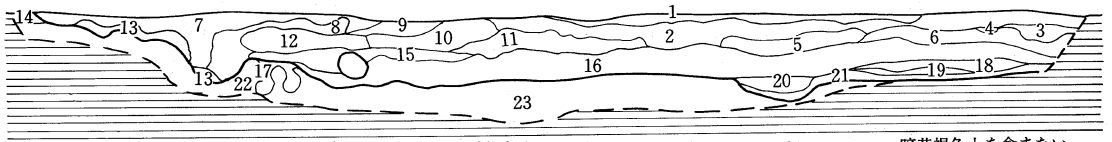
1　客土（耕作土）
2　客土（真砂）
3　耕作土
4　床土
5　黒褐色砂質土、粗砂粘含
6　明黒褐色細砂
7　明黒茶褐細砂
8　黒褐色砂（粗砂粒混）と黄白色細砂の混り
9　灰白細砂
10　明茶褐細砂
11　白茶褐色細砂
12　やや暗い茶褐細砂（礫層直上は白色細砂）

0051-1　H=39.20m



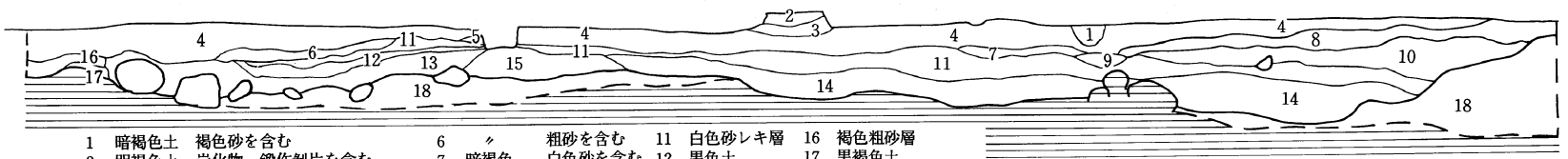
1　褐色土
2　暗褐色土
3　黒褐色土
4　暗褐色砂質土
5　暗灰褐色土
6　暗褐色土
7　褐色砂層
8　礫層
9　褐色土
10　暗褐色土
11　暗褐色土
12　〃
13　〃
14　礫層
15　黄褐色粗砂層
16　黄色粗砂層

0051-2　H=39.20m



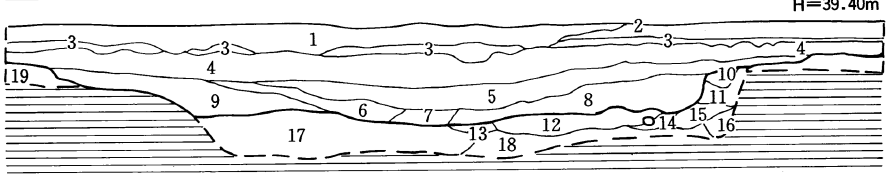
1　暗褐色土　炭化物片を多く含んでいる
2　黒褐色土
3　〃　褐色土のブロックあり
4　〃　白色砂を含む
5　暗褐色土
6　〃　5層より黄色
7　黒褐色土
8　暗褐色土　暗黄褐色砂のブロックを含む
9　〃　暗黄褐色土を含まない
10　〃　9層より明るい
11　〃　10と同色　小石を含まない
12　〃　11と同色　〃
13　褐色土
14　暗黄褐色
15　砂レキ層
16　粗砂礫層
17　暗褐色土
18　暗灰茶褐色細砂

0051-3　H=39.20m



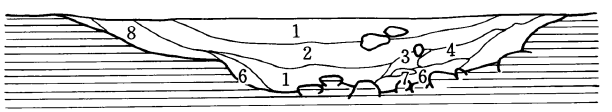
1　暗褐色土　褐色砂を含む
2　明褐色土　炭化物、鍛作剝片を含む
3　鍛造剝片、小鉄滓、木炭片を層理的に含む
4　暗褐色土　鉄滓片　炭化物を含む
5　〃　礫を含む
6　〃　粗砂を含む
7　暗褐色　白色砂を含む
8　〃　礫を含む
9　灰白色砂質土
10　明褐色砂質土
11　白色砂レキ層
12　黒色土
13　黒褐色土
14　暗褐色粗砂
15　白色粗砂
16　褐色粗砂層
17　黒褐色土
18　礫層

0051-4　H=39.40m



1　盛土（現代）
2　灰褐色土（耕作土）
3　暗黄褐色土（床土）
4　暗褐色土　地山（黄褐色砂質土）のブロックを含む
5　暗茶褐色土　鍛造剝片を含んでいる。
6　暗褐色土
7　褐色粗砂層
8　褐色砂質土
9　暗褐色砂質土
10　茶褐色土　地山のブロックを多く含む
11　黄褐色砂質土　褐色土を含む
12　礫層
13　暗褐色　粗砂層
14　灰白色砂質土
15　褐色土
16　暗褐色土
17　礫層
18　黄褐色粗砂層　赤味をおびる
19　黄褐色砂質層　（地山）

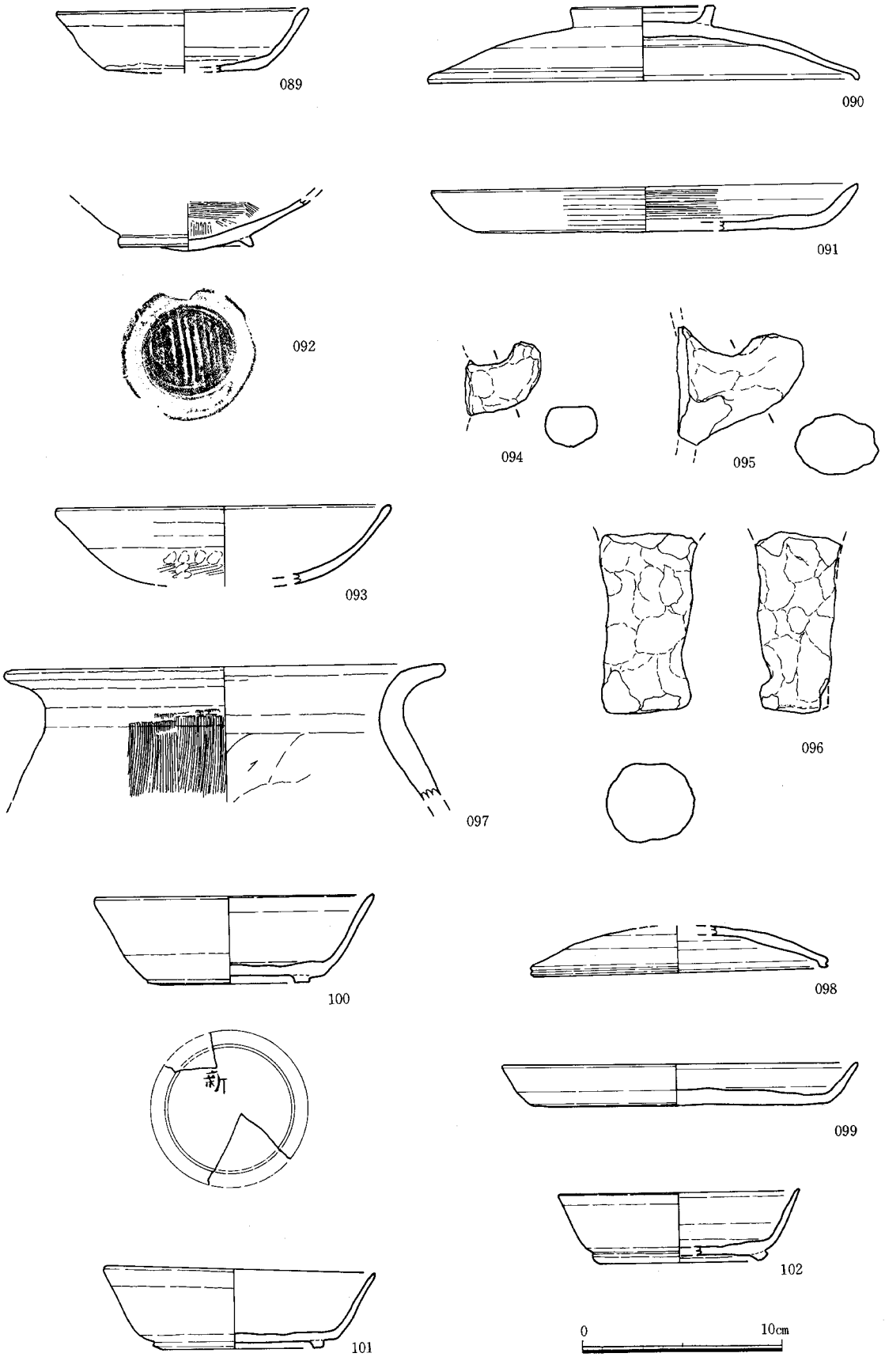
0052　H=39.20m



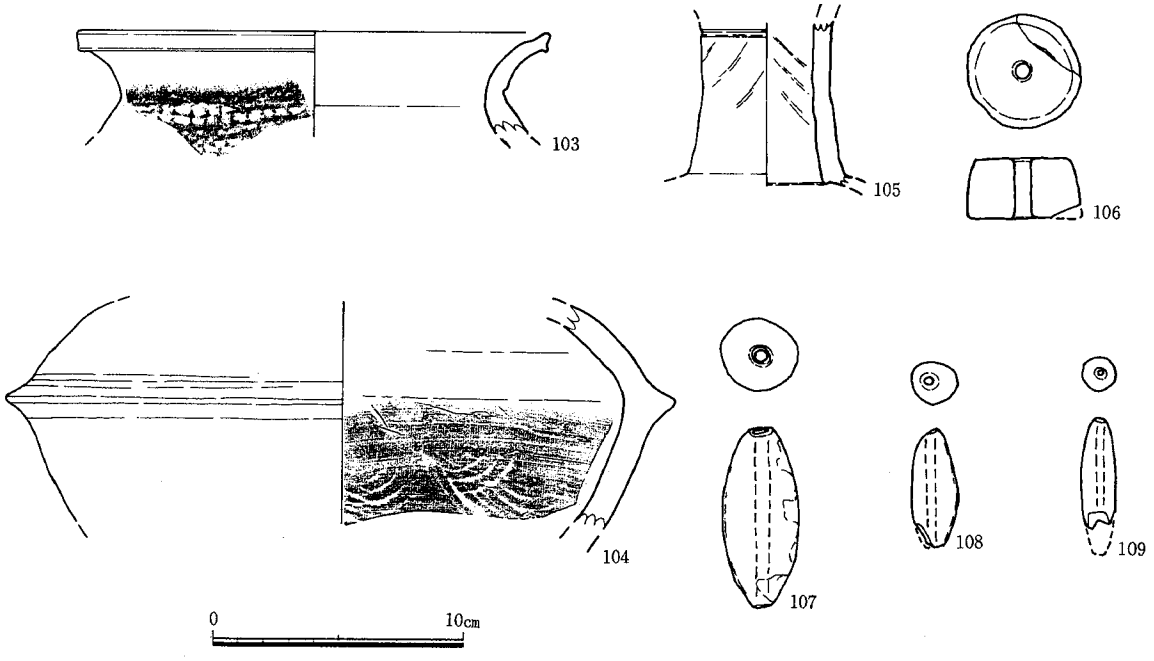
1　暗黒褐色土
2　黒味の強い暗黒褐色土
3　やや明るい暗黒褐色土（粗い砂粒を少量含む）
4　やや黄味の強い褐色土（粗い砂粒を含む）
5　砂粒が多く地山の砂層に黒褐色が少量混じる
6　きめの細かい暗黒褐色土
7　1に近いが砂粒が細かい
8　1に近いが黒褐色土が多く混じる

0　1　2　3 m

134図　旧河川0001、0051、0052土層断面図（縮尺1：60）



135図　旧河川0051出土遺物実測図 (1)（縮尺１：３）

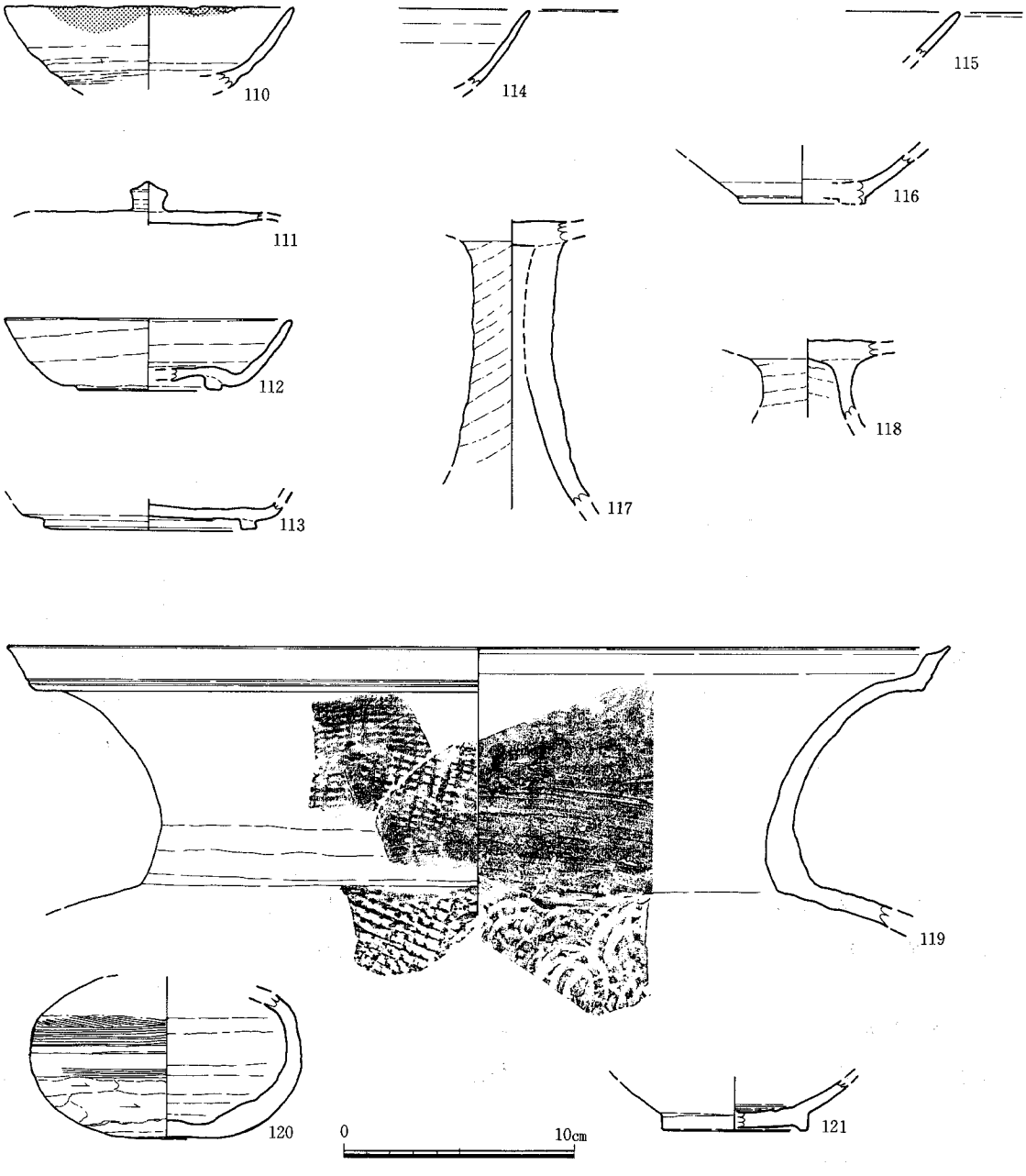


136図　旧河川0051出土遺物実測図 (2)（縮尺１：３）

ナデである。099は須恵器皿で外底は回転ヘラ切離し後ナデ調整をする。100は須恵器高台付きの坏である。高台は底部中心よりややずれている。高台内には「新」の墨書が書かれている。101、102はいずれも須恵器高台付きの坏で、回転ヘラ切離し後高台を貼りつけるものである。103は須恵器甕の口縁部破片で、体部外面は格子目叩き、内面は同心円の当て具痕がのこる。口縁内面には灰が付着し器壁がカセている。104は須恵器長頸壷の肩部破片である。最大径の部分に大きな三角形の凸帯が作り出されている。内面下半に同心円の当て具痕が残り後全体を回転ナデしている。105は須恵器長頸壷の頸部で、上部に沈圏線が巡り、内外にロクロ引き上げの痕跡が螺旋状に残る。106は土製紡錘車で、断面台形を呈す。107～109は土錘で、いずれも手捏ねであるが、107は側縁を研磨し整形している。この他図示していないが国産の緑釉陶器、越州窯青磁、11世紀代の白磁、鞴羽口などの破片小量がみられる。出土遺物の大半は８～９世紀代のものであるが、埋没していく各段階の遺物も上層ではみられる。この川の埋没後、または最終段階で製鉄炉群が営まれている。

0052（134図・図版33－５）

Ｂ－３区からＣ－１区にかけてＩ区北東隅を斜断する形で約20mが検出されている。Ｂ－３区付近で0051から分岐している。幅約４ｍで、規模、流路方向からすると0051の支流になると思われる。この川には用水路遺構0053´が流れこんでおり、また埋没した後用水路遺構0054が斜断する形で掘込まれている。出土遺物は量的に多くないが、土師器、須恵器破片、鉄滓のほか緑釉陶器、越州窯青磁も検出されている。うち10点を図示している。110は土師器坏で体部最下位をヘラ削りしている。口唇部の一部を打ち欠き、その内外面に煤が付着していることから、灯明に使われたものであろう。111は須恵器坏蓋で撮みが付く。112は須恵器高台付き坏で体部が垂れて器形が歪んでいる。113も須恵器高台付き坏である。114は国産の緑釉陶器椀で体は薄く軟質の焼成である。明るい鶯色の釉が施されているが、器壁になじまず口縁付近は釉の剝落がみられる。115、116は越州窯青磁椀である。内外面回転カンナ削りで整形し、蛇の目の高台を削り出す。畳付きを除いて全面にやや暗い淡オリーブ色の



137図　旧河川0052、用水路0053'、0055出土遺物実測図（縮尺１：３）

釉がかけられている。畳付きは研磨され滑らかである。117は土師器高坏の脚である。ロクロ引き上げの痕跡が明瞭に残る。外面黒灰色、内面茶褐色を呈す。須恵器の酸化炎焼成されたものかもしれない。118は須恵器高坏の脚である。ロクロ引き上げの痕跡が明瞭に残る。119は須恵器甕の口縁部破片で口径41cmを計る。頚部が外反し端部は直線的に立ち上がり、先端部は細く仕上げる。頚部外面は格子目叩き後ナデ、内面は上半がナデ、下半がヘラ削りを行なっている。体部は外面格子目叩き、内面には同心円当て具痕がのこる。出土遺物の大半は８～９世紀代のものであるが、上層には埋没していく各段階の遺物も小量みられる。

0053（137図）

Ｄ－５区からＥ－２区にかけて約34mにわたって検出された。幅0.7～1.0m程であるが水田造成の削平を受け遺存状況は不良で基底面がわずかに残るのみであり、Ｄ－５区では消滅する。南では二股に分かれており、２本の溝が合流したものである。この溝の基底面には粗砂が堆積しており日常的に水流があったことを示しており、用水路であったと思われる。この粗砂中にはコンテナ１箱分の鉄滓、同量の土師器、須恵器、施釉磁器片が含まれているが、微細な破片のみで図示していない。縄文土器も小量みられるが、以外は８～９世紀に位置付けられるものである。

0053（137図・図版33－６）

Ｄ－４区から大きく東に湾曲し、Ｂ－２区付近で旧河川0052に注ぎ込む。約30mが検出された。水田造成の削平で西側は浅くなりＢ－４区で消滅する。方向からすると0057につながるものかもしれない。この溝の埋没後に溝0054が作られている。溝は東側に行くほど深くなり、断面形は傾斜の緩やかなＶ字形になる。基底面は浸食を受け凹凸がみられ、直上に粗砂が堆積し、その上を暗茶褐色土が覆っている。遺物は土師器、須恵器が小量で、大半が西側の流路で検出されているが、東側の0052への注ぎ口付近では、図示した須恵器壷120が底部を下にして単独で置かれたような状態で出土している。祭祀の可能性がある。120は須恵器壷で頸部を欠き、やや扁平な球状を呈すが、底部は安定する。底部から体部下半にかけて手持ちのヘラ削りを行ない、中位は横のハケ目がある。上面から中位にかけて灰が被り器壁がカセている。７世紀代のものであろう。

0054（付図３）

Ｂ－５区からＣ－１区にかけてほぼ一直線に、約39mが検出された。水田造成で削平され、幅は現状で0.6～1.2m、深さは北側の深いところでも15cmほどで、南側に徐々に浅くなり、Ｃ－５区で消滅している。0053′、0052の埋没後につくられている。基底面に粗砂が堆積し、用水路であったと思われる。出土遺物は少なく土師器、須恵器、施釉陶磁器片、鉄滓などみられるが、縄文時代後期の土器片もまとまってみられるがいずれも小片で図示できない。遺構年代は0052が完全に埋没した段階であり、また遺物からも11世紀末から12世紀初めと考えられる。

0055（137図・付図３）

Ｃ－５区から３区にかけて一直線に約18mが検出された。水田造成による削平で、基底面がわずかに残るのみである。現状で最大幅1.0m、深さは最深で10cmである。基底面上に粗砂があり、用水路であったものと思われる。出土遺物は小量で土師器、須恵器、施釉陶磁器片、鉄滓等があるがいずれも小片である。図示した121は国産の緑釉陶器椀の底部破片である。外面を回転カンナ削りで整形し、高台を削りだし、また高台内を削り込んで環状の高台を作っている。内面底に一条の沈圏線がみられる。内外面全面に鶯色の緑釉が薄く施されるが、高台と外底の一部に露胎部がある。釉が器壁に馴染まず剝落がみられる。

0057（付図３）

Ｄ－５区で検出されている。基盤粗砂層に酸化鉄を含むやや汚れた粗砂が浅く堆積するもので明確にはしがたいが、基底面直下の酸化鉄層にあたるものであろう。方向からすると0053′につながるものであろう。遺物は鉄滓が微量みられるのみである。

0061（付図３）

Ｃ．Ｄ－４区で検出したものである。長さ2.85m、幅0.45m、深さ10cmほどの溝状であるが、両端にピットが付く。出土遺物も土師器甕、坏の破片が微量みられるのみで、時期、性格ともに明確にしがたい。

0062（付図３）

Ｃ－２区検出である。長さ3.2m、幅0.2m、深さ５cmほどの浅い溝状遺構である。出土遺物も土師器、須恵器の小破片各１点がみられるのみで、時期、性格ともに明確にしがたい。

0063（付図３）

Ｄ－１区検出である。北側が調査区外に伸びる。検出した長さは4.8m、幅1.25m、深さは最深部で15cmほどである。遺物は土師器の微細な破片が微量みられるのみで、時期、性格ともに明確にしがたい。

0064（付図３）

Ｂ－３区検出である。長さ4.5m、幅0.4m、深さ10cmほどで、北側に深さ40cm程のピットがみられる。出土遺物は土師器の微細な破片が微量みられるのみで、時期、性格ともに明確にしがたい。

4－7　ピット出土遺物（138図・図版37）

今回の調査区では1000をこすピットが検出されているが、それらのうち遺物の検出されたピットについてPitの符号を付して通し番号をつけた。その数は793におよぶ。それらのうち大半は掘立柱建物の柱穴であると思われるが、後世の水田造成の削平により欠失しているものも多いと思われ、建物の柱穴として拾い挙げきれたのは32棟分にすぎない。ピット出土遺物のほとんどは、掘り込まれた整地層に由来すると思われ小破片が多いが、中には完形品も含まれている。この項では、柱穴として拾い挙げきれなかったピットの遺物について述べる。

122はE－3区、Pit45出土である。土師器耳皿で底部は回転ヘラ切離しである。ピット上面には上を塞ぐように30×60cmの大きな石が置かれており、祭祀が行なわれたのかもしれない。

123、124はG－2区、径50cm、深さ35cmのPit368出土である。ほぼ同形同大の土師器坏であるが別個体である。両者に共通する特徴は口唇部を研磨してすり減らしていることである。祭祀に関わる遺物であろうか。

125はF－4区、Pit538出土の土師器坏である。用水路遺構0005を掘り込んでいる。

126はD－4区、Pit783出土の土師器坏である。体部内外面の一部に炭化物が付着している。他に鉄滓小量がみられる。

127はD－4区、Pit784出土の土師器坏である。他に砥石の小破片1点も出土している。

128はC－4区、Pit602出土の土師器小皿である。糸切り底で板状圧痕が残っている。径9.2cmを計る。本遺跡では糸切りの土師器皿は129を含め希有で、集落の消滅時期を示す好資料である。129はH－4区、Pit543出土の土師器皿である。長さ2.05m、幅0.4m、深さ10cmほどの溝状を呈しているが、便宜上ピット番号を付した。口径12.9cmを計り、糸切りの痕跡を明瞭に残す。

130はC－4区の径25cm、深さ36cmの小さなピットであるPit541で検出された。内黒土器の高台付き椀である。二次的な被熱を受け、内面の一部は赤褐色に変色している。

131はF－3区、Pit181から検出された高台付きの瓦器椀である。体部外面の上半に横方向のヘラ磨きが施され、下半には指頭圧痕が残りその上をヘラ磨きする。内面の調整は不明である。

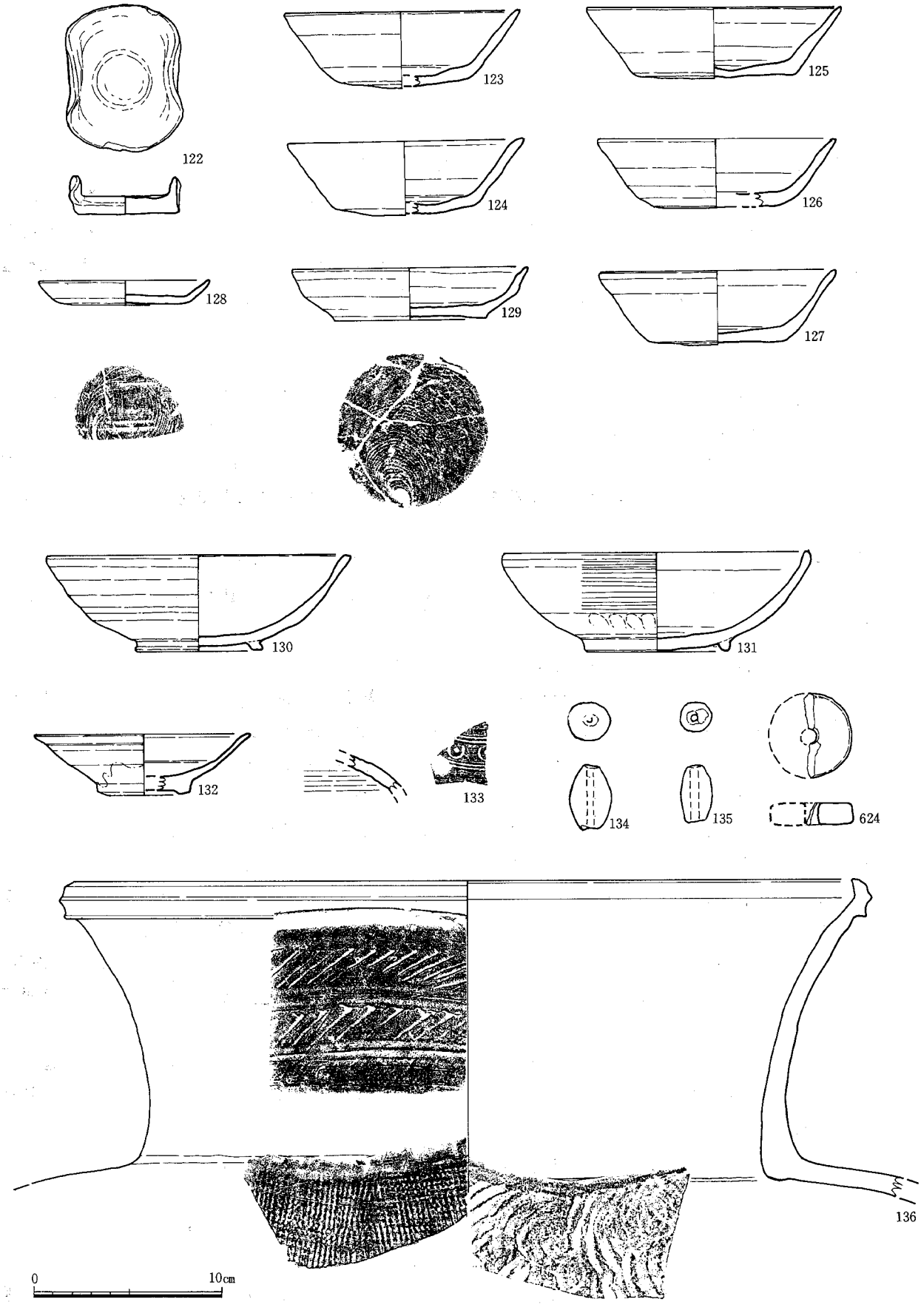
132はB－2区、Pit584で検出されている。旧河川0051が埋没したのちに掘り込まれたピットである。白磁皿で外面を回転カンナ削りで整形し、体部下半までくすんだ黄白色釉がかけられる。この他砥石小破片もみられた。

133はD－6区、Pit642で検出された新羅焼き蓋の破片である。2本からなる沈圏線が2条巡りその間に半円と点からなる印文が押されている。その上段には縦方向の細い沈線がみられる。この他鉄滓、土師器片が微量みられる。

134も131とともにPit181で検出された土錘である。他に微量の鉄滓、土師器片がみられる。135はF－4区、Pit94で検出された土錘である。

624はH－1．2区、Pit440で検出された石製の紡錘車である。ほぼ半分を欠失している。砂岩を材料としたもので、全面を研磨し環状に整形している。

136はF－3区、Pit540で検出された須恵器大甕頚部から肩にかけての破片である。頚部派内外面ナデで、外面には2本の指で浅い沈線を2段につけ、その上段に板状施文具により線状の列点文を施している。体部は外面に細かい格子目、内面に同心円当て具の痕跡が残る。



138図　Pit 出土遺物実測図（縮尺１：３）

4－8　包含層等の出土遺物（139・140図・図版38）

今回の調査地点では後世の水田造成によって削平を受けており、調査区南側を中心に水田床土直下に基盤が現われる地域が多かったが、Ⅰ．Ⅱ区北側では８～９世紀代の遺物を中心に包含する整地層があり、多量の遺物が検出されている。また、とくにⅠ区側では11～12世紀初頭までの遺物も含まれている。ここでは完形品、特徴的なものについて述べる。

137はＡ－２区検出の土師器小皿で径8.4㎝、底部は回転ヘラ切離し後ナデ、板状圧痕を残す。 138はＢ－２区検出の土師器坏で器形はやや歪むが、体部外面に細かい線描きがみられる。

139～141はそれぞれＥ－４区、Ｇ－３区、Ｅ－２区検出の土師器坏で、いずれも底部回転ヘラ切離しをする。

142はⅡ区の用水路0006上の包含層で検出した高台付き土師器椀で、内外面回転ナデ、低い高台を貼りつける。

143はＥ－２区検出の土師器甕で内面ヘラ削り、外面と口縁内面にハケ目調整をする。

144はＤ－２区検出の土師器破片を加工した「おはじき」様の製品である。上下両面と側縁を研磨して面取りし、円盤状に整える。

145～150は土錘で、それぞれＧ．Ｈ－３区、Ｅ－３区、Ｄ－３区撹乱、Ｇ－３区、Ｆ－３．４区、Ｇ－３区表採である。１４５には側縁からの穿孔がある。

151、152は須恵器坏蓋、高台付き坏で、それぞれＢ－１、Ｂ－２区検出である。

153はＢ－４区検出の須恵器円面硯である。透かしのある脚であるが欠失する。陸の部分は火膨れをおこし歪む。また使用による磨耗がみられる。

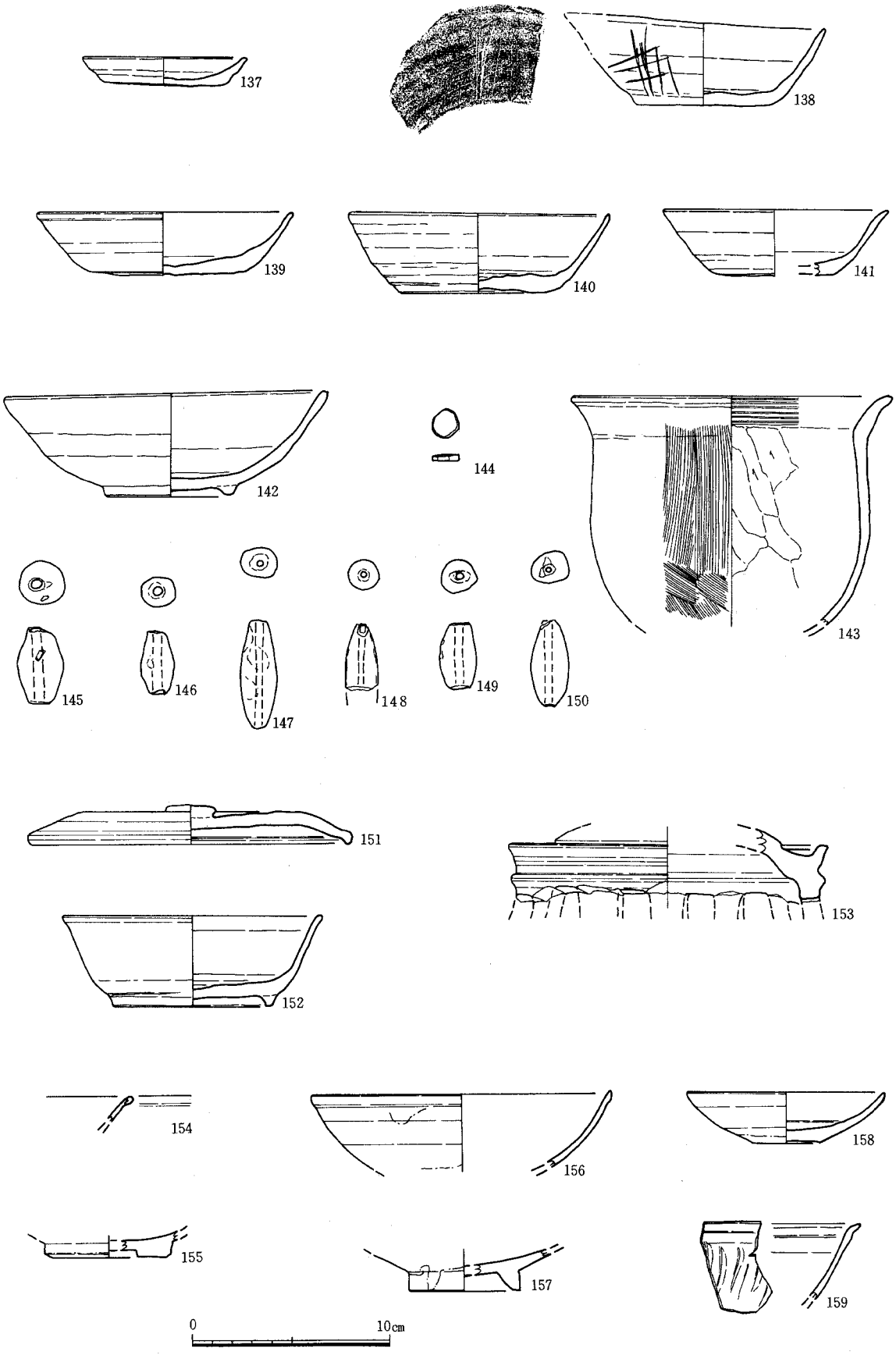
154、155は邢窯系の白磁椀の口縁部、底部破片でそれぞれＢ－３、Ｄ－３区の検出である。154の玉縁の中には折り返しの際の隙間がみられる。１５５は蛇の目高台で内面と高台脇まで施釉し畳付きと高台脇は研磨している。

156、157は潮州窯系の白磁椀、158は同じく皿である。ザックリした胎にわずかに黄味のある、または淡オリーブ色の透明釉がかけられている。それぞれＡ－２、Ｂ－３、Ｂ－５区出土。

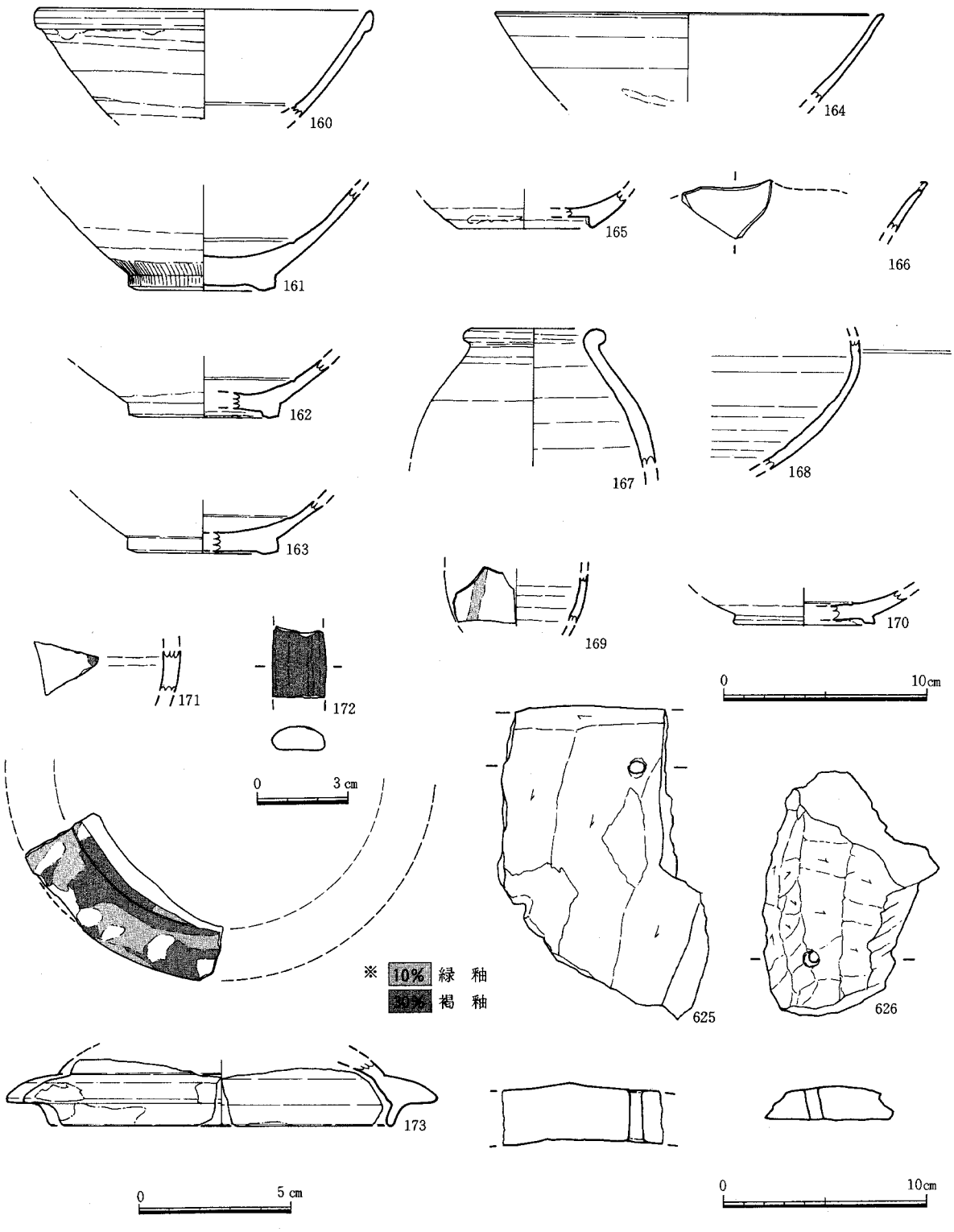
159は口縁端をわずかに外反させ、体部にヘラ切り沈線文を描く白磁椀である。Ａ－２区出土。160～163は口縁部に大きな玉縁をもつ白磁椀で体部外面下半まで施釉される。162の体部下半から高台脇にかけカンナ削りの痕跡が明瞭にみれる。それぞれＢ－５、Ｂ－５、Ａ－１、Ｂ－５区出土である。

164～168は越州窯系の青磁である。164は直線的な体をもつ椀で蛇の目高台を持つ精品であろう。165は碁笥底をなす壷で、内外面に濃いオリーブ色のかけ、畳付きのみ拭き取っている。下半に重ね焼きの痕跡が残る。166は口縁を稜花にする椀の優品で、内外面に淡オリーブ色の不透明釉がかけられている。167は口縁を丸く作る壷で内外面オリーブ色の釉がかかる。胎土はやや粗い。168は同じく壷の胴部で、内外面にオリーブ色の半透明釉がかけられているが、内面は薄い。外面に１条の沈圏線がめぐっている。それぞれＤ－３、Ｅ－２、Ｄ－２の0053上、Ｂ－３、Ａ－３区の検出である。

169は黄釉緑彩陶器の壺である。緑釉の上に透明の黄釉がかけられている。内面は無釉。胎土は精良硬質で中国産と思われる。Ｈ－７区出土。



139図　包含層等出土遺物 (1)（縮尺１：３）



140図 包含層等出土遺物(2)（縮尺１：３、１：２）

170は国産の緑釉陶器椀である。削りだし高台を持つ。内底に１条の沈圏線がみられる。明るい鶯色の釉が高台内を除いてかけられているが、剝落が多い。表土剝ぎの際の床土出土である。

171、172は長沙窯系の陶器である。171は小破片で外面に黄釉がかけられているが、一部に褐釉がかけられその下に貼花文の痕跡が観察でき、水注胴部のメダイヨンの脇の部分と思われる。172は水注の把手破片である。全体に黒褐色の釉がかけられているがローリングにより剝落が目立つ。背面に２条の沈線がある。いずれもＤ－２区出土である。

173は三彩広口壷の蓋の破片である。復元径14.2cmをはかる。ドーム状の丸い天井部をもち甲高の鍔が水平にのびる。かえりはわずかに内傾し、下方に伸びる。天井と鍔とのさかいには圏線状の細い段がみられる。内面から鍔の下面にかけては回転ナデ、鍔の上面は回転カンナ削りをする。胎土は明るい肌色で粒子がやや粗く軟質である。緑釉、褐釉、黄味をわずかに帯びた透明釉が、天井部から鍔の端部まで掛け分けられているが、一部かえりの外面から端部まで垂れている。化粧土はかかっていないが透明釉を通して生地の色が見える。鍔の甲が高く、また白化粧をしていない点に盛唐期の明器として作られた唐三彩の優品との違いがあるが、基本的には唐三彩の範疇に入るものである。G－2区の8～9世紀代の遺物を包含する整地層で検出された。

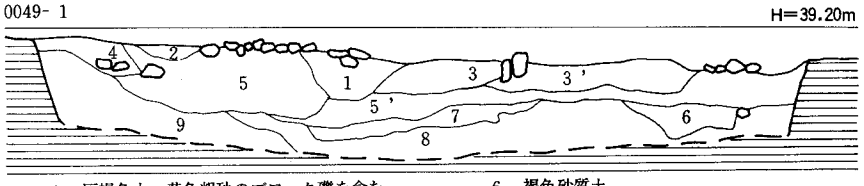
625、626は滑石製石鍋とその二次加工品である。625は外面を大きくノミ状加工具で大きく削る。二次加工の痕跡がなく、穿孔は補修用のものであろう。626は石鍋底部片を再加工したもので背面を滑らかにしている。穿孔があり温石としたものであろう。それぞれ表採、C－1区出土である。

5　近世遺構と遺物

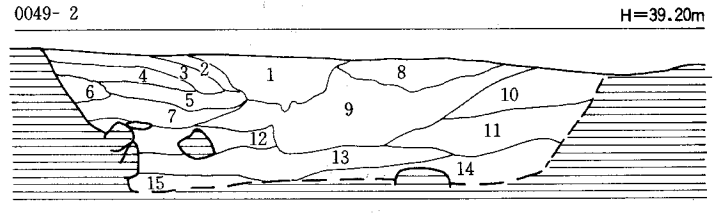
今回の調査地点では8世紀代から12世紀初めにかけて集落が継続しているが、その後しばらく間隙があり、新たな遺構としては戦国時代もしくは江戸時代まで下る可能性のある掘立柱建物2棟（SB04、05）がみられるのみである。おそらく畑地、水田として開墾され、そこに建てられた作業小屋的なものであったと思われる。以後現在まで畑地、水田として継続して利用されている。これらについては前項で述べている。その他人為的な遺構ではないが、江戸時代の旧河川1条があり、ここではそれと、出土遺物について述べる。

0049（141・142図・図版34－6・38）

B．C－6．7区で約20mが検出された。室見川支流の貞島川の旧河川にあたる。調査区の南東端をかすめるように北に流れる。本来の流路は幅6mほどあったものと思われるが、河床には大量の礫が堆積し、最終段階では礫層の間を流れる幅1m程の水路になっている。この流路の初現の時期は明確でないが、上面水路から出土した遺物からみて少なくとも江戸時代半ばまでは存続したものとおもわれる。174は唐津焼きの皿で碁笥底をなし、内面底には重ね焼きの痕跡がみられる。175は天目椀で釉調は中国製に似るが、体部は直線的、高台の削り出しは水平で、国産であろう。176は白磁椀で口唇部が水平に小さく開く。内面体部に櫛描き文がみられる。177は龍泉窯系青磁椀で体部外面に鎬連弁を削りだす。内外面に淡オリーブ色の透明釉を厚く掛け、貫入が目立つ。178は白磁椀底部で、大きな三角玉縁をもつタイプである。体部下半から高台脇にかけてカンナ削りの痕跡が目立つ。179は鞴羽口の先端部破片で、端部にはガラス質の熔着がみられる。内径4cmを計る。503は「寛永通寶」である。この他近世陶磁器破片に混じって土師器、須恵器片、鉄滓がみられた。

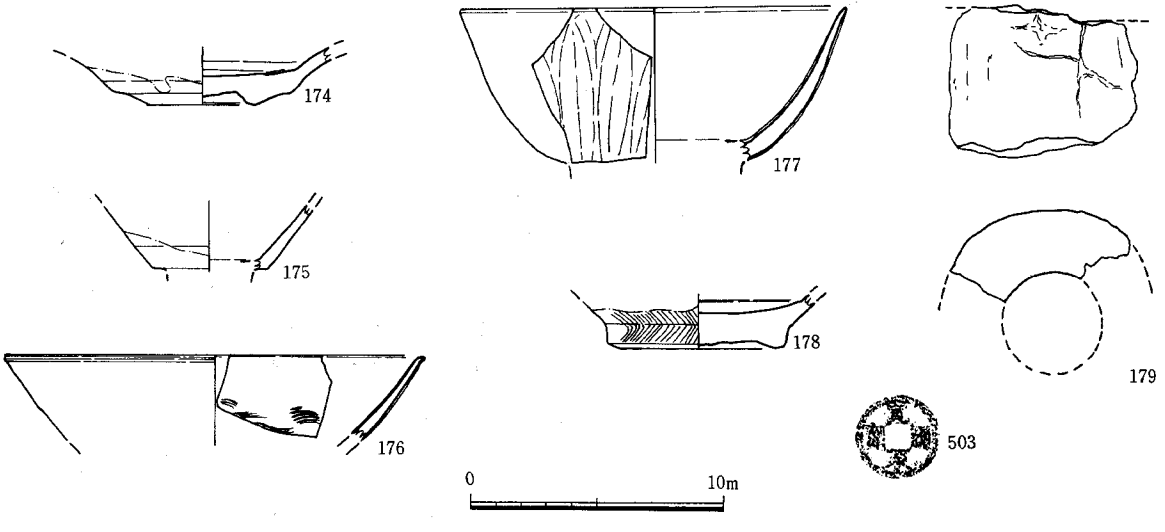


1　灰褐色土　黄色粗砂のブロック礫を含む
2　褐色土　白色粗砂を含む
3　黄白褐色粗砂　灰色粗砂　灰色土のブロックを層理状に含んでいる
4　暗茶褐色土　層の下半には黄褐色砂が多く含まれる
5　礫層
6　褐色砂質土
7　黄褐色砂のブロック、褐色土
8　黄褐色粗砂　層の上部に鉄分の沈着
9　灰褐色砂質土
3'　礫層
5'　礫層　礫が少さい



1　灰褐色土
2　暗茶褐色粗砂　2～3㎝の小礫を層理状に含む
3　暗黄褐色粗砂　無層理
4　白色粗砂　1～3㎝の小礫を多く含む
5　暗黄褐色粗砂　3層よりやや暗い
6　黄褐色粗砂
7　黄褐色粗砂　暗褐色土を多く含む
8　礫層　15～20㎝程の円礫層、すきまに暗褐色土を含む
9　灰褐色砂質土　15～20㎝程の円礫を多く含む
10　赤黄褐色土　5～10㎝程の円礫を多く含む
11　暗褐色土　2～5㎝程の円礫を多く含む
12　黄褐色粗砂
13　暗黄褐色粗砂　5㎝程の礫を多く含む
14　赤褐色粗砂　礫を多く含む。鉄分の沈着で赤くみえる
15　〃　14層と同じ

141図　旧河川0049土層断面図（縮尺1：60）



142図　旧河川0049出土遺物実測図（縮尺1：3）

5　東入部遺跡群第10次調査のまとめ

東入部遺跡群第10次調査の内容は、以上の各項で述べたとおりである。出土遺物は縄文時代から江戸時代までのものがみられるが、今回の調査の中心となるのは８世紀から12世紀初頭にかけての遺構、遺物である。十分に意を尽くせないが、各時代を簡単にまとめておきたい。

縄文時代

遺構はともなわないものの、後期を中心とする土器、石器が検出されている。とくにC.D-2区では後期中葉鐘ケ崎式～北久根山式の時期に比定できる土器２個体分がほぼプライマルな状態で出土している。周辺調査区でも同様の出土例が多く、石鏃、剝片石器も多く検出されている。いずれかの地域を拠点とする人々の、狩猟、解体を行なうワークキャンプ的な場所であったと思われる。

奈良時代～平安時代

一部後世の水田造成で削平を受けているものの1000を越す柱穴群がみられ、32棟の掘立柱建物が検出できたが、実際はさらに多数の建物があったと思われる。その外、竪穴住居１軒、多数の製鉄関連遺構、用水路、室見川、貞島川の旧河川などが検出されている。これらは８世紀から12世紀初頭のものであるが、これらは西側Ⅱ区に集中する８～10世紀代の遺構群と、東側Ⅰ区を中心に分布する貞島川埋没後にいとなまれた11～12世紀代の遺構群とに大きくふたつのグループに区別できる。

出土遺物は国産の土師器、須恵器が大多数をしめるが、国産の緑釉陶器のほか中国産の越州窯青磁、邢窯系白磁、長沙窯系黄釉磁、黄釉緑彩陶、唐三彩などの初期貿易陶磁、さらに朝鮮半島の新羅焼きまで出土している。なかでも三彩陶は８～９世紀代の遺物を含むⅡ区北側の黒色土整地層から出土したもので、盛唐期のいわゆる典型的な唐三彩の優品に比較して、白化粧が施されていないこと、胎土がやや粗いことから少し劣るが、緑、褐色、黄味を帯びた透明釉を掛け分けるなど、盛唐期の唐三彩の施釉手法を保っており、唐三彩の範疇に含められるものである。また器形は広口壷、いわゆる「万年壷」の蓋であり、国内出土の唐三彩としては初例できわめて貴重なものであるといえよう。

また平安期の遺物の下限は、糸切り底の土師器皿、龍泉窯系青磁がほとんどみられないが、その前段階の白磁群がみられることから12世紀初頭代までで、集落の消滅もこの時期に求められよう。

製鉄遺構も集落の存続していた各時期にみられる。出土鉄滓の分析を今回は報告できないが、表面的な観察によると、大規模な製錬、精錬の段階の炉は検出されておらず、鍛造剝片、粒状滓が多いことから精錬鍛冶、鍛錬鍛冶段階のものである。周辺では重留村下遺跡等で製錬炉が検出されておりこのような早良平野周辺部から鉄素材を供給したものであろう。しかし、この集落での鉄製品の生産が専業的なものか、あるいは集落内での消費にとどまるのか現段階では明確にしがたい。

このように、今回の調査地点は鉄器生産に大なり小なりかかわる集落であるが、唐三彩をはじめとする初期貿易陶磁がまとまって出土すること、円面硯がみられること、周辺の清末遺跡、東入部３次調査で石帯が出土していること等から官衙に関連する集落であると考えられる。入部出張所脇の調査では官衙とみられる大型建物がみつかっており、これとの関連が推定される。また入部地区は室町時代太宰府天満宮の荘園であったことが「太宰府天満宮文書」に記されており、大宰府との密接な関係が想定できる。

唐三彩については、出光美術館　長谷部楽爾、弓場知紀、東京国立博物館　矢部良明、奈良県立橿原考古学研究所　土橋理子の各氏に多くの助言を頂きました。記して感謝いたします。

4表　第10次調査遺構一覧

番号	位置	遺構種類	時代	図版	挿図	出土遺物	備考
0001	I-4	旧河川	奈良～平安	34-4	133、134	081～087	室見川旧流路
0002	I-2	雨落ち溝(？)	〃				長2.65m　幅1.35m深20cm
0003	I-3、J-3	昇降用道路遺構	〃		130、132	071～075	
0004	H-6、7 I-6	溝状遺構	〃				長約10m　深10cm
0005	H-2	用水路	〃	34-5	133	088	幅50cm強、深10～20cm、約48m
0006	E-4	用水路	奈良	34-5	133		約42m
0007	F-2	用水路	平安				約26m
0008	E-2	廃滓坑	奈良～平安		121		長軸1.05m、短軸0.85m
0009	E-2	廃滓坑	〃		121		長軸1.8m、幅約0.8m、SB17柱穴検出
0010	F-2	集石遺構	平安	27-5	118、119	042	
0011	F-3	土坑、柱穴	奈良～平安		115、116、117	036	2つの遺構の切合い、南側は水甕(?)ピット、北はSB17の柱穴
0012	E-3	廃滓坑	平安	31-3	121、123	050	径60cm、深45cmの二段の掘方、建物柱穴(？)
0013	F-3	土坑	奈良～平安				
0014	F-3	廃滓坑	〃	31-4	121		径1.02～1.13m円形、深45cm
0015	F-3	竪穴住居	〃	26-1.2	99、100	011～022、501	1辺3.2mの正方形深35～15cm
0016	G-4	土坑	近・現代				便槽（？）
0017	G-4	土坑	奈良～平安				
0018	E-3	炉	〃	28-1	124		内径40cm　深さ45cm
0019	E-3	炉	〃	28-2	124		遺存状態不良のため図示していない。
0020	E-3	廃滓坑	〃	31-5	121		径1.0m不整円形、深13cm浅い皿状
0021	E-3	廃滓坑	〃		121		径80cm不整円形、深25cm
0022	E-3	廃滓坑	〃	31-6	121		
0023	F-4	廃滓坑	〃				
0024	F-4、5	土坑	〃	26-3	115、117	037、038	径60cm程のほぼ円形
0025	F-3	土坑	〃				
0026	E-2	土坑	〃	26-4	115、117	502	2つの遺構の切合い。東側掘方はSB20の柱穴
0027	E-3	廃滓坑	〃		121		2つの遺構の切合い。東掘方はSB20の柱穴
0028		欠番					SD-53に同じ
0029	B-3	土坑	〃	26-5	115、117	039～041	土器一括廃棄遺構
0030		欠番					SD-51に同じ
0031		欠番					
0032	G-5	祭祀ピット	平安	25-5	113、114	029～032	SB06の柱穴
0033	G-4	祭祀ピット	〃	25-6	113、114	033	SB06の柱穴
0034	A-3、B-3	鍛冶炉	〃	28-3～6 29-1～5	125		複数の製鉄関係の集合
0034-1	B-3	廃滓坑	〃		126		50×30cmの皿状
0034-2	A-3	炉	〃		126		24×20cmの皿状
0034-3	A-3	炉	〃	28-4	126		径40～30cmの炉(A)、廃滓坑(B)からなる
0034-4	A-3	廃滓坑	〃	28-5	126		39×27cmの皿状
0034-5	A-3	炉、廃滓坑	〃	28-6	126		35×25cmの炉(A)と廃滓坑(B)からなる
0034-6	B-3	炉、廃滓坑	〃	29-1.2	126、129	058～062	径40cm程の炉(A)と廃滓坑(B)からなる
0034-7	A-3	炉(？)	〃	29-3	126		
0034-8	A-3	廃滓坑、炉	〃	29-4	126		廃滓坑(A)と炉(B)からなる
0034-9	A-3	廃滓坑	〃	29-5	126		1.15×0.55×0.33
0035	A-3	鍛冶炉	〃	29-6 30-1	124、129	063	
0036	B-3	廃滓坑	〃	32-1	122、123	051、052	
0037	A-2、B-2	鍛冶炉	〃	30-2.3	124		径30～24cmの皿状の凹み
0038	A-2	鍛冶炉	〃	30-4～6 31-1	127		複数の製鉄関係遺構の集合
0038-1	A-2	炉、廃滓坑	〃	30-5	128、129	064～069	炉(A)と1.6×1.2×0.4mの廃滓坑(B)からなる
0038-2	A-2	炉	〃	30-6 31-1	128、129	070	3基の炉(A、B、C)からなる
0039	C-6、7	集石遺構	〃	27-1.2	118、119	043～048	竪穴住居か。
0040	H-7	昇降用道路遺構	奈良～平安	34-3	130		
0041	B-3	廃滓坑	平安	32-2	122、123	053～056	
0042	A-2	廃滓坑	〃	32-3.4	122、123	055	長軸1.5m、短軸1.35m、長円形　深35cm

番号	位置	遺構種類	時代	図版	挿図	出土遺物	備考
0043	A-2	廃滓坑	平安		122		
0044	A-2	廃滓坑	〃		122		
0045	A-2	廃滓坑	奈良～平安		122		
0046	B-5、C-5	廃滓坑	平安	32-5	122		
0047	B-5	廃滓坑	〃	32-6	122		
0048	B-5	廃滓坑	〃		122		
0049	B-7	旧河川	江戸	34-6	141、142	174～179、503	室見川支流貞島川の江戸時代流路、約20m。
0050	B-3	炉	平安	31-2	124		木炭
0051	A-3 B-3、4	旧河川	奈良～平安	33-1～4	134、135、136	089～109	室見川支流貞島川の旧流路
0052	B-2、C-1	旧河川	〃	33-5	134	110～119	0051の支流、約20m。
0053	E-2 D-3、4、5	用水路	〃		137		幅0.7～1.0m、約34m
0053	D-3、4	用水路	〃	33-6	137		約30m
0054	C-2、3、4	用水路	平安				約39m
0055	C-3、4、5	用水路	〃		137	121	約18m
0056	B-3	焼土坑	奈良～平安	27-6	120	木炭	1.3×0.86m、深35cm
0057	D-4、5	溝状遺構	〃				
0058	D-3	集石遺構	〃	27-3.4	118、119	049	1.50×1.64mの隅丸方形、深さ20cmほどの浅い皿状
0059	B-4	昇降用道路遺構	〃	34-1	130、132	076～079	現存長4.5m
0060	B-3	昇降用道路遺構	〃	34-2	131	080	現存長6.5m
0061	C-4、D-4	溝状遺構	〃				長さ2.85m、幅0.45m
0062	C-2	溝状遺構	〃				長さ3.2m、幅0.2m
0063	D-1	溝状遺構	〃				長さ4.8m、幅1.25m
0064	B-3、4	溝状遺構	〃				長さ4.5m、幅0.4m
0065	B-5	昇降用道路遺構	〃		131		現存長3.5m
0066	E-3	炉	〃		124		径30cm

5表　第10次調査堀立柱建物、柵一覧

遺構名	地区	規模	桁行		梁行		方位	柱根状況				出土遺物	備考
			実長	柱間寸法	室長	柱間寸法		Pit数	深さ	長径	柱根径		
SB01	E-1 F-1	2 × 2＋α	250＋α	222	444	222 222	N15°W	5	40 ～ 60	48 ～ 78	20 ～ 25	Pit486外面に叩き目のある甕(023)	平安
SB02	E-1 F-1	2 × 2＋α	220＋α	220	435	225 210	N14°W	5	56 ～ 80	60 ～ 75	20 ～ 25	(024)	平安
SB03	E-1、2	2＋α × 3＋α	645＋α	225 210 210	210＋α	210	N23°W	5	25 ～ 45	38 ～ 55	15 ～ 25	Pit82土師器甕破片2点 Pit77土師器甕、皿破片	奈良～平安
SB04	F-5、6	2 × 3	560	190 190 180	363	155 208	N37°W	10	12 ～ 50	28 ～ 40		Pit23土師器皿、須恵器片 96土師器甕 98龍泉青磁椀 (025) 91土師器小片 106土師器高台付椀	室町～戦国
SB05	F-5、6 G-6	2 × 3	609	203 203 203	400	180 220	N66°E	10	25 ～ 62	55 ～ 90		Pit494土師皿、1片 100土師片 93土師器片 268土師、須恵片 266土師片 263土師皿片1片 258土師、近世磁器 461ナシ	江戸
SB06	F-4、5 G-5	2 × 3	793	267 266 260	424	200 224	N23°W	10	24 ～ 60	40 ～ 94	20 ～ 30	0032 0033 Pit292土師片 293土師片 113土師片、須恵片 (034、035) 485土師片 498土師片 0032(029～032) 0033(033)	平安
SB07	F-4、5 G-4、5	2 × 3	630	210 210 210	360	180 180	N75°E	9	22 ～ 50	40 ～ 94	18 ～ 32	Pit122土師片 139土師、須恵片 294須恵片1点 291土師片 467ナシ 283土師片	奈良～平安

遺構名	地区	規模	桁行		染行		方位	柱根状況				出土遺物	備考
			実長	柱間寸法	室長	柱間寸法		Pit数	深さ	長径	柱根径		
SB08	G-4、5	2 × 2	355	195 160	348	188 160	N 4 °W	8	12 〜 48	30 〜 56	12 〜 16	Pit469土師片　537ナシ 287土師片 468ナシ 279土師片 281土師片	奈良〜平安
SB09	G-5 H-5	2 × 4	573	220 190 185 168	380	200 180	N13.5°W	17	20 〜 38	30 〜 50	15	Pit284土師器片　273土師甕片タタキ有 413土師皿片　274土師皿片 411土師皿片 407須恵、土師片 404	片面廂 平安
SB10	G-4	2 × 3	705	235 235 235	420	210 210	N8.5°W	10	20 〜 58	33 〜 73		Pit514土師片　303土師カマド片 418鉄滓　421土師片 416土師片 415土師片 285〃	奈良〜平安
SB11	G-2 H-3	2 × 4	880	210 195 225 250	420	200 220	N 6 °W	12	26 〜 70	35 〜 58	18	Pit460ナシ　328土師皿小片 462ナシ 463ナシ 354須恵小片 430須恵小片	奈良〜平安
SB12	F-2、3 G-2、3	2 × 3	620	210 210 200	450	210 240	N 8 °W	10	46 〜 64	52 〜 94	25	Pit464須恵坏、土師甕片　366土師甕片 471土師小片　361〃 451ナシ　348土師甕片、須恵坏蓋片 216土師小片　331ナシ	奈良〜平安
SB13	G-2	2 × 3	588	200 178 210	310	150 160	N90°E	10	16 〜 50	38 〜 60	15	Pit476ナシ　504土師甕片 370土師小片 373ナシ 382須恵皿片 376ナシ	奈良〜平安
SB14	H-2	2 × 2	414	212 202	380	190 190	N17°W	9	15 〜 45	26 〜 54		Pit432土師小片 436〃 431ナシ	総柱 奈良〜平安
SB15	G-1	2 × 2＋α	155＋α	155	440	220 220	N 2 °W	4	49 〜 58	40 〜 78	18 〜 20	Pit392土師皿片、ヘラ切離し 391〃〃 389土師小片	奈良〜平安
SB16	F-1、2	2 × 5	1095	200 215 220 200 260	474	240 234	N23°W	26	30 〜 55	45 〜 68	12	Pit242土師、須恵片　252ナシ 239〃　251須恵甕片・土師片 227土師片　246土師、須恵片 218土師器片　238〃　212須恵 215土師、須恵片　225〃　土師片 214須恵、土師片　224ナシ222土師器片	奈良〜平安
SB17	E-1、3 F-2、3	2 × 4	1050	310 250 230 260	410	200 210	N15.5°W	12	38 〜 78	45 〜 68	18 〜 24	Pit76土師甕片　211須恵、土師片やや多い 72土師、須恵片やや多い　219須恵器杯蓋 71〃　224土師甕片 61土師皿(ヘラ切離し)等　449〃 58土師、須恵片やや多い　236土師椀片 204土師甕、羽口片	奈良〜平安
SB18	E-3 F-3	2 × 4	880	220 220 220 220	470	220 250	N72°E	12	64 〜 84	38 〜 72	25	Pit54須恵片小量　177土師器皿、甕等やや多し 206土師片　434ナシ 203土師皿片等　179土師、須恵片やや多し 200土師、須恵片等　185生焼須恵器甕 195〃　(026)	平安
SB19	G-4	2 × 5	1010	160 240 180 215 215	357	175 182	N12°W	14	10 〜 42	25 〜 55		Pit500土師小片　315土師小片 286土師器皿(ヘラ切離し) 298〃 306土師小片	奈良〜平安
SB20	E-2 F-3	2 × 2	456	240 216	460	240 220	N20°W	8	38 〜 60	36 〜 82	12 〜 18	Pit231須恵器甕片 491須恵器杯蓋、土師器片 63土師器甕片 453土師器片	奈良〜平安
SB21	E-3、4 F-3、4	2 × 4	720	170 210 180 160	400	175 225	N21°W	8	36 〜 68	30 〜 86	20 〜 22	Pit188土師、須恵器片　163土師小片 55土師器片 159土師甕、皿片 36土師器片	奈良〜平安
SB22	G-3、4 H-3	2 × 3	610	205 205 200	410	200 210	N 8 °W	10	15 〜 41	28 〜 48		Pit429土師杯片 512ナシ 513土師小片 320土師甕片 311土師坏片	奈良〜平安
SB23	G-3	2 × 2	610	280 230	470	240 230	N11°W	7	19 〜 33	43 〜 66	15	Pit475？	奈良〜平安
SB24	F-3、4 G-3、4	2 × 3	820	270 280 270	475	240 235	N14°W	10	30 〜 62	58 〜 95	18 〜 20	Pit474土師片　307土師、須恵片少量 330土師片　155土師甕出、須恵片 322土師甕、羽口片　501土師片 317須恵、土師片　337土師片 490土師坏片　518土師片	奈良〜平安

遺構名	地区	規模	桁行		染行		方位	柱根状況				出土遺物	備考
			実長	柱間寸法	室長	柱間寸法		Pit数	深さ	長径	柱根径		
SB25	F-4	2 × 3	620	140 270 210	410	200 210	N14.5°W	10	18 〜 62	28 〜 78	14	Pit150土師皿片、 甕把手少量 148土師、須恵片 347土師甕片 141土師、須恵片	奈良〜平安
SB26	E-3 F-3	2 × 4	940	250 260 200 230	440	220 220	N71°E	12	10 〜 48	34 〜 68		Pit52ナシ 190土師小片 192〃 193土師小片 44土師小片 38土師須恵片、 製塩土器片(?)少量 174土師小片 171土師小片(027) 340土師小片	平安
SB27	F-5	2 × 3	524	150 190 184	378	195 183	N11°W	10	22 〜 44	38 〜 58		Pit134土師小片少量 348土師甕、羽口片 115須恵小片 117土師小片	奈良〜平安
SB28	F-5	2 × 3	550	160 200 190	360	190 170	N14°W	10	22 〜 45	28 〜 62		Pit124土師甕片 532土師小片 126土師小片少量 109鉄滓 104〃 108土師器片	奈良〜平安
SB29	H-1、2	2 × 2	240	120 120	264	132 132	N17°W	9	18 〜 36	32 〜 53		Pit439土師甕片 433土師器片微量	総柱 奈良〜平安
SB30	H-2、3 G-2、3	2 × 5	1247	250 255 230 220 292	466	233 233	N15°W	13	20 〜 44	46 〜 68		Pit372土師片 226土師片 217土師片、縄文土器 196土師器、甕、皿片 336土師、須恵片 324土師片 358土師器高台木椀 369ナシ 374越州窯青磁 (028)	平安
SB31	G-5 H-5	2 × 3	493	166 155 178	358	200 158	N74°E	10	12 〜 52	28 〜 54	12 〜 14	Pit408鉄滓 482土師皿片 465土師甕片 276〃 466土師片	奈良〜平安
SB32	B-3 C-3	1 × 2	297	97 95 105	220	125 95	N 4 °W	7	65 〜 83	70 〜 102	20	Pit581土師小片微量 579土師小片 580〃 578〃	奈良〜平安
SA33	H-2	4	825	230 185 220 190			N73.5°E	5	10 〜 30	25 〜 50			奈良〜平安

図　　版

東入部遺跡群第3次調査35・36区調査風景

1　27区全景(上空から)

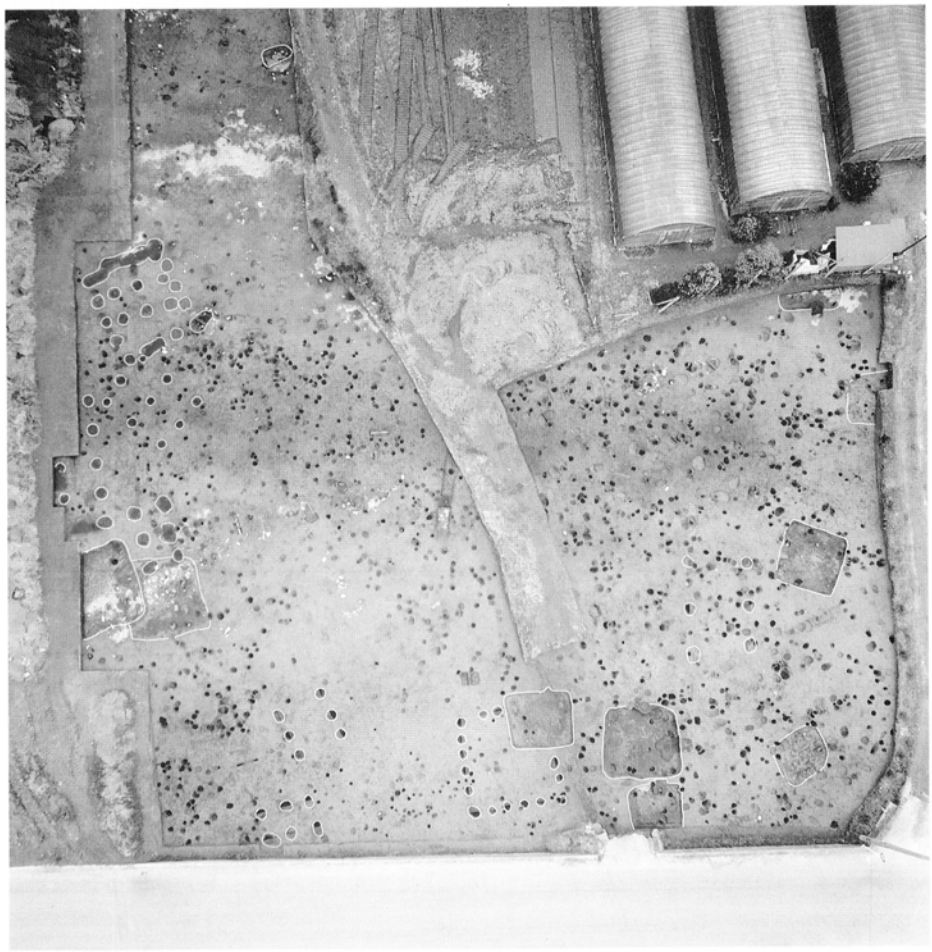
2　35・36区全景(南上空から)

図版 2

1　38区全景（南上空から）

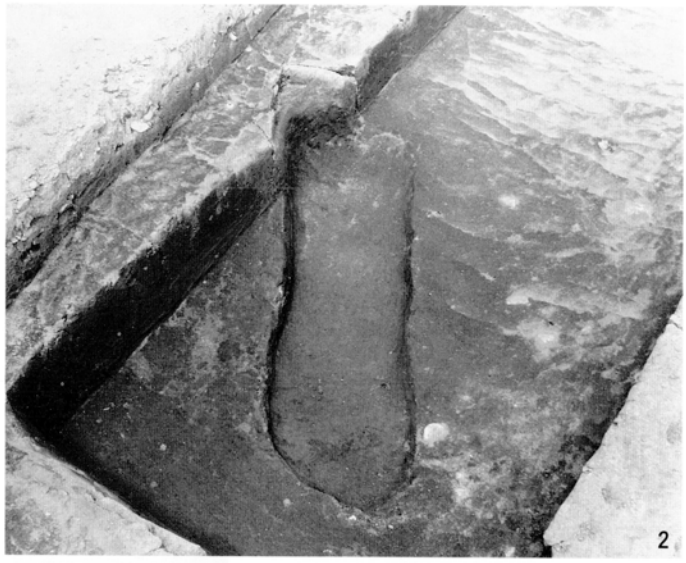
2　42区全景（北上空から）

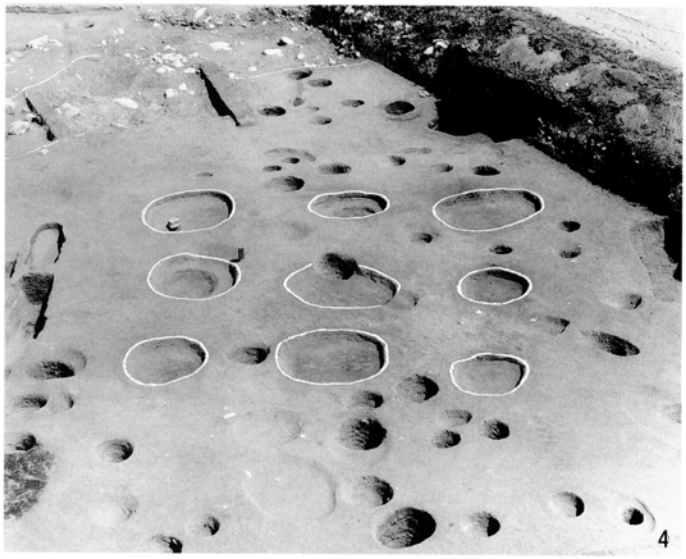
1　41区全景(北から)



2　41区掘立柱建物・
竪穴住居群(上空から)

図版 4

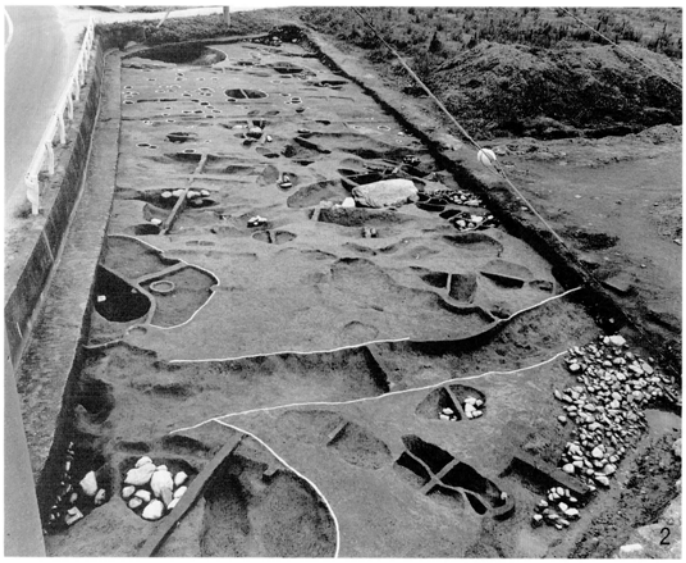




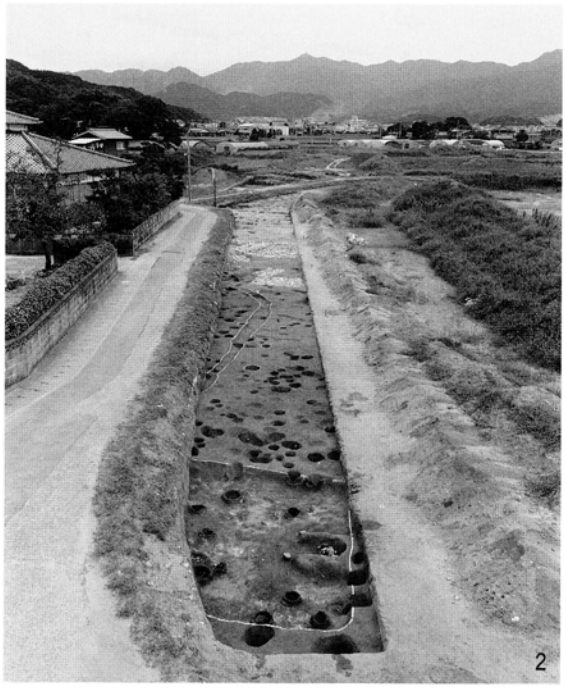
1　16区全景(西から)　2　16区0001土壙墓　3　17区全景(東から)
4　17区0380掘立柱建物　5　18区Ⅰ区全景(西から)　6　18区Ⅱ区全景(南から)

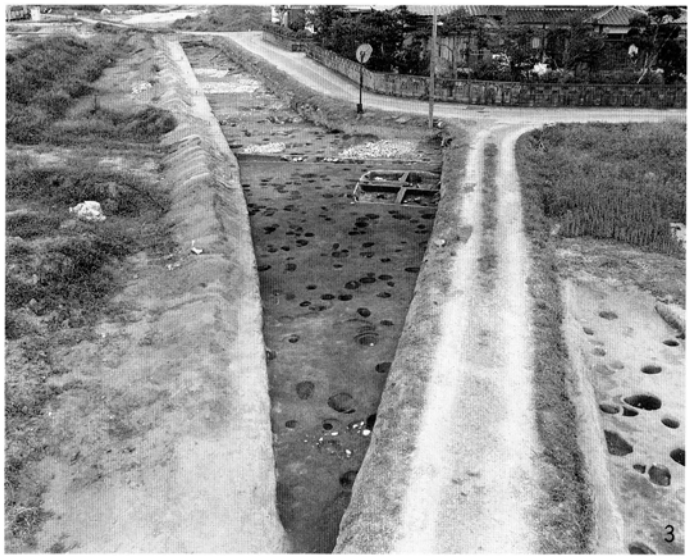
1　18区0010・0011掘立柱建物　2　18区0028掘立柱建物　3　0155・0171竪穴住居
4　18区0191竪穴住居　5　18区0027土坑　6　18区0017木棺墓

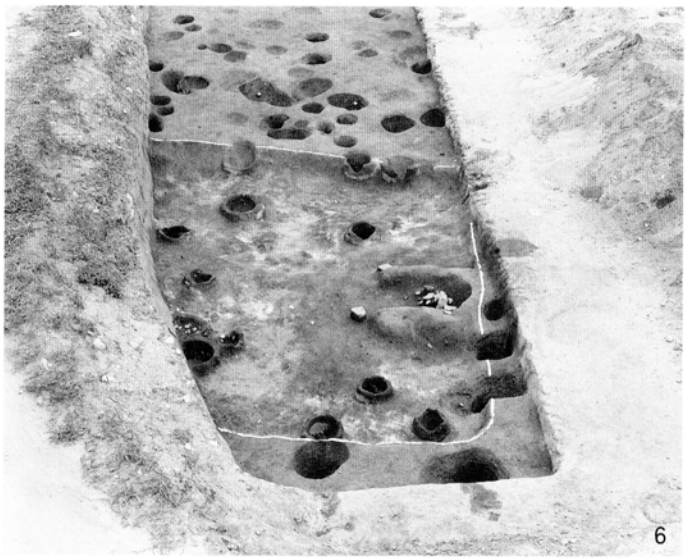
図版 6



1　19区全景(東から)　2　19区全景(西から)　3　19区0152甕棺墓
4　22区全景(南から)　5　23区全景(東から)　6　23区0450掘立柱建物

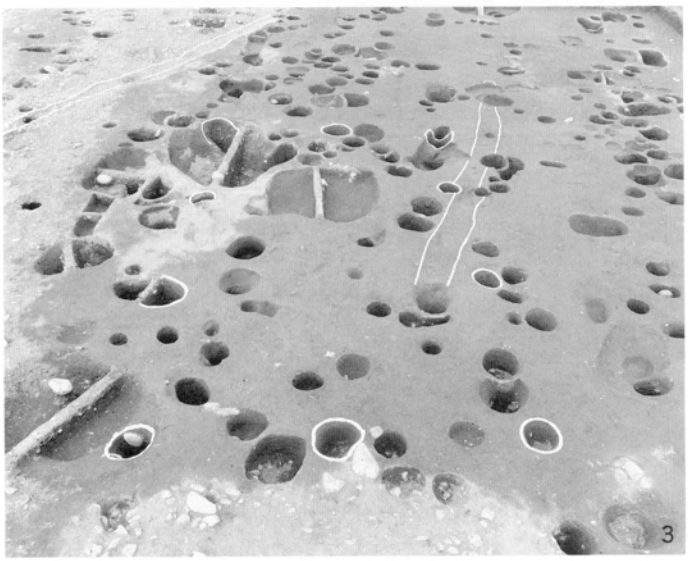




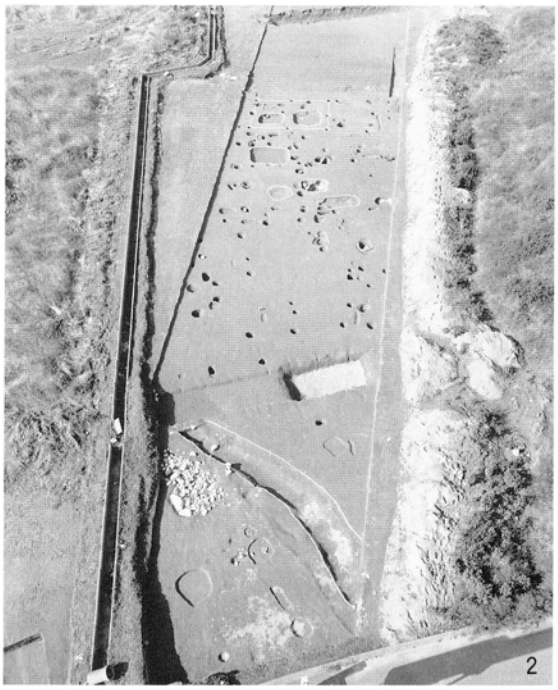


1　23区0449土壙墓　2　24区全景(北から)
3　24区全景(南から)　4　25区全景(西南から)
5　26区全景(南から)　6　24区0391竪穴住居

図版 8

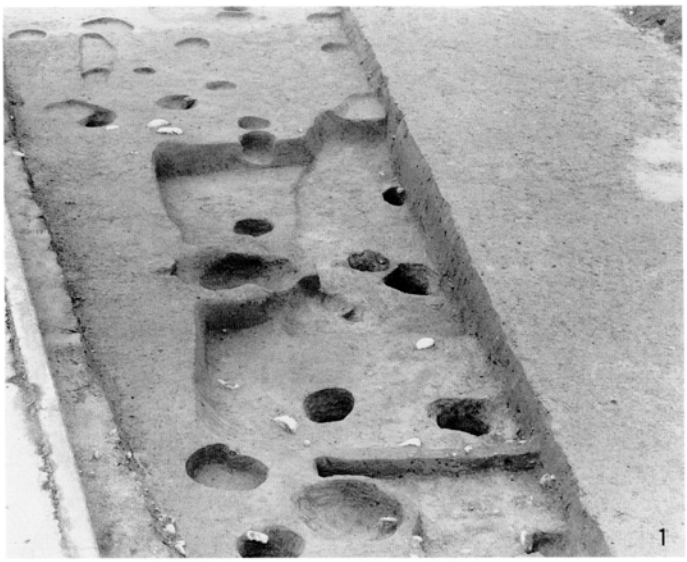


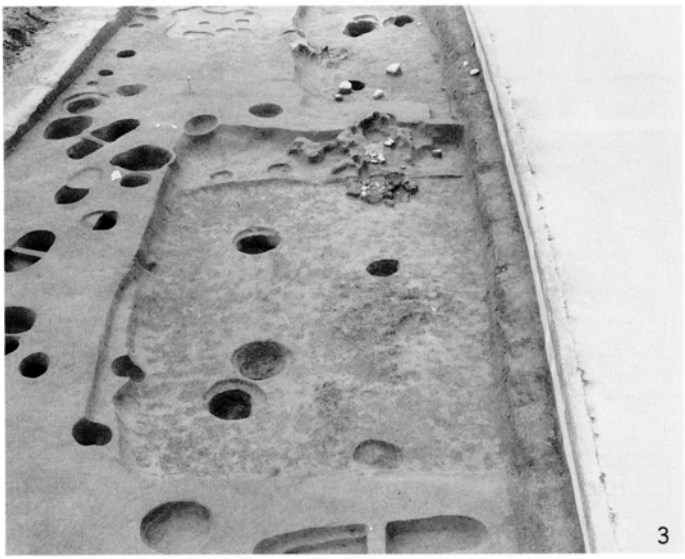
1　24区0405竪穴住居　2　26区0434・0435鍛冶炉周辺　3　27区0479掘立柱建物
4　27区0476・0477掘立柱建物　5　27区0839炉　6　28・29区全景(南から)

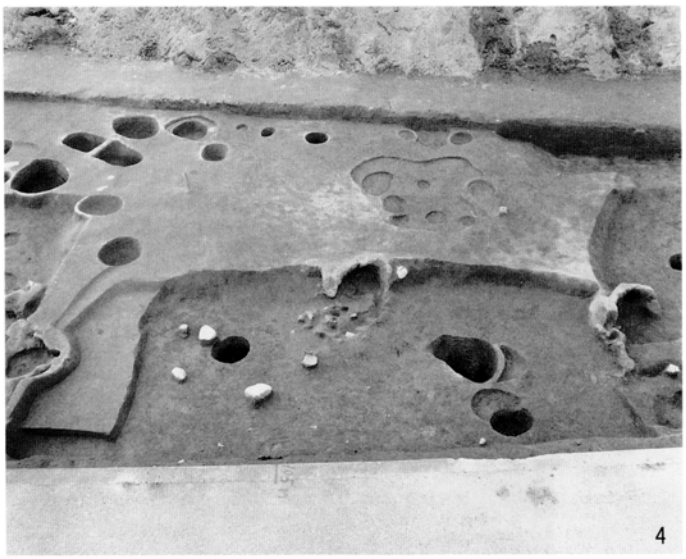


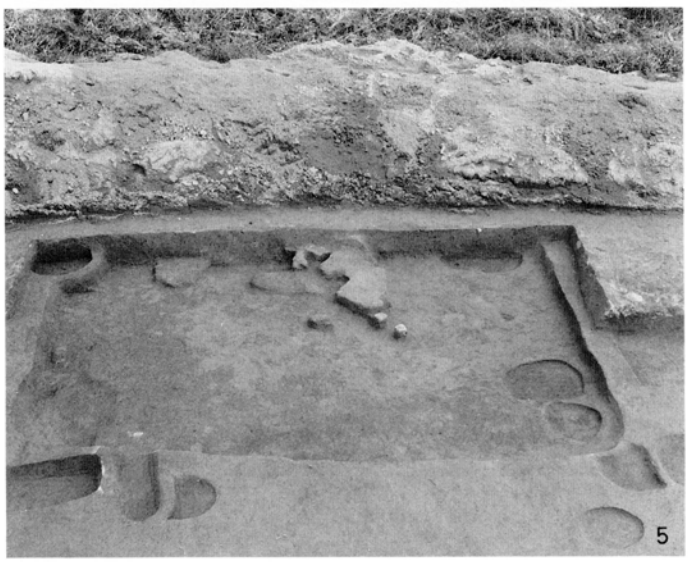
1　30区全景(東から)　2　31区全景(南から)　3　33区全景(南から)
4　31区0789掘立柱建物　5　33区0703竪穴住居　6　34区全景(北から)

図版10

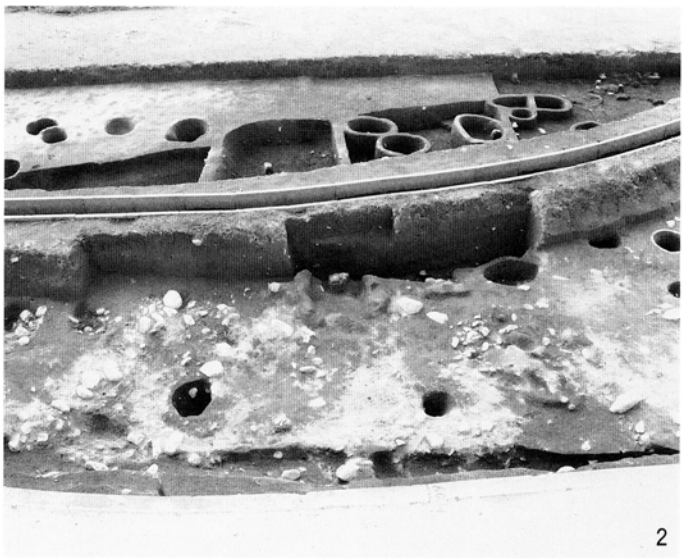


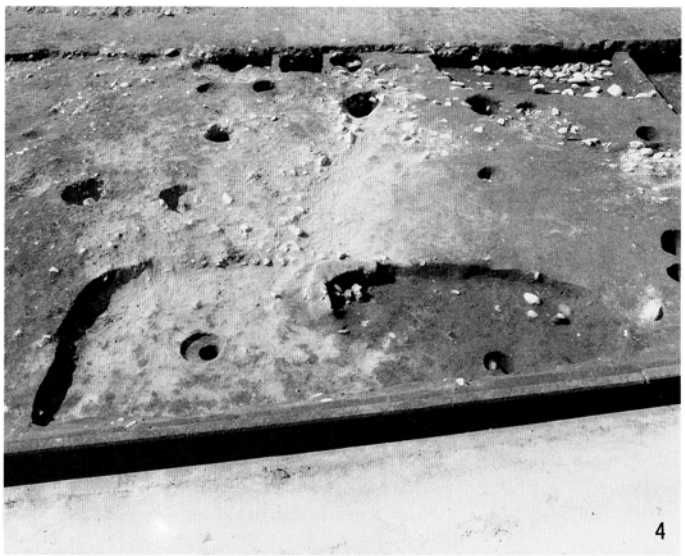


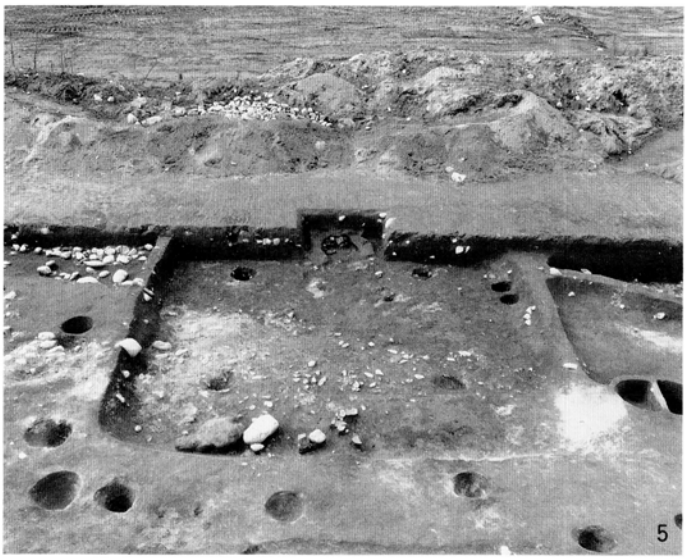


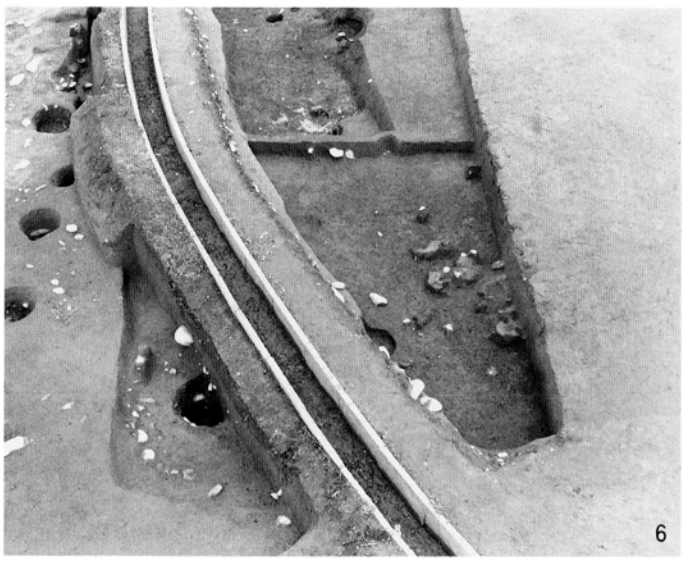


1　35区0802・0810竪穴住居　2　35区0803竪穴住居　3　35区0804竪穴住居
4　35区0805竪穴住居　5　35区0806竪穴住居　6　35区0807竪穴住居



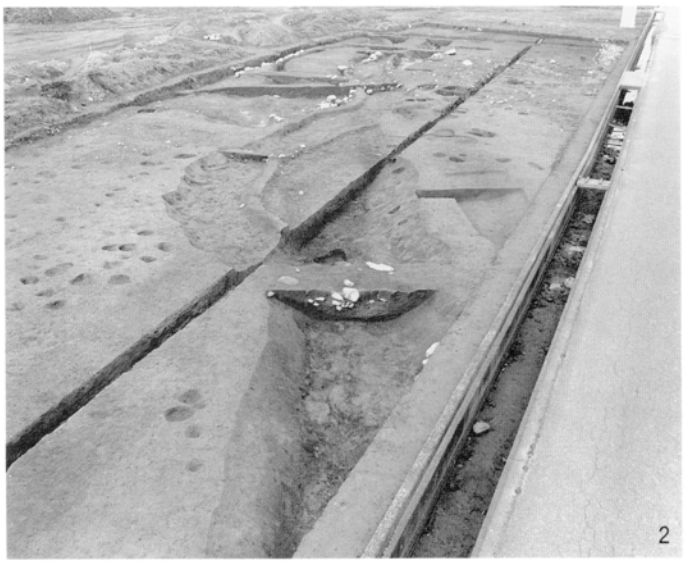


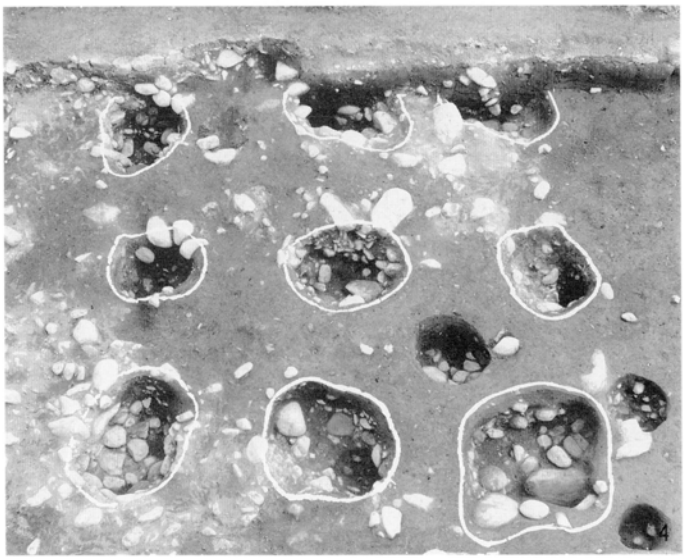


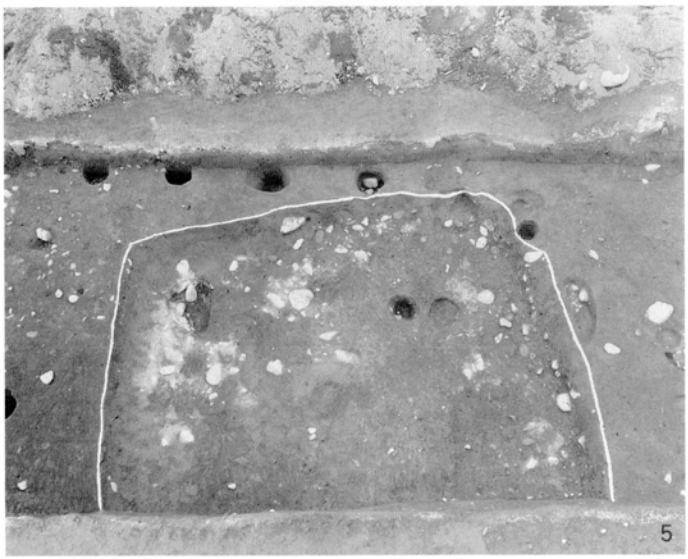


1　35区0808竪穴住居　2　35区0809竪穴住居　3　36区0811竪穴住居
4　36区0812竪穴住居　5　36区0813竪穴住居　6　35区0817竪穴住居

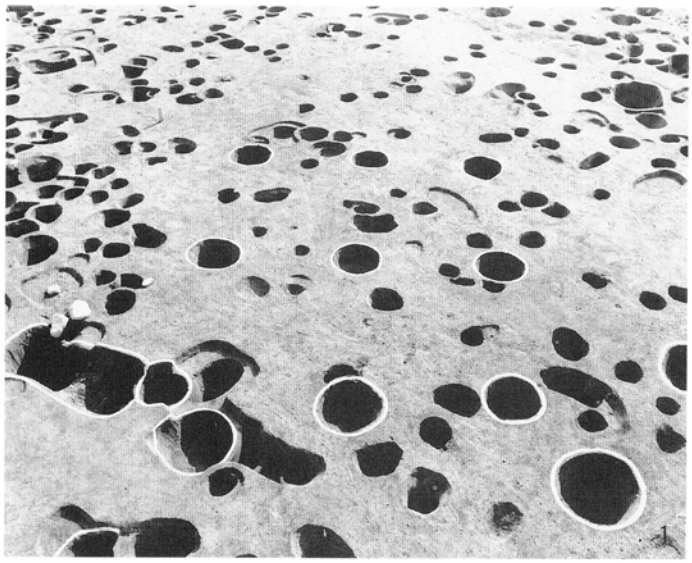
図版12

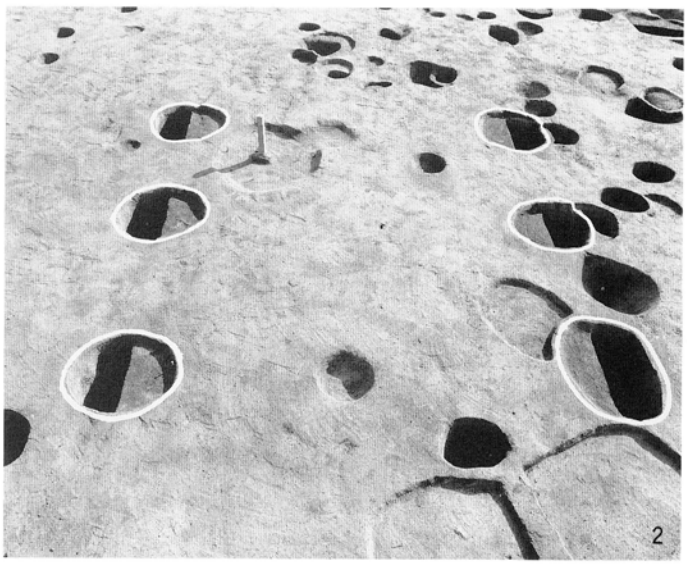


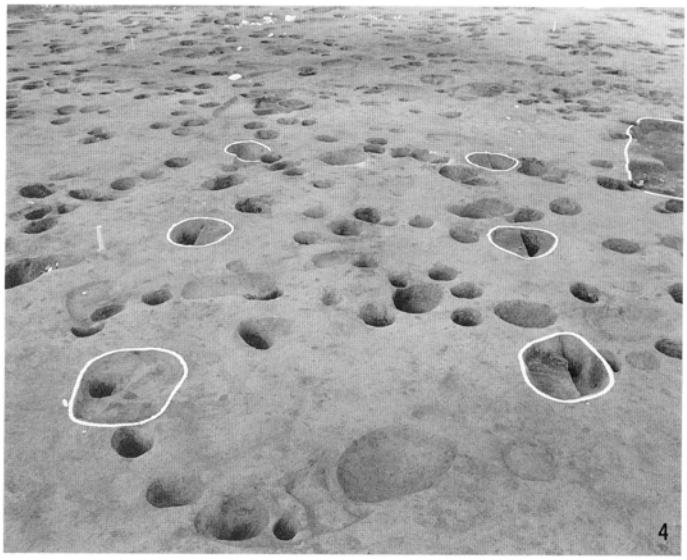


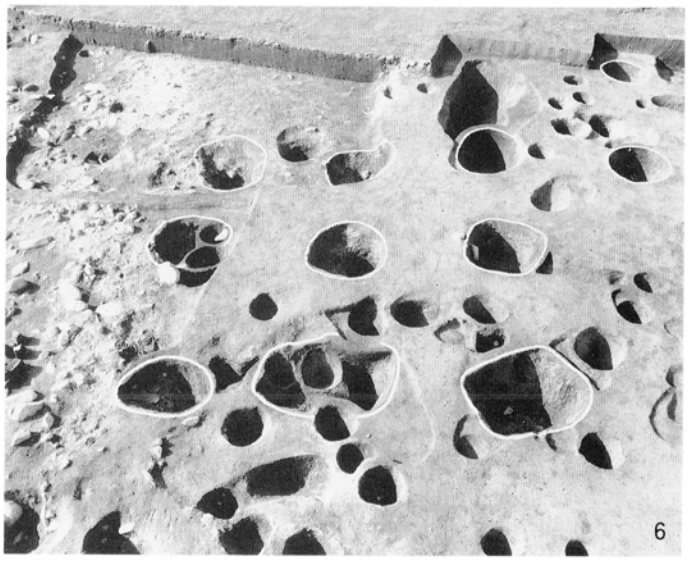


1　36区0818竪穴住居　2　38区0901・0905溝　3　39区全景(南から)
4　39区1015掘立柱建物　5　39区0902竪穴住居　6　40区全景(東から)



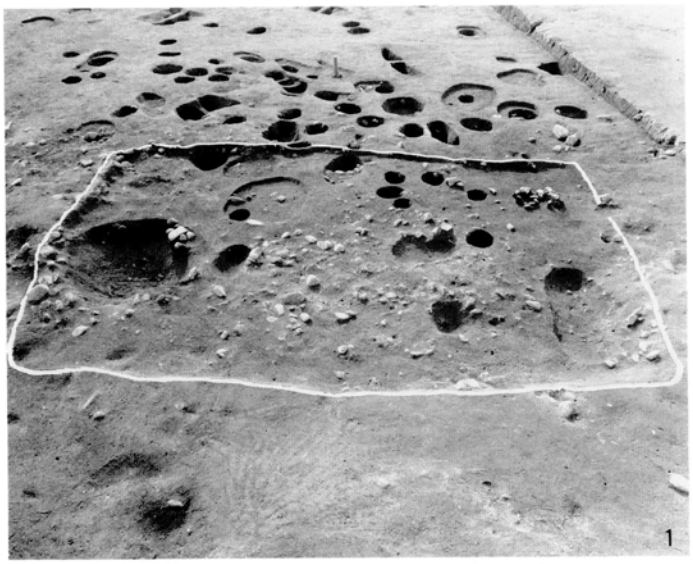


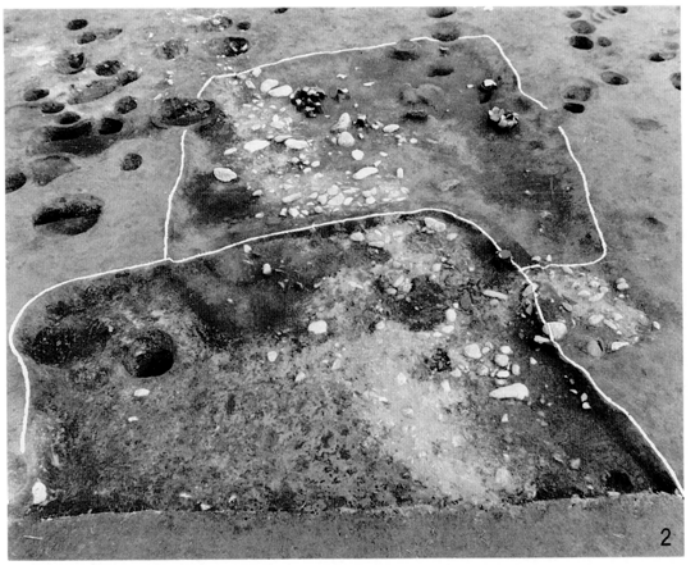


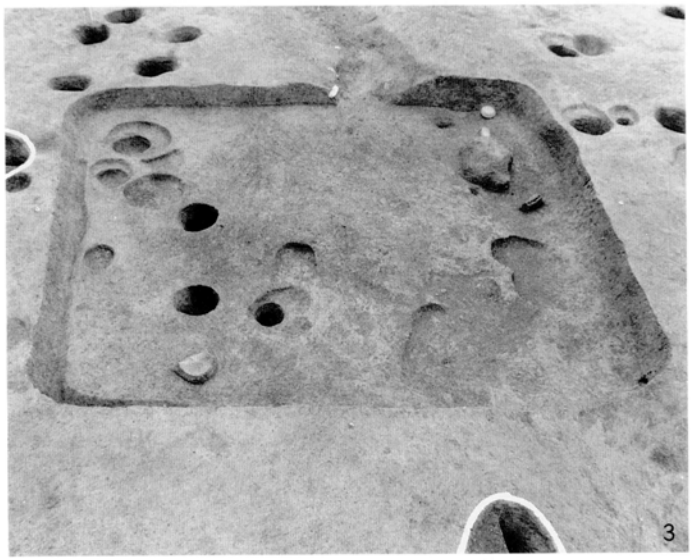


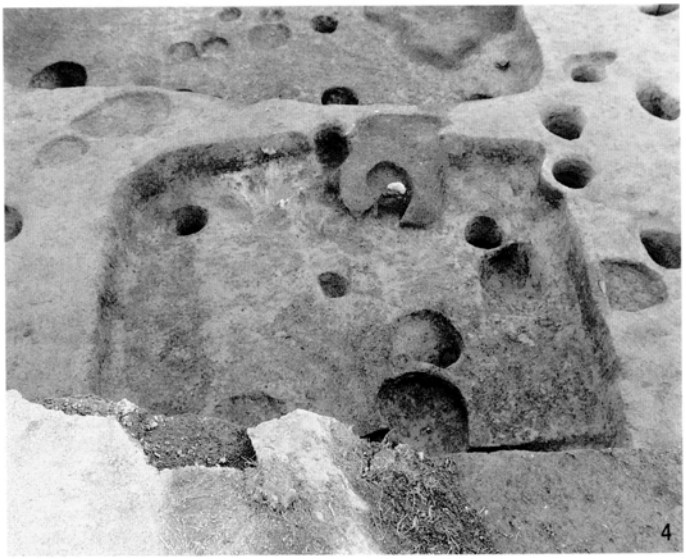
1　41区1033掘立柱建物　2　41区1034掘立柱建物　3　41区1035掘立柱建物
4　41区1037掘立柱建物　5　41区1038掘立柱建物　6　41区1040掘立柱建物

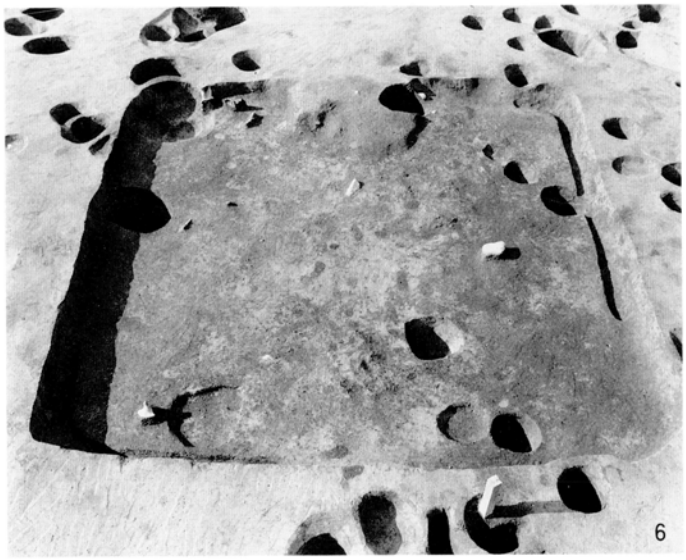
図版14



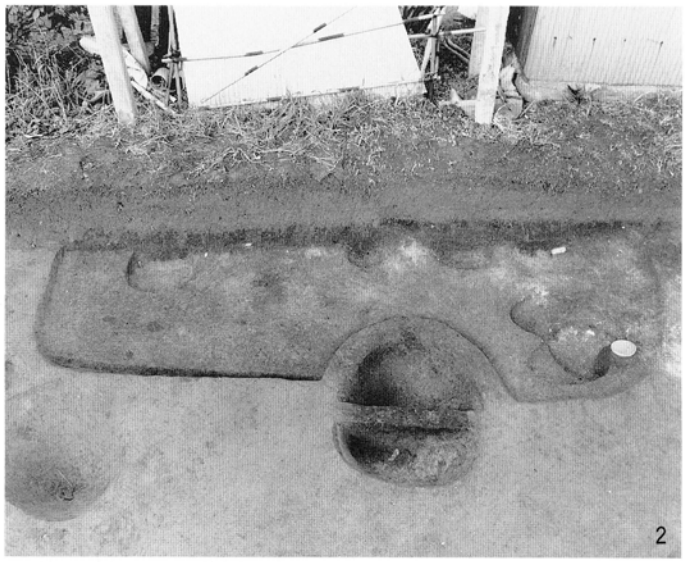








1　41区1022竪穴住居　2　41区1024・1041竪穴住居　3　41区1025竪穴住居
4　41区1027竪穴住居　5　41区1028竪穴住居　6　1030竪穴住居

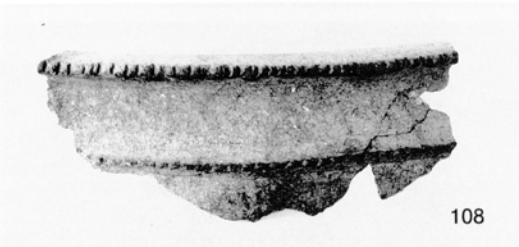


1　41区1042竪穴住居　2　41区1043竪穴住居　3　41区1021土壙墓
4　41区縄文時代包含層　5　42区古河川　6　42区1510土坑

001

009

099


108

132

133

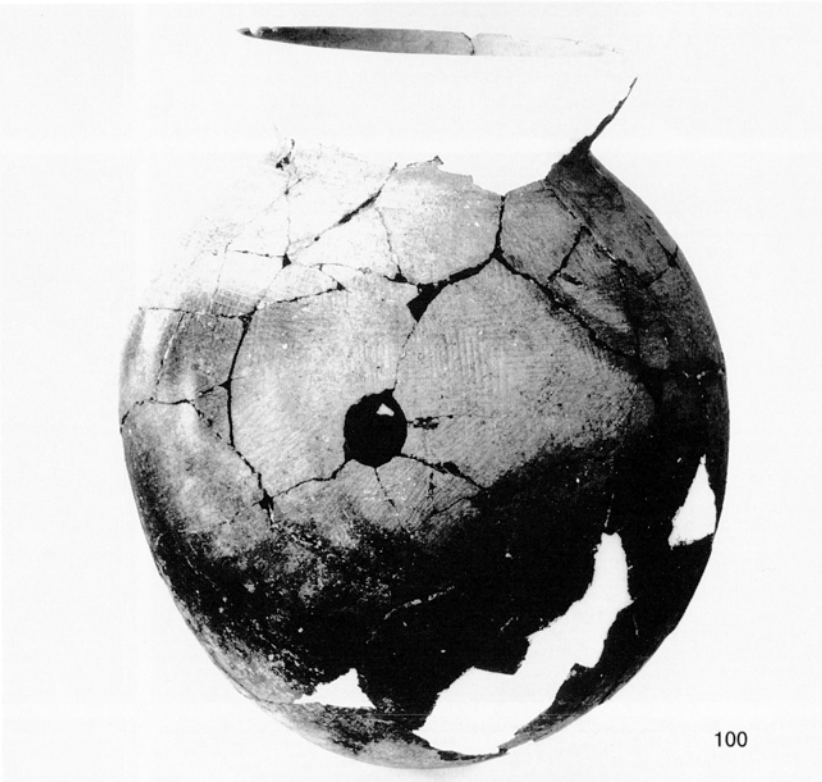
134

135

139

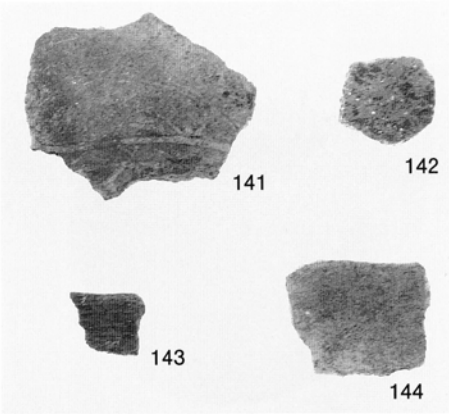
140

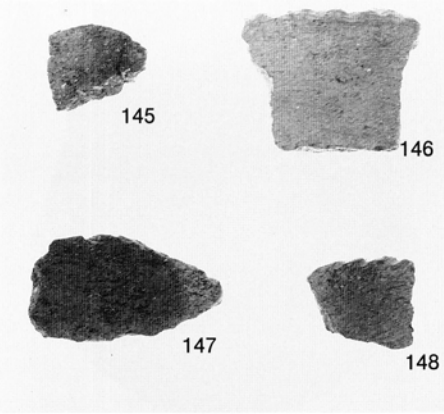
008

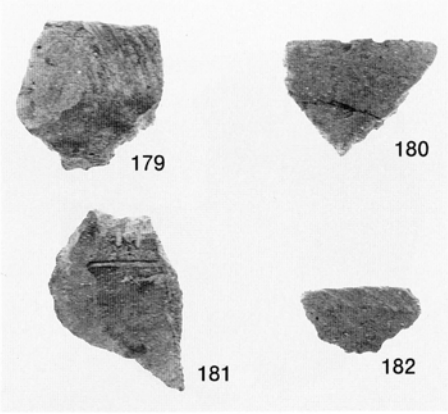

100

119

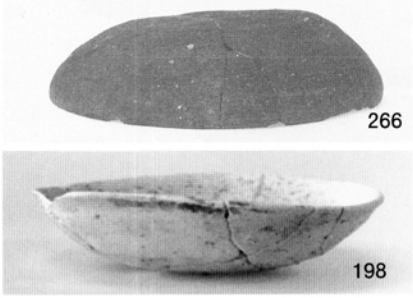
第３次調査出土遺物１

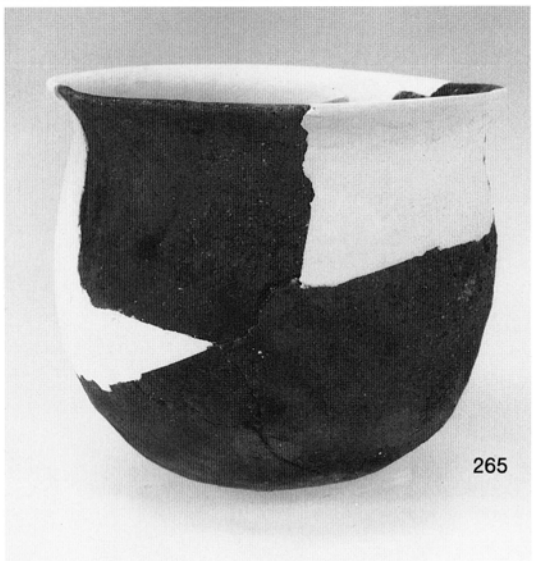

141
142
143
144


145
146
147
148

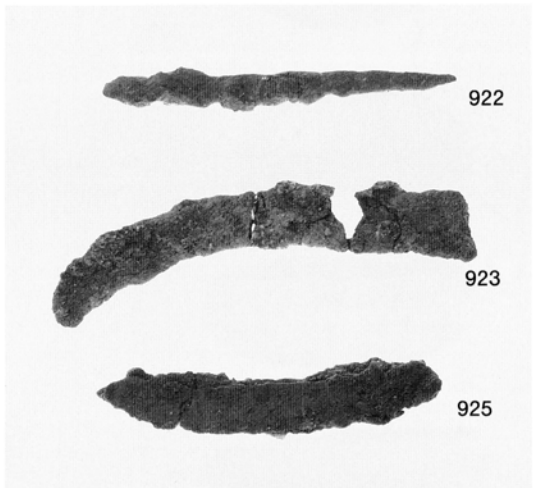

179
180
181
182

196


266
198


265

178


922
923
925

284

286

287

第３次調査出土遺物２

291

290

292

295

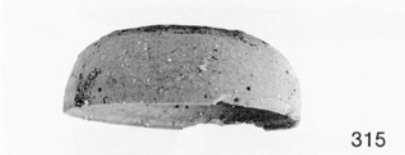
296

299

303

304

314


315

324

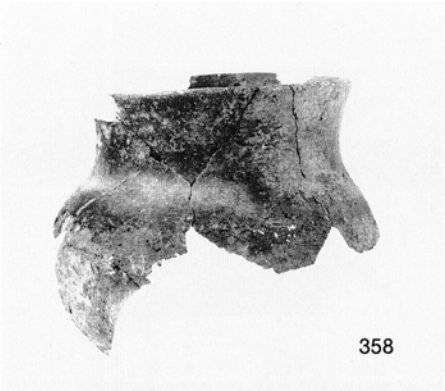
331

333

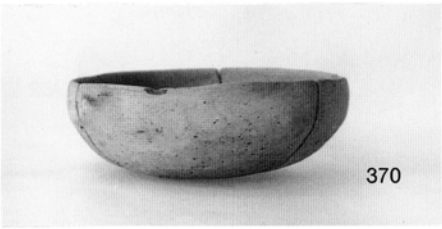
353

第3次調査出土遺物3

354


358

361

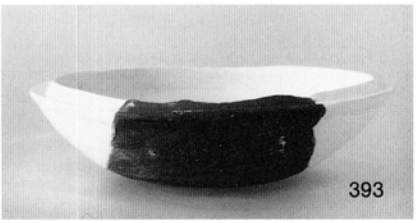

370

367

387

375

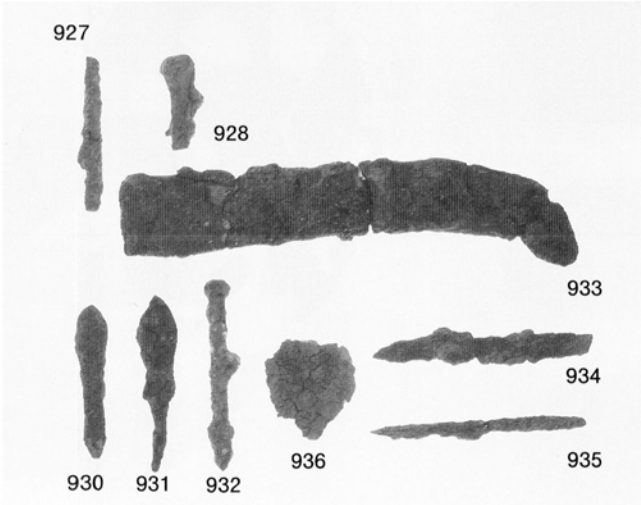
391


393

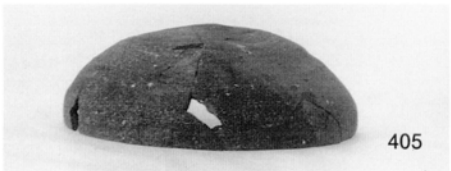
394

713

320


927
928
933
934
935
936
930
931
932

第３次調査出土遺物４


405

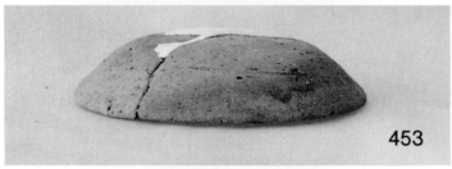
406

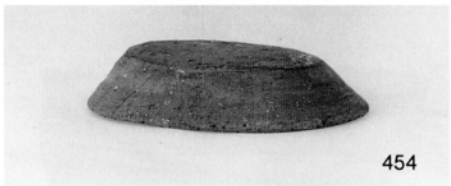
407

427

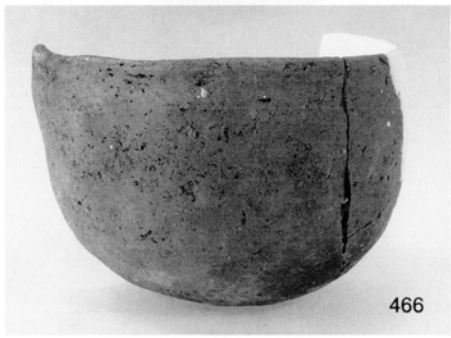
428

449


453

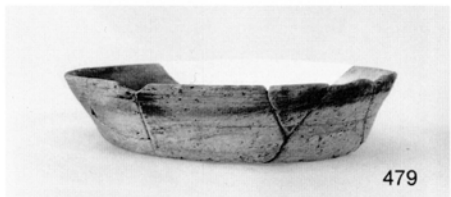

454

462


466

477

478

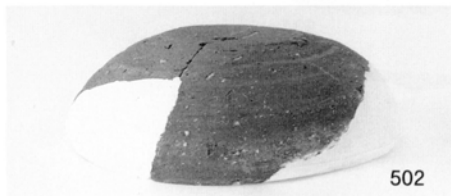

479

482

469

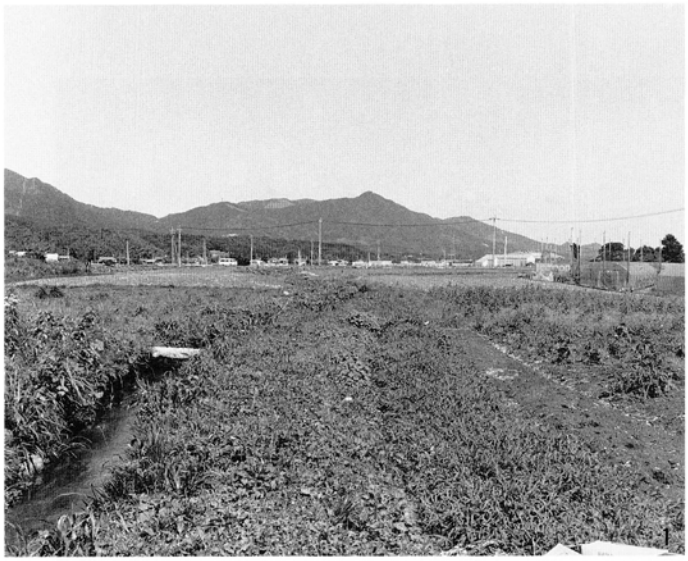
487

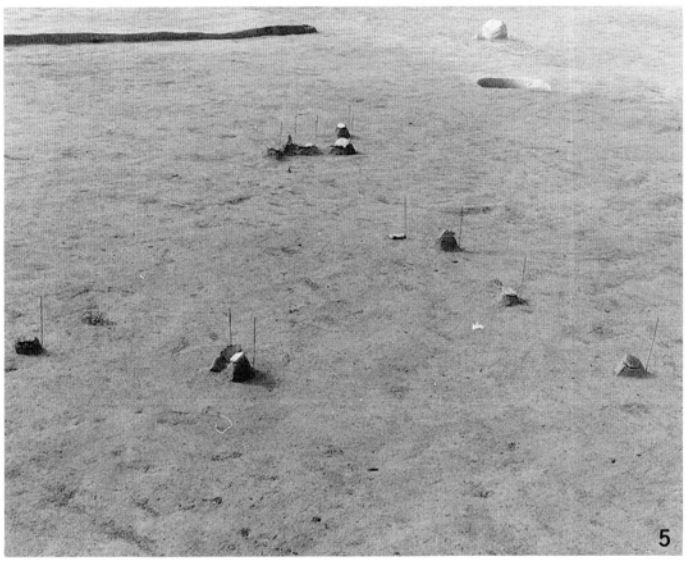
501

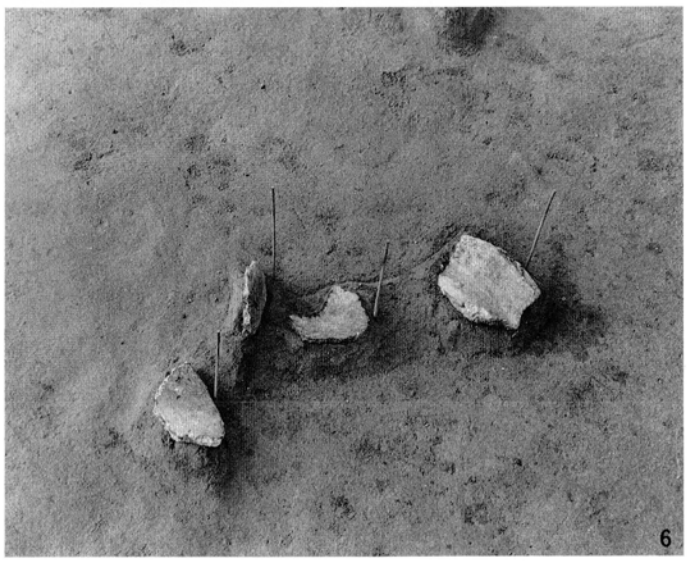

502

495

第３次調査出土遺物５



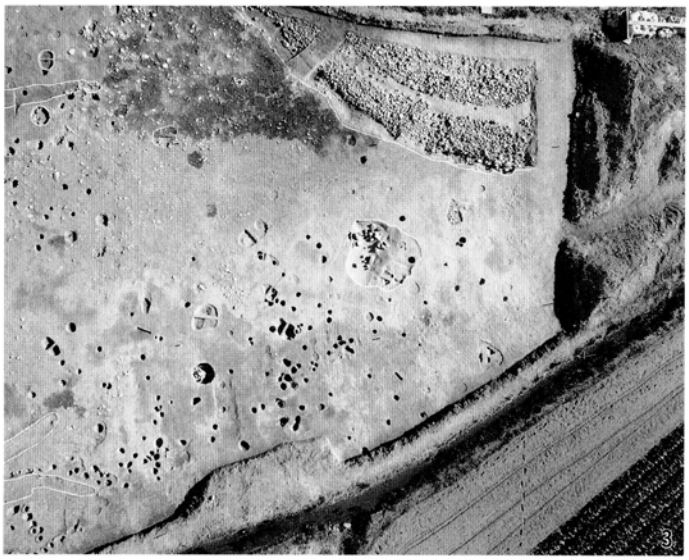


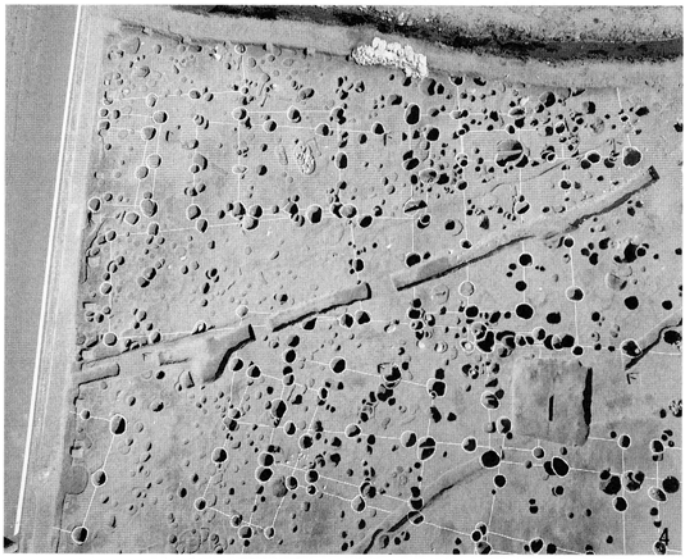


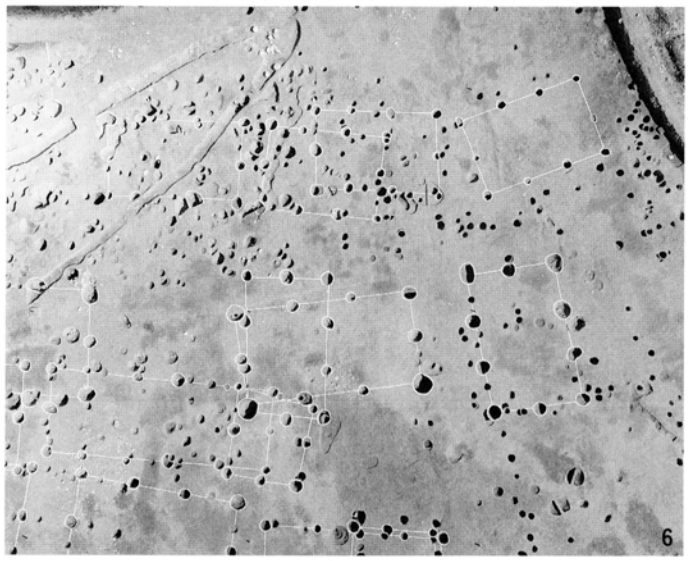
1　調査区調査前風景全景(南東から)　　2　調査区調査前風景全景(北西から)
3　調査区詳細分布調査風景　トレンチ1(西から)　　4　調査区詳細分布調査遺構検出状況　トレンチ4(南から)
5　縄文土器検出状況(東から)　　6　縄文土器検出状況(東から)

1　Ⅰ区全景(上空から)

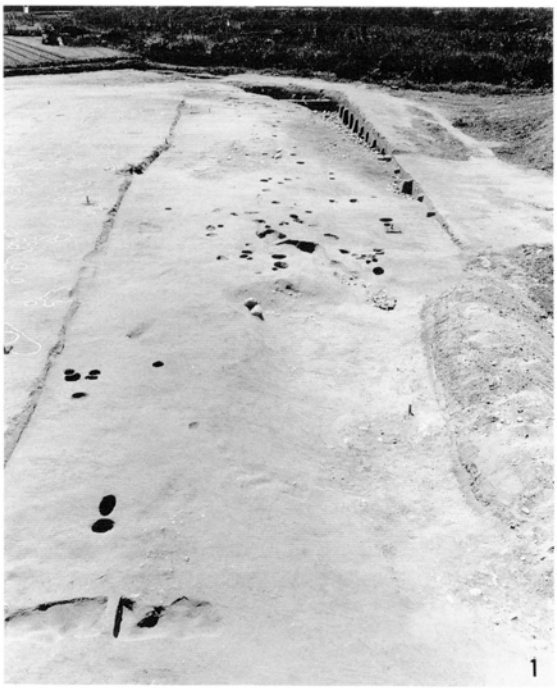
2　Ⅱ・Ⅲ全景(上空から)

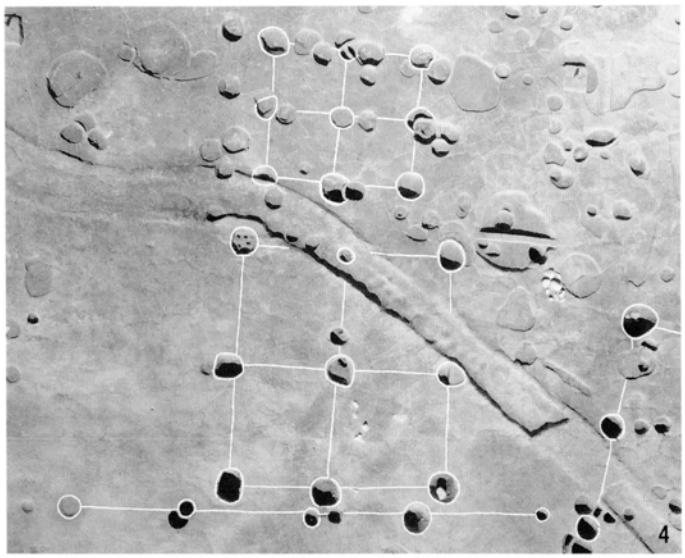


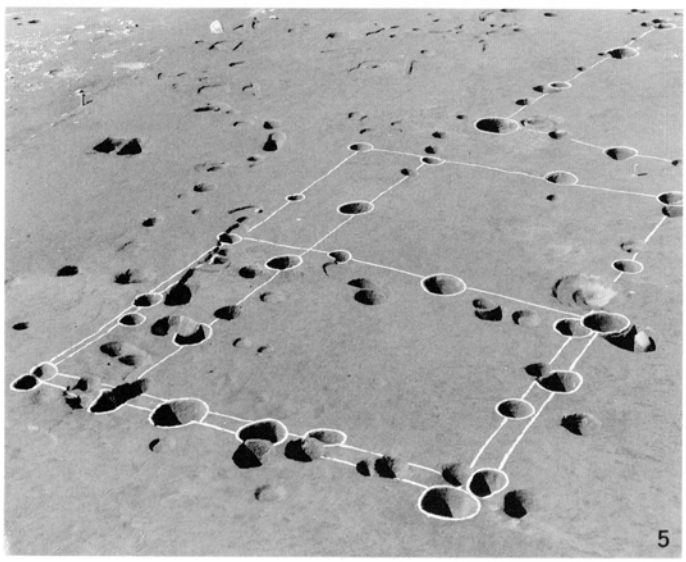


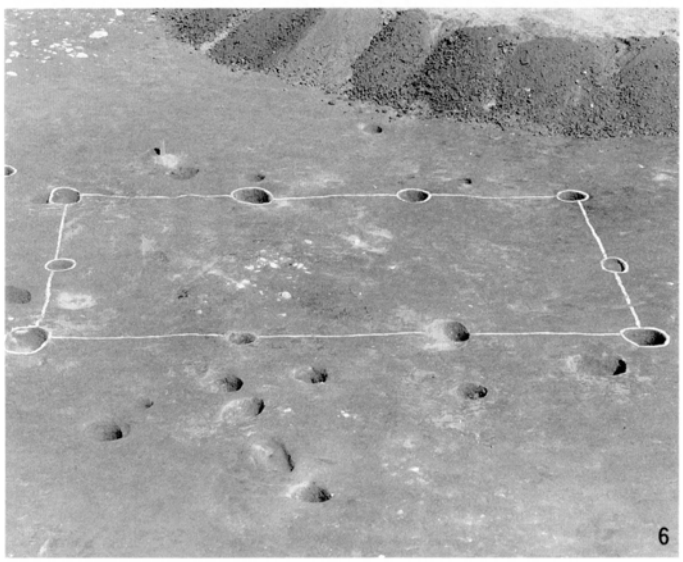


1　Ⅰ区北東部(上空から)　2　Ⅰ区中央部(上空から)　3　Ⅰ区南部(上空から)
4　Ⅱ区北東部(上空から)　5　Ⅱ区中央部(上空から)　6　Ⅱ区南部(上空から)

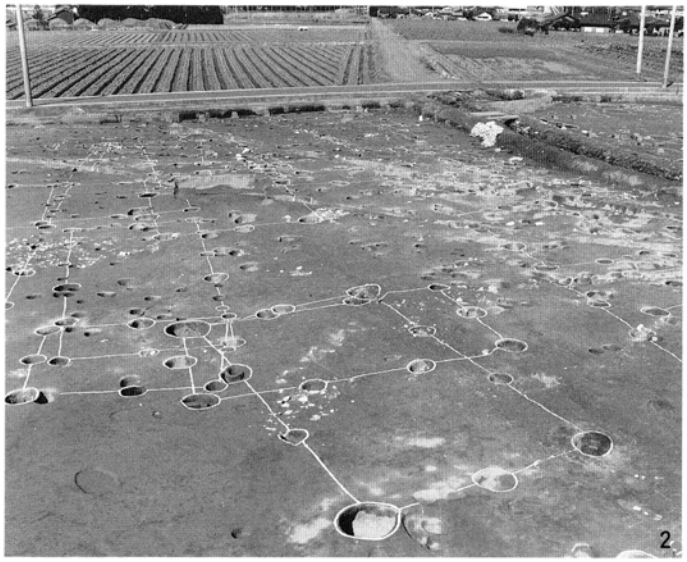


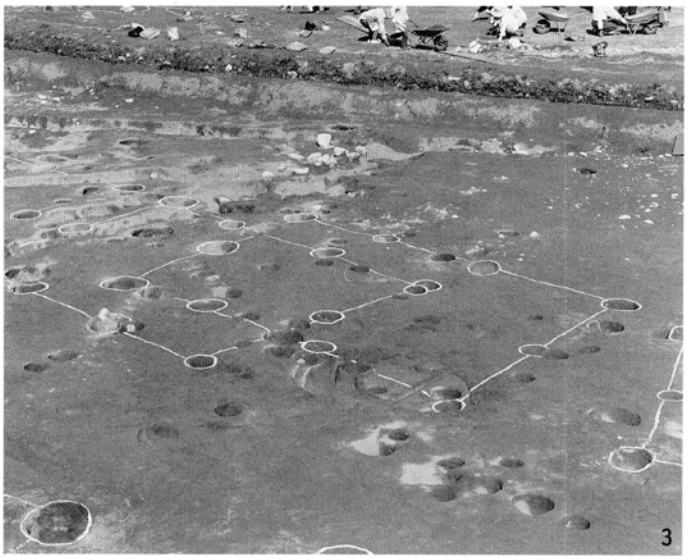


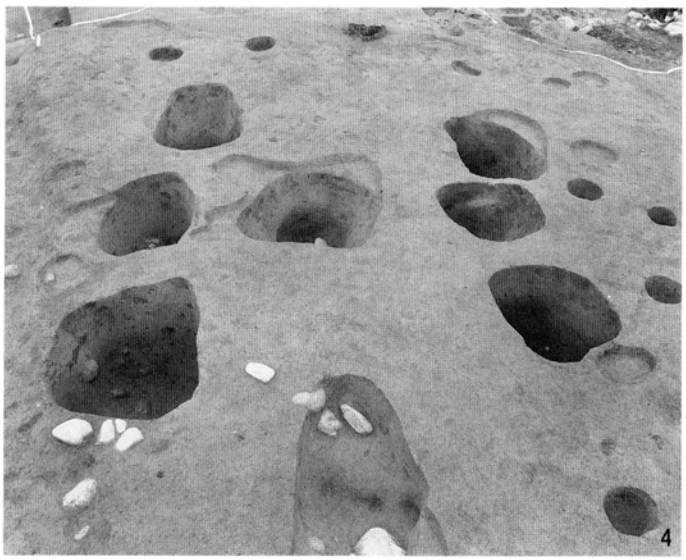


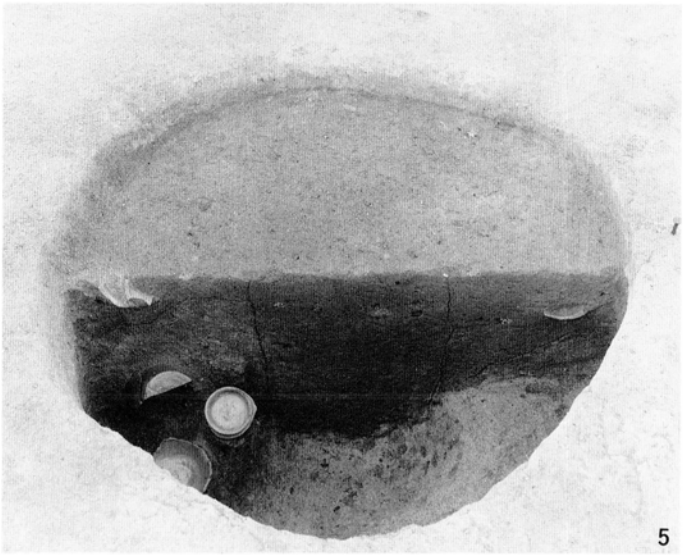


1　Ⅲ区全景(北から)　　2　Ⅲ区全景(南から)　　3　掘立柱建物SB01、02(西から)
4　掘立柱建物SB14、29、SA33(上空から)　　5　掘立柱建物SB09、31(南東から)
6　掘立柱建物SB04(西から)



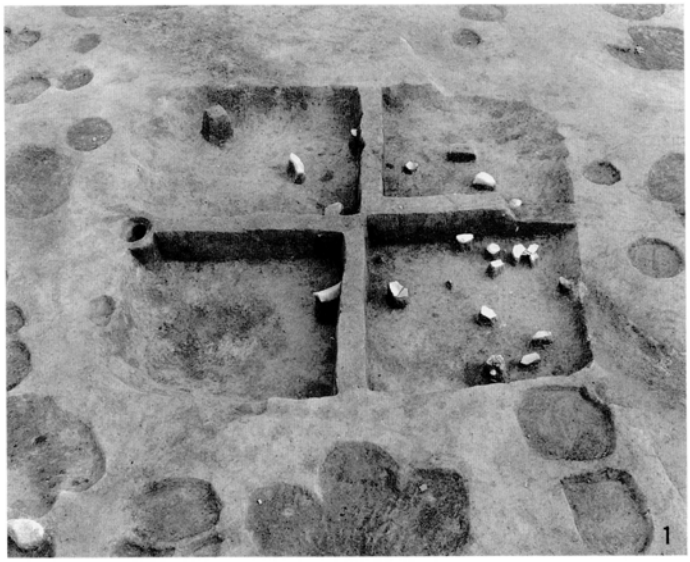


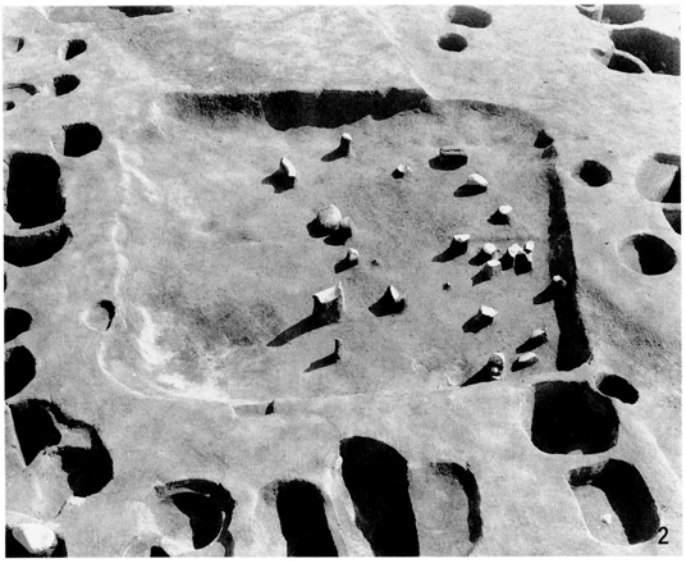




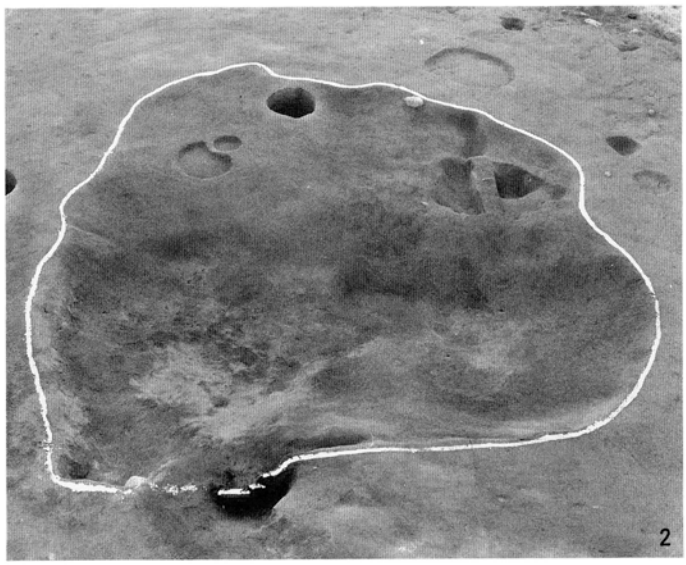
1　Ⅱ区　西側掘立柱建物群(南東から)　　2　Ⅱ区　北東側掘立柱建物群(南から)
3　Ⅱ区　東側掘立柱建物群(南西から)　　4　掘立柱建物SB35(南から)
5　掘立柱建物SB06柱穴0032(南から)　　6　掘立柱建物SB06柱穴0033(東から)

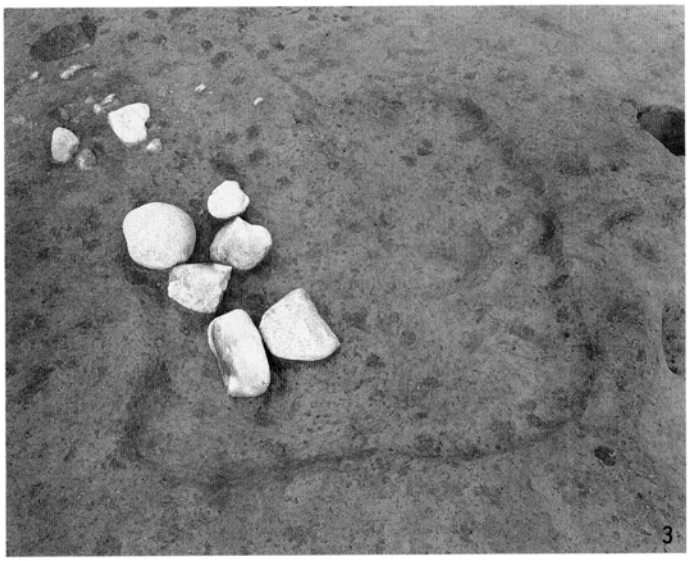
図版26

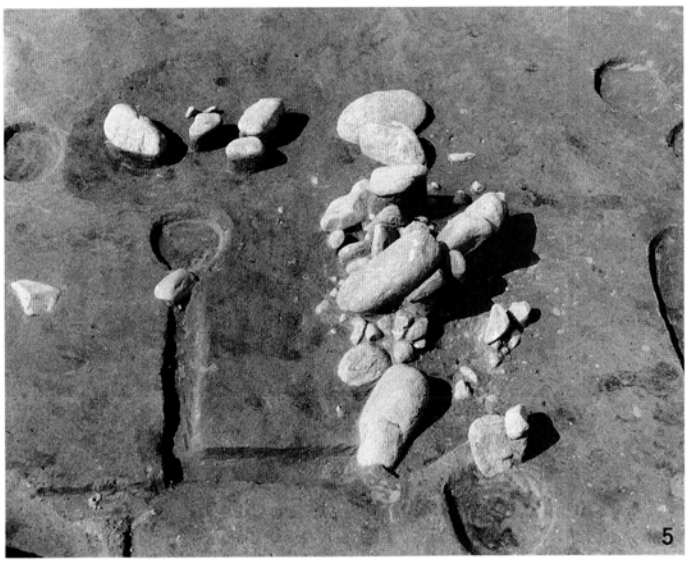




1　竪穴住居0015(北から)　　2　竪穴住居0015完掘後(北から)　　3　土坑0024(南から)
4　土坑0026(南から)　　5　土器廃棄遺構0029(南から)

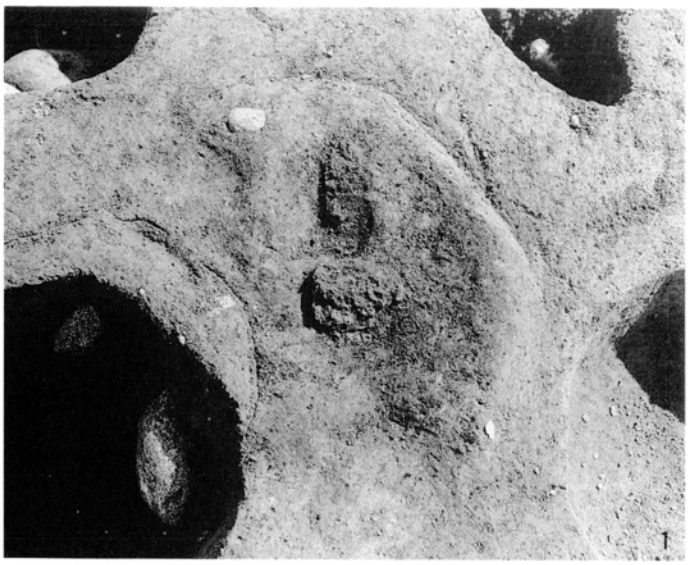




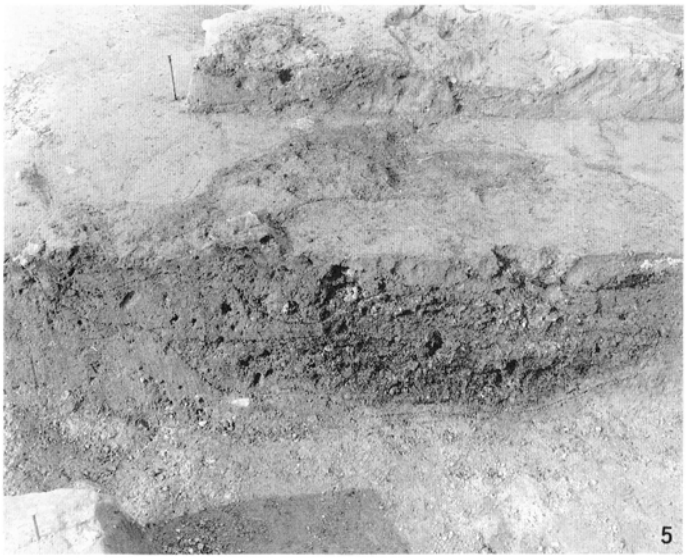


1　集石遺構0039(西から)　　2　集石遺構0039完掘後(北から)　　3　集石遺構0058(南から)
4　集石遺構0058礫出土状況(西から)　　5　集石遺構0010(東から)　　6　焼土坑0056(北から)

図版28



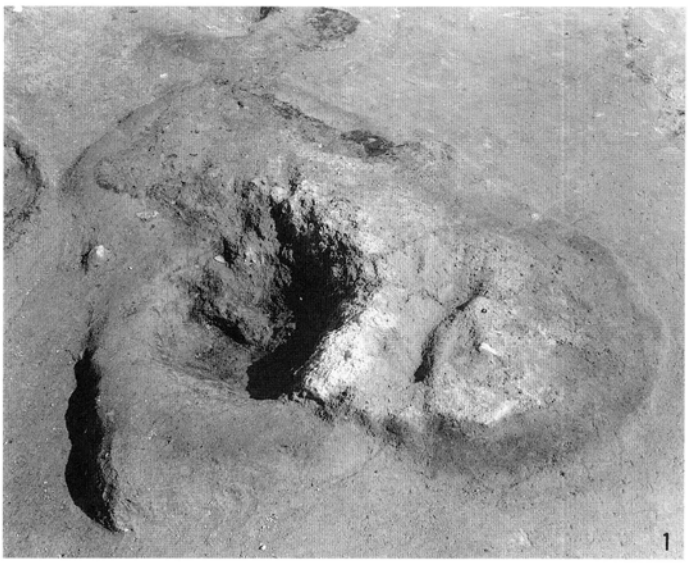
1　鍛冶炉0018(西から)　　2　鍛冶炉0019(西から)　　3　鍛冶炉群0034全景(北から)
4　鍛冶炉0034－3断面(南東から)　　5　廃滓坑0034－4断面(南から)　　6　鍛冶炉0034－5断面(南から)

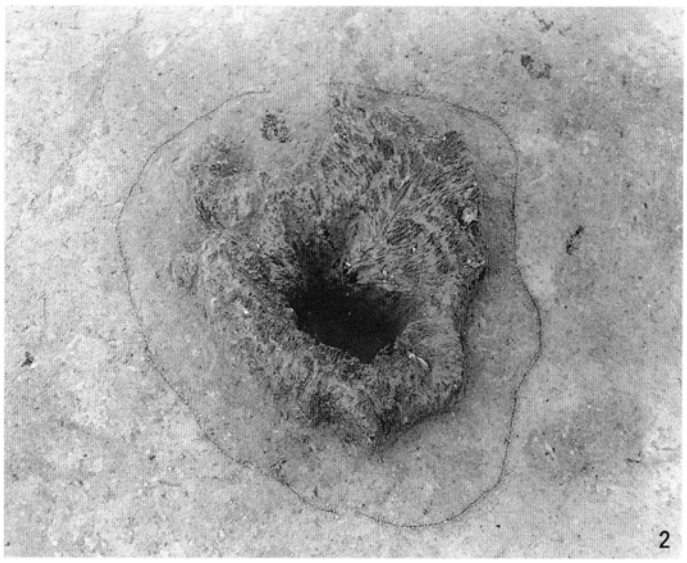


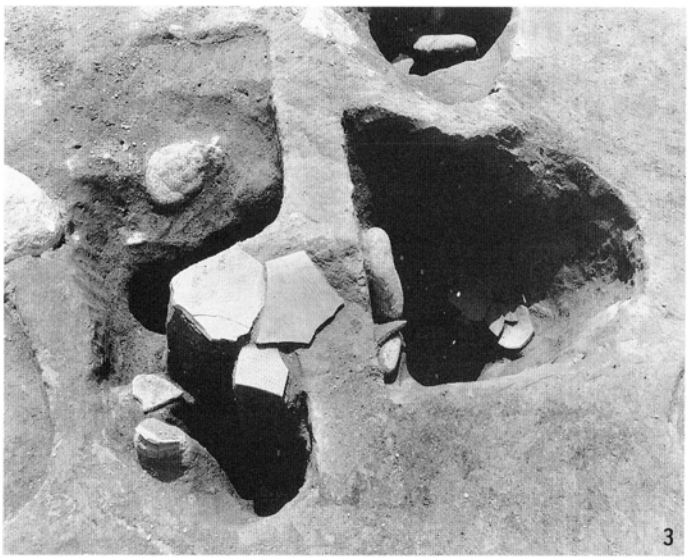
1　鍛冶炉、廃滓坑0034－6断面（南東から）　　2　鍛冶炉、廃滓坑0034－6下面掘方（東から）
3　鍛冶炉0034－7断面（南東から）　　4　鍛冶炉、廃滓坑0034－8断面（東から）
5　廃滓坑0034－9断面（東から）　　6　鍛冶炉0035（東から）

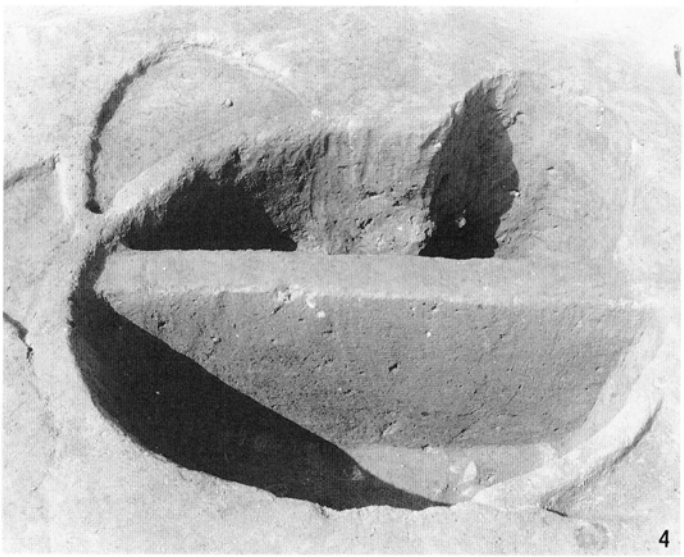
図版30

1　鍛冶炉0035断面（東から）　2　鍛冶炉0037（東から）
3　鍛冶炉0037断面（南から）
4　鍛冶炉群0038全景（北東から）
5　鍛冶炉、廃滓坑0038－1断面（南東から）
6　鍛冶炉0038－2断面（南東から）





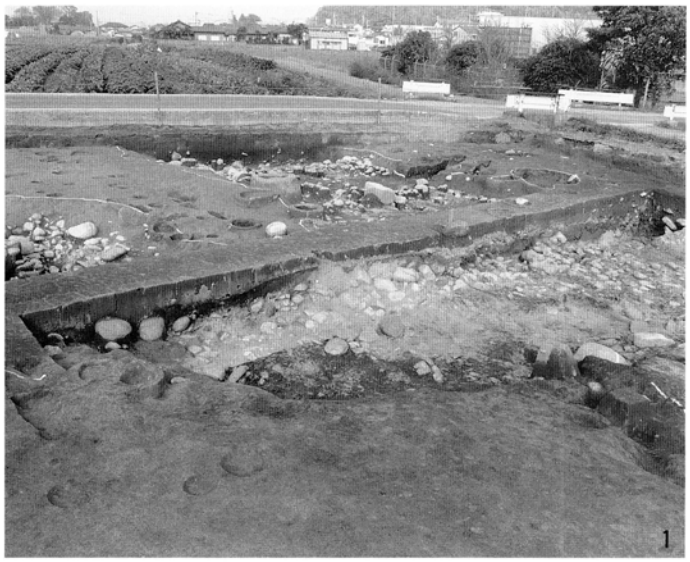


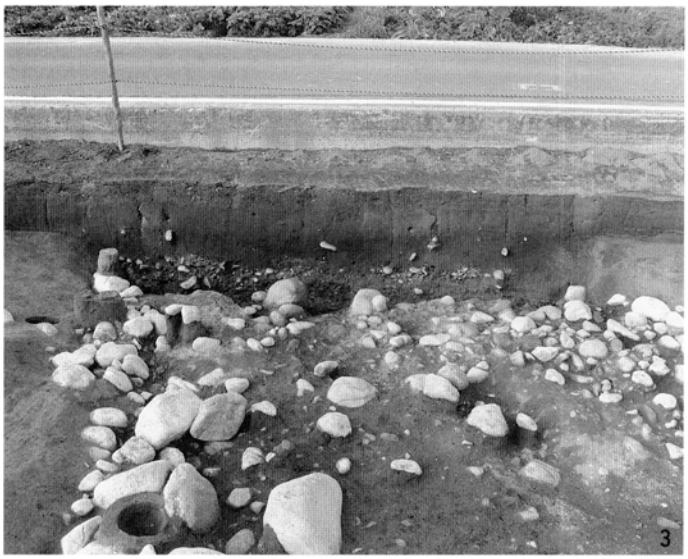


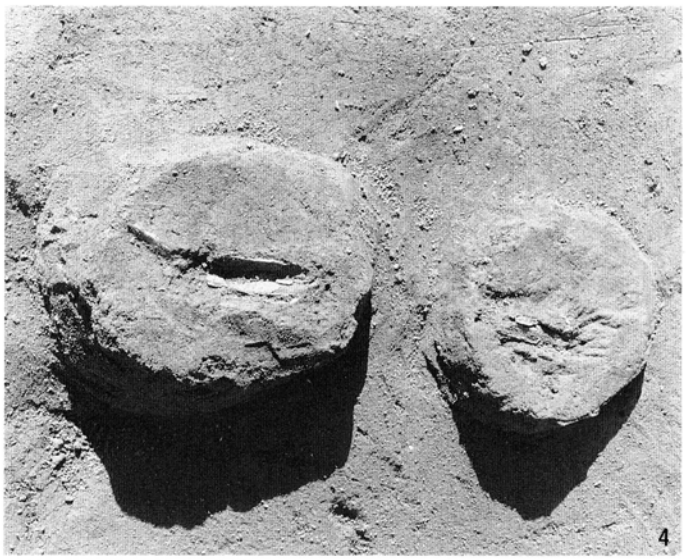
1　鍛冶炉0038－2(東から)　　2　鍛冶炉0050(東から)　　3　廃滓坑0012(北から)
4　廃滓坑0014(東から)　　5　廃滓坑0020(西から)　　6　廃滓坑0022(西から)

図版32

1　廃滓坑0036(南から)　　2　廃滓坑0041(東から)　　3　廃滓坑0042(東から)
4　廃滓坑0042焼土塊出土状況(東から)　　5　廃滓坑0046(西から)　　6　廃滓坑0047(東から)



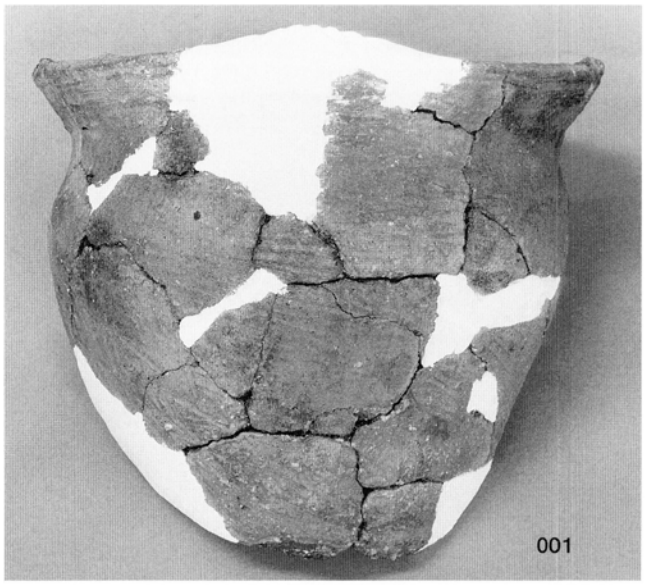


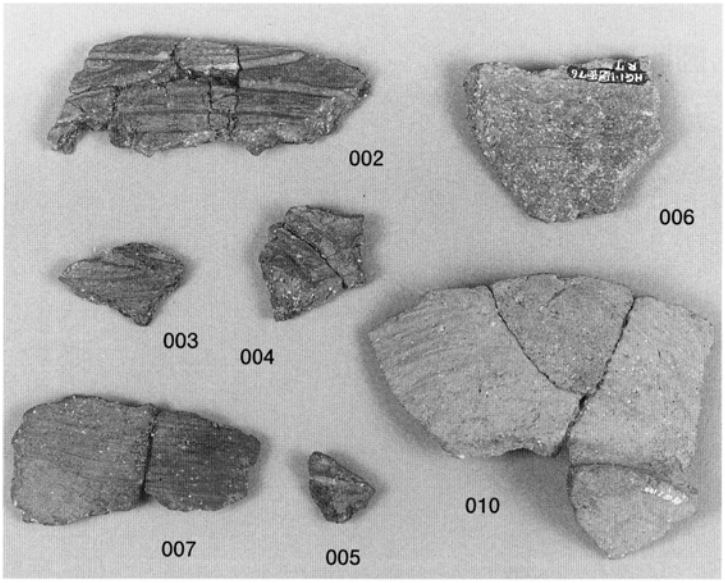


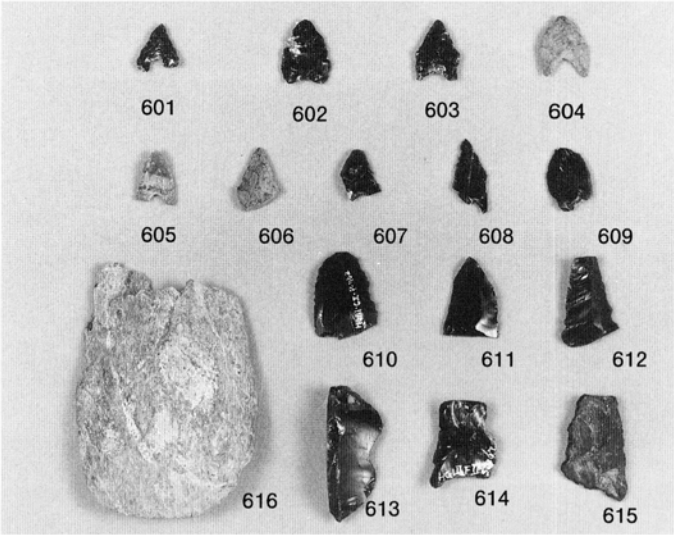
1　旧河川0051、0052　セクションベルト3(南から)　　2　旧河川0051　セクションベルト2(南から)
3　旧河川0051　北端土断層面(南から)　　4　旧河川0051　馬歯出土状況(東から)
5　旧河川0052　セクションベルト(南東から)　　6　溝0053　遺物出土状況(西から)

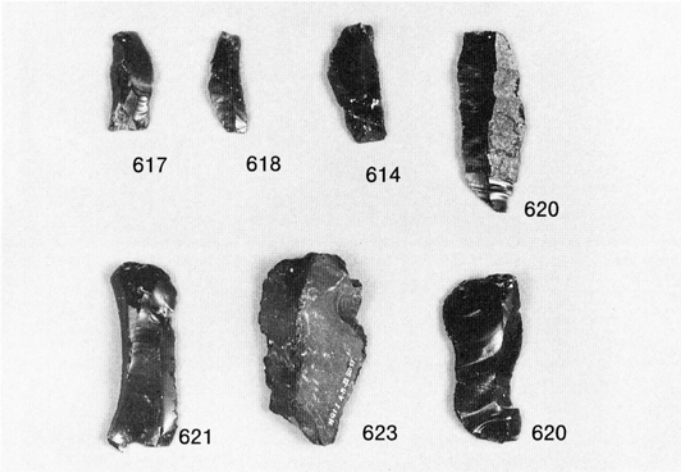
図版34

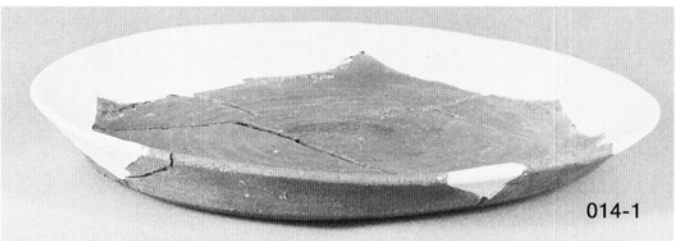
1　昇降用道路0059（東から）　2　昇降用道路0060（北東から）
3　昇降用道路0040（西から）　4　旧河川0001（南から）
5　用水路0005、0006分岐点集石（南東から）　6　旧河川0049（南から）

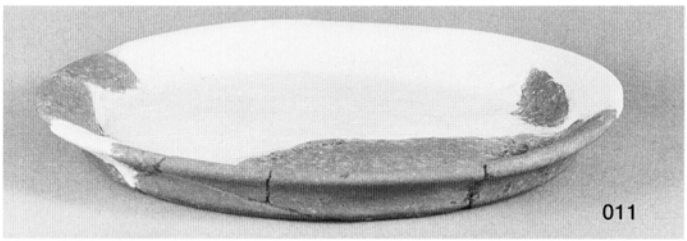


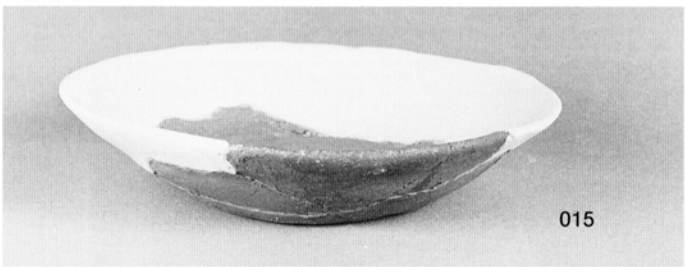






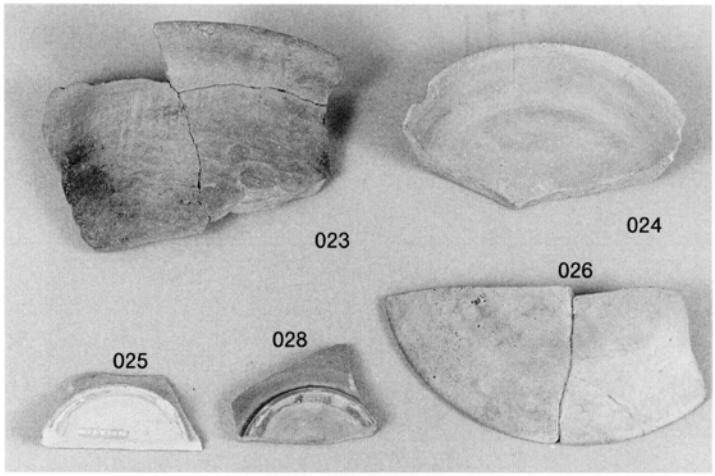


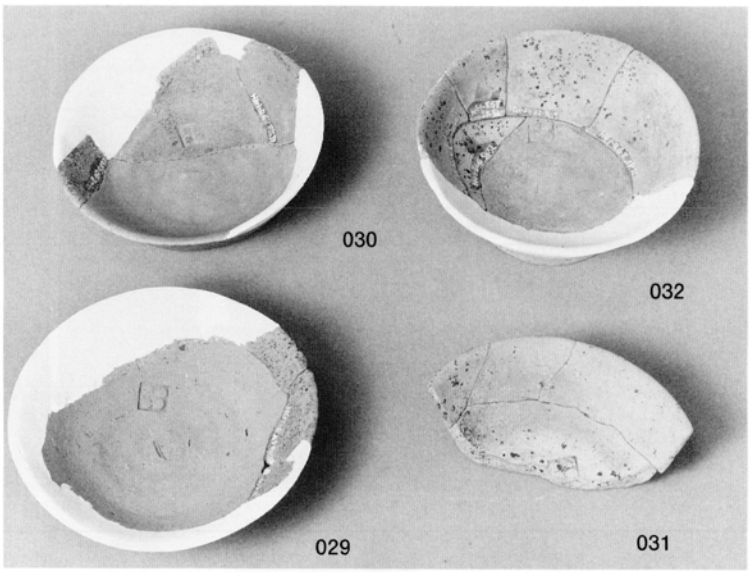


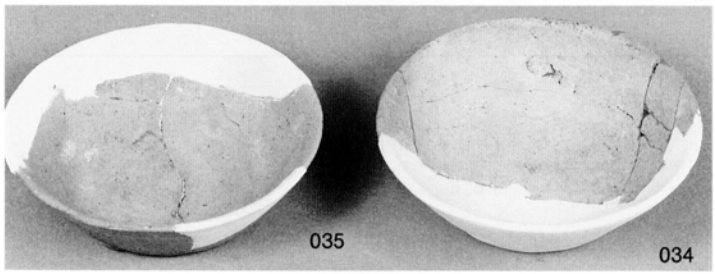


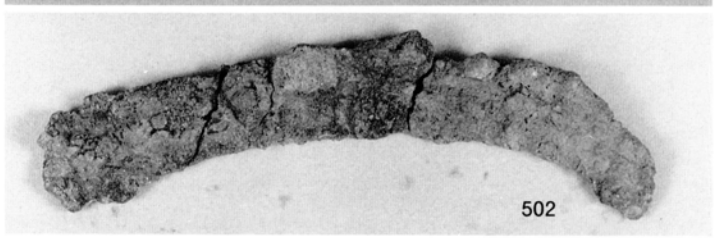
第10次調査出土遺物１

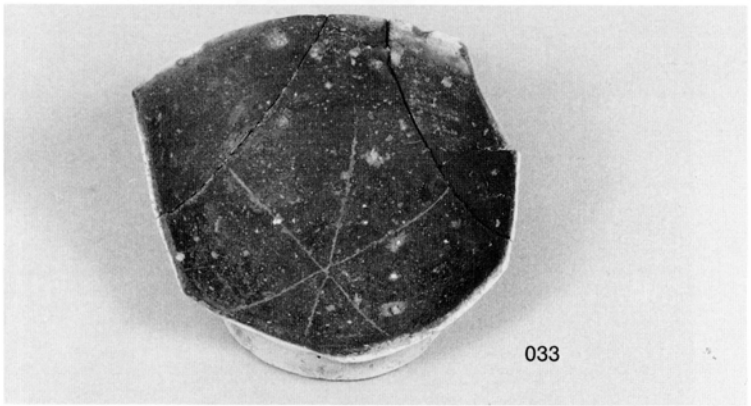
図版36

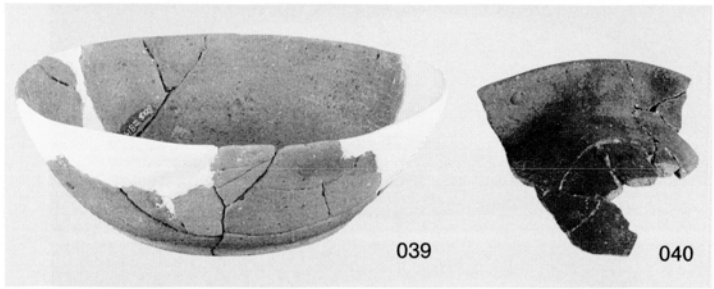

023
024
026
025
028

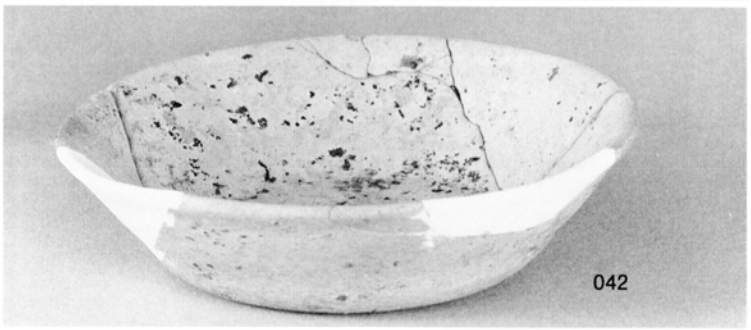

030
032
029
031


035
034

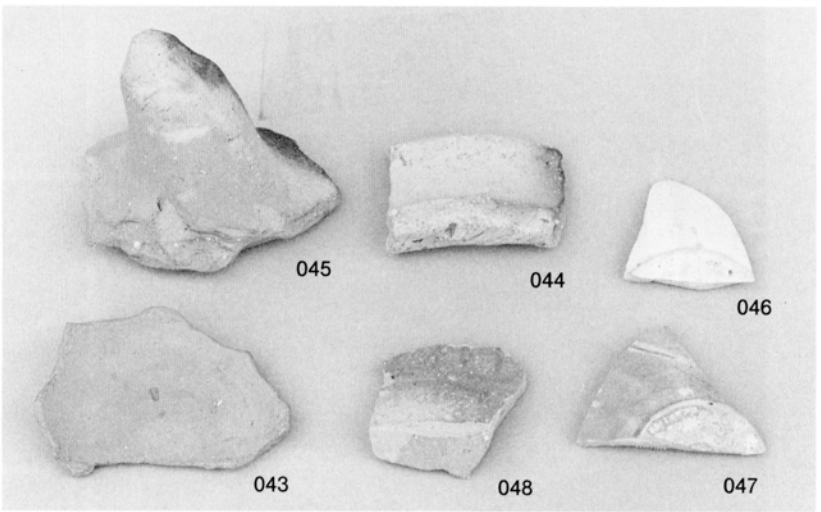

502

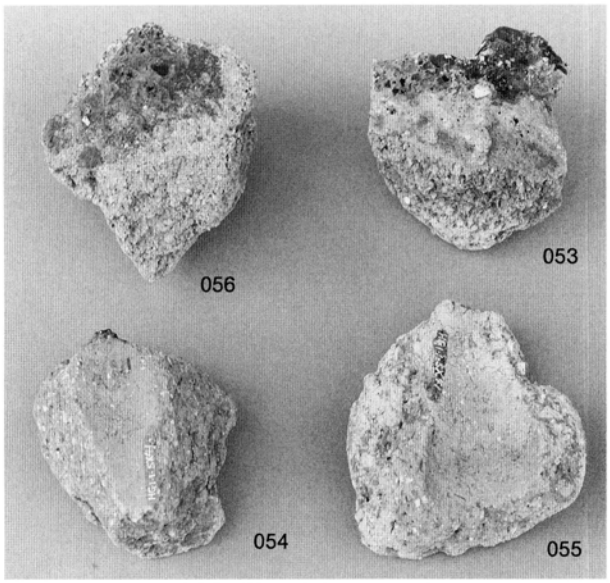

033

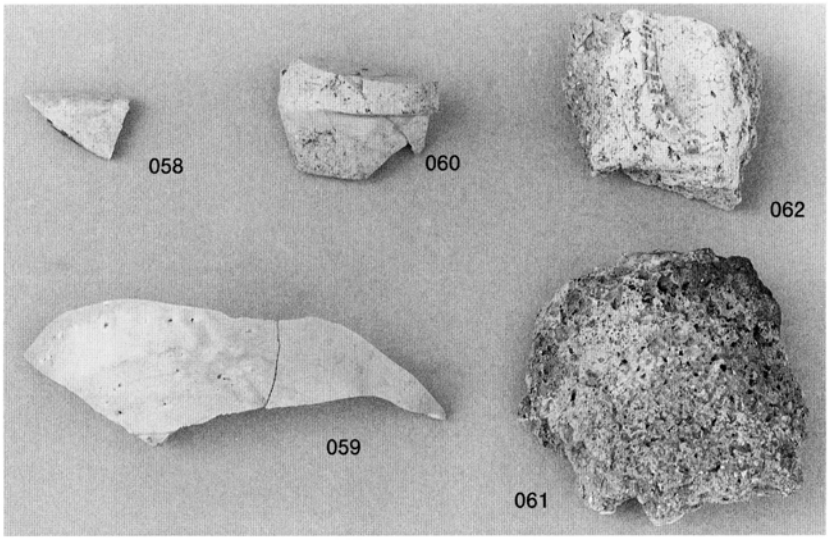

039
040

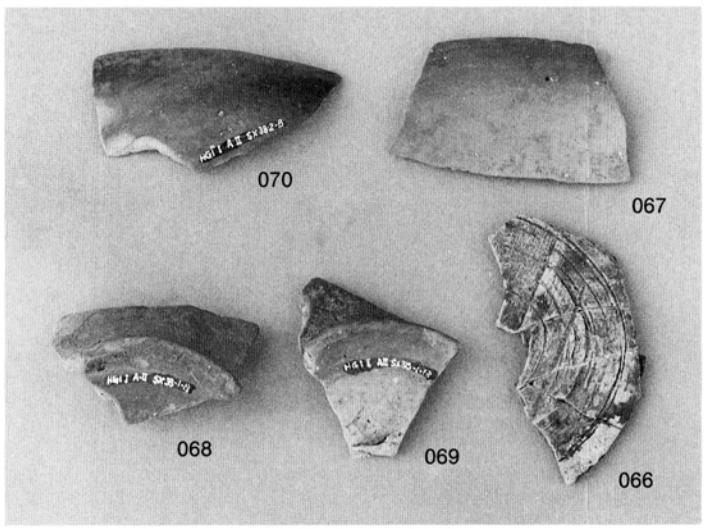

042

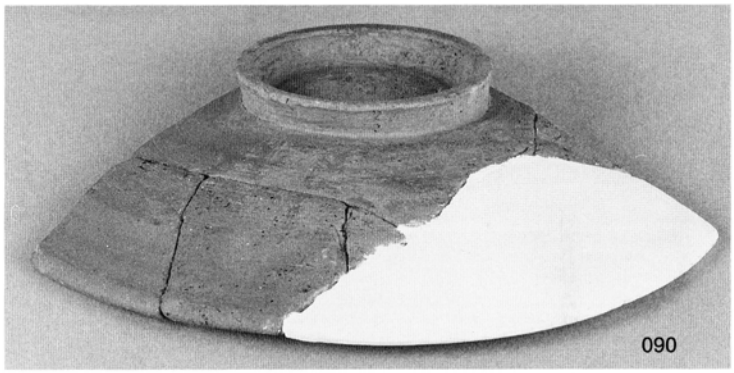
041

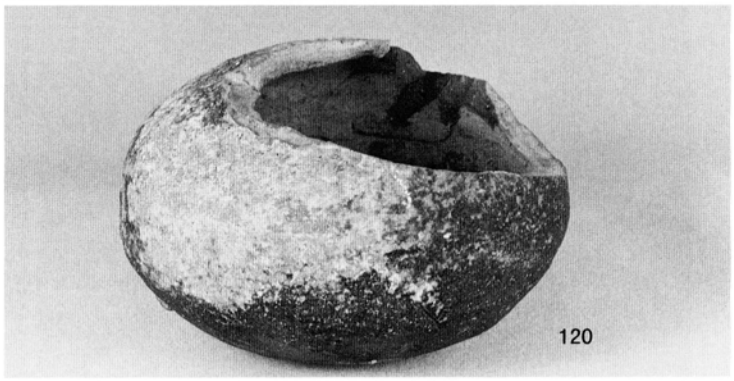

045
044
046
043
048
047

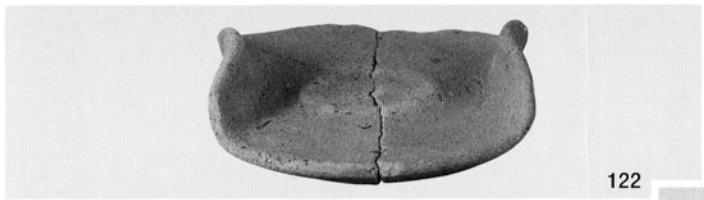


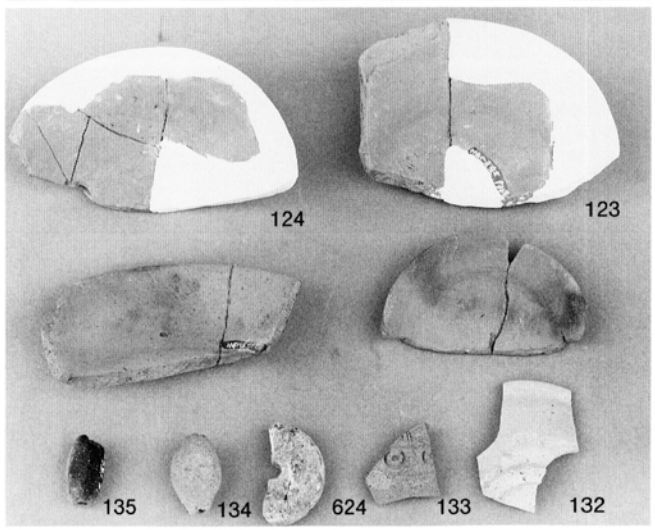


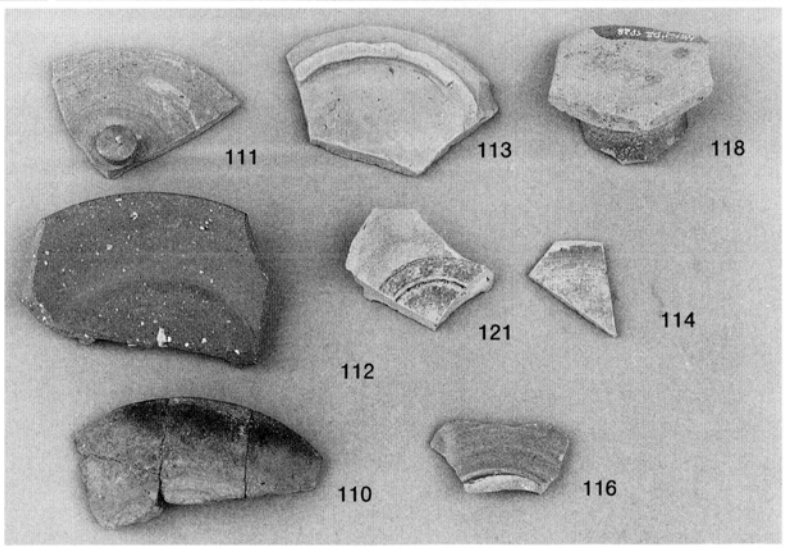






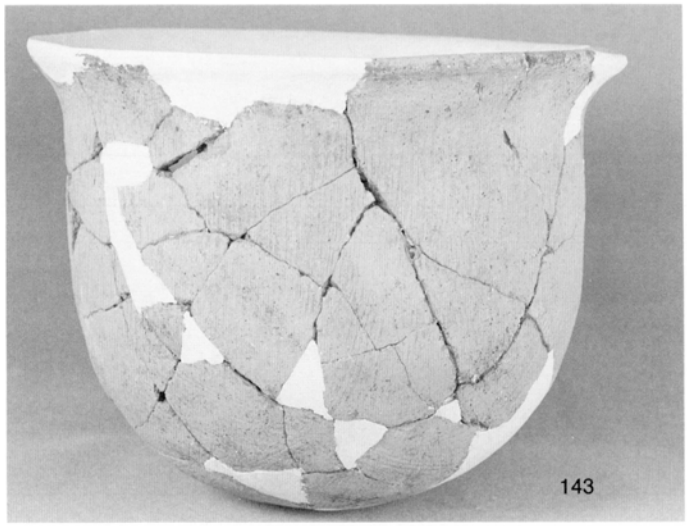


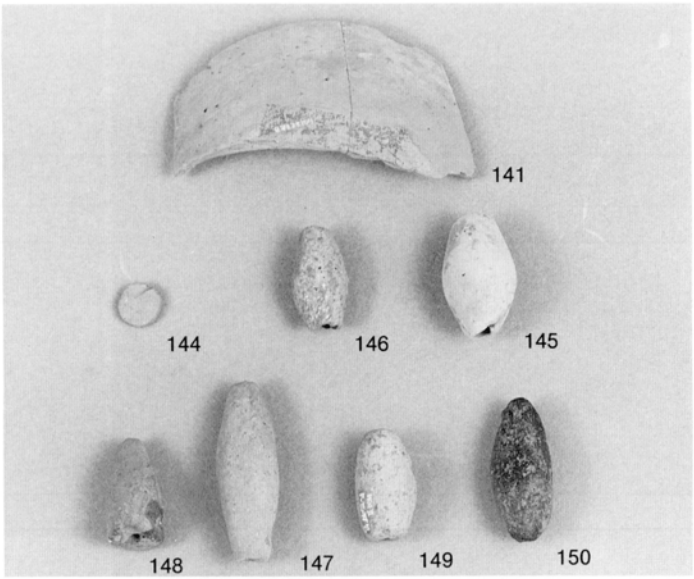


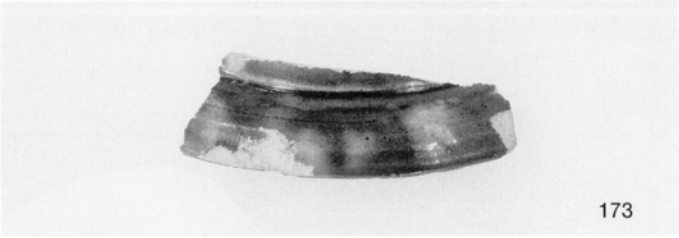


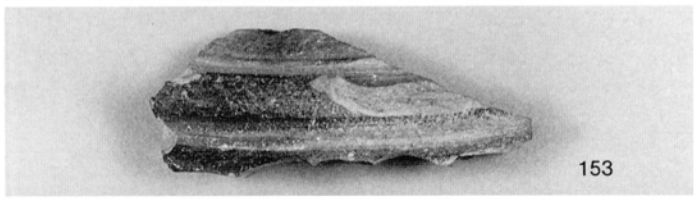
第10次調査出土遺物 3

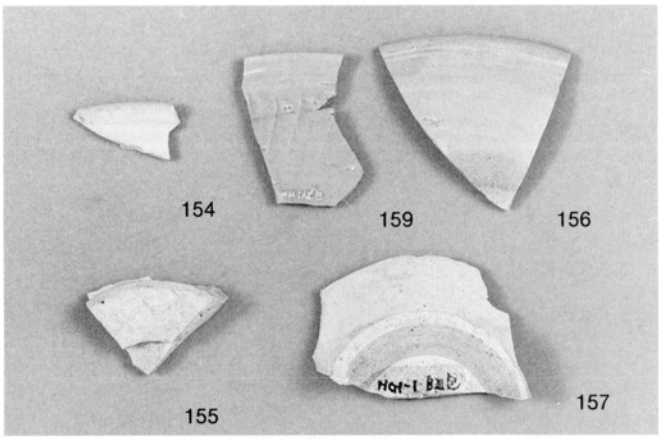
図版38

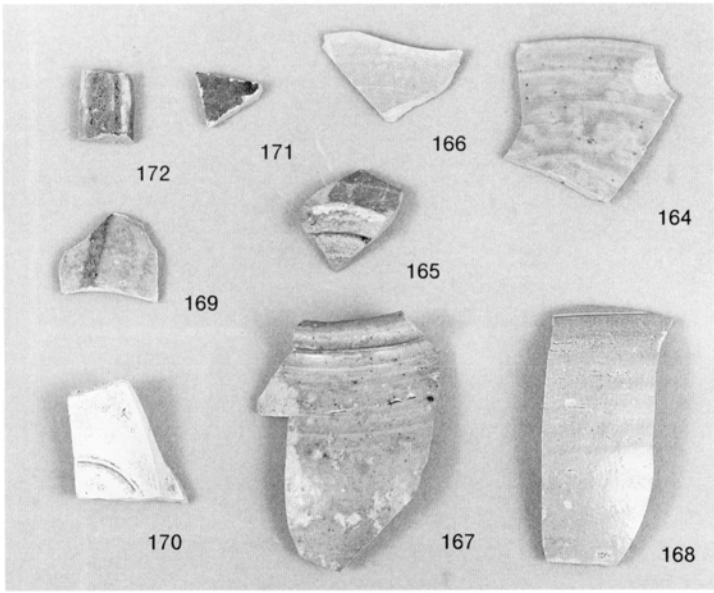


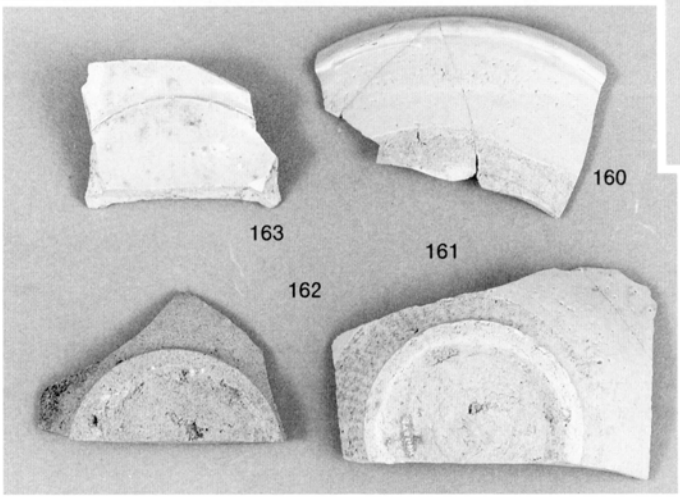


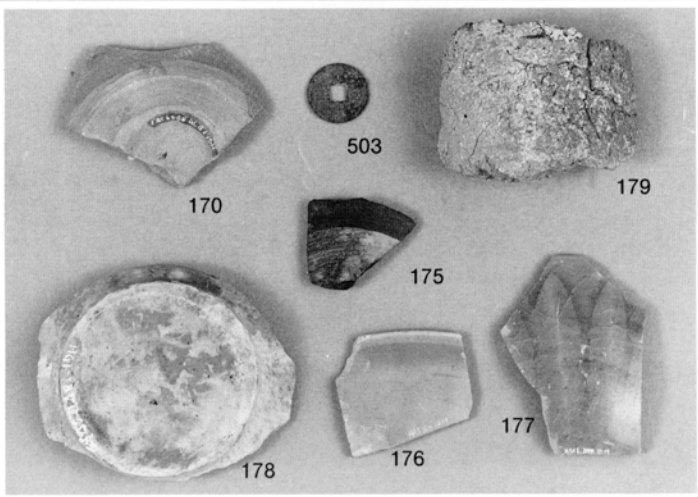












第10次調査出土遺物 4

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第485集

入　部　Ⅵ

1996年３月29日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目8-1

印　刷　ダイヤモンド印刷株式会社
福岡市東区松田３丁目9-32